大正十二年八月十五日印刷
大正十二年八月十八日發行

花袋全集第七卷
（非賣品）

著作者　田山錄彌
東京市小石川區東青柳町二十九番地
發行者　川俣馨一
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　松浦政吉
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所

東京市小石川區東青柳町二十九番地
發行所　花袋全集刊行會
電話小石川一〇五四番
振替東京三一七〇〇番

了つても、または女はこの世にゐなくなつて了つても、この朝の黃い麥畠の悲哀は、永久に忘れられないものとして私の頭に印象されて殘るであらう。かう思ひながら私はぢつと動いて行く朝の田園のさまを眺めた。

五

豐橋に來て、顏を洗はうと思つて、プラットホームに下りかけると、そこに女の立つてゐるのを私は見た。それと同時に女も私の方を見た。

女の眼は赤かつた。

その眼の中にはまだ昨日の獸が動いてゐた。私の眼にも矢張その獸が動いてゐたに相違なかつた。女は瀨踏でもするやうにして靜かに此方に近寄つて來た。

――花袋全集第七卷　終――

車內では私の他にはまだ誰も起きてゐなかつた。縱に、また橫に、昨夜最後まで、白い顏をくつきりとあたりに見せて起きてゐた丸髷の女も曉近く眠を催して來たと見えて、乘客と乘客との間に小さく身體を橫にして、顏に白い手拭をかけてそして靜かに眠つてゐた。室內にも曉の靜けさが、名殘なく橫つて感じられた。

空にはいくらかの雲があつて、それに漸く光を放ち始めたらしい日の光線が佗しいオレンジ色に映つて見られた。

黃い麥畠は麥畠につゞいた。

ぢつとそれに見入つた私は、俄かに堪へ難い體も沈むやうに悲哀の全身を襲つて來るのを感じた。そしてその悲哀はぢつと見つめた黃い麥畠に雜つて落ちて行くやうな氣がした。淚はひとり手に頰を流れた。

かうして辛い爭ひの人間の上に、朝が再びやつて來たことが堪らなく私を悲しくした。泣いても泣いても泣き足りないやうな氣がした。

『おほふ。』素通りをして過ぎて行つて了ふ停車場の名を私は淚に曇つた眼の中に見た。

麥畠は麥畠につゞいた。

私は思つた。この朝の悲哀は、この黃い麥畠は一生私に取つて忘られないものであらう。女と別れて

『まいはら、まいはら……。』

さうした車掌の呼聲を私は夢現の中にはつきりと聞いた。

しかし、そこを過ぎ去つてからは、その隣の客が北陸線に乘り換へて、いくらか體を置く位置が自由になつたためか、それともまた勞れて今は何うにも彼うにもならなくなつたためか、私は深い睡眠に落ちて、汽車が名古屋を通過するのをも知らなかつた。

何か惡夢にでも魘はれたやうに、自分から唸き聲を立てはしないかと思はるゝばかりに、何か恐しいものに追ひかけられてゐるやうな心持がしたが、それが次第にさめて來ると、ほの〴〵と夜の明け始めた空がそれと見えて、つゞいて、その鐵の棒が再び自分の胸に支へてゐるのを夢現の中に感じて來た。

いつ覺めるとなく次第に眼が覺めて來た。

私は半ば身を起して、すぐ前の硝子窓を一枚明けた。涼しい心持の好い朝風が入つて來た。

私はほつと呼吸をついた。

私の眼の前には、初夏の曉のさまが美しく動いて展げられてゐるのが見わたされた。小さな赤松の生えてゐる丘があるかと思ふと、さびしい草葺の農家が點々としてあらはれて、そしてそれがまた丘と丘の間に展げられた黃く熟した麥の山畠になつて行つた。

私はクツションの上に坐つて、ぢつとその黃い麥畠を見た。

大阪に來た時には、いかに小さく海老のやうになつても、もう私は寢てゐられなくなつた。ボーイは新しく乘つた客のために長く橫つて寢てゐる人達を起して步いた。私は半ば疲れて眠つてゐる目を大きく明いて、そして黃い塵の舞つてゐるやうな灯をぢつと見つめた。頭はがらんとしてゐた。何を考へることも出來なかつた。

寢るより他に爲方がないので、肱を車窓に凭らせて、顏を掌で押へて、そして眼をつぶつて見たけれども、何うしても旨く眠られなかつた。坐つて見たり、また後向になつて見たりした。足を長く延して隣の乘客の荷物に身を凭らせて見たりした。それでも矢張り眠らない中に、京都もすぎ、逢坂山のトンネルも踰え、晝ならば湖水の眺望の美しい大津へと着いた。

停車場の大きな時計はもう十二時を少し過ぎてゐた。

何うしても眠いので、終には、私はこれも矢張隣で海老のやうになつて寢てゐる男の尻のところに、無理に自分の體をわり込ませて、頭を女客の荷物の間に入れて、何うやら彼うやら安息を得るだけの位置をつくつた。私はまたうと〳〵して眠られない眠を續けた。

さういふ風に、體も心も非常に勞れてゐるにもかゝはらず、眠りから少しでもさめて來ると、女と別れなければならない大きな悲哀が冷めたい鐵の棒か何ぞのやうに自分の體の中に橫つてゐるのに邂逅した。思ひ捨てゝも思ひ捨てゝも、女は私の體に絡みついて來た。

ふと女は何うしてゐるだらうと思つた。母親と自分のわる口を言つてゐるだらうか。かう思つて見たが、しかし私にはさうは思へなかつた。女も矢張自分のやうに憤怒に、激情に、または孤獨に虐まれてゐるに相違なかつた。眼を赤くして、一ところを見詰めて、そして深い複雜した思ひに惱まされてゐるに相違なかつた。

こんなことを思つたり何かしてゐる中に、一日の疲勞が出たと見えて、私はいつかうと〳〵した。しかしそれは辛いまたは淋しい佗しい假睡であつた。汽車の停車場にとまる度毎に私は眼を明いた。何處だらうと思つて半ば起き上つて覗いて見た時には、『かこがは』といふ字が映つて見えた。女にその男がありさへしなければ、自分達は此處で下りる筈であつた。そして例の『松づくし』にある高砂の松や曾根の松を見て歩く筈であつた……。私はまたうと〳〵した。

ある大きな停車場の明るい灯、大勢出たり入つたりする乘客の混雜、『あ、もう神戸だ。』かう夢現に思つたのにつゞいて、さつきの激情と憤怒の餘炎が、『いつそ大阪か京都で下りようか知らん！ そして、何處か靜かなところで一夜ゆつくり寢て行かうか知らん、』と私に思はせたが、しかしそれは唯ちよつと思つて見たゞけで、すぐ私は再び體を海老のやうにして眠つた。

段々汽車は込んで來た。大きなトランクや、信玄袋や、旅鞄を提げた男や女が大勢割り込んで來た。私は愈々足や體を縮めなければならなかつた。

かつた絲のやうに集つて來て、そしてそれがさま〴〵の光景と雜り合つた。自分で勝手な眞似をして居りながら、怒るとは何ういふ氣だ……。かう思ふと女に對する憤怒がまた新しく湧き返つて來た。

汽車は靜かに動き出した。

かれ等も何處かに乘つてゐるに相違ない……。この列車で歸るより他に途はない。かう思つて見たが、つゞいて或はかれ等は憤怒の結果、同じ列車に乘るのを厭つて、そして一汽車後れさせたかも知れないと思つても見た。と、堪らなくさびしい氣がした。しかし、一刻も早く東京に歸りたい彼等がそんなことをする譯がないとすぐ思ひ返した。

何う考へて見ても、とても割り切れない數を自分は割らうとしてゐるのである。とても駄目なことを自分はしようとしてゐるのである。自分のものでない眞珠を自分のものにしようとしてゐるのである……。そこまで突込んで考へて行くと、今までやつて來た努力が、徒勞がまたしても憤怒を湧き返らせて來た。私は堪らなくなつたやうに、背と足とを丸くして、クッションに顏を押し附けるやうにしてごろりと倒れた。幸ひに車室の中はさう込んでゐなかつた。

ゴオといふ響と、ゴトンゴトンといふエンジンの音と、夜の闇を切つて進んで行く大風に似た氣勢とがそれと聞取られるばかりで、灯を後にした私の頭には、室内の種々の人達の狀態も話聲も何も彼も入つて來なかつた。黃いもの靑いものまたは金の輪のやうなものがチラ〳〵と私の眼の前に舞つた。

四

私は二等室に入つてから、ほつと呼吸をついた。そしてすぐ四邊を見まはした。淺猿しいと言つて好いか、悲しいと言つて好いか、それともまた弱い人間の姿と言つて好いか、あとを追つて來る女達の姿のそこらに見えないのを發見した時には、私は何とも言はれないさびしさを總身に覺えて、頭のぐら／＼と眩惑するのを感じた。自分で遁れて來て居ながら、または自分で破壞して來てゐながら、その逃遁が、破壞が堪らなく私には悲しかつた。

もうかれ等も私のあとを追つて來ない……かう思ふと、立つてもゐてもゐられないやうな氣がした。

もう薄暮になりつゝある灯のついたプラットホームを乘客は織るやうに往來した。無數の顏、男と女の無數の顏、その中にも、私はもう愛したものの顏を發見することが出來なかつた。しかし男の持つた一種の矜持は、その漲るやうに押寄せて來た悲しい心と相戰つた。私はぐたりとクッションに體を下した。

私は肱を車窓に當てゝ、わざと別の方を見ようとした。

段々心が落附いて來た。と、これですつかり別れて了はうといふ心と、否、こんなことでは別れられない。これで別れては男としての面目に關するといふ心とが兩方から出て互にその位置を爭つた。それにまだ本當に別れたのではないからといふやうな未練も出て來た。つゞいていろ／＼な雜念がこんがら

『別々にしませう。僕は途中何處かで下りるかも知れないんですから、僕は僕で貰ひます。』

『でも、折角……。』

それを遮つて、女は、

『母さん、さうなさいよ。その方が好いのよ。見つともない。人が大勢見てゐるぢやないの？』

私は眼を鋭くして、

『言つたことを忘れちやいかんぞ！』

『貴方こそ……。』

ツと離れて、私は其處に開かれた二等の Booking Office の前に行つて、東京までの切符を一枚買つた。そして急いで、遁げる樣にして改札口の方へと行つた。ふとあとから誰かが追ひかけて來たと思つたら、それは改札口のところで私の落した紙幣を拾つて乘客の一人が持つて來て吳れたのであつた。それほど私の頭は混亂してゐた。私は傷いた獸がかくれ場を求めるやうにして、また自分の受けなければならない運命は深く受けなければならないといふやうにして、大勢の乘客の混亂してゐる中を急いで橋をわたつて向う側に行つた。

上りの汽車はもう來てゐた。

うな氣がしたので、私は大きな信玄袋を持つて下に下りた。女達も慌てゝ下りて來た。

幸ひ宿の女中が停車場まで荷物を持つて來て吳れると言ふので、私は空身でサッ〳〵と先に立つて歩いた。私の胸の中は火のやうに燃えた。何が何だかあたりのものなどは眼に入らなかつた。宿屋の手前、女中の手前、きまりがわるいなどとも思はなかつた。私は唯此處を遁れたかつた。逸早くこの心の修羅場を遁れて何處かに行きたかつた。眼と頭がぐら〳〵した。

女達も急いで後からついて來た。

『そんなにおいそぎにならないでも、まだ時間が御座いますから。』

荷物を持つて喘ぎ喘ぎついて來る女中の聲がした。

來る時はさう近いと思はなかつた停車場は不思議にもすぐ私の前に來た。しかし乘客が大勢集まつてゐるといふことより他に、私の眼には何物も映らなかつた。私はそれでもついて來た女中に銀貨を握らせることを忘れなかつた。

二つの怒つた獸を私は其處に發見した。女の眼は血走つてゐると共に、私の眼も血走つてゐたに相違なかつた。眼と眼、心と心とが互ひに睨め返した。『勝手にしやがれ！』と私は心の中に叫んだ。

母親が寄つて來て、

『切符は？』

『すぐ勘定をして來て吳れ!』

女の膳を片手にさげながら、上さんは不思議さうな顏をしてかしこまつて下りて行つた。

『此方でするから好う御座んすよ。』

突然女が言つた。

『いや、今日の分までは俺がする……。俺がつれて來たんだから。』

『…………。』

『先生、そんなに怒らなくたツて……。』母親はなだめるやうに、『內の奴も勝手ですからね。……中に入つて私が困つて了ふ……。』

『母さん本當にお困りだらうけれども、何うも爲方がない。』

『でも、折角作れて來て頂いて、こんなことになつちや――。』

『構はんで置く方が好いのよ、母さん。お互に勝手にする方が好いんですよ。その方がさつぱりして好い。』

『本當だ……。』

皮肉に私は言つて、私の荷物をまとめて、そこに持つて上つて來た上さんの勘定書を見て、それを拂つて、そして、すぐ立ち上つた。しかし流石に女達の荷物をもほつたらかして出て來るには忍びないや

『え……。』

『左樣で御座いますか。それはお忙しいんで御座いますね。』私のぐい〳〵盃を口にあてゝゐるのを見て、『旦那も御一緒ですか。』

女達はそれに答へなかつた。私はいくらか狼狽て氣味で、

『あゝ、さうだよ。』

『それではお急ぎになる方が宜しう御座いますね。』

『うん、さうだね。それぢや僕も飯にしやう。』かう言つて盃を置いて、私は膳に伏せてある茶碗を起した。その時は女達は既に默つて箸を取つてゐた。母親はそれでもいくらか心配さうに、いつもならば、膳の上の肴の批評などをしながら靜かに箸を取るのであるのに、今日は低頭き勝に曇つた顏をして、頻りに漬物なぞを突ついてゐた。

女も憤怒と激情とのために飯も碌々咽喉に通らぬらしかつた。一杯辛うじてすませてそしてすぐ茶にした。

『お輕う御座いますね。』

『何だか今日は胸が一杯で……。』眞面目に笑ひもせずに女は言つた。眼は赤く充血してゐた。

私も飯は咽喉に通らなかつたのを辛うじて二杯食つて、

『勝手にすれば好いぢやないか。』

『勝手にして好いのね。本當に好いのね。母さんが證人ですよ。』

『好いどころぢやない……。』

『屹度ですよ。』

女の眼もいくらか据わつてゐた。女が眞劍で怒つてゐるのは私にもわかつた。

『馬鹿！』

私の憤怒は次第に高まつて來た。

『馬鹿でも何でも好う御座んすよ。貴方になんか、ちつとも世話になんかなつてゐないんだから……。』

『………。』私は何か言ひたかつたけれども、雜多な念が潮のやうに押寄せて來て、そして込み上げて來て、遂に言葉らしい言葉も出なかつた。

そこに上さんは膳を運んで來た。

忽ち水をうつたやうな沈默が一座を占領した。私は唯低頭いてぐい〳〵と盃を口に持つて行つた。上さんがそこに膳やお櫃を並べ終つた時、

『母さん、それぢや早く食べませう。間にあはないといけないから。』

『急行でいらつしやいますんですか。』

『一人の方が好いのね、矢張、貴方には？』

『うむ……。』

『今度から一人でいらつしやいね、一人の方が氣が揃つて好いから。』

『本當だとも……一人の方が氣が揃つて好いよ。』

『馬鹿々々しい。本當に……。』

かう女は突放すやうに言つて、『母さん、もう支度をしないとおそくなるよ。』

『あゝ。』

母親はいくらかまごついたやうにして信玄袋の前に坐つた。

『面白かつたらう？……』

『え、面白う御座んしたよ。』

『まア、だんと面白がる方が好いや――。』

『え、さうですとも、貴方なんか相手にしてはゐられないわ。本當に氣むづかしやなんだから……。』

『大きなお世話だ！』

『もうお世話の燒きつこはしますまいね。別になりませうね。』

この『別になりませう』がぐつと私の胸に來た。

いや、意地ぢやない。矢張戀だ。戀したものは當然かうした敗北の位置に立たなければならないのである。こんなことを考へながら私は階段を上つて來た。

私は時計を見た。

もう五時に五分前である。二人の見物が遲れて、六時の急行に間に合はなければ好いなどと私は思つた。

上さんは上つて來た。

『僕は酒を飲むから、何がなくつとも好いから持つて來て下さい。』

『もう、御膳を上げませうか。』

『いや、御膳は一緒で好いから——歸つて來てからで好いから、酒だけ持つて來て下さい。何か一品あれば好いから……。』

承知して上さんは下りて行つた。

刺身の一皿を肴に、五六杯飲んでゐるところに、二人は歸つて來た。

女は矢張打解けない顏をして、じろりと此方を見たが、

『隨分好い色ね。』

『……。』

これまでにも何遍かうしたことがあつたか知れない。馬鹿な眞似を、人に笑はれるやうな眞似を何遍繰返してゐるか知れない。それでゐて捨て去ることが出來ずに、かうして怒つたり笑つたりしてゐる……。『しかし、今度はもつと強く出てやらなければならない。いつまで馬鹿にされてゐたツて際限がない。』

かう思ふと、それをすぐ裏切るやうなさびしさが強い力で押しよせて來た。

そんなことを際限なく繰返して、風呂に入つてゐたのはかなりに長い間であつた。愚な私は、今でも猶は今夜の急行で歸ることを女が思ひ留ることを望んでゐた。事によつたら、かの女は思ひ返すかも知れない……。一夜位何うでも好いと思ふかも知れない……。風呂を出て、鏡に顏を映してゐる時に私はそんなことを思つた。

かう思ふと、それほど他の男に引張られてゐる女を、何故自分は此方に引張らうとするのであらうかなどと考へた。とても駄目なのは知れ切つてゐる。今夜その思ひ立を引留めたところで、永久にそれを引留めて置くことは出來ないのは知れ切つてゐる。いつかは必ずその男に熱した心を以て抱かれて行く女である。しかしさうかと言つて、駄目と知つたからと言つて、そこから平氣で引返して來ることは出來なくなつてゐる。私はこれまでにもさうしたジレンマにかゝつて、さういふ場合の金の貴さを思つたことは度々あつた。自由にならない女を金縛りにする男達の心もはつきり共鳴が出來るやうな氣がした。

『戀か？　意地か？』

思ひ出して、そのまゝ立つて、さつきから此處に置いてある浴衣に着替へて、そして階段を下りて風呂場へと行つた。

靜かな風呂場はいくらか私の心を靜めるに效があつた。簡素ではあるが掃除の行屆いた風呂場、小さな筧から氣持よくちよろ〳〵落ちてゐる綺麗な水、明るい硝子窓からは小さな瀟洒な庭園が見えて、アネモネの赤い花があまりしつこくなくところどころに點在して栽ゑられてあるのが私に印象派の繪を見るやうな感じを起させた。透きとほつた湯に入ると溢れて、燒けた銅壺にヂッと浸み込む匂ひが快よく私の鼻を衝いた。

私はいろ〳〵なことを思ひ出さずにはゐられなかつた。一番先に、今度の長い旅が繪卷のやうになつて私の眼に映つて來た。或は海に面した旅舍、或は潮の深くさし込んで來る夕暮の朱塗の社殿、或は若葉の日にかゞやく中に白く漲つて落ちる小さな瀑布、或は山合の宿驛の世離れたいかにも田舍らしい旅舍、そこにも此處にも私達の姿があつた。感情は時には縺れ時には碎けた。時には何うしても離れ難い愛着を感じ、時には憎んでも憎んでも足りないやうな憤怒を感じた。決して他で見るやうな面白い旅行ではなかつたことなどをも私は思つた。

『要するに、俺が馬鹿なんだ……。』

かう私は口に出して言つて見た。

御座いますね。』
『旦那はいらつしやらないさうですから、あの二臺――』
『さようで御座いますか。』
上さんはこの人達が突然入つて來て、そして何處かそぐはないやうな空氣があるのをいくらか不思議にしてゐたが、始めてわかつたといふやうにして、風呂にも入らずに寢てゐる男と綺麗におつくりをしてこれから見物に出かけやうとしてゐる女づれとを較べるやうにして見た。
『何うしても入らつしやらない？』母親は私の傍に寄つて來て、『いらつしやいよ、そんなことを仰有らずに……。』
『いや、二人して行つて來て下さい。僕はくたびれた……。寢て待つてゐる方が好い。』
『さうですか？』
爲方がないといふやうに、母親は娘と一緒に出かけて行つた。

三

二人が出て行つてからかなり長い間、私は寢たり起きたり、柳の綠を見たり、午後の日の長くさし込んで來るのを眺めたりしてゐたが、ふと自分も矢張昨日からの汽船や汽車に乘つて體が汚れてゐるのを

しないから。』
母親は私に、
『先生もいらつしやいな？』
『いや、僕はよす……。此處の公園なんかもう幾度も見たんだから、見たくもない。』
『そんなことを仰有らずに……』
『いや、もうよす……。お供は御免だ。案內者はもう眞平だ。』
女はプツとしたらしく、
『案內なんかして貰はなくつたつて好いわよ。』
手を鳴らすと、それに應じてさつきのお上さんがまた上つて來た。
『公園に行つて來るんですがね。車を二臺呼んで下さいな。』かうやさしく言つて、『一二時間あれば行つて來られますすね。』
『え、え、行つて入らつしやられますとも……。四時までは誰でも入れる時間になつてをりますから……。』
『遠いんですか。』
『ぢきで御座いますよ。歩いて行きましても、いくらもないんで御座いますから……。では、三臺で

大きな溜息がまたひとり手に出て來た。

大きな美しい柳が風に靡いて、それに午後の日が靜かにその葉と葉に細かくさし込んでゐるのが、さうして寢てゐるうつろな私の眼に映つた。一人の旅だつたら、この柳の綠も何んなにかすぐれた旅の興を起したであらうに……。かう思ふと、私の愚かさが愈々悲しくなつて來た。私は起きて見たりまた寢て見たりした。

暫く經つた。

最初に風呂から上つて來た女は、室の隅に置いてあつた鏡臺を日の暖かにさして來てゐる副室の方に持つて行つて、そこで例のおつくりを始めた。そこに母親もさつぱりしたやうな顏をして上つて來て、そして何か小聲で話し始めた。それは母親が私のために娘の思ひ立を飜へさせやうとしたのであるけれども、その二人して小聲で話してゐる形が却つて私に強い反感を起させた。

母親が說いてもそれでも女は容易にその急な思立を飜さなかつた。

女はやがて自分のおつくりをすませて、母親の髮を梳いて直してやつたりして、そして此方へとやつて來た。

みだれ箱の中に入つてゐる金の小形の時計を女は見て、

『まだ、三時間あるから大丈夫よ。行つて見て來ませう、母さん。滅多にまた來やうたツて來られや

『放つて置いて吳れ！』

『…………』

すつと女は立つて行つた。

『何うかしてるのよ。お冠をまげてゐるのよ。』

かう小聲で母親に言ふのが大きな雷聲のやうに私の耳にはきこえた。

『大きなお世話だ！』

私はかう呶鳴つた。憎んでも憎んでも足りないやうな憤怒が私の體中にこみ上げて來た。

『さうなの？　なら勝手になさいな。』

『するとも、勝手に……。』

私はすつくと起き返つた。怖い目をしてゐるのが自分にもわかつた。

女が何か言はうとしたのを、

『およしよ、お前。』

かう言つて母親は袖を引いた。

二人はやがて手拭を持つて、風呂へと下りて行つて了つた。私はぐたりとまた橫に倒れた。憤怒と悲哀と自ら自分の愚劣を罵る心とが一緒になつて、眼に見えるものがすべてぐる〳〵廻るやうな氣がした。

『今夜、これから急行で歸るんでは、くたびれてゐるし、先生だツて大變だから、泊つてゆつくりしてつたら何う?』

と、女は顏を擧げて、

『こんな家になんか泊つたツてしやうがないわ。泊るツ位なら、松めぐりをするんですもの。』

何うしても歸る……戀しい男の方へ、待つてる男の方へ……。私の體はまた震へ出して來た。私はごろりと横に倒れて、そして溜息をついた。

『茶代は?』

私は默つて財布からいつもだけの金を出して其處に置いて、そして今度は仰向けになつて、兩手を後頭部に組んで、そしてうつゝろな眼で天井を見詰めた。さつきの上さんが其處に浴衣を持つて來たのも、茶代の禮を言つたのも、大きな柔かな枕を持つて來て自分の頭に宛てがつて呉れたのも、何も彼も夢中であつた。

女と母親とはやがて浴衣に着物をきかへて、そして汽船やら汽車やらの昨日からの旅の塵を拂つたり何かした後、

『貴方、浴衣に着替へたら何う?』

かう女は私の傍に來て言つた。

二

餘り綺麗でない細い露地、その構へも旅舍といふよりも寧ろ下宿屋と言つたやうな家、色の淺黑い背の高い上さん、何となく陰氣な空氣、さうしたものがやがて私達の眼の前にあつた。通された室は、それでも此家では一番好い室らしく、床の間や室の裝飾は何もなかつたけれども、それでも南に面した靜かな明るい二階の八疊で、庭を隔てゝ大きな柳の綠の毿々としてゐるのが私の眼と心とを鮮かにした。これで女さへ今夜の急行で歸るといふ思ひ立を撤回して、ゆつくり公園にでも行つて見物して、靜かに一夜泊ると言ふならば、別に副室もあるし、靜かではあるし、決して不愉快な旅舍ではなかつたのであつた。

『何うする?　茶代は?』かう私は訊いた。

その質問の中には、無論、泊るか、急行で歸るか、この二つの一つを私は訊いてゐるのであつた。

『いつもの通りで好いぢやないの?』

『でも、泊ると、泊らないでは、茶代の置き方が違ふからね。』

『…………』

女は默つてゐた。

母親は傍から取りなすやうに、

ろへ――。』

『何處も知らないんだよ。』

『さつき知つてるツて言つたぢやないの?』

『知らないんだよ。』

『知らない位なら、停車場前にいくらでも旅籠屋があつたぢやないの?』

かうピリ〳〵した調子で女は言つたが、丁度其處に巡査が立つてゐたのを見て、傍に行つて、此の近所に然るべき旅舍がないかと訊いた。

巡査は頻りに丁寧に敎へて吳れた。

第一流と言ふわけには行かないけれど、深切で、靜かで、客に惡い心持などを起させないM屋といふのがつい半町ほど向うの酒屋の角を入つて行つたところにあるといふことであつた。それはもう四十先のやさしい深切な莞爾した巡査であつた。

行つて見ると、果して向う側に小さな酒屋があつて、その角にM旅館といふかなり眼に立つ廣告が出て居た。私達は止むなく其處に行くことにした。

りはやめにするにしても、今夜一夜は何處かこの市の靜かな旅舍に泊つて、そしてもう一度女の心をつかむことに力を盡さなければならないと思つてゐた。假令それはインポシブルにしても、何等かの形式で女をひどく酷めてやるか、それとも死ぬほど愛してやるかしなければならなかつた。で、銘々重い荷物を一つづゝ持ちながら、停車場前の旅舍をぐづ〳〵言ひながら通りすぎて了つた。

停車場から市の中部に行く電車は客を滿載して、私達のぐづ〳〵歩いてゐる傍を掠めて通つて行つた。

『何うするの？　一體？』

女はいくらか疳癪が起つたといふ風で言つた。

『そこいらにあるだらう、旅舍が――。』

『だから、さつき乘らうかつて言つたんだ……。』

『そこいらにつて何處なの？　此方に來ちや、車も何もなくなつて了ふぢやないか？』

『だツて、行つちやツたんぢやないの？　あの車は？』

またすた〳〵歩いた。

一町ほど來てまた女は言つた。

『何處まで行つたツてしやうがないわね。電車でなり何でなり行きませうよ。貴方の知つてゐるとこ

それは私に取つては大きな爆彈であつた。私はその言葉の中にかの女の歸京を待つてゐる男をはつきりと見た。また女の自分に背いた心をまざ〳〵と其處に發見したやうな氣がした。女はかうした旅を一日でも餘計につゞけてゐるよりは、一刻も早く東京に歸りたいのである。そして男に逢ひたいのである。男に離れるために出て來た旅であるだけそれだけ、いざ逢ひたいとなると矢も楯もたまらぬやうに歸りたく逢ひたくなつてゐるのである。私は赫とした。私はその爆彈のために體も足もすくむやうな氣がした。

それに、女が私に盡さなければならない義務、それも今夜急行で歸つて了ふとすれば、その義務を實行させる機會ももうないのである。これでこの歡樂の旅もお了ひになつて了ふのである。そして女は男の懷に熱した心で飛込んで行つて了ふのである。――あらゆる犧牲も、あらゆる浪費も、あらゆる眞心も、すつかり水の泡になつて了つた。私はまた赫とした。

ぞろ〳〵と乘客の出て行く群に交つて、私達は默つて停車場の出口の方へ行つた。私はもう口をきく元氣もなかつた。冷と熱とが強く私の體の中に往來した。自分の馬鹿を罵つて見ても何の役にも立たなかつた。

女は停車場前の旅舍にでもちよつと荷物を託して、此の市にある大きな公園でも見物して、そして六時半の急行に乘る積りでゐたけれども、私の未練は何うしても、それでは滿足が出來なかつた。松めぐ

黃い麥畠

一

岡山の停車場に着いて汽車を下りると、上りの列車が既に來てゐる。明日播磨の松めぐりをしやうとすれば、すぐその汽車に乘替へて旅を續けなければならぬ。

『何うする？　松めぐりをするかえ？』

此方から向うの線路に渡る橋の階段をのぼりながら、私は女と女の母親の竝んで歩いてゐるのに聲を懸けた。

母親はちよつと娘に問ひ懸けるやうな態度を示したが、女はそれに答へずにぐん〳〵歩いて行くので、

『何うする？　お前？　行くかえ？』

『今夜の急行で歸りませうよ、もう。』

思つたほど雪は積らなかつたけれども、あくる朝再びその姿を土手の上に見せたSは、何年振りかの靜かに落附いた心を其處に味ふことが出來た。

五

土手に登つて行く路を縫つた小笹原、それは平生は埃や塵に黄く塗れて見るかげもないやうなものであるけれど、その朝はそれに雪が積つて、氷つて、朝風にガサゴソと寒く動いてゐるさまがかれに歌などを思はせた。それはいかにも藝術的な印象的な感じを人に與へる朝であつた。くつきりと碧く晴れた空には、朝日の朗らかな光線が雜つて、それを劃つて並んでゐる藝者屋の新しい二階の屋根が、すつきりと雪の朝の酒の旨さをかれに思はせた。旦那が來て泊つてゐる家であらう。ある家の屋根からは、朝風呂を沸かす細い烟突からの烟が碧い空に捺すやうに靡いた。

對岸の山谷堀に藝者屋があつた時分のことが河の岸に立つてゐるSの頭の中に繪のやうにふと浮んで來た。岸壁に並んで繋がれた屋根舟、その上に積つた雪、川に臨んだ二階の欄干『今朝の雨にまたしつぽりと……』などといふ小唄も思ひ出されて來た。昔の人も矢張かうして遊んだのだ……。かう思ひながら、Sは苫の上の雪をそのまゝに下して來る船を眺めた。

に、『どら、一つ土手へ行つて見て來るかな。』

『寒いですよ。』

『大丈夫だよ。』

『何かもう一枚召して入らしつたら……』から言つて父親が何か搜さうとするのにも頓着せず、Sはどてらのまゝで、がら／＼と格子を明けて戸外へ出て行つた。

日は暮れて了つたので、降頻る雪はそれとはつきり見えなかつたけれども、軒を並べた藝者家の軒燈の光線の周圍には、大きいぼた雪がチラ／＼と巴渦を卷いて光つて、それが地上に亂れて落ちるさまが美しくそれと見えた。地上はもう薄すらと白くなつてゐた。

傘に當るサラ／＼といふ音がSに一種藝術的な感じを與へた。それに細い巷路に並んでゐる女達の生活が、あたりに梅暦式の狹斜情調を漲らせてゐた。ある家では、姐さんがこの降頻る雪を衝いてお座敷に出て行くらしく、深く幌をかけた車が一臺そこに待つてゐた。角の球突場の灯が明るく雪を透して見せた。

細い巷路を拔けて、やがて土手の上に登つたかれは、暗い闇の中を流るゝ大川の流に映る灯を眺めながら、サラ／＼と傘の上に落ちる雪をなつかしみつゝ、長い間そこに立つてゐた。自動車が一臺、大きな眼を光らせながら向うからやつて來た。

『御戲談を……』

父親も大きく笑つた。

『本當に行きませうか。』

『駄目ですなア、もう。さういふ元氣があると好いんですがな。』

『元氣を出す方が好いね。』

『もう十年も若いと、さういふ氣にもなりますけどもな。』

『駄目かなア。』

かういくらか失望したやうにしてSは盃を口に當てた。

其處に入つて來た老婢は、

『雪だ！　雪だ！　たうとう雪だ！』

『え？　雪が降つて來た？』

『今夜は降りさうですよ。』

『そいつは面白いな……盛に降つてるかえ？』

『えゝ。』

『それぢや明日は雪見が出來る。お誂へ通りだ！』かうSは言つたが、急に興に動かされたといふ風

『でも、若い時は、ちつとは面白いことはあつたでせう。母さんを困らせたり怒らせたりしたこと位はあるんでせう。神戸では、女があつたつて言ふぢやありませんか。』
『いや、もう……』
父親は頭をかいて、『しかし、若い時ですな、面白いのは――』
『それでも今でも、まださういふ氣はいくらかはあるでせうな。』
『いや、もう――』
『藝者は駄目ですか。』
『いや――もう。』
『ぢや、仲は――?』
『仲は好う御座んすな。大籬か何かで、ゆつくりやるとわるくありませんな。』
『何うです? これから一緒に行きませうか。』
『いや――』
『大丈夫ですよ。ゐない留守に爺をつれだして、先生も碌なことをしないッて怒るかしら……』
あはゝとSは大きく笑つて、
『それが――僕が留守につれて行つたのが病み附きにでもなると、それこそ面白いんだがなア。』

『まア、片荷が下りました。』

『一杯、おやんなさい、お祝ひに。』

かう言つてSは盃を父親にさした。

『イヤ、もう私は。』

『だつて、昔はやつたんでせう？　一つ昔の話でもきかして下さいな。横濱に取引に行つた時分の話でも……』

『いや、もう駄目です。そんな意氣なんぢやないんですから。』

『そんなことはないでせう。』

『何う致しまして……。』

晩酌を少しすごし加減のSは、

『父さんが少し飲めると好いんだがな。』

『何うも不調法で爲方がないんですよ。』

『父さんがいけず、母さんがやらず、僕でも來なければ、不斷は酒のさの字もない家だからな……。』

藝者屋にはめづらしい……。』

『何うも無意氣者ばかしで……。』

今大阪にゐる男とも一緒に寫したものが何處かにあるに相違ないと思つたけれど、その中には遂にそれを見出すことが出來なかつた。で、寫眞を見てゐる中に、つい眠氣がさして、行火の蒲團の上に頭を凭せてうと〳〵したが、ふと何か言はれてはつと覺めると、老婢が二階の階梯の下から、午飯の出來たことを報じて來てゐた。

四

『もう今時分は大騷ぎですな。』
『本當に、もう喜んでゐるでせう、皆な……。』
『今が六時……もう儀式がすんで、料理屋へ行きましたな。』
『大騷ぎでせう……これも、皆な皆樣のお蔭です。』
かう父親は喜ばしさうに言つて、『本當に、姉がよくして吳れますからな。』
『さうですね。』
『皆な姉のお蔭です。ですから、恩を忘れてはならないッて、吳々も立つ時言つてやりました。本當に仕合せです。M子は……。』
『まア、安心でさ。』

それはこの前にもSは見たことがあるので、別にめづらしいとも思はなかつたけれども、またその中には女が男と一緒に寫したものが二枚も交つて入つてゐることもちやんと知つてゐたけれど、それでも退屈まぎれに、Sは一枚々々それを行火の上にひろげて出して見た。中でも一番多いのは妹の寫眞で、島田に始めて結つた時の正面、後姿、横向、それから今度別れるについて寫した寫眞、婿になる人の寫眞、それから女學生時代のお下げの姿、もつとずつと遠く溯つて小學校時代の可愛いリボン姿、さうしたものが澤山に澤山にあつた。姉のはAにゐた時分の庇髮姿、花を口に當てた姿、その寫眞は初めてSがかの女を知つた頃に撮したもので、その時分はまだ若く、苦勞も多くは知らず、色戀の深い情にも惑はずに、常にはしやぎ切つてゐるやうな無邪氣さと生々しさとを持つてゐた。Sはその頃がなつかしいやうな氣がして、ぢつとそれに見入つた。

男と一緒に寫した寫眞も、別にかれにわるい感じを與へなかつた。一枚は洋服の派手なネクタイ姿、一枚は外套の立派な中年姿、その男達のことは、散々きいて知つてもゐるし、またすべてかれの前を通過し去つて了つた人達なので、却つて男同士の同情とか共鳴とかゞかれの心を領した。殊に、中年姿の方が、色戀に深く、今は紙衣で、外國に行つて、飛行機乘の傀儡になつて、生命を的の一乘いくらの金を捗いて、かの女の後に出來た女に、ダイアの指環などを送つて來てゐるといふことなどを考へると、甘い男心にSは心から同情が出來た。自分もいくらも違つてゐないと思つて微笑した。

Ｓは退屈すると、本箱や茶箪笥の中を明けて、何かめづらしいものでもないかと捜して見たりした。本箱には、讀方の手帳だの、女學校の教科書だの、繪葉書だの、學校友達からよこした手紙だの、色の褪めた古びた肱附だのが入つてゐた。英語のチヨイスリイダアなどもあつた。それ等はすべて今度嫁に行つた妹のもので、それを見ても、姉が困る中からもいかに心を盡して妹を良家の娘のやうに教育したかといふことが知れた。『何にも私は好いことをしたことはありませんけれど、今度これを嫁にやるまでにしたことだけは本當のことをしたと思ひます。だから先生喜んで下さい。』かう言つて涙をほろりと滴した姉のことを考へると、Ｓは可哀相な氣がせずにはゐられなかつた。妹に對する深切な保護は、すべて皆な姉の艱難を背景にして醸されて來た心持で、さうありたいと自分で痛感したことを姉は妹に實行してゐるのであつた。かう思ふと、かういふ社會の泥濘の中にゐても、美しい人間の心は矢張清い花を咲かせるものだとＳは思つた。今日はもう結婚の當日である。もう今時分は、おつくりやら着附けやらで、さぞ忙しがつてゐるだらうと思ふと、一生懸命になつて、妹の髪を梳いたり何かしてやつてゐる姉のさまが眼に見えるやうな氣がした。『私も一生に一度は、さういふ眞似をして見たいと思ふけども……駄目ですか、先生。』かう笑つて言つた言葉なども思ひ起された。

茶箪笥の方には、五六年前の小遣帳だの、懷中電燈の壞れたのだの、先方からよこした結納の奉書の水引のかゝつたのなどが入つてゐた。下の抽斗には寫眞がぎつしり詰つてゐた。

障子を閉めながら、

『まだ、若いんだな、あれで。』

『内の姐さんよりは若い。』

『若いどころか、まだ娘つ子だ。』かう言つてすぐ話頭をSの方へ向けて、『それでも、よく根がつきねえと思ふな。退屈するだらうね。』

『なアに……。』

『一字、一字書くんだから、大變なことだ。人が眞似したいつたつて出來ねえ藝だ。』

『それはさうさ。』

餘り相手にしないので、老婢はそのまゝ立ちかけたが、

『旦那、何か好きなものがあるなら、お言ひなさい。バアやに任せて置いたら、まづいものばかり食はせて、瘦せちやつた！　などとあとで言はれると困るから。』

『大丈夫だよ。そんなことは言はんよ。』

『でも、何か望むものがあるなら……。』

『何にもない。』

取附く島もないと言ふやうにして老婢は下りて行つた。

て呉れる人達であつたけれど、さういふことをしては、却つてこの靜かな假ずまひの心を打壞して了ふやうな氣がしたので、かれはつとめてさうした人達に逢ふことを避けて、行火と、友禪縮緬の派手な蒲團と、一間に漲つた世離れた空氣とに滿足した。父親が役所に出かけて行つたあとはしんとして、をりをり鳥の翼が晴れた障子を掠めて通つて行くばかり、誰も二階にあがつて來るものもなかつた。たまさかに階梯の軌る音がすると思ふと、それは老婢が留守中の爲事として置いて行かれた洗濯物を一杯バケツに入れて來て、それを南の日當りの好い物干竿に並べて干しに來たのであつた。その洗濯物の中には、女の丸い赤い毛絲のジヤケツだの、足袋だの、小さな肌襦袢などがあつた。

何うかすると、老婢は拭掃除の次手に入つて來て、かれの爲事をしてゐる傍に立つて、赤い小さい罫紙の中に字を書いて食つて行く面白い不思議な稼業もあるものだといふ顏の表情をして、ぢつとそれに見入つた。時には、窓の障子をがらりとあけて、

『女優さん、今、おつくりだな。』

などと言つた。

『聞えるぜ、おい……。』

『聞えたつて構はねえ。何もわるいことを言つたんぢやないから。』こんなことを言つて、平氣で雜巾を持つたまゝ長い間立つてそれを見てゐた。

かれの書きかけた筆は、思ひのまゝに進んで、餉臺の一隅に一枚々々重ねて積んで行く層が次第に厚くなつて行つた。

前の女優の顏は、二日目の出勤の時にSは穴のあくほどはつきりと見た。さう大して大騷ぎをするほどの顏でもなかつた。それに、何方かと言へば、小柄で、柔和で、どうしてあんな體からさうしたあくたれ口が出るかと思はれるほどであつた。ある日は南緣日暖かで、春のやうであつたので、さうした小穴からかれが覗いてゐるとは知らず、すつかり前の障子を明放して、男と二人してさし向ひで遲い朝飯を食つてゐるところを、芝居のジインでもあるかのやうにして見せた。女優は背を此方に見せて、まだいくらも娘の氣分を脱しないやうな風をして、頻りに箸を運んでゐた。

男もあまり好い男ではなかつた。

かれ等の戀の光景も大抵は想像がつくやうにSには思はれた。何うせ長くかうして同棲してゐるかれ等ではない。肉體の羈絆があるにしても、いづれ何方かから離れて行くにきまつてゐる。しかし、戀のシインの一つとしては面白い珍らしいものであるには相違なかつた。人間とは可笑しなものだ。てんでに勝手に一つづゝさうした滑稽なシインを持つてゐながら、他人のを見る段になると、それを笑つたり何かする心持になるのだ……。そしてまたさうした戀に浸つて見たくなるものだ……。

近所にゐる藝者達は、大抵Sの知つた顏であつたけれども、また此方から出かけて行けば皆な歡迎し

…歸つて來るのは、いつも十一時すぎですよ。それから饒舌つたり喧嘩をしたりして寢るんですから、近所迷惑で爲方がありやしません。」老婢はかう言つて、それからそれへと話した。Sは喧嘩が喧嘩でなく、仲の好いのが仲の好いのでない男女の間柄などをその女優の上に想像して、明日こそは何んな女だか、是非見てやらうなどと思つた。

酒を飮むとすぐ寢て了ふ習慣のSは、やがてそのまゝ二階へとあがつて行つた。いつもの寢道具、役者の似顏のついてゐる羽二重の肩當の當つた夜着、白い厚い毛布、大きなくゝり枕、寢衣もちやんと行火にかけて煖めてあれば、水もコツプも目が覺めた時に吸ふ煙草盆もマツチも、何も彼も皆な完全に揃つてゐた。ゐないのは唯かの女一人であつた。それが、全く一人であるといふことが、夜着の中に入る時にちよつと物足りないやうな、または却つて樂で好いといふやうな氣を誘つたが、それもほんの僅の間で、やがてぐつすりとかれは好い心持になつて寢込んで了つた。

夜中に厠に起きた時には、それでもちよつと大阪のことが氣にかゝつて、かれは暫し眼を明いてぢつと一ところを見詰めてゐた。しかし再び枕を頭に當てたSは、窓の戶の隙間の白むのをも知らなかつた。

三

一日は風が吹き、一日は曇つた空が低く二階の窓を壓した。別にこれと言つて變つたこともなかつた。

女のゐないといふことが、愛憎の何物にも暫くは遠ざかつてゐられるといふことが、かれにかうした靜かな落附いた氣分を起させたのであつた。それがS自身にもよくわかつた。さうかと言つて、女と別れたのでは駄目である。また女と喧嘩して離れてゐたのでも駄目である。今は遠く離れてゐても、女の心はちやんと堅く握つてゐて、その中には歸つて來るといふ心でなければ、さうした氣分は起すことは出來ないとかれは思つた。かれは離れて卽いてゐる心、卽いて離れてゐる心の上に、藝術的な、のんきな、インプレツシイブな感じを味ふことが出來たやうな氣がした。

これが女のゐない留守に、復仇的に、他に女でも拵へやうといふ了簡では、それでは面白くない。また平凡である。またかうしたのんきな心持を味ふことは到底出來ないにきまり切つてゐる。女のゐない留守に、ひとりで酒でも飮んで、靜かに欲望なしに寢るといふ形も、かれに新參な遊蕩兒でないといふやうな小さな滿足を與へた。

歸つて來ると、もう電氣が明るくついて、酒の支度はちやんと出來てゐた。父親は甘黨で猪口は決して口に當てないのであるが、それに强ひて一杯飮ませた。そして、今時分は何處あたりだらうの何のと行つた人達の噂をして、そして好い心持にSは醉つた。女のゐる時と違つて酒の體に廻る形も至極自然に、體と心とが一緒になつて平衡を保つてゐるやうな氣がした。

女優の話がまた始まつた。『そんなに歸りが遲いのかね？』かうSが言ふと、『え、え、遲いですとも…

がれてもしやうがありやしない。』かういふNの聲がした。『何處？　T？　あそこのお上さんやかましいのね。』かうしたTの聲もつゞいてきこえた。

緩くり溫つて、湯からあがつて、丁度其處に體重機のふんどうが揃へてあつたので、ふとその氣になつて、裸體のまゝ量つて見ると、目方が夏時分とは二百目ほど減つてゐる。少し詰らないやうな氣がしたが、派手な長胴着、新らしいへこ帶、上にはをつた女の古で拵へたお召のどてらといふ姿を鏡に映して、いくらか滿足してそしてSは湯から出て來た。

しかしかれは家の方へは戻らずに、そのまゝ足を土手の方へと運んだ。何處も彼處も藝者屋と待合ばかり、艶な狹斜氣分があたりに漲つて、三味線の音が其處からも此處からもきこえて來た。Sはすつかり遊蕩兒にでもなつたやうな氣がして、一層得意で、好い心持で、靜かに土手へ行く坂路へと登つた。俄かに川の溶々として流れてゐるのがぱつとかれの前に展けて來た。

中流に黑く浮き出すやうに棹さしてゐる渡舟、上流から下つて來る大きな帆、夕暮の曇つた川の碧は、いつものやうな冴えた色を見せてはゐないけれども、たゞでものんびりした氣分をSの胸に漲らすには足りた。土手の上の葭簾張の茶店の前を車や人がぞろぞろと大勢通つて行つた。

Sはどてら姿をあたりに際立たせて、河の岸に行つて、かなり長い間往つたり來たりする船を眺めた。夕暮の空氣の中に鷗の白く飛んでゐるのが一つ二つ見えた。

けた。

向うからかねて知つてゐるMといふ藝者が、襟元を眞白に隈取つて、三本足で髻を立てゝ、そして急いでやつて來たのにばつたり逢つた。

『もう行つて？　妻ちやん？』

『今朝行つた……。』

しかし留守に來てゐるとは氣のつかぬらしく、すぐ向うに行つて了つた。

空いてゐる夕暮の湯の中に浸つて、しきり板一重を隔てゝ、女湯の賑やかな饒舌と湯をザアザア使ふ氣勢とを聞いてゐるのは、かれに漲るやうな狹斜情調を味はせずには置かなかつた。聲を聞いただけで、それはP、それはN、またそれはTであるといふことがSにはわかつた。をか湯の中にをりをり白く隱見する女達の腕もなつかしかつた。

取留りもない無邪氣な饒舌と、艷な節廻しの好い女の聲の音樂とは、かれに男女の歡樂の世界を髣髴させるに十分であつた。春水の作にあらはれた江戶の寫生などがかれの頭に思ひ出されて來た。かれは靜かに湯に浸つた。

女湯の戶を明けて箱屋が入つて來たらしく、『姐さん、お支度をお早くして下さいといふ電話です。』かう言ふ聲がすると、續いて、『はい、はい、今、大急ぎでお湯に入つてをりますつて言つて下さいよ。さう急

『さうでしたか。今朝も大分御機嫌が悪いやうでしたよ。男になにかぶつぶつ言つてゐましたツけ。まア、本當に、あんな夫婦ツちやありやしない。あんなに喧嘩する位なら別れた方が好かんべと思ふ位だ。』
『喧嘩する位だから、別れられないんだよ。好い處があるんだよ、矢張……。』
『いくら好い處があるか知らねえけれども、本當に呆れた人達だよ。えらい騷ぎをおつぱじめるんだから。』
かう言つて老婢は笑つた。近處で買つて來た肴の一切、飯をすましたあとは、茶を飮みながら、Sは老婢と話した。老婢は少くともかれ以上に女のことについて詳しく知つてゐる筈である。かれはそれを何處からかさがし出さうと思はぬではないが、またそれがかうして此處に來てゐる理由の一つでないこともないのであるが、しかしかれの性質として巧にそれを引出すことが出來なかつた。また、さうしたことを正面から持出すのは、自分の品格にも關するやうな氣がした。老婢は曾て下毛の山の中で、鑛山を亭主と一緒にやつてゐたことがあるので、Sは主としてその地方のことを持出して話した。一時間ほどして、Sはまた二階に行つて坐つた。

二

五時には父親が役所から歸つて來た。長火鉢の傍でちよつと話してから、Sは石鹼を持つて湯に出か

やがて車の出て行く氣勢がした。

午近く父親は歸つて來た。

『何うでした？ 間に合ひましたか？』

『いゝ鹽梅でしてね。丁度好い女伴もありましてね。お蔭で、まア安心いたしました。……皆なよろこんで行きました。もう國府津あたりでせう。』

『それは好う御座んした。荷物も旨く行きましたか？』

『好い鹽梅に……。丁度、三十分位時間がありましたもんですから。』

『役所は？』

『これから參ります。すぐ參らうと存じましたけれど、少し用事がありましたものですから。』

父親はかう言つてすぐ出勤する支度をした。

午飯の時、老婢は、

『見ましたか？』

『何を……？』

『前の人を？』

『ヤ、見そくなつちやつた。足袋しか見えなかつた。』

え出して來た。角の水道の共同栓のところでは、近所の女達が二三人寄つて何か頻りに饒舌つてゐた。ジヤア、ジヤア落ちる水道の水の音が絶えず聞えた。

障子にさした日影の線が上の方二寸ほどかげつて來た頃、ふとガラガラとやつて來た車の音がした。いよいよ出勤の時間が來たなとかれは思つた。かれのゐる二階の向うの家の女優、R、Kと表札を出してゐる女優、公園の劇場に毎朝出勤して行く女優、亭主ともつかず情夫ともつかぬ活動の辯士らしい男と同棲して、朝に晩につかみ合ひの喧嘩をする女優、道具といふ道具もなく、着物もきたきり雀の、寢道具も一組しかない、喧嘩をする時には、先づ表の格子をピツシヤリ閉めて、こん畜生！　とか、ぬすつとう！　とかあくたれ口を男に向つて浴せかける女優、その女優を何うかして一度はつきり見てやらう、都合がよかつたら口位はきいてやらうとSは常に思つてゐた。そして、その願ひを、その好奇心を、今度の滯在中にかれは滿足させたいと思ひ立つてゐたのであつた。しかし、障子を細目にあけては、寒いにも寒いし、向うからも發見される虞がある。Sは止むなく指で障子をぬらして小さな穴を一つ明けた。

しかし度々覗いて見ても、車夫がぽつねんと立つて待つてゐるばかりで、女優は容易に出て來なかつた。時は段々かれの書いてゐる文章の中に經つて行つた。やがて格子戸の明く氣勢がしたので、急いで中腰になつて覗いた時には、女優はもう幌のかゝつた車の中にその半身をかくして、纔かに白足袋を見得たばかりであつた。

くあるが、かうした二階家の一間で、世を離れて、世間にも友人にも誰にも彼にも内所で、こつそりかくれて一週間を過すのはめづらしいとかれは思つた。かれはまた筆を執つてコツ〳〵書いた。一間の中にある道具、茶箪笥、本箱、長押にかけてある女の油繪、床の間の軸物、それ等のものにも、かれとかの女との長い間の交錯が雜り合つてゐるのがＳにはなつかしかつた。ほんの空想ではあるが、かれはかうした別宅の主人公になつたやうな無邪氣な喜悦を感じた。

本當に甘い男の無邪氣な喜悦である。實際は女は何れだけその心をかれに寄せてゐるか頗る疑はしいのである。第三者には無論笑はれてゐるのである。また、今度の旅行にしても、妹の結婚の世話をしに行くのは事實であるが、その途中では屹度男に逢ふのは知れ切つてゐる。男は大阪に行つてゐる。行きか歸りかに屹度一日都合して逢つて來るにきまつてゐる。それを思ふと、甘い無邪氣な喜悦も、かき消すごとく消えて行つて了ふやうな氣がする。しかし落附いた靜かなＳの今の心は、それに觸れても、いつものやうな痛い強い刺戟を感じなかつた。そんなことは何うでも好いと思つた。兎に角惚れた女の心の一角をつかんでゐるさへすればそれで滿足だと思つた。

つゞいて昨日旅に行くと言つて出て來た家庭のことも、ちよつと氣になつたが、それも別に大きな波も起さずに、それからそれへと筆が進んだ。

隣の藝者屋の仕込みの子が、長唄をぽつんぽつんやつてゐるのが、朝の朗らかな空氣に際立つてきこ

別れをつげた。

『さう言へば、お前、あの包を忘れては大變だよ。』

一度出かけて下駄まで穿いたのを戻つて來てかう母親は注意したが、最後に出て行つた女は、

『先生、さびしいでせうね、一人で。』

『大丈夫だよ。婆やがゐるから。却つて靜かで好い。勉强が出來る。』

『それはさうね。ぢや、お願ひしますよ。成るたけ早く歸つて來ますから……。』老婢の其處に送つて出たのに向つては、『それぢや、賴むよ、バアや。先生はせつかちだから、御飯も三十分前位に支度をするんだよ。』

『大丈夫だよ、そんな心配をしないでも……。』

『ぢや、行つて來ますから。』

『行つていらつしやいまし。』

かうあとから老婢は聲をかけた。三臺の車は靜かに動いて、赤い白い紫の色彩がチラチラしたと思ふ間もなく消えて行つて了つた。

もう停車場についたな……。かう思ひながら、Sは書きかけた筆を下に置いて、そして朝の二階の朗かな空氣に浸つた。兎に角かうしたことはかれに取つてめづらしいことであつた。旅で物を書くことはよ

のチラチラした一間、女は綺麗におつくりをして、長い髱をすつと後に見せて、時計の針を見い見い、時間におくれぬやうに、また忘れたものがないやうにとあたりに目を配つた。母親も着物を着ると、不斷見る姿とは違つて、小さな丸髷も恰好が好く細かい大島の重ねもよく似合つて、何處かの商家の立派なお袋さんのやうに見えた。殊に、嫁に行かうとしてゐる妹の島田姿が、くつきりと一間の中に際立つて見えた。『何うせ、汽車だから、今から大騷ぎをしたつて駄目だよ。』かう母親の傍から度々言ふにも拘らず、姉は丹念に妹の髮の筋を三本足で一本一本かいてやつた。流石に、その朝は一家の中にも普通と違つた慌しいやうな悲しいやうなまたは艷めかしいやうな氣分が滿ちわたつた。

『ぢや、私は一足先に行きますから。』

停車場まで荷物を持つて見送りに行く筈の父親は、かう言つて、三十分ほど前に出かけて行つたが、そのあとも何や彼やで、容易に支度が出來なかつた。姉はまたしても妹の髮を氣にして立つて行つてそれを直した。『本當に折角これまでにして、お嫁にやつて了ふと思ふと、本當につまらないね、母さん。』などと姉はその姿を見ながら言つた。

車が三臺揃つて來てから、茶を一杯皆して落附いて飲んだが、『ぢや、先生行つて參りますよ。大抵一週間あれば澤山だと思ふんですけどもね……。十八日には歸つて來るつもりですけれども……。』かう言ふ姉のあとに續いて、妹は、『ぢや、をぢさんいろ〳〵お世話になりました……。』かういくらか聲を曇らせて

女の留守の間

一

Sは二階にあがつて行つた。一方に友禪縮緬の四布蒲團をかけた行火、一方に藥罐をかけた瀨戶の丸い大きな火鉢、茶器も水さしもすつかり揃つてゐて、机に代用するための欅の一枚板の餉臺は、Sの來て坐つて原稿紙を其處に並べるのを待受けてゐるやうに見えた。障子には冬の朝の日影が明らかに心持よくさし添つてゐた。

Sは坐つて、茶を一杯飮んで、落附いた靜かな心持で、家から持つて來た風呂敷を解いて、そこから筆入れと雜誌と外國の小說と地理の本とを出した。ごた〳〵と掃除も碌にしない書齋、または慌たゞしい旅舍の一間、それとは違つて、一種言ふに言はれない懷しさと靜けさと世離れた心持をかれは味はずにはゐられなかつた。つゞいてそれから二三十分程前に慌たゞしく支度をして、女とその妹と女の母親との出て行つたさまを頭に浮べた。大きな信玄袋、其處等に脫ぎ散らした着物、紅い白いまた紫の色彩

『なアに、大丈夫よ。』

昔はちよつとの處も車か自動車でなければ歩かなかつた女が、子供の爲めにはかうも强くなるかと貞吉には思はれた。抱妓の琴子の兄の理髮舗の家の前を通つた時には、ちよつと寄つて其處で兄と立話をした。やがて此方に來て、

『本當のことを言はないのよ。かくしておくのよ。……小梅あたりにゐるツていふ話だツて言つたら、變な顏をしてゐましたよ。あの兄は職人で人は好いんですけどもね。』

などとお八重は言つた。

公園にやつて來た頃には、貞吉はかなりに疲れてゐた。普通ならば、こんな努力をしないのであらうに、女のためにいつもかう引張りまはされてゐる形が貞吉にも佗しかつた。今日のトリツプもその中心は矢張自分ではなくつて、幼い女の兒にあるのであつた。かれ等はやがて通りに來て、千代子のために、輕燒を買ふべくある大きな店に寄つた。

いつも買ふその店では、愛嬌のある商賣上手の中年の主婦が、『そらお孃ちやん、一つあげませうね。』などと言つて、お八重の背中の女の兒の小さい手に輕燒を握らせた。

ら。』

『家が遠いと、途中で消えてなくなつて了ふわけだね。』

こんなことを言ひながら、二人はそこから出て來た。

『妹のところに一枚送つてやらう。』

『なアに、途中で消えちやうよ。』

『そんなことはないでせう。』

『何うだかわかるもんか。』

て、かれ等は元來た路を矢張ぶらりぶらり歩いた。

角に來て、

『車に乘つて行かうか。』

『歩いて行きませうよ……。これから公園に出て千代ちやんの輕燒を買つて行かなくつちやならないんだから。』

『公園まで歩いて行くのかえ？』

『貴方、くたびれて？』

『此方は好いけれど、負つて行くのは大變だらうと思つて……。』

寫眞屋に寄ると、『え、もう出來てをります。』かう言つて、其男は六枚つゞきのヒルムを皿の水の中から取つて貞吉に渡した。

貞吉はそれを灯にすかして見て、

『えらい寫眞が出來た。』

『どれ、見せて。』

かう言つて、お八重は同じやうにしてそれを見たが、『千代子は動いたわね。それに私の髮も變だ。束髮見たいね。』

『どれ。』

貞吉はまたそれを取つて、小さくごちやごちやと撮つたさまを不思議なやうな氣持で見た。

『臺紙はいりませんか、一枚五厘。……』

『貰つて行かう。』

錢をわたしてそれとも貰つて出ようとすると、

『家は遠いんですか。』

『なアに、ぢきだよ。』

『なら、お家にお歸りになつたら、すぐ水につけて下さい。さうすりや、いつまでも變色しませんか

店には客が一杯滿ちてゐた。灯が明るくあたりに照つて、扇風機から來る風が涼しく一室に滿ち溢れた。銘仙に羽二重の帶位をしめた割合に綺麗な女中が梭のやうにあちこちと忙しさうに往つたり來たりした。

『割合に好い女がゐるね。』

『えゝ。』

などとお八重は笑つた。

かうした女中を相手にするのには、中々金がかゝるものだなどといふ話を貞吉は思ひ出してゐた。しかし、やつて見ると、藝者や女郎などと變つて、またちよつと他に得られない面白い味があるといふことであつた。其處に女中は註文したものを運んで來た。

アイスクリームを少しづつ匙にしやくつて女の兒に分けてやりながら、自分も食つて了つたお八重は、

『一時間經つて、もう?』

時計を出して見た貞吉は、『あゝもうなる。あと五分。』

で、暫くして二人は出かけた。

別にこれと言つて興味を惹くやうなものもなく、ぶらりぶらりとまた通りに出て、此方の方へ歩いて來たが、ふと其處に大勢客の入つてゐる灯の明るい賑やかな西洋料理のあるのを發見して、そのまゝそこに入つて行つた。

奧の方に空いてゐる卓の方へと行つて、そこでお八重は長く負つて來た女の兒を下した。

『くたびれたらう？』

『いゝえ、そんなに。……』

『でも、大變だっ……』

女の子を下して少し休むために入つて來たので、別に物欲しくは二人はなかつた。お八重は貞吉に、『ビール召上る？』と聞いてから、そこに來た女中に、アイスクリーム二つと生ビールとを頼んだ。

『オヤ、にやア、にやアがゐた！』

かうお八重が言つたので、注意して見ると、其處に三毛の可愛い猫が小さくなつて寢てゐた。『そら、にやアにやア。丁度好いところにゐたね。にやアにやアが。……』かうお八重は女の兒に見せた。

『にやア、にやア！』

女の兒は喜んで指さした。そこに女中が、『まア、なんて可愛いお孃さんでせう。』などと言つて寄つて來た。

大音寺の前の方へ出る裏門まで行つて引返して、それからぶらりぶらり今度は向う側を歩いたけれど、別に目を惹くやうなものもなかつた。幼い女の兒を喜ばせるに足るほどの灯もなかつた。

水道尻の處あたりまで行つて引返して、今度はIといふ大きな店のある通りを入つて行つた。中年の藝者が一人褄を取つて急いですれ違つて行つた。

『あれはとんぼさんッて言ふのよ。』

かうお八重は言つた。

Iといふ大店では、さゝ波といふ華魁がさう美人ではないけれども、すぐれて賣れる人だなどとお八重は話した。おでん燗酒の屋臺、蕎麥を賣る屋臺、その向うにはかうした廓によく見る夜の藝人が、胡弓見たいなものを鳴らして、其周圍に大勢人を集めて頻りに唄を歌つてゐた。お八重は傍に行つて暫らく立つて見てゐた。

ある店の前では、『こゝは中店では好い方なんですよ。好い華魁が多いんですよ。』かうお八重は教へた。その店はつくりといひ、格子と言ひ、以前とすつかり變つて了つてゐるけれども、曾てHといふ妓がゐてそれがやさしい涙脆い女で、かなり深くかれの心を惹いたことがあつた。貞吉はその名だけ別の女になつて殘つてゐる寫眞の前に行つて立つた。それは肥つた大きな前のHには似もつかないやうな女であつた。

お八重は言つた。

『この間、其處に來たのよ。そら、そこにあるAといふ家……。十二時頃から來て三時まで騷いだ。……』

『知つてる家は隨分あるだらうね。』

『さうね。五軒や六軒はあるわね。』

客に伴れられて藝者が此處にやつて來るさまなどは、貞吉にはよくわかつてゐるので、さうした話も別に興味を惹かなかつた。貞吉も醉つて騷いであばれた昔などを頭に繰返した。

成ほど張店がなくなつてからは、大きな店もなんとなくさびしく、あたりもがらんとして、寫眞の彩色したのと普通なのと二通り並んであるのをすらすら見て通つて行く客も物足りなささうに見えた。『如何です皆な明いて居ります。』などと通りすがりに聲をかける妓夫の調子も張合のないこと夥しかつた。

ある角の大きな店を此方へ出て來たところで、

『こゝの紫さんツて言ふのは、好い華魁ですよ。眼が綺麗で、背が中背で、そして怜悧ですからね。』ちよつと途絶えて、『紫君さん知つてますね？　あの人も綺麗だつたけれども、あの人よりも好いでせう。』

などとお八重は言つた。

戀の終結に近い氣分の爲か。

或は夜櫻の賑かな灯のかがやき、或は仁和賀の騷々しい雜沓、引手茶屋の三階の鼓や三味線は沕くやうに鳴つて、其處に入つて行くあらゆる人々をして有頂天にならせずには置かせないやうな氣分、それに比べては、その夜は割合に靜かで、奧のずつと一目に見わたされる引手茶屋にも客が尠く、娘達や仕込の子などが店先の緣臺に並んで腰掛けて團扇を搖かしてゐるのが眼に入つた。それでもある家の二階では、鼓の鳴る音が靜かにして、妓や客の笑ふ聲が簾の中から落ちて來た。

通りは人がばらばら疎らに歩いてゐる位であつた。

『靜かだね、今日は。……』

かう貞吉が言ふと、

『さうね。今時分は仁和賀にはまだならないし、丁度靜かな時なのね。それに、今日は晦日でせう。』

『あゝ、さうだな、そのせゐもあるんだな。』

こんなことを言ひながら二人はぶらぶら歩いた。

K屋の前には、上さんの姿が奧に見えたけれども、聲をもかけずにそのまゝ素通をした。そこから上つて、半年ばかりかなり熱くなつて通つた妓が、年が明けて引く時には立派にして廓を出て行つたのに拘らず、今でも猶ほ芝浦あたりで藝者をしてゐることなどを貞吉は思つた。

『すぐと言つも二時間は經たないと。……』

『二時間、それは大變だ。……』

かう貞吉は驚いたやうに言つた。

『すぐでも撮つてゐますけれど、水にすこしつけないと途中で消えてしまひますから。』

『そいつは厄介だ。途中で消えられちや何にもならない。』

で、一時間ほど仲を歩いて、歸りに寄ることにして、二人は其處を出た。

例の有名なF氏の書いた大門の聯、それからずつと續いた兩側の引手茶屋の行燈の火、貞吉はいろいろな追憶の念に引寄せられずにはゐられなかつた。曾て一度だッて、かれは今のやうな靜かな落附いた、淺草あたりを歩くやうな、輕い散歩氣分で此處にやつて來たことはあるであらうか。こつそり人知れずやつて來た時の心の亂れ、禁じられた果實を始めて食ひに來た時の體の戰慄、惚れた女に向つて一途に靡き渡つた時の堪へ難いあくがれ、それから少し經つた後には、さういふことには馴れて、わざとづうづうしく振舞つて、頂を高くして平氣でやつて來るやうになるにはなつたが、しかし今日のやうな全く離れた氣分でやつて來たことはあつたであらうか。女に對して、または歡樂に對して、現にかれの傍にゐる女に對してすら、落附いた傍觀的な心になつたのは年の故か、それとも氣力の衰へた故か、または

その男はかう言つて、直ちに、奥深い窟の中のやうな感じのするところへ椅子を持つて行つた。モーッと熱い空氣の壓迫を貞吉は感じた。

『これは暑いな。』

爲方なしに、男の命ずるまゝに、かれは半ば壞れかけた椅子に腰を下した。お八重は、『奥さんは此方へ。』などと言はれたり、『下さずに負つたまゝにお寫しになるんですか。さア、それではちよつとむづかしいかも知れない。』と言つてちよつとレンズを覗いて、『イヤ矢張下して抱いて貰はなけりや。……』と言はれたりして、子供を下して自分で抱いたが、いざ寫すといふ段になると、この男の上さんらしい女がひよくり玩具を持つて出て來て、『それ孃ちやん、こゝらを御覽なさい、さア、それ、それ。』などと言つてその手にしたものをガラガラ振つた。

パット電氣が強く光つた。

『よろしう御座います。』

かう言つて男は挨拶して、寫したものをワクから外して、すぐ傍の暗室へと入つて行つたが、お八重が子供を負つたり何かしてゐる間に、其處から出て來た。そのヒルムを皿の中の水につけて、

『よく撮れました。』

『すぐ貰つて行けるんですか。』

これまでにもつひぞかれには起らなかつた。が、……また今日でも正面からさうしたことを望まれたらすぐ斷つて了ふにきまつてゐるけれど、散步の次手にさうした子供染みたことをやつて見るのは興味があるやうな氣がした。またかうした吉原への散步の氣分にも何處か合つてゐないこともないやうな氣がした。

それに、貞吉はこれまでつひぞ一度もお八重と一緒に寫眞を撮したことがなかつた。

『馬鹿々々しいな。』

こんなことを言ひながら、貞吉はいつかその寫眞屋の店の中に入つて行つてゐた。

それはがらんとした屋根裏とでも言ひさうな一室で、腰をかけるも汚い椅子二三脚と、變な風に仕かけてある電燈としか見當らなかつたが、かれ等が入つて行くと、青白い顏の皮膚をした二十五六の男がそのまゝ立つて來て迎へた。男はじろじろと二人を見た。

『何うせ、いたづらに撮すんだから、これで好いわ。』

お八重はその壁にかけた硝子の中に入つてゐる見本の小さな寫眞を見ながら言つてゐたが、

『それでも出來ますけれど、二人ではそれでは小さくなりますよ。』などと說明されて、今一段上のやや大きいので撮して貰ふことにした。

『よう御座んす。すぐやります。』

明るい電氣に綠葉を靡かせてゐるあたりまで來た。人と車は織るやうにまたは海門に靡いて落ちて行く潮のやうに、ぞろ〱とそこから曲つて大門の方へと行つた。

灯の明るい光は、麥稈帽だの、白地の中形だの、白い女の顏だの、若い男の顏だのに落ちた。氷店の店の硝子の簾は涼しげに光つて搖いた。

柳のあるところからちよつと曲つて來たと思ふと、お八重はふとその片側にある或ものに引かれたといふやうに寄つて行つた。

『これ、デンキ寫眞よ。』

かう言つて、小さなショウウィンドウに一杯に陳列された活動寫眞の小さいヒルムのやうなものを見てゐたが、

『撮りませうか、一枚？』

『こんなもの……。』

とは言つたが、强ひて反對しさうにしない貞吉の樣子を見て取つて、

『撮りませうよ。すぐ出來るのよ。六枚一組ですよ。』

『つまらんな、こんなもの。』とは言つたが、かうした子供だまし見たいな眞似をして見るのも何だか面白いやうな氣が貞吉には何處かしてゐた。ちやんとして女と一緒に寫眞を撮らうなどといふことは、

『寢やしないでせう？』

貞吉は覗いて見て、

『大丈夫、大丈夫、大きな眼をしてゐる。』

『私にさへ負ぶしてゐればおとなしいんですよ。ねえ、千代子ちやん！』

かう呼びかけると『エン、エン。』と女の兒は輕く踊り上るやうにした。

『もうぢきよ。そら見えるだらう、灯が……？』

お八重は女の兒を前へ出すやうにして見せた。

果してそこから仲はもういくらもなかつた。千束の方から來た路が十文字をなして交叉したあたりに來ると、大きな遊女屋の明るい二階の窓の灯などがそれと指さゝれて、車やら、群集やらをりくけたたましい音を立てゝ通つて行く自動車やらで、あたりは夥しく賑かな光景を呈してゐた。何處の家にも灯はかゞやきわたつて、小料理屋、牛肉屋、馬豚肉と書いた板牌やらが何軒となく兩側に續いた。人間の心の底に渦を卷いてゐる歡樂が、何の拘束もなく、何の羈絆もなく自在に其處に流れてゐるやうな氣がした。步くものの步調も、走る車の足も、何も彼も其方に向つて偏つて靡いて行くやうに見えた。

明るい小さな店の前で、男と女の子供が蓙にくるまつて寢る眞似をして遊んでゐるのをちらつとめづらしいもののやうにしてお八重は指さして貞吉に見せたが、そこをもすぎてやがてかれ等は見返り柳の

は青い、赤い、黄い、または紫の灯の光線が丸で極樂境でも思はせるやうに美しく賑やかにかゞやいてゐた。男達の脊の高い姿のぐんぐん急いで歩いて行くのがかれ等の前に見えてゐた。しかし二人はそれについて何も話さなかつた。『行くんですね。』とも言はなかつた。

それよりもそこからそろそろあらはれ出して來る何軒ともなく兩側につゞいた古道具屋の店が却つてお八重の眼を惹いた。『それや軒並よ。ずつと向うまで道具屋ばかりですよ。何うしてかう此處にあるかと思はれる位ですよ。』

成ほど行つても行つても、その兩側の古道具屋は盡きなかつた。簞笥、餉臺、茶簞笥、勝手道具、机、さうしたものの市でもあつて、そこに並べられたかのやうに……。

『向うに仲見たいなところがあつて、こゝにかうした道具屋があるのも面白いぢやないか。』

『さうね。その譯ね、屹度……色戀が始まりで、それから世帶ね。……さういふ風に出來てるのよ、世の中は。』

こんなことをお八重は言つた。

ある處では、『何軒あつたかしら、數へて見れば好かつた。』

かうお八重は言つた。

『子供はおとなしいね。大丈夫かえ。』

『あの時分は、隨分俺もいぢめられた！』かう言ふ言葉が貞吉の胸に上つて來たけれども、しかしかれはそれを口に出さなかつた。その頃の火も水も、黑い雲も、霧も彼はもう今はすべてすぎ去つた。しかし貞吉はその時分のことを繰返さずにはゐられなかつた。それは人の魂を亡ぼさずにおかないやうな女の欺瞞と虛僞ではなかつたか。

……思返して、

『重いだらう？　子供が。……』

『何アに大丈夫よ。負ひつけてゐますから……それに、私と出ちや、いくら私が代つて貰ひたくつたツて、駄目ですよ。定（女中の名）と來ても、負さりはしないんですもの。』

『大變だな、しかし。』

『何アに、大丈夫よ。……』

其處で車を下りたらしい、三人づれの男達は、

『二十五錢なら高くはないよ。』

『高くはないとも。……』

『此の間は三十錢取られた。』

こんなことを言ひながら、二人を掠めて早足に追越して行つた。そこはもう日本堤であつた。突當りに

『此處等ですね、山谷堀ッて言ふのは……。』
近くに住んでゐながら、またさうした社會の女として生立ちながら、此處が有名な昔の狹斜街であつたことをはつきり知らぬらしく、お八重はかう貞吉に訊いた。
『さうだよ。此處だよ。こゝに皆昔の人は猪牙でやつて來たんだよ。』
『さうですかね。』
お八重はその時分若かつた老妓の話などを思ひ出しながら歩いた。
『此處を歩いたことがあつたね。もう三年になるね。』
『さうでしたね。琴子の家に行つたことがありましたね。』
お八重の家の抱妓の琴子は、その頃二十一二で、運わるく旦那のわからない胤をやどして、身の振方に困つて、よく此路を千束にゐる理髪舖の兄の許に相談に行つた。貞吉がお八重と琴子と三人して此處を通つて行つた時は、矢張その相談をしに行つたのであつた。
『あれきり來ないかね。』
『琴子？　ちつとも來ません。』
『子供は死んだんだね。』
『え……何でも小梅あたりに、人の上さんになつてゐると言ふ話ですよ。』

こんな話も途切れ勝にきこえた。

また誰かゞ言つた。

『でも、早いもんね。舟は――もう半分來てよ。』

話しかけられた女は、前後を振返つて見るらしかつた。

向うの岸は次第に近寄つて來た。岸にかゝつてる舟、舟の灯、つゞいて川に臨んだ大きな二階家の簾を透した灯、大きく川にかゝつてある鐵橋、晝間見ると、汚ないものが一杯に浮いて、水が黑く淀んで、見るにも堪へないやうなところであるけれども、夜は流石に美しい船附らしい感をかれ等に與へた。

岸につくと、乘客はぞろ〳〵下りた。

『渡錢はあつちへやつて來ましたよ。』

お八重は、かう言つて先に立つた。

人々の前には灯の明るい町があつた。船宿、雇人受宿、かと思ふ淺裏草履を明い灯のもとでせつせとやつてゐる家などが見えた。名代の豆やつくだ煮を賣つてゐる老舖の前には、人が二三人立つて待つてゐた。

船のゴタ〳〵とかゝつてゐるやうな川に添うた路をかれ等は歩いて行つた。

『向うが明いてるよ。』

かう貞吉はお八重に言つた。お八重はつか〳〵そつちへ入つて行つて腰をかけた。貞吉は船尾のところに蹲踞んだ。

涼しい川風が漲るやうにあたりに滿ちた。丁度潮がさして來てゐるらしく、たぶたぶと畝を成して流れる黑い水に何處からともなく灯の光線がチラ〳〵と動いた。黑い船の影がすぐその傍を掠めて通つて行つたりした。

『涼しいのね、川は?』

『さうね。』

顏は見えなかつたけれど、何處かの女中でもあるらしい女作れの話聲がをり〳〵耳に入つた。

『あの時、あなたゐたかしら?』

『ゐてよ。』

『さうでしたかね。』

『そら、お上さんが慌てちやつて、早く〳〵なんて言つて、……』

『さうでしたね。』

『あの時は怖かつたわねえ。』

てゐる細い巷路を出て、そのまゝ土手へと上つて行つた。

土手の上から見た川は晴やかでそして涼しかつた。けたゝましい音を立てゝ通つて行くモウタアボウト、黑く光つて流れる潮にキラ〳〵映るスワン萬年筆の廣告燈、それと明かに空やら水やらに照つてゐる淺草公園の賑はひ、ふと見ると、岸に添つて、一隻の屋根舟が、明るく船中の光景を暗い川水の上にしきつたやうにはつきりと見せて、靜かに輕い艫につれて漂ふやうに動いて行つた。三味線の音が微かにした。

『やつてるな……。あゝやつて遊ぶのも面白いな。』

『でも、暑いものよ。屋根舟ツて？　他で見てゐると涼しさうだけども……。何しろ、中は狹いんですもの。四人も入ると身動きも出來ない位よ。……』

『でも好いな、ちよつと……。』

『矢張涼しいのは、モウタアよ。』

『それはさうだらうな。』

こんな話をしてゐる中に、やがて向うに渡る渡場に來た。見ると、今、船が大勢人を載せて雁木を離れやうとしてゐるところで、それが暗い夜の空を透して指さゝれた。急いで二人は下りて行つた。

込んでゐる中に一人位腰かけられるところがあるのを見附けて、

『好いぢやないか、これで？』
『さうね。』
ちよつと見て、『好いかも知れないけれど……でも、着替へた方が好い。浴衣がけでは餘りヒドい。』
『誰かに見られるとわるいからね。』
『さうぢやないけども……。』
『暑いなア、着替へるのは……。』
こんなことを言ひながら、貞吉は白地の銘仙の絣を着て、上に堅絽の羽織を着て、足袋を穿いた。お八重はお八重で、千代子を負つて、黑い縮緬の帶で下の方だけ結えて、大きなオリーブのリボンのついた帽子を女の兒にかぶらせた。

仲に行つたとて、何をするのでもない。たゞ一二時間ぶらついて歩いて來るばかりである。それでも家を出て少し來た時、『K屋に行つて見たら、上さん驚くだらうな。先生のお子ですかなんて言ふだらうな。一つおどかしてやるかな。』こんなことを貞吉は言つて見たが、そのK屋と言ふのは、そのおしげといふ藝者のゐた引手茶屋で、お八重も貞吉もかねて行つて知つてゐるのであるが、しかもそんなことは口でこそ言へ、とても實行は出來さうには思はれなかつた。で、二人は球突や藝者屋の明るい灯のかゞやい

『カンレイ紗よ。』

『カンレイ紗？ そんなもので、そんな着物が出來るのかね。』

『今年の流行よ。』

かう言つて白く模樣の出た帶を堅めてゐるところへ、さつきお八重の父親に負はれて出て行つた千代子が歸つて來て、それを見て、置いて行かれると思つたか、もがくやうにして下に下りるとそのまゝ、立つて帶をしめて姿を鏡に寫してゐるお八重の足元にからみつくやうにして泣いた。

『千代子ちやんも行くんですよ。そら、好いところに伴れて行つて上げませうね。さうだおべべを着替へて。泣くんぢやないのよ。置いて行くんぢやないのよ。』婢が出した友禪モスリンの色のあつさりと涼しい小さな着物を取つて、『そら、ぽんをするのよ。そら好いでせう。行くんですよ、ア、ちやんと。……』

まだ泣きやまぬ女の兒を骨折つて裸にした。

『そら、ぽんが出來た。』

かう言つてさも可愛いやうに、お八重は腹のところに口を當てた。

女の子の支度の出來たのを見てから、今まで坐つて盃を口に當てたり、飯を一杯食べてゐたりした餉臺から貞吉は立つた。

『貴方はそれで好いの？』

『二人ゐたのが、一人死んだ……。この間もちよつと義兄の家で邂逅したが、年を取つたね。すつかり素人になつちやつた。』

『さう――』

鏡臺の前で、支度をしながら、『何ッて言つて？　素人の方が好いつて？』

『退屈ぢやないかッてきいたら、退屈どころか、一日子供に追はれてゐるッて言つたよ。あの人は何方かと言へば、じみな藝者だつたからね。』

『それはさうでせうよ。子供がゐりや、退屈なんかしないでせうよ。』

あつさり白粉をつけて、其處に立つてゐた婢に、

『此間の着物にしやうかしら？』

『あれがよう御座んす。涼しくつて。……』かう言つて、婢は向うの衣裳簞笥から白い絣の着物を出した。

それを着るのを見ながら、

『何だえ、それは上布かえ？』

『上布に見えるでせう。着手が好いから……。』

『何だえ。それは。』

と言ふ時には、いやな心持がするといふよりも、一生夫を持つことの出來ない運命に落ちた女が可哀相なやうな氣が貞吉はした。

『仲にもしばらく行つたことがない。』

かう貞吉が言ふと、

『寫眞になつてから、まだ行つたことはないんでせう！』

『ない。』

『前だと、千代子をつれて行つても、人形のやうで、喜んだでせうけれどもね。』

『もうすつかり張店はないのかな？』

『え、みんな寫眞……。』かう言つたが、『おしげさん何うして？』

それは貞吉の妻の兄の家內の妹で、二三年前まで、仲の引手茶屋で藝者をしてゐた人であつた。

『すつかり素人だね、もう……。』

『すつかり鬮はれちやつたの？』

『いや、いくらも出やしないんだよ。けれど、子供があるからね。』

『一人？』

『俺だッてさうだ。これが自分の子なら、こんなにして置きやしない……。もつとうんといぢめてやる。それこそ今もその敵を取つてやるんだけれど。……』

『何うして出來ないんでせうね。』

『お前がわるいのさ。……』

『何うして？』

『だつて、心を二つにも三つにもわけて來てゐるんだもの……。そんなことで、子供は出來るもんかね。』

『うそ、うそ、貴方こそ病氣をした癖に……。貴方の故ですよ。』

『そんなことはない。』

『だッて、あの病氣の故ですよ。その證據には奥さんにだッて出來ないぢやありませんか。』

『ぢや、誰か出來る奴を一つさがすんだね。』

『そしてまた怒るの？』

『もう怒るもんか。そんなことは平氣だ。……』

『さう？　屹度……？』

こんな戯談を言つたことなどもあつた。お八重が、その女の兒を貞吉に押しつけて、『父ちゃん。』など

ちやんと知つてゐて、いきなり女の兒はかじり附いて來て、出かけやうとすると泣いて泣いて泣き叫んだ。行つて了つたあとまでも泣きぐづつて爲方がなかつた。で今ではお座敷がかゝつて來ると、婢が一番先きに女の兒を負つて外に出て、お八重が出かけたのを待つてそして家に歸つて來るやうにした。

貞吉の眼にも、女にはこれほど子供が可愛いものかと思はれた。續いて、妹の子とは言へ、自分で腹を痛めた子供でない子にすらこれほど盲目になるお八重を可哀相に思つた。また自分の子でないからかう一層可愛いのだといふ風にも思はれた。娘時分から、さうした生活に入つて、平凡な普通な女の持つたものすら持てないかの女は憐れまれた。

貞吉に取つては――お八重が十九の時から今日三十近くまで離れやうとして離れられず、別れやうとして別れられずに、種々な心と氣分の中を、時には憤怒、時には嫉妬、時には冷笑、時には魂も體も失ふやうな歡樂の中を通つて來て、しかも今になつても、かうした狀態で、矢張いくらか側に立つてゐなければならないのかと思ふと、小さな邪魔者位にその女の兒を思はずにはゐられなかつた。しかしかれ等の間は既に餘りに多く種々なことを經て來た。戀の相手としてよりも、寧ろ戀した友達と言つたやうな淡い心持を今では貞吉は女に對して持つた。

『千代子が本當に貴方の子だツたら何んなに好いでせうね。……さうしたら、貴方だツて、こんなに放つて置く氣づかひはないから。……』

をわたつて、土手を行きさへすればすぐよ。』

『行つて見ても好い。』

かう貞吉は盃を口にあてながら言つた。

去年の春頃に生れた妹の初めての兒を、千代子といふ女の子を自分で所望して貰つてから、お八重の心持も氣分も生活の狀態もまるで變つて了つた。もう浮氣などはしてゐられなくなつた。またさうしたこともしやうとは思はなかつた。或は彼女はその失はれた戀、何うにもならなかつた戀の創痍を醫するために、それを忘れるためにその妹の兒を貰つて育てる氣になつたのかも知れなかつた。否、貞吉の見たところでも、その女の兒は確かにさうした役には立つた。

お八重は心をも魂をもすつかりその幼い兒に打込んだやうに見えた。少し熱があると言つては騷ぎ、便の色がわるいと言つてはすぐ自分で抱いて醫師の許に行つた。あらゆる新案のめづらしい玩具といふ玩具は室の中に散ばつた。從つてその女の兒もよくなついて、廻らぬ舌で、『ア、チヤン、ア、チヤン』と言つてはお八重の後を逐つた。お八重がゐては、家の人の誰れの手にも行かなかつた。『お前がそんなに可愛がるからしやうがないんだよ。……私の手にさへお前がゐては來ないんだもの。』かうお八重の母親はこぼした。

お座敷に行く時はそれは騷ぎであつた。お八重が鏡臺を持出して、おつくりを始めると、それをもう

夜の灯

『今夜、仲に行つて見ませうか。』
かうお八重は言つた。
『さうさな……。』
『行つて見ませうよ。』
『行つたッてしやうがないぢやないか。わざわざ疲れに行くやうなもんぢやないか。』
『だッて、此頃は滅多に何處にも行かないんですもの。……』
その言葉の中には、此頃はもうちつとも相手にして呉れないといふ語氣が籠つてゐた。二三年前には何處へでもよく一緒に出かけて行つたのに……。
『子供を負つて行くのかえ？　大變ぢやないか。』
『大丈夫ですよ。負ひつけてるから何ともありませんよ。……それに、近いのよ、仲は……。渡し

かつた。もう母親は別室に靜かに眠つてゐるらしかつた。「かしこまりました。」かう言つて女中は何か白いものと錢とを女から受取つた。その時Sの意識ははつきりして來た。その渡した白いものの手紙であること、またさつきから髷と髱と後姿とを見せてゐたのは、それを書いてゐたのであるといふこと、その手紙はてつきりNに宛てたものであること、さういふことがはつきりSの頭に强い力で浮んで來た。かれはすつかり眼が覺めて了つた。また今日一日やつて來た苦しみが一層强い力で蘇つて來た。心臟の動搖の烈しくなつて來たのもわかつて來た。しかしSはそれを强ひて押へて、女が何ういふ態度に出て來るかと眠つた振をして靜かに見ようとした。一人の男に手紙で心を通じて置いて、一人の男に何ういふ風に出て來るかを見て置くといふことは、Sに取つて非常に必要なことであつた。女を知るのにこれほど好い機會はないやうに思はれた。

そんなことを夢にも知らない女は、やがて暫しあたりを見廻してゐたが、そのまゝ着物を脱いで、派手な長襦袢になつて、靜かに此方へとやつて來た。Sは憎と愛とが一緒に體中に燃え上るやうなのを感じた。

『あゝ直すわ。明日は早いから、直してゐる隙はないから。』

『なんだ。これから母さんの髮を直さうツて言ふのかえ？』

『だつて、明日はひまはないでせう？』

『明日はない。ぢや早く直す方が好い。』

で、女が母親の後に立つて、頻りに髮を梳き附けるのをSは暫し見てゐたが、急に眠くなつて來たので、『ぢや、御免を蒙るよ。僕は、眠い、眠い。』かう言つてかれは向うに續いた二枚重ねた厚い蒲團の中に入つた。すぐ眠つて了つた。

五

ふとSは眼が覺めた。しかしそのさめたと言ふのも、はつきりさめたのではなく、何か眼の前に見えてゐて、その眼についたものが、女の髷の形であり髱であり後姿であるのはわかつてゐたが、しかもそれが夢であるか又は現であるかはつきりしないといふほどの眼の覺めかたであつた。かれはまたうとうとした。

そのうと〳〵した狀態から、ふとまた更に眼の覺めた時には、女中に女が何か言つてゐるところであつた。或は、『はい、はい。』といふ女中の聲が耳に入つてそれで眼が更にはつきりと覺めたのかも知れな

持！』こんなことを言つて、そのまゝ室の隅にある黑柿のテカ〳〵光る鏡臺へと向つた。

髮が出來上つて、見違へるやうに綺麗になつて、女が此方に來て坐つた頃、女中は膳を運んで來た。

Sは酒はあまり深い方ではなかつたけれど、輿に乘ると、いつも二三本の酒は飮んで了ふのは常であつた。その夜はつい酒をすごして、膳の片附けられたのは、かなりに遲かつた。一滴も酒を口にしない母親は傍で途中の話を何彼とした。

女中が膳を下げた後で、

『疲れたでせう？』

かうSが女の母に言ふと、

『疲れました。何しろ、汽車で乘り通しですから。しかし、好う御座んしたね、Sの景色は……。もう一生來たいたツて來られないと思つて見て來ましたよ。』

『なアに、また來られますよ。わけはありませんよ。汽車が出來たから。』

『でもね、もう二度と再びは。……』

こんな話をしてゐる間に、女中は派手な絹布とメリンスの敷蒲團とを運んで來て、そこにつゞいた室に一つ延べて、あとを何うしやうと言つて母親に訊きに來た。母親は、『そこに置いて下さい、あとで自分で敷きますから。』かう女中に答へて置いて『直して呉れるかえ？　お前？』

で拭ひ去られたやうに思はれた。何うせ、奧にはその暗い影がある。觸ればすぐ雲を漲らし雨を降らす影がある。しかし、今更そんなことを考へたつて爲方がない。何うせ歡樂は長く續かないのである。刹那より他に何うすることも出來ないものである。完全に占領するといふことは到底出來ないことである。相愛の戀人ですらさうである。戀で出來た夫婦ですらさうである。『つまらないことをくよくよ考へたつて爲方がない。』かうSは鏡の前で髮を梳きながら思つた。

で、女の出て來るまで待つてゐようと思つたが、母親を早くよこしてやらうと思つて、濡れた手拭を絞りながら、共同浴槽の扉を明けて外に出た。明るくチラチラと水に搖ぐ灯、湧くやうに處々に聞える三味線と鼓の音、成ほど湯の町の氣分である。これで、月でもあつたらなどと思ひながら、Sはさつきの氣分とは丸で違つた心持で、靜かに橋の上に立盡した。

やがて宿に歸つて、『母さん、大きな立派な湯ですよ。他にはちよつと見られない。入つてゐらつしやい。』かう言つて勸めて出してやつたが、長い間經つてから、女と母親とは一緒に揃つて戻つて來た。

『あゝ好い湯だつた。長かつたでせう。』

かう言つて母親は、のんきさうに濡れた手拭を衣桁にかけた。襟から頸のところにかけて、さながら隈取つたやうに白粉をつけて、三本足を長く髮にさして、あかくのぼせたやうな顏をした女は、『出ようと思つたら、母さんが入つて來たから、一緒にまた入つちやつた。のぼせる位暖まつた。……あゝ好い心

『大丈夫とも……そんなにうんと放りつけやしないんだもの。』

『そんなことはないわ。随分ひどい劍幕だつたもの。』

かう女は笑ひながら言つた。

湯に行く時には、Sも女ももうすつかり和解して、『母さん、それぢやあとに殘つて？』などと女は言つて二人揃つて出かけた。男女の間柄ほど急に晴れたり曇つたりするものはない。子供の顏と夕立の空ほど機嫌買ひのものはないとフランスのユウゴオも言つたが、その子供の頬よりももつと變化の激しいのは男と女の心であつた。ついさつき喧嘩した橋を渡つて、二人は睦まじさうにして、赤い青い黄い色硝子の灯にかゞやく大きな浴槽へと入つて行つた。

此處の溫泉は湯の量が少いので、何處の旅舍にも内湯といふものがない代り、五錢出して入りに行く共同浴槽は、非常に立派で、外國にでも行つたやうな氣がするほどそれほど立派な構造であつた。扉の色硝子は或は花形に、或は菱形に皆な美しくさまざまの色を灯にかゞやかして見せた。浴槽はすべて白い大理石で、玲瓏とした綺麗な湯は溢るゝやうにざぶ／＼流れた。銀色した管をねぢると、湯と水とが欲するまゝに瀧をなしてそこから落ちた。

湯から出たSは、いくらか心がさつぱりしたやうな氣がした。終日、汽車に搖られながら、または女の顏と相對しながら、我から我身の自由にならないのにひどく惱まされたが、その苦惱がいくらかこれ

Ｓにはさういふところがいくらかわかつてゐた。またわかつてゐるだけ、それだけ、女を牽く力の自分に乏しいことを辛く情けなく思はずにはゐられなかつた。其處まで行くと、いつも溜息が出た。續いて激昂した。

段々和解の氣分が一間に滿ち溢れて來た。女も旅行中つまらぬ喧嘩をしても爲方がないと思つたらしく、次第に明るい顏の表情を見せて笑つたり何かした。後には、『あの時の恰好ッたらなかつたわ。俺は知らん、勝手にしろ！　ッて言つて、ごろ〳〵とするあの大きな信玄袋を投り出すんだもの。信玄袋ばかり好い災難だ。あの大きいのが二三度ひつくり返つたのよ、母さん。』などと言つて、其Ｓが放り出した時の眞似をして笑つた。母親は母親で、中に壞れ易い罎があつたと言つて、罎は構はんが、もし壞れると、着物が大變だと言つて、わざ〳〵その信玄袋を座敷に持ち出して、一枚一枚着更を出してそして調べた。

『大丈夫、母さん？』

かう女が訊くと、

『待つてお出でよ。』手を信玄袋の中に奧深く入れて、觸つて見るやうにして、『大丈夫だ。大概……』

かう言ひながら小さい液體の入つた罎を出した。それは母親の持藥であつた。

罎を電燈に翳すやうにして、『大丈夫。……』

から笑ひながら母は言つた。

茶代をやつたり、そのかへしを番頭が持つて來たりする時分には、三人の間には既に普通のやはらかな氣分が漂つて、母親は今日見物して來た港の風景の美しかつたことや、途中の汽車の長くつて退屈であつたことや、佝僂の男の話し振りの可笑しかつたことなどを話し出して、つとめて、女とSとの間の氣分を和げることに骨折つてゐた。Sは母親の境遇に就いて同情せずには居られなかつた。母親の身にしたら、かういふむづかしい細かい心の間柄の二人と一緒にかうして旅行したとて、氣骨が折れて、ゆつくり見物する氣にはなれないに相違なかつた。待合の女將のやうな世話もしなければならないし、心にもないお世辭をも言はなければならないし、場合に因つてはせゝこましい別室を無理に無心して泊らなければならないし、その氣苦勞は並大抵のことではなかつた。ある夜はその宛がはれた室が丁度二階の階梯の下になつてゐて、女中の昇降の草履の音が耳について、深夜まで眠ることが出來なかつたといふことであつた。さうした面倒な任務を負はされながらも、かうして旅費は自分持で旅に出かけて來たといふのも、ためにならないNから娘を離すと同時に、娘のためになるSを娘から離したくないといふばかりでやつて來たのであつた。勿論、見ぬところを見物するといふこともあるにはあつたが……。

Sと女との間柄が、度々壞れさうになつても、どうやらかうやら今日まで續いて來たのは、母親の苦心も無論大いに與つて力があつたのであつた。

御用の時は、この電話をおつかひ下すつて好う御座いますから。……』

『あゝ、此處なら、靜かで好い。』その室が氣に入つたために、いくらかその腹立をまぎらされたやうにして女は言つた。

緣側の硝子戶から、闇の庭を覗いて、

『好い庭らしいよ、母さん。矢張大きな家なのね。』

こんなことをも言つた。

Ｓにしても、かうして一緖に旅行してゐる以上、いつまで怒つてゐる譯にも行かなかつた。それにやがてやつて來る歡樂といふものが、かれに取つては大きな事實であつた。この歡樂のために、またさうした場所でなければ互に本當に怒つたり笑つたり泣いたりまたは苛めたりすることが出來ないので、――否、むしろさういふ風に男と女との間柄が出來てゐるので、そのために、十のものなら八九分までそのために、かうした馬鹿な詰らないことをＳは演じてゐるのであつた。自己の腑甲斐なさを罵りながら、いつもずる〳〵とそつちの方へと惹かれて行くのであつた。『だつて重いものを人に持たせて何かのんきさうに話したり何かしてゐるから、腹が立つさ。』もつと深い理由があるのではあるが、それは言葉に言ひあらはすことが出來ないので、Ｓはこんなことを言つて後には笑つた。

『でも、何が何だかわからないので、私はまた何うしたのかと思つた。』

『貴方が勝手でさうなすつたんだもの。』

『だつて、U屋に泊らうと思つたから。』

母親は母親で、

『何うしてまたあんなところで怒つたのかと思つた。』

かうした會話が繰返されたのは、もう餘程後であつた。Sも怒れば、女も怒つて、互に顏を膨らせた中で、母親一人が氣が氣でないといふ風で困つてゐた。

かれ等はこの室に來る前に、二つ三つの室を見て來た。その二人の互に怒つてゐる中で、母親は種々そのことを心配してやらない譯に行かなかつた。ある室では、『こゝは暑苦しいわ。こんな室に泊る位なら、別の家に行く方が好い。』かう腹立の飛沫を見せて、番頭のゐる前で女は言つた。ある室では、『此處は好いけれど、一間づかひね。何んな室でも、もう一間なくつちや困るから。』かう母親に言つた。

番頭は飲込んだやうに、ぴよこ〳〵頭を下げたが、『それなら、少し遠くて御座いますけれど……奧に二間づかひのところが御座いますから。』かう言つて、庭の植込の中を通つたり、敷石の上を傳つたりして、母屋からは遠く離れたこの室へと案内されて來た。

上り口の二疊に電話がかゝつてゐたが、番頭は、『いゝえ、此方でも、別に御不自由は御座いません。

『何うしてだか知らない。』女も矢張怒つたといふ風で、其儘、そこにころがつてゐる信玄袋を抱へて、
『だから、さつきの車屋にお賴みなさいと言ふのに……。好いわ、母さん、私が持つて行くから。』かう言つて、女はそれを下げてその向うに連つてゐる大きな旅舍の方へ歩いて行つた。
『何うしたんですか？』
かう傍に寄つて來て母親が言つた。
『何うもしやしない。』
『重いでせうから、それで車をと言つたんですけど……。まア、此處で怒つたつて爲方がない。さア、いらつしやい。』
とSの袂を執つた。
實際、そこで理由なしに怒つてゐたつて爲方がなかつた。Sは急いで歩いて、思ひ返して、女の手から信玄袋を取らうとした。しかし女は渡さなかつた。で、お互に面白くない顏を明るいU屋の店に並べて、『入らつしやい。』といふ聲に迎へられた。

四

『だつて、重くつて肩が拔けさうだつた。』

『勝手にするが好い！』
Sはいきなり肩にしてゐた重い信玄袋をそこに放り出した。
信玄袋は二三間とんぼ返りを打つて向うに轉つて行つた。氣が附くと、そこに小さな橋がかゝつてゐた。
『何するのさ！　貴方？』
『だツて、重くつて、しやうがないや。』
『だツて、此處に放り出して何うするの？』
『勝手にしろ！』
『怒つてゐるの、貴方？』
『…………』
默つてSは橋の袂に立つた。
それを見た母親は、
『何うしたの？』
『怒つてゐるのよ。』
『何うして？』

て行つた。

此處に來ると、不知案内のSはいくらか躊躇せずにはゐられなかつた。Uときめたやうなことを言つては來たが、そのU旅館が何處にあるのだか、またそれが果してこの町での好い旅館だか何だかといふことが疑はれ出して來た。Sは一軒一軒旅舍を覗くやうにして歩いた。

さつき女達の言つたT旅館といふのがそこにあつた。大きな三層樓であつた。Sがぐづ〳〵じてゐると、やがてあとから追ひついた女達は、

『さつきのは此處だね、好い旅籠屋ぢやないか。』

『さうだね。』

などと言つてゐるのがSの耳に入つた。

その時には、荷物の重さで、Sの肩はもうめり込みさうになつてゐた。腹が一時に立つて來た。

『何處です？　Uと言ふのは？』

かう傍に來て女が言つたが、それがまたある反抗をSに與へた。

『知らんよ。』

『知らんぢや困るわねえ。だから、さつきT屋にしたらつて言ふのに……。T屋つて大きな旅籠屋ぢやないの？』

そしてすたこらと歩いた。

何か話しながら、女達が矢張小刻みに歩いて來るのが後に聞えた。

『馬鹿々々しい。もう本當にやめだ……今度こそやめだ……。このために、この馬鹿々々しいつまらぬことをやつてゐるために、何んなにくだらない苦しみや不便や力の消費をやつてゐるかわかりやしない。そのために、世間からもよくは言はれない。家庭にもつまらぬ波瀾を起してゐる。何うせ、何うにもなりやしないんだ。今度こそはヤメだ。』

かう思ふと、すぐそのあとから、『だけど、今別れるのは殘念だ。もう少し引張つてやらなければ、餘りに馬鹿々々しい。』といふ念が起つて來た。いつもの未練だと思つて、Sはそれを強く押へた。

さびしい川に添つた道が續いた。その川は綺麗な水であるか、それとも汚ない溝のやうな水であるか、それはわからないが、ところ〴〵に灯がチラ〳〵と動いて映つて、小さな舟の岸壁にかゝつてゐるのが微かに見えた。もうすつかり夜であつた。向う岸を誰か話して通つて行く氣勢がした。

川に添つた道は折れ曲つて、やがてその行き詰つたところに、灯が、美しいはなやかな灯がかたまつてごちや〳〵になつてゐるのが見え出して來た。其處には賑かな湯の町の氣分がそれとなく漂つて、大きな旅舍の三階建の家屋が、その明るい灯の中に層をなして並んでゐた。鼓を打つ音が高く聞えて來た。

かれ等は同じ狀態を持續して、Sを先に、女と女の母の黑い影を後に、次第にその明るい町へと入つ

のである。さういふこともSにはよくわかる。自惚でなしにわかる。だから、難問題である。
この難問題をもう一年以上もつゞけてやつて來たことをSはをり〳〵頭でくり返した。
時にはさつきも思つたやうに、母親といふものに對しても、Sはいろ〳〵な疑惑を抱いた。しかし母はすべて女の味方であると言ひ切つて了ふことは出來なかつた。時には味方であり、時には敵である。この旅行では、母とSとの考へが合つて、互に味方同士のやうな氣分になつてゐるが、また一方から考へると、すぐ敵になり得る要素を十分に持つてゐる。で、旅に出た初めの日は、女も女の母ものんきさうな顏をしてゐた。また離るべきものに漸く離れた心安さのやうな氣分に三人は三人とも浸つてゐた。しかし注意深いSの眼は、半ば疑惑とか邪推とか言ふものも手傳つてゐたでああうが、女の心の次第にNに向つて色濃くなつて行くのを見遁さなかつた。昨日も何處かで女はNに宛てた端書――ぢかにNに當てないまでもNにすぐ通ずることの出來る或るものに宛てゝ端書を書いたに相違なかつた。
Sはその端書の文句を想像して赫とした。

三

近いと思つた町は割合に遠かつた。停車場からつゞいた灯は、川のやうな所に行つて暫し途切れた。
Sは段々信玄袋の重さを感じて來たので、蝙蝠傘をその袋の太い糸の中に通して、それを肩にかけた。

とをいつまでしてゐたつて爲方がないとも思つてゐる。また女に對しても何うにもならないことを知つてゐる。ちやんと自分では理解してゐる積りである。それでゐながらをり〳〵眞劍になつて、何うしても女を自分のものにしなければならないと思つたりする。それもNといふ手剛い競爭者があるからであらう。別れるにしても、少くとも、女をもう少し自分のものにしなければならない。そして自分のものにした上で、突放すなり自分の占領物なりにする。それはその時になつて考へれば好い。兎に角、今は別れることは厭だ。馬鹿々々しいけれども、何とも爲方がない。かういふ風にSは考へて、今度の旅行にも一緒にやつて來た。

　不思議な本能の力と言つて好いのか、何と言つて好いのか知らないが、Nといふ者がまともにかれの前にあらはれて來てから、女に對するSの感情は熱く熱くなつて來てゐた。今はかうした女を何うしたつて仕方がないといふことは問題ではなしに、兎に角女をもう少し此方に引張寄せなければならない、といふことが問題になつてゐる。しかしこの問題が頗る難問題である。女の方から考へて見ても、Nにその心のすべてを捧げてゐるといふわけではない。もしさうならもう問題はないが、かうして離れて旅に出て來るところを見ると、（Nは旅行中には東京にゐなくなる筈である。）Sにも無論その心を分けてゐる。Nに離れたい、離れたいと女の心でも何處かではさう思つてゐる。だから、これを反對にしてNの位置にSが居り、Sの位置にNが居るならば、女は矢張かういふ風にして離れたSを思ふに相違ない

馬鹿な愚かな所業をしてゐることをSは心から痛感した。これが女でなかつたなら、友達か何かであつたなら、初めて旅して行く溫泉場に非常に多くの興味を見出すことが出來たであらう。面白い樂しい氣分でこの夕暮の灯の多い町の氣分に浸つたであらう。また、もし一人でやつて來たのなら、手帳に旅の歌の一つや二つを書きつけるやうな靜かな氣分でこの町に入ることが出來たであらう。かう思ふと、度し難い女達の虛榮と薄つぺらな贅澤とがすぐ思ひ出された。かれ等は方外な茶代を店に出した上に、女中にも番頭にもそれぞれ饅頭を握らせた。ちよつと荷物を持つて貰つた男にも方外の金をやつた。かれ等は世間を知らない癖に、知つたやうな顏をして、襷の手をした女中に、一圓の饅頭をやつて、それを吃驚させて喜んでゐた。

勿論、その金はSばかりが出してゐるわけではない。何うかしてNと手を切らせたい爲に、母親がSに言つて、女を一緒に旅に引張り出したのであるから、母親もその負擔の半を持つわけになつてゐる。しかし何の彼のと言つても、矢張Sの負擔は大きくなり勝である。Sは旣に三〇で使つた金のことなどを考へた。『馬鹿々々しいな、本當に――』かうSはまた思つた。

一方離れられない女の力といふことが痛感された。Sは決して捉はれてゐない積りである。こんなこ

客の荷物を停車場から運搬する四角の荷車である。

女は寄つて來て、

『今、あそこで訊いたら、T屋ツて言ふのが好いんですツて……。すると、丁度、好い處に、この車屋さんが來たんですよ。T屋のですツて。丁度好いから、その荷物を載せて行つてお貰ひなさいな。』

『好いよ。』

『何故……。』

『だつて、無闇な旅籠屋へ泊れやしない。好いよ。俺の行くところへついて來れば好いんだよ。』

Sが歩き出すと、

『ぢや、好いのね。』

『うん、好い……。』

この『ぢや、好いのね。』の中には、女にも既にグッと來てゐる氣分がそれと知れてゐた。Sは既に度度この『ぢや、好いのね。』に熟してゐる。『ざまを見ろ!』かうSは思ひながら歩いた。

荷車はガラ〳〵と平氣で三人を掠めて通つて行つた。

でもう三日目であつた。しかしSは案内記や何かで、いくらかこの溫泉町のことを知つてゐた。大きな新築の浴槽のあることをも、海近いカラアを持つてゐるといふことをも、Uといふ旅館が好いといふことをも……。

『何ッて言ふ家でしたつけね？』

『Uだよ。』

『そこは好いんですか。』

『好いッて言ふんだよ。』

しかし女は不安心だといふ風にして、後れて步いて來る母を待つて、何かこそ〳〵話し始めた。このこそこそ話が、――ともするとS一人を疎外したやうな形を示して見えるこの二人の話がまたかれを激昻させた。

Sはすた〳〵と步いた。

不圖氣がつくと、女達は旣に七八間後になつてゐる。『馬鹿な奴だ。此方を信用しないで、旅籠屋の名でも聞いてるんだらう。人にこんな大きな荷物を持たせて。……』かう思つたが、何うすることも出來ないので、Sは立つて待つてゐた。

車の音がガラ〳〵やつて來た。

さうした言葉は既に度々經驗して知つてゐた。さういふ時には女は反抗的に、全身の力を出して、赤い顏をして、齒を喰ひしばるやうにして、一生懸命にそれを持つて歩いた。また、本當から言つても、男の身として、車のない場合、又は汽車に乘降する場合、それを持つてやるのは當然であつた。しかし女のかげにNがゐる爲めに、その當然も當然と思へないやうな場合が多かつた。

『だから、さつきの車を呼べば好かつたのに。……』

かう女が言つた。

『だつて……向うへ行つちやつたぢやないか。』

『すぐ呼べば來たんですよ。』

『なアに、あれは、客がちやんとついてゐたんだ。』

また默つて歩いた。

女の着替、女の母の着替、それにかれの荷物、殊に今日は初夏の日影がほか〳〵暑いので、途中で女もSも共にコオトを脫いで、それを無理にその中に押込んだので、その信玄袋は蛇の腹のやうにふくれて大きくなつて、今朝持つた時よりも、一層の重味を加へてゐた。

この溫泉のある町は、かれ等に取つては、すべて皆な初めてゞあつた。何處に何ういふ旅館があり、何處に何ういふ料理店があるかを知らなかつた。かれ等は遠く遠く來てゐた。東京を發つてから、今日

Ｓは多少昂奮狀態になつてゐた。馬鹿々々しいといふ心持、とても完全に自分のものにすることの出來ない女に尠からぬ犧牲を拂つてかうして贅澤な旅行をしてゐるといふ心持、自から自分の愚さを罵るやうな心持、さうとちやんと理解して居りながら、しかも、かうして矢張引張られてゐるといふやうな心持、中でも女の心が絕えずＮに向つて波打ちつゝあるといふことがかれの心を激昂させた。それは旅行してゐる途中の一言一行にも絕えず名殘なくあらはれて見えた。その言葉の端々にも、その眼の輝きにも、をりく〳〵茫然と何か考へ込んでゐる顏の表情にも……。『そんなに氣になるなら歸つたら好いぢやないか。』かうＳは言ひたい位であつた。しかし又一方ではそれをすつかり客觀して、戀に落ちた女のさうした狀態を尤もだと思ひ、またそれを何うかして自分の方に引張るには、かうした心の難局に處する十分な寬容と同情とが必要だなどとも思つた。かれ等の旅行は、決して餘所目で見たやうな羨ましいものでもなければ、また樂しいものでもなかつた。旅に出て、一日經つか經たないのに、Ｓは既にその重荷に惱まされてゐた。

『重いでせう？　持ちませうか。』

今度は女が言つた。

『好いよ。』

Ｓはすたく〳〵步いた。持たせれば、持たせたて、こんな重いものを女に持たせたといふ顏をする癖に。

芍藥

一

女と女の母とSとは、日がとつぷり暮れてから、溫泉のある町の小さな停車場へと下りた。人がぞろ〳〵とかれ等の前を通つた。それから荷車も、運送車も、乘合馬車も、旅客の荷物を旅店へと運ぶ四角な車も……。前には賑かな空氣の漲つてゐるらしい町の灯がそれと遠く指さゝれて見えた。

三人は默つて步いた。Sは大きな信玄袋を重さうにして持つて先に立つた。それにつゞいて小さな包を持つた女、少し後れて女の母親は小刻みな足をちよこちよこ運ばせた。

『重いでせう。』

かう女の母は後から言つた。

『…………』

Sはすた〳〵步いた。

『二組（ダブルスリー）の三人！　面白いですね。書けますね。チエホフか何かの短篇にでもありさうですね。』

こんなことを言つて笑つた。MもTも爲方なしに笑つた。

『停車場へ引返しても、まだ一時間ありますね。何うです。歩いて、もう一つ先のA停車場まで行きませんか。』
かれは平凡な今の停車場に戻るよりも、かれが一昨年來て一夏を過したM村の跡を見たいと思つたのであつた。
『間に合ひますよ。まだ一時間と少しあるから。……』
『なら、さうしても好い。』
『さうすれば、CやBの家の前も通るから、自然様子がわかる。……』
『さうしよう。』かうTは言つたが、Nを顧みて、『君は歩けますか。』
『餘程あるんですか。』
『なアに、一里と少し。……』
『なら大丈夫ですよ。』
で、三人はさうすることにして、それには少しは急がなくつてはならないと言つて、山畑から松林に添つた路を俄かに早く歩き出した。ペンキ塗の測候所の洋館の上には、半晴半曇を報じた赤い白い天氣豫報の旗が靜かに靡いてゐた。
Nは思ひ出したやうに、

『なら、上諏訪へ行けば、何處かにゐるにはゐるな。』

『大抵逢へるでせうがね。』Mは皮肉に笑つて『逢へなくつても好い、もう……。』

『兎に角、かうして此處に鼻をあつめてゐても爲方がない。それに腹も減つて來た。上諏訪まで行かうぢやないか。そしてゆつくり温泉にでも入つて遊ばうぢやないか。さうでもしなくつちややりきれない。』

かうTは言つて立上つた。

MもNもそれに續いた。今日は山の上の別莊も、美しい松原も、山花の雜り咲いた草路も、廣く靡き下つたY岳の裾野も、何も感興を惹かずに、初めて來たNにすら、さう大してすぐれたところとも思はれずに、唯田舍の平凡なところとして映つた。別莊の向うの瀟洒な小亭のところに行つて見ても、別に心を惹くやうにも思はれなかつた。

Tの半年ゐた別莊も、今年は外國人が二三人來て一夏過したさうであるけれど、今はそれも歸つて、すつかり戸が閉つて、寂寥が唯あたりを領した。Nだけがめづらしさうにして家の周圍を歩いた。『これですね。よく釣瓶の落ちたといふのは。』などと言つて井戸の前に行つて立つたりした。Tのゐた時の釣瓶とは違つてゐた。

山畠の細い路に入らうとするところで時計を見てゐたMは、

途中考へて來たCに對する細かい感情の齟齬などを持ち出した。『面白い心理的な自然な經過ぢやないか。かういふ目に逢ふ種子はちやんと以前から蒔かれてあるのだ……。だから、Cは自分で勸誘して置きながら甲府などへ行くやうになつたし、僕の方でも、行かうか、行くまいかと躊躇した形が、元はその細かい齟齬から出立して來てゐるのだ。……かうした成行になるやうにちやんと出來てゐるのだ。之は今ばかりではない、かういふことは世間にはよくあるよ。だから、細かい心理と言ふことも大切なことだ。……』Tはこんなことまで持ち出して、いくらか激昂したやうに、また兼ねて考へてゐる思想問題に一つの新しい例を發見したやうにして言つた。

しかしそれはTだけのことで、MとNには別に關係がなかつた。Mは『さういふこともあるかも知れないけども、兎に角、先生達の方だッて、銀行や信用組合につとめてゐる體だから、一日つゞきの休暇を面白く遊ばうと思つたんですよ。電報さへ早く打てば好かつたんですよ。』

『何うも爲方がない……。』

かう傍からNは言つた。

『それにしても、Bは何うしたらう?』

『何でも午前には、そこらにゐて、初茸なんか採つてゐたさうです。矢張、上諏訪へでも遊びに行つたんですよ。』

別莊の戶がピッシャリ閉つてゐるのも佗しい淋しい心持をTに誘つた。

留守居の老爺は果してTの想像した如く、『また來たか、』といふやうな素氣のない顏をしてかれ等を迎へた。生憎村の靑年達と行違ひになつた話をしてきかせても、『さうけえ？　それは都合が惡かつたな。』と言つたきりで、別に氣の毒とも何とも思はないやうな冷たい表情をした。

Tの知つてゐる靑年が一人ゐて、それがいくらかちやほやして呉れたけれども、それとて何うにもならなかつた。

老爺はTが先に立つて雨戶をあけ出したので、爲方がないといふ風にして、手傳つて二三枚明けたが、それも面倒臭さうに、または監督者からの何の許可も命令もないのに、いかにTが半年その近所の別莊にゐて、顏馴染であつたとは言へ、珍客のやうにすつかり開放して歡迎して好いかわるいかわからないやうな態度を見せた。それに、折角明けて見た處で、この曇天では、山も眺めることも出來なかつた。Tも好い加減にして雨戶を明けることをやめた。

汚い火もない安煙草盆、薄つぺらな座蒲團、出がらしの番茶一二杯、それがかうして遙々やつて來たかれ等三人を迎へる唯一の歡待であつた。『何うも爲方がない、先生達がゐないんだから。』かう言つてあきらめて見てもあきらめられないのは、かうした處に大騷ぎをして、長い旅をして、殊にMなどは細君にまで不愉快な思をさせて、わざわざやつて來たことであつた。Tは終にはそれに堪へかねたやうにして、

『僕等の顏を見さうなもんだつたがな……。』

『爲方がないさ。これから別莊に行つて見て、そして都合でこの次の汽車で上諏訪に行つて泊るサ。』かうTは元氣をつけるやうにして言つた。しかし青年達がゐなくては、別莊に行つて見たところで別に面白いことのないのはTにもよくわかつてゐた。そこに馴染の留守番の老爺がゐるけれども、かれ等が行けば雨戸位あけてくれるけれども、とても長くかれ等を引留めるほどの興は湧かないにきまり切つてゐる。つまりいろいろに想像してやつて來た一日の行樂もこれですつかり水泡に歸したのである。それに、Nに取つても生憎なことは、雲霧が深いので、そのすぐれた眺望をも十分に把つて示すことが出來なかつた。

兎に角しかし別莊にでも行つて見なくては、それこそ來た效がないので、かれ等は詰らなさうにして歩き出した。ある畠からは、『またやつて來たかな、東京の衆！』と言つたやうな顏をして、並んで行く三人の後姿を見送つた。

別莊のある位置まで登つて行つても、雲は深く、矢張あたりの眺望は駄目であつた。Y岳も、K岳も、N岳も、釜無の谷すらそれと髣髴することが出來なかつた。Cの手紙には何處の路傍の松山にでも入りさへすれば初茸が出てゐると書いてあつたので、せめてはそれでもと思つて別莊に行く途中の松林の中をTはさがして見たけれども、それさへ不馴の故か、容易に見出すことは出來なかつた。

かつた。曾て興を惹いた山村のさまも、山も、其處に住んでゐる人民達も、平凡な唯の田舍に映つて見えた。

Tは種々なことを考へながら歩いた。これも自分の躊躇逡巡が、または最初からぴたりときめて了はなかつたことが、また更に溯つてCに對してかれが持つた細かい感情が、かうした結果になつて行つたのである。否、その細かい感情の齟齬があつたればこそ、これまでにも行かう行かうと思ひながら違約したり、思ひ立つてはまた思ひ留つたりしたのである。またCにしても、Tからはそれに就いては何とも言はれなかつたけれど、その細かい感情の齟齬の暗示をそれとなく受けてゐて、來遊を促して置きながらも、それに重きを置いてゐなかつたのである。つゞいてかれはこの旅行の不自然に始められたことを思はずにはゐられなかつた。Mの家庭や細君のことなどもつゞいて思ひ出された。

青年達がゐなくては、此處は、そんなに大騷ぎをして、一夜蚊に寢ずに過したり、混雜した二等室で不愉快な思ひをしたり、または退屈な退屈な長い旅をしたりして、わざわざやつて來るほどのところではなかつたのである。しかしそんなことを今更考へたところで爲方がなかつた。

『Aだけでも好いから、あそこでつかまへれば好かつた。』

こんなことをMは言つた。

『だツて、てつきり迎へに來たと思つて安心しちやつたもんだから。』

二人の立つて待つてゐるところへと歩いて來た。

『矢張さうだ。見ないんだ。電報は留守に行つたんだ。Cは今朝の一番で甲府へ行つた。明日も歸つて來るか何うかわからない。Bは午前にはそこらにゐたが、これも何處かに遊びに行つたらしい。Aは今上諏訪に行つたんださうだ。……』

『さうか。』

Tも落膽して了つた。

『それにしてもCは甲府へなんか何しに行つたんだらう。人を誘つて置きながら。……』

『返事はないし、もう來ないと思つたんだね。先生達も、平生は銀行に出てゐて、たまの二日つゞきの休みだからね。これはもう東京からは來ないと思つて、ゆつくり甲府近所の湯村溫泉にでも行くつもりで、郵便局の人と一緒に今朝出かけて行つたんだね。』

『フム。』

Tもかう言ふより他爲方がなかつた。

幸ひには雨は降つてゐなかつたけれど、路も汽車で見て來た土地よりもひどくなつてゐなかつたけれど、一行は落膽せずには居られなかつた。昨夜の汽車で來さへすれば好かつたとか、電報をもつと早く打つて置けば好かつたとかいろいろに言つて見たところで、それは皆な後の祭で何うすることも出來な

た。

　しかしそんなことをしては居られなかつた。Mはずんずん歩いて、その少し先にある郵便局へと入つて行つた。MもTも局の人達には此の前來た時から懇意になつてゐる。そこに行つて聞けば、CやBのことは大抵はわかるのである。

『いよいよさうだ……。電報を先生達見なかつたんだ。』考へて見ればそれに相違ないといふ風に、TはNに話しながら、郵便局を通り越して少し行つた處に二人して立つて、そこからMの出て來るのを待つた。

『さうだとすると、がつかりしちまふな。』

『本當ですね。』

『しかし、BかCか何方かゐさうなもんだがな……。それぢやAは、迎へに來たんぢやなくつて、上諏訪か何處かへ行つたんだな。……それと知つてゐれば、聲をかけるんだツた。……』

『描く行く時には何處までも描く行くもんですな。』

『しかし、本當に一人もゐないとすると困るなァ。』

『本當ですな。』

こんな話をしてゐると、Mは笑を含んだやうな、または詰らないやうな顏をして、郵便局から出て、

づいて下りた。

しかし、ずんずん歩いて行つたAがあとに戻つて來ないのも不思議なのに、プラットフォームの方へ行つて見ても、他には誰も迎へに來てゐる樣子はなかつた。不思議だとは思ひながらも、Aが既に來てゐる位だから、何處かに來てゐるだらうとTもMも思つて切符を渡して構外へ出ると、それと同時に汽笛は鳴つて汽車は動き出した。

誰もゐない。迎へに來たと思つたAも歸つて來ない。一時狐につまゝれたやうな氣持で、Mはわざわざ引返してプラットフォームに行つて見たけれども、汽車の最後の車の動いてゐるのが見えるばかりで、Aも誰もゐなかつた。

『本當にゐたんですか、Aは?』

かうMはTに訊いた。

『確かにゐたんだ……。それぢや僕等を迎へに來たんぢやないのかな。知らん顏をして歩いて行くから不思議には思つたけれど……。』

Mは考へて、『ぢや、電報を見ないんだな、矢張……。』

しかしAは知らなくつても爲方がない。電報を打つたCやBなどとは住んでゐる村が違ふのだから……。それにしても何うしたんだらう。『これはいよいよぐれはまかな。』かう言つてTはわざと大きく笑つ

段々なつて來てゐた。

幸ひなことには、雨も次第に小降になつて、雲の間から、大きなY岳の肩のところが見え出して來た。H驛とK驛の間の八哩もある長いちやうちやうばも過ぎた。

K驛をすぎると、段々なつかしい松原や楢林が見え出して來た。やがてトンネルが來た。それを出ると、深い谷だ。また一つトンネル、その次はF驛、はるばるかれ等の志して來たF驛だ。

山の人家らしい庇や、石を載せた屋根や、踏切や、さうしたものが懐しくMとTの眼に映り出して來た。やがて停車場が來た。

MもTも窓から首を出してあたりを眺めた。しかしそこにはいつもかれ等を迎へに出てゐる青年達の誰の姿も見えなかつた。

不思議にしながらも、まだそれとは知らずに、先の方にでも行つて待つてゐるのだらうと思つてゐると、やがて汽車はプラットフォームを餘程先に通り越してから留つた。

ふとTの眼に、その青年達の一人であるAが風呂敷包を抱へて、ずんずん先に歩いて行くのが映つた。Tは果して迎へに來てゐるなと思つて安心した。今はちよつと見當らなかつたけれど、BもCも何處かに迎へに來てゐるに相違ない。かう思つて、『Aが來てるよ。』と言つてそして汽車を下りた。MもNもつ

『しかし、電報は着いたらうな。』
かうMが突然言つた。
『着きましたとも、もうとうに着いた。』これはNである。
『もし着かなかつたりすると、また着いても見なかつたりすると、それこそこの旅行はいよいよ振つたものになるぜ。』
わざとTが笑ひながら言ふと、
『三人ゐるんだから、一人位は電報を見ないといふことはないだらう。』
かうMは言つた。
雨は益々降つて來た。人は皆な傘をさして歩いてゐる。N驛あたりで見ると路ももうかなりにわるくなつてゐる。人家の屋根も草路も何も彼も濡れて光つてゐる。雲霧は深くY岳の大きな裾野を封じて、折角の好風景も、唯の田舍以上に何等の趣を見せて居ない。『晴れてゐると、君、此處は好いところなんだけれど……』MはNにかう言つて話した。
しかし、兎に角に、雨でも何でも、その目的地に近づいて來たといふことが、かれ等の佗しい心をいくらかは蘇らせた。Mももう午前のやうな詰らない顏をしてゐなくなつた。いくら考へた處で、家の方のことは何うも爲方がなかつた。出かけて來た以上は面白く遊ばなければ損だ。かういふ風な氣分にTも

Mは爲方がないといふやうにして言つた。Tもます〳〵悄氣ざるを得なかつた。三人はまた默つて旅をつづけた。

Sのトンネルを出てから、Mの故鄕があつたりしたので、いくらかはまぎれたが、しかし甲府まで來るのが容易でなかつた。兎に角其處では、かれ等はほつとした。もうあと一二時間でFに行くことが出來ると思つただけでも、始めて呼吸が大きく自由につけるやうな氣がした。其處でかれ等は遲い午の辨當を買つて食つた。

雨が遂に降り出した。

夏ならばさう大した心配するほどのことでもないのであるが、何うもさうした山中の私雨と思つて落附いてはゐられないやうな雨だ。それにそこからFまで行く間は、山巒の美を以つてきこえてゐるところである。生面のNに一々指點してきかせるだけでも、MとTとの退屈な心をまぎらし得るに十分なところである。しかしそれもこの雨ですつかり駄目になつた。それに下りてからのことも心配になつて來た。何うせ、電報がついて、青年達が停車場まで迎へに出てゐるに相違ないから、さう不自由な眼には逢ふまいけれど、それにしても、かれ等の行く山莊までは、その距離が十二三町ある。そしてその間は雨が降ると路がすぐ泥濘になるのをMもTもよく知つてゐる。わびしさがまたかれ等を捉へた。

Mはある繪師の肉筆に成つた扇を持つてゐた。日中は何うかすればまだ暑いのでそれでMは持つて來たのである。それをTは、『こんな扇を平生持つて歩いては惜しいね。』とか何とか言つて、それをMの手から取つて、頻りに玩弄具にしたり、パチパチ言はせたり、それを書いた繪師の半生の不遇を話の種にしたりしてゐたが、Mが向うの空いた席に行つて、額を押へて、體を長く横へてゐる間に、窓の硝子の下のところにふと落して了つた。取らうとしても何うしても取れない。窓の框に支へて、まだ下まですつかり落ちてはゐないのであるが、窓を持上げると其處まで上つて來て、そして何うしても取れない。Mはそれと聞いて、ちよつと起きて來たが、『フム』と皮肉に言つたまゝまた向うに行つて横になつて了つた。Tは何うかしてそれを取らうとしていろ〳〵に苦しんだ。『細い棒見たいなものがあると好いんだがな。』と言つてあたりを見廻したが、それらしいものも見當らなかつた。細いステッキを持つてゐるものもあつたが、あれを借りると好いなどと言つたが、まさかにそれも出來なかつた。さうかうしてゐる中に、ガタガタ窓を上下させてゐる中に、扇はたうとう下の底深く落ちて了つた。『ヤアたうとう駄目になつちやつた。』爲方がないといふ風にしてTは言つた。

Mはまた起きて來た。そしてそこを覗いて見た。

『失敗しちやつた……勘忍して呉れ給へ。』かうTは言つた。

『何に好いよ。』

斷つて來なけりや好かつた。』後悔の念が湧き上つた。やうやくうとうととしたと思ふと、夙起の習慣のTが、『とても寢てゐられない。えらい蚊だ……よく君達は寢てるなア。』と言つて、まだ薄暗いのに前の雨戸をガラガラ明け出した。

電報をFの青年達に打つて、そしてまた旅をつゞけた。

長い長い旅をかれ等は皆感じた。今朝の列車は昨夜とは違つて、すつかり空いてゐて、寢るのも起るのも勝手に出來たけれども、またいかやうにもはしやいで騷いでもよかつたけれど、空がくつきりと晴れないと同じやうに、何處で何うくひ違つたかわからない齟齬が三人の間に出來てゐて、何を話しても、互ひにしつくりと調子が合はなかつた。初めはTもつとめてその不調子を整へるためにわざと種々な話をしたり何かしたが、後にはそれにも勞れて次第に沈默勝になつて行つた。『何うも、頭が痛い。昨夜、丸で眠らなかつたからね。』などとMは頭を手で押へた。

調子が合へば面白く早く通つて行く旅も、かうなると汽車もまどろこしい位に遲く遲く誰にも感じられた。美しいK川の溪谷も、めづらしいT町の眺めも、度々通つて知つてゐるために更に新しい感興をMにもTにも與へなかつた。それでもトンネルを出て名高いS橋の溪潭を汽車が掠めて通る時には、NはMの敎へて呉れるまゝぢつとめづらしさうにそれに見入つた。

『まだ、打たないんだがね。……あそこで打たうと思つたけども、間がなかつた……』

『打つて置かないと、いけませんね。』

停車場を出て、電報取扱所を覗いて見たが、もう夜が更けてゐるので、戸が閉つてゐて何うにもならなかつた。今、打たうとするには、町の郵便局まで行かなければならなかつた。

『明日でも大丈夫だらう。朝、早く打てば、十時には着く。大丈夫だ。向うにも三人ゐるんだから、皆なゐなくなるやうなことはないだらう』

こんなことを言ひながら三人は停車場前に出た。もう彼是一時近くなるので、旅舍でも大抵は寢て、灯の影も見えず、何處が何處だか更にわからなかつた。彼方の家の角に突當り、此方の家の扉に突當りして、漸くかれ等は一軒の旅舍を發見した。そこでは女中がもう仕舞風呂に入つてゐるのを廊下を通る時にかれ等は見た。

酒を飮む氣にもならなかつた。すぐ床を取らせた。室は廣くさつぱりして、さう居心地はわるくなかつたけれど、汽車の音が喧しいのと、蚊がゐるのに蚊帳を吊つて與れなかつたのでかれ等は夜中寢ることが出來ないで困つた。Nはそれでも何うやら彼うやら鼾を立てたけれど、Tもまた夜着で足をくるんで、顏に羽織をかけて、何うやら彼うやらとろとろしたけれども、Mは何うしても寢られないで終夜轉輾した。またしても、失つた愛兒のことや妻のことや世間のことが執念くかれに絡み着いた。『あの時、

と皮肉な笑ひ方をして見せた。

停車場の灯は一つ一つ闇の中に通つて過ぎて行つた。

Hの停車場の一つ手前の停車場に來た時、Mはもうとてもこの窮屈と不愉快とに堪へられないやうに、

『Hで下りやうぢやありませんか。』

『さうだな、窮屈だな。』

『これで甲府まで行くんぢや堪らない。』

『さうさな、下りて泊つて見るのも面白いな。』

Tは不意に思ひもかけない停車場前の旅舍に一夜を過すのも面白いと思つた。

『ぢや、さうしよう。』

『え……』

H停車場はやがてやつて來た。Mは下りてほつとした。Tも面白いと思つた。NはTが切符をあちこちとさがし廻すのを見て、元の客車の中に行つて、そこに落ちてゐたのを拾つて來て呉れたりした。

『相變らずそそつかしいな。』といふ顏をしてMもNも笑つた。

『電報を打ちましたか。』

かうMはTに訊いた。

をして、一等二等を劃つたところに立つてゐた。『何うしてかう込むんですかね。』Nはかう言つてこれも矢張その傍に立つてゐた。

突然その前にゐた大きな鞄を持つた洋服姿の男が、Tの袖を引張つた。そこに腰をかけろと言ふのである。Tは忘れて了つてゐるが、その男はTを知つてゐるのであつた。『ヤア、さうでしたか。すつかり忘れちやつて……』などとTは言つた。いろいろな話が始まつた。NもMも席には就くことが出來なかつたが、その男の鞄や何かに腰だけかけることが出來た。

汽車は闇の中を走つた。

深切な男ではあるけれど、何處か尊大振つたところのある、またいやに覇氣に富んでゐるその男とTとの會話は、Mに惡感を起させた。それに、家のことがMには氣になつた。來なければ好かつたと思つた。それに、この線路はMは度々往來した處なので、何も彼もすつかり知つてゐて、更に興味を惹くやうな處はなかつた。F地方だッて、青年達がちやほやすればこそ面白いが、それ以外にそれほど多く心を惹かなかつた。家では妻は悲愁に包まれてゐる。かうした旅をする位なら、妻と一緒に海の方に行けば好かつたとMは思つた。しかし今更爲方がないので、Tとその男の話をするのに調子を合せてゐたが、窮屈と不自由と不愉快とが益々Mを壓迫した。初めは深切に腰をかけろと言つて勸めて呉れた鞄を、段段男が氣にし出して、もしや中のものが壞れやしないかといふやうな態度を見せた時には、Mは『フム』

しかし、兎に角一度家に歸つて出直して來ると言つて、MとNとは怱々に出かけた。

Tは一寢入して起きて出かけた。停車場に行つて見ると、まだ四十分位時間がある。MもNも來てゐない。飯を食はずに來た酒のあとの腹が減つてゐる。Fの青年達に電報を打たうとは思つたが、MとNとが來てからでも好いと思つて、もしひよつとかしてMもNもやつて來なかつたら行くのをやめるかも知れないと思つて、兎に角停車場前の安西洋料理に入つて、そこでライスカレイとビールとを命じた。ところがビールは來ても、ライスカレイは容易にもつて來ない。幾度も催促して、漸くそれに有り附いて、停車場へ引返して來ると、もう發車時間である。ふと見ると、MとNとが頻りにTを搜してゐる。『ヤア！』と言つて、急いで切符を買つてプラットホームへと下りた。

汽車はもう來てゐた。見ると、非常な雜沓である。三等客車にはとても乘れない。爲方がないので二等にすることにして其方に行つて見たが、そこも一杯である。まゝよ、乘りかゝりの船だ。一夜中立つても行かれない。そのまゝ一等を覗いて見る。そこも一杯である。MもNも、Tもちよつと厭氣がさした。殊に、細君を一人置いて來たMには、その念が强かつた。しかし今更やめにするわけにも行かなかつた。

『まア、爲方がない。』かう言つてTは下駄を重ねて其處に腰をかける用意をした。

『この汽車は甲府までは空きませんよ。』─故鄕を其方に持つてゐるMは、かう言つて詰らなさうな顏

中に出たり入つたりしてゐたが、また出て行つて、『ぢや、一回だけで好かつたんだけども、皆な貰つて置くか。何うせ書くんだから。』こんなことを言つてその原稿料をTは受取つた。

『行かうぢやないか。』Tは急に乘氣になつた。『細君には氣の毒だけども、一日二日位好いやね。行かうよ。行く、行くッて言つて違約ばかりしてゐるんだから。……ねえ、N君、海岸行を山行に變へても好いぢやないか。』

『僕はそれでも好いんです。』

とNは言つた。

『ぢや、行つて遊んで來るかな。』Mも醉つて好い心持になつてゐるのでかう言つて應じた。『でも、隨分、不意ですね。……今日は君の家にも來る積りぢやなかつたんです……N君に引張出されて其處等散歩する積りだつたのだが……』かう言つて考へて、『行くとすれば、今夜の十一時ですね。……それまでにまだ時間があるでせう。』時計を見て、『N君、それまで、ちよつと家に歸つて來ようぢやないか。』

『歸つて來られますね。』

『來られるとも……まだ三時間の上ある。』

『好いぢやないか。かうして飲んでゐて、此處からすぐ行かうぢやないか。その方が好いよ。』かうTは言つた。

三

人

前にも行くと言つて度々違約してゐるので、行かうか知らんとも思つた。しかし一人では詰らないやうな氣もした。先に行着けば屹度面白いが、行くまでの途中が大變だなどとも思つて、躊躇して、返事も出さずに置いた。

『さア、行つて見ても好いんだけども……』Mも滿更氣はないこともない。しかしNと約束した海岸のこともあるし、愛兒の死後のんきに家を明けて旅行三昧に耽つてゐるのも妻に氣の毒だと思ふ心もあつて、それはNと海岸行きの話をした時にも矢張さういふ氣がしてはつきりきめずに置いたのであるが、そのため煮えきらぬ曖昧な返事をして頻りに盃に口を當てた。Tもまたすつかり行くとはきめてゐないので、敢てまたそれを迫らうともしなかつた。NはNで、Tが行き、Mが行くなら、かねて行つて見たいと思つてゐる地方のことだから、海岸行きを其方に變更しても好いとは思つてゐた。しかしNはそれに就いては何も言はなかつた。

F地方の山の美しい話をしたり、そこにゐる青年達の話をしたり、今行けば初茸狩が出來る話をしたり、Mの愛兒の死を慰めたり、文壇の話をしたりしてゐる中に、酒は段々進んで、興が更に加はつて來た。と、不意に、玄關の鈴が鳴つて誰かが訊ねて來た。

Tは立つて行つて、『ハア、さうですか、S社からですか。……わざ〳〵持つて來て呉れたんですか。や、一回だけでよかつたんだ。……こんなにはいらなかつたんだ。……』などと言つて、受取を書くために室の

三人

NとMとは青山から代々木の方へと散歩した。そして途中で急に思ひ立つてTを訪問した。幸にTはゐて、酒など出して歡迎した。Mは最近に愛兒を失つてまだ日數が經つてゐないので、何處となく悄氣てゐる。今日、Nが散歩にMを伴れ出したのも、實はそれを慰めるためである。それに二人の間には丁度明日から日曜と秋季皇靈祭と休みが二日つゞくので、それを利用して何處か海岸へでも行つて見ようかといふ約束がまだきまつたと言ふではないが出來てゐる。これも矢張NがMを慰めやうとして思ひ立つたことである。

處が、Tと酒など飮んで話してゐる中に、MもTも知つてゐて、Nも曾て一度は行つて見たいと思つてゐるF地方の青年達から、二日つゞきの休暇を利用して遊びに來ないかといふ勸誘狀がTの處に來てゐるのをTは持出してNとMとに見せた。それにはMも一緒に誘つて來て奥れゝば一層嬉しいと書いてある。そしてもし來て下さるなら、前の日に手紙なり電報なりで知らせて下さいと追書してある。Tはこの

家では、河川工事の客が來て一夜飮んで騷いで行つたり、K町の役場の人達が來て泊つたり、學校の先生達が集つて會をしたりした。新建の離座敷のわきにある海棠は美しく花を着けた。

山からは久しく音信がなかつた。いくらでも工面がつけば金を送つて來る筈の最初の約束も未だに少しも實行されなかつた。思詰めては、お元はいつも赫とした。

『暇を貰つて、その中私、ちよつと行つて來なけりや……』

かうお元がお光に言ふと、

『一日二日行くのは好いがね。今は忙しくつて困るねえ。』

『でも……』

『その中たよりがあるよ。そんなに心配したッて仕方がないよ。』

慰めるやうに一面また輕く冷かすやうにお光は言つた。

お元はそれでも客から貰つた細々した祝儀を丹念に貯めてゐるので、それがもうかなりの額になつてゐるので、それを持つて是非出かけて行かうと思つた。お園がゐることを考へると、二里や三里の峠は何でもない。行つてその惡魔の、鬼の胸倉をつかんで、恨のありたけを言つて、そして今度こそ見事に此方から捨てゝやると決心した。

た。川も冬の頃の深い冴えた紺青の色とは違つて、どんよりと鈍く霞んで舒やかに流れた。やがて名物の若鮎も上つて來さうに思はれた。四面に連る山々は依然としてまだ深雪に閉されてゐるのではあるが、それが天末の霞の加減で、見えたり見えなかつたりした。空氣の割合に澄んだと思ふ晴れた日には、ぼんやりと薄白く山の雪が霞に包まれて見えるばかりで、細かい襞や深く入り込んだ谷などはよくわからなかつた。

その昔の旅籠屋でも、町でも、別にこれと言つて變つたことはなかつた。例の波子といふ藝者はその時きり再び姿を躱して何處に行つたかわからなかつたが、姉と姉の旦那が工面して、その抱へた旅籠屋の親方には半金だけ返して、あとは少し待つて貰ふことに話をつけた。再び藝者を置かうといふ話も出なかつた。

お光とお元とは、矢張そこで働いてゐた。午前十時頃になると矢張二人が代る代るポンプを押して、風呂に水を汲み入れる姿がくつきりと朝の空氣の中に見えた。主人と主婦とはせつせと厨に出て働いた。

思ひ詰めたり、あきらめたり……深い悲哀に閉されたり元氣に働いたり、又は今日にも山に行つて男に逢つて來なければと思つたり、いつそ東京に行つて一卒抱しやうかと思つたりしても、何うにも彼うにもならずに、同じやうにして日は日と重なり、夜は夜と續いて行くのであつた。土手に出て行つても、此頃では、山も見えないのに失望してお元はいつもすごくと歸つて來た。

くそれに見入つた。この地圖があれば、女でも行けぬことはないが。……てつきりお園と一緒に行つたに相違ないが……この地圖が欲しい、欲しい。しかし、此處等では、こんな詳しい地圖は買はうたッて賣つてゐないし……かう思ひながらかの女は細い路のついてゐるAからの路筋を見た。

『お元さァん。』

帳場の方で呼ぶ聲がした。お元は慌てゝその地圖を疊んで、違ひ棚の上の小さな押入れの中に入れた。明日、お客が忘れて行つて吳れゝば好いと思ひながら……。

五

寒い寒いT川の畔にも、暖かい春はやがて來た。土手にはなづ菜や嫁菜が出るので、町の女達は籠と小刀とを持つて、摘草に幾組もやつて來た。その旅籠屋の緣側から見ると、赤いメリンスの帶やら白い足袋やらが給のやうに見えた。

連亙した山々からは、矢張風は吹くには吹くが、冬の間のやうにもう寒くはなく、時には又のどかな、穩やかな、本當に春が來たと思はれるやうな日もあつた。梅は既に盛りを過ぎ、緋と白の桃が雜り合つて美しく垣を綴つた。一夜降つて晴れた雨あがりの朝は、際立つて靑くなつて行く野がなつかしまれた。從つて土手の上からの眺望も、もう冬の寒い頃に見たやうな面影は何處にも見出すことが出來なかつ

『此處がK町、此處がA、そこから二里位……ある……ある。W、えらいところだな。ひどい山の中だな……。』

『女には中々行けないやうなところですね。』

『さア、女にはちよつと難かしい……K町から都合四五里あつて、おまけに大きな峠がある。』

『これが峠ですか。』

かう言つて、コントルの曲折の多く入つてゐる處をお元は見た。

『男がゐるんだな、矢張……。』

『さうぢやないんですよ。親類があるもんですから。』かう言ひながら、猶頻りに見てゐるので客は、『いるなら明日まで貸してやるから持つてお出……』

『いゝえ。』

かう言つて、借りたいとは思つたが、返して、お元は酒の酌をした。

客はやがて醉つて、二人ともそこに轉寢をした。で、別室に床の支度をして、其方に伴れて行つたが、寢てから此方の一間に來て見ると、鞄だけは持つて行つたが、地圖はさつきわきに置いたまゝになつてゐた。お元は喜んでそれを手に取つた。

忙しい二階の用事があるのを知つてゐながら、お元はそのW村のある地圖をランプの下に展げて詳し

地圖をひろげて頻りに何か話してゐたが、室が狹いので、後には、餉臺を傍らに寄せたりして、地圖をつなぎ合せた。

その地圖が午前の中からお元の眼に留まつてゐた。

お元は覗くやうにして、

『S町あたりもあるんですか、その地圖に……。』

『S町、これにはないが、別に持つてゐるのにはあるよ。』かう言つて、『見たいのかえ？　男でもゐるのかえ？』

『さうぢやないんですけどもね……。』いくらかお元は顏を赧くして、『あるなら、ちよつと見せて頂けませんかしら。』

昨日、山にゐる男から手紙が來て、Aから二里ほどあるWといふ村に移つたといふことが書いてあつた。でお元は、肥つた客が戲談を言ひ言ひ、二三枚つゞけてひろげて呉れた五萬分の地圖に頭を寄せて、

『Wといふところがありますかしら。』

『何處だえ。』

『K町からもつと奥です。』

『ぢや、此方でなくつちやない。』かう言つて、客は別なのを出して、そこに展げて、

姉の家に來て、それから大騷ぎ、大悶着、後には家の親方まで出かけて行つた。何でも女をそッと遁がすとか何とかで、今朝も大騷ぎをしてゐた。

その話をすると、

『騙してかくれてるたんだな、此處に……。何うも、あゝいふ容色よしがこんな町にゐるのはめづらしいと思つた。仕方がない。他には藝者ッてないんだね。』

『あれ一人きりです。』

『不自由な田舍だなァ。』

仕方がないといふ風で、酒と膳とを早く持つて來るやうに客は命じた。

客はお元やお光を相手にして、三時すぎまで飮んだ。肥つた方は大きな聲で、節も何もない唄などを歌つた。それがすんで歸るのかと思つたら、今夜は泊ると言ふので、別室に床を取らせて夕方近くまで寢た。

ランプがついてから、二人は起きたが、それから湯に入つて、また元の一間に戻つて、かれ等は再び酒を始めるのであつた。二人は主として鐵道の測量の話などをした。それは一度出來かゝつて、中途で挫折して、株主がすつかり損をしたといふ話であつたが、近頃再びその話が始まつて測量の仕直しをするといふことであつた。二人はそれに關係してゐるらしかつた。

『あるかも知れません。きいて見ませう。ぢや、あらひに、吸物、あれば小鳥鍋ですね。』
『さうだ、さうだ。』
かう言つたが、二人は鞄から書類やら地圖やらを出して何か頻りに話し初めた。
再び戻つて來たお元は、
『小鳥は寒鳩があるさうです。』
『鳩か。雉子よりはまづいが、雉子がなけりや仕方がないや……』かう言つたが、もう一人の客の方を見て、『聘ぶかな、奴を。前祝ひに此間のを。』
『よからう。』
『藝者ですか、此間の……』かう言つてお元は躊躇した。
『何うかしたかえ？』
『もうゐますか、何うですか？』
『もう遁げたのかえ、男が出來たにしては早いな。』
『いゝえ、遁げたんぢやありませんけども……。』かう言つたお元は、昨夜聞いた波子の話を思ひ出してゐた。昨夜おそくお座敷から歸らうとすると、路の角に、外套を着た男が立つてゐる。すれ違はうとすると、おいと言つて近寄つて來た。ピストルは持つてゐなかつたけれども、それから男は一緒に女の

の女は來る時に此處の親方と一緒に午飯がはりに饂飩を食つた。その饂飩は旨かつた。S町からK町、そこまで行けば、あとはトロコでAの山の中まで行ける……。お園が何うしても其處にゐるやうな氣がして仕方がない時には、かの女は何も彼も棄てゝ出かけて行つて、散々恨みつらみを言つてやらうかと思詰めたりした。

ある日、午近く、お元とお光と緣側で見てゐると、かねて一二度來て、顏を知つてゐる、何でもこの近所に鐵道を敷く計畫をしてゐる人が二人づれて土手から下りて入つて來た。

肥つた背の高い方はよく女に調戲つたり何かした。

『Sさん、おめづらしい……。』

お光は笑つて迎へた。

『今日は遊びだ。一杯やらうと思つて、この客を伴れて來た。』

こんなことを言ひながら、二人の客は日當りの好い暖かい緣側を前にした一間に入つて行つた。

『何があるね。』

『聞いて來ませう。』かう言つてお元は立つたが、やがて戻つて來て、『あらひか、さしみか、煮肴か……。』

『此間のやうな小鳥鍋はないかな。雉子だッた。旨かつた。』

『さつぱりしてるのね。』
『だから、張合がないわね。』
『その方が男は本當なんだよ。男がべた〳〵女のやうな手紙を書いてよこすもんかね。』
『でもね。丈夫でゐるとか何とかそれつきり書いてないんだもの。』
『それで好いんだよ。』
『さうかしら？』
こんなことを言つてお元は笑つた。此頃ではお元は自分の身の上の話を八分通りお光に打明けて話した。お園のことはぼんやりとは話したが、そつちの方は成るたけ色を薄くして、山で暮した時分の話の方を色濃く話した。お光は國のN町にゐる男の話をした。お元に引かへて、お光はその惚れた男が道樂で道樂で仕方がないことを話した。『お前さんのなんか、困つたつて言つたつて、疑つたつて言つたつて、高が知れてるぢやないの？　それから思ふと、男のことでは、私なんか何んなに苦勞したかしれやしない。』氣丈のお光も後には聲を曇らせた。
お元は時には山に行く途中のことなどを胸に浮べた。あの時山の雪を見てから、お元は時々ひとりで土手に登つた。T町では田や林の中のさびしい道、それから汽車——トロコの少し大きい位のガタ〳〵動く汽車、竹藪の岸に溢れるやうに流れてゐる川、その先がS町の大きな停車場、その停車場前で、か

出て酒を飲んだ男には、やがてお園といふわるい蟲がついた……。

『正男さへゐて呉れたら……。』

かう思ふといつも涙が出た。

でもお元は思ひ出してばかりはゐられなかつた。忙しい用事はあとからあとへとつゞいた。お上さんが、主人が、せつせと働いてゐるのに、自分ばかり手を束ねて、さうした思ひに耽つてゐる譯にも行かなかつた。それにお光に對してもぐづ〳〵思ひ崩折れてはゐられなかつた。

從つて山の中から來る音信は、かの女に取つて唯一の慰藉で、それの來た二三日は、お元は元氣よく働いた。その時には、『いろ〳〵思ふからわるいんだ？』かう思つて、ぐん〳〵用事をすました。

『便があつたね、お見せな。』

かうお光は笑つた。

『あつたッて、便があつたつて言ふばかしだよ。』

『どれ、お見せ……。』

お光は無理に、お元の袂からその手紙を取つて見た。成ほどそれはさつぱりした手紙で、情のあるらしい文句は少しもその上には見えなかつた。用事ばかり書いてあつた。

『ちつともやさしいことなんか書いてなかつたらう。』

床の間には水仙が黄ろく咲きかけてゐた。

お元は深い深い山の中で暮した一年二年ほどの樂しい月日を頭に繰返した。その時分は男の事業はまだ盛であつた。一緒にならない以前にも、伴れられて二三里あるその山の中に入つて行つたことがあつたが、小さい小屋見たいな家、それは林の中を一ところ切り倒したやうなところにある家で、そこで大きな圍爐裏を前にして、あらくれた鑛夫五六人と一緒に男は大きなことを言つてゐた。今に金などは使つても使ひきれなくなるほど澤山取れるやうなことを言つてゐた。そしてそれも滿更うそではなかつた。かれの持つた鑛山はその近所でも最も有望であると言つて人から羨まれた。一面はまたさうした深い山の奥に奮闘して暮してゐるさまが心から男らしくて元氣があつた。それは丁度春で、ぢき近所に太い指ほどある蕨が澤山に生えてゐて、取つても取つても取りつくされないほどであつた。山櫻などが見事に咲き、清い水がさらさらと流れた。お元の心はすつかり男の方に靡いて行つた。で、その翌年は、かの女は、とめる人もあつたけれども、今は好くつても、あゝいふ人達は、好いが好いといふわけには行かないからと自分のゐた家の上さんも留めたけれども、そんなことは耳にも入れないで、少しも躊躇するところなくお元は男の山の中に行つて同棲した。正男といふ男の兒が出來た頃には、かの女は山にも馴れ、男の仕事にも馴れ、鑛山にも馴れ、鑛夫達にも馴れ、鑛石の見分け方などにも目が明いて來た。それが子供が死んだ時分から、山もすつかり駄目になつて、掘る石も掘る石も唯の石！　自暴半分に里に

京に出て來る方がお前の身のためだ。來て見れば、またいくらも好いことがあるから……かう深切に言つて來て吳れた。姉はある待合に奉公をしてゐた。散々男に苦勞をした揚句、死んだ氣になつて東京へ出て行つたのは今から四年前のことであつた。話に由ると、今では大分着物なども出來、貯金なども持つてゐるさうだ。肉身だからこそ、さう深切に言つて吳れる。かう思つて、お元はその手紙の上に涙をこぼしたが、しかし何うしても男と離れて東京に行く氣にはなれなかつた。

お園は來てゐるかも知れない。あの下宿で、あの火鉢の前で、夫婦氣取りでゐるかも知れない。私のつかつた茶碗で飯を食うてゐるかも知れない。かう思ふと、いつもくわつとするけれども、さりとて此まゝ男と離れて東京に行くことは出來ない……。それに、この疑惑だつて、本當にさうか何うかはわからない。十中八九はさうだらうと思はれるけれど、もしさうでなくつて、男があの雪の山の中で、好い鑛山を見つけるために、せつせと草鞋ばきで步いてゐたら……。私の身を償ふために精々と働いて吳れるのであつたら……眞面目に眞劍に働いてゐたら……。

こゝまで考へて來ると、お元はいくらか懊惱の重荷が輕くなつたやうな氣がした。もう一切、見えないことは知らないこととして置かう。その方が好い、その方が好い。さうして約束しただけ月日の經つのを待たう。かう思つて、かの女はまたバケツの水に雜巾を浸して、そして劾々しく緣側や床の間を拭いた。

好加減にそこを拭いて、今度は新建の離座敷の方へバケツをさげて持つて行つたが、日當の好い緣側に腰をかけると、もう働く氣も何も出なくなつた。お元は唯ぼんやりしてゐた。

昨夜、波子が二階に聘ばれて、一しきり騷いで、お客が歸つて行つたあとでお光と三人で、いろいろ男の話をしたことなどを思起した。波子は『だツて、考へたツてしやうがないんだもの。元が私が惚れたんぢやないんだから。』と言つたのに對して『でも、それほど思はれゝば、情愛が出て來さうなものだね。可哀相には思はない？』かうお光が言ふと、『でも仕方がないもの、可哀相には思ふけども、思つたツて仕方がないもの、』と波子は笑ひながら言つた。お光は『お前さんのやうに考へてゐれば樂ね。けども今にさうばかり思つてはゐられなくなるよ。それは屹度なるよ。』と言つた。

ピストルを持つて追廻すほどの深い情、それに對して何うすることも出來ないのかと思ふと、その情の持主が可哀相になると共に、それが矢張自分の心の底の男戀しやの情に續いてゐるやうな氣がした。お座敷に出て客の顏を見ない中は安心が出來ないといふ女の薄情な心持も、それとなく自分に反射して來た。と、益々お元は賴みなさと心細さとさびしさとを總身に覺えた。

續いて東京の姉の許から、二度も三度も續けてやつて來た手紙のことなどを考へた。姉は是非東京にやつて來いと言つた。そんな田舍にまごまごしてる位なら、此方にもいくらも好い處がある。二三年辛抱する氣で、男にもさういふ人情があるならば、それはその時改めて話をするとして、兎に角この際東

火鉢についだ粉炭などがいつも一緒に雜り合ひ縺れ合つた。絕えざる苦惱、人に打明けて話して見たところで何うにもならない煩悶、それが細かく細かくあたりのすべての物象に織り込まれ疊み込まれて、其處にも此處にも。自分から出た思ひが、悲哀が、又は孤獨が碎けて漂つてゐるやうに思はれた。しかし、他人に雇はれた身は、片時も落附いてそれを考へて見る暇もなかつた。朝、目を覺ます時から、夜床に入つて眠つて了ふまで、片時も思はぬ時がないほど絡み附いてゐる思ひではあるけれども、しかも、それは片々になつた金の輪のやうなもので、何うかしてそれをつなぎ合せて、もつとはつきりとその狀態を浮べて見たいと思つて見ても、遂に遂に纒めて考へることが出來なかつた。

雜巾掛をしてゐながら、涙は拭いた後の緣側にぼたぼた落ちた。

通りすがつたお光は、

『何うしたのさ?』

顏を上げて、

『今朝は何だか悲しくつて……』

『顏が赤いよ、お前さん、餘り考へない方が好いよ。』

『難有う。』

かう言つて、雜巾をバケツの水の中に入れた。涙は矢張ハラハラとバケツの中に落ちた。

お元は立盡した。

山の雪は燦爛と眩いばかりに閃めきわたつた。風はやゝ强くなつて、土手の枯れた萱を吹いた。碧い川を隔てゝ、河川工事のトロコの動くさまが小さく指されて見えた。

暫くして下に下りて來ると、緣側のところにゐたお光は、

『何してたの？』

『雪が綺麗だッたから。』

『此處で見てゐると、お前さんがぼんやり土手に立つてゐるのがよく見えたよ。お前さん、隨分長く立つてゐたよ。何を見てるのかしらと思つた。』

『さう――』

お元は顏を赧くした。

四

霜に濡れた冬靑の綠葉、日影の爽かにさし透つて來る四目垣、しもけて赤くなつた菜畑、新しく建てまだ荒壁のまゝになつてゐる離座敷、勝手の前のところにあるポンプ仕かけの井戶、さういふものの中にお元の不斷考へてゐる山の中の男のさまや、下宿の二疊の一間や、破れた障子や、黑い安物の瀨戶の

『S町は何方になるえ？』

『Sかえ。』若者は立留つて、東北に遠く展けて連つた碧い山の襞の多いあたりを見てゐたが、『あそこらだらう。そら、あそこに薄く烟が颺つてゐるのが見える。あれがT町だから、その向うだ……。』

『ぢや、あの山と山と深く入り込んでゐるあたりかしら？』

『あの手前だらう。』

『ぢや、K町はその山の中あたりだね。』

『さうだらうよ。』

さういふ話は、別に興味を惹かないといふ風に店の若者はすたすた歩いた。

お元も歩きながら、

『ぢや、あの高いのが日光ね。』

『さうだ。』

と聞くと、足が急に其處に留つたといふやうにしてお元は立盡した。ではたしかにあの山の中だ。あのきらきらと雪の日に輝くあの山の襞の中だ。たしかにAはあそこだ。かう思ふと、男が其處に一人寒く雪に埋れてゐるといふさまがあり〳〵と浮んで來て、それがかの女の胸を塞いだ。つい此間別れて來たばかりであるけれども、出來るなら、飛んでも行きたいとお元は思つた。

く流れ通つてゐた。

『此處まで、始終出しに來るの？　遠くつて大變だねえ。』

こんなことを言ひながら、お元は店の若者がたまをその中に入れて、手頃の鯉と鰻とをさがし廻すのを見てゐた。鯉は潑剌として躍つた。金色の鰭が朝日に照つた。

何うやら彼うやら、鯉二疋と鰻を一つすくつてざるに入れた若者は、『これで、何うかすると、遁げられることがあるぜ。鯉は飛ぶからな。此間も親方が一貫目もある奴を飛ばして了つた。』

『それぢや損したね。』

『一貫目もある奴だから、餘程すらァな。』

『親方は何んな顔をしたえ？』

『惜しさうにして、川の中をいつまでものぞいてゐたッけ？』

『親方だから好いけど……お前さんなんかだつたら、大變ね。大小言ね。』

『大抵は大丈夫だがね。』

で、たまとざるとを擔いで、若者は靜かに土手の上へと登つて來た。お元はその跡につゞいた。

山の雪は美しく輝きわたつた。

ふとお元は訊いた。

うに明るい爽かな眺望である。何處の山か知れない大きな山が、美しく日に光つて、雪が眞白に積つて、劃然として其處にも此處にもくつきりと碧い空に聳えてゐた。それも一つや二つではない。ひろく廣く連つてゐた。

『まア綺麗だ！』

またお元は立留つた。

冬の日の光線のきらきらと眩しいほど閃めく川に向ひながら、かの女は店の若者の後を追うやうにして、今度は急いで河岸の方へと下りて行つた。そこには品川の海苔の粗朶にするといふ稗樹の伐つて丸めたのが、幾束となく積んで置いてあつたりした。元の埠頭であつたところには、藁屋が一軒あるが、そこは今は物置のやうになつてゐて、誰も住んでゐるものはなかつた。河岸にはそれでも小さな舟が——赤煉瓦などを積んだ舟が二三隻かゝつて、船頭の嚊が頻りに汚れ物を洗つてゐた。

川楊が一ところ叢を成して、その下に水が偏つて小さな瀬を立てゝ流れてゐるが、底はすき透つて日の影が線をなして美しく射し込んでゐた。

そこに一隻の生洲船が岸の杭に太い綱で繋がれてあつた。船板は霜に濡れて、大きな錠前が下されてあるが、店の若者はたまとざるとを持つたまゝ、船の上に飛び乘つて、そのまゝ鍵でそれを外した。中には鯰やら鯉やら鰻やらがゴチヤゴチヤと入つてゐて、細かな簀になつてゐる底には川の流れが辿く淨

て行つた。

漸く土手の上に登つたお元は、

『まァ……』

と言つて聲をあげた。自分のゐる旅籠屋の前に、土手の向うに、かうした大きな川が流れてゐやうとは今まで夢にも知らなかつたので、一層お元は驚愕の眼を瞬つた。川、川と皆なが言つてゐるが、かうした大きな川とはかの女は思ひもかけなかつた。ところどころに、丸い長い砂洲をつくつた大きな川は、すつきりと、お納戸色の布でも晒したやうに、又は屛風に書いた繪でも見るやうに、美しくその前にひろげられて見渡された。

『まァ綺麗ね。』

かう言つてお元は立盡した。

やがて少し先に行く若者に追ひつくやうにして、

『これがT川？』

『さうだ。』

『綺麗な川ねえ。』

かう言つたかの女は、更に眼を擧げて、あたりを見廻した。ひろいひろい天地である。眼もさめるや

あらうが。

自分が曾て飯坂附近で、茶屋女をしてゐてそこで出來た男であるだけに、矢張、茶屋女であつた其女のことが、細かく絵のやうになつてかの女の眼に反射した。

三

此處に來てから三四日經つた時であつた。何でも大晦日か、その前の日かであつた。鯉や鮒や鰻を生洲に取りに行くと言ふので、お元は店の若者と一緒に、始めてその前に高く大きく線を描いて聳えてゐるT川の堤防に上つて行つた。

土手の草や萱は枯れて、路は深い霜柱にざくざくしてゐた。午前十時頃の冬の日の光線はくつきりと眩いほどにかゞやいて、さう大して強くない風が冷たくかの女の顏を刺すやうにした。

『ひどい路だね。』

こんなことを言ひながら、折れ曲つてついてゐる蛇ののたくつたやうな路を、店の若者はたまとざるとを抱へて、眞直に突切つてかけ上つて行つた。それに拘らずお元は靜かに丹念に縫ふやうにして登つて行つた。女の赤いメリンスの腰卷と白い足袋とは、荒凉としたさびしい四邊の空氣を艶にした。すれ違つた自轉車の男は、『新しく來た酌婦か。』といふ顏をして、物めづらしさうにして笑つて此方を振返つ

いんだ。あの兒さへ生きてゐて呉れたなら。』かう思ひながら、男のさびしさうにして見送つてゐる姿を何遍も何遍も見返つた。トロコが動いてその姿も山も見えなくなるまで……。

『私も堅い心でゐますから……。その爲め、今度の家をさがしたんですから。そこは堅い堅い、近所でも評判な家だツて言ふから……。ぢや、貴君も達者で、そして時々たよりをして下さい……。』かう言つた時には、お元の眼から涙が流れた。お園のことなどは、口にも上さずにお元はわかれて來た。

此方に來てからも、二三日はお元はお園のことなど思はなかつた。そんなことは何うでも好いやうな氣がした。別れが悲しかつただけ、また、自分が男に對して供した犧牲が大きかつたゞけ、そんなことは殆ど問題とするに足らなかつた。もし、自分がかうして情と心とを立て通して來た後で、男がさういふ眞似をするなら、簡單に、樂に後悔なしに男を捨てゝ了ふことが出來ると思つた。しかしそれはその當座だけで、そのかくれたお園は、次第にかの女の頭に上つて來た。振り拂つても振り拂つても駄目だつた。

男が戀しいといふ心は、すぐそれをお園に作れて行つた。遠く離れてゐる距離も何の役に立たなかつた。あの二階の一間に、あの女がぬくぬくと入り込んでゐて、いつかのやうに夫婦氣取か何かでゐるさまが、すぐ眼の前に見えるやうな氣がした。それも、以前にさういふことがなかつたなら、そのため、烈しい嫉妬喧嘩などをしたことがなかつたなら、それほど直接に、すぐに胸に反響して來なかつたので

つて、別れようとは言へなかつた。で、かれ等は新しく生れ變つた氣で、世帶を疊んで、十一月の末に久しく馴れた土地からはるばるAの山奧へと一緒に來た。かの女の其處にゐる間は、そのお園はかれ等の前に竟に顯はれて來なかつたけれども、其姿を現はさなかつたけれども、疑へば怪しいと思ふことは一二度ないではなかつた。しかしかれ等はそれよりも生活の方に眞劍にならなければならなかつた。男は毎月山から山へと歩いて、有望な鑛區を發見することに骨を折つた。しかし失敗したかれ等の生活は、まだ何等の新しい光明を認めない中に、益々困窮に陷つて行つた。十圓、五圓の金にも困るやうになつた。山は次第に寒くなつた。風に落葉を吹き卷いた。雪はやがてやつて來た。

何うにも彼うにもならなくなつた。かれ等は山から下りてAから一里ほど下の村まで下つた。それは矢張A川の流れてゐる谷であるが、そこまで來ると、鑛山用のトロコがあつて、それによれば、汽車のあるK町まで五六里が間をぢきやつて來られた。最後に、『ぢや、私が一苦勞するから……』と言つて、そして金を二十圓借りた。男も死んだ氣で活路を求めると言つて、寒い二階の一間で、別れをつげて、小さな包をかゝへて、トロコの出るところまで來た。男も送つて來た。男も悲しさうに見えた。

お元の心では、『これほどまでしてやつて、それで男が不實なら、男がわるいんだ。人間ぢやない、鬼だ、惡魔だ、鬼なら、惡魔なら捨てゝ了つたッて構はない。』一方でかう思ふと共に、『何うか好い鑛區が見附かつて元のやうになりたい。正男が生れた時分のやうな氣分になりたい。あの兒が死んだからわる

い。そして一刻も早くお前の體をも自由にさせなければならない。寒いが、お前も丈夫か。』かういふ風に手紙は書いてあつた。お元は嬉しかつた。勿論、その嬉しいにも、いろいろな不安な欺騙から起る疑惑や、さういふものが澤山に雜つてゐたけれども、それでもお元にはその手紙が嬉しかつた。うそでも、嬉しがらせでも、何でも……。

飯坂で失敗した男は、その近所の山では、競爭者が多くつて、とても取り返しがつかないからと言つて、多年住み馴れた土地を棄てゝ、野州のAの山奧へとやつて來た。そのAの山奧、特にそこを男が選んだのは別に理由があつた。その理由をかの女は前から猜してゐた。その爲め、たしかにその爲め、あの女のため、あの色の白い小づくりな痩削の女のため、お園といふあの女のため……。

その女はたしかAの近所にゐる筈であつた。男はお元がそれと猜してゐるとは知らないがお元は前に他からその噂を聞いてゐた。Aの山奧へ。かう男が言つた時にも、お元は男と言ひ爭つた。

『行くなら、貴方だけいらつしやい。私は東京へ行つて、茶屋奉公でも何でもするから。』と言つた。男は頻りに辯解した。男の身としてこれまでお前に苦勞をかけて、工夫の手間までお前の帶やら着物やらを質に置いた金で拂はせて、そんなことが出來るものか。いくら意氣地がないとて、男はそんなものではない。それでは男の心が餘りわからなすぎる。それに、亡くなつた正男のことを考へたつて、そんなことは出來ないぢやないか。かう男は涙まで流して言つた。それに男の身のつまりに際して、それを振切

る時にも、その考へは竟にお元の胸を離れなかつた。お元は考へた。『いつそ、さうしやうかしら？　さうした方が身のためになりやしないか。東京にゐる姉の意見の方が本當なのではないか。こんなところにゐるよりか、いつそ一年なり、二年なり東京に行つて、待合奉公でもした方が、行末のためになるのではないか。』かうした想像が長く續いた。その夜は一時が鳴つてもお元は眠ることが出來なかつた。下の六疊の客の大きな鼾がかの女のさうした細かい悲しい思の間を縫つた。

　お元が此處にやつて來たのは、押詰つて二十七日の夜であつた。やがて、正月が來て、さびしい田舍にも、しめをつけた松が立つて朝霜が白く置いた。三日四日は飲客が多く、宴會などもあつて、忙しいので、つい忘れるともなく忘れてゐたが、その午過ぎに、ふと店に行くとちよつとした棚の上に、自分に宛てた封書が一通載せてあつた。

　かの女は慌しくそれを自分の懷に入れた。そして一刻も早く讀みたいと思つたが、生憎忙しいので封を切つて讀む隙がない。仕方がないので。厠に入つて、そこで靜かに封を切つた。

　それはかの女が此處に來る二日前に、山で、雪の深い山で、泣きの涙で別れて來た男からの最初の音信であつた。讀んで見ると、別に變つたこともない。矢張、男はあの山の寒い雪の中の下宿の二階にゐるらしかつた。『此間、話した山にも、人足をつれて行つて見た。何しろ雪が深いので十分に調べることが出來ないが、石を少しばかり缺いて持つて來て見た。今度は有望らしい。是非有望にしなければならな

『その時は、捨てゝ了ふ。』

『捨てられゝば好いけれど、捨てられない時は？』

『捨てゝ了ふのさ！』

『だつて、捨てられないことがあるからしやうがない。』

『でも、そんな男にくつついてゐては、それこそしやうがないもの。』

『それはさうだけどもね……。』

お元は口を噤んだが、暫く考へて、

『お前さんなら、捨てる？』

『捨てるよ。』

『さうかねえ。』

お元は又考へた。その時はそれきりで別に話もしなかつたけれど、その日は一日、お元はそのことを頭に浮べた。『捨てる？　捨てられるのかしら、他人には？　強い人には？　お光さんのやうにしやきしやきした思ひ切りの好い人には？……自分は……自分は……さうすると、意氣地がないのかしら？』

朝、掃除をする時にも、風呂の水を汲むためにポンプを押す時にも、客の膳を運ぶ時にも、莞爾とつとめて笑ひ顔をして酌をする時にも、客の夜床の支度をする時にも、夜更けて冷めたい自分の床に入

は心に是非打克たなければならないと常に思ふけれども、艱難と辛勞とが犇々と體と心を取卷いて、何うして好いか終には自分にもわからないやうな困難に落ちて行つた。溜息がひとり手に出た。

座敷の其處此處、或は日當りの好い暖かい離座敷の六疊、或は二階の欄干の取卷いた八疊、或は畠の中にある別な離座敷の一間、さういふ處に、銚子やら膳やらをお元とお光とは運んで行くけれど、時にはそれが賑やかな面白い客で、心にもない戲談を言つて、キャッキャッと言つて騷いだりするけれど、又そのため自分の苦しみを忘れて一日暮らすやうなことがないではないけれど、しかし滿し難い望から來る苦しみは矢張その心の底に深く深く藏されてあるのであつた。

『男ッて、何うしてあゝだらうね。』

『本當ね。』

『女の心持なんかわからないのかしら。』

『さうかも知れないよ。いくら思つたつて仕方がないかも知れないよ。』

またしても、さういふ話が出た。そして、『お光さんなんか何う思ふ？ かうして別れてゐる中に向うではすつかり此方のことなんか忘れてしまつて、他に、女でも拵へたら？』

『そんな眞似をすれば、それこそ承知しないから好い。』

『でも、拵へたら？』

ね。その方が結句氣樂で好いよ。それにお金にもなるよ。それがイヤさに、堅い家を選つて、こんな田舍に、何方に行つても三里も行かなければ汽車のないやうな田舍に來たけれど、考へると、つくづく馬鹿々々しくなるよ。人情なんていふことを考へるからいけないんだよ。』

『本當だねえ。』

ある夜は、床の中で、『お前さん、子供を持つたことがあるね。』

『あるにはあるけど……』

『何うしたの？』

『死んだの。顏中にね、白い腫物のやうなものが出來て、一年とゐずに死んで了つた。考へると夢のやうな氣がする。』

『旦那は？』

『矢張、不都合つゞきで……』

お光には、お元が萬事つゝましやかに物事を總て打明けて話さないのが物足らないやうに思はれた。その癖、お元は何うかすると、いろいろ思ひ詰めたと言ふやうに、眼から涙の滴るばかりにして立働いてゐるのをお光は見た。

お光には辛い世の中と言ふことが染々と思はれた。その辛い世の中に、又は悲しい自分の境遇に、又

『ぢや、まだ、見附けられると、何んなことをされるかわからないのね。』
『だから、まだビクビクもんだよ。お座敷のお客の顔を見るまでは、苦勞でしようがないッて言つてゐたよ。』
『さう? 餘程、薄情でもしたのね。』
『いやだ、いやだ、男は?』
お光は急にこんなことを言つて立つて行つた。

二

お光は詳しいことは話さないけれど、男に苦勞をしたといふこと、今猶ほ苦勞をしてゐるといふこと、をりをりヒステリックになるのもそのためであるといふことが段々お元にわかつて來た。『惚れられてピストルで追かけ廻されるよりか、惚れる方が面白いにきまつてゐるね……』こんなことを言ふかと思ふと、『男ッて言ふものは了簡がわからない。何うして煑え切らないかと思ふよ。ぐづぐづしてゐる方が得だとでも思ふのかしら……。女を困らせて、それで自分はのんきでゐるんだから、いやになつて了ふ。』などと言つた。時には又、『あゝあゝかうして苦勞してゐるのも、皆な身から出た錆だ。仕方がない。』かう嘆くやうに言つて、『お元さんいつそそこらの旅籠屋の女中のやうに、お客でも何でも相手にしやうか

『親方は？』

『奥にゐたらう。』

波子はそのまゝ勝手から其方へと入つて行つた。

お光とお元の間には、をりをりこの波子についての噂が交換された。お光は何うしてか、波子のことをよく知つてゐた。この町には去年の秋まで、藝者といふものは一人もゐなかつた。四五年前までは二三人ゐたのだけれど、稼業がひまなのと、土地が狹くつて滅多なことをするとすぐ評判に立てられるのとで、皆な廢業して何處かに行つて了つた。ところが、去年の十月に、突然波子がK町からやつて來ることになつた。波子の姉は、元O町で藝者をしてゐたが、引かされて家を持たせられる段になつて、何うも町の近くではいけない。噂に立つてはいけないと言ふので、此町に來て荒物屋の店を始めた。無論、資本はその旦那が出して呉れた。今でも十日に一度位はその旦那は町から來てその姉の許に泊つて行つた。『あの妹はね、熊谷で何でも土地にゐられないやうなことをしたんだとさ。そりやね、ゐられないツて言つたつて、別にわるいことをしたんぢやないけれども……男にピストルなんかを持つて追かけられたんだとさ。それでね、身を躱さなければならないので、一時東京に行つてゐたんだが、東京は商賣が辛いッてね。それで、此處の親方のところに姉さんから話があつたんだよ。此處なら、大抵知れまいッて言ふんでね。それにもうほとぼりも覺めたからッてね。』

今度はお元がポンプを押した。輪の大きい銀杏返が頻りに動いた。
其處に、此家で金を出してやつて、表向は內の抱妓にして置いて、實はすぐ前の荒物屋の姉の許にゐる波子といふ二十位の若い容色の好い藝者が、平常着のまゝで、横町に面した門から入つて來た。
『姐さん、大變ね。』
かう聲をかけて、『寒いのねえ……本當に……。今朝なんか、ちゞこまつて寢て、何うしても起きられないんだもの。』
『今、起きたの？』
お光が笑ひながら言ふと、
『でも、もう、さつき起きたには起きたのよ。その證據には、ちやんとおつくりが出來てゐるでせう。』
『昨夜はあれから何處？』
『松村にちよつと行つて、それからすぐ歸つたわ。』
『お客、誰れだか當てゝ見ようか。これ？』
手である形をしてお光が見せると、波子は笑つた。
『それ、御覽、當つたから。』
お光もお元も笑つた。

『さッ？　そんな風だッた？　私、性分だから、氣にかけないで置いて下さい。さう？　そんな風だつたの？』

かう言つておお光は笑つた。

朝は客を送り出して、座敷の掃除や緣側の雜巾掛を濟ますと、お元とお光は、課程として、午後から沸かす据風呂の水を汲んだ。それは丁度勝手の前のところにあつて、稍離れて、前庭のところにあるポンプ仕掛の井戸から、くりぬいた長い竹の竿をわたして、そしてそれに汲み入れるのであるが、お元とお光が代り代りに重いポンプを押してゐるさまが、晴れた冬の朝の空氣の中にくつきりと際立つて見えた。押すにつれて水は瀧津瀨のやうに風呂の中に漲り落ちた。

井戸の向うに、四目垣があつて、その外には霜にしもげた菜の畑、少し隔たつて、大きな高い川の堤防が碧い空にくつきりと線を描いて聳えてゐるのが見えた。四目垣の中には、疎らな葉の少ない檜の木などが處々に栽ゑてあつて、長い日當りの好い緣側の向うに新建ての離座敷が續いた。大きな葉蘭の鉢に朝日が朗かにさしてゐた。

お元は窓の所から中を覗いて見たが『もう大抵好う御座んすよ。六分位になつた。』

お光も來て覗いた。

『もう少し入れて置かうよ、ね。』

お元は肥つて、色が白く、背が高かつた。生れは東北の飯坂で、茶屋奉公などもしたことがある女であつた。初めは馴れないで、勝手元で働いてゐる主婦を女中と間違へて、『あなた、ちよつと、これをそつちへやつて下さいな。』などと言つてお光に注意されたりしたが、一日二日と馴れて、此頃では、客の取扱ひ、膳の上げ下げ、お酌の仕方などにもまごつかないやうになつた。お光は深切に、何や彼やとお元に教へてやつた。

お光はひのえ午で今年二十四。お元とは二つ年下だが、丈も小づくりでちよつと若々しく見えるが、氣性は中々勝つてゐて、何でもしやきしやきとやつて退けた。去年の秋頃は、一人でこの旅籠屋の忙しいのを切つて廻した。それに氣質から言つても、何處か強い、それでゐてヒステリックな、焦々するやうなところがあつて、何うかすると、何か腹を立てゝゐるのか知らと思ふやうに、默つて片端から用事をドシドシ片付けた。さういふ時には、神經性に顏の色が赤くなつて眼がいやに吊し上つた。

後で、『何うかしたの?』かうお元がやさしく聞くと、

『何うもしやしないけどもね……私、性分なんだよ。時々、いやアな氣になるのよ。私のやうなものは、何のために世の中に生れて來たのかしらと思ふと、つまらなくなるのよ。だから、さういふ時には働くに限ると思つてね。性分ね。』

『でも、何か氣に觸つたことでもあつたのかと思つて、私、一人で、はらはらしてゐたわ。』

う言つて一里位はわざ〳〵廻り道をしてやつて來た。

しかし昔の繁昌はこんなものではなかつた。汽車の出來ない頃には、此地方の人達は皆な此町に來て、そのすぐ後を流れるT川の河港の埠頭から河舟なり汽船になり乘つて都會の方へ出て行つた。從つて、旅籠屋なども大きいのが五軒も六軒もあり、この太田屋一軒だけにも女中が六人も七人もゐなければ間に合はないといふほど大勢旅客が集つて來た。土手の上には人が織るやうに河岸はいつも賑やかな笑聲で滿され、傳馬や荷足が碧い水の上にぎつしりと詰つて並び、帆が何隻となく常に來ては泊した。

さうした賑やかな河港のさまは、爺さんや婆さん、半ば老いた主人の頭の中にもはつきりと印象されて殘つてゐて、それがをりをり話の種になつた。『河のさびしくなつたことなァ。今ぢや舟も通らねえ。帆も通らねえ、河川の工事の舟ばかりだァ。それから思ふと、昔は賑やかだつたなァ。』かういふ風にいつもそれからそれへと昔の話が出た。近所の藩の士族の娘が、男と一緒に此處まで駈落して來て、せつぱ詰つて、そこで情死した話や、お侍が土手の上で喧嘩をして白刄を交へて果し合ひをした話や、さういふ話が澤山に澤山に續いた。『でも、まァ、さびれたと言つても、家だけはまァかうしてゐられるのが好いだよ。』かう言つては、年寄達は、同じ旅籠屋が皆な潰れて、家だけ一軒殘つてゐるのを幸福にした。そして皆なして眞面目に精々と働いた。

女中の一人のお光の方は、去年から來て働いてゐたが、お元の方はまだつい此間來たばかりであつた。

河ぞひの家

一

田舍の旅籠屋ではあるけれども、二人の女中では手が廻りかねた。一方料理屋をも兼ねてゐるので、晝に夜に飲客がよく押かけて來た。勝手の用を仕かけては、お元とお光は、『入らしやい、』と言つて、濡れた手を前掛で拭きながら迎へた。

土地でも評判の好い家で、昔から代々續いてやつて來てゐて、女中の風儀なども堅いと言はれてゐた。それに主人は若い頃は彼方此方を旅して料理の旨い拙いを試して修業して歩いたといふ四十男、主婦は勝手までも出て眞黑になつて働くといふ上さん氣質、それに爺さんも婆さんもまだ達者でゐて、皆な精々と家のために働くので、『太田屋は客扱ひが好い。それに深切だ。彼處に泊ると、家へでも歸つたやうな氣がする。それに、食物が旨い。同じ錢なら旨い方を食ふのが好いからな。』などと町の人々は評判した。遠くから此近所に用があつて來た人達も、『何うせ泊るなら、Aまで行つて、太田屋に泊る方が好い。』か

は……。』かう思ふと、自分のこの怨恨が男の心に何等かの反響を持つてゐるに違ひないと思つた。

一時間ほどしてから、かの女は又左の手を切り落した。

かの女は最早非常に勞れてゐた。もうこれ以上鍬を使ふことは出來なかつた。男の手や足を切つた鍬は矢張自分の手や足を切つてゐるやうな氣がした。また自分の戀や心がその一鍬毎に滅びて消されてゐるやうな氣がした。涙がまたその白い頬を流れて來た。

頭が半分に割れた。

ちつと快よさゝうに、お袖はそれを見た。そして寫眞と鋏とを持つたまゝ恍惚した。

再び寫眞を取上げた時には、今度は鋏で顏を十文字に切り、更に横に、縱に切つた。そしてぢつと又それに見入つた。

溜息が思はず出た。

今度は唇を切つた。

赤いその唇、思出の多い其唇――そこから生々しい血が滴るやうな氣がした。かの女はがつかりした。寫眞と鋏とがばつたりと下に落ちた。

かの女は此寫眞を切るにすら、並大抵の骨折ではないことを感じた。熱がくわつとしてまた出て來た。

かの女はまた惡夢に襲はれたり、熱にうかされたりした。自分の戀の滅びて行く辛さが烈しく體を襲つて來たりした。涙が白い頰に傳つて落ちるのを電燈の光は明るく照した。

暫くしてかの女はまた寫眞と鋏とを取上げた。

眉を切り、鼻を刺し、今度は手を切つた。右の手がぶら〳〵と落ちるばかりになつた。

自分ながら自分が怖しいやうな氣がして來た。曾て話に聞いた女の怨恨、蠟燭を頭の上に立てて深夜に闇の中を祈つて步く女、つゞいて惨殺に逢つた男や女のことが思ひ出された。『今時分は……。今時分――

矢張なかつた。しかし無いために濟まして置かないほどある要求が強く迫つてゐた。かの女は靜かに階梯を下に下りた。もう夜中らしく、下では皆な寢てゐる。電氣が明るく内の人達の寢てゐる姿を照した。

厠に入つて其處から出て來た時、父親がちよつと眼をさました。

『袖ちやんかえ？』

かう聲をかけた。

『あゝ。』

『何か用かえ？』

『いゝえ……。』

それで安心してすぐ眠つて行つたらしかつた。お袖は簞笥の上の戸棚をあけて鋏を出した。そしてそれを持つて靜かに二階に上つて來た。

がつかりしたやうにして、かの女は横に倒れた。折角取りに行つた鋏もそこに投り出したまゝにして置いた。寫眞も枕の傍に落ちてゐた。お袖はぢつと天井の一ところを見詰めた。

暫く時が經つた。

と、急に、かの女は寫眞を手に取り上げた。そして一方の手で鋏を取つた。一番先に、男の頭のところをグッと刺した。

二階に持つて來て置いた茶簞笥の上に置いてある或物が。鼠色をした薄い板のやうな或物だ。それがふと眼に留つた。

それは此間から其處に置いてあつたのだ。その前にも、

『何だらう。あそこに載つてゐるのは？』

と思つた。しかし立上つて、それを見に行く元氣はなかつた。そのまゝになつてゐた。

ふと、お袖はその何であるかを確める氣になつて、起き反つて、及び腰になつて、白い痩せた腕を伸して、それを取つた。はつとした。それは寫眞であつた。師匠の寫眞であつた。自分と一緒に並んで寫したキャビネ形の寫眞であつた。

一緒に寫眞を撮ると、緣が切れる。こんなことを言ひ〳〵撮つた。それが今事實となつた。お袖は床の上に起きたまゝ、ぢつとそれに見入つた。

師匠は笑を含んでゐる。それに引かへてお袖は曇つた神經性の顏をして腰をかけてゐる。と、その寫眞を中心にしてあるシインがはつきりと頭に上つて來た。あの時男はもうさうしたことをちやんと考へて居たのだ。それでゐながら、自分に向つて、旨いことを言つた。思ふさま引寄せた。無理算段をした金をまきあげるために、あのやうにチヤホヤしたのだ……さう思ふと、お袖はくわつとして來た。

……お袖はあたりを見廻した。何處にもかの女の求めるものはなかつた。立つてあちこちをさがした。

……。もうもとの私つて言ふものはゐないんだから。』かう立派に言つて涙を流した。しかし、それで心が落附いたかと言へばさうしては居られなかつた。ある光景が眼の前に浮ぶと、つゞいて堪へ難い苦痛が來た。體中の寒熱が一時に頭に上つて來るやうに、又は口をあいた體の無數の傷痍の疼痛があらたに冷めたい氷のやうな空氣に觸れるやうに……。

時には身を滅しても何うしても、もう一度行つて、この恨みを思ふさま言はなければ心が醫えないやうな氣がした。出來るものならば、二人を殺してそして死にたい……。かう突詰めて考へた。それに、その老妓が表面美しい俠氣のある口を利いて置いて、そしてまんまと男を取り返した形が憎かつた。矢張、自分よりも、その道にかけては手があつたのだ……。またうと〳〵とする。熱がまた出て來た。

恐ろしい夢が夢に續く。自分が刄物を振廻してゐる。男の胸からは赤い血がだらだら流れる。かと思ふと、其男は曾てかの女が薄情にも振つて振つて振りぬいた男の顏に變つてゐる。その顏が莞爾笑つてゐる。自分は今はその妻になつてるらしい……。はつとする。眼が明いた。もういつか夜になつたと見えて、電氣がついてゐる。矢張大きな笠が天井に映つてゐた。それは皆な夢であつたと氣が附く。

いつかまた眠つた。

ふとある物が眼に着いた。それは茶簞笥――つい此間大きな立派な戸棚を買つたので、不用になつて

れに時々現とも幻ともない惡夢に襲はれるやうに、氣味のわるい聲を立てたり、ぽつかり眼を鋭く明いて見せたりした。嫉妬、懊惱、愛戀、さういふものがいくつとなく種々な違つた心の光景を展いて見せた。時には樂しい體も魂もとろけるやうな歡樂、時には身も心も滅びて了ふかと疑はれるやうな苦痛、その間を靜かな穩かな情緒が縫つたり、自からもほゝ笑まれるやうな快感が雜つたりした。中でも、人間の虛僞が、嘘が、男の遊蕩の氣分が痛く細い錐のやうにかの女の神經を刺した。

『もうおしまひ！』

かう思つて、お袖はその思つた心の言葉でない言葉が靜かな夕暮近い室の空氣の中に消えて行くのをぢつと見送つた。かの女はこれまでにも既に何遍となくこの『もうおしまひ！』を繰返した。水と火の中にゐるやうな義理の責苦、人情の責苦、それに押へられずにいつとなく引寄せられて行く盲目的牽引力、さうあり餘りもしない中から無理に算段して工面して遊びに行く金の始末、頭のものやら指環などを人知れず質に入れて金を懷ろにした時の嬉しい心——さうしたごちやくしたことも、何も彼ももう終になつた。お了ひになつた、かう思ふと、お袖は堪らなく悲しいひとりぼつちの心になつた。

またうとくした。

覺めると思ひ、眠ると夢に來た。心の中では、理性では、もう餘程強く諦めて、現に、それに近い言葉も母親の前で言つてゐた。『これからは生れ更つたつもりで、地道で稼ぐんだ。言はば死んだんだから…

も言はなかつたよ。』

こんな話をしながら、母親は風呂敷の中から、昨夜の悲劇のあとの名殘を示した潮につかつた着物や羽織を出した。何も彼もすべて潮氣を帶びて、色はあせて、物に由つてはわるく縮んでゐるところなどもあつた。泥などもところどころについてゐた。

紙入、帶、帶揚、腹卷、金時計の中までも潮がさし込んで色が變つてゐた。

最後に、母親は紙に包んだ剃刀を出してぢつとそれを見入つた。別に齒のかけたやうなところもなければ、血のにじんでゐるやうなところもなかつた。元のやうに冴えて鮮かに切れさうに見えた。

『それも取つて來たの？』

『さうさね、何一つ置いて來やしないよ。下駄も持つて來たよ。』

お袖は母親の手から、剃刀を取つて、何も言はずにぢつとそれを見てゐた。

いろいろなことが頭を通つて行つた。

やがて恐しい魔のさして來るのを恐れるやうにして、母親は急いで娘の手からその剃刀を取つた。

うと〳〵とお袖は眠つた。

無造作に束ねた髮、蒼白いやつれた顏、一夜の中にかうも影響されたかと思はれるほど凹んだ眼、そ

――何うもしてやしない。向うぢや、死なれちや困るだらうけれど、助かつたんだから平氣でゐらァね。狂言か、おどかし位にしか思つてゐないやね。』

『死んでやれや好かつた。』

『馬鹿をお言ひよ、お前に死なれて堪るもんかね。それこそ犬死だ。世の中の物笑ひだ。ちつとやそつと向うを困らせてやつたッて、何のためになるもんかね。……本當に、これも皆な觀音さまが守つて下すつたんだ……』かう言つて母親は暫し默禱したが、やがて、『うんと言つてやつた。娘が、我儘な娘がいろ〳〵お世話になつたッて。……そして、お前、お前が此前あいつにやつた簪を取りかへして來てやつた。』

『まァ……』

お袖は母親の顏を見た。その簪と言ふのは、その老妓が、師匠と自分との間を心配して呉れた意氣に感じて、曾てお袖が、『姐さん、失禮ですけれども、これからは同胞のつもりで……。』と言つて、自分の頭から拔き取つてやつたものであつた。老妓はそのかへしとして、金の羽織の紐を呉れた。

『ぢや、紐も返してやんなくつちや――』

『何ァに、構ふもんかねえ……でも、あの婆め、氣が引けると見えて、こちらに娘の簪が參つてゐる筈ですがッて言つたら、すぐ返したよ。何か言つたら、こつぴどく言つてやらうと思つたけれど、何に

『………。』

お袖は溜息をついてそのまゝ向うを向いて了つた。お袖の眼からは人知れない悲しい涙が流れた。

六疊の一間、その狹い一間には、かの女の苦痛やら悲哀やらが一杯に滿ちた。生計のための苦痛、稼業から起る虚僞に對する苦痛、男の不眞面目と薄情、女の慘めの境過、さういふものが一つになつて、一間の空氣を重く苦しく感じさせた。木の根をゐぐり拔いた煙草盆、父親が夜中に使ふ懷中電燈、梅の花を瓶にさした畫の掛軸、今日も寒い風が外を荒れて、ガラスをはめた障子はガタ〳〵と鳴つた。

ガラス障子を透した晴れた冬の空が碧くのぞかれた。

うとうとしてお袖は眠つた。また寒氣がして熱が出て來た。かの女は赤い興奮した顏をしてゐた。

母親は上つて來た。

『行つて、着物を持つて來た。うんとお禮を言つて來てやつた。』

『母さんが行つたの?』

『さうさ、誰も行き手はないもの。』

『さう。』

かう言つたが、暫し考へて、『何うしてゐて?』

情の壁に、虛僞の壁に、デカダンの壁に……

『あん畜生！　人を騙した！』

かう思つては、かの女はいつもくわつとなつた。

あの時死んだら……かう思つて見た。お袖はゾッとした。あの時、もう一時間遲ければ、自分は死んで了つた。もうかうしてこの世の中にはゐないのである。父母は稼人である私を失くして泣く泣くそれを葬つて、此土地にゐられずに、又昔の貧しい生活にかへつて行くであらう。それをあの杭が、あの一本の杭が救つて呉れた。いや、あの杭があつても、あの時通つた深川の木場のあの職人がゐなかつたなら、あのR亭の車夫が通りかゝらなかつたなら……さう思ふと、あの時はもう夜も十二時すぎであつたし、人通もあまりないやうな處だつたしするから、運がなければ、あのまゝになつたかも知れない。かの女は戀のために祈つた豐川稻荷に、今度はその身の災厄をのがれたために手を合せた。

しかし突當つた壁が猶振返られた。その壁から何等かの音響か、でなければ消息をきゝたかつた。かの女はをりをり母親に訊いた。

『何とも言つて來ない？』

『言つて來るもんかね。あんな薄情な男！　あたり前なら、それを聞いたら飛んでも來なくつちやならない筈だ……。』

かうかの女はいかにも咽喉の渇きに堪へられないやうにして言つた。
父親はやがてコップに水を一杯入れて持つて來た。
お袖は起きかへつてぐつとそれを飲んだ。と思ふと、枕に頭を落して、また眠つて行つた。
父親も母親も心配さうに、をりをり上つて來ては、ソツと覗いて行つた。ある時、周圍でガヤガヤするので氣が附いて見ると、かねて知つてゐる近所の醫者が來て頻りに檢溫器で熱をはかつてゐた。
『寒い、寒い、もう一枚夜着をかけてお吳れ。』
かの女は母親に言つた。
『寒氣がしますか。』
かう醫者は訊いた。
お袖は唯默つて點頭いた。
寒熱の往來する體の中に、をりをり戀の苦痛が、或は幻影に、或はシインになつてかの女を苦しめた。そしてそのさし引と共に寒氣がしたり、赫とあつくなつたりした。今まで他人の出來事として、寧ろめづらしいもののやうにして、毎日新聞に出て來る心中やら、戀の刄傷やらを見て來たが、今はそれがすつかり自分のもののやうな氣がした。さうした不幸福の人達のことをかの女はをりをり頭に浮べた。
壁に突當つたかの女であつた。いくら押してももう何うすることも出來ない暗い淺間しい壁に。……薄

かう言ふと、お袖はいきなり、帶の間から剃刀を取出して、そしてそれを振り廻した。
弟やら、婢やら、丁度其處に來合せた客やらが、寄つてたかつて、お袖の持つてゐた剃刀を奪ひ取らうとした。お袖はそれを渡すまいとした。赤い帶揚や裾模樣のついた腰卷や白い腕が入り雜つた。お袖はたうとう剃刀を取られた。

と、お袖はいきなり足袋跣足のまゝで外へ飛び出した。

その戀敵の家で、二時間ほど休んで、着物を借りて、下駄を借りて、自動車でお袖は家に送り歸された。

送つて來た女中は、お袖の家の前までやつて來て、手短かにその話をして歸つて行つた。

その自動車の中では、お袖は默つて何も言はなかつた。が、その時から惡熱惡寒が既にその身に往來してゐた。家に歸ると、いきなりかの女は二階に行つて昏倒した。

惡夢は惡夢に續いた。

熱い燃えるやうな頭を、時々誰かゞ來て觸つて行つた。

見ると、それは父親である。

『父さん。オヒヤを下さい。』

かう思つて、お袖はやがてやつて來た俥に乘つて、小一里ある或狹斜のその老妓の家へと押しかけた。格子を明けて入つて行つてからの光景は、今でもはつきりと眼に殘つてゐる。何うして忘れることが出來よう。忘れてなるものか。あいつ奴、あの婆奴、弱りやがつた。……婆には運わるく、私には運よく、其處に婆の弟が來てゐた。その弟の前で、自分のやつてゐる年甲斐もないふしだらを素破拔かれるので、あの婆め、びくびくしてゐた。お袖が、『師匠を出して下さい、さア出して下さい。』と迫るのを、始めはその弟は不思議さうにして默つて聞いてゐたが、後には、『もう少し靜かにお言ひなさい。師匠つて誰です？』と言つた。

好い機會に、

『師匠ッて知らないんですか、貴方は？　師匠ッて、此處の姐さんが、この助平婆さんが年效もなく、人をだまして盜み取つた男です。』かう平氣でお袖はその師匠の名を言つて了つた。

段々老妓も默つてゐなくなつた。癇立つた聲が老妓の口からも出て來た。『お前さんそんなことを言つたッて、元はあの人は私のだッたのを、初めお前さんが取つたんぢやないか。』かう言ふ言葉が出る時分には、お袖の口からは、『だッて、ちやんと起證まで取つた夫婦だよ。親兄弟も許した夫婦だよ。馬鹿にしちや困るよ。』といふ言葉が出た。賣り言葉に買ひ言葉で、老妓は、『お前さんにも似合はないね。この道は强盜切取勝手次第だよ。取つたものが勝ちだよ。口惜しいけりやお前さんが取りかへせば好いぢやないか。』

お袖は溜息を吐いた。
ぐつたりと頭が枕に落ちた。赤く濁つた眼はキッと空間を見詰めた。
お座敷で、Rといふ子がMといふ姐さんと師匠の噂をしてゐた。
そこにお袖が通りかゝつた。無論お袖と師匠の關係を誰も知つてるので、その姿を見ると、かれ等はぱつたりその話を了つた。
それがぐつとお袖の胸に來た。
お袖は平生餘りいけない酒をぐい〳〵飲んだ。何うかしてこの鬱憤を晴らさなければならないと思つた。かの女はいつもに似合はぬほどはしやぎ廻つて一座を驚かしたが、そこから家に歸つた時は、もうかなりに醉つてゐた。夜も九時すぎであつた。
『私は出かけて來るから、ちよつと大島を出してお呉れ。』
『何處に行くんだえ？』
内の人達が心配して言ふのを、『お客とYへ行くんだよ。』かう言つて支度をして、ダイヤの指環もあるだけはめ、帯留も一番好いのを緊め、最後に昨日といで貰つた一挺のカミソリを出して、その元の方をハンケチでぐる〳〵巻いて、そしてそれを帯留の間にさした。
『あの助平婆……見てゐやがれ！』

て下さい。師匠にも言ふことがあるんだから……。若いかよわい體にも似合はないやうな惡聲を放つて、お袖は老妓にくつてかゝつた。その家だ。その家にかつぎ込まれたのだ。

流石にそれと聞いては、身を投げたと聞いては、老妓も驚いたらしかつた。もし、師匠が隱れてゐるとすれば、猶ほ更驚いたに相違なかつた。それを見せてやりたいために、驚かしてやりたいために、お袖は全身濡れそぼちた身を其處に運ばせた。かうした慘めなさまを見られるのは恥しくも辛くもあつたが、そのまゝ負けて歸る氣には何うしてもなれなかつた。

あの師匠が憎い。憎い。憎い。……散々人に世話を燒かせて、金を捲き上げて、世間をかねさせて、親や旦那にも不義理な思をさせて……そして、その揚句、もう金が絞れなくなつたと見て取つて、あの金持な好色で評判な婆さんにくつ附いた。……年が七つも八つも上の婆さんに……色魔だ……色魔だ……。今考へて見ると、あの婆さん、さういふ腹があつて、あゝいふことを言つたのだ。またあの師匠も、あんなことを言つて、旨く人を釣つて騙したのだ――。

口惜しい。何故あんなことをしたらう。仇を討つなら、もつと旨い手段も策略もあつたものを。あそこに行つたのは、わざ〳〵敗けに行つたのだ。弱い形を見せに行つたのだ。心持のすう〳〵するほど痰呵をきつてやつたけれど、實際は敗けに行つたのだ。この戀を打壞しに行つたのだ。かう思つて、

といふ强い要求のために、躊躇も何もなしに、かの女は闇に流るゝ川に飛び込んだ。

勿論、かの女は酒を夥しく飲んでゐた。その家で、戀敵の老妓を前に置いて啖呵を切つた時にも、口が廻らない位であつた。その酒の故もあつた――。

氣が附いた時には、自分は水の流るゝ中にゐた。黑く迅く流るゝ潮の中に――かの女は手を動かした。足を動かした。着物の裾の足に絡みつくのを覺えた。少くともかの女は水を二度も三度も飮んだ。一度は體がずんと水の底深く沈んで行くやうな氣がした。と、不意に黑いものが自分の前にあつた。かの女はそれを捉へた。氣が附くと、それは河岸に二三本殘つてゐた杭で、その向うに、幅のひろい暗い河岸の道を持つた長い石垣の岸がつゞいてゐるのを見た。

その杭のために、お袖は水底に沈むことを免れた。

しかし、通りかゝつた人達が驚いてかの女を引揚げた時には、お袖は既に半はその意識を失つてゐた。飛込む前と、引揚られて氣の附いた後との心の狀態は丸で違つてゐた。その老妓の家號を言つたので――自分の家の名を言ふのはつとめて避けた――再びそこにお袖はかつぎ込まれた。戀敵の家に、もしかすると自分の男がその家の何處かに隱れてゐるかも知れない家に――

『師匠を出せ、出して下さい。こゝにゐるに相違ない。貴女は此の土地の立派な姐さんと思つて、それで私は何も彼も打明けた。それを、それを、それを好いことにして、貴女は私の師匠を盜んだ。出し

して見た。つい此間新調したばかりの三枚揃ひの大島がぐつしより、帶がぐつしより、帶の間に挾んだ紙入、紙、帶揚、肌襦袢、すべて皆ぐつしよりと濡れた。さし込んで來てゐた潮に濡れた。

……その光景が眼にちらついて見えた。丸で活動寫眞のやうであつた。かの女は尠くともあそこに、あの川の岸に三十分や四十分倒れてゐたに相違なかつた。遲い月が向う河岸の屋根と煙突との間に上つて、それがキラキラと川水に碎けた。黑い船が魔のやうに靜かに動いた。

『早く醫者を……醫者を呼んで來て……』

かういふ聲がした。

ある白い顏と、五分刈頭と、白い股引をはいた男とが見えた。その白い顏に月がさした。

何うしてあそこの名を言つたんだらう。一度飛び出して來たあそこの名を……。かういふ眼に逢はせた恨がそれを言はせたのか。それとも思はずそれを言つたのか？……かの女はまたくわつとして來た。

氣が附いて、はつとしたのは、飛込んでからであつた。何うしてさういふ氣が起つたか、また何うして何も彼も忘れて了つたか、自分にもわからない。『兎に角、この恨を返さずには――。』『思ひしらせてやらずには。』かう言ふ心が胸に一杯になつてゐた。跣足で飛び出したあとを無論あそこの人達が追かけて來たと思つた。一町ほど走つて來て、何も考へずに、死ぬことなども何も考へずに、『思ひ知らせてやる』

剃刀と鋏

悪夢に襲はれたやうにしてお袖はぽつかり眼を明いた。電氣が薄くついてゐて、その笠の影が黑く大きく天井に映つてゐた。あたりはしんとして些の物音も聞えて來ない。平生は輪廓の正しい表情に富んだ美しい顏であるが、今はそれが蒼白く震へて、あたりを見廻した眼縁は、赤く濁つて爛れたやうになつて見えた。

その眼はキッと鋭く天井の一ところを見た。

と、近い數時間に自分のやつたことが、急に混雜と飈風のやうに、又は毬の中につめた鋸屑のやうにお袖の頭の中に混雜して押寄せて來た。またくわつとして來た。それを押し退けやう押退けやうとしても駄目である。かと思ふと、それは自分の今まで見てゐた悪夢の續きで、あれは皆な夢であつたかと言ふ氣がする。……しかしそれは夢ではなかつた。覺めて綺麗に忘れて了ふことの出來る夢ではなかつた。お袖は自分の兩足に體に濡れた冷めたいものが未だに絡みついてゐるやうな氣がして、そつと足を動か

退潮の勢は更に迅く迅くなつて來るのを順吉は感じた。櫓を押しても押しても、舟は下流へ下流へと吸ひ込まれるやうに流されて行つた。深い蒼黑い水、それにさし込む日の光線、早い早い流れ、時の間に、かれの小舟は、大きな鐵の橋柱の下へと流されて行つた。

しかし幸に、その橋柱はかれにある力を與へた。かれは棹を橋柱の中に入れて、そして、自分の帶を解いて、それにしつかと櫓の綱を結びつけた。かれはほつと呼吸をついた。

かれは舟の中に疲れた身を橫へた。と、急に何とも言はれない大きな悲哀が全身に漲り渡つて來て、今時分、女の車はこの橋をわたつてゐるだらうと思ふと、聲を擧げて泣きたくなつた。『いつそ死なうか。』かう思つて見たが、しかしかれは舟から身を起さうとはしなかつた。

橋上の轟音は凄じく水に響いて聞えた。

くのが見えたり、大勢人の乘つてゐる渡舟が見えたり、小蒸汽の白い青いペンキ塗に日が暑くさしてゐるのが見えたり、河岸の二階屋に赤い蒲團の干してあるのが見えたり、かと思ふと、水泳の書生達の首と顏ばかりが、何か不自然のものでもあるかのやうにかれの眼に映つたりした。

大都會の騷がしい喧しい音は、何處からともなく水を傳つて聞えて來て、あらゆる罪惡、あらゆる不德、乃至は人間の持つた醜い見るにも聞くにも忍びないものが、無限に潜んで巴渦を卷いてゐるやうに順吉には思はれた。

『オイ、舳を氣を附けろ！』

かう呶鳴られて、はつとして順吉が氣が附くと、一隻の傳馬は、今しもかれの舳と相觸れるばかりになつてゐた。順吉は慌てゝ櫓を右にギイと引いた。その途端に櫓べそは外れて、大きな櫓はぐつたりと舟の外側に横つた。

『何だ、櫓の使ひ方も知りやがらねえんだ！』

かう罵る聲をかれは耳にした。

かれは唯茫然としてゐた。ふと見ると、かれはいつの間にかう流されたかと思はれるばかりに、水泳所のあるところをも過ぎて、益々下流に、群集やら車やらから起る轟音の水にとゞろきわたる大きな鐵橋の下近く流されて來てゐるのを見た。

『要らない、要らない……僕は要らない。』

『そんなことをお言ひでないよ。旦那が折角下さるつて言ふものを、耻をかゝせるもんぢやないよ。』

『本當に、頂いてお置きよ。』

かう母親も言ふので、順吉は仕方なしに、それを貰つて、そして旦那の前に行つてお禮を言つた。順吉は涙の人知れず溢れて來るのを覺えた。

『ぢや、行くの？　順ちやん。ぢや、歸つて來て、ゆつくり御馳走になつてお出でよ。折角、來たのに、私がゐなくつて、わるいけれど……』急いで格子戸を明けて出て行く順吉の後に、かういふおかねの聲がした。

六

退潮の早い流れが、きらきらと暑い日に反映して、それが順吉の混亂した頭に搖いた。かれの操つた小さな荷足の動搖、水脈の動搖、逸早くかれの傍を通つて行くモーターボートの動搖、それに光線と空氣の動搖とが雜つた。順吉は目が廻るやうな氣がした。

大きな屋根のやうな帆、繼はぎだらけの汚れた灰色の帆、かう思ふと、半孕んだ小さな帆がかれの小船を掠めるやうにして通つて行く。大きな船尾の梶が見えたり、船頭の體を弓のやうにして棹を押して行

『荷足でも借りて遊ばうと思つて……』
『この暑いのに……』
『何ァに川はそんなに暑くないよ。』
『でも、危ないよ。櫓の使ひ方を知つてるのかね。』
『少しは知つてるよ。』
で、立上ると、漸く着物を着て了つて、その姿を大きな鏡に映してゐたおかねは、『舟に行くの。』
『あゝ……』
『暑いよ……』かう言つたが、『ちよつとお待ち。』
で、旦那の傍に行つて、何か一言二語言つてゐたが、旦那が澁々ながら財布の中から出した二枚の札を持つて其方へ行つて、
『旦那が上げるつて……』
『要らない、要らない。』
かう順吉は頭を振つて峻拒した。
『折角、上げるつて言ふのに、貰つてお置きよ。きまりがわるいことはありやしないよ。お小遣におしよ。』

い辛い心持がした。

おつくりが出來上ると、おかねはすぐ着物を着にかゝつた。折角、やつて來た順吉などは殆ど眼中に置かれてゐないやうであつた。長い間思つてゐた心も、又はその人の不幸な境遇に同情したことも、母親のいやな顔をするのも振り切つて出て來たことも、役所の退屈な氣分の中に一日中思ひ思つて暮してゐたことも、何も彼も溶けて流れた。折角ありもせぬ財布の底をはたいて、重い思ひをして長い暑い路を持つて來たしやこは、徒らに勝手の流元の傍に置かれたまゝになつてゐた。

いつものやうに秀子を相手にする氣にも順吉はなれなかつた。母親と話すのもつまらなかつた。順吉はいつそこの強い刺戟から遁れたいと思つた。

『をばさん！』

急に順吉は呼びかけた。

『え。』

『此處等に舟を貸す家はあつたね。』

『あゝ……』

『舟を貸して呉れるね。』

『貸すには貸すだらう、けれど何うするのさ。』

順吉は更に強い刺戟と反感とに心をさいなまれた。三週間樂しみにして漸くやつて來た期待の裏切られた失望と、今日もつまらなく日曜を送らなければならない佗しさと、さういふ年取つた肥つた男に、あのやさしい艶な白いおかねの肌が自由にされてゐるといふ悲哀とが一緒になつて凄じく巴渦を巻いた。そして一方では、金を呪ひ、紳士の不德を呪ひ、女のあさましさを呪ふ心が、自分の體を強く壓迫した。

順吉は上り端の隣りの間の柱に身を凭らせて、扇をつかひながら、つまらなさうに默つてゐた。

やがて、髮を綺麗に結ひ上げたおかねは、『汽車は幾度もあるから、さう急がないでも大丈夫ね。』

かう言ふと、旦那は、

『でも、山の上まで行くんだから、早い方が好いね。遲くも三時半の汽車で行きたいね。』

『今、何時？』

かう言つたおかねは、逸早く化粧する爲の鏡臺に向つて、はだぬぎになつて、白粉を襟につけてゐた。

『二時十分よ。』

かう其處にゐた秀子は言つた。

『ぢや、もう時間がいくらもないね。大急ぎね。』

おかねは白粉をつけた後を手でこすつたり、小刷毛で撫でたりした。後向になつてはゐるが、その色の白い艶な顏と、小さな乳と、滑らかな肌とが鏡に映つてゐるのが順吉のゐる處から見えた。順吉は辛

『姉さん、好きなお土産を……。』
『さう、何を頂いたの？』
『いゝ、しやこよ。』
『さう、それはお氣の毒ね。』
『それも、澤山よ。』
『さう、それは重かつたらうね。』
『今のは小さくつて駄目だけれど、丁度來ようと思つてゐるところへ賣りに來たもんだから。』
かう順吉は說明するやうに言つた。
ふと順吉には半ば出來かゝりつゝあるおかねの髮の丸髷が見えた。と、ある衝動と刺戟とがまた强くかれの胸を襲つた。其處等に散ばつてある信玄袋、着物、帶、凉傘、――確かにさうだ。
此方に來て、
『姉さん、何處かへ行くの？』
かう小聲で母親に訊くと、
『これから、箱根に避暑に行くんだとさ。』
『………』

旦那も丁寧にそれを返した。旦那の顔には莞爾した表情があつた。
『いつもよく聞くKさんですね。』
『さうよ……。』
おかねは髮を結ひながら縁側の方から言つた。
『何處かにお勤め？』
『え……。』
半ば言ひかけて順吉が躊躇してゐると、おかねは、
『Kの役所に勤めてゐるんですけどもね……。』
『さうですか。』
旦那はかう順吉に向つて言つた。
おかねはすぐ言葉をついで、今度は順吉に、
『此頃、來ないのね、ちつとも……。何うしたのかと思つてゐたのよ。母さん丈夫？　役所にも勤めてゐるんでせう。』
『え……。』
其處に、秀子が來て、

『誰れ？』

といふおかねの聲が緣側の方からした。

『順ちやん。』

かう秀子は言つた。

『まァ、順ちやん、來たの。めづらしいのね。此間から、餘り來ないから、何うしたんだと思つてるたんだよ。好いから、此方においでよ。』

髮を結ひながら、おかねはかう言つた。

行きかねて、順吉が猶躊躇してゐると『好いぢやないの、他の方ぢやないから。』

仕方がないので、順吉は母親の後について、座敷から茶の間の方へと入つて行つた。座敷には、信玄袋や、着物やら、いろいろなものが散ばつてゐたが、それより先に、何より先に、順吉の眼には、肥つた、鬚の濃い、眉と眼の間のくやくやした、あまり好い男でない、しかも五十近い赧ら顏の旦那の長火鉢の近くに坐つてゐる姿が映つた。金時計の鏈がきらきらとして光つた。つゞいて、指にはめた大きな金の指環が……。

順吉は押しつけられるやうな、悲しいやうな、眼も眩むやうな刺戟を總身に感じながら、顏を赤くして挨拶した。

肥つた母親は、ちらつと眼で相圖をして、旦那が來てゐることを知らせた。
『さう。』
とは言つたが、順吉は赫として顏を赤くした。不愉快な、堪らない不愉快な念が凄しい力で押しよせて來た。前から、二週間も前から樂しみにして來た自分のはかない期待が、すつかりこれで破壞されたやうな氣がした。しかし、それを面に現はさずに、どさりとそこに重かつた包を置いて、
『これ、しやこだよ。』
『まァ、今時分、めづらしい。大變だつたね。重かつたらう。』
其處に來た秀子は、
『大變ね、兄さん、重かつたでせうね。』
かう言つて、風呂敷を解いてゐる母親の方を見た。
母親は、『これは大變だ。こんなに澤山持つて來るんぢやねえ。でも、よくあつたね。もうしやこはおしまひだァね、此處等ぢや欲しいたつてありやしない。』
『丁度、來ようと思つてゐるところに來たもんだからね。』
『これは重かつたらう。』
母親がかう言つてゐる時、

處かでした。

五

土手を下りて、細い路をずつと入つて行くと、汚い不潔な溝に、靑苔などが生えてゐて、見番の箱屋らしい男が、意味ありさうにぢつと此方を見て通つて行つた。ある家からは、かねて一二度見たことのある藝者が、派手な浴衣を着て、だらしない風をして出て行つた。

おかねの家の格子戸を明けた。

『今日は――。』

と言つて順吉は入つて行つた。

明るい光線のさし透る簀戸を通して、緣側のところで、おかねが鏡臺を前にして髮を結つてゐるのが一番先に順吉の眼に映つた。と同時に出て來たのは、秀子であつた。

ふと、直覺的にあることに觸れた順吉は、そのまゝ座敷の方へ行かずに、土産物を持つたまゝ勝手の方へ行つた。

母親は出て來た。

『誰か、お客?』

た。

しかし、今日は役所で感ずるやうな陰氣な佗しい考へは起らなかつた。かれは姉さんらしいおかねの打解けた顏を見ることが出來るのを樂しんだ。

河添ひの路は、暫しの間は暑かつた。樹蔭もなければ、家の庇の影もなかつた。重い荷をつけた馬は喘ぎ喘ぎ通つた。水泳場の前を通る時には、かれは立留つてその中を覗いて見た。十五六の少年達は、裸で、赤いふんどしをして、きやつきやと騷いだりはね廻つてゐたりした。

埃に塗れて白くなつた柳、小さな船頭が客を一人乘せてゆらゆら漕いで行く舟、入江のやうなところに二三集つて炎日の下に靜り返つて碇泊してゐる傳馬、そこには小さな橋がかゝつて、向うに大きな料理屋の涼しさうな二階の欄干に、見ると、綺麗なお酌と藝者とが、浴衣姿のでつぷり肥つた客と並んで立つて此方を見てゐた。その料理店の大きな門の前を通る時には、丁度今來たばかりの若い綺麗な藝者が、車から下りて、褄を取つて其處に入つて行うとした。

そこを通り越すと、土手は一面にひろびろとした川に臨んで、樹の影が深く路の片側に落ちてゐた。涼しい風は川の上から來た。かれはほつと呼吸がつけたやうな氣がした。

少し行くと、心太を置いた涼しさうな葦簾張の茶店があつたり、下に石の華表が見える社があつたりして、やがておかねの住んでゐる狹斜街の二階造の家々が軒を並べて見え出して來た。三味線の音が何

の儘すぐ奥の方へ行つた。順吉は新聞紙に包んだ上を風呂敷にまた包んで、そして出かける支度をした。

四

大きな橋の上からは、帆や蒸汽や傳馬や荷足などで埋められた川が一目に指さゝれた。車や自動車や人の通る響が、晝中の空氣に凄じく震動して、大都會の呼吸が炎日に喘いで悶えてゐるやうに思はれた。對岸には、岸を通つてゐる電車が、白く赤く家々の間に透して動いて、群集の夥しく乘つてゐるのがごた〳〵と見えた。白い意氣な縫ひをした涼傘の下には、美しい若い女の顏が覗がれ、車道を行く車の上には、白い埃よけをした一目でそれとわかる女が美しい横顏を見せた。

順吉はかなりに重いその土産の包を提げながら、橋の右側の車道を歩いてゐた。麥稈帽だけで蝙蝠傘を持たないかれの額には、右の袂からハンカチを出して拭つても拭つても汗が出て來た。顏も赤かつた。

かれの眼は、をり〳〵川の上流の對岸にそゝがれた。そこには水泳場があつて、赤い旗が立つてゐて、インチヤンのやうな黑い體をした水泳の書生達が、或は川に浸り、或は首だけを水の上に出し、或は臺の上から水中に飛込まうとしてゐた。順吉には四五年前の書生生活の無邪氣な時代が思ひ出されて來た。自分も兵營に行かない以前には、此處ではないが、海近い水泳場に行つてよく泳いだ。かう思ふと、秀子と房州に一夏を過した時のことなども浮んで來て、自分がいつか深く生活の中に入つてゐるのが振返られ

『なんだ。あんまり小さいな。』
そこから顔を出した順吉は、かう言つてそれを覗いたが、
『これぢやしやうがないな……。』
『戯談言つちやこまりますよ。これは、今ぢや大きい方でさ。もうしやこもお終ですからな。もう大抵何處をさがしたつて、この位のはありやしませんよ。』
『身はあるかな。』
『身は一杯でさ。』
一つ二つ順吉は手に取つて見て、價を言ふのを一二錢負けさせて、それを半分ほど買つた。
『しやこえ、しやこえ。』
やがてその聲が向うに行つた。
順吉がそれを新聞紙に包んでゐると、母親は出て來て、
『何うするんだえ、しやこを、そんなに買つて?』
『井上へ土產にするんだよ。』
『井上、井上つて、本當に、井上ばかり大騒ぎしてゐやがる。あのお袋にだまされて、あの肥つちよでも押し附けられるんだらう。』母親はこんな皮肉を言つたが、しかし、達つて留める譯にも行かないので、そ

は行かなくつちやいけないよ。』

かういふ母の言葉の中には、神田の親類の家にゐるお孝といふ娘のことが含んでゐるのが順吉にはすぐわかつた。その娘は郵船會社か何かに出てゐて、月給十二圓位取つてゐた。母親の腹では、そのお孝といふ娘を順吉の嫁にしたいと思つてゐた。あの色の淺黑い娘を、あの頰骨の出た娘を、あの陰氣なぐづぐづした娘を……。

『行くよ、行くよ。』

仕方がないので、順吉は好加減に言つた。かれは決して母親の言葉を返したことはなかつた。

あくる日は天氣が好かつた。『今日も暑くなりますね。』などといふ聲が垣の外にきこえた。朝飯をすまして、そろそろ出かけやうかと思つてゐると、

『しやこえ、しやこえ。』

かういふ威勢の好い賣聲が外でした。

順吉は急いで立つて行つて、それを呼びとめた。

河添の土地に移轉して行つてからは、おかねもおかねの母親も、長年食ひ馴れたこの近くで取れる小魚や、鰕や、しやこが食べられなくなつたといつも言つてゐた。ことに、おかねはしやこが好きだ。

棒手振の男は、勝手元にその荷を寄せた。

撒水車ががらがらと水を流しながら街の通を通つた。
金曜日が來た。つゞいて土曜日が來た。十二時の時計が鳴つて、バタバタと硯箱やら書類を藏つて、室から石の階段へと下りて來る時には、いつもさうであるが、其日は殊に嬉しい生々したやうな氣がした。順吉の眼の前には、おかねの艶な顔やら姿やらがチラチラした。
『明日は行つて來るよ。井上へ……。』
かう言ふと、母親は、
『それよりも、お前、深川の伯父のところに行つて呉れなくちや困るぢやないか。利子をまだ持つて來やしない……。』
『それは、この次だ。……井上には、非常に無沙汰をしちやつたから。』
『用もありもしないのに……。』
『……………。』
『行つて呉れなくちや困るよ。』
『ぢや、行くよ。』
仕方がないので、順吉はその行きか歸りに深川に廻つて來ようと思つた。
『それから、神田にも行つてお出でよ。井上なんか何うでも好いけれども、神田は親類だから、時に

も好い位であつた。母親は醉つては、腸をわるくして胃散を飮んだ。その丸い小さな罐から、匙で白い粉をすくつて、皺の寄つた顏を仰向にして口に入れてゐるさまは、隨分幼い頃からかれの記憶に殘つてゐた。そして母親はいつも蒲團をかぶつて寢た。

何うかすると、口汚く小言をかれに浴せかけた。そしてその陰には、順吉の生みの母に對する嫉妬やら、生前虐げられた父親に對する不平やら、をりをり鏃々と起つて來る順吉に對する憎惡の念やらが、暗い力で無意識に働いてゐた。さういふ時には、順吉は默つて、帽子をかぶつて、そして戶外へと出て行つた。

三

この前の前の日曜日には、順吉は是非河添ひの家を訪問するつもりでゐた。ところが一日凄じい暴風雨で、たうとう外出することが出來なかつた。この前の日曜日には、兵營で懇意にした友人がやつて來た。誘はれて銀座あたりを步いて一日暮して了つた。この次の日曜日には、是非行かうと思ひながら、每日每日退屈な平凡な役所への石の階段を昇つて行つた。

もう暑くなつてゐた。避暑客が海へ山へ出かけて行く記事が新聞によつて書かれ、又は凉しい避暑地が案內され、大川の水泳場が開かれ、アスハルトを敷いた大通には、暑いきらきらする日影が射した。

秘密を破壞させずには置くことは出來なかつたのではあるが、さうした社會では、おかねは身の振方をきめずに、いつも同じやうにしてゐることが出來た。おかねは次第にその美しさと艶やかさとを增した。順吉が兵營を出て來る時分には、河に添つた狹斜街でも、名高い妓の一人になつてゐるのを順吉は見た。

秀子も十六七になつてゐた。

順吉は今の役所に入る前に、二三ヶ所商店のやうなところを勤めた。しかし何處でもかれは長く勤めてゐなかつた。三月四月、長くて半年と續かなかつた。渠は懊惱の中に日を送つた。時には自分で自分の身を破壞して了はうと思つたことも一度や二度ではなかつた。かれには一人の母がある。義理ある母がある。母はつひぞその話を自分にしたことはないけれども、何でも世間の噂では、自分は母の妹の子で、その妹は自分の父親との間に自分を生んで、すつた揉んだの揚句、病んだ死んで了つたといふことであつた。順吉はさうした自分の運命の生れながらにして悲慘で不自然であることををりをり考へた。今でも、それと思つて見ると、母親の嫉妬が不自然に自分の體に動いて來るのを感ぜずには居られなかつた。

母親は父親の殘した遺產、纔かばかりの遺產で、家に下宿人などを置いて、そして辛うじて暮して來た。かれが秀子の家に幼い頃から往來するやうになつたのは、曾て一度互に隣同士で暮したことがあつたためであつた。

母親はいつも酒を飮んで暮した。順吉の覺えてゐる記憶では、母親は醉つてゐない時はないと言つて

『兄さん、兄さん。』

かう秀子は順吉の跡を追つた。さう呼ばれるのが順吉には嬉しかつた。本當の『兄さん』になつたら何んなに嬉しからうと順吉は思つた。

一度圍はれた旦那から止されて、おかねが再び河添ひの狹斜街に出なければならなくなつた時は、順吉は二十二で、中學校を出た年の冬であつたが、渠は何んなにおかねの爲めに泣いたか知れなかつた。自分に力さへあれば――自分に月々生活を立てゝ行く腕がありさへすれば――かう思つて渠は泣いた。それを、秀子の父母は、おかねは、唯氣の毒に思つて泣いたとのみ思つてゐた。

二

順吉は中學校を出てから、兵營生活を三年過した。入營の時におかねが見送に來て吳れたのは何よりも嬉しかつた。順吉は兵營の中からも、秀子に宛てた手紙に托して、其心をおかねに寄せた。おかねからは時々めづらしいものなどを送つて寄越した。と、順吉は、それを寶のやうにして、菓子のやうなものならば私物箱の底深く隱して、誰にもやらずに長い間樂みにして食つた。シャツなどは身を離さずに肌に着けた。辛い辛い兵營の生活の中でも、おかねの姿を思ひ浮べては自から慰めた。

幸におかねは普通の家庭の娘ではなかつた。普通の家庭の娘ならば、三年四年と、その人知れぬ戀の

に、遠くの山に雲のかゝるのを指さしたり、絶壁のやうに屹立つた崖に松の面白く欹つてゐるのを指したり、汽船のエンジンの響につれて波濤の泡のやうに湧き立つのに見入つたりした。秀子はあの時まだ十三だつた。順吉は二十一二だつた。房州の海岸では、秀子は無邪氣に濱に出て貝を拾つた。平氣で、順吉や順吉の友達のゐる室に寢た。

しかし、順吉には、その秀子よりも、その秀子の姉の、おかねといふ今年二十五になる、順吉より一つ年上の美しい姿がいつもかれの眼の前にちらついた。明るい表情をした顏、やさしい靜かな態度、順吉に對しては、姉さん振つた樣子や口の利き方をするけれども、家庭の普通の娘でないだけに、艶な美しいコケツトリィなところがあつて、それが堪らなくかれの若い胸を騷がせた。おかねがAの狹斜街からある旦那にひかされて、順吉の家の近くに住つた時には、順吉はよく其處に訪ねて行つた。年が上だけに順吉は誰にも何とも思はれずに、世間からもあやしく思はれずに、否おかねその人にさへさうした心が此方にあるとは思はれずに、祕密に自分の戀を樂むことが出來た。誰もゐない時には、女の着物の長押の衣紋竹にかゝつてゐるのに鼻を當てゝ、心からばかりその匂を嗅いだりした。秀子を可愛がつて、よく一緒に伴れて歩いたり何かしたのは、秀子にラブしてゐるのではなくて、同じ血の流れてゐる秀子の頰やら腕やら唇やらを透して、姉に戀の心を通はせてゐるのであつた。しかしそれと知らない秀子の父母は、却つて妹にその心があるとして、行末一緒にしても好いなどと思つてゐるのであつた。

年になるが、世間はこんなものだとは順吉は夢にも思はなかつた。もつと華々しいものだと思つた。もつと種々なことがあつて、同じく勤めてゐる人ももつと打解けて話して呉れて、笑つたり樂んだりすることが出來ると思つてゐたのに、自分を此處に世話して呉れた屬官も、成るたけ自分を遠ざけるやうにし、椅子を並べてゐる中年の男も、此方から聞けば返事をするだけで、打解けた話などは竟に竟にして呉れなかつた。それも、こんなことを考へる隙もない位に、仕事が忙しいなら好いけれど、一日に五枚か六枚の寫字をしたり、校合をしたりする他に用事といふ用事もない渠は、終には張り切つたやうに漲つて來る若い心を押へるに苦しんだ。さうかと言つて、他の人達のやうに烟草を烟管ですぱすぱとやつて、香氣に時間を消して行くことも出來なかつた。それに、烟草は好きではあるが、『朝日』一つ位しか吸ふことの出來ない渠の貧しい身には、退屈したその度々にそれを吸つてゐるといふ譯にも行かなかつた。順吉は殆ど役所の一日の日暮しに困つた。

順吉の眼には、硝子の外の碧い空や、空に流るゝ白い雲などが映つた。また折々それを掠めて行く鳥の翼が映つて、若い美しい緣、日に由つてそれには暑い蒸すやうな南風が當つて、葉と葉との間に、美しい日の光線が眩ゆく搖いた。それに對しながら、順吉は種々なことを思つた。こんな時に、自由に旅にでも行つてゐられる身なら、それこそ何んなに幸福だらう。汽車、汽船、かう思ふと、三四年前、房州に避暑に行つた時のことなどが際限なく思ひ出された。汽船の甲板の上で、あのお下げの秀子と一緒

小さな舟

一

順吉は日曜日をのみ自分の世界のやうに思つた。役所の仕事は樂であるけれども、中年の鬚や、半ば老いたフロックコートや、尊大に構へた課長や、さういふものの他に自分と同じやうな若いもののゐない處では、いつも自分が押され通しで、片時も心の開けて行くやうなことはなかつた。大きな役所の室はいつもしんとして、ずらりと並んで腰を掛けた椅子の役人達は、滅多に口を利くこともなく、笑聲を立てることもなく、をりをり帳簿の頁を繰る音と、靜かに課長の許に文書を運んで行くスリッパの音とがきこえるばかり、沈滯と無意味と老衰との氣が其處等に一面に漲りわたつて、些の色彩もなければ些のめづらしいものもなかつた。大きな門を入つて、役所の右の階段を昇る時、順吉はいつも堪らない退屈と疲勞とを覺えた。

順吉はある商科の中學校出で、半年ほど前に此處の雇ひとなつて入つた。學校を出てから、もう四五

『それでは……。』

『それぢや大事におしよ。』好いと言ふのを其處まで送つて來て言つた細君の言葉は、强くお蔦の頭に殘つた。お蔦は辛い辛い氣がして、二階から帳場の方へと下りて來た。

どをお蔦は考へた。そして身二つになつたら、いつそ今度は旦那に別れて、その子供を伴れて、自分でひとりで他のさびしい路を行かうかしらなどと思つた。女だけに、一方細君に對して對抗の念を持つと共に、細君の細かい苦しい心をも汲み取ることが出來た。

お蔦はかうして長くこの席に堪へられないやうな氣がした。やがてお蔦は暇を告げた。

『さうかえ、もう歸るかえ。こつちにゐる中に、もう一度逢はれるだらうけれど、それでは大事におしね。お前の子だけど、お前ばかりの子ぢやないんだから。稻崎家の大切な子なんだから……。』かう言つて、細君は帶の間から財布を出して、十圓札を二枚其處に並べて『私が此處にゐれば、何のやうにも世話をするんだけれど……。それも出來ないから……これはほんの少しばかりだけどもね。何か買つてお吳れよ。お土產と言ふほどぢやないんだよ。』

『いゝえ、もう、何うぞ……。』

お蔦が押返すのを、達つて勸めて、細君はそれを藏はせた。お蔦はいよ〳〵辛く悲しくなつた。お蔦の眼からは、淚がこぼれさうになつてゐた。

『ぢや、奧さん、お立ちになる時には、是非お見送りを致しますから……。』

『いゝえ、そんな心配は好いよ。不斷の體とは違ふんだからね……。私も、今日ちよつと、山へ行つて明日は歸りたいと思つてるけれど……。』

から、これからは、精々力になつて上げるつもりなのだよ……。』考へて、『旦那は何か言つてやしなかつたかえ。店を出してやるとか何とか……。』

『私のやうなものですから……とても駄目で御座います。』

『それには、お前も知つてゐるだらうけれど、此方の山はもう駄目なんだよ。いくら掘つても見込はないんだからね。今日も行つてきいて來たけれどね。』

『今日行らしつたんですか……左樣ですか。Sさんにお逢ひですか。』

『Sさんにも逢ひましたよ。實はね、その方にも少し調べたい用もあつて、わざと旦那の留守に來たんだけども……。とても駄目だね、この山は――。だから、子供でも生んで了つたら、東京に出て來るやうに何うしてもしなけりや――』

『Sさんもさう仰有いましたか？』

『そんな風な話だつたよ。』

細君と旦那と自分との關係が更に深く密接な接觸を持つて來たことをお蔦は思つた。かうして相對して話してゐる中にも、三つの心は絕えずその間に細かい、深い、且つ痛い交錯を續けた。細君のやさしい言葉の中にも自分がゐたり、自分の話す言葉の中に細君と旦那がゐたりした。一方ではあの時お上さんや女中頭の言葉のまゝに旦那の心に從つたばかりに、さうした罪深い事實や心が醸されて來たことな

つたんですよ。』

『まァ、奥さんが、さうわかつてゐらつしやるから、この子は何よりも仕合せだつて、私は始終申してゐるんですよ。』などと上さんは傍から言つた。

お蔦に取つては、實はその話が一番厭なのであつた。この前、旦那がそれに似たことを言つた時にも、お蔦はひどく心を痛めた。戲談にもさうしたことを言つて貰ひたくないと思つた。

用が出來て、上さんが下に下りて行つた後では、一時手持無沙汰のやうに席が開けた。お蔦も細君も互に默した。二人の胸には沈默が持つて來るある深い突詰めた氣分が押寄せた。

それを振拂ふやうに、輕く、

『本當に、體を大事にしなくちやいけないよ。お產婆さんは近くにゐるの？』

『え、すぐで御座います。』

『もう六月かえ？』

『え。』

『六月にしちや、大きいね。』ちよつと考へて『旦那はそれは喜んでゐるよ。今になつて跡取が出來るとは思はなかつたなんて言つてゐたよ。生れたら、是非、東京に伴れて來るつて言つてゐましたよ……。それにお前だつて、かうした緣で、子供まで出來たんだから、私に取つたつて、もう他人ぢやないんだ

『え、ぢき近く……。』

顔を赧くしながらお蔦は言つた。

『こちらで持つてゐるお家なのですか？』

今度は上さんが引取つて、

『つい此間まだ、宅の隱居が住んでをりました家で御座いますけれど……汚ない狹い家ですけども……近う御座いますから。』

『しよつちうお世話になつてゐるんでせうね。』

『いゝえ、もう……。』

かう言つたが、すぐあとをついて『それに、この子はもう足かけ五六年も家にをりまして丸で家のもの同樣に思つてをりますものですから……。』

『まア、これからもいろ／＼お世話になるんでせうが……。今度生れたら、東京にお出よ、田舍で育てるよりか、東京の方が好いから……。』

『…………。』

『此間、旦那にもさう言つたんですよ。それはうれしい。子供がないんだから……。欲しいと思つても出來ないのだから、その子は私が貰つて育てよう、男の子なら、立派に育てゝ跡取にしようなんて言

かう傍から上さんが合せた。
お蔦も一言二言言ふ中に、次第に重苦しい氣分の輕くなつて行くやうなのを覺えた。細君は如才はなかつた。それに、笑ふ顔に一種他と違つた愛嬌があつて、それがお蔦の心を引寄せた。

しかしお蔦の胸は種々なことで滿されてゐた。旦那から聞いてゐた細君に對する物語が浮べて其處に浮んで來ると共に、旦那と細君との關係、それと自分との關係、それは今まで蔭にかくれてゐたのであるが、それがかうして表面に顯はれて來ると、其處に一種の確實性が加はつて、お互に胸に一杯に張り詰めて、思つてゐたことをすつかりその前に露骨にあらはしたやうな氣がした。平凡な、世の常の對話をしてゐる間にも、二人は互に二人を調べ合ふやうにして見た。

細君は細君で、いろ／＼に自分が想像したのに比べて、女のいかに賤しく、いかに田舍者で、又いかに自分の對者としては價値に乏しいかを思つた。『いかに旅の徒然とは言へ、こんなものに情を注いだ旦那も旦那だ。』などと細君は思つた。しかし絕えずお蔦の大きなお中に眼をつけてゐた細君は、かう賤しんで冷笑してばかりはゐられないやうなある重い嫉妬を感じた。それは自分が子供を持つたことがないため、又は自分より以上に旦那の情がこの女に働いたといふ證據が其處に歴然としてあらはれてゐるためであつた。をり／＼細君は顔を曇らせた。

『何處にゐるの？　此の近所？』

環も眞珠のを一つしかはめてゐなかつた。座蒲團を外して、お上さんと挨拶をしてゐる中にも、その眼が絶えず自分の體の上に落ちて來るのをお蔦は感じた。

『お蔦さん、此方にお寄んなさいよ。』

笑ひながら、かう言つた言葉の中には、親しさを表はす調子と、いくらか見下げたやうな氣分と、一方また對者といふやうな心持とが複雜に織り込まれてゐるのをお蔦は感じた。お蔦は唯、顔を赧くして、丁寧に時儀をした。大きくなつたお腹を見られるのが辛かつた。

『さァ、お寄んなさいよ。遠慮なんかしてゐないでも好いんだから……。』

つとめてやさしく、柔かな調子で細君は言つたが、すぐ言葉をついで、『いつも、旦那が來ては、世話になつてね。』

『いゝえ。』

『此間中から聞いてゐましたからね。何んなにして置くんだらう。お腹の大きくなつたものを、それやね、お上さんや何かが十分世話をして下さるだらうけれど……。旦那だけぢやどんなことをしてゐるだらうと思つてね。一度來て見よう、見ようと思つてゐたんですけれども……。ついいそがしくてね。私は子供がないから、本當に嬉しいんですよ。旦那も喜んでゐたでせう？』

『子供さんがなくつていらつしやるから何うしても……。』

『奥さんがいつか來るやうなことを旦那は言つてなかつた？』
『ちつとも……。』
『ぢや、矢張〳〵急に思ひ立つてやつて來たんだね。』上さんは事件の內容に深く入つて行くやうな表情をして言つた。
『何ァに、構ひやしないよ。小さくなつてゐなくつたつて好いよ、蔦ちやん。』
其處へお留が來た。
『おすみになつたかえ？』
『え、お待ちになつてをります。』
『さう。』
かう言つて上さんは立上つた。
仕方がない、かうなつては、上さんのあとについて、その保護の下に何にも言はずにゐやう。かう思つたが、それでも階梯を上つて行く時には、お蔦は胸がドキドキした。で、廊下を通つて、その三番の室の前に來たが、お上さんの靜かに障子をあけて入つて行くあとについて、小さくなつてお蔦も其處に體を入れた。
お蔦の眼には、曾て寫眞で見た旦那の細君が映つた。寫眞よりはふけて、色は思つたより淺黑く、指

そこに立盡した。

『今、御飯よ、三番は。』

かうお留はお蔦に言つた。

で、かの女はそれの終るのを待たなければならなかつた。丁度、薄暮で、店には客が大勢立てこんで、『入らつしやい。』といふ聲が織るやうにきこえた。お蔦はそこにも立つてゐられないので、奥の長火鉢のある上さんのゐるところへ行つて坐つた。

『今、御飯中ださうだから、それがすむと、私が作れて行つてあげるからね。……それや好い奥さんだよ。ちつとも氣が置けるところなんかありやしないよ。何うせ、もうかうなつたことだから、今更私は何とも思つてやしない。世話をしてやりたいとこそ思へ、わるかれと思ひやしないつて言つてるたよ。』

かう言つて上さんは種々とそのことを話した。旦那の意に應じなかつた時には、矢張上さんはかうしてかの女を說いたことなどをお蔦は思ひ出したりしてゐた。上さんの話によると、旦那の細君は、この他にも用事があるらしく、今朝も其方に行つたが、明日ももう一度行かなければならないやうな話であつた。上さんは茶をついだり、菓子を紙に載せて呉れたりした。

『旦那は何處等に行つてゐるの？』

『今日はTの山あたりでせう。』

も三度も往復した、最後に上さんまでやつて來て勸めた。今になつてはもう逃げかくれも出來なかつた。それに上さんの顏も立てゝやらなければならなかつた。仕方がなしに、お蔦は逢ふ決心をした。

せめて髮でも結はなければと思つて、近所にゐる髮結を呼んで來た。お蔦は丸髷に結ひたいと思つた。それに平生はいつも丸髷に結つてゐるのであつた。しかし、わざと遠慮して、お蔦は銀杏返しに結つて貰つた。そしてそれを長い間かゝつて綺麗に梳いて、旦那に買つて貰つた櫛をさして、それから指環もありたけはめた。着物もなるたけ好いのを出して來た。

また行きたくなくつてぐづ〳〵してゐると、又、K館から小婢が迎へに來た。仕方がなしにお蔦は出かけた。

店から入ると、

『遲いね。』

と上さんは機嫌がわるい。あれほど言つてきかせたのに、それでもまだ呑み込めないのかしら……といふ語氣がそれとなくその言葉にこもつてゐる。多い女中達も、段々それと聞き傳へたらしく、厭にじろじろと此方の方を見る。番頭も意味ありさうに笑つてゐる。誰にも彼にも顏を見られるやうな氣がしてイヤに體も心も固くなる。お蔦はゆくりなく自分の姿と赤い顏とが廊下の鏡に映つてゐるのを發見して

の味方になつて呉れるものは何處にも一人もゐなかつた。お蔦は恐ろしいしほ塚の鬼婆のことだの、活動で見た無慈悲な本妻のことなどを思出して戰慄した。恐ろしい罪惡が、自分を中心にして深く底に、周圍に動いてゐるやうな氣がした。そしてその罪惡の塊となつて生れて來る子供の不仕合な運命などもそれとなく考へられた。旦那の細君が何と言つても生れた兒だけは手離すまいとお蔦は決心した。

今か、今かと思つてゐると、果してその日の夕方に、K館から番頭が迎へに來た。それはすべてお蔦の想像した通であつた。旦那の細君は、歸るとやがてその話を持出した。最初に番頭が呼ばれ、つゞいて女中頭が行き、後には上さんまでが二階に行つた。番頭は、

『なァに、そんなに苦勞をするには當らない。好い奥さんですよ。氣さくな、いきな、……蔦ちやんが行つたつて難かしいことなんか言ひさうな人ではありませんよ。』と言つてその時の話をした。

『でも、私はイヤ……』かう言つてお蔦は容易に言ふことを聞かなかつた。『考へて御覧なさいよ。こんな體をして、私が逢ひに行かれるか何うかを……』

しかし來なければ、この家までやつて來るといふ話であつた。初めは、此處に呼びつけるも變だから、私の方から行くから案内して呉れと言つたのださうだ。お蔦は愈々困り果てた。何うして好いか思案に餘つた。これがばつたり知らない處で逢つたり何かするのなら、それもまた仕方がないけれども、いざ呼ばれて行くとなると、一層固くならずには居られなかつた。で、K館とお蔦の家との間を番頭は二度

んな奧さんだえ？』

一番のお留は、『綺麗な如才のない奧さんですよ。そんな嫉妬深いやうな氣分のする奧さんぢやありませんよ。』

『お上さん、後生だから、逢はないですむやうにして下さいよ。』かうお蔦は賴むやうにして言つた。

『それはね、話をきいて見ない中は、わからないけどもね……それに、別に用事があつてお出になつたのか何うかもわからないからね。』考へて、『でもね、』さう言はれゝば、逢はせない譯にも行かないね。逢つたつて好いぢやないか、お前がわるいつて言ふんぢやないし……』

『イヤ、イヤ……』

かう言つたが、物の道理も何もわからないだゝつ子のやうにして、お蔦は急いで自分の家の方へ歸つて行つた。お蔦の顏は赤く神經性に顫へてゐた。

家に歸つて來てからも、お蔦は落付いてゐられなかつた。自分の身の不仕合や、辛勞や、罪や、日陰の身の苦みが一々その胸に集つて來て、それがお腹にゐる子供の、何も知らないものの上にまで及んで行つた。淚がひとり手に出て來た。

旦那がゐないといふことが一番心細かつた。それにお上さんも言つたし、番頭もあゝ言つた。かの女

いよ〳〵それに違ひない……。奥さんがやつて來たに相違ない。私をはるばる東京から見に來たに相違ない……。

お蔦は何うしやうかと思つた。

衣桁の傍には、何處かに出る前におつくりをしたらしい鏡臺がまだそのまゝに置いてあつて、そこについさつきまで奥さんが坐つてゐたらしい友禪モスリンの派手な厚い座蒲團がそのまゝ敷いてあつた。床の間の上には、旅行用の化粧箱が開かれたまゝになつてゐた。櫛、小さな鏡、鋏などが入れてあつた。

お蔦の赤い顏と、つくろはない扮裝とはその鏡臺の鏡に映つた。

お蔦は急いで、呼吸をきつて店の帳場の方へと下りて來た。

『本當に、私のことき〵やしない？』

かう番頭に訊くと、

『知らない……。矢張、さうかえ？』

『さうよ、奥さんに違ひない。だつて、皆な毛布にも鞄にも見覺えがあるんだもの……。本當に、私何うしよう？　逢ひたいからなんて言つたつて、私逢はれやしない！　こんな體で逢はれるもんですか。』

其處にこゝの上さんが出て來て、さつきから話をきいてゐたが、『ぢや、本當なのかえ！』と言つて考へるやうな顏をして、『でもね、もし、さうだつたら、逢はないつてわけには行かないだらうよ。……ど

しく顔を出して行かれやうか。
『今ゐないのね。』
かう改めてお蔦はお留に訊いた。
『えゝ、お留守よ。』
『ぢや、ちよつと、私見て來たつて好いでせう。三番ね？』かう言つて、後で番頭が何か言ふのもきかずに、お蔦はすたすたと二階の階段を上つて行つた。
三番の室は、二階をずつと向うに行つたところの、川の美しい瀬の日影に碎けるのを見渡した八疊の一間であつた。曾て其處に旦那が一週間ほど逗留してゐたことがあつた。その時はまだ關係のなかつた時分で、忙しくつて手が足りない時には、お蔦はよく其處に膳を運んで行つて、酒の相手などをした。初めて一緒に旦那と關係した室は、それは、下の方の奧まつた室であつたけれど、この三番の一間もかなりに種々なことがあつた室だつた。旦那はお蔦を相手にしてはよく此處で戯談を言つた。お蔦は旦那に追かけ回されたりした。『すかない、イヤな旦那だ、』などとお蔦は思つた。
お蔦は其處に行つて、そッと障子をあけて、中を覗いて見た。
お蔦ははッと思つた。そこに鞄がある。そこに毛布がある。それが皆な見覺えのあるものである。旦那が元よく持つて來たものである。

『矢張一人で？』

『あ。』

『誰もたづねて來ない？』

『誰もたづねて來ないよ、まだ……』

考へ直せば、同名異人であるかも知れなかつた。かう思つたが、又思ひ返して、それとも旦那のゐないのをこをわざ〳〵東京からたづねて來る筈もない。旦那は二三日前旅に立つた。山には居ない……。そ機會にわざ〳〵私を見に來たのかも知れない。旦那がゐては面倒だからと思つて、さうして旦那のゐない留守をやつて來たのかも知れない……。かう思ふと、その女客が果して旦那の細君であるか否かをたしかめない中は、かうしてぢつとしてはゐられないやうな氣がした。つゞいてもしそれが想像通りだつたら、何うしやう？　この大きなお腹で、この醜い縫はない扮裝で……。何うして逢はれやう？　いやだ、いやだ、逢ふのはイヤだ……。

それに、一方では兎に角、さうした細君のある旦那を、たとひ向うから挑まれたとは言へ、かうして寢取つて、その情の塊の恥しくあらはれてゐる姿をその前に出すに忍びやうか。また奧さんにしても、妬ければこそ、かうしてはる〴〵遠いところをわざ〳〵出てやつて來たのである。表面は何うでも、腹の中では、憎い女と思つてゐるに相違ない。その奧さんの前に何うしてこの罪深い身がをめをめとづう〳〵

其處に近く働いてゐたお留は、傍へ寄つて來て、

『三番のお客? 昨夜來たのよ。』

『作れがあるの?』

『お一人ですよ。』

『いくつ位の人?』

お蔦はつゞけて訊いた。

『さうね、三十五六かね。もつと年を取つてゐるかも知れないけれど……』

『ぢや、さうだ。屹度奥さんだ……』お蔦はかう息込んで言つたが、肩で喘ぐやうに呼吸をして、『綺麗な、いきな人だらう?』

『でも、同じ名の人はいくらもあるから。』かう番頭は傍から言つた。

『まア、何うしたら好いだらう? もし奥樣だつたら?』

赫として來たやうにお蔦は立上つた。

種々なことがお蔦の胸に集つて來た。かうしてはゐられないやうな氣がした。

『今ゐるの?』

『今朝お出かけになつたよ。』

それから二三日經つた日の午後、お蔦は退屈して、いつものやうにK館へと出かけて行つた。お蔦のお腹は益々大きく人の眼についた。『もう、動くだらう、』などと女中はめづらしさうにして言つた。いつものやうに、氣安い無邪氣な話をしてゐたが、ふと其處に、番頭の坐つてる帳場のところに、宿帳が半ば開いて置いてあるのを見て、何の氣なしに、退屈半分にそれを手に取つて横さまに行儀わるく坐りながら、ばらばらとそれを飜して見てゐたが、突然、

『ま！』と言つて聲を立てた。

お蔦は急に心臟の高く動搖するのを覺えた。頭には張詰めた昂奮した表情が歴々と上つた。

『何うしたんだえ？』

番頭は振返つた。

『だつて、稻崎ハナ――こゝにかう書いてあるぢやないの？　名が同じで違つた人のあることもあるさうだけども……。これは奥さんよ？　奥さんの名よ！』

『違つた人だらう？』

『だつて、何にもそんな話はない？　不思議ねえ。一體、いつ來たの？　此のお客？』

『さア、三番だな。お留さんの番だ。いつ來たんだつけな？』

てゐた。掘つても掘つても、鑛石は出ずに、唯の石ばかりが出た。旦那は此處ばかりでなく、TにもNにもAにも山を持つてゐたが、段々以前のやうな元氣はなくなつて、曇つた顔をしてゐるやうなのをお蔦は見た。お蔦が心配してきいて見ると、『どうも鑛脈はあそこでなくなるわけはないんだがな……。しかしなくなつたとすると、もう駄目だけれど……。まア、もう少し辛抱してやつて見よう。ないと思つて絶望した下に、うんとあることなどもあるにはあるんだから。』などと旦那は言つた。

旦那は來て二日ほど泊つて、それから山へ行つて三日ほどゐて、歸つて來て、又一夜泊つて、NからAの方へ今度は遠く一回りしてそれから東京に行くと言つて出て行つた。

立つて行く朝、

『今度は月の末には來られますか。』かうお蔦が訊くと、

『さア、來るつもりはつもりだが、用の具合で何うなるか……』

『成たけ來るやうにして下さい。』

『あゝ。』

かう言つて、機嫌よく出て行つた。いつも停車場まで送つて行くのだけれど、お腹の大きいのが人目に立つので、其日はお蔦は家の門口でわかれた。旦那の姿は竹藪に添つて路をK館の方へと段々遠く遠くなつて行つた。あとできくと、旦那はK館にちよつと寄つて、すぐ旅へ立つたといふことであつた。

つた。下に川の流れる音がした。

六疊に四疊半に三疊、つい五六年前までK館の老隱居が住んでゐたので、木口も選ばれ、床柱なども立派に、殊に、長火鉢の置いてある四疊半は、日當が好くつて、秋は前の庭の四目垣に黄い豆菊などが咲いた。お蔦は十三になる小女を一人つかつて、段々大きくなつて行く腹をあたりに見せながら、別に爲すこともなく、K館の子供達の裁縫などを持つて來て、終日針に親みながら、旦那のやつて來る日を指折り數へて待つた。

東京から來る時には、旦那はいつもきまつて小山あたりから電報を打つてよこした。『電報！』から言つてそれを配達して來ると、お蔦は急に元氣づいて、忙しい配達夫をとゞめて茶を出したり其處にあつた菓子や蜜柑をやつたりした。そして軌道の着く時間までには、出來るだけお化粧をして、好い着物を着て、そして其處に迎へに行つた。『Iさんの妾が通る、』と言つて其處の人達は目送した。

しかし何うかすると、仕事の都合で、旦那はぢかに山の方に行つて了ふことがあつた。さういふ時には、お蔦は旦那の薄情を恨んだ。後には、お蔦はそれをさまたげるために、E驛の赤帽に知つてゐるものがあるのを頼んで、旦那の姿がその停車場に見えさへしたら、すぐそこからK館に電話をかけて貰ふやうにした。

お蔦が妊娠した時分からそろそろわるくなつた山は、其頃になつて、愈々望みがなさゝうになつて來

『東京になんかやらない。』
『それは此處に置いても好いけれども、東京につれて行くさ、お前も一緒に……』
『貴方は此處に私といふもののあることをすつかり奥さんに話したのですか？』
『…………』
『話したんですね？』
『姙娠までしたのをかくして置く必要もないからね。』
『さうしたら、何と仰しやつて？　奥さん。』
『喜んでたよ。子供を持つたことがないからな。めづらしいからな。』
『で、貴方、何ッて言つて？』
『別に何とも言はない。』
『奥さんにそだてさせるなんて言つたんぢやない？』
『そんなことはない。』
『いやですよ、そんなことは？』

お蔦の圍はれてゐる家は、K館の持家で、そこから二三丁隔つた竹藪の陰になつてゐるやうな處にあ

とてもその足元にも追附けないとお蔦は思つて、凝と深くその寫眞に見入つた。それから段々聞くと、何でもあるお茶屋の女中か何かしてゐたらしかつた。しかし旦那は自分とその細君とに關する情事だけは、つひにつひにお蔦に話さなかつた。其處まで追窮すると、『そんなことはもう昔のことだ。話したつてもう黴が生えてる話だよ。』と言つて笑つてゐた。東京の家を待合にしてゐる理由に關しては、『山が旨く行かない時にも困らないやうに……』などと言つた。

お蔦は細君の帶や頭のものや指環やを材料にして、旦那から眞珠の指環や蒔繪の櫛を買つて貰つたりした。時にはお蔦は細君から來る手紙などを注意して讀んだ。旦那が東京に行つてゐる時には、殊にその細君の姿が眼の前にちらついて見えた。夜のことなども細かく考へられて赫と顏を赤くしたりした。――姙娠してから、殊に、さういふ發作が著しくなつた。

姙娠とわかつた時には、今まで子供を持つた經驗のない旦那は非常に喜んだ。思はぬ鑛脈を發見したより以上に、又は不思議な得難い寶を授かつたもののやうに……。此方に來てゐる間は、やれ大事にしなければいけないの、やれ衛生を重んじなければいけないの、やれ産婆を賴まなければいけないのと言つて大騷ぎをした。

『だつて……私はお腹の子は自分で育てるんだから……』

『それはさうさ……』

指環を三つも四つもはめてゐて、帶も頸のものもすべて金目のものらしかつた。お蔦はぢつとそれに見入つた。

其處に旦那が來て慌てゝ取らうとするのを、

『私に頂戴、私に頂戴！』

かう言つて、それを持つたまゝお蔦は座敷中をかけめぐつた。

懷に深く藏めて、手で押へて、『ちやんと持つて歩いてゐる癖に……』

『いゝや、それぢややるよ。もつと好いのがあるんだけれど……』

『これで澤山！』

かう言つたが、『私の此前の寫眞なんか奥さんに見せやしないでせうね。』

『見せやしないよ。』

『あれなんか見せちやいやですよ。それこそ何んなにわる口を言はれるか知れやしないから。』

『なァに大丈夫だよ……』

旦那は笑つてゐた。

旦那は藝者ぢやないと言ふけれど、その女振と言ひ、扮裝と言ひ、何うしても素人とは思はれなかつた。それに、眼附、笑顔、若い頃には大勢の男を引附けた人に相違なかつた。年こそ若けれ、自分などは

こから西に十里を隔てたY市の生れで、父母もまだ丈夫、同胞も二三人あつて、十七の時、初めて亭主を持つたが、一年とも添はない中にその亭主に死別れて、それから一年ほど實家に歸つて遊んでゐる中、世話する人があつて、この溫泉場のK館へとやつて來たのであつた。山の旦那に圍はれた話を父母に報じてやつた時には、父からも母からも姉からも、そのだらしない淫らな所業を責めた手紙が來た。K館のお上さんの許にもそれに似た手紙が來たといふことであつた。お蔦はいつか自分の身の色戀の物語の中に入つてゐるのを發見せずにはゐられなかつた。旦那の情が深く心と體に染むと同時に、東京にゐる旦那の細君のことが思はれ、つゞいて自分が所謂妾の境遇にあることが染々と繰返された。妊娠してから殊にそれが深く考へられた。

旦那の細君とお蔦とは無論逢つたこともなく、また遠く何十里と隔つてゐるけれども、しかもその細君の姿や話や面影はいつもすぐその前に迫つて相對して來てゐるのをお蔦は感じた。お蔦は根掘り葉掘りして旦那から細君の話を聞いた。細君の名はお花、年は三十七、辰の三碧で木性。今までつひぞ子供を持つたことがない。それに旦那の東京の家は、芝で待合をしてゐて、そこに細君が旦那の山から歸るのを待つてゐる。ある日ふと旦那の鞄の中から細君の寫眞を發見した時には、お蔦は妬ましいやうな心持をして、ぢつと深くそれに見入つた。面長な、眼のぱつちりした綺麗な女で、その扮裝もいやに粹で、

さう皆にひやかされると知りながら、それでもお蔦は退屈すると其處へ出懸けて行つて小半日を費した。番頭も、小僧も、其處に入る土地の藝者なども皆なよくお蔦のことを知つてゐて、互に氣安い無邪氣な會話を取り交した。ある藝者は、『六月にしちや、蔦ちやんのお腹は大きいね、二人ゐるんぢやないかしら。』などと笑つて言つて、『かうしてお腹の大きくなつてゐる人を見ると、私なんかも一人欲しいと思ふわ。』

『照ちやんか駄目だ。浮氣ぢや、出來つこはねえ。』

かう傍から番頭は笑つた。

川に添つた有名な溫泉場、二階三階の大きな旅館、毎日毎夜客はその近くにある小さな軌道の停車場から陸續として下りてやつて來た。夜は褄を取つた藝者などが其處此處に往つたり來たりして、三味線の音が賑かに到る處にきこえた。

お蔦は其處に來る度に、二三年前の自分の生活が未だに微かに殘つて巴渦を卷いてゐるやうな氣がした。洗濯をしたり、お針をしたり、忙しい時には客の座敷に給仕に出たりして、唯々無邪氣に何の氣なしに日を暮して來てゐた。自分の傍には、他目にも餘るやうな淫らな氣分や話が漲るばかりに滿ちわたつてゐたけれど、薄情や欺騙が人情にからみついたり義理にもつれ合つたりしてゐたけれど、かうならない以前には、そんなことは話か、物語か、でなければ戯談としかお蔦は思つてゐなかつた。お蔦はこ

お蔦

お蔦は自分の圍はれてゐる家から遠くないＫ館の帳場へとよく出かけて行つた。お蔦は長い間そこで女中として働いてゐたが、矢張そこを定宿のやうにして、山に行つたり東京に歸つたりするＩといふ鑛山師の旦那に思ひつかれて、自分の方では厭で厭で仕方がなかつたけれど、旦那から金の轡をはめられたお上さんやら女中頭やらの無理强ひに遁れることが出來なかつた。それは昨年の夏の頃であつた。ところか、今ではお蔦は既に姙娠六月の大きなお腹になつて、帳場へやつて來ると、よく皆からひやかされた。

『蔦ちやん、えらく大きくなつたね……』

と誰かゞ云ふと、『厭だ、厭だつて、あんなに始めは云つたけれど、滿更でもないんだね、矢張。』と女中頭は笑ひながら言つた。

『Ｉさんは、年は取つてゐてもね、なか〳〵。』

『さうだツてね。お蔦、何うだえ？』かうお上さんも笑つた。

「不時點呼ぢやないか。」
かう言つて起上つた二人の顏は眞青になつた。

『大隊長殿、變ですぜ。……私の此處に藏つて置いた着物がなくなつて、誰のだか知らないが、軍服がありますぜ！』

『軍服！』

かう言つて大隊長も覗いた。

いよ〳〵脫け出たものがあるといふことが明かになつた。『たしかにさうだ。橋本奴、誰かと一緒に出かけたんだ。それに相違ない。確かにそれに相違ない。君の和服を着て行つたんだ。此處で着替へて行つたんだ。』大隊長は自分のキャップがなくなつたことを話した。

『けしからん奴だ！』

かう大隊長も副官も言つた。

一度寢た伍長や曹長などもそろ〳〵と出て來て騷ぎ出した。

『不時點呼をやつて見ろ！』

かう大隊長は命じた

丁度その時分、古田と橋本とは、町の女の淫らな空氣の中に浸つて、したゝかに酒に醉つて、いざ寢やうとするところであつた。その時ふと營所の方に當つて、夜陰を貫いて、點呼喇叭の聲が明かに冴えてきこえた。かれ等は顏を見合せた。

らうと思つて、いつも從卒の寢る室の前に行つて、
『橋本、寢たか。』
と叫んだ。
しかし答がない。もう寢たのかしらんと思つたが、何んな時でも、かう聲をかけると、すぐ『はい。』と言つて起きて來るので、いくらか不審になつて、そのまゝ戸を明けて中を覗いた。中は藻ぬけの殼である。
『何處かに話にでも行つたかしらん、』と思つたが、もう十時だ。誰も起きてゐるものはない筈だ。かう思ふと自己の部下の不規律に對する責任が、重大にかれの身にふりかゝつて來るのを大隊長は感じた。『やつこさん、人の目をかすめて、わるいことをしてゐやしないか。』
で、かれは闇の中を歩いて、副官の室の方へとやつて來た。
副官は眼をこすり〳〵起きて來たが、夜の空氣が寒いので、ふと晝間疊んで藏つて貰つた着物を思ひ出して、挨拶もそこ〳〵に次の間に行つて、押入を明けた。
『不思議だな……變だな……。』
かう言ふ聲を聞きつけて、大隊長がそつちに行くと、
『一體、誰のだ、この軍服は？』かう言つて、

『大丈夫だ。』

『その代り知れれや、營倉が重いぞ。』

『おどかすなよ。』

かれ等はコソ〳〵話しながら、闇の中を西の土手の柵の處へと近寄つた。一本、二本、三本と數へて五本目のところに來ると、果して杭がぶら〳〵してゐる。古田が先に出て、あとから橋本が續いた。

『旨いだらう？』

『軍師だ！』

こんなことを言ひながら、かれ等は土手の上に出て、それから、小さな濠を飛越えた。かれ等の並んだ姿はやがて明るい町の方へと行つた。

それから少くとも二三十分は經つた。大隊長は一度床に入つたが、酒がさめて、何うしても寢られないので、起きて、爐の火の殘つたのをかき起して、暫くそこで本などを見てゐたが、ふと營内を歩いて來ようと思つて、立つて次の間に行つて、押入の中をあちこちと搜した。かれはキャップなしには外に出たことがなかつた。

ところが、確かに其處に置いた筈の帽子がない。搜しても搜してもない。不思議だなア。昨日確かに此處に置いた筈だがと思つて見ても矢張ない。暫く搜しあぐんでゐたが、まだ寢やしまい、起きてゐるだ

『橋本、もう好いぞ、寢ても……。』かう奥からかけられた聲を橋本は、鶯の聲か何ぞのやうに聞いた。それに副官ももう歸つて寢た筈だ。ふとかれは大隊長のキャップが此方の押入の中にあつたことを思ひ出した。かれはソッと軍服を和服に着更へて、そのキャップを出して、それを懷にねぢ込んで、さつきからそこらをまご〱してゐるらしい古田の姿をさがすやうにして戸外に出た。

營庭には、もう誰もゐなかつた。

副官の室ももうしんとしてゐた。確かに若い副官はぐつすりと寢込んで了つたらしかつた。で橋本は晝間自分が疊んで、その次の間の押入れに藏つた副官の着物を出して、暗いところで、それを古田に着せた。明朝は誰も起きない中に歸つて來る積りなので、古田の脫いだ軍服は、そのまゝそれをそれに入れた。

かれ等は出かけた。

少し行つた處で、橋本は、懷からキャップを出してそれをかぶつて見せた。

『何うしたんだ?』

『大將のだよ。』

プッと古田はふき出した。『俺が副官の着物で、貴樣が大將のキャップなら上等だ。……それにしても、もう寢たな。』

『さうしやう。』

かう言つてかれ等は別れた。

大隊長の室では、その夜は副官や隊附の將校が行つて何か相談をした。從つて從卒の橋本は忙しかつた。かれは人々の命ずるまゝに種々な用事をした。將校達の相談は長くつゞいた。かれ等は酒を飮みながら話した。大隊長が五六杯の酒に眞赤になつて、何か頻りに元氣好く話してゐるのが此方から見えた。古參の中尉は頻に盃を重ねた。

『橋本、酒を入れて來い。』

かう中尉は呶鳴つた。

矢張女の話が一間を賑やかにしてゐた。『大隊長殿などでも、矢張奧さんがこひしいでせうな。』かう若い副官が言ふと、『俺なんかは好いがな。君が可哀相だよ。若い別品さんと結婚したばかりだからな。思ひやるよ。いつそ早く伴れて來る方が好いぢやないか。』こんなことを言つて笑つた。古參の中尉は、『矢張、不思議なもんだな。女がゐないと、ガスが溜つて仕方がない。時には、拔かないと、體に毒ですな。』などと言つた。

しかし消燈ラッパが鳴る時分には、將校達も、もう退散しかけてゐた。大隊長は夜は寢られないで遲くまで起きてゐる癖だか、それでも床に入ると、もう滅多には起きて來なかつた。

橋本も點頭いて見せた。

夕飯が濟んだあとで、二人はまた將校集會所の蔭の處で落合つた。もう日が暮れかけてゐた。赤い大陸的の日影は、美しく佗しく、冬の禿げた山を照して、それも段々暗く〳〵なつて行つた。向うに、兵士の通つて行くのが見えた。

『貴樣、和服は一枚きり持つてゐないか。』

かう古田が訊いた。

『持つてゐない。』

『俺も一枚は持つてゐるけれど、ねまきにしてゐるんで、汚いからな……あいつぢやひどいからな。……』と考へて、『誰か持つてゐねえかな。』

『さァ。』

『と言つて、まさか軍服ぢや具合がわるいや。何うか都合はつかねえかな。』

ふと橋本は、今日の午前に副官の着物を一襲ね自分が疊んで藏つてやつたことを思ひ出した。さうだ。あれを副官は着やしない。今夜は大隊長の許に用があつて、副官が行く筈だから、その用がすめば、副官は歸つて寢て了ふばかりだ。都合が好かつたら、あいつを引出してやれ。かう橋本は古田に言つた。『それが出來りや旨いな。何ァに、わかりやしねえよ。副官、寢さへすれば、明日までぐつすらだから……。』

時間。大隊長や副官のゐなくなつた時分を見すまして、軍服を和服に着かへて、闇にまぎれてこつそり出懸けて行く。出るところはちやんと考へてある。西の土手の柵を右から數へて五本目、その五本目の杭の根元を古田は昨夜遲く行つて鋸で切つて置いた。ちよつと見てはわからないが、押せばそこから樂にかれ等は營所から出て行けた。

『あそこから土手を越して、濠を跨げば、通りに出る。そこからあの女のゐる街はすぐだ。偶にやいいやな。偶にやさういふことでもしなけりや、體がつゞきやしねえ。好いか屹度だぞ。』

橋本は點頭いた。かれ等は日曜日の公休には、それでも其處等の內地の女のゐる街を彼方此方と歩いてその淫らな空氣によく熟してゐた。晝間、鷄の蹴合ふやうにして、逸早く濟まして歸つて來るといふ話も、滿更うそではないらしかつた。まださういふことに馴れない橋本に取つては、何だか怖いやうな不安なやうな心持がするけれども、一夜行つて遊んで來たいといふ氣は體に熱く漲つてゐた。頰の赤い銀杏返しの女、豐かな色の白い肌、滑らかな艶つぽい言葉、さういふものが、終日長く橋本の頭にからみ附いてゐた。

其日はちよつとした演習があつた。大隊長の從卒である橋本は、午後からは、其方の方の用事に追はれて、古田とは顏を合せる機會がなかつたが、ふと廣場で大勢の兵士と一緒に古田が此方にやつて來るのに逢つた。古田は眼で知らせた。

大隊長の帽子

二年兵の古田と從卒の橋本とは、今夜こつそり營舍を拔けて遊びに行かうと約束した。內地ではとても出來ないが、遠い朝鮮では、その位のことは大丈夫だと思つた。彼等は久しく女に接しなかつた。辛い行軍や勤務や勞働にのみ服して來た。雪の夜の哨兵には、體も凍つて了ふかと思はれた。

『偶にや好いやな、人間だからな。』

かう古田は言つた。

古田と橋本とは同鄕であつた。古田の方が古兵だけに、また階級が上だけに、橋本を何の彼のと言つてこき使つたが、それで橋本は古田を賴つて兄のやうにした。『でも、大丈夫かな、知れると、營倉だからな。』

『大丈夫だよ。』

かう言つて古田はそのためかれが二三日前から種々その方法を研究したことを竊に話した。消燈後一

後の光線を斜に其處へと投げかけてゐた。遠い山々は既に夕暮の深紫の色に包まれて、靜かな薄暮の來るのを待つやうに見えた。

敵の砲兵陣地から打ち出す砲彈は、突然、この赤い夕日に照された峠の路へと集中されて來た。ドン、ドン、ドドン、その音につれて、黑い白い黄い砲彈の炸烟は、一面にそこに漲り渡つた。そしてそれが夕日と、薄暮の色と、山々の靜かな光線とに、一種繪のやうな美しい對照を見せた。從つて今朝勇ましくかれ等の越えて來た峠の路は、今しも其處に驚くべき修羅の巷を現出した。いかに遁れやうとしても、かれ等はもう遁れることは出來なかつた。砲彈は正確にしかもひつきりなしにやつて來た。誰れも彼も皆な倒れた。若い中尉も、美しい細君のある少尉も、皆なそこに折重つて倒れた。軍醫も倒れた。看護卒も倒れた。

退却するに就いても、非常に不便な、不利な地點に身を置いてゐることを誰も思はないわけには行かなかつた。否。その前にも、かうならない以前にも、谷合の中から今朝越えて來た峠の路――夕日の光線に照りかゞやいてゐる赤褐色の折れ曲つた路を振返つて、あそこを越えなければ、安全な位置に身を置くことが出來ないと誰も彼も思つてゐた。狹い谷合にゐては、全滅して了ふか、捕虜になつて了ふか何方かであらねばならなかつた。

暫くすると、第二大隊の兵士がぞろぞろと此方をさして退却して來るのが明かにそれと指さゝれた。

『退却だ！　退却だ！』

かういふ聲が何處からともなくきこえて來た。

もう何うすることも出來なかつた。かうなつては、何んなに勇敢な指揮者があつてもそれは駄目であつた。到るところ鼎の湧くやうになつて、かれ等は先を爭つて退却して來た。第二大隊の兵と第三大隊の兵とは、いつか混り合つて、唯だ死地を遁れやうとした。高粱畑の中、崖の下の路、山と言はず川と言はず、退却して來る兵士や輜重や馬やで一杯になつた。そしてかれ等は皆な峠へ通ずる路の方へ方へと集つて來た。

峠に達する路は、これから薄暮にならうとする淡い靜かな光線の中にくつきりとうねくく曲つて見えてゐたが、赤い、赤い、光芒のない、血のやうな色をした夕日は、今しも向うの山際に沈まうとして、最

との出來ない中に、敵の步兵の列が、眞黑になつて此方へ押寄せて來るのを誰も見た。

その谷合には――四面は山で取圍んだ其の狹い谷合には、今しも、凄じい混亂と不安と焦燥とを先にして、恐ろしい死の影が一面に襲つて來たのであつた。もう、何の隊でも、指揮とか命令とか言ふものは、何の役にも立たなくなつて居た。ある者は劍を擬して敵に向つた。ある者は少しなりとも安全な位置を求めるやうにして、後へ後へと退いて行つた。

誰も心配してゐた恐ろしい死の影が今やつて來た。

楊柳の下のテントの上には、まださつきの赤十字の小さい旗がひらひらと靡いてゐるのが見える。そこにも、もう何うすることも出來ない味方の狀態がよく知れてゐた。一人の看護卒は、さつきから、それを氣にしてはよくテントの中から顏を出して、前の狀況を見てゐたが、

『軍醫殿、もう駄目です、駄目です。』

顏を眞靑にして言つた。軍醫も慌てゝ出て見た。

『退却命令は？』

『まだ、來ないんでせうが……』かうそこにゐる一人の兵士は言つた。その顏も靑かつた。『大隊長殿も……それから、副官どのも戰死なすつたさうですから、退却命令が來てゐるかも知れませんが、わかりません。』

つた。

『でも……。』

『いや、もう、さうきめた。……君も覺悟したまへ！』

『しかし、それは、とても……。』

『駄目でも仕方がない。かうしちや居られない。』

副官も何うすることも出來なかつた。其時には、もう敵の砲彈がまともに此方に向けられて來るやうになつて居た。割合に開いた地點に散兵を敷いたこの隊では、見る見る、負傷者と戰死者とが續いた。喇叭手が來て、かれの周圍を取卷いた。いよ〳〵突貫、いよ〳〵全滅、いよ〳〵陛下にお別れ！　かう思つて居る時突然砲彈は凄しく其處に落ちた。と、思ふと其處に立つて居た大隊長のばつたり倒れるのを人達は見た。頭が半分取れて、そこから血が夥しく迸つた。

『大隊長殿！』

異口同音に叫んで、人達がその傍に寄つて行つた。しかし、スッとも言はずに、既に大隊長は死んで居た。双眼鏡を手にしたまゝ……

しかし人達は驚いたり騒いだりして居る隙もなかつた。その屍體を擔荷に載せて後方に運ぶ暇さへなかつた。當然の順序として、古參中隊長の指揮に待たなければならなくなつたが、それすら傳達するこ

今までF兵團に注がれた敵の砲彈が、今度は次第に此方へと向つて來るのを大隊長も副官も見た。殊にこの隊の右に出てゐる第三大隊の上に雨霰と注がれる敵の砲彈は、黄く、白く、黑く……。

『T軍曹も戰死なされました！』

とても、聯隊本部との連絡は取れないといふ情報を得ると、大隊長の顏は忽ちある一種の表情を見せたが、それと共に、ある決心がその胸に上つたらしく、

『中隊の喇叭手を集めろ！』

かう命令した。

『何うなさる？』

かう副官が訊くと、

『きまつてるぢやないか、君。』

『何う？』

『もう駄目だ。決心した。……とても駄目だ……かう砲彈を受けちや、とても駄目だ……。一つこれから喇叭手を集めて、君が代を吹奏して、陛下にお別れをして、向うの敵に突貫するんだ。』

『…………。』

副官が見て驚いた。もう大隊長の眼の色は變つてゐる。鋭い眼附の中にはわるく尖つて輝くものがあ

E軍曹と一緒に行つた歩兵は、蒼い昂奮した顏をして、大隊長の前に立つた。
『軍曹殿は戰死なされました！』
『戰死！』
大隊長は顏を曇らせたが、『ぢや、すぐT軍曹に命令！』
『は……』
と言つて兵士は下つた。
『困るな。』
又、双眼鏡を取つて『あの山見たまへ、すつかり敵になつちやつた！』
『本當ですな。』
『かうして、ぐつぐづしちやゐられないぞ。』
副官も返事のしやうがなかつた。實際、今まで占領してゐて、その進出をのみたよりにも賴みにもしてゐたF兵團の姿は、すつかりその山から見えなくなつた。敵の歩兵が續々その山に上つて行くのが蟻のやうに黑く見えた。
それに、大隊長には、負傷や戰死が非常に多くなつて行くのが氣になつた。此まゝにしてゐれば全滅である。かれは双眼鏡を手から離さずに、しかし絶えず下唇を咬んだ。

飯のあとで、

『何うだ、一杯？』

ウヰスキーの小壜を、いつも忍ばせて置くポッケットから出して、それを大隊長は副官についでやつた。その時、突然砲彈がグンと鳴つて通つた。誰も皆頭を下げた。

『敵は餘程あるぜ、砲が……。』

かう大隊長が言ふと、

『さうですな。』副官は考へて、『さうですな、あそこと、あそこと、それから向うに……さうですな。百門近くありますな。』

『百門ぢやきかない。』

かう大隊長は考へるやうにして、又あたりを見廻すやうにして言つた。『どうも、あの眞中の奴が殊に頑強だ……。あれを何うかしなけれや、F團はとても出られない。』

『それに、歩兵も偵察したものよりも多いんですな。』

『もう、少し進捗しなけれや困る！』

かう言つて大隊長は又熱心に双眼鏡を眼に當てた。

……それから戰況は益々味方の不利になつて行つた。

明日もうんと手柄を立てるさ。……大隊長のあの嬉しさうな顔を見るのが樂しみだ。』

などと軍曹や伍長は話した。

そして、朝早く、まだ夜の明けたばかりに、勇ましく勢込んで、その山の小さな峠を越して、此方へと出て來た。朝の山は美しかつた。オレンヂ色に染まつた空、その空にくつきりと碧く黑く浮び出すやうに出てゐる山の連亙、深く穿たれた谷、朝の白い靄に包まれた楊柳、峠を越して此方に出て來る路は、片側は高粱畑で、片側は赤褐色の山坂、その間をうね〳〵と曲りくねつて、下へ下へと下りて來た。あるところでは綺麗な水が潺々と流れてゐるので、兵士達は一人二人そこに行つて、手巾などを濡した。それから一歩、二歩、やがて、今の陣地、それから散兵、つゞいて凄しい砲聲、砲烟、黃い白い炸彈……。

『よう、來るぞ、來るぞ彈が……。』

などと始めは言つてゐたが……。

午飯を食ふ時分には、まださう大して戰況が我に不利ではなかつた。負傷者、戰死者は大分出來たが、一歩も先に出られない位敵の砲彈は來るが、それでも味方の砲はまだ立派に敵に對抗してゐた。F兵團が何うかして出よう出ようとしてゐるさまもそれとはつきり指さゝれて見えた。『もう、しかし、何うかなりさうなもんだな。』かう言ひながら、散兵線から少し下つた楊柳の涼しい蔭で、大隊長も副官も一緒に午飯を食つた。飯の菜は、鮭の罐詰で、それを副官は罐切で切つて大隊長の前に出した。

又、誰かが叫鳴つた。しかし、樹に上るといふことが死そのものである今では、誰もこの命令に應ずるものはなかつた。依然として、小さい赤十字の旗は、楊柳の上に飜つてゐた。

砲彈は凄しく炸裂した。

この大隊は他の大隊と同じく、今朝山を越して——山と言つてもそれほど高い山ではない山を越して此の谷合へと進出して來た。昨夜は山の陰のやうなところに半ば宿營し、半ば露營した。其處には小さな村があつて、楊柳の綠葉の下に綺麗な水などが流れてゐた。百姓の支那人が不安さうな顏をして、民家の扉から此方を見てゐた。砲車がドシドシ山の方へと行つた。

『いよ〳〵明日は打突かりだ!』

『何だか、貴樣の顏色が變だぜ、明日は用心しろ。』

『それよりも貴樣が用心しろえ。ぶる〳〵慄へるには、まだ早いぞ。』

こんな會話が其處此處に起つた。かと思ふと、『この山を向うへ出ると、すぐ敵ださうだぜ。騎兵が今朝打突かつたさうだ。何でも、かなり堅固に固めてゐるらしいぜ。ひとつ明日はうんと打突るんだえ。……何でも、F兵團が右から出て、その向うからS支隊と連絡を取るのが作戰の計畫ださうだ。S支隊と連絡が取れさへすりや、敵はもう此方のものださうだ。』かう少尉は副官と話した。

『この大隊は運が好いから大丈夫だ。Tでも Kでも、上陸以來、好い日ばかり出して來てるからな。

この大隊長のゐるところから、少し下つて、高粱の畑があつて、その向うに、楊柳の鬱々と青く茂つたところがあるが、そこが慘憺たる光景であつた。暑い日影に僅かばかり涼しい陰をつくてゐるところに、小さな赤十字の旗が飜つてゐて、そこに擔荷に載せられた傷いた兵士が續々やつて來た。續々……實際續々である。擔荷からは、赤い血が流れ、青白い顔が空に向ひ、或者は苦しい凄しい唸聲を立てた。そこに又敵の砲彈が來て破裂した。と、擔荷をかついた兵士が腦を打たれて、ばつたり倒れた。

『おい旗を下せ！　目標にされてる。』

かうテントの中から誰かが呶鳴つた。しかし、その柳の樹の枝にかけられた赤十字の旗を下すものがない。グングンと砲彈は鳴つて通つた。

テントの中でも、混亂と焦燥と恐怖との縮圖そのまゝを見るやうであつた。其處に一杯に並んで倒れてゐる傷者の中には、最早、死んで手足が突張つてゐるものもあれば、今死なうとして、苦しさうに手足をもがいてゐるものもある。海を渡つて來る途中、浪花節が上手で、毎夜引張出されて人々を樂しませた上等兵Tは、午前に腹部貫通で、此處に運ばれて來たが、非常な出血で、繃帶も眞赤になつてゐたが、それも今、呼吸を引取らうとして、首を彼方此方に動かした。その苦痛にもだたえ青白い顔の上を柳の葉を漉した日影がチラチラした。

『おい旗を下せ！』

『さうですな。』

かう傍にゐる副官は言つた。

山梁に沿つて、ぞろ〳〵下りて行くのが、黑く線を引いたやうになつて、午後の日に照されて見えた。あれに退却されては、何うすることも出來ない。この大隊とそれに連絡した第二大隊とが全く敵中に突出して殘された形になる。かう大隊長も副官も思つた。萬一を期した味方の進出も、もうこれで駄目になると思ふと、じつとしてゐられないやうな氣がした。

『命令は來ないか、まだ。』

『參りません。』

『ぢや、此方から、傳令を出せ！』

かう命令したゞ、その命令が容易に實行され得べきものでないといふことを、大隊長自身も知つてゐた。聯隊本部のある、聯隊長のゐる第一大隊は、その右方三百米のところにゐるのだが――辛うじて砲烟の下に連絡を取つてゐるのであるが、そこまで傳令を出すのは容易でなかつた。その使者は無論死を覺悟しなければならなかつた。しかしかうじつとしては居られない場合である。

『E軍曹に命令！』

かう大隊長は命じた。

すつかり沈默した。初めは無駄な砲彈を遣はないためだと思つてゐたが、さうではないのが段々わかつて來た。思ひもかけない敵の砲兵の援護陣地が其處にも此處にもあつたので、味方はとてもそれに對抗することが出來なかつた。それでも第四の味方の砲兵陣地は、最後まで獅子奮迅の勢で、敵の砲を三面に受けながら奮鬪した。『えらいな、流石にSだ。砲術家のSだけある。あの奮鬪振は目ざましいぢやないか。』かう大隊長は言つた。しかし、それも午後二時頃までであつた。いつかそれも沈默させられた。

『Sは戰死した！』

かういふ報が何處からともなくこの谷合にも傳へられて來た。

『本當か。』

『本當だとよ。』

『それは殘念だな。』

かう人々は言つた。

大隊長は四十二三で、背の大きい、眼の鋭い、髯の濃い男で、平生その髭をひねる癖があつたが、かれは双眼鏡を外しては頻りにその髭を烈しく捻つた。

『お、F兵團は退却するぜ！』

かう言つたかれの顔には、隱すことの出來ない恐怖と狼狽と戰慄とがありありと見えた。

ラに遠く連つてゐるが、敵の砲彈は凄じく其附近に來て爆裂して白い煙を擧げた。敵の步兵隊からはをり〳〵小銃の丸が霰のやうにやつて來た。

そこにゐる兵士や將校は、その生活や艱難がすつかり昔から互に雜り合つてゐるやうな人達で、故鄕も同じなれば、言葉も同じく、何年も互に見知り合つたやうな顏が多かつた。遠く離れてゐても、なつかしい本國の故鄕の空氣は其處にも此處にも名殘なく現はれてゐた。そこに、親一人子一人で泣きの淚で別れて來た從卒もあれば、貰ひ立ての若い綺麗な細君と十日しかゐないで出發して來た少尉もゐた。どんな時でも滑稽なことを言つて人を笑はせるM上等兵、愚痴ばかりのべつに言つてゐるK伍長、虎髯のこわい顏をしてゐながら存外やさしいB軍曹、さういふ人達は、上陸以來互に嘗めた艱難と辛勞とを一緒にして、矢張、この敵の砲烟に包まれた狹い谷合にゐたのであつた。

F兵團は敢てぐづ〳〵してゐるのではなかつた。其處は一番烈しく攻擊されてゐて、出たいにも何うしても出ることが出來なかつたのであつた。そこでは午前の中に、聯隊長が戰死して、古參の大隊長が變つてその指揮を取つたが、それも亦戰死した。此方で見てゐると、その兵團の上には、敵の砲彈が實によく行く。白い黃い黑い烟が縫ふやうに颺る。砲彈の炸裂する光が電光のやうに閃めく。『えらい眼に逢つてゐるな。味方の砲は何うしたんだ。』かう此方で見てゐる兵士達は言つた。

味方の砲の兎に角これに對抗し得たのは、午前の中だけであつた。午後からは何うしたのか、味方は

赤い夕日

味方の砲兵陣地が何うも捗々しくない。敵にすつかり壓倒されて了つてゐる。從つてその前三百米位の處に出て掩體に凭つてゐる一二箇大隊が兎角敵の歩兵隊に肉薄されるやうな形になつた。それが午後一時頃から續いた。

『何うも危いな。』

掩體の中の少し高い處で双眼鏡で絶えず戰況を見てゐる大隊長は言つた。

『向うが少し出て見れると好いんですがね。何うもあのF兵團がぐづ〳〵してゐますからな。』矢張双眼鏡を手にした年の若い副官が言つたが、そのまゝ立つて向うの方へ行つた。その近所にゐるのは第二中隊で、第一と第三とは、その向うに長く散兵を敷いてゐた。それが午後四時過の日影に明かに曲線をなして見えてゐた。

それは谷合のやうな處で、あるものは畑の縁、或者は窪んだ土地、あるものは崖のやうな處にバラバ

大きな丸髷に派手な手絡をして、自分の羽織と今年の流行の肩掛と、それから子供達の着物などを買ひに電車に乘つて大通の大きな呉服屋の店へと行つた。

その次の日曜日は、小春日和の天氣もよく風もなく、紅葉も菊も丁度見頃で、近郊の散策に出かけて行く人達が多かつた。懷の喛かい主人は、長火鉢の傍で烟草をぷかぷかふかしてゐたが、『何處かに出かけて見ようかね、好い天氣だから。』かう言つて、其處に來た細君に笑ひかけた。細君は喜んで應じた。子供達も皆な伴れて行くことにした。乳呑子は子守が負つた。留守番には近くにゐる細君の母親が來た。

始めは市川あたりまで出かけて、ゆつくり紅葉でも見て來る主人の意見であつたが、途中で急にその話が變つて、細君の望むまゝに、矢張淺草に行つて、連鎖劇を見ることゝなつた。電車を下りた二人は、子供を伴れながら靜かに歩いた。

に丁度よく心がけて捜してゐた家が、そこからあまり遠くないところにあつたので、四五日しての日曜日に、早速そこに引移ることとなつた。

通りからちよつと入つたやうな靜かなところで、格子戸を明けて入ると、玄關が三疊、その隣が六疊の座敷、居間はぐるりと緣側を廻つて行くやうになつてゐて、家の間取の工合が至極好かつた。細君も長年の店屋住ひからかうしたしもたやに移り住んだといふことを立身でもしたやうにして喜んだ。子供は子供で、家が廣いので、めづらしさうに、彼方此方と喜んで驅けて歩いた。『今夜から、雨が降つても大丈夫だ。ゆつくり寢られる。』かう言つて主人も樂しさうな顔をした。

主人は長押に額を釣つたり、床の間に幅物をかけたり、細君の註文にまかせて、勝手に棚を吊つてやつたりした。そして一片附してから、引越蕎麥を子供達と一緒に食つて、一本の晩酌にほてつた顔を赤くしながら、近所にある不動の緣日に出かけて行つた。

あくる日は、主人はいつもより元氣よく靴の音を立てゝ役所へと出勤した。

百年前に根太の下に壺に入れられて隱した金、祖母もその爲一生贅澤に人に羨まれて世を送つた金、母親も美男子の父親の道樂と生活とに限りなくみついだ金、言はばまアその金の最後の金で、今また主人の細君の質が受け出され、借金が返され、新しく借りた家の敷金が出されたのであつた。主人はビールーダースをつかひものにして、醫師に行つて、溜つた藥價を綺麗に拂つた。細君は近頃にめづらしく

ふ積ぢやなかつたんだけれども。』とか『わるかつた、それはわるかつた。』とか、『でも、あの家ぢやねえ、お前も見て知つてゐるけれど、それはひどいんだから、雨が降ると、外も同じやうなんだから。昨夜もあの雨で困つた。』とか言つて、靜かに妹をなだめた。『他人ぢやないから、三百圓出したんだが、他へ賣るとなると、その半分にも賣れやしない。』こんなことをも言つた。

妹は妹で、その昔の曾祖母を持出して『すんだことは仕方がないけれど、曾祖母のその根太の下に埋めたつていふ金で買つた家だから、その金は、言はばまァ、その一番後の金のやうなものだから、大事にして、別にして取つて置くやうにしなければ仕方がありませんよ。ちやちやぷちやにして了つては、母さんの心配した心も通らないんだから、……私だつて、こんなことは言ひたくはない。それを言ふのは、つまり兄さんの爲めなんだから。』かう言つて、しばし間を置いて『何うして、さう男の方は意氣地がないんでせうね、田中家は。』とまた例の父親と母親との話が出た。

『これから眞劍にやるよ。心配はかけないやうにするから安心して呉れ。新しい生活に入る氣でゐるから……。さうとも、借家に入つちやぐづぐづしてゐられやしない。』かうやさしく主人は言つて妹をなだめた。

賣買登記をすまして、細君の弟から主人が半金を受取つたのは、その年の十一月の末であつた。それ

『私だつて、さうよ。年中、子供の守りと臺所拵へばかりしてゐるんですもの。たまにや、活動位には行かなくつちや――』
『それや、たまには好いさ。時々は仕方がないさ。しかし注意はして貰はなくつちや――此際だからね。』
『わかつてゐますよ。』
『いろんなことを言ふねぇ。』
かう言つて細君は莞爾して、『それに、あのお召と、コオトとは出して下さいね。』
『だつて、あれは貴方が此春病氣した時に入れたんですもの。』
主人はちよつと胸算用をした。あの質を出すとすれば、又十五六圓もなくなつて行つて了ふのであつた。
『あれは是非出して貰はなくつちや――』
『好いよ、好いよ、わかつたよ。』
面倒臭さうに主人は言つた。かれは二階に上つて行つた。
話をしない譯にも行かないので、妹の家に行つた時には、主人は頭からその事について一言の相談もなかつたことについての皮肉やら反抗やらを妹から受けた。しかしそれを柳に風と受け流した。『さうい

母親の心配したやうに、萬一役所をやめなければならない時のことなどが新しくかれに氣になり出して來てゐた。しかし、醫師への借金、その他へ借金、さういふものは、家でも賣つた金で何うかするより他仕方がなかつた。

『本當に、これからは、新しい生活に入つた氣で、しつかりしなくつてはいけないぜ。』

かう主人は細君に言つた。

『大丈夫ですよ。』

『本當に、今迄のやうな氣でゐちや駄目だぜ。活動寫眞なぞばかり出歩かれちや困るぜ。それに、子供の無駄づかひも好加減にしないといけない。これまではこんな家でも自分の家だから心丈夫だつたけれども、これからは借家だからね。そのつもりでないといけないぜ。』

『貴方もあんまり食道樂をやめなけりやいけませんね……。』かう言つて細君は笑つて、『貴方の方だつて、隨分大きいんだから。やれ淺草だ、やれ上野だつて出て行つて食べてくるお金だつて尠くはないんですからね。』

『だつて、少しは仕方がないさ。朝から晩まで六日働いて、一日の休みだもの、月に一度や二度は仕方がないさ。』

細君は笑つて、

後の金のやうなもんだからね。』妹はかう言つたが、考へて、『何うして、田中家の男の方の血統はあゝ意氣地がないんだらう。父さんだつて、矢張、母さんの金で一生暮して來たやうなもんだから。』

『でも、仕方がねえぢやねえか。そんなこと、仕方がねえ、言ひたけりや、正さんに言ふが好いや――。』

『お前さんは、面倒臭くなると、すぐさうだから、張合がないよ。』かう言つた妹の眼には涙が浮んだ。

それにも拘らず、家を賣るに就いての相談は進んで行つてゐた。

主人の細君の弟は自動車などで儲けて、いくらか金を持つてゐた。弟は自分では店は出來ないが、閑な母親があるから、屋根やら、店やらを直して、それに年寄の仕事として矢張雜貨商をやらせる計畫らしかつた。弟はその母親と一緒にやつて來た。

死んだ親や妹の心配は、矢張主人の心配であつた。いざ賣るといふ段になると、流石に主人も好い心持はしなかつた。種々な記憶、さまぐな光景、さういふものが家についてゐる。そしてそれが妹の心に絡み着いてゐるやうに矢張兄の心にも絡み着いた。父も母も兄もすべてそこで死んだ。二階の物干から見える大きな社の森、電車を隔てて向うに打渡された昔の濠、それに近所の店などにも別れ難いやうな氣がした。此處に住まれなくつて移轉して行つた人達のことなども考へられた。それに、實際死んだ

太の下に埋めた金の殘りで買つたんだから……。』

『何の錢で買はうと、それは仕方がない。今ぢや、何つて言つたつて、正さんの物だ。正さんがするのに、文句はねえアな。』

『本當に、同胞なんか賴りになりやしない。皆な鼻どんに卷かれて了ふんだから……。男つて、皆さうかね。』

かう突かゝつて行くので、亭主はわざと避けるやうにして『まア仕方がねえや。』

『その位なら、母さんのゐる中に、あの店を賣つて了へば好かつた。それを、生きてゐる中、母さんはいつでも心配してたんだ。正は病身だから、役所でもやめた時には、店さへありや、まアまア細くなり取附いて行かれるからつてあれほど心配してたんだから。……本當に、足りない足りないで、每月取つた月給で生計を立てゝ行けずに、食ひ込んで行つて了つては、役所にあゝしてつとめてゐる中は好いけれど、萬一の時には何うするつもりだらう。嫂さんだつてもう少ししつかりして呉れなくつちや、本當に正さんが可哀相だからね。……それを言ふんだよ、今度だつて……、あの弟に讓るつて言ふんだが、三百圓で讓るつて言ふんださうだが、その金だつて、皆な一度によこすんだか、何うだか。每月、ちびちび貰つて行つて、へいへいして、あの弟から助けて貰ふやうにして金を貰つてさ。そして、なし崩しに使つちやつちや何にもなりやしない。私だつて、あの家は育つた家だからね。それに、曾祖母の金の最

凄じい風雨の音がきこえた。

主人の妹が間接にその話――愈々その家を賣るといふ話を聞いた時には、その亭主を長火鉢の向うの方に置いて、愚痴やら反抗やら悲嘆やらを並べた。妹の亭主はある工場に勤めてゐる職工であつた。

『だから、母さんが言はないぢやない。』

『だつて、仕方がねえや。』

『お前さんは、すぐさう仕方がねえ仕方がねえつて言ふけれど、一體嫂さんも正さんもわるいんだよ。兎に角、親が殘して行つて呉れた家ぢやないか。』

『だつて、しやうがねえぢやねえか。そんなになつちやつちや――正さんだつて、いろいろ考へたんだァな。考へた揚句だァな。それも、商賣をしやうつて言ふんなら、そこにも理窟があるけれど、しないんなら仕方がねえやな。』

『それに、嫂さんの弟にやらせるつて言ふんぢやないの、變ぢやないかね、お前さん。それなら、それと、私へだつて、相談でもしたなら格別、賣るのうの字も言ひやしないぢやないの?』

『人のことァ、人のことぢやねえか。』

『それはさうだけどもさ……。あれは皆な母さんが出したお錢で買つた宅なんだから……。曾祖母が根

『直すつたつて、大變だし。』

『さうね……。』

『それに、此家は餘り住んでゐたいとこでもないんだよ。方角がわるいから、そのため病人が絶えないなんて言はれてゐるんだからな。』

『それもさうですね。』

『賣つちやはうか。』

『賣るなら、弟があとを引受けて商賣したいやうなことを言つてゐましたから、弟にやらせる方が好う御座んすよ。』

『さうだな。』

考へて、『さうしても好いな。親の殘して行つて吳れた家だから、成るたけ離れたくないとは思ふけれど……』

『たつて、これぢやしやうがない。』

『さうだな。』

かういふ會話の中にも、雨は絶えずボタボタと洩つた。隣の空地に面した壁の大きく濡れたのが夜目にそれとはつきり見られた。

かう細君は言つた。

をりをりたづねて來る主人の妹も、母親の死んだ後の店の荒廢したさまを見ては、嘆いたやうな口の利き方をした。『矢張、母さんの言つた通りね。』などと言つた。それを細君は皮肉に取つて、『あんなことを言つてつたよ、まア、お鳥さんは。』と言つて口惜がつたりなどした。

雨の降つてゐる最中に、妹が來た時には、何處と言はず彼處と言はず到る處に雨 洩れるさまを て歸つて『えらい家になつちやつた。あれぢや仕方がない。何うかしたら好さゝうなもんだのにね。正さんも、よくあゝして放つて置かれるね。』かう言つてその夫に話した。

ある夜は、床を取つて寢てゐる夜具の上に二箇所も三箇所も雨が洩るので、夜中主人と細君とが起きてゐた。主人の顏は蒼白く灯に照されて見えた。

『いつそ賣つちやうかな。』

細君は默つてゐたが、暫くして、

『何うせ、駄目ね。商賣をする氣なら、此處にゐても好いけども、何うせしないんですからね。』

『お前がする筈ぢやなかつたのか。』

『私には、私には、とても出來ませんもの。子供の世話だけでも大變だ。』細君には去年生れた乳呑子がゐた。

してそれを一方に片附けたりした。『困るな。』主人は蒼い顏して、それが氣にかゝつて仕方がないといふやうに、ぽつぽつ落ちて來る雨滴を眺めた。

學校に行く子供達は、『母さん、こんなに濡れちやつた。』と言つて、泣きさうにして、隅に置いた風呂敷包の中の淸書双紙のしたゝかにぬれたのを出した。

晴れた日には別にそれほど氣にもしないが、曇つて雨が降りさうになつたり、夕暮から雨が降り出したりすると、主人も細君もすぐ悄氣出した。

『直すかな。』

かう言つて主人は考へて、『直すとしても、ちつとやそつとでは駄目だからな。……それに直しても元のやうになるかしら……』かう言つた主人は、いつそこゝを賣つて、しもたや住ひをしやうかなどと考へてゐた。ある時、屋根職に聞いて見ると、ちよつと見に來て、『さア、これぢや、ちつとやそつとの手入では駄目ですね。どゐ葺から直さなけりや。』と言つた。そんな金を主人は持つてゐなかつた。母親の死んだあとに殘つた金も、大抵は使ひ果してゐた。

それに、主人は醫師や何かに、澤山ではないが、拂はなければならない借金を持つてゐた。

『いつそ賣つて了ふかな。』

『その方が好いでせう。』

母親もその昔の話は少しも知らなかつた。

母親の死んだ跡には、百兩位しか殘つてゐなかつた。

隣はやがてすつかり破壞されて、暫くの間は家も建たず、空地になつたまゝ、子供の好い遊び場所になつた。夕暮などには近所の上さん達も其處に涼みに行つた。

やがて秋が來た。雨の多い秋が、わけて今年は例年に比べて非常に雨の日の多い秋が……

雜貨商の店では、もう碌々商賣もしてゐなかつた。母親の言つた通り、店はサヽフサになつた。近所でをりをり買ひに來ても、もう店には碌な品もなかつた。

それに、雨が降り頻る秋になつてから、雜貨店では非常に困つた。破壞された隣に影響されて、屋根からも、庇からも雨が頻りに洩つた。風の添つた日には、外から吹きつけられる壁は、くしやくしやに滲み透つて濡れた。

『困りますね、本當に。』

かう細君は言つた。

凄じい風雨の日には、其處からも此處からも雨がぽたぽた洩れた。金盥に雜巾を入れて置いたり、小桶を持つて置いて行つたりしても間に合はなかつた。店の方では賣れ殘りの品物が濡れるので、大騷ぎを

やうなところに養子になつて來たのもその金のためであつたことををりをり考へた。

かの女は父親に何れだけその曾祖母の遺産の金をみつ いだか知れなかつた。京都へ在番で行つて、そこで父親が京の女に夢中になつたのもその金であつた。それから御維新になつて、ぶらぶら遊んで居食をしてゐる時分にも、あぐりといふ町の藝者に父親は入揚げて、何ぞと言つては、旨く母親を騙して金を持ち出して行つた。後には金も減つて來てゐたし、それに無限につゞく居食の生活のことも考へなければならなかつたので、母親は財布尻のしめくゝりをよくしたり、ないものにして父親に内所で他へ預けたりしたけれど、それでも矢張、東京に出て、商賣を始めるについての資金などは、母親が皆な出した。下谷の家を買つたのもその金で買つた。又下谷の家を賣つて、此方に移つて來る時にも、今の家を買ふための不足はそれで補つた。

しかし根太の下に埋めた壺の金も、長い間には大方使ひ果して了つた。父親などは殆どその金で最後の呼吸を引取る病床の藥代までも拂はせたやうなものであつた。子供達のためにも、母親は殘り少なになつたその金を出した。

『何うして、そのお婆さん、そんなお金をためたんでせうね。』

娘が何うかしてこんなことを訊くと、

『何うしてさう貯めさつしやつたかな。』

んぢやが、お城下でもな、金持の婆さんつて言つて評判ぢやつたもんぢや。何しろ、昔のことで、千兩箱を三つも四つも積んだつて言ふんぢやで、大したもんぢや。千兩つて言へば、昔は今の一萬兩にも當るんぢやからな。そのお婆さんを微かに私も覺えてゐるが福々しい好いお婆さんぢやつた。私のおつ母さんに聞いた話ぢやが、その時分は、銀行といふものはなし、金を普通にして置いたぢや危いので、疊を上げて、根太の上に、壺の中にザラザラと小判を入れて、そして、こつそり埋めて置いたもんださうぢや。それを、私の母さがある時見たので『おつる、お前、誰にも言ふぢやないぞ。』つて怖い眼をして言はれたさうざや。それぢやて、母さの方の系統には、金が澤山にあつたぢや。お前のお婆さんも、おつるつて言はしたが、金を澤山に持つてゐたぢや。』

その金がずつと續いて來て、そのためいろ〳〵なことがあつたことなどを母親は繰返した。母親の母親も、その金のお蔭で、一生を贅澤に暮した。田舍侍の妻でありながら、江戸に毎年五六度は出て來て、芝居見物などをした。かくした男なども持つてゐた。母親はそれからそれへと思つた。矢張自分だつてさうであつた。娘時分には、藩でも人が指さすほどの贅澤をした。縮緬の着物や指環やさういふものを澤山に持つてゐた。江戸にも度々母親に伴れられて出た。それも歩きなどはせずにいつも駕籠にばかり乘つて行つた。誰も彼も皆かの女を羨んだ。そして母親のおつるの死んだあとには、金が澤山に殘つてゐて、それがかの女のものとなつた。母親は、その時分藩で評判な美男子であつた父親が、自分のものの

な。』こんなことを言つて笑つた。それが死ぬ近くなると、『何うせ、正雄は店をやらないにきまつてゐる。私が死ねば、店はさゝほさゝ、ぢや。その位なら、今、賣つて了ふ方がましぢや。』などと言つてゐた。

一家がその店を買つてそこに移つて來たのは、今から二十年も前であつた。その以前七八年前にかれ等は田舍の城下町から家を疊んで東京に出て、本所に一年、下谷に五六年、矢張同じやうな雜貨商を營んで暮した。二本差した侍の境遇から町人の境遇に馴れてゆくに就ては、人達は何んなに苦しんだか知れなかつた。物は思ふやうに賣れなかつた。仕入が不馴なので、高い物を買つて損をしたこともあれば、わるいものの口にかゝつて騙されたことなどもあつた。半ば居食同樣に、持つて居た金の減つて行くのに氣をくさくさせたことも再三ではなかつた。しかし其間にも何うやら時が經つた。此處に引越して來た時分には、父親も母親もいつか町人氣質になつて、商賣も何うにか彼うにか繁昌するやうになつてゐた。

死に近い頃には、母親はいつも店に坐つてぼんやりして昔のことなどを考へてゐた。遠い昔のことを……。二本差した時分の男のことや、殿樣のことや、お城のことや、それから自分の稚い時分に世話になつたお婆さんのことなどが、夢か何かのやうに、をりをり母親の頭に浮んだ。

母親は嫁に行つた娘のお鳥に話した『その婆さんはな。お鳥婆さんつて言つてな。金持ちぢやつた。お前の名も、お前が生れた時にそのお婆さんにあやかるやうにつてな。それでお鳥つて言ふ名をつけた

宅でも打壞してゐるやうだ。これは堪らない。』と言つて顏を蹙めた。主人は病身で、蒼白い顏をして、痔の出血やら胃腸やらでをり〳〵苦んだ。なにがし省の屬官で、長年勤めてゐるので、今では四五十圓の月給を取つてゐた。

此店でも――こんな小さなあはれな店でも、一時は店先に買手が群を成すやうな繁昌を見たことがないでもなかつた。士族上りではあるが、如才のない愛嬌のある母親は商賣上手で、時には一家四五人の生計を立てゝ行くこと位は樂に出來るほどの收入があつたのであつた。其時分は品の好い鼻の高い父親や肥つた色の白い妹などがゐたが、やがてその父親ぱ病んで死に、妹は緣があつてある處へ嫁いて行つた。主人にも色の淺黑い背の高い細君が出來、續いて子供が二人三人と出來て行つた。主人は病身ではあるが、それでも大抵は休むやうなこともなく、每朝役所へと出かけて行つた。母親もやがて老いた。普通ならば樂隱居でもして、のんきに暮して行く年であるのに、息子のためをのみ思つて、他で見ても氣の毒と思はれるやうな腰を曲げて、死ぬまで店で客に應對してゐた。母親は何ぞと言ふと言つた。『何うも困るぢや。親の心子知らずで、私の考へでは、正雄にもしものことでもあつて、役所でも退かなければならないやうなことがあつた場合には、こんな店でも何んなにか役に立つだらうと思つて、かうして骨を折つてゐるけれど、當人にはねつからそれが通じないぢや。お園でもやつて吳れると好いが、あれにもさういふ氣がないぢや。それなのに、かう一生懸命になつて、親馬鹿つて言ふが、ほんにさうぢや

埋めた金

ある通に面した町家づくりの長屋の一軒が壞されたので、その隣の雜貨商の店では、一方ならぬ迷惑を感じた。勿論、それを始める前に、隣を買つた人や、地主がやつて來て、『何うです、お宅でも、一緒にお賣りになりませんか。棟つゞきになつてゐますから、此方ばかり壞すと、何うしても御迷惑になるでせうから。』と言つて話を持込んで來た。雜貨店でも、一昨年主としてやつてゐた母親が死んでから、店はさびれるし、品物はなくなるし、何うせ近い内にやめなければならないやうになつてはゐたが、それでも二束三文に薪の値か何かで買はれても詰まらないと言ふので、その時は好加減にそれを謝絶した。

やがて隣の破壞は始まつた。壁の落ちる音、瓦の落ちる音、ことに大きな垂木が一緒に通じてゐるので、それを鋸で引くと、此方の垂木も庇も壁も皆な凄じく響を傳へた。壁なども落ちれば、瓦と瓦との間の隙も出來た。家の土臺などもそれにつれてぐらぐら動いた。

毎朝此處から役所へ勤めに行く主人は、ある日曜に一日二階にゐて、『えらい目に逢ふな。丸で自分の

『酒を一本あつくして下さい。つまらないから、酒でも飲みませうよ、ね。』

『飲んだことあるの？　酒を？』

『ないけどもさ……。好いわ、かういふ時でなくつちや、酒なんか飲む氣になれないわ。好いでせう、つき合つても……』

『でも……』

『好いのよ。さうでもしなくちや詰らないわ。折角雪見に來てこれで歸つては張合がないもの。』

『持つて來るんだね、酒を？』――其處に突立つた婢はかう言つて促した

『持つて來て下さい。』

婢の下りて行つたあとで、春子は、『何うかしたの？　いやだね、やけになんかなつては……。』

『大丈夫だつてば――わからないのね。この次の下りは四時だから、それまでは好いわ。すつかり話すから、何も彼も話すから……。それにしても滑稽だわね。わざわざこんな寒い山の上まで來て……』そんなことを言つて千鶴子はまた大きく笑つた。

て來た婢は、障子を明けて手紙を出した。

渇したもののやうに、ツと立つて行つた千鶴子は、當人自身の姿でなくて、手紙であつたのに先づ氣を焦立たせたやうにして、急いでそれを婢の手から取つて封を切つた。いきなり、

『駄目、駄目。』

『來ない？』

『來られないッて……』急に大きく笑つて、『そんなことだと思つたわ。』

『何うして、來られないの？』

『叱られちやつた……。母さんに見られたんだッて、こんなことをして吳れちや困る。不謹愼だッて、叱つて來た。あはは。』とまた大きく笑つた。

『だッて、來られさうなもんだのにね。』

『無理なのよ、母さんに見られちや駄目なのはちやんとわかつてゐたんだけれど……』

一度揉みくちやにした手紙をまたひろげて見て、『丁度、運わるく、母さんがゐたんだッて、店に——だからこの手紙もやつとの思ひで書いたんだッて。便利屋の歸つて行つたのを追かけて渡したんだッて、あはゝ。』と昂奮したやうにして笑つた。

急に、手を鳴らして、婢を呼んで、

を二人してもつと瀟洒な理想的な東京の人達の避暑にやつて來ても泊ることの出來るやうにしたいといふやうなことを話し合つたことをかの女は思ひ出した。しかしその空想も、今は半ば崩れかけた……。あのひろい入口、圍爐裏、そこに運好く男が坐つてゐて、出來ることなら、誰にも知れずにあの手紙を受取つて吳れればいいが……。ふと氣が附くと、肉は既に煮えて、湯氣が白くそこから騰つた。

春子はそれに箸をつけながら、『硬いのね。』

『何うしても、町のやうなわけには行かないでせう。』

『もう、煮えてよ。』

『さう……』またしても、その手紙の受渡しが千鶴子には氣に懸つた。肉を一片二片口に入れながら、もう行きついた頃だと思ふと、何となく氣がそはそはして落附いてゐられなかつた。『何だか變だ。私煙草一つ買つて貰はう。』かう言つて千鶴子は手を鳴して婢を呼んだ。

千鶴子は煙草をぷかぷかふかした。

春子にはそれが、その心配が、その落附かない態度が、よく飲み込めてわかつたけれども、さうかと言つて、それをひやかす氣にもなれなかつた。來るだらうけれども、もし來なければ可哀相だなどと思つた。またこの雪ではとても來さうもないやうにも思はれた。

肉も大方食つて了ひ、話も何彼としつくした頃、使ひにやつた便利屋は漸く歸つて來て、やがて上つ

『何を食べて？　肉？』

『さうね、何にもないでせう。此處には――。肉より他には。』春子はかう言つたが、『もう少し、待つちや、何う？　何うせ、來るんでせう？』

『何うだかわからないわ。ゐないかも知れないもの。』

『來るわ、屹度……』

『だッて、來るまで待つてゐられないわ。ぢや、肉ね。』

かう言つてまた下りて行つた。

粉雪が吹き込んで來るので、前の雨戸は明けて置けなかつた。で、二人は戸と戸の間を薄目に明けて、そこから入つて來る微かな光線に滿足して、やがて婢が運んで來た鍋だの、肉だの、蓮華だの、箸だのを火燵板の上に並べた。

　男なら酒を一本と言ふところだが、二人ともまださうした興味を持つてゐないので、火燵に向ひ合つて當りながら、葱だの、燒豆腐だの、肉だのをその中に入れて、そして唯その煮えるのを待つた。千鶴子は便利屋が降りしきる雪を衝いて、林に添ひ、氷つた池に添ひ、雪の積つた崖に添つて、次第にその山の村近く歩いて行くさまを想像した。またつゞいてその山の村の中ほどにある舊い大きな家を想像した。それは古い昔の旅舍であつた。街道を草鞋ばきの人達の歩く時分に泊つた旅舍であつた。その旅舍

『聞いて下さい……それから、あの賃錢も聞いて……』

千鶴子の顏はいくらか赧くなつてゐるのを春子は見た。

暫くして婢はまた上つて來たが、『この雪だでな……行くものがねえッて言ふのを、やつと一人さがして賴みやした。……それだで、賃錢はやすくねえが……』

『いくら？』

『四十錢だッて言ふだ……』

『四十錢？　高いのねえ。』かう千鶴子は言つたが、『好いわ、それでも……行つてさへ吳れゝば――』

『なら、それで賴むかね。』

『爲方がないわ。』婢の出て行くのを見送つて、『高い、高い。いつもなら、十錢でも高いのに……』

『本當ねえ……でも、この雪だから。』

千鶴子は、心置けない友達の前にもいくらか氣が置けるといふやうにして、火燵板の隅に西洋紙を置いて、達者に紫鉛筆を走らせたが、そのまゝ手早く橫封の封筒に入れて、そして宛名を書いた。

今度は婢を呼ばずに、自分で階段を下りて行つて、『ぢや、ね、早く行つて來てお吳れつてね、返事を貰つて來るんですからね。』かう言つてその手紙を婢に渡した。

上つて來て、

粉雪が細かく吹き込んで來た。

『いつもだと、此處は山が見えて好いんだけれど……』

『さうねえ。』

かう言つたが、『寒いわ、此方に入つた方が好いわ。』

室の方に入つて來る千鶴子を笑ふやうにして見て、

『えらい雪見だこと。』

『また。あんなことを……これから始まるのに、雪見が……』

千鶴子はいきなり袂からコッピー印の色鉛筆と罫の入つた西洋紙と薄紫色した小型の横封筒とを出して、火燵板の上に置いた。

『もう、お午ねえ、お中が減つたでせう。何を食べて？　肉？』

『まア、それよりも、そつちを早くなさいよ。ゐなくなるとわりいわ。折角來た效がなくなつてよ。』

『まア。』

と言つて千鶴子は睨めるやうな表情をしたが、手を鳴して婢を呼んだ。

やがて入つて來た婢に、『新田まで、便利屋をやつて貰ひたいんですが、あるでせうか。』

『御座りやすら……』

つたが、三階の旅籠屋までの間は、距離にしては僅かに一丁位しかないのであるが、それでもかなりに辛い寒い路を春子は覺えた。郵便局の入口にはそれでも國旗が立てゝあるのが降頻る雪の中に見えた。

旅舍の戸を明けて入つて、二人はほつと呼吸を吐いた。旅舍では、丁度亭主が其處に坐つてゐたが、此頃では製板所の人達か、鑛山の人達でなければ滅多にやつて來ることのないこの山の上に、かうした若い二人の娘客の入つて來たのを不思議のやうにして迎へた。亭主は千鶴子を何處かで見たやうにも思つた。

『ちよつと休ませて下さいな。』

『へ、……』

かう言つて、亭主は奥から出て來た婢に一言二言差圖をした。婢は二人を二階のとつつきの六疊の一間へと案内したが、やがて持つて來た十能に一杯に入れたオキを火燵の中へと明けた。

『おゝ寒……寒いわ、矢張山の上は、――』春子はコオトもぬがずに、かう言つて、いきなりそれに顏を當てた。

まァ少し火燵にでも當らなければ口もきけないといふ風にして、二人は默つて、火燵に體を入れたが、暫くして、千鶴子は、『暗いわねえ、一二枚雨戸を明けやうか。』かう言つて、婢をも呼ばずに、自分で立つて二枚ほど雨戸を明けた。

春子は一面千鶴子の戀に同情すると共に、その旅籠屋に男のやつて來るさまなどを想像して、このトリップも滿更興味がないこともないと思つた。その男は度々逢つて知つてゐるけれども、二人は何ういふ話をするだらう。こんなことを思ふと、此頃ではかなり深くなりつゝあるこの戀の將來なども思ひやられた。男も思つてゐるらしかつたけれでも、それよりも一層深く千鶴子の思つてゐる形が春子には面白かつた。當人同士は好いのだけれども、男の家庭や親類や世間で不滿足なために、この結婚問題は捗々しくないといふことも春子は薄々知つてゐた。

晴れてゐたなら、さぞ美しいであらうと思はれる高原の雪の路を、またこの前に來た時には紅葉が燃えるやうに夕日に照つた路を、春は蕨などが萠えて綠の色彩が林を生々させる間を、汽車は唯降り頻る風雪を衝いて、轟々として進んで行つた。

やがて山の上のさびしい停車場に來て二人は下りた。果して外は寒かつた。凄じい山風が横しぶきに粉雪を二人の顏やら體やらに吹きつけた。

『おゝ寒い……。』

かう言つて春子は傘で顏を掩つた。

二人しか下りるもののない汽車は、忽ちかれ等の前を掠めて過ぎ去つて了つた。二人はレールを渡つて、此方のプラットホームに來て、改札に切符を渡して、停車場前の人家の方へと雪を衝いて歩いて行

『行つて與れる？』

『だつて、一人ぢや家で出さないだらう？　可哀相だから、行つて上げる。』

『まア……』

と千鶴子は笑つて睨んで見せた。

今日は紀元節だから、何處か友達の許にでも遊びに出かけて行くといふやうな風をして、二人は溫泉のある湖畔の町を出て、そして停車場に來て上りの汽車に乘つた。その時はまだ日が明らかに積雪の上を照してゐた。山寄りの人家、一面に白く見渡される田畠、山の上の林は雪に埋れて、いかにもさびしい冬の光景をあたりに展げた。次ぎの停車場で汽車の留つてゐる間に、右の窓に見出した大きな山は、半以上深い灰色の雲に包まれて、その間からをりをり肩や背が隱見した。

また降り出して來たのを見て、

『困るねえ。』

から春子は言つた。そして、笑つて、顏を寄せて、何か囁くと、千鶴子も笑つて、『でも、雪位降つても大丈夫よ。』

『でも、下りると寒いだらうね。』

『寒い思ひなんかさせないわ。停車場から宿屋までだもの？』

山の旅舍

山の上に近づくにつれて、空模樣はまたわるくなつて、雪が巴渦を捲くやうに降り出して來た。『まァ、困つた！』かう千鶴子は思つた。

春子はコートに深く包まれて、並んで腰懸けてゐる。汽車の中はスチームで春のやうに、暖かであるが、外の寒いのは、林を埋めた雪、山を埋めた雪、町を埋めた雪、更にその上にも天地のあらゆるものを埋め盡さうとして降り頻つてゐる雪で想像された。

春子はかなりに深く千鶴子の戀の紛糾を知つてゐた。年が一つ二つ上だけに、また千鶴子よりはいくらか世間を見てゐるので、言葉や態度からも種々なことが飲み込めた。『明日一緒に雪見に行かない、山の上に……』かう昨日千鶴子に誘はれて、雪見に？　雪なんか澤山此方にあるのに……馬鹿々々しいといふ顏をして見せたが、それは雪見ではなくて他に理由があるといふことを知つた時には、わざと笑つて、『行つても好いわ。』

きい二階屋を照したりした。お鶴の輕い小刻みな足音は忙しげに夜深の空氣にひゞいてきこえた。

土手に上ると、川が見えた。灯が二條三條長く水に落ちて、下に並んだ家々の屋根が黑く指さされた。夜は寂として更けた。岸にかゝつてゐる船もなかつた。少し行つた處から土手を下りて、ある家の前に來て、お鶴は戶を明けて中に入つて行つた。それは常磐の出入の車屋の持家で、そこには親方の甥に當る色の白いいなせな男がひとりで起臥してゐた。

や、仕方がないから、今度からは、私が中身を買ふお金を出すわ。だッて、暗いところを明りもつけないで行くと、怖いんだもの。』こんなことを言つて、お鶴は矢張、初めの晩のやうに、二三十分其處で火に當つて歸つて行つた。

歸つて來る時のお鶴の顏は、いつも嬉しさうに莞爾してゐた。『あそこに願をかけてから、母さんの病氣も大變好いのよ。』などと言つてゐた。客が多くつて、明方近くまで外へ出られないやうな夜には、『しやうがないわねえ。』などと言つて、つまらなさうにしてゐた。明けられない夜が三晩續いた時には、『折角お詣りしたのが無駄になつて了ふわねえ。』などと言つて滴した。

『奇特なことぢや。多い女中達の中にも、かういふ女がゐる。』かう思つたけんげは少しもお鶴の夜參をあやしいとも思はなかつた。歸る時分には、寒いだらうと思つて、いつも火を起して待つてゐてやつたりした。

誰も知らなかつた。多くの女中達にも、それと氣の附くものはなかつた。お鶴は毎夜一時頃になると、けんげの處へ行つて、幅でその懷中電燈を借りて出懸けた。

懷中電燈は細い路を照した。お宮の方に行くには、右に折れて、町の家並のところを通つて行かなければならないのだが、お鶴は門を出ると、其方には行かずに、すぐ左に折れて、細い通りを土手の方へ行つた。懷中電燈は、路の小砂利を照したり、兩側に長くつゞいた生垣を照したり、栽ゑ込みの中の大

かう言つて、お宮の森のさびしかつたことや、人一人ゐない夜更けの空の怖ろしかつたことなどをお鶴は話した。そして、暫くしてから、自分の室の方へ寝に行つた。

二三日經つてから、けんげとお鶴とはまた話した。

『だつて、すぐなくなるんだもの。』

『お參りをする間、始終つけてゐるのかな。それぢやたまらんな。一本、四十分間きりつかへないんだからな。』

『四十分、そんなに短いの？』

『さうよ。』

『一體いくら？ それ？』

『一本買へば、一圓ぢやがな。中を取替へるのが三十錢ぢや。』

『さう、そんなにかゝるの？』かう言つたが、『何うせお上さんが出すんだから好いわねえ。』

『さうは行かんぞな。……始終つけてゐては堪らんから、これからは、途はつけずに、何か事があつた時につけるやうにしなけりやなァ。』

『ぢや、さうするわ。』

かう言つて、別に新しいのを借りて行つたが、それも一晩か二晩ですつかり電氣をともして了つた。『ぢ

出して來た。

『あゝもう、これはいくらもない。もう駄目ぢや。』かう言つて、一本を傍に置いて、『これは、何うだ?――これは大丈夫だ。』

『ぢや、貸してお吳れ。』

『よし、よし。』

で、お鶴はそれを借りて、表の方へ出て行つた。庭の中を一廻してけんげが自分の室に歸つて來た時には、もう時計は二時近いところを指してゐた。何うしたんだらうと思つてゐると、お鶴はやがて歸つて來た。

『おう寒い、寒い。』

かう言つて、お鶴は室にある火鉢の火の上に顏を寄せた。

『調法なものね、これ。』

『さうぢやらう。』

『また、貸して頂戴ね。』

『でもな、無闇につかつては駄目だぞ。すぐなくなるから。』

『えゝ、丁寧につかふから。』

ある夜、遅く、お鶴はけんげのゐる室にやつて來た。

『けんげさん、お願ひがあるんだがね。』

『何だな？』

『懐中電燈の空いたのがあるなら、一つ貸してお呉れな。』

『何するんだな。』

『ちよつといるんだから……』

『いる用を言はつしやい？』

『お參りに行くんだから。』

『何處に。』

『向うの土手下のお宮に、心願があつてお參りしたいから……ね、好いでせう。鳥渡位借りたつて？』

『心願とは奇特ぢやが、何をお願ひをするのかな。』

『家が潰れたのをもとのやうにしやうとするのと、母さんの病氣と、弟が丈夫でゐるやうにと。』

『それは奇特ぢや。』

『ね、好いでせう。一つ貸して下さいよ。』

『あつたかな。』けんげはかう言つて立上つて、彼方此方を捜して見て、二三本其處へ懐中電燈を持ち

『調法なものぢやが高いな。四十分きりとぼらない。滅多にはつけられない。』こんなことを言つてゐたが、それでも夜深くをり〳〵その懐中電燈は庭の樹の間の闇に光つた。後には身錢を切らせるのも可哀相だと言つて、それを買ふ錢は女將が出すことにした。

で、けんげのゐる室には役に立たなくなつた丸い懐中電燈の棒は、其處にも此處にもごろ〳〵ころがつてゐた。

『こんなに何本もあるが、何にもならないもんかね。屑屋にやつてもしやうがないもんかね。』

などと女中頭のお高は言つた。

懐中電燈が闇に光ると、『そら、其處にけんげがゐる。』などと女中達は言つた、そんなことを知らないあるつれ込みの妓は、半夜に厠に起きて、パツと闇に線を成して光つて消えたものを見て、吃驚して、手も洗はずに室の中に驅け込んで來て、添寢の男をゆすぶり起した。立つて行つた男も矢張樹の間に光つて消えるある光りを見た。確にあやしい妖怪か何かと思つた。あくる朝、この話を聞いた女中は噴出して笑つた。しかし、この懐中電燈が役に立つたこともないではなかつた。ある時は、忍び込んだ曲者をその光で照した。ある時は垣を越えて遁れようとするお客を發見した。ある時は裏の球突室の蔭で嫐鬼してゐる男女を見つけた。『調法ぢや、これは――』かう言つて、夜はけんげはそれを身から離さなかつた。

れ。』
けんけが向うに行くあとを見送つて、『本當に、けんけの奴、づう〳〵しくつて仕方がありやしない。母さんがひいきにするもんだから、好い氣になつて……』ぶつぶつ言ひながら、お光は向うの方へ行つた。お貞とその隣のお花とが顏を見合せて笑つた。
『此間のこと、お上さん知らないんだらう？』
『知らないとも……』
『本當に困るねえ。』
『彼處の勘定を取りに行くと、向うでは、イヤに笑つて、お光ちやんが知つてるよ。拂はなくつたッて好んだよッて言ふんだものね、お前さん。』
『困るねえ。』
女中達はまた笑つた。其處に風呂番の淸といふ男が水を汲みに來た。
けんけは五六年前、懷中電燈が初めて出來た時、『これは調法なものぢや。これでは、昔の龕燈などはいらなくなるわけぢや。』かう言つて買つて來て、夜、闇に光らせて見て、めづらしがつて喜んでゐたが、それからは始終夜番の時に持つて出て、電氣がなくなるといつもそれを補充するために、元の店へと出かけて行つた。

『けんげさんなんか好いね。遊んでゐられて？』

『私には私のつとめがある……。私には夜番といふことがある。』

『だツて、手傳つたツて好いわねえ。』

『菜洗ひは冷めたいでな。』

『だから言ふんだよ。』

『またにしやう……』

かう言つたが、笑ひもせずに、けんげはぢつと立つて見てゐた。

そこに養女のお光がやつて來た。

『けんげャー。』

『へ。』

『お前、そんなとこにゐないで、さつきの使ひに行つてお出でな。』

『仰しやらないでも、行く時には參りまする。』

『また、あんなことを言つてゐる。人をちやかして……』

女中達は皆笑つた。『行つてお出でよ。』

『それよりも、貴女は此處の養女ぢや。さういふ世話を燒くよりもお母樣の肩でも揉んでおやりなさ

時がイヤな氣がするわ。』

『それはさうね。』

また皆なが笑つた。

『そんな闘燒なんかしたつて仕方がないよ。何うせ、かういふ稼業ぢやないか。それよりもせつせとお洗ひよ。』

『さうね。』

かう言つて皆は菜を洗つた。菜の葉の中からは枯葉などが出た。

『おゝつめたい。』お鶴は赤くなつた手を頰に當てたりした。

三つ並べた四斗樽の向うには、戸板の上に洗つた方の菜が一杯に積んであつて、それに冬の日影が薄く當つた。まだ洗はなければならない菜が澤山に女中達の後に積んであつた。女中達はそれを一つ〳〵取つては樽の水に浸した。

けんげが其處に來て見てゐた。

『けんげさん、少し手傳ひなさいよ。』

『わしは女中ぢやない……』

けんげはすまして立つてゐた。

ある日の午後、――井戸端で漬菜を洗ひながら、女中達は話し合つた。

『男が綺麗だと、いやね。』

『さう？』お花といふのが引取つて、

『私はさうぢやないわ。』

『ぢや、何ッ？』

『私はわかい妓とおぢいちやんと一緒のお座敷が一番きらひ。』

『何故？』

『變な氣がするのよ。』

『何うしてゞせう！』

『私綺麗同士よりも、さういふつり合はない方が變な氣がしてよ、きつとしつつこいだらうと思ふわ。』

あはゝと言つて皆なは笑つた。

『坊さんなんかイヤね。』

『何うしてゞせうね？』

『私は逢ふのよ、皆なと……』

お貞といふのが言つた。『私はまた、出て來る時がイヤよ。おやすみなさいまし、かう言つて出て來る

つた。ある女は箱屋と出來て、人目の多いところを巧に媾曳してゐたが、つひには知れてゐられなくなつた。ある女は客と出來たのが女將に知れて出された。お定といふ顔の綺麗な背の小づくりな女は下番の男と惚合つて、此處を出て、今では土手下で小さな料理屋の上さんになつてゐた。女達はいつもきまりのわるさうな赤い顔をしてけんけのゐるところに來ては暇を告げて行つた。

女中頭のお高はある時客に言つた。

『何うしても女將さんの言ふやうには行きませんね。一體お客の世話をするのが稼業なんだから、そんな筈はないんですけども……それでも、矢張、女ですからねえ。』

『矢張、一人ぢやゐられないんだね？』

『何うしても、かういふ稼業は若くつてはつとまりませんよ。』

『無理はないね。』

『そんな筈はないんですけどもね。』

『始終、見てゐるんだからね……。』

かう言つて客は笑つた。

小さな一間、離れた一間、押入の中に積み重ねられた赤い裏のついた蒲團と夜着、枕元に置かれた水とコップ。夜もすがら微かにきこえる私語……

それは女將には姪に當る此家の養女で、今年十六になつたばかりであつた。しかし、けんげにはこんなことはめづらしくはなかつた。十五年間、けんげはいろ〳〵なものを見て來た。女中が客の床から拔けて出て來るところにも何遍となく出會した。女中と風呂番の男との媾曳を發見したのもかれなれば、下番とお照といふ女中の色事をさがし出したのもかれであつた。

けんげはいつも見て見ぬ振をした。

けんげは言つた。

『昨夜も誰か出たものがあるぢやな。』

『誰だえ？』

『誰ぢや知らんが、すッと樹の中を通つて行つた。二時ぢやつた。』

『また、何か夢でも見たんだらう。』

『けんげの見た眼は違はぬぢや。』

こんなことを言つて笑つた。しかしけんげはいつもそれをはつきりとは言はなかつた。誰の姿を見たかは決して言はなかつた。そしてをり〳〵氣味わるく笑つて見せた。

かういふ所にゐては無理はないといふやうな口の利き方をしたりした。

けんげは長い間、多い女中の推移を見て來てゐた。大抵は女中は男のことでしくじつて此處を出て行

こからは、半ば醉つた妓が、赤い衣の裾をほら〱させながら、『貴方、其方ぢやなくつてよ、此方よ。』などと言つて出て來た。

と思ふと、奥に帳場を控へた入口のところには、車が二三臺待つてゐて、長い敷石道を縫るゝやうに此方へ出て來る歸り客を迎へた。女は流行の襟卷をして、白い顏をくつきりと夜の空氣の中に見せてゐた。『もうお歸りですか。何にもお構ひも致しませんで、何うぞこれにおこりなく……』かういふ女將のあとについて、女中達は皆並んで、それを見送つた。『お歸んなさい。』といふ聲が車の轍つて行く跡を追つた。

『けんげは夜の十二時から曉の五六時まで起きてゐるのが役目であつた。十二時をすぎると、あたりはばつたりと靜かになつて、話聲も絶えた。かれはをり〱しはぶきをしながら靜かに歩いた。大抵は敷石道に駒下駄の音を立てゝ歩くのが例だが、何うかすると、庭の奥までも入つて行つて見ることもないではなかつた。ある夜は月が明るく球突の間の硝子戸を照した。

ある時、けんげは奥の離座敷の蔭を廻つてゐると、ふと戸の明く氣勢がした。こんなところが明くわけがない。かう思つて、かれは樹蔭に身を躲してそつと見てゐたが、明いた戸からは、やがて持つた下駄を靜かに下に下してちよつとあたりを見廻して、下駄を穿いて、此方へ靜かに歩いて來る女の姿が見えた。

顏を見たけんげははつとした。

立派な譜のついたものなどもあつた。その蓄音器は細い針の廻るにつれて、『春はうれしや、二人そろうて……』などと微かな音を立てた。三味線の相の手などもはつきりときかれた。

『けんげがこんなものを買つて來たんですがね。』女將はこんなことを言つて、それをお座敷に持出して、客や妓のゐる前で鳴らして見せた。

けんげは門を入つた處にある小さな家で暮した。そこには六疊と四疊半とがあつて、その傍には、車夫や御者の供待をするところがあつた。冬の夜などは、其處に大きな圍爐裏に火が活々と起されて、五六人の男がそれに當つて、客の歸りの遲いのを待侘びた。外には自動車がをり／＼けたゝましい音を立てた。

『いらつしやい、お客樣！』

かういふ金切聲が聞えると、奧から女中が二人も三人も迎へに出て來た。自動車から下りた客は、大抵二人づれで、中には新橋で一二と指を折られる名妓もゐた。闇にもそれと著るき美しい顏、白い肌、派手な袖、長襦袢、艶めかしい衣ずれの音は、長い敷石道を傳つて奧の方へと行つた。『貴郎、寒いわね。』などと言つて、男に寄り添ふやうにして歩いて行く女などもあつた。

何處の室からも三味線は湧くやうにきこえた。電鈴の鳴るにつれて、『はアーい』と長く引張る女中の聲が其處でも此處でもした。樹の間を洩れる明るい灯は、浮き出すやうに幾つかの離座敷を照して、そ

しのつとめぢや。夜、間違があつちやわしがすまんぢやなんて言つてゐるからね。』
『もう六十五？』
『來年七十だよ。』
『もうさうなるんですかね。昔の人は丈夫ですね。體の鍛へが違ふんですね。』
『此間なんかも、私が風邪を引いて寢てると出來る事なら私が代つて上げたいもんぢやなんて言つてゐるんだよ。』
『こちらに來てから、もう餘程になるんですか。』
『十五年以上だよ。』
『もうそんなになるんですか。』
尠くとも女將は、さう長く勤めてゐる古い雇人に就いて、ある誇らしいものを持つてゐるらしかつた。女將はお座敷でもよくその噂を持ち出した。『お前でも刀を持つたことがあるのかえ？　その時はぶる〳〵と震へて了つたらうッて言ひますとねえ、中々……その中々が面白いんですよ。これでも中々、さう言つて刀を振廻す眞似をしますからね。』女將は笑ひながらその眞似をして見せて一座を笑はせた。時には、使ひに出た次手に、面白いものがあつたと言つて子供の玩具などを買つて來ては女將を笑はせた。その中には、大きな布袋の中から小さなおかめが幾つも出るやうなものもあれば、小さな蓄音器に

心願

常磐のけんげと言へば、其土地では誰も知らないものはなかつた。もとは旗本のおちぶれで、上野の戰爭の時には、彰義隊の中に雜つて、刀を振り舞はしたことがあるさうだが、昔の侍氣質が今も拔けないで、誰にでも常におほへいな言葉をつかつた。

雇はれてゐる女將に對してさへ、『うん、それが好からう。さうするが好い。』などと言つた。年は取つても丈夫で、達者で、風邪などもつひぞひいたことがなく、謠ひなどをくちずさみながら、其處にも此處にも離座敷のある樹の影の多い庭をぶらり〳〵と歩いた。

『けんげさん、のんきね。今朝も其處らぶら〳〵歩いてゐたわ。』

其處に出入りする妓がこんなことを言ふと、『それはのんきとも……けんげのやうな身になりたいと思ふ位だよ。何も心配とか苦勞とか言ふものはないんだから。』肥つた女將はかう言つて笑つて、『でも感心だよ。あれでも、自分の役だけはちやんとするからね。夜はちやんと起きてゐるからね。……夜番はわ

刺してゐるのを私は目にしました。私の胸は急に凄じく波を打ち出しました。しかし私は何うすることも出來ませんでした。

それは瞬間でした。女がばつたり斃れると同時に、男はすぐその拔いた短刀でいきなりぐさと自分の咽喉に突き立てました。血がサッと夕日に赤く迸つて見えました。

小高い丘の上には現に二三人の人も居りましたし、麓にも既に大勢群集が集つてゐましたけれども、しかも誰もそこに近寄るものはありませんでした。男は一度突立てた短刀をもう一度深く動かして動脈を自分の手でゑぐるやうにしました。血がまたも迸りました。

やがてばつたり男も後に斃れました。

無論、その女は駒子さんでした。駒子さんは、もう少しさつき、其處に一人でやつて來て、何か頻りにその男と話してゐたといふことでした。何と言つて好いか私にはわかりません。また、今朝あゝして靜かに舟でわたつて來た駒子さんの身の上に、突然さうした不幸が襲つて來たとは何うしても思はれません。私は巡査の來るまで、その夕日の躑躅の丘の上にぼんやりと立つてゐました。

『だつて、それぢや、餘り厚すぎるよ。もう少し薄くしなくつちや――少しは見えなくつちや、いくら男と女の鬼事でも、とても駄目だよ。』

『駄目でも好いんですよ。おとなしくしてゐらつしやいよ。』

分福姐さんは、またその手拭をきりゝと堅く肥つた旦那の目に當てました。

周圍には面白い鬼事を見る人が、段々多くなつて行きました。夕日は靜かに丘の腳蹋に照りわたりました。

ところが、丁度その時でした。かうした遊びに夢中になつて、何も彼も忘れてゐる最中でした。ふと、普通でない人の叫聲のやうなものがすぐその上の小高い丘の上できこえました。續いて、女の魂ぎるやうな聲がきこえました。

今まで鬼事の方に目を注いでゐた群集は、急に其方に向つて走り出しました。

『大變！ 大變！』

『人殺し、人殺し！』

何處からともなく、かうした聲が戰き慄へるやうに聞えて來ました。

私はもしやと思ふ暇もありませんでした。そのまゝ急いで驅けて行きましたが、丁度その小高い碑のあるベンチの角のところで、さつきの男が後向きになつてゐる女を半ば抱へるやうにして、短刀で深く

へられてそのまゝ鬼になりました。

また一しきり追つたり逦げたりしました。分福姐さんが既に危く捉まへられさうになつたのをうまく外にはづして逦げると、その後にこつそり忍び寄つた肥つた客は、ばつたり鬼と打つかることになつて、捉まへられるともなく無造作に捉まへられて了ひました。皆なは手を叩いてヤンヤと喝釆しました。

分福姐さんは皆なの耳に口を當てゝ、『何うしてもつかまらないやう、いつまでも、いつまでも、こりるまで、旦那を鬼にしておく』やうに努力することを皆なに勸めて歩きました。皆なは面白がつてそれを承知しました。客の一人は、肥つた鬼に聞えるやうに、

『もう、駄目だぞ、君。聯合しちやつたからな、我々は――』

こんなことを言つて、わざと後から帶を引張つたりしました。

それでも、鬼は眞面目に、正直に、暫くは盲さがしにさがしてゐました。しかし容易に、誰も捉まりさうにはなりませんでした。

鬼は終に目かくしを除りました。

『駄目ですよ、旦那。』

分福姐さんは、寄つて行つて、さうはさせないやうに、薄く見え透くやうに疊まうとする手拭を取りました。

『いやですよ。』……

と言つて分福姐さんは笑つてゐました。

赤く夕日を帶びた躑躅の丘の上は、塵埃も立たないやうな綺麗な糾草地で、實際、鬼事をしたり何かするには持つて來いのところでした。殊に、丁度、丘の眞中あたりになつてゐるところは、いくらか躑躅の株も疎らになつてゐて、學校の運動會の時などにも、ひとり手にそこに集るといふ形になつてゐました。

何かがやがや言ひながら、皆なはそこに集つて來ました。

『いゝか、ヂャン拳……』

から言つて、肥つた客は、その周圍の藝者やお酌を集めました。暫し白い女の手と太い毛むくぢやらの手とは雜り合ひました。

ヂャンケンポン――『ヤア、かはるだ、かはるだ、それ好いか。』から言つて、肥つた客は、今年一本になり立ての若い妓にその疊んだ手拭を持つて行つて當てました。

『それ、好し。』

皆な周圍から手を叩きました。

折角袖を捉へたのを離したり何かしてまご〳〵してゐましたが、暫くして金緣の眼鏡をかけた客が捉

見せたりしました。お酌がかつぽれを踊つた時には、傍にあつた三味線を引寄せて、賑やかに彈いたり唄つたりしました。

やがて、座敷での興も盡きたといふやうにして、

『おい、外に行かう。山に行つて鬼事をしよう。』

かう肥つた客が言ひ出しますと、誰れも彼れも皆なそれに贊成しました。眠つてゐたものまで眼を摩り摩り起き上りました。私達にしても、座敷でいつまでも同じやうに飮んでゐられるよりも、外にでも出る方がいくら氣がまぎれて好いか知れませんでした。で、皆なぞろぞろ下に下りて、其處に並べてあつた麻裏草履をはきました。

『それ、分福、お前が鬼だぞ。』

肥つた客が、手拭の疊んだ奴をかう言つて其處に立つてゐる分福姐さんの前に出しました。

『私、鬼? 厭ですよ。』

分福姐さんは、逸早く向うの方へ逃げて了ひました。

『ずるい、ずるい。お前が一番婆ァぢやないか。』

『お婆さんですから、だから面倒を見なくちやいけませんよ。』

『ずるい、ずるい……。ぢや、此處に來て、一緒にヂャン拳だ……』

『しやうがないね。』

かう駒子さんは焦れたさうに美しい眉を蹙めました。

『具合がわるけりや、私がよく言つて上げようか。』

『駄目だよ。』

『でも、さつきも山にゐたのよ。何うかする氣でゐるんぢやない！』

『何うかするッて、此方に別に何もないんだもの……。恨むのは、向うの勝手だもの。しやうがないやねえ。』

『でも、ね。』

『まア、放つておきよ。』

『放つて置いて好いかしら？』

『もう少し經つて、お座敷がすむと、私が行くから好いよ。』

『さう……』

かう言つて私は此方へ來ました。

當人がさう言ふのだから、何うもしよ**う**がない。かう思つて、私はもうその男のことは思はないことにして了ひました。私は座敷に戻つて來て、求められるまゝに、分福姐さんの三味線で、秋の夜を踊つて

と、いやに鋭い、神經性の眼色をして、さも失望したやうにして歩いてゐたのでした。そして私が駒子さんと一緒に歩いてゐたのを見覺えてゐて、さも何か聞きたさうに、一緒に客と伴れ立つてゐさへしなければ、すぐにも寄つて來て言葉をかけたさうに、じろじろと私の方を見てゐたのでした。

私は變な氣がして、座敷の方へ戻つて來ました。酒の醉もそのために醒めて了ふやうな氣もしました。その一座は、客も四五人ゐる上に、藝者も七八人ゐました。分福姐さんもゐました。三味線、鼓、客の唄、一座は既に亂れて、客の中には、醉つて、後に倒れるやうなものも御座いました。山の赤い躑躅には午後四時近い日が明るく遍ねくさしわたりました。

私はちよつと用事があつて下に下りて行きましたが、ふと、廊下で、かなりに醉つた駒子さんが、赤い裾をほらほらさせて此方にやつて來るのに逢ひました。

『駒ちやん、ちよつと。』

かう私は呼び留めて、そしてそつと傍の明いた室に伴れて入りました。

『何ァにさ?』

『何でもないけども……』

かう言つて、耳の傍に口を當てました。

私がその話をしますと、

私はお座敷からお座敷へと行きました。午後三時すぎまでには、尠くとも私は四つまでお座敷をしました。花見の客はそれからそれへとぞろ〳〵やつて來て、二軒ある料理屋が二階も下も皆な一杯になるといふやうな光景でした。何處の家からも、三味線の音と皷の音とが、醉客の騷ぐ聲と一緒に雜つてきこえて來ました。

私は二座敷したあとで、富貴亭の二階に聘ばれて行きました。そこはこの山の料理屋での一番眺めの好いところで、其處から見ると、沼も一目、躑躅の花の赤く咲き亂れた山も一目、種々な滑稽な假粧をして集つて來る群集も一目といふ風でした。私もその時分には、彼方で一杯、此方で一杯といふ風に勸められた酒の醉が出て來て、かなりにはしやいでお饒舌をしてゐました。私はすつと立つて、欄干のところに行つて下を眺めました。

私はふとそこに、さつきの鳥打をかぶつた男が、ぢつと此方を見て立つてゐたのに眼を附けました。（まだあそこにゐる）とかう私は思ひました。駒子さんは、何ういふことを言つたのか知らないが、あの男はまだあそこにゐる！　まだあゝして駒子さんを待つてゐる！　何うした關係か知らないけれども、さうして長く男を釣つてゐて好いものだらうか。ちやんときまりをつけて、歸すものなら歸す、待たせるものなら待たせるやうにした方が好いのではないだらうか。かう私は思はずにはゐられませんでした。それに、さつき客に伴れられて、山の中をあちらこちらと歩いた時にも、その男は矢張あちこち

『何ァに、好いのよ……』

『でも……』

『だつて、しやうがないもの。いくら言つてきかせたッて、言ふことをきかないんだもの……』

かう焦れるやうに言つたが、そんなことには取り合つてゐられないといふやうに、駒子さんはサッサと出て行つて了ひました。

しかし私にはそれが氣になりました。何故だか、それは私にもよくわかりませんが、さつき始めて見た駒子さんの驚愕、サッと一時に蒼く變つて行つた顏色、それにつゞいて、松の下で二人寄添つて話し合つてゐた光景などが、友達思ひの私にさうした心配を感じさせたのだらうと思ひます。私はわからないなりにもその中にかくされてゐるある戀？を感じました。眞面目な眞劍なあるものを感じました。（あんなにして、男を放つて置いても好いのかしら）かういふ風にも思ひました。

しかし忙しい山番の中では、さうしたことをいつまでも長く思つてゐるひまもありませんでした。私にもやがて口がかゝつて來ました。

私を聘んで吳れたのは、かねて知つてゐる五十位のお客で、他に二人ほどお伴れがありました。私は賴んで、港屋のお酌を聘んで貰つたりして、一時間近くも其處にゐました。駒子さんのことなどは、いつか私はすつかり忘れて了つてゐました。

だと思ひながら、私は池の畔をぐるりと廻つて、また山の上に登つて、鬱金の躑躅のあるところを掠めて、それからずつと奥の方へ行つて見ました。

と、そこに傘を張つたやうな松――その松の向うに、さつきの男と向ひ合つて、頻りに何か話してゐるのが確かに駒子さんでした。私は急いでその傍に近寄つて行きました。

『駒子さん、お座敷よ……』

かういきなり私は言ひました。

駒子さんは、ちよつと顔を赧くしたやうに見えましたが、しかし、その態度をすぐ改めて、

『何處？』

『富貴亭よ。』

『さう？　今すぐ行くわ。』

で、私は其處から引返して來ました。しかし、何の話があるのか、駒子さんは容易に其處から出ては參りませんでした。漸くやつて來た時には、いやに顔の色艶がわるく、何處か激昻したやうなところもあつて、唯事でないやうな氣が私にはされました。で、私はソツと、

『何うかしたんぢやない？』

かう心配するやうにして訊きますと、

山番に當つたものが休んだり、集つたりしてゐるところで、さつき、先に自動車でやつて來た港屋の分福姐さんは、一緒に來たお酌やらわけやら抱へやらと頻りに何か賑かに饒舌つてゐました。見番の箱屋の政どんも來てゐました。

客を引くために、または客の心をそゝり促すために、お酌やわけの人達は、頻りに鼓を打つたり、三味線を彈いたりしました。私もやがてその速中に雜つて、撥を手に取り上げました。

そこを通る花見の客は、皆なその賑かなさまを覗いて行きました。

『駒ちやん山へ行つて見ようよ。』

かう分福姐さんは言つて、駒子さんを始め、大きい方の藝者達五六人を一緒につれて外へ出かけて行きました。さうかうする中、あちこちの料理屋から次第に口がかゝつて來ました。

『駒子さん、ゐますか。』

かう言つて富貴亭の男が外から入つて來ました。

『もう、少しさつき山に行きました。』

『ぢや、お座敷ですから、すぐ來るやうに言つて下さい。』

で、私が迎へに行きました。私は山の上の小高いところまでも行つて見ました。分福姐さんのゐるあたりにも行つて見ました。しかし駒子さんの姿は何處にも見えませんでした。不思議なことがあるもの

といふやうに、割合にかう馴々しく言つて駒子さんも矢張其方へ身を寄せて行きました。

『今、寄つたんだ……。』

『さう、家に……？』

かう駒子さんは言つて、『姐さんはゐたでせう？』

『ゐた……！』

『それから車で來たの？』

『…………』

一言二語、話し合つたばかりで、それで、ある滿足を男に與へたらしく、やがて駒子さんは此方に來ました。

『お客？』

かう私は訊いて見ました。

『もとのお客よ。』

『東京から來たの？』

默つて駒子さんは點頭いて見せました。

やがて私達は、富貴亭の別館の前を通つて、その横の小さな家へと入つて行きました。そこは私達、

『さうね。』

『…………。』

駒子さんは何か言はうとして言はずに、意味あり氣に笑ひました。私などにはまだよくさうしたことはわかりませんけれど、駒子さんなどには、お客と藝者のことが、それからそれへとすぐわかると見えるのでした。藝者がお客を取つたり取られたり、またお客が女を取られたり取つたりする細かいことなども、駒子さんにはよくわかると見えました。その以前にも、何うかすると、さうした機微な話を私は駒子さんから聞かされたことがありました。『そんなことがあるのかしら。』私はその時何だか恐ろしいやうな氣がしました。

私達は埠頭から躑躅の一面に咲いた丘の上に登つて行きました。と、不意に――本當に不意に、丁度その前を蛇でも横ぎつたやうに、駒子さんはひつたりそこに立留つて了ひました。

私は駒子さんの顏の急に蒼白くなつて行くのを見遁しませんでした。

鳥打帽を被つた二十五六の男がヅカ／＼近寄つて來ました。

『…………』

『まァ……いついらしつたの？』

避けるにも避けられず、爲方がないといふやうに、または、何もそんなことを氣にしてはゐられない

ふと駒子さんはこんなことを言つて、私の方を向いて莞爾しました。

私はしかし別にその話を聞かうともしませんでした。舟は丁度細い入江からひろい沼へと出ようとしてゐるところで、芦の新茅の青々とした向うに、ムグリがひよつくり浮んだりしました。置針を沼の中に置いて廻つてゐる漁師は、舟のへさきに小さく蹲踞みながら巧に櫂を使つて、滑るやうに水の上を漕いで行きました。

三日前に來た時と比べると、躑躅はもう大分色が褪せて了ひました。しかし、人出は大したもので、此方から向うに渡る船は、大きな屋形船二隻で絶えず運んで行つてゐても、それでも運び切れない程でした。渡船小屋のある埠頭は、小旗を持つた女や、顔を塗つた男などで一杯に溢れてゐました。客が二人、藝者が二人、お酌が頻りに皷を叩いて、沼の眞中を漕いで行く舟などもありました。

『政勇さんに、秀吉さんだわね。』

舟から上りながら、私はかう駒子さんに言ひました。

『お客はタァさんでせう。』

『さうね。』

『照ちやん、何うしたらう、今日はゐないわね。』

『本當はお客に突落されたんですつてね。』

かう私が言ふと、

『そんなことはないでせう。』

『さうですッて――それを表向にすると却つて勝子姐さんの恥を明るみに出すやうになるもんだから、ひとりで落ちたやうに言つて置いたんですつて……』

『本當かしら？』

『今の旦那の向う側に立つた人で、そら、背の高い、金縁の眼鏡をかけた――あの人が突飛ばしたんですつて……』

『本當？』かう言つて『だからお客は厭ねえ。』

『本當ねえ。』

駒子さんは更にまた考へるやうにして、

『だッて、お客ッて無理だわねえ。お客に取つちや、金を使はせて置いてと思ふかも知れないけれども、稼業ですものねえ。それがいやなら、遊ばなけりやいゝんだわ。』

『さうねえ。』

『私も一つ困つてゐることがあるのよ。』

かう言つて、『何處か、そんな風に見えて？』

『え……』

『何でもないのよ……。今日は寢坊をしたもんだから、きまりがわるかつたのよ、屹度……』

『まア、いやだ、あんなこと。他人のことでも言つてゐるやうなことを言つて……』

『だつて、さうなんだもの。』

顏の色艶といひ、眼の表情といひ、髮の黑く房々としたさまといひ、後姿のほつそりした具合といひ、流石は町の藝者達の中でも有名な容色よしと言はれただけあると私は思はずにはゐられませんでした。港屋の玉助さんも美しいが、あの人よりももう一層駒子さんの方が好いと思ひました。駒子さんは私より二つ年上の今年二十二でした。

日曜ではありませんでしたけれども、天氣が好いので、沼の辨天の渡場は、かなりに混雜してゐました。こゝから躑躅の花の咲いてる山まで一里、舟で行つて四十分、その間は、細い入江のやうに、蘆や眞菰の新芽の美しく生えた、右に昔の城址のやうなところを見て行くのですが、丁度、そこにかねて知つてる馴染の船頭がゐたので、特に金を少し餘計やつて賴んで、二人で一隻の舟を買切つて行くことにしました。私達は小さな船に乘りながら、曾て此處で勝子といふ姐さんが、出の衣裳のまゝで、ばつしやり此處に落ちた話などを始めました。

平氣で、私は上にあがつて、そこで一時間以上も待ちました。漸く支度が出來た時分、大勢、藝者を載せた自動車は、派手な紅い白い色彩をあたりにチラ〳〵させながら、ガヤ〳〵と喧しいお饒舌をあとに殘してその前を通つて行きました。

『港屋の人達よ。』

『さうね。』

『私達も、自動車で行きませうか。』

『つまらないわ。それより船の方がのんきで好いわ。』

かう駒子さんが言ふので、自動車を羨しいと思つた私の心もすぐ消えて了ひました。やがて私達は出懸けました。

今日はいつものやうに厚い化粧をしなかつた故か、何處かさびしいやうなところが駒子さんにあるので、私は、

『何うかして? 今日は?』

『いゝえ。』

『でも、何だか、機嫌がわるいわね。』

『さう?』

『ぢや、明日、朝、誘ひに行つてよ。本當に行きませうね。』

かう約束して置いたのでした。駒子さん――實際駒子さんはおとなしい靜かな人でした。かうした社會にはめづらしいほど好い性質でした。私は他の姐さん達や、わけの人達や、抱への人達には餘り懇意にもなりませんし、交際はするにはしても、心の中まで打明ける氣などには何うしてもなりませんでしたが、駒子さんだけにはすぐ仲好になつて了ひました。駒子さんの家には、照葉さんといふ姐さんがゐました。立派な旦那があつて、今はひいてゐますけれど、二三年前までは、土地でも藝の出來る好い姐さんの方に數へられて、港屋の今の分福姐さんなどと土地では同じやうに流行つた人でした。

私が表から、

『今日は？』

かう言つて入つて行くと、

『もう來たの？　早いね、千代ちやん。』かう其處にゐた照葉姐さんは、莞爾して私を迎へて呉れました。駒子さんは、しかし、何だか機嫌が惡いといふ風でした。顏もまだ洗はず、朝飯もまだ食はず、いつものやうに、莞爾もせずに、

『千代ちやん、先に行つて頂戴な。まだ大變なんだから？』

『好いのよ、待つてゐるわ。』

丘の悲劇

私はその日は朝の御飯をすますと、すぐ駒子さんを誘ひに行きました。それは丁度港屋の人達の山に行く番の日で、私などは何うでも好かつたんですけれど、午前中家にぐづ〳〵してゐたつてつまらないし、山に行けば、面白くもあるし、運が好ければ、お座敷の三つ四つは夕方までに出來るかも知れないので、それで私は駒子さんを誘つて、そして一緒に出懸けることにしたのでした。

昨夜、富貴亭の廊下で、

『明日山に行くの？』

かう私が訊くと、駒子さんは、

『さうね……行つても好いわ。千代龍さんは？』

『私、行くつもりよ。』

『さう、そんなら、行くわ。貴方が行くなら一緒に行くわ。』

あるけれども、一夏來て、さうしてかういふ墓に詣でるのは、意味がなくてはならないのであつた。

O氏は墓と墓との間にあるこれもかなりに古い小さな墓を指してH氏に訊いた。

『これがお初の墓だつたな。』

『これが大叔父、これがK、これがR、……さうです、それがお初です。』

O氏はちよつと頭をその前に低れた。お初といふその女の秀才は何ういふ閲歴を持つてゐたか知れないが、しかし若くつて死んだといふことがMにロオマンチックなある想像を起させた。Mはその死に戀を結びつけて考へたかつた。

そこから一行は林をぬけて、この山村で一番古い歴史を持つといふ五輪塔のあるところへ行つた。何でも昔豪い長者が住んだらしく、今でもその邸跡の壕がちやんと指さゝれるといふ話だ。それにその近くには南朝のM親王の遺蹟の石碑が立つてゐる。一行はひろ〴〵と前にひろがつた高原の夕日に對して立つた。

ある。墓石の高いものもあれば、すぐ土の上に墓石が置いてあるのもある。四面を蔽つた樹木の影は、いかにも古い墓場らしい薄暗い空氣を其處に漲らせた。

O氏は、隅にある苔蒸した小さな墓をT氏やMに示して、『これが一番古いんです、この中では——K、Nだから、今から六百年ほど前です。』

『Hさんの祖先ですか。』

『Hの祖先といふ風に、はつきりとはしてゐないけれど、村は元は一家だつたんでせうから、祖先と言へば祖先だ。』

『めづらしいな。』T氏はかう言つて、その傍に行つて、磨滅した年號を讀まうとしたが、苔が深いのではつきりとはわからなかつた。

『すつかり苔を取らなければ、見えないだらう。』

離れた處からO氏は言つた。

『わからない……しかし、KNと言へば舊いものだ。南北朝だ……。』

叔父叔母の墓、祖先の墓、さういふものには、W老人とH氏が一々線香を立てゝ歩いた。O氏もT氏もMも禮拜した。

Mはゆくりなくかうした古い田舍の家族の墓に詣でたことを面白いと思つた。何の縁故もない人では

ケチで拭きながら言つた。

Ｏ氏は古い昔の家のことや、祖先のことなどをＴ氏やＭに說明した。Ｈ氏の父親はＯ氏の一番の叔父で、漢學が出來て、漢詩は鈴木松塘に學んだといふことであつた。それからＯ氏は楣間にかゝけた額をＴ氏に示して、先々代の娘のお初と云ふのが書いたものであることを告げた。『中々えらい學者だッたさうです、そのお初といふのは――。惜しいことには若くつて死んだ。』

『これはうまい。語も好い。』

かうＴ氏はそれを仰いで言つた。Ｍも同じやうにしてその額を仰いだ。

酒宴の始まる前に、『それぢや一つ先に墓參りして來よう。久し振りだ。』かう言つてＯ氏は出かけた。Ｗ老人とＨ氏とは線香と樒とを持つてついて來た。Ｔ氏もＭもあとから續いた。

村の中央を貫いた道路の兩側には、綺麗に山水が流れて、村民はそこで物を洗つてゐたりするのを人達は見た。行逢ふ人々は皆丁寧に辭儀をした。

村を外れて少し行くと、いくらか高くなつてる深い森があつて、路はやがて林藪のやうなところに入つて行つた。人達は小枝を拂ひながら進んだ。『何うも、木が大きくなるんで……。』かう言つてＷ老人は一番先に立つた。

やがて墓地があらはれた。そこには澤山に墓石が列んでゐる。苔蒸したものもあれば、新しいものも

ら稼ぎに行つてゐる女工達を澤山に下して行つた。
O氏の一番大きな甥に當るH氏といふ人は、土地でも金持で、銀行の方へも、郵便局の方へも關係してゐたが、始めて此の山村に來た時からMは知つてゐて、青年達と一緒に酒を飲んだことなどもあつた。このH氏に、O氏の伯父に當るW老人、それから一高志願の青年の父親、村長、これ等の人々は、村でも一流の勢力家の方で、中でもH氏は年が若く、農科大學を卒業したりしてゐるので、村の事務には人一倍力を盡して鞅掌した。十三日は佛事を營みたいからと言つて、H氏はO氏、O氏の家族、T氏、それからMをも招待した。
午後の涼しくなつた時分から、O氏とT氏とMとは揃つて出かけた。それは別莊のある丘の上から七八町高原の畑の道を通つて行くやうな處であつた。O氏とT氏は道祖神や、庚申の字の巧拙などについて話しながら歩いた。やがてH氏の住んでゐる村に近づいた。小さな淸い川などが畑の中を縱横に流れてゐたりした。
H氏の家は大きな、古い、いかにも昔を思はせるやうな構造であつた。O氏の家族は、既に前に一たび御馳走になつたといふ風で、夫人は、『それでは、もう私達はお暇しませうかね。』などと言つてゐた。子供達や娘達は緣側で父親や客達を迎へた。
『ヤ、遲くなつて……早く歸らうと思つたんですけれども。』行つた時はゐなかつたH氏は、汗をハン

釣魚に出かけて行つたりした。

しかし、滿更用事がなくつて、こゝに避暑に來たのでもないらしかつた。T氏はをりをり此處等の五萬分の一の地圖をひろげて、M川の峽谷地方を研究した。話し振では、水力電氣の事業を始めるについて、最初の探檢を目的にして來たやうな樣子であつた。Mが村の靑年達とその深山の中を突破して、向う側のT町からI町へと旅行して歸つて來た時には、『僕も君達が行くなら、一緒に行けば好かつたな。惜いことをしたな。』などと言つた。T氏はその前の日に昔の老祖母をKに訪れてそこで一泊した。

その間には、O氏はその屬した政黨の本部から電報が來て、一夜泊りで東京に行つて歸つて來たりした。『ヤ、東京は暑い、暑い。とても一日もゐられない。』などと言つた。

その時分にはT氏のゐる室のその次の室に、O氏の甥に當る靑年が机を持つて來て、涼しく吹き透る風に紙などを散らしながら、頻りに物を書いたり、英語の字書を繙いたりしてゐた。この靑年は、今年は駄目だつたが、來年の一高の試驗には是非及第しようといふ意氣込で、夜はおそくまで燈をかゝげて書を讀んでゐた。

やがて舊曆の盆が來た。村の人達は平生服した烈しい勞働を休んで、餠をついたり、蕎麥を打つたりして祖先の靈を祀つた。盆踊の樽を叩く音が大きな山の裾の村々にきこえた。停車場附近の廣場には田舍芝居がかゝつて、娘達が晴衣を着てぞろ〳〵出かけた。汽車は、一列車每に、Oの紡績機業地に村か

『さうですつてね。あのKは私の國のものです。』

『さうですか、君はG縣ですか。』

始めて知つたといふやうにT氏は言つた。

Mがひとりで餉臺の前で晩酌をやつてゐる時分になると、O氏の娘の二十歳位になるKといふ子が、疎らな松林の中の路をやつて來て、T氏に風呂の出來たことを報らせに來た。やがてT氏が帽子もかぶらずにO氏の別莊の方に歩いて行く姿がMの坐つてゐる處から見えた。

夕飯をすました後の散歩の次手に、Mが別莊の方に行つて見ると、四面を明るい硝子戸でめぐらした中に、いつも主客五六人の人達で、東京から來ためづらしい鑵詰などを並べて、そして樂しさうにして盃を擧げてゐた。T氏の脊の高い莞爾した姿が村の農民達や有志や村長などの中に雜つて見えた。O氏は立つて來て、いつもMをその餉臺の近くに坐らせた。

『明日は一つ是非、お婆さんのところへ行つて、話をしなくつちや――』などと言つて、T氏はまたその話を始めた。

始めはMはT氏がさう長く滯留してゐるとは思つてゐなかつたが、一日二日して歸るのだと思つてゐたが、『涼しくつて好いな。此處にゐると丸で夏知らずだ。東京に歸る氣になれないな。』などと言ひつゝ十日近くも留まつてゐた。時にはO氏の男の兒の十五六になるのと一緒に、丘の下の眞菰の生えた池に

火鉢の前の944臺に相對して坐つて、種々な話をした。I縣に知事をしてゐた頃、郡内の山水を見て歩いたことや、任期が短かつたので折角施設した事業の效も擧げない中に歸つて來たことや、M市から海岸のM町に行く間のH川の溪谷の風景に富んでゐる話などをT氏はした。

O氏は家の方に來客があつて、T氏と一緒にばかりゐるわけに行かないので、ともすると退屈さうにぶら〳〵とあちらこちらをひとりでT氏は歩いた。そこは非常に眺望のすぐれた丘の上であつた。前にも後にも大きな山が聳えて、白いまたは灰色の雲が東南の重なり合つた山と山との間に湧きあがつた。T氏は長い間それに眺め入つた。

『實際、君、好い處だね。こんなに好い處とは思はなかつた。長く見てゐれば見てゐるほどよくなるね。Oは好い故郷を持つたもんだ。それに、此處等の村の氣風が好い。中々働く者が多い。それに怜悧だ……隣にKといふ村があるが、そこはドシ〳〵此方に押されて行くさうだからね。本當にOは羨しいよ。村の人は、名物にして誇つてゐるからね。』

『その代り、Oさんは、交際が中々大變だ。始終誰かしら來てゐるやうな家ですな。』

かうMは言つた。

『あれで、あの夫人があれで中々豪物だからね。大勢の子供をあゝしてそだてゝ、ちやんとして行くんだから……。そら、Kといふ書家があつたね。あの娘だよ。』

何うも彼方は子供が多くつて……』などと言つて、遅くまで何か話して、そして樂しさうに蒲團を並べてそこに泊つて行つた。

都會の忙しい政治の爭ひの中にゐては、昔の親友とも落着いて話してゐられない。昔のこともしんみりと靜かに考へてゐる暇もない。それを、この山の別莊で、かうして昔の繪卷を思ひ出すやうにして話し合つてゐる形がMにはなつかしく思はれた。Mは自分の親友達ともこの頃は疎々しく暮してゐることを思ひ浮べた。

T氏もO氏も漢詩をつくつた。O氏は殊に書が上手である。O氏はMがその別莊と松林を隔てて住んでゐるに寄せて、『何邊高士臥、林外一燈青』といふ轉結のある五言絶句を詩箋に書いてMに呉れたりした。T氏の漢詩も拙い方ではなかつた。『何うか一つ律をやつて見ようと思ふんだけれども何うも旨く行かない。未定稿ですよ、まだ……。』かう言つてそれをMに見せた。Mもさうした氣分にさそはれて、昔の書生時代がなつかしく、含英をT氏に借りて、何年にも作つた事のない漢詩を作つたりした。『何うも駄目ですな。すつかり平仄を忘れちやつて……筧といふ字は平でしたかな、仄でしたかな。』などとMは訊いた。

何うかすると、T氏は長い廊下をMの獨りで自炊してゐる方にやつて來て、『ヤァ、すつかり出來てゐるんですな。こゝが勝手、こゝが風呂、ヤァ、火鉢まであるんですな。これなら上等だ。靜かで勉強が出來るでせうな。かうしてゐると、昔の書生時代に返つたやうな氣がするでせうな。』こんなことを言つて、長

つた二人は、隔てのない口をきく仲になつた。T氏は今は閑散の身であるけれど、一二年前までは、I縣の知事をしたことがあつた人で、年は五十二三、背が高く、眼がやさしく、O氏と一緒に學校生活をした時分には、元氣な快活な面白い書生であつたらしかつた。Mは少しT氏よりは年下ではあるけれども、矢張その時分に苦學をした書生である爲めに、若々しい氣分が話をしてゐる間に出て來た。ずつと昔の空氣を再び此處に蘇らせて漂はせて見たいやうな氣がMにはした。

詩韻含英の三册本を持つてゐるのもなつかしければ、S史料の大きな本をO氏の許から持つて來て、此處等の歷史上の蹟を硏究してゐるのもなつかしかつた。それに、O氏とは殊に學生時代から仲の好かつた友達らしく、暇にまかせて氏との交遊なぞのことをよくMに話してきかせた。『なァに、Oの綽名がついてゐるだらう。そらオガォガッてさ、新聞になぞよく書かれるぢやないか。あれは僕等がつけたんだよ。』などと言つてT氏は笑つた。その學生時分に、O氏の老祖母とかになる人が東京に出て來て、O氏達の下宿してゐるところに度々やつて來たが、その老祖母がまだ達者で、八十先で生きてゐるので、その中訪ねて行つて、昔話をするつもりだなどとT氏は言つてゐた。T氏はO氏が十八九の時に、故鄕を脫走して、TからSに行く間で追手につかまへられた話――それはMは村の青年達から聞いて知つてゐる話であるが、その話をT氏はしたりした。T氏とO氏と話をしてゐるのを聞くと、丸で昔の書生同士と少しも變りがなく、面白さうに高聲で笑つた。或る夜は、O氏は、『家の方よりも此方の方が靜かで好い。

祖　先

Mのゐる山莊の別な間をあけて、O氏の客であるT氏が來て泊ることになつた。

Mは賑やかになつたことを喜んだ。昨日まで暗くさびしかつた長い廊下に明るいランプの灯が洩れた。

O氏の別莊には夏はいろ〳〵な客が來た。村の有志の人達、郡會議員で碁の好きな中年の男、昔一緒に遊んだ村長、政治上の議論を鬪はしに來るS町の町會議員、さういふ客達が常にやつて來た。夕飯の膳には、O氏は客を相手にして酒を酌んだ。

O氏は此地出身の代議士である。中央の政治界でも、ある黨の幹部になつてゐるだけあつて、元氣でもあり、寛容でもあり、交際上手でもあつた。從つて故鄕では、青年の群達にも崇拜されて、その土地の誇りの一つにされてゐた。代議士の改選の時には、村の人達は青年達と眞劍になつて氏のために働いた。O氏はこれまでに決して落選したことはなかつた。

O氏の許に客になつて來たT氏を始めてMが見たのは、村の校友會の席上だが、それから知り合にな

すぐMの聞き馴れた聲を耳にした。かの女は、『わかつて？　私？　わかるでせう。今、來たのよ……えゝ一人ですとも……お宮だけ見物したんですが……これから貴方の方へ行つて好う御座んすか、忙しい？　忙しいたつてわざわざ來たんですもの。好いでせう、T湖へ一晩ぐらゐ……ぢや、ね、俥で行きませうか。え？　え？　矢張電車の方が好い。……ぢや、精銅所前まで迎へに來てゐて下さるわねえ……。』

『え丶通じます。』
『精銅所にMさんと言ふ方がゐますね。』
『え、いらつしやいます。技術長か何かなすつてゐらつしやる方？』
『さうさう。』かう言つたが、『ちよつと電話をかけたいんですがね。』
『かしこまりました。此方は何方さまで。』
『くにと言へばわかるんですが。』
女中はすぐ飲込んだらしい顔をして出て行つたが、暫くして戻つて來て、『Mさんはちよつとお出かけになりましたさうですが、すぐ歸つて入らつしやるさうです。』
『さうですか。』女は女中の運んで來た午飯の箸を取りながら、湖の方へ行く路の距離だの、K瀧の附近だの、精銅所近所にも駕籠や俥があるか何うかといふ話などを種々と訊いた。さう深い關係でもないけれど、行つたら必ず訪ねると豫て約束して置いた精銅所のMを訪ねて、女はこれからT湖の方を見物させて貰はうと思つた。都合によつたら、MとT湖附近に泊つても好いと思つた。で、午飯をすまして、少し休んで、それからもう一度電話をかけて貰ふと、好い鹽梅に、今度はゐて、Mが電話口に出たといふことであつた。かの女は急いで大きな階梯を下りて、店の隅のところにある電話室の中へと入つて行つた。

に位置してゐるのを得意なやうな心持で見た。

暫く女は其處に立つてゐた。さながらその崇嚴な儀式に心を奪はれたやうに、又はその讀經の聲に魂をさそはれたやうにして……。しかし、暫くして再び歩き出したかの女は、今度はＡの位置から此方の見える方に向つて靜かに歩みを移して行つた。

Ａは確かにかの女の衣の裾を見たに相違なかつた。Ａはちらりと此方を見た。しかしその眼はすぐ本尊の方に移つて行つた。

禮拜が絕えず繰返された。

六

其處から出て、女は普通の參拜者と同じやうにして、そのお宮の見物をつゞけた。眼も眩するばかりの金碧、彫刻を鏤めた樓門、燦爛として金色のかゞやく拜殿、そこからそこへと靜かに女の姿は動いて行つた。女は殿堂から殿堂へと見物して行つた。

女が見物をすまして、長い坂から橋の袂へ出て、旅館へと歸つて來たのは、二時間ほど經つてからであつた。『あゝ疲れた！』かう言つてかの女はぐつたりした。

Ａ院の噂などを女は女中に聞いたりしてゐたが、ふと、『精銅所へは電話が通じるでせうか。』

香煙があたりに滿ちた。

參拜者の大勢入つて行く後について、かの女はずんずんその大きな殿堂の方へと行つた。讀經の聲は爽かに鮮かに聞えて來た。法衣を着た僧達が其處にも此處にも歩いてゐた。

大勢の後について、堂宇の中に入つて行つたかの女の眼には、夥しい香煙の中に、蠟燭の灯やら金ピカの佛具やら燦爛とした須彌壇やらが一時に目も眩ゆいばかりにかゞやいてゐるのが映つた。そして十二三人近くの僧が、いづれも黄ばんだ法衣を着て、揃つて、佛名を念じて、その度毎に秩序よく禮拜の袖をひるがへしてゐるのを見た。

讀經、禮拜の揃つた聲は、崇嚴に、ひろい大きい穹窿に似た殿堂の中に一面にひろがつてきかれた。

女は最初に賽錢箱の置いてある本尊に正面に向つた處に行つて、帶の間から小さい財布を出して、賽錢を投げて、そしてあたりの崇嚴な光景に打たれたといふやうにして、手を合せて長い間祈念した。この時には、A院の前で起したをかしいと思つた心持などは少しもなかつた。

僧達は佛名を一つ唱へると、それにつゞいて、長い節のついた聲で讀經して、そして揃つて禮拜した。

それがいかにも整正な崇嚴な感じをあたりに漲らせた。

最初はAが何處にゐるかを女は認めることが出來なかつたが、暫くすると、その一番前の列の先頭にゐて、音頭を取るやうにしてゐるのがAであるのがやがてわかつた。女はAが大勢の僧達の中で殊に上位

て獨りで笑つた。好い寺ではあるけれど――かういふところにゐたらせいせいして好いだらうけれど、まだ坊さんの上さんになつて後生を願ふには早いと思つてまた笑つた。『寺で一日三味線でも彈いてゐたら、何うだらう？』などとも思つた。愈々可笑しくなつた。

やがて路は曲つた。今度は一層廣々とした綺麗な通りで、大きな杉のこんもりと茂つた奧に、ピカピカ日に光る金碧の堂宇が見えた。

『あれがお宮！』

かうかの女は思つた。

ふとAの言つたことを思ひ出した。その金ピカのお宮の手前にある大きな門から入る筈である。そこから入ると、Aが三千禮といふ骨の折れる儀式をやつてゐる大きな本堂に行ける筈である。かう思つたが、五六間歩いたかの女は果して右に大きな門の高く聳えてゐるのを認めた。

參拜者が絶えず出入りしてゐるので、かの女も平氣でその中へ入つて行つた。Aの每日ゐるところは、その右の方だと聞いてゐるので、『あそこいらかしらん？』などと思つて、その向うにある小さな杉の木立の奧にある黑塀の方を見た。そこからはAが終日女の事ばかり考へて事務を執つてゐる室の窓が見えた。

ふと左を見た女は、其處に大きな殿堂の巍然として聳えてゐるのを見た。氣が附くと、讀經の聲が湧くやうにその中からきこえて來てゐた。

へと取つた。

お宮參拜の人達がぞろぞろと向ふからやつて來た。

K院、S院などといふ寺がつゞいた。皆な立派な寺である。門なども大きなものである。花の時は見事であらうと思はれるやうな大きなしだれ櫻などが門の中にあつた。右側には綺麗な水が溝を成して流れてゐて、その上が芝の塲で、又その上が長い塀で、更にその上から大きな寺の庭らしい植込の槇や椿が高く見えてゐた。

N院、I院、A院の前に來て、ぴたりと女の足は留つた。

『此處だ。』

女は微笑した。

それもかなりの寺であつた。S院、G院、K院などに比べては小さいけれど、その半分位しかないけれど、それでも黑塀の大きな門は兩方に開いて、鋪石道は長く玄關へと通じてゐた。樹の多いいくらか黃葉した前庭には、小鳥が好い聲で囀つてゐた。

誰もゐないので、女は覗くやうにして見た。玄關の此方に室があつて、そこに小さな窓がある。……そこに明るく日が當つてゐる。ふと昨夜Aの言つたことを女は思ひ出した。『妻帶が出來るやうになつたら、來て呉れるかえ？　本當かえ、本當にさうかえ？』かうAは嬉しさうに言つた。女はをかしくなつ

かつた碧い山の見えるのもめづらしかつた。女は靜かに大きな杉のこんもりと茂つたごろごろした石の舖いてある長い坂を一歩一歩登つて行つた。

黑い法衣を着た若い僧が二人づれで上から下りて來た。A院は何處かと餘程訊いて見ようと思つたけれど、思ひ返してよした。すれ違ふ時若い僧達は此方を見て何か噂しながら通つて行つた。

一人は美しい若い僧だつた。

坂を上り切ると、綺麗な水が流れてゐた。手で掬つてゞも飮みたいやうな水である。やがてG院と言ふ大きな瀟洒な寺が右に見え出して來た。

かう言ふお寺に、あゝいふAのやうな僧が住んでゐるのだと思ふと、女にはをかしく思へた。初めてこの山に來た身でありながら、さうした寺院の僧の生活を奧深く知つてゐる自分といふことも不思議に思はれた。勿論、AはこのG院などよりは、ぐつと位置も低いし、年も若いのであらうけれど、昨夜の話に由ると、かういふ綺麗な寺に住んでゐる僧達も、矢張妻帶といふことに就いて大騷ぎをしてるるのであつた。『女のことなんか、少しも知らない人達が住んでゐるんだ。』かう思ふと女は噴出したいやうな氣がした。

觀覽劵取扱所といふ札が突當りの處にかゝつてゐるのが眼に附いたが、Aに訊いて知つてゐるし、それに觀覽劵も特別のを持つてゐるので、其方には行かずに、綺麗な心持の好い掃除の行き屆いた道を左

ことも聞けば、今日かれの勤める三千禮といふ儀式の話も聞いた。『それは大變ですね。朝から晩までざつと三日かゝるんですか。佛樣の名を三千度……隨分大變ですね。』などとも言つた。女は儀式の行はれる大きな本堂の所在地なども聞いて、『ぢや、明日ソッと私もお參りしますからね。』

『だッて、困るよ、わかつちや――』

『わかるやうになんかしやしませんよ。大丈夫ですよ。』

『まァ、來て呉れない方が好いね。』

『だッて、何うせ、見物に行くんですもの。』

見物の金にと言つて、Aが十圓札と五圓札とを出したのを、あと、五圓を、『も一枚頂戴。』かう言つて女は貰つた。Aの財布はそれで大抵空になつてゐた。

女がN停車場から電車で、橋の傍の大きな名高い旅館の前に來て下りて、『入らつしやい。』と迎へられて入つて行つたのは、もうかれ是正午近かつた。晝の御飯を召上つてからと言はれたが、平生一二時頃に午飯を食ふ習慣をつけてゐて、まだお腹が少しも減つてゐないので、そのまゝ一人でお宮の見物にと出かけた。

美しい谷川と朱塗の橋とが、長い間かの女を其處に佇ずませた。人々は皆なその姿とサッと開いた派手な蝙蝠傘とを振り返つて見た。紅葉にはまだ早いが、山はいくらか薄く色附いて、奥深く白い雲のか

『それはさうと、N町に精銅所ッていふ處が御座いますか。』

『御座います。』

『町からぢきですか。』

『町からは三里位離れてをりますけれど、電車が御座いますから、わけは御座いません。』

『ぢや、お山の方とは違ふ方にあるのですね。』

『お山は町のすぐ傍ですけれども、精銅所はTの湖やKの瀧のある方へ行く途中になつてをりますから。』

『あゝ、さうですか。』ちよつと途切れて、『電車は汽車からすぐつゞいてるんですか。』

『すぐで御座います。』女中はかう言つて、『いづれ、御案内があるんでせうから。』

『え、先に歸つてゐるッて行きましたけれど……、生憎、今日は手離されない用があるッて言ッてゐましたから。』

で、朝飯をすましてからも、猶ほゆつくりと落着いて、三番の汽車の來るまで待つて、俥で女は停車場へと行つた。昨夜亂れた丸髷は結立てのやうに綺麗になつて、行きかふ人々の眼を惹いた。

女はN町からT湖の方まで見物する費用を今朝Aから十分貰つた。Aがわざ〳〵心にかけて持つて來たお宮の觀覽券をも貰つた。女はいろ〳〵なことを思ひ出した。山で僧達が妻帶する話が始まつてゐる

たら、それぢや、その麻の工場のですね。』
『えゝ、さうですの。』
『大きな工場ですか。』
『中々大きう御座いますよ。』
『ぢや、蚊帳なんかも出來るんですか。』
『蚊帳は何うですか？』
暫くして、話を更へて、
『近所に、見物するところはありませんか。』
『この町ですか。この町では、さァ、別に東京の人が來て御見物になるやうなところも御座いませんね。山に入ると、Oだの、Kだのッて名高いお山や何かゞ御座いますけれど……』
『遠いんですか。』
『Oまで五里か六里……』
『あゝ大變……』
かう言つて女は笑つた。
女は玉子燒だの汁だのを菜に、朝飯の箸を取つてるたが、急に、

るんだから……』かう言つて、かれは急いで出かける支度をした。Aは今は一刻も早くかうした境から遁れなければ、一身の破滅だとさへ思つてゐた。Aはそゝくさと其處を出た。女は長襦袢に伊達卷姿で廊下のところまで送つて來てそして別れた。

五

Aの立つた後で、女はゆつくりとして、金盥に湯を貰つて、髮を撫でつけたり、髮の具合を大きな鏡に映して見たり、襟のところに長くかゝつて白粉をつけたりした。『大變に世話になつたから。』と言つて別に一圓紙に包んで女にやつたりした。

やがて女中の運んで來た朝飯の膳に、女はおうと落着いて坐つた。女は藝者の話をしたり東京の話をしたりした。Aのゐる中とゐなくなつてからでは、女中に對する女の態度は丸で變つて落附いてゐた。

『さうですか、此處では祝儀といふものが藝者にないんですか。それでは何うしても時間でかせがなくつちやなりませんね。何うしても田舍ではさうなりますね。東京では時間なんか、何うでも好い位なもんですけれども……』などと言つた。

それからK町とその附近の話なども聞いた。麻の生産地で日本でも名高い町だといふことを女中が話してきかせた時には、『さうですか、それぢや賑かな筈ですね。今朝聞えた汽笛は汽車のとは違ふと思つ

餘り酒を飮まない女は、Aが寢込んで起きないのに一方ならず困つたといふ風にしてゐた。度々起しても、醉つたAは容易に起きなかつた。それでも女中が行つた時には、Aは起きてゐた。二人はこんな話をしてゐた。『困つたな、明日は早くから用があるんだから、今夜は何うしても歸つて行かなくちやならないんだが……』

『だから、さつきから起したのに起きないんですもの。』

『もう、六時のが出ましたから、こんどは終列車だけです。』

『何時と何時だえ。Nへは？』

かう女中は言つた。

『ぢや、歸るかな……』こんなことを言つて、Aは時計を見たり何かしてぐづぐづしてゐたが、今となつて仕方がない、もう一夜此處に泊つて行かうといふ腹らしかつた。女は又女で早く町に行きたいらしく、何となく泊るのがいやらしく、いくらかツンケンした口の利き方をしてゐた。しかし女中がその次に入つて來た時には、愈々泊るときまつたらしく、Aは元氣よく女中に戯談などを言ひかけた。

女も仕方がないと思つたらしかつた。

で、二人は其夜も、其處に泊つた。そしてあくる朝は、朝飯も食はずに、昨日からの勘定をすませて、Aだけ一人六時の一番で立つことにした。『何うしても八時には用があるんだから……僕がゐなくちや困

Aは蒲團のわきに置いてある小形の金時計をちよつと見て、『ホ、もう十一時だ！ 朝寢をした。』火鉢を持つて行つた時には、女が蒼白い顔をして頻りに亂れた髪を梳いてゐた。

湯殿の前で、女が先に、つゞいてAが顔を洗ひに行つた時には、さつきの朋輩の女中までが用事の手をとゞめて、向うからのぞきに來て、番の女中と顔を合せて笑つた。しかしAはそんなことは少しも知らずに、頻りに丸い頭を水で洗つた。

朝飯と午飯とを一緒にした。さうして、その一間では、また酒が始まつた。もう昨夜のやうなてれた座敷ではなかつた。女の望みで、町の藤八といふ婆さん藝者と、定子といふ二十一二の藝者とが聘ばれて、三味線の音が湧くやうにした。Aはかなりに酒が強かつた。頻りに女達に酌をして貰つて飲んだ。後には幅でNの山の話などをした。

昨夜もさう思つたが、女中はその女の三味線の旨いのに感心せずには居られなかつた。流石は東京だと思つた。藤八も『何うしても東京では藝を磨くからね。それに粋なものを知つてゐるからね。』などと言つた。一座は賑かに面白く騒いだ。

今朝起きた時にAが汽車の時間をきくから、急いで歸るのかしらと思つたら――今日は何うしても歸るのだらうと思つたら、そんな樣子もなしに、騒ぎの中に日は暮れて、また夜になつた。町の藝者達の歸つた時には、Aはしたゝかに醉つて、丸い頭を搔卷の下に見せていぎたなく眠つてゐた。

まされるといふ話、そんな話がそれからそれへと思ひ出されて、あと片附けをやつてゐても、客と話をしてゐても、用事が濟んで床に入つて行つても、絶えずそのことが女中の體と心とに絡み附いた。後にはさういふ深い情を持つた異性を自由にするその女が憎くなつた。

あくる朝は遲くまで、二人は起きなかつた。立つ客は立ち、朝仕舞は一通り片附き、朝日影が高く軒にさすやうになつても、それでもまだその一間はそのまゝになつてゐた。それがまた女中の氣に懸つた。

女中は朋輩の女中に其話をした。

『すかない。此人は? 燒いてるんだよ、まア――』

かう朋輩の女中は笑ひながら言つた。

『さうぢやないけれどもさ……氣になるアね。もう十時だよ。』

『若い坊主?』

『若くはないけれど、ちよつとした品の好い坊主だよ、Nだよ。』

『さう?』笑つて、『そんなに岡燒なんかするもんぢやないよ。體に毒だよ。』トントンと向うに駈けて行つた。

漸く二人が起きたのは、もう十一時近かつた。女中が入つて行つた時には、Aは白羽二重の下衣を着て、上に僧衣をはをらうとしてゐた。『もう、遲いかい。』

どをはめてゐた。町の〆奴といふ藝者に似てゐて、それよりは數等上だなどと女中は思つた。例の通り膳が出て、酒肴が出て、Aの顏はぢきに赤くなつた。やがて段々おとなしくしてゐなくなるAと巧に男の心をひき寄せる女とを女中は見た。Nの山の僧で、女が東京の藝者であることは今ではすつかり明かになつた。後には女もAも平氣で東京の話やらNの話やらをした。

三味線が持つてこられて、『さア』などと言つて女が彈いて見せても、Aは、『駄目だ、駄目だ、僕には駄目だ。』と言つて一度もそれに唄を合はせなかつた。曾て東京で女が敎へたらしい唄を彈いても、女中の其處にゐる間は、Aはきまりわるさうにして決して唄はなかつた。

やがて十二時が鳴つたのでいよ〳〵二人はやすむことになつた。女中はかう言ふことには馴れてゐるのであるが、Aが僧形であるといふことが不思議に少しく女中の氣に懸つた。女は無論このAに惚れてはゐない。それはその態度でわかる。しかし、この僧形であるといふことが、普通の男でないと言ふことが、女中には可笑しく思へた。それに、Aは何方かと言へば、若い時は美僧であつたらうと思はれる顏の端麗さと色の白さとを持つてゐた。女中はすつかり世話を濟して枕元に水を持つて行つて、ランプを行燈に代へて、『おやすみなさいまし。』と言つて靜かに引下つて來たが、長い間その一間の光景がその頭から離れなかつた。いろいろ昔聞いた話、大黑になつて行つては三年とは命が持たないといふ話、坊さんは不斷女に不自由でゐるので普通の男と比べものにならないほど情が深いといふ話、女にはよくだ

を挿まなかつた。かういふことは何うしても金のかゝることだと思つた。默つて女のするのに任せた。
いくらか毛の生えた丸い頭と、女の丸髷姿との障子に映つてゐるのが、中庭の植込を隔てゝ、向うの緣側から見えた。
其處でそれを見てゐた客は、出て來た女中を捉へて、
『えらいものを咬へ込んで來たね。何處の藝者だえ？』
笑ひながら小聲で囁くと、女中も低く口を押へるやうにして笑つて、
『何處の藝者ですかねえ。』
『近所の人ぢやないかえ。これも。』と客は頭を丸めて見せて、『フム……』
『東京から來たのかも知れませんよ、女は？』、
『これは、』と又頭を丸めて見せて、『これはNかも知れないね。』
『さうよ、さうよ、屹度、下りで來たんだから。』
圖星といふやうに女中は言つた。
その女中が萬事A達の世話をした。果してNの山の僧であることも、女とAとの間にどれだけ距離があるといふことも、Aが何の位遊びに不馴れであるかといふことも、段々女中に飲み込めて來た。女中の眼に映つた女は好い藝者であつた。二十二三で、豐かな頰をしてゐて、小さいけれどダイアの指環な

が不調和に浮んで來た。

それに引替へて、女には、自分から思ひ立つて來たと言へ、まだ他にもう一つの理由があつたとは言へ、わざわざ行つたＮ町から引返して、かういふ町に來たといふことが、いくらかつまらなくもあり又さびしくもあつた。女は姐さんの返事を待たずにさつさと平氣で出て來たことを頭に繰返した。朋輩の玉子が心配して『これからＮ町？　もう遲いわよ。明日になさいよ。』かう心配して言つて呉れたことなども思ひ出されて來た。

しかし暗い田圃の中は、さう長い間ではなかつた。女はやがて明るい灯のチラチラ其前に近いて來るのを見た。やがて俥は大きな賑やかな町へと入つて行つた。

町の家並の間をかなりに通つて來たと思ふ頃、大きな明るい二階屋の、ドンチヤン騷いでゐる室の此方に、松の生えた門の入口があつて、そこに俥夫は勢好く引込んで行つた。

『入らつしやい。』

かう迎へる聲が賑やかに聞えた。

二人はやがてやゝ離れた奥の一間に通された。かういふ旅館だけにそれと見て氣をきかしたのである。女はＡに茶代の置き具合から女中の祝儀まで世話を燒いた。Ａに取つては、山の中で儉約に暮したＡに取つては、驚かるゝほど金に價値を置かない女の所置振であつたが、さうかと言つて、Ａは別にそれに口

『町には、好い旅館はいくらでもあるんでせう。』
『それはある。』
Aが何か考へてまたぐづぐづしてゐるので、『ぢや、さうしませうよ。』で其處にゐた俥が二臺呼び寄せられた。
『何方へ。』
Aは何とか言はなければならない時期に達してゐるのを思つた。此時Aはふとかねて聞いてゐるS屋といふ料理屋兼帶の旅館のあることを思ひ出した。かうした場合には、普通の旅館よりも料理屋兼帶の方が好いだらうと咄嗟の間に思附いたかれは、
『ぢやS屋ッて言ふのがあるね。』
『石町の……』
『さうだ。』
『おい、S屋だとよ……。』車夫は後れて寄つて來た他の一臺の俥に言つた。
二臺の俥はやがて揃つて駛り出した。女が先に、Aがその後について……。Aの眼には女の丸髷が闇の中に輕く微かに動いて行くのが見えた。Aの胸にはかうしためづらしい事實と、祕密と、いくらかの不安との底に、淡い得意な樂しい氣分の漲つて來るのを感じた。ふと、明後日から始まる三千禮のことなど

た。Aは女の手をソッと闇に握つた。

女はそのまゝにして、灯の多い方へ歩きながら、

『何處へ行くの？』

『サア。』

『知つてるところはないの？』

『わざと知らない處に來たんだからね。』

『何處も知らないの？』

『町は知つてゐるけれど……旅館なんか泊つたことがない。』

かう言つたが、Aは言葉をついで、『それに、此處は町が遠い、本當の町のあるところまではまだ十五町ある。』

『困るわねえ。』

Aは停車場前をあちこち見廻して、何處か好い處はないかと言ふやうな素振を見せた。

『停車場前なんか駄目ですよ。』

『さうかな。』

と言つて、『ぢや、町まで行かうかね。』

『さう。』

かう輕くAは答へた。其處からも誰もかれ等の室に入つて來るものはなかつた。

Fの高原に來た時には、月は愈々廣く明るく車窓を照した。Aと女とは戀人同士か何かのやうにして並んで坐つてゐた。女は昔深く言ひ交して腕に入墨などしてそしてはかなく別れて行つた男のことなどを思ひ出してゐた。『何處にゐるだらう。臺灣か、それとも朝鮮か、相變らず浮氣をして女に騒がれてゐることだらう。』などと思つた。普通ならば、男の方が手を出して、自由な口を利き、戯談の一つもするのであるけれども、——また誰も他に人のゐない客車の中では、何とでも仕ようと思へば出來ないことはないのであるけれども、まだ世馴れない、かうした女の經驗に乏しいAには、さういふことが出來ないばかりでなく、口を利くにもいくらか加減するやうなおとなしさと慎ましさを持つてゐた。Aは唯かうした事實を不思議な心持で眺めた。

やがてK町の停車場が來た。

四

假令本當の戀人同士でなくとも、かうして夜更の停車場前の通りを女と並んで歩くといふことはAには嬉しかつた。それに、誰も知つてゐる人のないK町に來たといふことも、かれに心安い感じを起させ

やがて女は、『何處まで行くの？　そして……。』

『あとへ引返すのだよ。K町まで引返すのだよ。』

『K町ッて何方？』

『今、通つて來た處だよ、君が……』

『さう、』と言つたが、失望したやうに、『ぢや、Nの見物は何うなつちやうの？　見物は出來ない？』

『明日、また來て見物するやうにすれば好いさ。』

『さう？』

女には些つと腑に落ちぬらしかつた。

しかし汽車がI町近く行く時分には、女にもAの話がすつかりわかつてゐた。『考へれや、それもさうだ。普通の人ぢやないんだから。』などとをかしく思つた。Aもいろ〳〵な話をした。Aの被布姿と女の丸髷姿とは、誰れもゐない夜更の汽車の二等室に淋しく並んで見られた。Aは莞爾してゐた。『何うも矢張、僕なんかの境遇では世間が煩いもんだからね。』かう申譯をするやうに言つた。

月が美しく車窓から照した。秋の晴れた夜は靜かで、過ぎて行く窓外のものは、すべて白い沈んだ靄に包まれて水か何ぞのやうに見えた。やがてI町の停車場が來た。

『さつき通つたとこね。』

三

汽車が動き出してから、Aは始めて女と話した。

『さうなの？　私、そんなぢやないと思つた。』

『だつて、本當に困るんだから……。そんなことが知れゝや、山でも一大事なんだから。氣の毒だけど、仕方がない。』

『私は好いけど、それぢや、貴方、御迷惑だつたのね。』

『いや、迷惑ぢやないけれどね。前に何とか手紙か何かで言つて吳れゝやよかつたんだ。あまりだしぬけだから。』

『急だつたわねえ、餘り……』かう言つて笑つて見せて、『でも、急に見物がしたくなつちやつたんですもの。』女は今日の午後、主人の姐さんと喧嘩をして、半日ふくれて、『構ふもんか、Nへでも行つて遊んで來てやれ。』かう思つて丸髷に結つて、『姐さん、一日二日出て來ますから。』かう言つて何處へ行くとも言はずに出て來たことを思出した。Aと女とは一二年逢つてゐた。Aが山の用で東京に出るといつでも二日や三日は屹度女の許に行つた。

Aも女も暫く默つた。

『いや、さうぢやないけれども、あとへ引返すんだよ。だつて、困るんだから、町ではすぐわかつちまふから。』

漸く女にも飲込めたらしく、

『さう？』

『まア、あとで詳しく話すから……あとについてお出で……』

『さうなの？』

レールを渡つて、上りの客の大勢出て行くところから少し離れた處に來た時、『兎に角、切符は買つて置いたから、此の汽車に乘るんだ。』

女は狐につまゝれたやうな顏をしてゐたが、そのまゝAの言ふ通りに、下りの汽車の前へ來て立つてゐた。Aはもう一枚の切符を改札に切つて貰つて、そのまゝ人目を遁れるやうにして、後部の方につけてある小さな二等客車の中へと入つた。あとから女がついて來た。

幸ひにも、遲い終列車の二等室には、誰も乘つてゐるものはなかつた。Aは女に席を與へてから、窓の處に顏を出して、誰も他に乘客が入つて來ないやうに、又は一刻も早く汽車が出て行くのを待つやうに、あたりに眼を配つて見てゐた。やがて口に當てられた車掌の發車の汽笛はかれにほつと呼吸をつかせた。

氣になり出したAは訊いた。

『二三分間があります。』

『難有う。』

かう言つて、かれは矢張プラットホームに立つてゐた。

やがて夜の山氣を衝いて、上りのやつて來る氣勢がした。凄じい煤烟の音がする。つゞいて月の光に白く颺る烟が見える、大きな黑い汽車がやがて構內へと入つて來て、客車の中の乘客のチラチラと動いて行くのがかれの眼に映つた。

汽車の止ると共に、Aは急いで、殆ど驅けるやうにして、レールを渡つて、向う側に行つた。ぞろぞろと客は降りて來た。それをかれは一人一人見るやうにして進んで行つたが、丁度客車の中ほどのところに來た時、『あゝ貴方。かう聲をかけられて、振返ると一つ手前の客車から、丸髷に結つた女が綺麗な白い顏を見せて、小さな信玄袋を持つて下車しようとするところであつた。

何も言はずに、大勢の乘客の中を、わざと離れるやうにして、(上りの汽車の中にも知つてゐる人がゐるかも知れなかつた)そのまゝ此方に步いて來たが、レールを渡らうとする少し手前で、『また、乘るんだよ。』

『まだ汽車があるの。』

I町にしようか、K町にしようかとAは俥の上で長い間考へて來た。I町なら、旅館にも料理屋にも知つてゐる家がある。向うでは知らずに此方ばかりが知つてゐる家もある。それに町のさまにも明るい。いつそI町にしようか。それに近いにも近い……しかしそれはすぐ思ひ返した。少し遠いが、丸で知らない緣故のない町の方が、かういふことをするには却つて好い。その方が興味がある。旅館や料理屋は何處にでもある。此の汽車のK町に着くのが十時、まださう遲いと言ふほどでもない。で、かれはK町に行くことにした。

すぐ切符を切らせようとしたが、一枚の持主たるべきものがまだ來てゐないので、ちよつとかれは躊躇した。此處で上りの來るのを待つてゐても、間に合はないことはないと思つたが、兎に角自分だけ入つてゐようと思つて、一枚切つて貰つてプラットホームへと出た。此方側にゐる下りの汽車は、すでに完全に準備を整へて、上りが來たら、すぐ出るばかりになつてゐた。乘客の乘つてゐるのが車内の灯に明るく透いて見えた。

『しかし好い鹽梅だつた。誰も知つたものがゐなくつて。』

かうAは思つた。

上りは容易にやつて來ない。時計は既に五分を經過した。

『下りは、上りが來ると、すぐ出るでせうか。』

た丸軒燈が見えたり、明るい格子戸の中で料理番がせつせと料理を拵へてゐるのが見えたりした。ある料理屋では三味線の音が賑かにした。

いくらか下りになつてゐる町の通は、停車場に向つて躍くかれの心を滿足させるほどの早さを俥に持たせることが出來た。俥は逸早く走つた。

月は明るく山裾の町にその光を放つてゐた。澄んだ鮮やかな美しい光を。一點の陰翳もない冴えた光を……。從つて一筋に靡き下つた家並は、濃い黑い影を地上にはつきりと落してゐる。やがて停車場の黑い杉森が近づいて來た。

着くや否、Aは車夫に賃錢を渡して、そのまゝ急いで停車場の中へ入つて行つた。Aは一番先に其處にかけてある時計に眼をやつた。

十分前であつた。

ほつと安心したが、つゞいてかれは停車場の構內を彼方此方を見廻した。見廻すのが怖いやうであるが、しかし其處に知つた顏のあるかないかを見廻はさずには置かれなかつた。幸ひにも其處にはAを知つてゐるものはなかつた。

ふと見ると、乘客は旣にぞろぞろ切符を切つて貰つて、プラットホームの方へと出て行つてゐる。Aは急いで、Booking office に行つて、K町までの切符を二枚買つた。

Ａは禮を言つて其處を出た。これでもう安心だ。女に逢ふことも出來る。思ふまゝのことをすることも出來る。時間もまだ四十分以上ある。金も今借りた外に、さらひ廻して持つて來た金が十圓と少しある。女の爲に――女の見物でもする時の準備の觀覽劵も持つて居る。で、Ａはすつかり安心して、電車の通る橋の方へと靜かに下りて行つた。

『しかし、突然やつて來るとは不思議だ。大勢してやつて來たんぢやないかしら……いや、そんなことはあるまい。殊に終列車だ。一人で來たに相違ない。それにしても、思ひもかけないことがあるものだ。』こんなことを思つて、Ａは獨りで莞爾した。

空には遲く月が昇つて、それがきら〳〵と谷の水に碎けてゐた。いつも見る景色だが、今夜は殊に美しく樂しくかれには思はれた。自分の同僚達がそんなことは夢にも知らずに冷めたい蒲團にくるまつて寢てゐる姿などが眼の前に浮んだ。かれは微笑した。

電車の停留場で、少し待ちかけたが、向うから俥が來たので、電車でもしも人に逢つてはと思つてかれはすぐそれを引留めて乘つた。

遊覽者の絕えずやつて來る町は、賑やかに灯にかゞやいてゐた。土產物を賣る店、繪葉書を賣る店、その間に雜つてゐる大きな旅館では、番頭や女中が一々聲を立てゝ通る客を呼び立ててゐた。少し行つたところにある料理店には、藝者が褄を取つて艶かしい姿をして入つて行つた。大蒲燒、御料理と書い

心した。しかし丁度そこで二三人幹部が寄つて酒を飲んでゐたので、そのわる留を振切ることが出來ないで、時間がまた少し經つた。かれは停車場へ行く前にもう一軒寄らなければならない處があつた。頻りに留るのを、遲くなりますからと言つて、振解くやうにして、漸くにかれは出て來た。

Aは急いで、闇の中の、石のごろ〳〵する道を杉森の方へと行つた。

杉森の中に灯がぽつつり一つ見えた。それはかれが常に金の融通などをして貰ふ土方の親方が住んでゐる家だ。急いでかれはその表口から入つて行つた。

上さんが出て來た。

『親方ゐるかね。』

『まア、お上んなさいまし――』

『大急ぎで、頼みたいことがあるんだ。上つちやゐられないから。』

上さんが引込むと、親方がすぐ出て來た。

『まア、お上んなさい。』といふのを強ひて押へて、『急用で、終列車でW町まで行かなければならないが、銀行が駄目だから、五十圓ばかりちよつと融通して呉れないか。歸つて來たらすぐ返すから。』と頼んだ。親方は、すぐ承知して呉れた。Aは金に堅く、町にもかなりの信用があつた。

引込んで行つた親方は、すぐ金を持つて來てAに渡した。

大變である。それに、Aにはその電報の來たことが嬉しくないことはない。このまま逢はずに返して了ふのも惜しいやうな氣がする。祕密の歡樂、さういふものも強い力でかれに迫つて來る。

Aはうろうろしてゐたが、その次の瞬間には、ふと好い考へが浮んだ。『さうだ、さうだ。』と思つた。向うから來る終列車と三四分間を置いて、W町に行く下りの終列車が出る筈だ。それに乘つて、跡へ引返す。W町は知つてゐる顏が多いから、I町なりK町なりで下りる。……そこには旅館もあれば、料理屋もある。何うにでもなる。かれはほつとして呼吸をついた。つゞいて、今度は何ういふ口實で一日内を明けるやうに話さうといふ心配が出て來た。何と言つて、これから暇を貰つて出かけようか。さうだ、W町にあの用で行けば行かれる用がある。それに、捨てがたい私用が出來たやうに話す。『さうだ、さうだ。』かう思つてゐるうちにも、時間の經つことを氣にしたかれは、急いで法衣を引かけて、其處を出かけた。

法衣が第一氣にかゝつた。法衣の上に被布を着たが、この扮裝で、この帽子を冠つては、何うしても僧侶である。女と一緒に話したり歩いたりしてはすぐ人目を惹くに相違ない。Aは今更ながら不自由な不便な不自然な自分達の生活を思つた。しかし何うすることも出來なかつた。普通の人の着る着物などをAは持つてゐなかつた。

S院に寄つて、その話をした。早速承知して呉れた。別に怪んでゐるやうな樣子もなかつた。Aは安

が、生憎留つてゐるので、わざ〳〵立つて廊下にかけてある大きな時計を見に行つた。

七時二十分だ。

最終の列車、山に着く最終の列車は九時だ。何うしたら好からうと思つた。また女が何うしてさう急に思ひ立つて出て來たらうと思つた。くに――と書いてあるから、あの女に相違ない。『秋にでもなつたら、見物にやつて來ないか。』かう言ふと、『行くわ、屹度行くわ。忘れてはいけませんよ。』と言つた。しかしまさか出て來るとは思はなかつた。かういふ電報を突然打つて寄越さうとは思はなかつた。來るなら來るで、前に手紙でも寄越して置けば好いのに……。かう思つて見たが、今になつて何うすることも出來なかつた。

しかしこの一山の內で、多い人目の中で、何うしてAは女、殊にさうした女と一緒に歩いたり何かすることが出來るであらうか。何處に行つても、大抵は知つた顏である。すぐわかる。すぐ知れる。そればかりではない。そんなことをすると、折角面白い形勢になつてゐる妻帶說もすぐ打壞される。『見ろ、あのざまを』と言はれる。それに、第一、自分の身からして考へて見ても、あの女と一緒に、この山內や町なんか歩かれない。夜でも歩かれない。

Aは當惑した。いつそ默つて知らん顏をしてゐようかとも思つて見た。しかし、女はやつて來るに相違ない。今夜來なくも、明日の朝はやつて來る。『Aといふ人はゐますか。』かう言つて來られては、一層

で、『時勢が違ふのだ。昔とは時勢が違ふのだ。何處の宗派でも、今は妻帶は公然の事實になつてゐる。公然と妻帶しないから、我々に對するいろ〳〵な世間の非難が起るのだ。女に關した事件以外には、我我は世間に對して攻撃される何物もない。元老達が因循して、かねないでも好い世間をかねてゐるからいけないのだ。我々が率先して、妻帶しよう。有效に妻帶しよう。でなくては若い者が可哀相だ。我々が嘗めて來た苦痛を若い者に再び嘗めさせるのは忍びない。』かうS院や、G院や、K院が先に立つて動いて、一山の憲法の大改革をして、揃つて一緒に妻帶しようと言ふ話がそこゝから洩れてきこえた。

『大分、面白い形勢になつて來たぢやないか。』

『まだ、何だかわからないよ。G院にしろ、S院にしろ、いざと言ふと、腰が弱いからな。元老から何か言はれると、すぐへこたれて了ふからな。』

『さうでもなささうだぜ、今度は――』

AやGやKなど若い組は、こんなことを言つて笑つた。

二

明後日から秋の彼岸の三千禮が初まらうとする晩、Aは突然一通の電報を受取つた。封を切つてそれを見たAは、急にそは〳〵し出した。ゐても立つてもゐられないやうな氣がした。机の上の時計を見た

れた。月は年と經つた。女のゐない生活はみじめなものだが、又一方甚だ簡單なものであつた。同僚が二三人寄ると、『何うだ。薪水の勞を取るものがもう出來ても好さゝうなものだがな。』とか、『明るい顏をした奴が一人傍にゐると朝起きた時でも氣分が違ふんだがなア。』とか、『もう好加減に、持つても好い時節が來さうなもんだが。』とか言つて皆なして笑つた。異性といふものに緣の遠いかういふ人達には、女は美しい樂しい何とも想像の出來ない快樂の對照のやうに誰にも思はれた。處々で目に觸れる派手な色彩、見たゞけで却つて此方が辛くなるやうな光景、見物人の多く入り込む山だけに、一層さういふ刺戟と印象とが多かつた。Aもよくその室で女のことを思つた。それも、普通の人のやうにはつきりと攫んだ一人の女の印象ではなく、多くの女の美しさと派手やかさと色彩とを一緒に集めたやうなものであつた。東京に行つた時の人知れない歡樂も、長い間その記憶から離れやうとはしなかつた。

一山の幹部では、此頃かういふ話が持上つてゐた。妻帶の話、――表面は行ひすましてゐても何うしても一人持たなければならないといふ話、妻を公然持たないがために却つて種々な非難が多いといふ話、それは數年前から始まつてゐることであるが、元老達がやかましいので、持上つては消え、消えてはまた持上つた。今の中、幹部を動かさないと、その人達も老人になつて了ふ。老人になつて了へば、今まで堅固に行ひ濟した折角の名譽を打壞してもつまらないと言ふので、ついふいになつて了ふ。『今の中、何うしても幹部に持たせる算段をしなければいけない。』かう若い連中は先に立つて騷いだ。幹部は幹部

『それに、今年はＡさんに出て、心をやつて貰はないと困る。』

Ｇが言ふと、

『Ｋさんは何うした。』

『Ｋさんは東京に行かなけれやなりませんから。』

『東京行か？　東京行の方が好いな。自動車でも飛ばして、のんきに遊んでゐても誰も知らないからな。』

こんなことを言つたが、Ａは仕方がなしにそれを引受けることにした。大きな寺の事務室、其處にＡは住んでゐた。近くにある自分の寺から通つて來ても好いのだが、面倒臭いので、宿直旁Ａは其處に起臥することにした。六疊の一間、それにつゞいて三疊の副室がある。六疊の方には、圍爐裏の上に鐵瓶がかけてあつて、茶器が布巾に蔽はれたまゝ其處に置いてある。いつでも客が來ると茶が出せるやうになつてゐる。その傍に机がある。それに書類やら本やら雜誌やら新聞やらが載つてゐる。Ａは其處で一山に關する煩雜な事務を取つた。

Ａとその一室には今まで密接な空氣と氣分とが釀されてゐた。Ａは其處に二三年起臥した。飯時分になると、下男が持つて來る精進物の食事、油揚か、大根か、さうでなければ汁か、それを菜に、Ａはほそぼそと夕の酒のあとの食事を濟した。そして醉つて汚れた蒲團の中に丸くなつて寢た。日は明けて暮

禮拜

一

秋の彼岸の三千禮には、順番で今年は何うしても出なければならなかつた。一日一千體の佛名を唱へるとしても三日かゝる。朝の八時から夕の五時近くまで、ちよつと午飯の時間休むだけであとは立ち通しでゐなければならないのである。

『丸で足が棒のやうになるからね。成るたけは誰れかに讓りたいが、さうも行かんかね。』かうAといふ三十五六の僧が言つた。

『だッて、君は去年も何の彼のと言つて休んだんだから、今年は免がるべからざる次第だね。』

Gといふ僧が笑ひながら言つた。

『何しろ、あれをやると、一週間位體にたゝるからね。膝の節が旨く曲らないやうな氣がするからね。』經驗があるので、誰も彼も皆なかう言つて笑つた。

『まァ議論は中止だ、僕はもう一度湯に入つて來る。』かう言つてKは出て行つた。あとでTはさびしい心で床の中にもぐり込んだ。

隣の間で若い女の物を讀むやうな氣勢がした。然しTは疲れてゐた。ぐつすり寢込んで了つた。

翌朝、起きてからTは言つた。『君は知るまいが、隣に、』と腭で指して、『シャンがゐるぜ、昨夜、遲くまで小說を讀んでゐたぜ。紅葉、露伴の話なんかしてゐたぜ。考へると、きまりがわるいや、昨夜の議論をすつかり聞かれちやつた。』

『作れは?』

『安心し給へ、母親らしいから。母親の湯治について來てるらしいよ。何でも二十一二位の女の聲だ。』

『ふむ……』

『紅葉のものだと思ふんだ。何でも、遲くまで讀んでゐたよ。』

Tはそれから隣の間に注意したが、遂にその姿を見ることが出來なかつた。その朝も矢張霧が少しかかつて、あたりは寂としてゐた。U湖は銹びた寒い碧の色を湛へてゐた。

『お名殘に、もう一度。』かう言つて手拭を持つて出かけて行つたKは、歸つて來るとすぐ、『君、ゐたぜ、入つてゐたぜ。隣のシャンが…… すつかり見ちやつた。』かう言つて、かれの後に母親と一緒に小さくなつて入つてゐた肌の白い娘の話をKはした。Kはその母親と朝夕の話をしたと言つた。

T君、一度は行かうぢやないかね。』

『行きたいね。』

『行つて、ドオデエ、ゾラ、トルストイなんて言ふ人に逢ふんだね。あ、ドオデエは死んだか。僕はツルゲネフが生きてると、何んな算段をしても行くがな。』

『兎に角行きたいね。』

『そしてイリナや、マリヤンナのやうな少女に逢ふんだね。ドイツのたりでは、經濟上結婚が容易でないので、日本人が行くと、ぢき惚れるさうだ。留學生で行つた人なんか、ドイツ少女とエンゲイジして此方で困つてゐるつて言ふぢやないか。』

かれ等は誰もゐない Ruined された室から室へと入つて行つた。ある室には大きな鏡が置いてあつて、それにKの紅顔とTの髭の深い四角な顏とが映つた。ある室には外國人の姓名をつけた宿帳見たいなものが置いてあつた。Tはひつくり返して見て、『矢張、アメリカ人とイギリス人が多いな。それからドイツ人、ロシヤ人やフランス人は一人だつて來てやしない。』かうさびしさうに言つた。

外は霧が深かつた。いつの間にかう深く霧が立罩めたかと思はれた。『かういふ景色は何うしてもロシアだね。』こんなことを語り合ひながら、かれ等は自分達の二階の一間へと歸つて來た。

少しばかり飲んだ酒のあとで、二人はまた議論した。一時はかなりに大きな聲を立てたらしかつた。

してあるのを見て、何の氣なしに入つて行つた。卓、籐椅子、コロタイプ版の額、見ると卓の上に外國の小說の本が二三冊投つたやうにして載せられてある。大方泊つた外國人が讀み棄てゝ置いて行つたのであらう。Tはそれを手にした。かれはAnthony HopeやZangwellやWilliam Blackなどのイギリスの通俗作者の名を其處に發見した。

Kが出て來た樣子なので、『おい、此處にゐるよ。』かう言ふと、Kも好い心持さうな紅い頰をして入つて來た。

『や、外國人の室だな。』

かう言つたが、『かういふ處に泊るんだな、奴等……』あたりを見廻して、『何だえ、その本は？　奴等が置い行つた小說かえ？』

『こんなものばかり讀んでゐるんだよ、先生方。矢張、何處にも通俗な讀者が多いと見えるね。』

Kは本を飜して、『何だえ、これは、探偵小說かえ？』

『Anthony Hope なんかまア好い方なんだけれど、イギリスの近代文學は駄目だよ。とても大陸のやうな大きな深い思潮には觸れてゐないからね。』

こんなことを言つてゐたが、Kは、『それにしても、奴等こんな山の中まで來るんだね。そして此處で故鄕や妻子を思つたり何かするんだね。僕等がスイスの山中にでも行つたやうな格だね。』急に『おい、

『まだ、此方の湯が開いてありませんので、遠くつてお氣の毒ですけれど。』と言つて、宿の番頭は、どてらに着換へた二人を別館の方へ伴れて行つた。そこは夏中外國人のためにのみ使はれるところで、長い暗い廊下があつたり、安樂椅子や籐椅子の置いてある室があつたりした。寂寥があたりを領した。ずつと奥の奥の方にある湯殿の戸を番頭は明けた。湯氣は白く颺つた。

『これは好い、これは好い。いかにも山の溫泉だ。』Kはかう言つて、どてらをぬいで、寒さうにして湯の中に飛込んで行つた。

融け合つたり離れたりするかれ等の心が、此處ではまたひつたりと旨く親しみ合つてゐるのをかれ等は感じた。さういふ時には、Kに取つてTが唯一の親友であると共に、Tに取つてもKは貴い尊敬すべき畏友であつた。二人はいろいろなことを話しながら、同胞のやうにして互に背中を流した。來た途中の自然の大きかつた話も絶えず繰返された。『さびしいね、原始時代に歸つたやうな氣がするね。音といふ音がない。水の音より他には何の音もない。』かう言つては耳を聳てた。

Kはまた兩足を向うに、頭を此方の浴槽の緣に寄せて、靜かに湯の中に身を浸した。『本當にかうしてゐると、何事も思はないね。世間も何もないね。文壇も何もないね。』

『本當だね。』かうTも合はせた。

Tは先に上つて、どてらを着て、廊下へ出て行つたが、ふと其處に外國人の泊る室の一ところ明け放

置いて見なければ承知が出來なかつた。『あゝもう、漁師ハンスルの家はあんなところになつた。』かうKはTに指した。

頭を低れて、眼を一ところに集めて、トボ〳〵と步く……。さういふ步き方をする時は、屹度Kの頭にそのお信さんの傷痍が再び痛み出してゐる時であつたが、Kは次第に沈默になつて、R瀧附近に來た頃には、もう餘り口を利かなかつた。かれはトボ〳〵と頭を低れて步いた。荒涼とした野はやがてかれ等の前に展けた。

山の奧の奧にある溫泉は、漸く四五日前に開けたばかりであつた。去年の秋の末に刈つた蘆で包んで、怱惶として下りて行つたまゝになつてゐる旅館も、まだ其處此處にあつた。かれ等はNといふ旅館に行つた。

此處はまだ全く冬であつた。綠の色は何處にも見えず、白樺の林は、遠くから望むと丁度白い霧に包まれてゐるやうに見えた。山の寒氣は肌に染み透つた。一里の高原――その間を戀の追憶に包まれて默つて通つて來たKは、此處に來て始めて口を開いた。

『冬だね、君、春はまだ麓だ。』

旅館の床の間の大きな花瓶には、それでももう石楠花の見事な花が挿されてあつた。その花の微紅い色に對して『何とも言はれないね、矢張深山の花だね。』かうKはさも感じたやうに言つた。

う言ひながらかれ等は眺めた。

『一思ひで好いな。死ぬ時は此處に來るんだな。』

かうKは言つた。瀑の持つた神祕なある威力が若いかれ等を引張り込むやうにした。

其處で二人はまた瓢箪を取出した。海苔卷を取出した。酒はトコ〳〵と瓢箪の口から猪口につがれた。

幸ひにもかれ等の口には、死の問題は上らなかつた。Kはやがて連中の最初の詩集の校正刷をポケットから取り出した。それは咋日都會にゐる連中の一人から、わざ〳〵送つて呉れたものであつた。KもTも二三杯の酒に好い心持に醉つて、其の詩集に載せてあるかれ等の若い詩を朗吟した。

歸り際に、Kは言つた。

『文學界のSは石山寺にセキスピイアを供へたさうだが、我々も、記念にこの校正刷を瀑神に献じやうぢやないか。』

『よからう。』詩集を瀑に投ずると共に、かれ等は『萬歲！』と叫んで手を擧げた。

一時間後には、樹立の間からをり〳〵湖水の明鏡の見えるやうな折れ曲つた路をかれ等は歩いてゐた。

若い心には物がすべて美しく端麗に見えた。平凡な漁師の家などでも、それを唯そのまゝに見ては過せなかつた。かれ等は、先輩のO博士の書いた作中のシーンをそこにあてはめて、『ハンスルの家』といふ名をその漁師の家につけた。狂したバワリヤ王、その犧牲になつた美しい若い少女、さういふ人達を其處に

老僧の持たせてよこしたその瓢箪は、一番先に、W瀧の小暗いしかし爽やかな日影のさし込んだ谷の岩石の上で開かれた。Kはポッケットの中からごそごそと紙に包んだ猪口を出して、Tに渡して、『こいつは妙だな、』と言つてトコトコと瓢箪から酒をついだ。しかし一二杯しか二人は飲まなかつた。瀧のある谷には、八汐の躑躅や、山吹や、婿菜などが、紅く白く黃く咲き滿ちてゐた。

到るところ、大きな自然のさまに撲たれたかれ等は、午近く、M茶屋から險しいF阪を登つて、Oのひろい平地へと登つて行つてゐた。白樺、山毛欅の幹、さういふものがまたKに北海道を思はせ、自然を思はせ、お信さんを思はせた。有名なK瀧の雄壯な眺望に對した時には、Kの顏には蒼白いある興奮が見られた。その頃には、瀧の上流にも嚴重な柵などはめぐらしてなかつた。無數に瀧壺に向つて注がれた若い不可解の心などもなかつた。瀧の壯觀に引張られるやうにしたKは『何うだ、君、瀧の落口に行つて見ないか。』とTを誘つた。そしてづか〳〵と熊笹の叢をわけて、瀑の上流の岸へと下つた。Tもその後につゞいて行つた。

『大丈夫だよ、行かれるよ。』先に立つたKは、樹の枝に縋つたり、岩角につかまつたりして進んだ。やがて二人はその瀧の落口のところへ行つた。谷を隔てゝ見ると、ちよつとさういふ處がありさうには思はれないけれど、行つて見ると、其處には岩と岩との間に、六疊敷位の狹い平地があつて、下に巨瀑の奔跳して瀉下して行つてゐるさまが一目に眺められた。『凄いね。飛込めば、すぐ粉韲されて了ふね。』か

持つて向うに行つたりしてゐるので、Kが訊くと、『山行きは、何うしてもこれを持つて行かなくては……。樂しみが違ふ。ヤ、本當だとも……。こればかりかついで行くに、何でもありやしない。貴方方が東京から持つて來て呉れた酒がまだどつさり殘つてゐるから……まァ、持つて行きなさい。』かう言つて、老僧は無理にかれ等に酒の入つた瓢簞を持たせて、猪口を一つ紙に包んだ。

すつかり草鞋がけになつて、脚半をつけて、瓢簞を肩にかけて、Kは玄關の入口の處に立つてTの支度の出來るのを待つてゐた。其處に老僧と婆さんとが出て來た。

『かういふ風にしてゐると、いかにも酒飮のやうだね、君。』

かうKが言ふと、

『なァに、……そればかし……重くも何ともありやしない。それがあるとないとでは、樂みが違ふでな。』

老僧は莞爾した。

その瓢簞の酒は、歩く度にコトコト輕い音を立てた。若い二人には、爽やかな樂しい氣分が漲り渡つた。深夜短刀を見つめて、生か死かを思つたK、暗い深い肉體と精神との刺戟に堪へかねて、をりをりは自から殺さうかと思つたT、さういふ暗い氣分は今は少しも二人の頭に殘つてゐなかつた。かれ等は鳥や獸のやうに快活に歩いた。

『本當だね。』

『何うだえ？ あの雲は？ あの光線は？ あ、あれがN岳の肩だな。O岳の裾も見えるぢやないか。』

ぢつとそれに見入つたKは、この奧に深く藏された自然の美を、今は何うしてももう見ずには居られないと言ふやうに、『何うだえ？ 行かうぢやないか、明日は！――』

『さア……』

『小說の方は、歸つて來て書けば好いぢやないか。行かうよ。』

『行つても好いね。』

『行つても好いなんて言はずに、行くときめ給へよ。まご〳〵してゐると、その僅かな、僅かに儉約して行く金さへなくなつて了ふぜ……行かう。』

『行くかな、それぢや……。』

『僕はきめたよ、もう。明日行くときめたよ。』

Tもその氣になつた。かれ等は猶ほその大きな美しい自然に對した。

二人が行くと言ふので、老僧は海苔卷を自分でつくつて呉れた。そしてそれを竹の皮に包んだ。瓢簞――老僧が上方見物に行つた時京都の夜店で買つて來たといふ自慢の瓢簞を壁から下ろしたり、片口を

あとは泊り賃だけだ。行かう、行かう。』

かうKは促した。

Tも一度は行くつもりでゐるけれども、書きかけた小說に、もう少し一段落をつけたいと思つた。

ある午後であつた。二人は寺の庭に立つてゐた。

かれ等の前には、色彩の美しい、複雜した變化に富んだ大きな自然が橫つてゐた。山の起伏、それも平生見てゐるのであるが、それがいつもと違つて、今日は非常に高く美しく立派に仰がれた。恐らくそれは雲の爲めであつたらう。又、氣象の爽やかなのにつれての光線の作用であつたらう。初夏に近い空の碧が處々に見えて、山々から渦まき上る雲の形――或は煙のやうに或は怪物のやうに、或は海中の孤島のやうに、種々な形をして靡きわたつてゐたが、それに日の光線が燦爛とさして、何とも言はれない爽やかな氣分を四邊に漲らした。

『大きいね、自然は!』

さもさも感に堪へないやうにかうK は絕叫した。雲は絕えず變化し、光線は絕えず動搖した。

『この「あらはれ」の一變化をすら人間はこしらへては見せることが出來ないんだからね。自然から見ると、人間は情けないね。くやしくなるね。』

Tは笑つてそれを聞いてゐた。

二三日も經つと、Tのところにも、少しばかりの爲替が屆いた。矢張少年物か何かの原稿料であつた。丁度、月末なので、かれ等はそれで彼方此方の拂ひをした。酒屋、米屋、炭屋――拂ひと言つても僅かな金であつた。二人は老僧へのお禮の話などもした。『なァに、それは歸る時にしやうぢやないか、まだ半月や一月はゐるんだから。』かうKが言ふので、Tもそれに同意した。

またKの財布から錢が出たり、Tのがま口から金が出たりした。小さな一錢二錢のことまで几帳面にTが帳面につけて置いたり、それを可不及なく返したり何かするのをKは面倒がつた。『好いぢやないか、二錢や、三錢。』かうKは言つた。『でも勘定は勘定だから。』かうTは言つた。

すべてゞ四圓八十五錢、それを兩分して、一人前の一ケ月の生活費二圓四十二錢五厘。――『馬鹿にかゝらんな。これぢや、歸りには金を殘して歸れるぜ。出稼に來たやうなもんだ。』こんなことを言つてKは笑つた。

で、T湖からU温泉の方へ行く話が、かれ等の間に始まつた。Tは度々行つて知つてゐるけれども、Kはまだ此處に來ただけで何處にも行つて見なかつた。

『儉約して行けば、いくらもかゝりやしないよ。T湖まで六里、そこまでてくる。そこで午飯を食ふ。その午飯だつて、お駕籠で行く連中のやうに、大きな旅館にさへ入らなければ、安くすむ。又、てくる。

だ。
Kは訊いた。
『面白いか？』
『面白い。心理を描いたところが堪らなく好い。』
かうは言ふものゝ、健全なものゝみを選んだ『短篇集』に得たやうな快感をTはその作から得ることが出來なかつた。肉體と精神との關係、女の男に對する欺騙、コケットリィな女の生活、二人の男に一人の女、乃至は二人の女に一人の男、さうした境がTにはわからう筈はなかつた。或はKにもわからなかつたかも知れなかつた。それでもTは、『面白い、傑作だ！』などとKに話した。

Kの處女作は、それでも一枚二十五錢で何うやら彼うやら賣れた。作が短かく、雜誌に載せるのに丁度手頃であつたからであらう。それに、G社の連中の型にはまつた作の中には、かういふのも變つてゐて面白いと、主筆は思つたのであらう。『矢張、二十五錢だ。けしからんな。言つてやらなくつちやならない。』かうは言ふものゝ、多少賣れるか何うかを懸念してゐたKの顏には、喜悦の色がそれとなく漲つてゐた。

『賣れなけりや好いがな。』

『大丈夫だよ。あゝいふ本を買ふ奴はないよ。』

それでもTには心配になつた。『もうーぱつさん、もう――ぱつ――さん。』と口癖のやうに言つた。それは紀行文の原稿料がH書店から來た日であつた。その稿料と言つても、僅かな金であつたけれど、Tは一番先にその本を買はうと思つた。町の中央の左側にある大きな郵便局でその企を受取ると、かれは急いでその洋書店へと入つて行つた。Tは躍る心を抱いてそれを買つた。

黃い表紙のフランス形の並製の本で、まだいくらも汚れてゐなかつた。此處に來た遊覽の外國人が置いて行つたものらしく、扉のところに、イギリス人らしい名が記されてあるのをTは見た。

『買つた！　買つた！』

かれはKの室までわざ〳〵入つて行つて、それをKの鼻先で振回した。

『たうとう買つたか。』

Kも莞爾してゐた。Kはそれを手に取つて見たりした。男と女と接吻してゐる挿繪があつたが、Kはぢつとそれに見入つて、『好いなァ。思ひ出すなァ。』

Tはそれを本當に戀人か何かのやうにして、その身の傍から離さなかつた。筆を執つてゐない間は、かれは必ずそれに讀み耽つてゐた。机の上でも讀み、長火鉢の前でも讀み、庭の暖かい芝草の上でも讀ん

があるのを發見して、何の氣なしに、ひやかし半分に其處に入つて行つたが、突然 Maupassant の名がTの眼にかゞやいて見えた。Tはそれを引張り出した。それは "Pierre et Jean" といふのであつた。かれは胸を轟かした。戀人に世界の果で逢つたやうな氣がした。

『いくら、これは？』かうかれは番頭に訊いた。『一圓五十錢』と番頭は答へた。Tにはそれを買ふ錢はなかつた。仕方がなしに、Tはそれを元のところに入れた。

"Maupassant" の字が寢ても覺めても、Tの頭を離れなかつた。何ぞと言ふと、それをかれは口にした。その本を買つて、喜んで歸つて來る夢から覺めた。『もうーぱつーさん』かういふ風に日本綴の字になつて見えた。Kはそれ程それに傾倒してゐないので――寧ろかうした走りの外國作家の名に馴れてゐないので、餘りTが大騷ぎするのをひやかして、『もーぱつーさん……何だ、もうばァさんだ。もう婆さんはいやだね。』などと言つた。町の方へ散歩に出かけると、Tは屹度その店を覗いた。『まだある。まだある。誰も買はなければ好いがなァ。金が出來るまで賣れずにあれば好いがな。』かう言つて其處から出て來た。

『まだ、君の情人はゐたかえ？』

などとKは言つた。

Kが町から歸つて來た時には、Tは一番先に訊いた。『まだあつたかえ？』

『あつた、あつた。』

エとがいつも出た。Kは中でもツルゲネフが好きであつた。其時分は容易に手に入れることの出來なかつた『烟』の英譯を一冊持つてゐて、イリナの話をいつもKは持出した。何方かと言へば、かれはツルゲネフの自然に對する形を好きであつたけれど、――『獵夫日記』のあるものなどは殊に好きであつたけれども、『烟』はイリナの戀がお信さんとかれとの戀に似てゐるので、殊にKは愛讀した。『女つて、皆なかういふもんだよ。』と言つたり、『本當にこの通りだ。"Smoke, Smoke."と言ふあたりは何とも言はれない。』と言つたりした。最後に、イリナがそこの男の許に行くところを評して、『これは蛇足のやうだが、さうぢやない。こゝが大きいんだ、人生だ、廣い不可解な人生だ』と言つた。『アンナ、カレニナ』のレヴヰンの生活とブロンスキイの生活との比較論はTを感服させた。Kが郊外にゐた時分、漸く公にされた"Acia"の飜譯には、殊にKは傾倒した。

Tはロシヤの文學も好きだが、何方かと言へば、フランス文學の方だつた。

Maupassantの名が文壇の二三の人達に漸く口にされた時代で、その『短篇集』をTは大學のMから借りて、喜んで傾倒した。その『短篇集』は多い短篇の中から殊に健全なものばかりを選んだやうな選集であつた。從つてTはMaupassantの本領とする深い男女の悲劇などはまだ知らなかつた。皮肉な點をも知らなかつた。矢張ツルゲネフやドオデエのやうに單に美しい男女の間柄の短篇を書く作者だと思つてゐた。かれ等が始めて此處に來た當座、町の通りに古い洋書店――一面雜誌店を兼ねたやうな洋書店

一日隔き位には、下の湯殿に、婆さんが風呂を沸した。『湯がわいたぜ、入らねえか。』かう婆さんはだぶ〳〵した股引のまゝに入つて來て知らせた。

『おい、T君、君、先へ入れ！』

かうKがその室から呶鳴つた。

長火鉢のある室から、緣側へ出て、階梯を下りて行つた處にその湯殿があつた。綺麗な透き徹るやうな清水は、樋で風呂の傍の四角な水溜の中に常に漲つてちよろ〳〵音を立てゝゐた。その風呂の中に、TもKもいゝ心持で浸つた。仲の好い時には二人一緒に入ることなどもあつた。風呂の中からは、前の山の翠微が見えて、紅い八汐の躑躅がチラ〳〵した。雨の日などには、白い、灰色の雲が巴渦のやうに卷き上つた。湯に入りながらそれを見てゐると、何とも言はれない好い氣持にKもTもなつた。二三日沸さずにゐると、『婆さん、湯を立てゝ吳れないか。』かうKは叫んだ。

Kは湯から出て來たあとで、きまつて髮を梳いた。櫛、ハケ、チック、小さな鏡などをKは長火鉢の抽斗の中に入れて置いた。Tにはまだ鬚がなかつたが、Kにはもう立派な奴があつて、それをKは頻りに手で引張つたりなどした。

外國の文學の話になるとトルストイとツルゲネフとドストエフスキーとゾラとアルフォンス・ドオデ

れんな。我々の傑作が一つ一圓では。』

Tの方の爲替は、此間書いた短かい紀行文の原稿料で、一枚三十錢。『一體、今の大家はけしからん。紅葉だつて、露伴だつて、一枚一圓三十錢から二圓取るつて言ふぢやないか。Rなんか、あんな下らねえ、牛の涎のやうな通俗小說を吉原の女郎屋の二階で書いてゐるつて言ふぢやないか。さう言ふ奴に一圓五十錢も出して、我々には一枚三十錢とは人を馬鹿にしてゐる。僕にH書店では二十五錢きり支拂はない。今度は四十錢以上でなけりや買はうたつて賣らない。』Kはかう言つて氣焰を上げた。

『原稿料なんか何うでも好いさ。』

かうTが言ふと、

『それがいかん。何うでも好いことはない。我々のは血を吐く思ひで眞劍に書くのだ。大家の一夜漬とはわけが違ふ。』かうKはいきまいた。Kは何うやら彼うやら三十枚ほどの處女作を一つ書き上げた。そしてそれを一昨夜Tに讀んで聞かせた。Tはある處は感心したが、ある處は感心しなかつた。それを傑作のやうに自認して得意らしい顏でゐるKがTにはわからなかつた。Kは昨日それをH書店のO氏に送つた。『貴樣の原稿料が三十錢なら、俺は四十錢貰はなければいやだ。』といふKの口調がTに輕い反感を起させた。『俺は、金で書いてゐるんぢやない。小說を、食ふ金に代用したくない。』かう思つては、長い長い小說の筆を每日執つた。

した。『オホヽヽオホヽ。』と老僧は口を小さくして笑つた。

時の顯官になつた人が、昔、微賤の時分に此寺に食客となつて一二年世話になつてゐたことがあつた。其人が後年やつて來て記念に書いて行つたといふ額が大きく長押にかゝつてゐた。Kは、『和尚さん、僕等だつて、今に豪くなりますぜ。その時は、あんな額位ぢやない。大檀越になつて、本堂の普請位しまさ、なァ、おい、T君。』かう言ふと、『さうどこぢやない。無論の話だ……。』老僧は盃を口に當てながら言つた。

罫紙の帳面に書き附けた勘定を、かれ等はをりをり計算した。Kの財布から出たものには三角の印がついてゐた。『ぢや、僕が二十五錢やれば好いんだね。』Kは懐から出した財布から金を音させて其處に並べた。『安いもんだな。二圓と少しゝかまだかゝつてゐやしない。』などとKは言つた。

Kは財布の裏表をひつくり返して弄んだ。『これでも、この財布に、千や二千の金は出たり入つたりしたんだぜ。』Kはその財布に、矢張お信さん時代の追憶が纏り着いてゐることを思はずには居られなかつた。その財布をかれは矢張お信さんと一緒に銀座で買つた。鹽原にお信さんと行つた時も、北海道の深林の中で戀に憧れた時も、Kは矢張その財布から金を出した。

Kの許にも、Tの許にも、一二度爲替が來た。Kの方はK新聞社から、Tの方はH書店から……。Kは、『おい、この中一圓は君にやるんだぜ。あの詩の原稿料だぜ。三圓送つて來たよ。』と言つて、『やり切

『よせ、よせ！　よせつたら。』つゞいて吹かうとする第二の口笛をTは怖い眼色をしてとめた。

『好いぢやないか。』

『よせ！　吹くなら、僕はかへる。』すた〳〵行きかけるので、Kは笑つて止して、

『頑固な奴だなア。』といふ顏をした。

Kは T が多少新進作家らしい顏をして、一種の矜持を持つてゐるのを見ても別に內部に反抗も動搖も感じなかつた。今はまだ書かないが、――とても貴樣には處女作も出來ないといふやうな顏をよく見せるが、今に見ろ、びつくりさせてやるからとKは思つてゐた。『無駄な、何にもならないやうな長篇をいくら書いたつてしやうがない。』かう冷かにKは思つた。

『この女たらしが……。』かうTは思ひ、Kは、『この野暮天が、旋毛曲りが……。』とTを思つた。

來てからもう一月以上の日は經つた。蕨を山奧から探つて婆さんが賣りに來たり、八汐の躑躅が赤く前の山の峽を彩つたりした。かれ等は老僧に仕込まれて、夕飯に一二杯酒があつても好いと言ふので、一升づつ酒を酒屋に持つて來させて、それを長火鉢の傍に置いた。そしてKはそれを時々振つて見て、『まだ賴もしいなア。』などと言つて笑つた。その癖、かれ等は五勺位飮むと、スウ〳〵呼吸を高くした。顏は金時火事見舞といふやうになつた。

『これから二人が酒飮みになれば、和尙さんが先生ですぜ。』などと言つて、かれ等はその話を老僧に

ぐんぐん先に出て行くある新進作家の評判がかれを堪らなく痛く感ぜさせた。童貞と藝術！　唯それにのみかれはすがりついた。

Kはある時Tを無理やりに散歩に誘つた。Kにしては、家にのみ閉籠つて、不健全に蒼い顔をしてゐるTをもう少し快活にさせたいと思つたのであつた。此頃ではKはTの健康を心配して、食後の討論會にも餘りひどいことは言はなくなつてゐた。

Kが床屋に行つて、鬚や頭を綺麗にさつぱりとして來るのに比べて、Tは反抗的に、わざと鬚やら髪やらを長くして、暗い顔の中から鋭い眼ばかりをきよと〳〵させてゐた。そして『作家らしい顔になつた。』などと自分で鏡に映して見てゐた。

イヤだと言ふのを無理に誘ひ出すのさへ厄介であつたのだから、TをS堂に伴れて行かうとするKの計畫は、その實行が容易でなかつた。併し何うやらかうやらしてKは漸くTを其處まで引張つて行つた。

S堂の中は靜かで、鳥の聲がチヽと聞えた。糸垂櫻は今が盛りで、丸で雪の堆積か何ぞのやうに見えた。果して日當りの好い縁側に、白い襟元をした娘が低頭いて裁縫してゐた。赤いメリンスの襟のついた夜着などが干してある。

『見て給へ、此方を向かせて見せるから。』

Kは口笛を吹いた。

のを見た。

『だから駄目なんだ。だから、藝術の方はおろそかになるんだ。處女作、處女作つて、此處に來て、もう二十日以上になるけど、出來ないんだ。實際に捉へられて行つては、藝術の神は逃げて行つて了ふ。』こつ〳〵苦しんでやつてゐる自分を傍みながら、瘦我慢にTはかう思つた。Kの男振が娘達にすぐ好かれる方であることを考へて、Tは暗いさびしい心になつた。

Tは兩手を後頭部に當てゝ、精神の動搖に疲れ果てたやうにして仰向に寢た。Tは自己の周圍のすべて暗く不愉快であるのを思つた。東京に歸れば、痛くて一日も刺戟なしにゐられないやうな兄の家庭がある。母と兄との爭ひ、嫂と母との不和、その暗い空氣は他人に話すことも出來ないほど不愉快である。これをKの父母、同胞の溫かい關係に比べたなら、何といふ悲慘な暗い自分の境遇であらう。Kは決してその父母同胞を惡しざまに觀察したことはなかつた。

『本當に好い父でね。』とか、『母を怒らせるのが面白いのでよく弟と一緒にわざと怒らせて見た』とか、『弟は實に好い奴でね。それはもう實に無邪氣なんだから。』とか、いつも溫情と平和とがその口吻に現はれてゐた。例の話上手の故もあるだらうが、決してTのやうな暗い肉親關係でないのは事實であつた。Tは自分に比べてKの順適な境遇と、またさういふ心を持ち得る比較的穩かな境遇とを羨み且妬んだ。續いて文壇の大家の尊大な顏、憎むべき批評家の表裏、自分の作品の不評判、わけてもTと同じ年輩で

娘はKの足音を聞いて、ふと顏を擧げてこつちを向いた。サッと赧くした顏が、此處等では見られないほど美しかつた。

若い人達に取つては、單にそれだけの事實でも興味を惹いた。Kは散歩に行く時には、

『又、S堂にでも行つて來るかな。』と言つて出かけに笑つた。婆さんは又婆さんで、『好いあねさまゐるだで、此頃はよく出かけるんだべ。』などゝ言つて笑つた。

Kは三度目に行つた時には、娘はわざ〳〵下駄をはいて緣側から下りて、二三歩此方へ笑を含んで歩いて來たといふことであつた。『これで、もう、お誂へのロオマンスが出來る段取になつて來たぜ、君。Maupassant の『小兵卒』の一人の方の役割を君がやらなくつてはならなくなつたぜ。用心し給へ。』かうKはTに言つた。

散歩には滅多に出かけずに、せつせと長い小說の稿を繼いでゐるTに取つては、Kのさうした話もいくらか氣になつた。それに、さう思つて見る故か、Kの散歩はそれから度數が頻繁になつたやうに思はれた。ゐた筈と思つて入つて行つたKの室にKの姿の見えないやうなことが多かつた。

『君のやうに、一度失戀した青年が、さういふ娘を見に散歩に出かけて行くのはちよつと面白いね。短篇になるね。』かう輕くTは言つてゐるけれど、Kのことであるから、何時の間にか巧く女の歡心を得て、もう何うにかしてゐるのではないかと邪推された。Tは黑い醜い惡魔の影の自分の心を掠めて行く

娘、Nホテルの塀の陰にこれも戀らしく喃々と話してゐる白い服のコックと二十二三の女、車夫の寄合所の前に小流れを利用して巧に拵へてある玩弄物の小さな水車、尠くともKには、このN町が曾てかれがゐた遠い九州のS町と同じやうに深い興味をそゝるらしかつた。

其まゝ其處に蹲踞んで、

『お婆さん……』

『あんだね？』

『S堂に、娘がゐるね。』

『S堂？』婆さんは考へるやうにして、『さうだ。ゐたつけな。』

『あれは何だね？』

『あんちふこともねえ。あれア、おやぢは學校の先生だんべ。』

『堂守ぢやないのかね。』

『堂守は別にある。あそこをあの學校の先生が借りてゐるんだ。』

Kはさつき殉死の墓のある堂の中に入つて行くと、そこの奧に、日當りの好い緣側のある家があつて、其處で十九か二十位の娘が裁縫してゐた。かれは桃割に結つた髮と白い襟元とが裁縫の上に落されたまゝぢつとしてゐるのを見た。かれは二步三步、そこに咲いてゐる糸垂櫻を眺めるやうに入つて行くと、

『本當だ。我々も忽ち過ぎ去つて了ふのだ。かうした人間の形と同じものになつて了ふのだ。それを思ふと、つまらない利害や爭鬪なんかにあくせくしてゐる人間が可哀相になる……』

『實際だ……それを思ふと、我々は心から生命の流を暗示される。さうなると、死は死でなく、生は生でない。かうして僕が君と一緒にこゝを步るいてゐるといふことも徒爾ではない。世界皆な同胞と言ふけれども、空間を絕し、時間を絕しても、我々は皆な同胞だ。同じ人間だ……』

かう言つて、Kはさもなつかしさに堪へないやうに、その雨に濡れた石地藏の顏を撫でた。

步きながら、『僕にはかうした深い熱情があるのだ。それをお信さんなんか、言つて聞かせたつて、ちつともわからないんだから。それが殘念だ。僕に、それだけの德がなかつたのであらうけれど、それを考へると、僕は痛恨胸に徹する。』

Tは何も言はなかつた。二人は暫し深い沈默に落ちながら步いた。雨は降り頻つた。大きな樹の下を通る時には、雨滴がポタ／＼と傘の上に音して落ちた。

婆さんと圍爐裏の傍でTが話してゐるところへKは例のステツキを振りながら、莞爾して例の散步から歸つて來た。

Kは散步する度に、種々な話を持つて來てはTに話した。裁縫の師匠らしい家に多勢集つてゐる若い

Tの默つて聞いてゐるのを見て、

『人間の跡だ。過ぎ去つた千年、二千年、乃至永劫の人間の跡だ。人間がかうした形をつくつたといふことをわれ〳〵は考へなければならない。そしてかういふ形を殘して行つたのだ。誰が、人間が……人間の苦悶、苦痛、何千年前から我れ〳〵と同じやうな苦悶、苦痛、戀の苦しみ、死の苦しみ、人生の苦しみ、さういふものにもだえ苦んだといふ處から、かういふ形を殘したと我々は思はなければならない。其處に何千年前の人がゐると同じやうに、矢張我々がゐ、これから先何千年後の人間がゐるんだ。人間の形だ。象徵だ。』

『本當だねᵒ』

も深く考へるやうな顏をした。

『實に、君、人生は悠久といふ感がするぢやないか。かういふ人の形をした石がある。それに苔が生えてゐる。雨が降つてゐる。永劫の雨が降つてゐるのだ。鼻から、頭から永劫の雨滴が落ちてゐるのだ。』

一つ一つ見て步きながら、『かういふ人達も、皆な僕等と同じやうな人生の重荷にあえいで、もだえて來たんだ。實に考へると、何とも言はれないぢやないか、君。』

Tも心から同感せずには居られなかつた。Kとは議論はするけれども――別な人間だけに別な意見も持つてゐるけれども、それでもかうしたKの考にはTも深いある暗示を與へられずには居られなかつた。

かれ等は橋を渡つて、山村らしい小部落を拔けて、ある民家の桶に大きな赤い八汐の枝のさしてあるところを通つて、そして此方へと歩いて來た。
かれ等はをりをり立留つて、綸のやうに前に展げられた激湍に對した。水は白く泡立つて流れ、潭は碧く湛へて見られた。
『何とも言はれないぢやないか。』
かう二人は言つた。
やがて片側に石地藏の澤山並んでゐるところに來た。
或は頭顱の半缺けたものもあれば、胴から上がなくなつて了つたものもある。鼻の缺けたものもあれば、手のとれたものもある。久しい年月の風雨に曝されて、靑い黑い苔が一面に顏やら頭やら膝やらに生えてゐる。
寂として手を組んで坐つてゐる形がかれらの眼を惹いた。
『僕は、これを石とは思はんね。』
かう深く感じたやうな表情をしてKは言つた。
『これに、血もない肉もない、唯の石だとはどうしても僕には思はれん。これにも矢張人間の血が通つてゐる。たしかに通つてゐると思ふね。』

と　T

かうKは敦圉いて言つた。

その光景――その若い者達の無邪氣な光景を老僧はをりをり耳にし且つ目にした。時には、かれ等の劍幕が餘りに烈しいのに驚いて、喧嘩でも始めたのではないかと思つた。わざわざ庭の方に出て行つて見てゐたりした。しかし、ぢきかれ等は笑つて話した。『はゝア、喧嘩ぢやないんだ。討論會をやつてゐるんだな。』と老僧は合點した。

『滑稽だね。』

それからは議論を始めかけると、いつも思ひ出したやうにしてKは笑つた。

『やり切れんねえ、食事のあとの腹こなしをやつてゐると思つてゐるんだからな。老僧は――。我々は眞面目に、人生問題や戀愛問題を話してゐるのに……』

『本當だね。』

かうTも笑つた。

降り頻る雨の中に並んで立つてゐる無數の石地藏の前をかれら等は傘をさしながら通つて行つた。傍には凄しい激湍が起伏した岩石に觸れて鼎の湧くやうな渦を卷いて流れてゐた。對岸の草藪には、赤い八汐と黄い山吹とが春の闌なのを見せ顔に咲いてゐた。

れもKがその誇るにも足りない經驗を振廻さなければ好いが、何ぞと言ふと、面倒臭くなつたといふやうに、Kは上段からそれを振翳した。TはKの經驗したためにのみ事實であり、事實であるが故に眞理であるといふKの論法にいつも反感を起さずにはゐなかつた。『しかし、君の經驗で僕の經驗を矢張さうだと斷定することは出來ない。僕には僕の經驗がある。僕のみ經驗する僕の經驗がある。』かうTは主張した。

KはTの議論と思想の奧にかくれてゐる事實を想像した。Kは戀愛に苦しみながら、女の肉體にもだえながら、それを打開くことの出來ない型に捉はれてゐるTをもどかしく思つた。Tは到底一緒になることの出來ないその姪に戀してゐるのではないかとKは想像した。その姪についての歌を、Tは度々Kに歌つてきかせた。それにKはTの家で頰の豐かな色の白いその姪を見たことがあつた。

『思想は實行に由つて、始めて眞理となつて現はれる。何故、實行しない。實行して打突かつて見ない。實行した空氣の中から眞理が出て來る。』Kはいつでもかういふ。それをTは解つてゐないではないが、――それが眞理だとは思はぬではないが、尠くとも、實行については、Kよりももつと愼重な態度を取りたい。眞面目でありたい。かうTは常に思つた。

『ぢや、僕の戀愛事件は不眞面目だといふのかえ？　それならそれと言ひ給へ。幾度となく死にまで到達した心持が不眞面目であつて堪るものか。』

『さう、見えるんだね、滑稽だね。』

Tも笑つた。

午飯の後、乃至は夕飯の後には、かれ等は必ず何か饒舌つた。話はいつか議論になつた。議論はいつか口角泡を飛ばすやゝな爭論になつた。戀愛の話、宗教の話、文學の話、死の話……さういふ大問題がいつもかれ等の口に上つた。

『そんなに意氣地がなけりや、死んで了へ！ 自殺して了へ！ すぐ僕の眼の前で自殺したまへ！幸ひ短刀がそこにあるから！』

かう激してKは呶鳴つた。

『死ぬ時は……死ぬ時は……』Tはどもつて、『死ぬ時は、僕は勝手に死ぬ。お世話にはならない。それよりも、君は君のことを考へろ。僕はまだこれでも童貞を失つてゐないんだ。童貞を蹂躙られた君とは違ふんだ。』Tも負けずに言つた。

二階に來ない中は、下の本堂の入側にゐる中は、さうした烈しい議論もしなかつたけれど、此方に來てからは、何うしてか度々さうした光景を演じた。KにはTの厭世說と童貞說とが氣に入らなかつた。否、氣に入らないといふよりもさういふ空想で固めた思想は打壞して了はなければならないと思つた。Tにはまた世の中の溷濁に、不神聖な女の肉體に、少しなりともKが觸れて行つてゐるのが厭だッた。そ

の卓の上には、詩集や小說と雜つていつも必ずその日記の一册二册が載つてゐた。やがて着手すべき處女作の材料を其處から探し出すやうにしてかれはそれを繰返しながら昔を思つた。Kはまたその日記の中から樂しかつた悲しかつた辛かつた戀の事實を思ひ出して時を過した。『もう過去だ。完全に過去だ。』かう獨語した。

Kは日記に書いた。『子を思ふ老婆、酒に早く寢ねし老僧、二人の若者、その前を、永久に、永久に谷は音を立てゝ流れて行く……戀に苦みしも昔、かれを殺しわれもまた死なんとせしも昔、何も彼も皆昔となりぬ。われ今孤獨にしてこの室にあり。此處にあり、これ人生の事實なり。しかして、翌年はそもまたいづれの處にか去る。友は既に寢ねたり、名も知らぬ夜鳥は頻りに啼く。我を深夜に慰めんと思ふにや。』

筆をとめて、Kはまた瞑想に耽つた。若い血の漲つた頰をランプは明るく照した。傍には短刀が置いてある……。

『貴方方は食事後には、いつもきまつて討論會をしますか。』

かう老僧は眞面目臭つて訊ねた。

かれ等は噴飯さずには居られなかつた。『討論會は好いね。……實に好い。』かう言つてKは笑つた。

しかしその日記には、かうした感傷的の若い熱い心ばかりが滿されてゐるのではなかつた。汽車賃が書いてあつたり、小遣が書いてあつたり、何處かで寫生した婆さんの顏が書いてあつたりした。褪紅色の表紙の小さなNote-Bookで、時にはをりをり口ずさんだ歌なども書いてあつた。小說にするためのその折々の思ひ附きに、『若者の戀』『犬と人』『短刀』といふ風に並べて書いてあつた。Tは今、ある青年の失戀の長い長い小說に筆を着けてゐた。その傷いた青年は、畫家で、その苦惱をいやすために、故鄕の沼の畔の家に唯一人ゐて、半は製作に半は女を思ふの情に燃えた。その題材の終りの方の構想が、かなりに詳しく且つ細かく其日記に書いてあつた。時にはかれはその日記を長火鉢のあるところまで持出して、その構想やらをりをり出來た歌やらをKに話したり歌つたりしてきかせることがあるが、Kがそれを取つて見ようとすると、慌てゝそれを引たくつた。決してKに見せやうとはしなかつた。

それに引かへて、Kは長い長い日記を每日つけた。『A日記』といふ題で、東京の郊外にゐる頃、その前から、かれは二冊も三冊もつけて持つてゐた。感想は感想に續き、苦悶は苦悶に續いた。凡そKの心と眼とに觸れたものでその日記につけてないものはない位であつた。KはそれをよくTに見せた。女との甘い戀の條や、失戀の條などは殊に精しく書いてあつた。『いかん、いかん、そこから先は見ちやいかん。』かう言つて、KはTの讀みかけた日記を手で蔽うた。

Tの日記の全く空想的であるのに反して、Kの日記は苦しい事實と悲しい記錄とで滿されてゐた。K

の對話は盡きなかつた。「あゝいふ婆さんがこの山の中にゐて、死んだ子のことを考へて、あゝして涙を圍爐裏の灰の中に流してゐるんだからな。」かうＫは感に堪へないやうにして言つた。さうかと思ふと、酒を飮んでグウグウ寢て了つた老僧のやうなものもある。二人のやうに月光に對して眠ることの出來ない若者もある。海上數千里の烟波の上に甲板にひとり立つてゐる旅客もある。戀にもだえて却つて戀を捨てたルウジンのやうなのもある。戀を失つて痴人になつた天才ゲサのやうなのもある。Ｋは掌を頰に當てゝ深く人生を思ふやうにして、光のある若者らしい眼をかゞやかした。Ｔはさびしい顏をして、深い沈默に沈んで坐つた。かれ等は猶長く相對した。

月が明るく寺の庭を照した。

Ｔはその日記に書いた。

「門前を日夜を措かず流れて行く水、この水はいつかは海に入るであらう。ひろいひろい海に、人生の海に……しかし、この自分の心は……自分は……。あゝこの終古盡きない水聲よ。十年、百年、千年の後も、猶かうして同じく流れて行くであらう。我々は死に、又、我々の子は死に。孫は死んでも矢張かうして同じ音を立てゝ流れて行くであらう。それを思ふと、誰か人生の悠久を感ぜずにゐられよう。」

んなんて、去年の冬は訪ねて來て吳れたつけが、もうゐねえだ。地の中さ入つたゞ、あゝ。』

『病氣で死んだのかえ？』

『肺炎ちふでな、急に死んぢやつたゞ。此方から人が行くのも間に合はなかつたゞ。一目逢ひたかつたが、駄目だつたゞ……お前さん方見ると思ひ出す……』

『總領はゐるんだらう？』

『甚六どんは駄目だ。あの次男ボべい賴りにしたゞ。あゝ。』

かう言つては婆さんは折つた粗朶を圍爐裏に投げた。火は明るく燃えた。自由鍵にかけた大鍋には、何かぐたぐたと煮えて、湯氣が白く騰つた。

『何、煮てるんだね？』默つて、感に撲たれたやうにして見てゐたKは、急にかう言つて訊いた。

『大豆せ……旦那ァ、煮て置いてくろッて言ふたで……』

『豆か。』Kはかう言つて笑つた。

二人はオキを貰つて、二階に上つて、ランプをつけて、長火鉢に對して長い間話した。考へれば考へるほど悠久なのは人生である。不可思議なのは人生である。悲哀なのは人生である。殊に若い二人に取つて……これからその唯中に入らなければならない二人に取つて……かれ等は相對して話した。ツルゲネフの小說の話、ステルンのエヽリヒの話、サイモンヅの『伊太利紀行』の話、話しても話しても二人

てゐるのがはつきり見える。婆さんはいつもの勝手の大きな圍爐裏の前で火を燃してゐるのであつた。

『何うしても、かう見たところは、しほ塚の鬼婆あだね。』Kは笑つて、『夜中に、山ん中か何かのあばら屋で出會したら、早速逃げ出しもんだね。』

Tも笑つてその影法師を見た。

やがてかれ等は、婆さんのゐる圍爐裏の傍に行つた。『あゝ。』と言つて仰向けたその皺の顏を、火は赤く照した。

『婆さん何うしたね。』

Tが聲をかけると、

『あゝ。』と再び感激に堪へないやうな聲を出して、『Tさん、來たで、己ァ、次男が歸つて來たかと思つてゐるだァよ。何んなにうれしいかな。歸つて來たら。おめいさんのやうにしてな。でも、駄目だァ、もう地の下へ入つたでな。』涙は皺の多い顏をほろほろと流れ落ちるのであつた。

『何うしたんだね?』

『なァに、はァ、思出しただよ、地の下へ入つた次男ボを。お前さん方と丁度同じ位の年だでな。『死んだのかえ。』

『ごねたゞ。Yさ行つて、巡査してゐて、ぢやらぢやら劍を鳴して元氣でゐたつけが……婆さん、婆さ

のことやら、信仰のことやらを眞面目な心持で話しながら歩いたＫの熱のある言葉はいつもＴの心を引寄せた。時にはＴは彼奴の能辯に欺かれてゐると思ひながらも、その眞面目な感激に動かされずには居られなかつた。Ｋは聖書の山上の祈禱などを持ち出した。

Ｋの感激、それにはいつも捨て去られた妻の悲哀が背景を成してゐるのであるが、Ｔにはそれがまだ分明と解つてはゐなかつた。Ｔの男女觀はまだ些しも肉體に觸れてゐなかつた。肉體の話になると、Ｔはいつも顏を背けた。自分の持つた神聖の童貞を婉されたやうな氣がした。

二人は町と山内との境にある橋の方まで行つた。平野に流れ落ちる川を月は美しく照してゐた。外國人が二人づれで步いてゐるのなどもかれ等にはめづらしく詩的に感じられた。かれ等は大きな聲で自作の詩などを朗吟した。トルストイの『ルツエルン』の中に出て來る貧しい音樂師の話などをしながら、やがてかれ等は寺の方へ戾つて來た。庭の常磐木の葉は美しく夜露に光つて、絕壁に添つて深く深く流れた谷には、まだ月の光が及んでゐなかつた。二人は臺所の方から入つた。

外は月の光であるに拘らず、樹の影の多い庭には、臺所の障子が火に赤く照されて見える。ふとＫは指した。

『見給へ、そこを。』

見ると、箒のやうに髮の亂れた婆さんの頭の影が、黑く大きく障子に映つて、何か口をもごもごさせ

富んでゐるんだぜ、君。』

『さうかな。』

『老僧のことを和尚が、和尚がつて言ふぜ。あれで中々氣慨に富んでゐるんだから驚くよ。和尚がえへん、えへんなんて、その眞似をするんだからね。』

『さうかね。』

『それにあの言葉がよくわからない。解ると面白いに違ひないいんだけども、半分以上わからないがね。……あれで六十五ださうだが、中々丈夫だね。』

Tは前に、一二度此寺に來てゐるので、その婆さんのことも多少知つてゐた。町から一里ほど下がつた處の村の生れで、昔は金持の呉服屋であつたといふ。何でもあの婆さんの母親が放埒で男などを拵へて、すつかりその家を滅茶滅茶にして了つたといふことである。そんなことをTはKに話した。また其娘が町のRといふ處の大工に嫁いでゐて、それが時々やつて來て話をしてゐる話などもTはした。『娘が來る、來るつて婆さん言ふから、何んな娘が來るかと思つてゐたら、四十先の婆さんぢやないか。』こんなことを言つてKは笑つた。

ある夜、月が餘り好いので、二人は揃つて散歩に出かけた。山にももう闌な春が來つつあつた。暗い杉森の中の花がぱつと月の光を帶びてゐたりした。KとTとは人生のことやら、宗教のことやら、戀愛

『あゝいふ婆樣にも我々と同じ血と同じ心とが通つてゐるんだからな。』

これはKだ。

『實際、生物と言ふやうな氣がする。文明の何物にも支配されない、感化されない、原始そのまゝの生物のやうな氣がする。彫刻にもあゝいふのを見たことはない。』

『本當だ。あの顏が何とも言はれない。彫刻家に見せてやりたい。あの深く刻み込んだやうな皺が好い。それににこにこしてゐる。いかにも無邪氣だ。あらゆる苦痛を知らない、といふよりも、あらゆる苦痛を經て來てあそこに行つたといふやうな氣がする。本當に彫刻にして取つて置きたいな。一體、今の彫刻家なんて言ふものは駄目だからな。』

かう言つてKはいくらか知つてゐる彫刻家の話などをした。

ある日、Kは言つた。

『今、あの婆さんと話をして來た。』

『何處で？』

『裏で草を捞つてゐたから。』

かう言つたが、『不思議な婆さんだ。神話の中にでも出て來さうな婆さんだ。あれで、中々ユーモアに

事で皺つた赤と白との饅頭を紙に包んだまゝそこへ出した。Kは、『僕は此方の方が好い。』かう言つてそれを一つ手に取つた。

其處に、『御免』とも何とも言はずに、汚ない股引を穿いたまゝで、皺くちやだらけの、自然と原始との表象、無慾と無邪氣との表象としか思はれない六十先の雁婆さんが、燒き落ちのオキを一杯十能に入れて、のつそり姿を其處に現はした。と、老僧は、『よし、よし、これは暖たかだ。』と言つて、圍爐裏の鐵瓶を下すと、婆さんは十能のオキをそこにあけながら、『旦那、さつき石町の衆が來たつけが、行き逢つたかね。』

『石町の衆!』老僧はひよつと顏を上げて考へるやうにしたが、『服部だんべい。逢つた、逢つた。』

『逢つたかね、そんなら好いけど……旦那は何處へ行つたなんて言つてたで。』皺の多い顏に何とも言はれない笑顏を見せて、もういくらか曲りかけた腰を曲げて、そのまゝ臺所の方へ行つた。その婆さんが二人のために飯と汁とをつくつて呉れるのであつた。

何うかすると、『あの婆さん、面白いね。』などとKは言つた。『何うも、あの婆さんの言葉が少しもわからない。』かうも言つた。中國生れのKには、東北の純粹のスラングが容易に聞き取れなかつたのも無理はなかつた。實際婆さんと言つても、これほど婆さんらしい、また本當の田舍の婆さんらしい婆さんは、TもKもまだ見たことはなかつた。

それに、ゆくりなくかうした生活に配された老僧の生活も面白かつた。ＫもＴも面白い老僧だと思ふのも無理はない。この老僧は三十二三まで散々浮世の憂さ辛さも、歡樂も悲痛もなめ盡して、それから發心して、この寺の先代の丁度老僧のゐた地方に說教に來たのに伴はれて、それからあらゆる苦行と難行とを積んで來た人であつた。この山での最大苦行の一つと言はれる冬嶺行者などもやれば、花供の苦行もやり、釋迦堂に三年獨居の辛い閱歷をも踏んで來た。今でも老僧は精進物しか口にしなかつた。

來た翌日、折角買つて來た大きな鰹節は、いつの間にか猫に取られたと見えて、搜しても搜しても何處にも見當らなかつた。『さう言へば、さつき、大きなどら猫が來てたぜ。』かうＫは言つた。Ｔも何處かでそれを見たやうであつた。二人は苦笑せずにはゐられなかつた。Ｋは後には體を崩して笑つた。で、二人は今度は小さな鰹節を買つて來た。そして出して置くからわりいんだと言つて、一々それを机の抽斗に藏つた。ある日、Ｔはそのどら猫の姿を見かけて追かけて行つて、石などを投げ附けた。かれ等はそれを話しては笑つた。

二人の持つて來た酒の口を明けた時には、老僧は蕎麥などを取つて二人を御馳走した。そこには小さな圍爐裏が切つてあつて、その周圍には種々ながらくた道具が一杯に並べられてある。老僧は錫の燗德利を鐵瓶の中から出して飲めない二人に酒を勸めた。

老僧はまた袂をもぞもぞさせて、『そら、甘口なら甘口、かういふ御馳走もある。』莞爾笑ひながら、法

らない。何も食ふものがなければ、鰹節をかいて飯の菜にしても好い。で、かれ等は來た日に、町に行つて、貧しい文學書生の割合にしては、高い大きい鰹節を一本買つた。『先づこれがあれば、飯の菜は何うにでもなる。』などと言つてKもTも笑つた。有り餘る贅澤な生活も面白いが、何も無い生活も面白い。文學青年だけに、さういふ風に考へて興味を感ずるほどの餘裕をKもTも持つてゐた。『一月儉約に儉約してやつていくらかゝるか試めして見るのも面白いぢやないか。』かう言つて、かれ等はその實費をTの持つて來た罫紙を綴ぢた手帳に一々つけることにした。"plain living, High thinking," かういふ言葉がカアライルや、エマソンなどを讀んだKの口から出た。Kはウォルヅウォルスの愛讀者で、マシウ、アアノルドが選んだその選集を常にその身の傍去らずに備へて置いた。

それに引かへ、神聖の戀の主張者であるTが Heine の詩集を傍離さず持つてゐるといふことも不思議であつた。あの情慾の詩人、神よりは惡魔に近い詩人、皮肉な深刻な詩人、巴里でその晩年を倫落の女と一緒に暮した詩人、その人の詩がTの最好の愛讀書とは。思ふに、Tはその詩人の暗黑面には觸れることが出來ずに、男女の戀の心を小さな眞珠のやうに唄つたその唄にのみ魅せられたのであらう。從つてライダル山中の詩人の靜かな自然を詠じた詩と、嵐のやうに烈しく女に溺れて行つた戀の詩とが、此處では――この山寺の一室では、かたみに互に雜り合ふやうな奇觀を呈した。Kはウォルズウォルスを Tに讀んできかせた。TはハイネをKに吟じて見せた。

あつたが、Kもすつかりその老僧が氣に入つて了つた。これなら、少しは長く滯在しても不愉快ではなささうだとKは思つた。

『面白い老僧だ！』Kもかう言つて笑つた。

貧しい不自由な山寺の生活、それも面白いとKは思つた。お信さんに負はされた大きな傷痍、それを醫すために、Kは京都に半年、それから東京の郊外に半年を送つた。郊外にゐた時には、弟が一緒だつたが、それでも淋しくて淋しくて仕方がなかつた。夜はお信さんが、『今迄のことは何うか勘忍して下さい。』かう言つて泣いて謝つて來るやうな氣がして仕方がなかつた。風が叩くのにも立つて雨戸を明けて見たりした。時にはゐても立つてもゐられないやうな氣がして、不信な女に對する憤怒と激情とに堪へかねて、いつそこれから行つて、短刀で、一思ひにかの女も殺し、返す刀に自分も死んで了はなければ、この苦みは醫すことは出來ないとさへ張詰めて思つたこともあつた。その時分、Tとの交際は結ばれた。TはKの戀物語を透してKと親しくなつた。Tはその慰藉者としては多くを働いてゐなかつたけれど、その傷痍の痕の痛みをいくらか醫す膏藥位には役立つことは出來たのである。貧しい青年達の文學的生活――それも面白いとKは思つた。それにKも自己の天分の運試めしをしなければならない時期に達してゐる。靜かに落附いて考へて見よう。かう思つてKはTのこの山寺行に賛成した。

かれ等は來る匆々、日常に必要な食物などを買つた。砂糖、菓子、それに是非鰹節だけはなくてはな

その二階に來る前に、かれ等は寺の本堂を取巻いた長い入側のところに最初に卓と机とを置いた。そこにかれ等は尠くとも三四日暮した。五十五六になる若僧は『えへん、えへん、』などと言つてやつて來て、『何うぢやな、場所が出來たかな、これは、……これで、ちよつとは間に合ふな、何でも不自由なものがあつたら、さう言はつやしい。な、Tさん。遠慮はいらない。その中には、まア何か構ふことも出來るがな。今は……今は……忙しくつて、主坊の用が手離せないでな。』こんなことを言つて、莞爾しながら、二人の青年の自由に陣取つた座席を見て、時には何ういふことをするのかと思つて見るやうにして、机の傍に近寄つて見て『はゝア、新聞社へ原稿を書く…… フム……これがすぐあの新聞になるのぢやな…… えらいこつちやな。』こんなことを言つて、そして法衣を着て、本坊の方へと出かけて行つた。Kが曾てクリスチャンの一人であつたといふことを聞いた時には、『耶蘇坊主も好いぢやとも……。結構ぢやとも……。宗教といふものはな、皆な同じぢや。同じ心ぢや。佛に手を合せるのも、アーメンも皆同じぢや、結構ぢや。』などと言つて笑つた。

TとKとは、老僧が酒が好きだと言ふので、東京から土産に、澤の鶴の六つ割を一樽買つて來て贈つた。汽車の中では、二人はその大きな丸い荷物をいくらか持餘した氣味であつたが、持つて來て見ると、老僧の喜悅が一通でないので、二人も滿足した。Tが添へて來た飲口を其處に出すと、『ヤ、これは……飲口まで……。これは深切ぢや、難有い、あはゝ。』と言つて大きく笑つた。Tは前からこの老僧と懇意で

になつた話、北海道の夢——その夢にはいつもお信さんがついて廻つてゐた。お信さんを短刀でぐさとさした夢なども見た。『それが君、あの短刀なんだ。あの老人の呉れた短刀なんだ。それでぐさと刺すと、死んだと思つたお信さんが、刺されながらにこにこ笑つてゐる。そしてもつと刺して呉れッて言ふ。血も出ないいんだよ、君。矢張夢だ。』かう言つて、立つてかれが常に持つてゐる短刀を出して來て、その鞘を拂つてぢつと見てゐた。それは何でも高杉晋作などと友達であつた不遇な老人がかれに記念に呉れたもので、その時に限らず、ひとりで拔いて、ぢつとKが見詰めてゐることなどがあつた。赤い皮の鞘にはまつてゐて、二尺五寸位の鋭利なすぐれた短刀であつた。何うかすると、散步にまでKはその短刀を持つて行つた。

動物園の移轉の夢の話をした時には、Tも笑つた。『奇拔な夢だな。』などと言つた。Kは『それが、汽車の普通の客車ぢやないんだ。無蓋車だから面白いぢやないか。猿も虎も熊も一緒に並んでおとなしく乘つてゐる。象の大きな鼻も見える。鳥もちやんと籠に入つてゐる。そしてそれがずつと通つて行く。奇拔な夢だな。』

朝飯をすまして、ちよつと話して、やがてTが自分の室に引込んで行く。その後でも、Kは獨りで默つて、長火鉢に向つて坐つて前の山などを見てゐた。

ない、存外高いはつきりした聲で、キ、キッと鳴いて行く……あれだ、あれだ、あれに相違ない。』

かう其時一緒に話してゐた若い僧達が云つた。

『さうです、さうです。』

Kはいつも T に起されて目を覺した。目を覺してからも、Kはやゝ暫く暖かい床の中にぐづぐづしてゐた。それをまたTは待ち兼ねるやうにして長火鉢の前に待つてゐた。其時分には下の婆さんの持つて來た汁は煮え、飯は出來、盛に熾つた火の上では、鐵瓶の湯がぐらぐら煮え返つてゐた。朝日は晴れやかに眩ゆい位に前の庭から欄干へさし込んで來てゐた。

Kは起きて來ると、すぐその長火鉢の室の後の階梯を下りて、下にある廣い臺所の傍の湯殿に行つて、冷めたい手も切れるやうな綺麗な筧の水で顏を洗つて、頭を綺麗にわけて、そして元氣よくトントンと階段を上つて來た。

『昨夜は寢られなくつて困つた。二時まで起きてゐた。』

こんなことを言つてTの向う側に坐つた。Tが上さん役で、Kが亭主役である。

香ばしく焙じた茶、高い味噌汁の匂、茶碗、お椀、漬物、皿、小皿――Tが待兼ねたやうに箸を取り初めても、Kはのんきさうに茶を靜かに飲んだ。

そして例としてKは昨夜見た夢の話をした。Kは奇抜な夢を見る青年であつた。金魚と女の夢、大家

寢た。そしてまだ觸れない禁斷の果實に憧憬れた。口では神聖の戀とか、聖教徒とか言つてゐるけれども、その時は白い肌だの美しい襟元だの甘い歡樂だのを不健全に頭に浮べてゐた。『何だ、また晝寢か。』Kはその氣勢を聞きつけて、わざ〳〵襖を明けて見て笑ひながら言つた。

Kは晝寢は絕對にしなかつた。Tの晝寢の間には、Kはよく散歩に出かけた。そのお信さんと一緒に銀座通で買つたステッキを振りながら……。そして夜寢る時にも、いつもTよりは二三時間後れた。KはTの空想的憧憬と不健全の想像とに引かへて、矢張去年の春に別れたお信さんのことを每夜思はずには寢ることが出來なかつた。絡み合ひ纏れ合つた甘い半年の記憶のシーンは今でも一つ一つ枕を當てたKの頭に蘇つて來た。そしてその甘い美しいデリケイトな堪へ難いKの記憶の間をTの大きな獸か何ぞのやうな高い鼾が縫つた。Kはひとり溜息を吐いた。

時には涙が枕を濡した。晝間Tが持つてゐる歌の集の中に、『わが涙枕に落つる音はして寢覺の戀はとふ人もなし』かう言ふ歌があつたが——それを見て、自分の戀に思ひ當つたやうに感激して、何遍となく繰返してそれを朗吟してゐたが、それがひよつくりKのひとり寢の枕頭に思出された。そして、Kはある夜は山の夜の鐘の音がしなくなつた頃までひとり淋しく目覺めてゐた。

何といふ鳥か、名も知らない鳥が、夜もすがらかれの耳聞えた。

『あゝそれぢやあれだ。』この山に特有な夜鳴く鳥の話が出た時、Kは言つた。『あれだ、あれに違ひ

な作風や細緻の研究ももう好い加減にするが好いんだ。』こんなことをKは言つた。時には又Kは『何うも今の文壇には小身が多すぎる、餘計なおせつかいな口ばかり出してしやうがない。だから、皆ないぢけて了ふんだ。』などと言つて憤慨した。Tもさういふ時には、一緒になつて、今の文壇を罵倒した。

四間の二階の中で、一間はKの室、その隣は安物のトタンの落しの長火鉢を据ゑた食堂、その隣の一間はTの室、その左の一間には、毎年此處に避暑に來る外國人の寢臺が二三脚一杯になつて置いてあるので、二人はそこを寢室にした。Kの室からも、Tの室からも中を仕切つた襖を明ければ、すぐ其處に入つて行かれた。

それを始めて見た時、『ヤア、こいつは素敵だ。バネ入り寢臺だ。貴族生活だ。早速和尚さんに言つて借りるべしだ。』かう言つて、Kは喜んだ。KはTに比べて、何かにつけてハイカラで、外國風の趣味にあこがれてゐる質であつた。で二人は各々その室に近い寢臺をそのまゝ占領することになつた。眞中にもう一脚の寢臺を隔てゝ……

『こいつは素敵だ。』

Kは初めて寢て見て又叫んだ。

Tは長い三四百枚の小説を書き始めてゐたが、それに倦むと、晝間でもその寢臺の中にもぐり込んで

『あんなに怠けてゐて、處女作も何も出來るもんか。』Tは心の中でかう言つて竊かに嘲つた。Tはそれでも拙い小説を二三篇世に公にしてゐた。勿論時の文壇の權威であるMS草といふ大家連の寄り合ひの批評では、常に滅茶滅茶にわる口を言はれてゐた。

そのMS草の話などが、何うかすると、二人の間の話柄となつた。Tがそれに對して大きな反感を抱いてゐるのに比して、Kは割合に公平な批評をした。『しかし、Oはえらい、あの學識の該博なのは當代無比だ。T博士よりも僕は好きだ。しかし、何うだ、あのSは？　楊子で重箱の隅をほじくつたやうなことを言つて得意がつてゐる。あんな旋毛曲りの、小身根性では何が出來るもんか。あいつらは戲作者だ。Wだつてさうだ。Rはそれでもいくらか好い。』かうKの言ふのがTの氣に入らなかつた。TはMS草などは折角芽を出し初めた新しい草木を踏み躙るやうな卑怯な大家の集合だと言つた。殊に、自分のが評判がわるいのに引かへて、同じ新進の作者の評判の好いのが癪に觸つた。MS草が出ると、見たくもなし見ずにも居られないといふ風で、怖いやうな腹立しいやうな心持で、Tはいつも雜誌を賣る店の前に立つて、それを手早く飜して、自分の名のひどく侮辱されてゐる處を見ながらブルブル身を戰はせた。

Y新聞に批評壇を受持つてゐる大學出身のAといふ批評家も、よく二人の槍玉に擧げられた。『大家の顏の色を見い見い批評してゐるやうな奴だ。根性が呆れるほど汚ない。大きなお世話ぢやないか。旨からうと拙からうと。ペトラルカが何うした、ダンテが何うした、そんなことはもう聞き倦きた。典麗幽雅

れた。水聲は屋を壓するやうにきこえた。

Kは脊張りの朝寢坊である。それに引かへてTは早寢の早起きである。Tが入つて行くと、

『もう寢るのかえ？』

『あゝ。』

『早いなア、まだ十時だぜ、君……。僕はこれからK社に送る詩を一つ二つ作らうと思つてゐるんだ。』

椅子に腰をかけたKの卓の上には、K社の原稿紙、ナイフ、ペン、インキ壺、雜誌、小說などが一面に亂雜に散ばつて、Heine's Poemが半開かれてある。作りかけた詩をKは見せて、『何うだね？』と言つて、やがて手に取つて自分で朗吟する。

時には文壇の話が二人の間に出た。G社の輕佻な思想が罵倒の材料になる。かと思ふと、Kは、『是非やる、此處に來た記念に、處女作を是非書く。今日も一日考へた。君から見ると、怠けて散步ばかりしてゐるやうに見えるかも知れないけれど……かうやつて考へてゐるといふことも、仕事をしてゐるのと同じ勞作なんだからな。』Tが一日コツ／＼やつて、何うにもならないやうな、何處にはめることも出來ないやうな大きな小說を、何百枚と每日書いてゐるのに當て附けるやうにKは言つた。TにはまたKが每日々々後頭部に兩手を當てたり、散步に出かけたり、ぶらぶらしてゐたりして遊んでゐながら、これでも仕事をしてゐるのだといふ態度が輕い反感を起させた。

といふ形もTには反感を起させた。Tに取つては、娘は、處女は觸るゝことの出來ないほど神聖なものにして置きたかつた。處女の純潔ほど美しく理想的なものは世の中にないとTは思つた。一度深く思ひ合つて結婚したものが、一年も經たない中に、さうした結果になるなどとは、Tには思へなかつた。又思ひたくなかつた。

『何故、そんなことになつたんだねえ？』

かういつもTは訊いた。

『何故だが、僕にもわからない。だから、君にも分らないのは止むを得ないが……あゝあゝ、』とKは慨嘆して、『何も彼も、溶けて流れて行つて了つた！　完全に過去になつた。』Kの眼には涙が光つた。

KとTとは、谷川に添つて五六町行つてそして引返した。谷には水烟の白く騰つてゐるのが夜目にもそれとさやかに見えた。

『何とも言はれないね、キィと胸がしめられるやうだね。』

『本當だね。』

Tは寢る前に、Kの室にをり〳〵出かけて行つた。

Kの室は同じ二階で、谷川に向つてゐて、其處から門前に飛沫を白くあげて流るゝ谷がそれと覗か

の中に我一人あり。否々我一人ぢやない。自分は今神に面して立つてゐる。かう思はずには居られないぢやないか。僕が歌志内に、開墾の爲めに、地面を見に行つた時のことなどそれは忘れられないよ。矢張、かういふ風に、灯がついた家などがあつて、あたりがしんとしてゐるんだ。地上には白い夜の靄が沈んでかゝつてゐるけれど、空は晴れて、月は晝のやうだ。僕はひとりいろいろなことを考へながら歩いた。僕はつくづく都會の生活の不健全なのを痛感して、山林の中でなければ本當の生活は出來ないと思つた。戀人も功名も何も彼も其處に一緒に伴れて行く意氣込だつたんだからね。鹽原で信さんに別れて、そして熱い若い燃えるやうな心で北海道に行つたんだからね……』暫く途切れて『しかも何も彼もお終になつちやつた。空想が氷のやうに溶けて流れた！』

Tは Kから既に其話を度々聞いた。お信さん――Kが烈しい戀をして、娘の父母の不承知なのにも關せず、無理やりに結婚して、北海道から歸つて間もなく、Gの海岸で一緒に蜜のやうな生活を半年ほど送つたお信さんの話、そのお信さんとは、今はKは別れたけれど、それでも今だにその記憶が細かくKの心と體とに絡み附いてゐて、片時も忘れることが出來なかつた。Kはひとりぼつねんと椅子に凭りかゝつて、後頭部に兩手を當てゝ、半日茫としてゐることなども尠くなかつた。

それがTには不思議に思へた。まだ禁斷の果實を食はないTに取つては、想像は出來るが、それが何の位まで甘く、また何の位まで辛いかと言ふことがわからない。それに、Kの勝手に娘を引張つて來た

てゐる。またTが感心するやうなことをKはよく口にする。宗教と人生、戀愛と死、さういふ話題にかけては、Kは獨得の深い信仰と瞑想とを持つてゐる。クリスチヤンだから、それであゝいふ風な話が旨いんだと打消しても、それでもTはいつも感心させられる。

『君のやうなエゴイストはない、何故もつと心を開いて他に接しないのか。公明正大に事をやらないのか。厭世、何ぞと言ふと、君はすぐ厭世、ペシミズムと言ふが、そんなに世を厭ふなら山にでも行つて坊主にでもなるさ！』かうKはTにいつも言ふが、實際TはKのやうに心を他に開くことが出來ない性分だ。Kの純で外面的で明るくつて何でも彼でも言つて了ふのに比べて、Tは暗く、陰氣で、外に表はせない憂愁や苦悶で胸が一杯になつてゐて、默つてむつつりしてゐる。

Kも T も同じ年で二十六。

『實に、君、何とも言はれないぢやないか、人生の悠久つて言ふことを感ぜずにはゐられないぢやないか。かういふ處に僕と君とが來てゐる。かういふ山の中に……この夕暮に……この溪流の白く泡立つた岸に……見給へ、そこには一軒の茅屋がある。明るく窓が灯に輝いてゐる。そこにも人生があるのぢやないか。』かうKは感激したやうな調子で言つて、『北海道の自然の中にゐた時には何とも言はれなかつたよ、君。鑛夫達がさういふ山の中に銘々の生活をやつてゐる。女がゐる。男がゐる。そしてそこには悲劇と喜劇とが渦を卷いてゐる。周圍は千古斧鉞の入らないやうな大自然、そこに白い靄がかゝる。人生

KとT

KとTとは夕方になるといつも揃つて散歩に出かけた。Kはステッキを持つてゐる。それも曰く附きの竹の根のステッキで、それを銀座で買つた時の話も、聞きやうに由つては惚氣にきこえる。しかしTはKの悲しい戀物語に就いては同情を持つてゐるし、それに自分にはまださうした經驗がないので、いつも眞面目に考へるやうな顏をして聞いてゐる。TにはKのやつたやうな戀物語はまだよく解らなかつた。

何處まで本當だかわからない、かういふ風にTは時々思つた。Kの話は上手で、輕快で、すつきりとしてゐて、何んな話をしてもすぐ人をその中に引張込む。友人同士五六人集つた席でも、Kはいつでも話の中心を握る。サアクルの中の帝王になる。傍で聞いてゐるTも、始めの中は面白く引張られて行くが、後には餘りに圖に乘つた形が憎くなる。從つてその話も半分は好加減のやうな感じがする。『先生、またやつてるな、また人を魅してるな、先生、あれで女の歡心を得るんだな。』こんな風にTは思つた。

その癖、TはKの本當の心持、純な心持、泣く時にはほろ〳〵涙をこぼすといふやうな心持を尊敬し

停車場で車を下りたかれは、その前の休憩店に鳥渡寄つて、そこで汽車の出るまでの間を茶を飮んだり菓子を食つたりして休んでゐたが、時刻が來ると、婢に買はせたH市までの通し切符を持つて、急いで停車場からプラットホームへと入つて行つた。かれの心は家鄕にゐる妻子の方へのみ靡いて行つてゐた。かれは明石渡つて行く海の連絡船や、そこからつゞく大急行車のことなどを考へた。『遠いな……しかし此處まで出るのが大變だつたんだ。これから先はわけはない。明日、明後日、明々後日の午後にはH市に着くことが出來る……』かう思つてかれは微笑した。

凄しい音を立てゝ汽車が入つて來た。

と思つた。『構ふことはない。さうしようか。一夜ゆつくり騒いでやらうか。此處にはSもゐる筈だ。』かう思つたが、すぐ思返して『今夜の急行は八時だな。』

『左樣で御座います。』

『朝の急行はKまできり行かないな。Fには行かないな。』

斷足を留めながらかう車夫は言つた。

『左樣で御座います。』

Fまでの連絡の汽車に乘らうとするには、今夜此處に泊れば明日の今の汽車で行つたと同じになる。Kに寄れたりFで餘裕があつたりするにはしても……

『停車場まで參りませうか。』

『まア、停車場まで行つて吳れ、まだ早いだらうけれどな。』

『えゝえ、時間はまだ十分御座います。一時間の上あります。』

『さうだな、ゆつくり間に合ふな。』

車はやがて、賑やかなG町へと入つて行つた。そこには朝鮮民家の間に二階三階の建築が到る處に建てられて、電燈が明るく晝のやうにあたりに輝き渡つてゐた。料理店、旅館、色の白い女、さういふものがかれの眼の前にちら〳〵した。車は一散に廣い晴がましい街路を眞直に大きな停車場へと急いだ。

『あ、あれが、……』

『あれがＧの鐵橋……』

『漸く來ましたね。まァこれでやつと安心した。』

かう言つて人々は喜悅の聲を擧げた。

六

二時間後には、人々はもう長い飽き〳〵した河舟を捨てゝ、岸からさう遠くない街道を、或は車、或は徒步で皆なＧ町へと志して行つてゐた。

『奥さん、お先へ！』

かう言つたかれの車はその一列の一番先頭に立つて駛つた。

日は薄暮に迫りつゝあつた。山々の色は深い碧から暗い紫へ、それから夜の色に變らうとしてゐた。あたりは遠く開けて、溶々とした江の下流には、汽笛のボーと吼えるやうな聲が響きわたつて聞えた。山近い空氣は寒くかれの肌に染みた。

Ｇ町は沿線でもかなりに賑やかな人口の多い町で、內地人の經營した立派な旅館もあれば、大きな料理店もあり、白粉の匂ひのする美しい女も澤山にゐた。かれは長い船の旅を一夜そこに休息させようか

ッて仕方がない。行き着く時日が來さへすれば、默つてゐても、船はGに着くのだから。』と思つたりした時には、無聊と困憊と疲勞とにぐつたりしたといふやうに、空氣枕に倒れて、眼をぱちくりさせて、ぢつと空間を見詰めたりした。『行つたきりで、歸つて來ないのなら好いけれど、歸りはまだこれよりもひどい陸路を取つて歸つて來なければならないんだからな。』かう思つたかれは、自分の長い軍隊生活につく〴〵厭氣がさして、大淘汰を憂ふる時とは正反對に、もつと自由な廣い天地の自分の前に開けて來るのを望んだ。

四日、五日目には、それでも、この堪へ難い單調な船の旅の重苦しい氣分が、いくらか薄らいで行つてゐるのを人々は感じた。『もう、いくらもない、あと七八里。』かう誰も彼も思つた。細君もホッとしたやうに立つて坐り直して見たりした。一度開けた江は、此處等に來ると、再び兩岸に尖つた山や欹つた峰を現出して、碧い濃やかな襞に白い雲が湧くやうに飀つたりした。

『もう、その鼻を出ると、Gの鐵橋が見えるさうですよ。』

『さうですか……。しかしまだ三四里はあるでせう。』

『それでも小さく見えるさうです。』

かう人々が言つてゐたが、果してその峽を向うに出ると、急に遠く開けた江流の地平線上に、Gの鐵橋が注意して見て漸くそれとわかる位の程度に小さく小さく見渡された。

『本當に困りますね。』

『何處でも同じですね。船頭なんと言ふものは內地でも矢張かうだ。』

『本當ですね。』

やがて歸つて來た船頭は、此方の想像通り酒でも飮み女にでも戲れて來たと見えて、赤い顏をして、何か卑猥らしい唄などを唄つてゐた。容易に船を出さなかつた。のんきに煙草などをふかしてゐた。

しかし、午少しすぎた頃には、船は又その長い長い江流に浮んで靜かに動いてゐた。五六十里を下つて來たO江は、其處あたりに來ると、もう餘程開けて、筏も多ければ、上下する船も多く、兩岸の山は遠く離れて、綠の濃やかな豐饒らしい野がはるばると心持よく見渡された。

彼方此方の岸から、朝鮮人が呼びかけて、船をとめさせて、便船に乘せて貰つたりなどした。かれ等はしかし內地人のゐる方には遠慮して入つて來なかつた。荷物の上などに腰を下して、例の長い烟管を出してすぱ〳〵と煙草をくゆらした。風が落ちたと見えて、帆がぐつたりと空いた腹か何ぞのやうに萎びて見えた。

江流と、櫓聲と、兩岸の風光と、靜かに孕んだ帆と、さういふ中にゐて、かれは絕えず家鄕のことを思つた。妻子の念は片時もかれの念頭から去らないやうに見えた。風が落ちて船の脚の遲くなつたのが氣になつたり、船頭の怠けてゐるのが癪に觸つたり、時にはまたそれを思ひ返して『そんなにあせつた

とを言つてゐた。朝鮮語で、船頭にいろ〳〵その路筋に就いて訊いたりした。

やがてその河港が來た。

そこには此地方にはめづらしく楊柳が毵々としてゐたり、民家が山際に固つて見えたり、驛車が陸續として往來してゐたりした。大きな街道が支那の方から來て、江を横ぎつて、それから山深く入つて行くのであるといふことが一目で知れた。商人は、『では、御機嫌よう。』かう言つて、舟中の人に挨拶して、荷物を船頭に持たせて、埠頭から町の方へと其姿をかくした。其處に立つてゐたかれは、その商人の姿の見えなくなるのをさびしさうに見送つてゐた。

船は其處で二三時間留つてゐた。此處は多い河港の中でも、かれ等に取つて、酒を飲んだり女に戯れたりする場所の多いところらしく、待つても待つても船頭は容易に船に戻つて來なかつた。『それでですな。昨夜の中に、此處にまで來ようとして奴等が骨を折つてゐたのは？　はア、それでわかつた！』かう技手は獨語のやうに言つた。

『船はこれだから厭だ。』

かう言つたかれの胸には、今時分妻の父親が呼吸を引取つてゐやしないかといふことが浮んで來てゐた。かれは焦々して、『おい、迎へに行け、迎へに行けつたら……』かう朝鮮語で其處にゐる若い船頭に言つた。

三日目に假泊した處は、山合ひのさびしい處であつた。岸近く部落はあるにはあるけれども、半里以上も行かなければならないので、其夜は技手夫婦も船の中で寢た。斷岸が高く聳えて、江流は長くその裾を流れ、時々鹿の鳴く聲などが聞えて、いかにも支那の昔の詩にでもありさうな光景であつた。苫の中では、小さな暗いランプを圍んで、足と足とは觸れ、顏に顏とは接するといふ形で、皆な體を海老のやうに曲げて寢た。『今夜は窮屈だ。民家に泊りに行くものがないから。』などと商人の男は皮肉に言つた。水の船に當る音が終夜枕の上にあつた。

五

Rといふ河港では、一緒に乘つて來たその商人風の男が上陸することになつてゐた。

『やァ、皆さん、大變にお世話になりました。御緣があつたら、またお目にかゝることがあるでせう。お大事にいらつしやい。これからは、もうさう遠くはありませんから、それに段々開けて行きますから。』

かう言つて、手荷物を片附けたり、氣が落附かないといふ風に立つたり坐つたりしてゐた。かれはこれから三里ほどあるN町に行き、そこから大きな山脈を越えて、向うに三日かゝつて旅行しなければならない人であつた。『N町から先に、馬があれば好いが、何うですか。ないと困ると思ふんですが、ない時は仕方がない。人夫を賴んで荷物を負はせて歩くんだ。』その商人は二度も三度もくり返してそんなこ

言つて考へて『さう、さう、唐澤だ。唐澤ろくだ。』

と、其女のことが種々に考へられる。あの時分、二十二三だつたから、もう三十二三だ。あの細君よりは年を取つてゐる。いづれもう人の細君か何かになつたであらう。何うしてゐるか、逢つて見たいものだ。ひよつくり何處かで出會したら面白いだらう……。かうした空想が無限に續く。と、今度は又妻のことが思ひ出されて來る。三十六、五人の子持、もう婆だ? かう思ふと、世の中と言ふものは不思議なやうな氣がする。かうして遠いＯ江の船の中に自分がゐて、こんなことを考へてゐるのも變なやうな氣がする。その間にも船は靜かに長い〳〵流を故鄕の妻の方へと下つて居るのであつた。

技手の細君とは、かれは段々親しみの度を増して行つた。時には戲談口などをもきいた。『さうですか、奥さん、長唄を彈くんですか。』などと言つた。細君は又細君で、『それぢや將校方は、皆な奥さんをお作れになつてゐらつしやらないんですね。それはおさむしいですね。……しかし、本當は、內地からＫ町あたりに、若い奥さんなんかが突然伴れて行かれると、それは吃驚しますからね。第一、可哀相ですものね。私なんかだツて、來たては每日淋しがつて、泣いてばかりゐましたからね。』

『その代り、情愛が深くなるでせう?』

『何うですかね。』

かう言つて亭主の方を見て笑つたりなどした。かれは其處に昔の女の表情を發見した。

『さうですか、まだ半分にもならないんですか。』

落膽したやうに細君は言つた。

その時不思議にも、『あゝさうだ――あの女だ。』かう思つてかれは膝を叩いた。長い間思ひ出せなかつた似た女が始めてかれの念頭に浮んで來たのであつた。『さうだ、あの女に眼から額にかけて似てゐるのだ……さうだ、さうだ。』再びかう思つたかれは一種喜悅となつかしさとを感じた。かれは其處に坐つてゐる細君を見直すやうにして見た。

續いてかれの眼には、その女と、その女のゐた家と、賑やかな町と、そこにゐた肥つた女中とが思ひ出されて來た。その近所できこえてゐる三味線の音、軒にかゝつてゐる簾、涼しく吹き通して來る風、その女についての印象は、すべて夏の夜であつた。派手な絽の襟、夏羞の櫛、飾臺の上に置かれた刺身の上の氷、女も矢張夏の夜の女として見るに適したやうな瘦削なほつそりした女であつた。と思ふと、其時分の空氣やら氣分やらが其處だけ切取つて持つてでも來たやうに鮮やかに映つて見えた。あれはたしか日露戰役後であつた。戰後の賑やかな狹斜街のさまが、空氣が再びかうしたさびしい退屈な船の中に蘇つて來た。『何と言つたつけな、たしかろくと言つた。おろくさん、あの時も餘り好い名ぢやないと思つた。もう少し女らしい名が欲しいと思つた。それから姓を何つて言つたつけな。何でも澤つて言ふ字がつく姓だ。福澤、イヤ、さうぢやない。湯澤、さうでもない。澤田、さうでもない。』かう自分で

に長い棹をあやつつて、前にあらはれて來る岩を一つ一つ迎へた。

『好いところですね。』

かう細君も眼を睜るやうにした。

二日目に假泊した町は、最初の町よりは大きく且つ賑やかであつた。かれは朝鮮人の民舍に泊らうとは思はなかつたけれど、退屈したので、皆なと一緒に上陸して、町の彼方此方を見て歩いた。矢張此處にも內地人は二三百だが、まだ女のゐる料理屋などは出來てゐなかつた。矢張、朝鮮人が長い衣服を着て、のんきさうに街道を歩いてゐた。

かれは船に歸つて寢た。

あくる日はまた同じやうな船旅がつゞいた。午近く、ある河港に來た時、『もう、半分は來ましたらうか。』

さも〳〵長旅に倦んだといふやうにして細君はかうかれに訊いた。

『さア。』

返事につかへてゐると、傍から商人風の男が、

『まだ、半分にはなりませんよ。これから半日行つて、今夕泊るところになるだらうと思ふがPといふところがあります、そこで丁度半分です。』

れに蘇つて來た。あの時分はかれはまだ稚なかつた。十一位だつた。母、祖父、祖母、仲兄、さういふ連中で、家財道具と一緒に、矢張今のやうにして船の中で寢て來た。盲目の祖母を夜中に用便に伴れて行くので、母親が困つたことや、一緒に便船を頼んで乘せて貰つて、途中から下りて行つた隣の士族の老人や、夜の川の中に赤く燃えてゐる舟の火や、味淋の生産地で船頭に賴んで買つて貰つたら半分飮まれて祖父がぶつ〳〵言つたことや、さうした光景があり〳〵と繪卷か何かのやうになつてかれに思ひ出されて來た。何ほど內地の船頭は、舟を夜泊めて置くやうなことはなかつた。櫓も此方の船頭と比べると熱心に使つた。

『しかしあの時分のことを考へると、夢のやうだ。遠い昔だ！　かういふ船旅をしても、話してきかせるものもない。』

かうかれは思ひ耽つた。

しかし時には目を娛ませるやうな風景がないでもなかつた。あるところを下る時には、兩岸から絕望が高く迫つて、そのところどころに燃えるやうな紅葉が美しく點綴された。旅好きな仲兄に見せたら、何んなにか喜ぶだらうなどとかれは思つた。と、ある處には、見上げるやうな瀧が布を晒したやうに落ちてゐたり、繪のやうな眺望臺らしい亭が崖に凭つてつくられてあつたりした。さういふところを通る時は、瀨が迅いので、船頭も常のやうにぐづ〳〵してはゐなかつた。舳先に一人、中ほどに一人といふ風

四

同じやうにしてかれは船の旅を續けた。船頭のつくつて吳れるまづい飯や汁も人達は度々食つた。同じやうな川、同じやうな舟の中、別にこれと言つて變つたやうなこともなかつた。測量技手の細君が、泊つた翌朝、じろ〳〵と笑ふやうにして人々から顏を見られたのもほんの僅の間の興味であつた。人人は矢張同じやうに同じ座席を占めて、退屈さうな顏をして坐つてゐた。話ももうめづらしくはなかつた。思ひ出さうとして何うしても思ひ出せない細君に似た顏を考へることもかれには面倒臭くなつた。人達は一刻も早く到着地に達して、それぞれ自分の行きたい處へ行きたいと願つた。

『何うも內地と違つて、此方の船頭はのんきですからな。』

『本當ですね、內地だと、夜でも何でも碇泊してることなんかないんですけども……』

『でも、風の具合が好いから、此位に走れるには走れるんですよ。風具合がわるいと、それは御難ですよ。此方の船頭は、成たけ櫓をつかはないことばかり考へて、一日でも二日でも、風向のよくなるまで待つてゐますからな。』

こんな會話が人達の間に起つた。

ふと幼い時分、家族を舉げて、生立つた古い城下町から東京へと川舟で利根川を下つた時の記憶がか

其處に、もう一人の方の男も同じやうなことを言つて歸つて來た。『まア、その代りにお酒でもあげるだ。』こんなことを言つて、袖にして來た四合入の罎詰を出した。『それのこと、それのこと。』かう言つて、商人の男もかれも船頭に賴んで同じやうな罎詰の酒を買はせた。

一騷ぎしてから、かれは毛布を隅の方に敷いて、その上にもう一枚の毛布と外套とをかけて、軍服のままでごろりと身を橫へた。醉つたので、最初は何の苦もなくぐつすりと寢られたが、夜中に眼が覺めた時には、體がすつかり冷えて寒くなつてゐるのを見た。水の音が舟底でたぶたぶと搖れてゐるのが聞える。船頭達も眠つて了つたらしく、奧に灯がほつつりついてゐるのが微かに見えるばかりで、あとは何の物音もきこえない。かれは輾轉反側した。かれは遠く離れた家を思ひ、妻子を思ひ、死に瀕した妻の父親を思つた。水の音がまたたぶたぶと舟底に搖れる音がきこえる。かれはつとめて再び眠らうとしたが、何うしても眠られない。思ふまいとするほど妻のことが胸にからみついて來る。測量技手のことなども縺れつからみつして來る。續いてこれまでに出逢つた種々の女の肌のことなどが考へられて來る。終には、雜念の蝟集に堪へられないといふやうに、かれは枕元に殘して置いた罎の酒をグツと喇叭飲みにした。

明方近くかれが苫から首を出した時には、遲い月が上つて、廣い江水がキラキラとそれに照されてゐた。

Tといふ河港に着いた時には、日はもうとつぷり暮れて、あたりは茫と夜霧に包まれて居た。あたりに何があるか、その河港は何ういふ河港であるか、さういふことは一切誰にもわからなかつた。船から見ると灯がぽつつりと二つ三つ夜霧の中に浮ぶやうに濡れたやうになつて認められた。

『舟で寝るのは、冷えて堪らない。朝鮮の民家の旅店でも何でも好い。炕の中に寝る方が苫舟の中よりは増しだ。』かう言つて測量技手夫妻も、商人も、他の男もそそくさと出かけて行つたが、暫くして先づ歸つて來た商人の男は、『駄目だ、駄目だ。泊れるやうな家は一軒しかない。まア、仕方がないから、夫婦者に讓つて歸つて來ちやつた。一緒に泊りさうでしたからな。』笑ひながらこんなことを言つて、頭を低くしながら、苫の舟の中に入つて來た。

『一軒ぎりないのかね？』

『ひどいところでさ、その一軒も隨分ひどい家ですよ。南京がうんとゐまさ……。それにね、氣の毒でしたから、測量屋さんに……』

『さうとも、さうとも……野郎は船で寝たツて好いさ。あの先生は、一月も二月も逢はずにゐて、たまに一緒になるんだから、……功徳になつて好いやね。』

かう笑ひながらかれが合せると、

『本當ですよ。』

るやうなこともありませんからな。まァ、內地の山猪と思へば、間違はありませんな。』

細君とは七八年前に東京で結婚したのださうだが、其間には子供は一人もなく、亭主は大抵測量に出張してゐるので、一緒に暮した年月は割合に尠いらしかつた。かれはそれを自分等夫妻に比較した。支那に、朝鮮に、臺灣に妻と離れて暮してゐることの多かつたかれは、二人の今の喜悅と情緖とを想像することが出來た。睦しさうに、菓子などを分けて食つてゐるのを見ると、羨しいやうな心も起らない譯に行かなかつた。

船は絕えず下つた。順風なので、船は多く櫓を用ゐずに濟んだ。ぱたぱたと帆の鳴る音が絕えず聞える。荒漠とした河の岸には、部落らしいものもなく河港らしいものもなかつた。あるところでは、こんなところで下りるのかと思はれるやうなさびしい岸に船を留めさせて、朝鮮人が一人二人下りて行つた。

相變らず左はひろい平野で、右は遠く碧の濃い山嶺の連亙を望んでゐた。江の水は赤く濁つて、だぶだぶとしてゐた。をりをり芦荻などの生えてゐるところがあるが、大抵は荒凉とした砂濱であつた。で、かうした中に、日は次第に薄暮に近くなつて行つた。山はいつか碧から暗色へと變つて行つた。ひろい平野の中に沈んで行く落日は、一時ぱつと赤く且つ黃く溶々とした江と、江の中に浮んでゐる舟と、舟の中の人とを照した。それに面した細君の顏は赤く暗く見えた。

して、それからそれへとかれはかれの持つた多い記憶の中からその顔をさがして見た。しかしそれは容易に思ひ出されなかつた。

しかしその思ひ出せないといふのが、遠い、微かな、離れたものではなく、寧ろごく自分に近く、或は自分の關係した女か何かの中かも知れないと思はれる位のものであるが、あの女でもなし、さうかと言つて、あれでもなし、妻の妹の友達、それでもなし、……かういふ風にかれは順々に記憶をたどつて見たが、矢張その似てゐる女が何うしても思ひ出せなかつた。

一體、何處が似てるのだらう？　眉か、それとも眼か、それとも輪廓か、額から眼にかけての感じか。さう思つて見ても矢張思ひ出せない。仕方がなしに、かれはその考へから離れて、鞄の中から菓子を出して、それを一つむしやむしやと食つた。

亭主の測量技手ともかれは種々の話をした。技手は朝鮮に來てからもう三年、一年は日本海方面のK附近の山中を跋渉し、その翌年は此方に來て、H附近の深山の中にその半を費し、それからずつとM鎭の奥の支那境の山を測量した。同僚もかなり多いらしかつた。技手はをり〳〵虎に邂逅す話などをした。『此方で、虎に逢ふのを怖がつてゐては、とても山の中の測量なんか出來やしません。隨分、澤山にゐますからな。しかし、用心さへしてゐれば危いことなんかありませんな。ふつと、路の曲り角などで出會すのが一番危いですが、向うだつて人間が怖いから、見えてゐたツて、さう向うからわざ〳〵やつて來

〳〵なり〳〵大きな帆を張つた船が、此方の船を掠めるやうにして通つて行つた。朝鮮人の男の兒がその船緣で、何かして遊んでゐるのなども見えた。矢張内地と同じやうに――或はそれ以上に、船の中の一家の生活が發達してゐるらしく、寢道具もあれば炊事道具もあり、鍋釜などもちやんと揃へて持つてゐるらしかつた。山奥の奥から伐つて流して來たらしい大きな筏が其處にも此處にも見えて、それには朝鮮人の船頭が五人も六人も乘つてゐるのなどもあつた。筏の上に住居らしいものを造つてゐるものには物を煮る烟が細く颺つて見えた。

午には、朝鮮人の船頭が、飯につけ物に汁を出したが、乘客は大抵一食乃至二食分町で準備して來てゐるので、それは食はずに、銘々に自分の持つた折詰などを出して食つた。「船頭の出す飯に厄介にならんわけには行きませんけども……實は、こいつが一番閉口なんですよ。何うせ碌なものは拵へはしないんだから。」などと鑛山の話をしてゐた男は笑ひながら言つた。

かれも料理屋で詰めて呉れた折詰を食つたが、それが濟むと、舟の中はまた退屈に單調になつた。本を出して讀んで見ても面白くなし、話をしても別に變つたこともなし、さうかと言つて、さう始終寢てゐる譯にも行かなかつた。色の白い、いくらか癖のある、一緒に暮したら多少氣難かしいだらうと想像される細君の顏にも馴れて、笑ふ時にちよつと顏を歪める一種の表情のあるのまでかれは見遁さなかつた。そればかりではなかつた。見てゐる中に、その顏の何處かに誰かに似てゐるところのあるのを發見

なら、明治の功臣と同じやうに、國家の爲めにも盡し、社會の上にも浮び上ることが出來たのだ。かう考へて來て、かれは黯然とした。しかし、酒に一生を浪費して妻の父親のやうにして死ぬのも、ハルビンに歷史上のシーンを殘してピストルの一發に斃れるのも、死と言ふことから言へば同じことだ。唯時は經つて行くのだ。……かう思ふと、あの古い城址の中で生立つたかれが、かうしてこの遠いＯ江を下つてゐるさまが何だか不思議のやうにも考へられる。長い自分の一生の歷史の中の特殊な一頁を繙いてゐるやうな心持もする。

續いて妓生の顏だの、妻の顏だのがゴタ〳〵と一緒になつて浮んで來たが、いつとなく昨夜の疲勞が出て、眠るともなくついぐつすりと寢込んだと見えて、暫くして眼を覺すと、張つた帆の間から日影がまともにかれの顏の上に當つてゐた。櫓をあやつる單調な音は矢張靜かに聞えてゐた。

起上つて、卷煙草を一本ポッケットから出して吸つた。舟中は別に變つたこともなかつた。張つた帆につれて日影が彼方へ行つたり此方へ行つたりする。測量技手の細君は、體を横にして亭主と向ひ合つて坐つてゐたが、その顏にをり〳〵日が當るので、眩しさうにして横を向いたり、白い手を翳したりした。これは途中のＲまで行くといふ三十四五の商人風の男は、横になつて、講談らしい本を頻りに讀んでゐる。測量技手は、その隣の鬚の生えた四十ばかりの男と何か頻りに平安北道にある鑛山の話をしてゐる。

『さうですか。さういふ大きな鑛山がありますか。それは目附けもんですな。』などと其男は言つてゐた。

て見て始めてわかるが、あの變動は士族の階級に取つて非常に大きな打撃であつたのだ。日本でもあの位の大きな破壞の悲劇と建設の悲劇とはなかつたのだ。かう思ふと、父母、つゞいて長兄、さういふ人達の被つた大波のさまがそれと想像される。自分や仲兄や姉の困難したのも矢張その大波の飛沫を受けたのである。かれはいつの間にか時の經つて行くのを氣が附かずには居られなかつた。それに、かれは到る處で、さういふ大波の中をくゞつて來た老人達を見た。ある老人は、『とても、話してきかせたつて、あの時分のことはわかいものにはわからないよ。』などと言つた。ある老人は默々として、その運命に忍從したかのやうにもごく〳〵口を動かしてゐた。其處にも此處にもその大破壞の悲劇の跡が殘つてゐた。と、かれの生ひ立つた城址を持つた古い士族町が見える。衰頽と滅亡との巴渦を卷いた古屋敷が見える。そこの中に鼻洟を垂らして泣いて母親に世話を燒かしてゐるかれが見える。そして其處で生ひ立つた人が生きたり死んだりして行つてゐる。つゞいて、それとはぐつと離れた日淸日露の兩役のさまが繰返される。かれは日露の役には、砲彈の白く炸裂する中で國の爲めに幾度か死生を賭した。掩體の中に一日進出が出來ないで躊躇つてゐた時のことなどが想像される。やがて日本は東洋の一强國になる。世界でも馬鹿にしなくなる。この朝鮮までがその屬國になる。維新の衰頽の中から非常の勢で芽を出した萠芽が忽ち一國の元氣となり、膨脹となつたさまは、目も覺めるばかりであつた。妻の父親にしろ、かれの生父にしろ、乃至は不遇で死んだ長兄にしろ、その經過した時代の困難と辛勞とに打克つことが出來た

乘客は身を横へたり、本を出して讀んだり、舟の中で食ふやうにと貰つた菓子を逸早く出したりした。朝鮮の船頭の操る特殊の櫓の音が靜かに聞えた。

かれもやがて身を横へて、鞄の中から空氣枕を出して、それを八分目位にふくらませたが、仰向に頭をそれに載せたかれには、隊のことや、危篤に瀕した妻の父のことや、妻子のことがあり〳〵と眼に浮んで來た。舊士族の高取の家に生れて、兄弟や伯父伯母には大阪に出て立派な成功をしてゐるものもあるのに、田舍の家庭の空氣や、廢藩以後の衰頽した士族の空氣の中に埋れて、酒を唯一の友、乃至はやり場のない不平や憂鬱を遣る手段として、爲すこともなく一生を送つて行つた妻の父親、朝に晝に晩に何ぞと言つては酒の肴を老妻に作らせることにのみ沒頭した父親、『あゝ酒だ、酒だ、酒位好いものはない。酒さへ飮んでゐれば心配はない。何うだ、一杯やらんか。』かういふその父親の莞爾した顏が眼に見えるやうな氣がした。年と言つてもまだ六十になつたかならない位、もつと長生する人は澤山にあるのに、志を得ないのと、その不平を酒に托したためとに、體をわるくして早く死んで行く人の身の上のことが染々と考へられた。緣があつて舅となり婿となつた。互に接近さへしなければ、一生さういふ人があつたかとも知らない人を、あの時H市に士官になつて行つたばかりに、かうした緣が出來て、血統がつゞいて、お互に肉親の親以上の世話にもなつた。本當に好い舅であつたのに。……かう思ふと、それから引つゞいて、かれの生みの父親、母親、長兄のことなどが考へられた。維新の變動、今になつて考へ

に廣く座席を占めて、そこに毛布などを敷くことが出來た。送つて來た馬丁は、最後まで其處にゐて、鞄や荷物を其處に運び入れた。かれは中でも一番好い座席を人々から讓られて其處にゐることにした。そこで立つと、埠頭を隔てゝごたごたした河港の賑やかなさまが見えた。運漕店、土壁の民家、車、土人の群集、その向ひに、かれの昨夜乘つて來た馬の繋がれてゐるのが、午前の光線の中に浮き出すやうに見えてゐた。馬丁もそこに立つて此方を見送つてゐた。

船頭が棹で岩につゝかけたと思ふと、舟は滑るやうに靜かに動き出した。誰も彼も立つて、わかれて行く岸の方を見かへつた。岸には見送に來てゐる人が二三人と長烟管を啣へたのんきな朝鮮人とが立つて見てゐた。

『ぢや、賴んだぞ。』

かれはもう一度かう馬丁に聲をかけた。馬丁は頭を下げた。

舟はくるりと廻つて、そして靜かに岸を離れて行つた。

三

暫しの間は、○江の流がめづらしいので、兩岸の移り變つて行くのを誰もかれも飽かずに眺めてゐたが、江は唯ひろ〳〵とした平野を流れてゐるばかり、別に目を娛ませるものもないので、段々飽きて、

かうおづ〳〵した調子で、きまりわるさうに、しかし男に對してある自信を持つたやうな艶な態度で、その細君が訊いた。

『さア、よくわかりませんが、五日はかゝるでせう？　水の都合で、四晩泊り位で、Gまで行けるかも知れないさうですけれど……』

『大變ですね。』

『これがうんざりですよ。それに、朝鮮人だから、船頭もぐづ〳〵してゐるんですよ。』

『左樣でせうねえ、屹度……』

舟に乘り移るまでには、かれはその亭主が陸軍の測量師で、今までK町よりもつと山の奥にゐて、夫と妻とは常に十二三里づつ隔てゝ生活してゐたといふことやら、これから仕事の都合で京城まで歸る途中であることなどを知つた。『本當に好いお伴で御座いますこと……此方に參つては、もう內地の人が本當に同胞のやうな氣が致しますから。』などとその細君は言つた。亭主などとも大分懇意になつて、朝鮮の內地の話などを何彼と交換した。妻の父の危篤の爲めの歸國といふことを聞いた時には、『それは御心配ですね……奥さんもさぞ御心細く思つてゐらつしやるでせうね。』夫婦は異口同音に言つた。

やがて出帆の時刻は來た。晝間は苫は取つた方が好いだらうと言ふので、一度葺いた苫をまた外すことにする。舟の中は、さう廣いといふほどではないが、六七人の乘客には、まだ餘地がある位で、てんで

うかと言つて學校の先生とも思へないし……などとかれは考へた。

其處からは、埠頭に近く内地の大きな傳馬といくらも變らない一隻の舟の繫いであるのが見えた。それが多分かれ等の乘つて行く舟らしく、朝鮮人の船頭が二三人荷を積んだり、苫を葺いたり、船緣を洗つたり、何か聲をあげて叫んだりしてゐた。帆が上げられたり下げられたりした。その隣の舟の半下した帆には、午前の日影が美しくさしわたつてゐた。

かれは女の亭主と逸早くかうした言葉を交してゐた。

『さうですか、矢張、Gまでですか。丁度好いお伴れだ。……』

『貴方も……』

『え。』

『東京までいらつしやるのですか。』

『東京よりもつと先きです。Hです。』

『それは大變ですな。』

『なアに、Gまで出れば、あとは汽車で直行だからわけはないですけども……この川が大變ですからな。』

『何日かゝりませう。』

てゐた。やがて眼をこすつて起き上つたかれは、『もう八時かな。』腕時計を見て、『ほ、餘程眠つたと見える。』かう言つて、靴を穿いて、剣をぢやらつかせて、埠頭の方へと行つた。

馬の其處に繋いであるのを見て、それを撫でながら、『それぢや、よく手入をして置いて呉れよ。痩せさせちやいかんぜ。……それからな、大隊副官に萬事頼むつてよく言つて呉れよ。遅くも十一月の十五六日には歸つて來るからな。』

『承知致しました。』

かう馬丁は直立して答へた。

埠頭に近い運漕店には、乘客が既に六七人集つて來てゐた。朝鮮人が三人、內地人が四人、その中にかれの妻よりも年が五つ六つ下だらうと思はれる束髮に結つた色の白いちよつと小綺麗な女が、その亭主と思はれるスコッチの洋服に外套を着た男と並んで何か話しながら其處に腰かけてゐた。周圍には便船に積むべき荷物――行李や薦包や箱包が一杯に散ばつてゐて、朝鮮人の主人と番頭とは、頻りに何か言ひながら、忙しさうに彼方へ行つたり此方へ來たりしてゐた。かれの肩章を見て乘客達はそれと察したらしく、頻りに此方を見てゐたが、女もかれについて亭主と何か話してゐるらしくかれには思はれた。かれもをり〳〵女の方に眼をやつた。さほど綺麗といふほどではないが、淋しい長い河舟の中に、兎に角にかうした同伴者を得るのは面白いとかれは思つた。何だらう？　商人ぢやなし、役人ぢやなし、さ

その一軒で、舟が八時過ぎに出帆するといふことを確めてから、かれはそのぢき近くにある內地人の經營してゐる小料理店へと入つて行つた。矢張K町と同じやうに、低い土壁の民家の間々に、ぞんざいな假普請の內地人の家が雜つてゐるが、それは何だか不揃な拔け出した齒でも見るやうに何となく不調和にかれには見えた。かれは馬を馬丁に引かせて、庭から奧の方へ通つて行つた。

主婦や女達はチヤホヤしてかれを奧へ通した。何處に行つても、內地人のゐないところのないやうな此地では、あたりの家屋や人種が違つてゐるばかり、內地と少しも變らない便利さで旅が續けられた。女も矢張內地の田舍の料理屋で見るやうな女であつた。『舟の出るまでは間が御座いますから、……まア御ゆつくりなさいまし。』かう言つて、主婦も主人も出て來た。

朝飯の前にかれは酒を命じた。そしてそれが運ばれると共に、かれは馬丁を其處に呼んだ。『まア上れよ。疲れたらう。何構ふもんか。酒でも飮まなけりやり切れやしねえ。上れ上れ、よ、上れよ。』遠慮する馬丁をかう言つて無理に座敷に引き上げて酒を飮ませた。馬丁は二十八九で、岩乘な體格をしてゐた。

『馬にも何かやつたか。……さうか、もう食はせたか、八時すぎから十三里だからな、くたびれたに相違ない。それに、眠いだらう。一杯飮んで寢ろよ。』

舟の出帆の時刻を女が知らせて來た頃には、かれも酒に醉つて、肱を枕にして、好い心持さうに眠つ

さびしく横つてゐるばかりで、高い一箇の屋根も一箇の寺院もなく、唯ところ〴〵にさびしく朝の烟の颺つてゐるのをかれは見た。かれは 鎭の人家を眼にする前に、旣に早くO江の溶々とした水量の多い流に接した。『あゝあれがO江だ。』かう言つてかれは馬丁に指し示した。

河口から七八十里を溯つた此の近くでも、江は未だ下流の趣を呈して、ところ〴〵に苫を葺いたのや帆を擧げたのやを雜ぜて、船が五つ六つ浮んで動いてゐる。靜かに、淀んで、錆びた碧い色をしてゆつたりとして水は流れてゐる。『内地の川とは違ふな。』かう思ひながら、かれは靜かにやがて見え出して來たM鎭の方へと行つた。

M鎭では、船の出るところがぢきわかつた。それに、此處にもかなりに多く内地人がゐて、何を聞くにも尠しも不便はなかつた。かれの前にはやがて河港らしい光景が映つて來た。朝の市らしい野菜の籠や車の集つたところ、そこから少し行くと、川に添つて、寧ろ川を一ところ開鑿して、そこを埠頭にしたやうなところに、朝鮮の船が或は半ば帆を張り、半は朝炊の烟を擧げ、半は互に密接して並んで繫がれてあるのを見た。十月の末の朝はもう寒く、人々のつく呼吸は、白く空氣の中に見えた。土着の民は、相變らず白い衣を着て、のんきさうに其處此處を歩いてゐる。何かわからぬ朝鮮語で、女と男とが立つて話してゐたりした。埠頭の此方に小さな土橋がかゝつてゐて、その此方に運漕店らしい店が二三軒並んでゐた。

に入れて置いた五萬分の一の地圖ををり〳〵展げた。微かながらも地圖が見える位にもう夜は明けかけてゐたのであつた。

『もう一里半だな。』

かうかれは馬丁に聲をかけた。

『もう、そんなになりますかな。』

『もうすぐだ。出帆は何でも八時頃だから、まだ二時間半ある。大丈夫間に合ふ……それにしても疲れたらう。氣の毒だつたな。』

『いゝえ、もう……』

朝日はやがて燦爛として昇つた。美しい赤い光芒、一面に爽やかに遮るものなく照りわたつた光線、大陸の野でなければ見られないやうな光景がかれの前に開けた。曉の山の翠が或は高く或は低く或は斜にその前に聳えて、それが朝日の光線の加減で、いくらか黑味がかつた碧の色を呈してゐた。『あの山の裾にO江が流れてゐるのだらう。』かう思ひながら、かれは爽やかな空氣の漲つた潤々した光景に對した。

二

M鎭はひつたりとO江に添つた河港であつた。M町と同じやうに、矢張低い朝鮮民家が押潰すやうに

年は過ぎ去つた。かれはこんなことは滅多に思つたことはないのであつたが、何うしてか今夜は、さういふ風に物が染々と考へられた。仲兄は文學者だけに、さういふことをよく氣にして、自分などから見ては、『馬鹿なことを細かく氣にして考へるものだな。』などと不思議に思つたこともあるが、今夜は何うしてか、物がさういふ風に感情的に考へられて仕方がない。そしてかれがかうして、深夜にこの邊僻な、十年前までは日本のものでなかつた國の田舍を通つて行くといふことも不思議に思はれた。

かういふ中にも、驅けたり並足に歩いたりして、路は段々M鎭の方へ近づきつゝあつた。眠り果てた朝鮮町の中を通つたり、丘から丘へ通じた低い峠を越えて行つたり、小さな川添ひの路を通つたり、淋しい部落をいくつか拔けて行つたりした。かれはをり〳〵廣い穹窿の中に無數にきらめく燦爛とした星の影を仰いだ。大陸的の野は潤々として、且つ寂として、かれの前に無限にひろげられた。かれは幼い時、祖父に指さゝれて、よく曉天の空に仰いだ明けの明星の矢張昔も今も變らずに同じやうに輝いてゐるのを認めた。

『もう夜が明けるな。』

『さうですな。』かう馬丁は答へた。

黎明の光がそことなく曉の空に雜つて明るく見え出して來た頃には、十三里の路は既に通過して、O江に添つたM鎭が既に近くなつてゐるのをかれは認めた。かれは馬上、手綱を取りながら、ポッケット

『少し走るぞ……』

『え……』

かれにしては、馬丁も氣の毒だが、河船の時間に間に合はないではそれこそ大變だと思つてゐた。馬は拍車につれて、靜かに走つた。蹄の音が一時しんとした夜の街道を響かせた。馬丁は提灯を持ちながら後から走つてついて來た。

かれの胸には種々なことが往來した。昔、書生時分に仲兄と中仙道の夜道をしたことが思ひ出されたり、死んだ母のことが考へられたり、目上の人達が一年々々死んで行つたことなどが想起されたりした。これで妻の父が死ねば、自分の目上は、東京にゐる仲兄一人である。かう考へると、自分がもう四十二の厄年近くなつてゐることが繰返される。いつの間にかう年を取つたらうと思ふ。士官學校の入學試驗で苦んでゐたのはまだ昨日のやうに思へるのに……。又、高崎の聯隊に士官候補生になつて喜び勇んで入つて行つたのはつい此間のやうに思へるのに……。さう言へば、あの時、一緒に高崎の營門に入つた連中でも、Wが大學の教官をしてゐるだけで、あとは死んだり、やめたり、豫備になつたりしてゐる。と、大淘汰のことなども氣にかゝる。ふと思返して、そんなことを今から心配したッて仕方がない。その時はその時だ。その時は田舍で安い田地でも買つて畠でも耕して暮すのだ……。と、今度は妻子のことが眼の前に浮んで來る。美しい妻も老いた。それも無理はない、もう五人の母親だから……。あゝ青

たが、其時分のやうにもう他で書生にしては置かなかつた。責任も重かつた。年々人事局で執行される大淘汰の暗流も氣にかけずには居られなかつた。師團長、旅團長の檢閲の時などには、殊にその任務の重さを感じた。

しかしかれは其處でも勤勉な大隊長として働いた。中隊長時分のやうに、もう勝手に行動することは出來ないが、――隊附の將校などに對しても一面寛容を示すと共に一面嚴格な態度を行はなければならなかつたが、それでもかれは演習に、射的に、行軍に兵隊達を勵ませた。

それに、其處に赴任して來た將校達は、かれと同じく大抵妻子家族を内地へと殘して來た。それも慰めてやらなければならなかつた。十のものは七つまで大目に見てやらなければならなかつた。かれにしても妻子は戀しいが、他の將校達はかれより一層それの戀しい年齡であつた。現に、かれの副官をつとめてゐる中尉は、漸く去年の冬、結婚したばかりで、三月と同居せずに、別れて此の僻地へとやつて來てゐた。をりをり顏を曇らせてゐると、同じ將校連から、『おい。又思ひ出してるな。』などと言はれるが、かれは殊にそれを氣の毒に思つて、今夜發つて來る時にも、『是非今度は君の親達の處に寄つて來るよ。出來るなら、細君を呼びよせる方が好いからな。僕なんかとは違ふんだから。』かうその若い副官に言つて來たことを思ひ出した。

ふとかれは馬丁に言つた。

こでかれは營内居住をした。部下の將校、下士、兵士、大抵は自分が國の方から伴れて來たものなので、内地とはかう遠く離れてゐるに拘らず、其處では、言葉から氣分から心持から國にゐる時と同じやうな別天地をつくつてかれは住んだ。大隊長であるかれは、其處では何でも彼でもかれの命令のまゝにすることが出來た。それにかれは好人物であつた。義理にも堅ければ情にも篤かつた。大きな聲を立てゝ、部下を呶鳴りつけるやうなことはをり〳〵はあつても、親身になつて部下の身の上を心配してやつたり、懇々身に染みるやうな意見を加へてやつたりした。かれは隊長としても、立派に職務に勵む男であつた。

かれは兵士に野菜畑をつくらせたりして、暢氣に、自由に、書生流に暮した。郡長、憲兵隊長、裁判所長、小學校長、病院長、さういふ人達とも仲好く往來した。しかし、今と比べて、四五年前、中隊長で、方面は違ふが矢張朝鮮の北のＫＫ町附近に守備をしてゐた時分の方が氣樂でもあり、自由でもあり、面白くもあつたなどとかれは思つた。何より先にかれは年がまだ若かつた。まだ一本筋の三つ星であつたけれど、元氣もあつたし、書生にも近かつたし、人生の底の底まで見えるやうな年齡にも達してゐなかつたので、何でも彼でも思ふまゝに振舞ふことが出來た。此處にゐたあやしげな二三人の女狩をして、何處か遠くに放逐してやつたことなどもあつた。Ｔ江で、兵隊をつれて、鮭などを取つて來て食つた。東京にはまだ世話になつた長兄も生きてゐた。『あの時分はのんきだツた。』かうかれは其時分と今とを比べて考へた。今ではもう昔のやうな元氣のあることは出來なかつた。書生流の生活は矢張同じであつ

は望んでゐたが、しかし、かういふところに廻されるとは思ひもかけなかつた。朝鮮も北の北の果てだ。寒いさびしい處だ。かう思ふと、日本海方面の旅團司令部のあるＫＫ町から、兵隊を伴れて、野越え山越えして、時には朝鮮民家、時には露營といふ風で、本隊所在地のＫ町までやつて來た時のことが思ひ出された。そしてその心にかけて來た町がどんなにかれの眼に映つたであらう。汚い町、低い朝鮮市街の町、よごれた白い衣を着た朝鮮人のぞろ／＼歩く町、長煙管と長い衣の裾と車とのごた／＼した町、町をめぐつたＮ江に臨んで、繪葉書で見ればちよつと心をひくやうな眺望臺などがあつたけれど、行つて見れば、川は黄く濁り、山は赤く兀げ、何だ、こんなところかと思はれるやうな處だつた。平安北道での樞要な地點だなどと言つてゐても、戶數は四百戶ばかり、人口は二千あるか無しかで、ところ／＼に日本式の料理店、旅籠屋などがあるけれども、食ふものと言つては、野菜に川魚、それに少しばかりの鳥肉、朝鮮の豚は旨いなどと言ふが、旨いのに相違ないかも知れないが、あの汚いのを見ると、とても食ふ氣にはなれなかつた。好きな蕎麥は澤山にあるが、收穫の時、農夫達は筵を使はずに地面の上でぢかにやるので、砂があつて、ぢやり／＼してとても食へない。妓生の本場、朝鮮での妓生の本場――さう言つて、客がやつて來ると、何時もめづらしがつて騷ぐけれど、言葉は通ぜず、唄はわからず、あんなものを酒席の相手にしたところで仕方がないのをかれは思つた。

兵營――新たに建設した兵營は町の外廓にあつた。それはかなりに目に立つ大きな建築であつた。そ

行つては十日もかゝる。それまで危篤の病人が生きてゐる筈はない。困つたなと思つた。かれはいつも從卒の運んで來る夕飯を食つた。妻の父の危篤の電報、それは妻の許から來た。妻の父の死目。それにも逢ひたいが、妻や子供には一層逢ひたい。この春、置いて國を發つて來る時には、まだ生れて幾らも經たなかつた男の兒、唯一人の男の兒、それもさぞ大きくなつてゐるだらう。もう無論笑ふだらう。それに妻もさぞ逢ひたがつてゐるだらう。五人の子供と一緒に國に殘されて、父の危篤の床に侍してゐてはさぞ心細からう。かう思ふと是非行きたい。別れてからまだ一年だけれども、是非逢ひたい。仕方がない、許可が明日にでも下つたら、陸路でも構はないから行くかな……こんな風に思つてゐると、夜の八時過になつて、遠い所にある、其處に行くにも十日ほど馬に乘つたり徒歩をつゞけたりしなければ行けない旅團司令部から、許可の電報がやつて來た。それから慌てゝ大急ぎで支度に取りかゝつた。忙しかつた大隊の事務は副官に賴んで置かなければならず、遠く離れてゐる所屬の第二中隊のことも萬事その中隊長にいろ〳〵傳言して置かなければならず、隨分目の廻るやうな忙しい思ひをして來た。しかし此處まで出て來れば、もう安心だ。旅は長い。しかしその長い旅の末には、妻や子供の顏がある……死んでゐるか生きてゐるか知れないが、兎に角あの妻の父親の顏がある……いろ〳〵な樂しい話がある……。

それにしても、豪いところに廻されて來たものだ。餘り長く國の大隊にゐたので、何處か變りたいと

ら着くな……』

『大丈夫です。』

馬丁は提灯を翳しながら、並足で、いくらか呼吸がつけたといふやうに馬に添つて歩きながら言つた。

『貴樣、くたびれたらう？』

『いえ……』

『大變だッたな、氣の毒だッたな。これがな、戰場とか演習なら仕方がないが、私用で、かういふ思をさせちや氣の毒だ。』

『何ァに、矢張戰場だと思つてゐますから……』

『でも、氣の毒だッた。』

また沈默が續いた。馬の蹄の大地を踏む音、拍車の輕く當る音、何處か遠くで水の流れる音がした。太古に似た寂寥があたりを領した。何處を見渡しても、人の所在を示す灯の影もなかつた。唯、前に廣い長い平坦な朝鮮の道路が續いてゐるばかりであつた。

かれは慌てゝ準備をして發つて來たK町のことを考へた。旅團からの許可の命令がやつて來ないから、今日はとても發てないと思つて失望してゐた。今夜O川のM鎭まで行つてゐなければ、明日の舟の間に合はない。明日合はないとすると、あと一週間經つて船便があるか、十日經つてあるかわからない。陸路を

長流

一

かれは時々馬をとゞめて、闇に喘ぎ喘ぎ追附いて來る馬丁を待つた。朝鮮のさびしい田舍、しかも夜中の一時過、大地にくつ附いたやうになつてゐる民家の部落と、闇を處々低く劃つてゐる丘と、收穫の後らしい田畠と、それより他には空に燦爛とかゞやく星しかないこの夜道を、十三里の夜道を、走つて馬に附いて來るのは、馬丁にしても大抵ではあるまいとかれは思つた。かれは時には靜かに普通に馬を步ませた。

『もうSは通つたかね。』

『さつきのがさうで御座いませう。』

『さうかな、あれがSかな。Sにしちや、ちよつと小さすぎたと思つたが――』かう言つて少時默つて、『Sだとすると、もう半分以上は來たな。この分で行けば、明日の朝の七時までには何うやら斯うや

つて、それが一刻毎にＮＴ山の巨人のやうな姿の半面を包まうとしてゐた。あるところは、日の明るい光線を受けて、雲が金色のやうに美しく晴れやかに輝き渡つた。

またある時間が過ぎた。かれはふと叔母の顏を眼の前に浮べた。つゞいて呪つた女の顏が掠めるやうにかれの意識を横ぎつて行つた。あゝとかれは微かなうめきのやうな聲を立てゝ體を動かした。で、今まで正面に仰向けに寢てゐた顏が少し横になつて、今度は日影が髮の後頭部を照すやうになつた。かれは靜かに右の手を胸の上に持つて行つた。それきりであつた。明いたまゝ動かなくなつたかれの兩眼は、永久に廣大無邊の蒼空に面してそのまゝに殘つた。

は思つた。

かれは今ある山の見晴しの好い斜坂の上に立つてゐる。それだけはかれにもわかる。下に凄じく廣大な密林が横つてゐる。あの密林の中でかれは恐ろしい物を見たのである。二日も三日もあの中を彷徨ひ歩いたのである。それをまア兎に角此處まで突破して來た。唯、それだけである。それより他に、かれは考へたり思つたりする意識を失つて了つた。

かれはぐつたりと其處に坐つた。坐つたといふよりも寧ろ倒れたと言ふ方が好いかも知れない。かれは先づ仰向になつて、兩足を前の方へ長く伸した。大きな眼を明いた鬚の深い蒼白い顏は、そのまゝ廣い空に面した。

雲を洩れた日影が、斜にかれの横顏を照した。

『天氣になつたと見える。』かう思つただけでかれは昏々とした。それから何分經つたか何時間經つたかわからないが、『まア、あの恐しい密林の中を出て來て好かつた。これで安心だ。此處に來さへすればもう大丈夫だ。』と思つた。

また昏々とした。

かれの前には、A岳の絕頂の切立つた姿が千古の神祕をその胸に深く藏してゐるやうに高く穹窿を劃して聳えてゐた。そしてその連嶺とI岳の連峰との間には、白い乃至は灰色の雲が渦まくやうに湧き上

そればかりではなかつた。絶えず動いて行つてゐる灰色の霧、それにも恐しいある生命が賦與せられてあつて、意味があつて、この自分を十重二十重に包んでゐるのではないかと疑はれた。霧の中に、によきによき立つてゐる栂や落葉松の幹も、自分を取卷いて恐しく睨めてゐるやうに見えた。かれは身がこんで一歩も出ることが出來なくなつた。

十二

何處を何う歩いてゐるか、かれにはわからなくなつた。

意識がぼつとして、疲れたのか飢ゑたのかそれすらわからない。かれは外套を何處かに落した。恐しいと思つて駈けた時に、樹の枝にでも引懸けて來たと見えて、水筒も皮ばかりになつてゐた。洋服は半ば泥土に塗れ、ところどころ裂けて、中から裏地が見えてゐた。それでも地圖と米だけは、かれはまだしつかりと背負袋に入れて負つてゐた。

ある岩角のやうなところで、疲れて、ぐつすり眠つたことを覺えてゐるが、それが今日であるか、昨日であるか、それとも遠い最初の露營の頃であるか、それがはつきりとわからない。もう日などは繰つて見てもわからない。一體、幾日山の中に露營したのだか、それがわからない。唯、密林の中が恐ろしい。何を置いても、それだけは突破しなければならないと思つて、夢中で熊笹を分けて來たことをかれ

十一

小さな溪流が一ところ潭を成して靜かに淀んでゐるやうな處に來た。
かれは岩の上に腹這になつて、燃えつくやうに渴いた口をそれに當てた。冷たい水であつた。
思ふさま渴を醫したかれは、ふと自分の姿がその水の澄んだ鏡にはつきりと映つてゐるのを見た。蓬蓬と延びた髮、顎から鼻へかけて一面に深く生えた鬚、蒼白い物凄い顏、ぎよろ〳〵光つた眼、それを見た時には、かれは後に倒れやうとした。かれは恐ろしい生物を其處に發見したやうな氣がして戰慄した。
續いて、何だ、馬鹿々々しい。自分の顏ぢやないか。かう思つて、もう一度其處に映つた蒼白い顏を見た。しかし何うしてもそれが自分の顏とは思はれなかつた。別にさういふ生物が其處に、淀んだ水の中にゐて、それがぢつと自分を見詰めてゐるやうに思はれた。
急いでかれはそこを離れた。
其日一日、かれはその蒼白い顏につきまつはれた。それが後から後から追懸けて來るやうな氣がした。自分のわけて行く熊笹の鳴る音がその生物の追ひかけて來る音で、もうすぐ一步で恐ろしいある物に追ひ附かれるやうに思はれた。かれは後を振返つて見るのを恐れた。

とが出來なかつた。少しとろ〳〵としたと思ふと、すぐうなされて眼が覺めた。無限の神祕がかれの周圍にあつた。そしてまたその無限の闇の中から、ぢつとかれを見詰めてゐるものがあるやうな氣がした。それは今まで自分の世にあつて見たことのないもので、またさういふものがあらうとは夢にも思はなかつたものであつた。死――と言ふ字が突然かれの頭を掠めて行つた。

かれは聲を擧げて、立上つて、遁れやうとした。續いて二度三度聲を擧げた。と、又その聲の反響がかれをおびえさせた。空虛な大きな暗い中に突然起つてそして突然消えて行つたある生物の叫聲！　それは自分の聲ではないやうにかれには思はれ出した。

身を樹の幹に寄せて、ちゞこまつて、かれは闇を見詰めた。朝までかれは身動きもせずに其處にゐた。

朝も矢張雨が樹の幹からほた〳〵落ちてゐる。

矢張、周圍は灰色の深い霧だ。

何も彼も過ぎ去つたやうな氣がした。深い恐ろしい絶望がその周圍に犇々と押し寄せて來た。しかもそれに反抗する勇氣も希望も何も彼もなくなつてゐるのをかれは感じた。かれは飯を食はうとする氣さへ起らなかつた。

でも、かれは歩き出した。唯無意識に、唯ぼんやりと、歩くのが自分の運命であるかのやうに――。

した。勿論辛うじてゞはあつたけれど……。かれは生きかへつたやうな心がした。かれは、熱心に燃料を集めた。木の枝の心が好いと言ふのを知つてゐるので、ナイフで木の枝を何本も何本も削つた。で、唯一の力の蠟マッチの約半分を費して、どうやらかうやら焚火をつくることが出來た。

しかし明日も雨が降つたら何うだ。この蠟マッチが無くなつたら何うだ。否、現に、米――食糧がなくなりつゝある。あと二日や三日でこの廣大無邊な山岳を突破することが出來るであらうか。かう思ふと恐ろしい不安がかれを襲つた。

『先の不明の地區を進むよりは、寧ろあとに引返さうか。』

かうした考へも既に何遍となく起つた。しかしそれも非常に困難であつた。今まで費した日數、その日數を再び繰返さなければそれを實行することが出來なかつた。それに、久しく無人の境にゐたといふことが、誰にも人一人逢はないといふことが、大きな空虚な不思議な自然に壓迫されたといふことが、かれの神經を不健全にした。今でも、をりをり名狀し難い恐怖が何處から來るともなくかれを襲つた。と思ふと、一方ではこの大計畫に對する意志が敢然として頭を擡げた。兎に角前進するより他爲方がない。と思つた時には、體は疲れて居りながら、生存に對する燃えるやうな勇氣が蘇つた。そしてこれが恐ろしい恐怖の念と戰つた。

しかし體も精神も夥しく勞れてゐるのをかれは見た。それに、夜も初めのやうにぐつすりと熟睡するこ

でなければ、かう幾日も同じやうな地形と同じやうな密林と同じやうな山岳とを見てゐるわけがない。とうの昔に、探檢隊の露營した第三泊地點か第四泊地點に達しなければならない筈である。少くとも地圖の面にあらはれた面積は歩いて來なければならない筈だ……。かう思ふと、かれは不安で不安で爲方がなくなつた。

地圖ももう力にならないやうになつた。こればかりは命の綱とも思ひ寄縋る柱とも思つた地圖が、これさへあれば何んな處でも突破することが出來ると思つた地圖が……。いくら同じところを繼ぎ合せて、同じコントルの線の曲折を繰返して研究して見ても、無限の山岳と無限の空虚とが依然としてかれの前に横つてゐた。それに執念深く雨が降つた。もう自分では雨の降つてゐるのをさう深く意識してゐなかつたけれど、それでも寒氣と濕氣と歩く度にバタ〳〵する桐油とがをりをりかれにそれを思はせた。それに、殘つた米ももう一度か二度しかなかつた。昨夜の露營は成だけ節約するつもりで、二合位しか飯を焚かなかつた。續いてかれは昨夜の露營の慘澹たる光景を頭に浮べて見た。寒くつて寒くつて爲方がないから、焚火をつくらうと思つて燃料をさがしたけれど、何も彼も濡れてゐて物の役に立たなかつた。それに一番困つたのは、マッチの濡れて發火しなくなつてゐたことであつた。いくら摩つても摩つても火がつかない。あたりは忽ちマッチの殼の白い堆積をつくつた。かれは絶望して茫然としてゐた。此時、ふと雜嚢の中に蠟マッチがあることを思ひ出した。急いで取り出して摩つて見ると、果して發火

滴がぱらぱらと自分の桐油の上に音を立てる。洋服の下まで雨が染み込んでゐるので、ぞく〱と體が寒い。腹が減つたやうでもあるが、さうかと言つて、冷たいあの飯盒の中の飯を食ふのかと思ふと、イヤ氣がさして來る。

體には恐ろしい熱があるやうな氣がし出した。『こんなことでは爲方がない。まだ前途遼遠だ。』かう思つて勇氣を鼓舞して見るが、それもほんの暫しの間で、すぐぐつたりとなつて了ふ。

ふとまたこの恐ろしい山脈を首尾よく向うに突破した時の光景が、すぐその眼の前にでもあるかのやうに、はつきりと浮んで來る。前にはひろ〲とした山脈が見える。しかしそれはもう自分の越えて行く山脈ではない。自分の志した山脈は旣に完全に突破して、自分はその下に見える村の中に一歩一歩入つて行かうとしてゐる。自分は限りなく得意である。凱旋した將軍か何かのやうな氣がしてゐる。不圖、忘想の鏈が切れる。密林、密林、何處を見わたしても深い深い密林である。密林と山岳との牢獄である。何うしても、いかにもがいても、いかに焦つても到底出ることの出來ない穹窿である……。かれは泣き出したくなつた。

十

自分の持つてゐる磁針も測高器も何も彼も皆なまちがつてゐるのではないかとかれは疑ひ出した。

に思はれるやうな位置である。岩石が到る處にごろごろと轉つてゐて、それを一つ一つ越えて行くのであつた。時々凄じい風が來て、かれを天上に卷き上げるかと疑はれた。

十時過ぎには、再び密林の中にかれはその姿を發見した。何うかして開けたところへ行きたいと思つてゐるのであるが、運わるく、岩石の斜坂の先が高い絕壁になつてゐて、それから先きには、何うしても行くことが出來ないので、爲方がなくかれはそつちの方向を取つたのである。

磁針で計ると、その取つた路は南々東を指してゐるといふことが知れた。

密林の中を辛うじてたどつてゐるかれの心は、不思議にも種々さまぐ〵な妄想に滿たされてゐた。種種の光景が現はれたり消えたりした。そしてそれが大抵遠い過去のことであつた。稚い頃、城址で友達と一緖に遊んでゐるさまが見えるかと思ふと、何處か池のある二階屋の欄干で、自分はある女と話をしてゐる。その女の誰であるかは、はつきりわかつてゐるのであるけれども、につこり笑つたその顏もそれとはつきり見えるのであるけれども、何うしてもその池が、二階屋がわからない。何處だかわからない。またその時が何時であつたかわからない。十年前のやうにも思はれるし、つい、三四年前のやうにも思はれる。と、不意に叔母の顏が見え出した。眼の下のところに大きなほくろのある叔母の顏は、にこにこ笑ひながら自分に向つて何か言つてゐる。自分の今此處を步いてゐる心が、無線電信のやうなものになつて、直接に叔母の心に向つて話をしてゐるやうな氣がする。と思ふと、木立から落ちる大きな雨

らない身だ。萬難を排してこの山脈を突破する筈ではなかつたか。それより他に、貴樣の行くべき道が開けてゐないのを貴樣は忘れたのか。雨が何だ。風が何だ。密林が何だ。さういふ困難は豫て覺悟の上でこの山の中に入つて來たのではないか。』

かう獨りで叫んだかれは、荷物を負ふとそのまゝ、骨の折れた蝙蝠傘を開いて、吹頻きる風雨の中を衝いて出て行つた。

しかしまだ一時間と經たない中に、かれの勇氣と決心とを鈍らすべき幾多の困難がつゞいて起つた。第一、あたりが開けてゐるので、風が強く、蝙蝠傘を開いてゐることが出來なかつた。次に、霧が深く一間先もわからぬまで封じてゐるので、唯々自分の持つた磁針をたよりに進むより他はなかつた。路であれば、またそれでも勇氣を恢復することが出來たであらうが、今はもう人の跡といふ跡は、殆ど跡を絕つて了つてゐた。唯々步行の速力と時間と磁針とそれより他に賴るものはなくなつた。

彼は今は全く體の風雨に曝されるのに任せた。帽子から胸、背、手足、すべてびしよぬれである。背負袋も荷物も上にかけた桐油を透してすつかり濡れた。ぼんのくぼの髮からは、雨が氣味わるく背中へと傳つて落ちた。

かれは唯步いた。

それは丁度森林帶から一步上に當つてゐるやうな處であつた。晴れた日ならば多少の展望がききさう

れは冷めたい飯を食ふと、そのまゝ火を燃す元氣もなく、外套をかぶつて倒れた。すぐぐつすりと寢込んで了つた。

九

その夜凄じい雨が來た。

かれはそれをも知らずに、ぐつすりと疲れ果てゝ眠つたが、眼が覺めると、もう夜が明けて、樹が鳴り、林がざわつき、凄じい雨が槍のやうに土砂降りに降つてゐるのを見た。かれは喪心した人のやうにぼんやりと唯それを見詰めた。

深い霧だ。殆ど一間先も見えないと思はるゝばかりの霧だ。それに、風もかなり強く吹いてゐて、ちぎれちぎれに山の上を霧の飛んで行くのが見える。

かれはかうした風雨の中にも、此處に留つてゐることの出來ない自分の運命を凝と見詰めるやうにした。かれはぼんやりとしてゐた。このまゝ入つて來た路を戻つて行かうかとも考へたが、そのあとから、『それにしても、今日は幾日だらう?』と思つて見た。七日、それとも八日か、それとも九日か。

突然かれは立上つた。

『馬鹿! 貴樣は何うかしてゐる。そんなことで何うする。兎に角、貴樣は此處を突破しなければな

えてゐた。一夜は洞穴の中に暮した。そこでかれは殘つた米を調べて見たことを覺えてゐる。幸ひに、何處の露營地でも、水だけは不自由しなかつたが、其時始めてその附近に水のないのを發見して、それを探すために、五丁も六丁も熊笹の中をわけて下つた。その時悲しさと辛さとをかれは繰返した。

人間の智慧では測り知ることの出來ない神祕が彼の前に橫つて來た。急に凄しい恐怖がかれを襲つた。密林、熊笹、岩石、凄じく高く聳えた山、天地はすべてそれで滿されて、何處まで行つてもそれが盡きないやうにかれには思はれ出した。到底自分はこの廣い深い山の中から永劫脫却することが出來ないやうな氣がし出した。

しかし水を搜し出して、水筒と飯盒とに一杯滿して、元の露營地點に戾つて來た時には、いくらか氣が落附いて、無意味なその恐怖からも離れて來てゐた。かれは自分で自分の頭を打つて見た。何うかしたのではないかと思つた。『疲れてゐるんだ。疲れてゐるんだ！』かう自分で言つて自分で慰めて見た。

ふとかれは自分がT村を出てから、もう幾日山の中にゐるのだらうと思つた。

『三日かしら、四日かしら。』かう自から反問して見たが、はつきりした答はかれの頭から出て來なかつた。

『或は五日かも知れん。あの崖の下と、川の緣と、それから林の中と……』かう考へたがあとがわからなかつた。『止さう、止さう、何うかしてるんだ、今日は……。頭がわりいんだ。』かう思つて、か

かれのたどつて來た方向は、一直線を成して、かなりに分明と思ひ浮べることが出來たが、それからは、曲線と渦線とが入り亂れて、思ひ出さうとしても容易に思ひ出せなかつた。向うに頭をちよつと出してゐるのは確かにN岳で、その此方がO岳であるが、O岳とI岳との間を何うたどつて此處までやつて來たか、そこは胡亂になつて一寸その道筋が思ひ出せなかつた。

兎に角自分のこれから取つて行かなければならない方向を考へて、かれは南東に連亙する山の連嶺を眺めた。凄じい山又山である。何處まで行つたなら盡きるか分らないほどの山又山である。その前の大きい山をA岳と假定して、それから先に、まだ限りない大きな山と谷とが重り合つてゐるのをかれは見た。

O岳の頂上に立つた時のやうな壯快な感じは、もうかれには起らなかつた。かれは獨りこの山奥の無人の境に立つてゐる孤獨のさびしさの犇々と胸を襲つて來るのを覺えた。

それは丁度長い人間の一生のある苦痛の一地點に達したやうなさびしい悲哀の情であつた。かれはあらゆる人間に對しての言ふべからざる憧憬と愛着とを感じた。かれは四日も五日も人間の姿にも聲にも接しなかつた。もし其處に、誰でも人間があらはれたなら、かれは抱き着いて聲を擧げて泣いたかも知れなかつた。

明るい山の頂上に躊躇つたかれの頬には、二條三條涙が流れた。

それからかれは其日も一日岩石の間を縫つて歩いて、A岳の南の裾を掠めて、東に出て行つたのを覺

餘り度々展げるので地圖はもうくしやくしやになつてゐた。昨日、崖を登る時に引かけた洋服のほころびは廣く口を明いて、赤土の泥土がそのところどころに附着してゐた。繻子の背負袋の半面が線を成して切れてゐるのは、ある谷から谷へわたらうとする時、尖つた鋭利な石に引かけた跡であつた。路がなくなつてから、かれは思ひもかけない困難に遭逢した。熊笹の中はまだそれでも何うやらかうやら分けて通つたが、密林の中は一番閉口した。行かうと思ふ方向へは容易に行けずに、却つて思ひもかけない方に向つて進んでゐるのに氣が附いて途中からよく引返した。

ある時は谷に添つて、水の音をたよりに、半日ほども歩いた。探檢隊の三泊目にとまつた地點は、I岳とA岳との交叉した小さな谷のやうなところであつた。それをかれは第一の目標として進んだ。水の音が靜かに淙々としてきこえてゐる。ところどころ瀨をなして流れてゐるのが見える。赤く屹立した絕壁が見える。そしてその絕壁の近くから川はかれの持つた磁計の示す方向とは丸で違つた方向を取つて流れて行つてゐるのを見た。

午前だけ非常によく晴れた日があつた。その時は、かれは兎に角方向を定めやうと思つて、前に聳えてゐる丸い形をした山へと登つた。此山の標高はかれの持つた測高器では二千百七十米を示してゐた。頂上からはかなりによくあちこちが展開された。O岳の頂上で見た壯觀よりは更に一層すぐれた山嶺の連亙を見た。そこで始めてかれはA岳と信じられる大きな山を發見した。O岳あたりまで來る間は、

その小さな谷川に水を汲みに行つたかれは、川に臨んで長い間立つてゐた。綺麗な水は靜かな聲を立てゝ岩石の間を繞り繞り流れた。不思議にもかれにはその流が非常になつかしく感じられた。この川は流れ流れて、支流から支流へ、又その支流からK川の本流に流れ込んで、そしてF川に落ちて、東海の波に注ぎ込むのであつた。世間を遁れて來たかれの心は、不思議にも矢張世間にまつはりついてゐるのであつた。

八

二日三日は同じやうにして過ぎた。もう路らしいものはとうになくなつてゐた。爲方がないので、かれは成るべく展望のきく草原や、藪や、谷の縁や、さういふ處を選ぶやうにして歩いた。行く先の方向についての心勞と、果してあと幾日でこの深山の重圍の中を脱することが出來るだらうといふ不安が、背に負つた米の一日一日輕くなるのにつけて重苦しく胸を惱した。路がなくなつてから、歩行についての自信も次第に不確實になつた。時計で計つて見ても、果してそれが正しいか何うか信用することが出來なかつた。順序から考へれば、もう餘程奥深く來てゐなければならない筈である。NT山、A岳、I岳、この中をずつと深く入つて行つた筈である。しかしA岳の位置はまだはつきりとわからなかつた。甲州から來た大探檢の三泊目の露營地に近く來てゐるに相違ないのであるが、何うもそれが分明しない。かれは疲れた脚を曳きながら、處々に立留つては、地圖を展いてそれに見入つた。

て、眞直に東を指して、熊笹の間をわけて下つた。

午後からは、再び全くわからない密林の中に入つた。かれは絶えずその方向を磁計と地圖とに計つて進んだが、何でもその密林はひろく大きくNT岳の方までつゞいてゐるらしい、容易にその重圍を脱することが出來なかつた。

疲れて來ると、時間の非常に早く經過するのを彼は感じた。それに、今日の路は非常に勾配が急で、下るよりも上るところの方が多かつた。ある時はかれは板を立てたやうな急坂に喘いだ。ある時は一間先きもよくはわからないやうな人を蔽ふ熊笹の大藪に邂逅した。

駒鳥が頻りに鳴いた。しかしその聲は里近い山あたりできくのとは丸で變つて、調子に疎野な人馴れない急調があつた。キ、キ、キ、キといふ風に聞えた。それにその數が非常に多かつた。何だかいやに無氣味な不愉快な氣がして來た。

その日は、幅のさう廣くない谷川の岸の藪陰の平地で日が暮れた。何うも天氣が面白くない。もつとからりと晴れなければならない筈だが、何うも晴れない。地圖では、丁度O岳の南東二三里のところに位置してゐる小さな谷川のほとりらしく思はれるが――東N川の一支流の又一支流のやうに思はれるが、展望がきかないので、何うもそれがはつきりしない。爲方がない。その研究は明日にしよう。かう思つて、そこに其夜は露營する覺悟をして、樹の繁つた幹のところに位置をきめた。

合せて研究して見ると、あの雲の湧いてゐるのがK岳であり、その東に連つて大きく裾を引いてゐるのがS岳であり、それと殆ど相並行して、肩のところをちよつと見せてるのがNT岳であるといふことがそれとわかつた。かれは自分が谷の縁を通つてそしてこのO岳へと登つて來たのであるのを明かに知ることが出來た。M谷は此處から見ると、もつとぐつと左に偏つてゐた。

谷といふ谷には、すべて白い乃至は灰色の雲が鼎のやうに湧き出して渦まき上つてゐた。何といふ壯觀であつたらう。谷に接して聳えてゐる連嶺、ところどころ雲の途切れた間から見える千仭の絶壁、深く人を呑まうとする崖谷、見てゐる中に、雲は此方の谷から向うの谷へと蓬々として靡いて行つた。

かれは尠くともそのO岳の頂上に一時間ほどゐた。かれは心臟の甚しく鼓動するのを感じた。それは意志の力の成功のある表現であつた。一面また至上の歡樂の樂しさに戰へる心であつた。卑屈の空氣の滿ちた役所の一間、都會の文明の雜音の喧しい叔母の二階、やせこけた街樹の緣の夏の日にあえぐ大通、それから停車場、汽車、野、山、それからずつと線を引いたやうに、かれの足跡がこの高山の絕頂にあるといふことを考へると、かれは堪らないほどの喜悅を總身に感じた。

雲はかゝつてゐるけれども、兎に角その山々の位置と連亙とをスケッチして置かうと思つて、かれはポケットから手帳を出して一々その谷と連嶺とのさまを描いた。

暫くかうしてゐると、雲が段々深く、あたりが暗くなつて來たので、さつきから研究した方向を取つ

一時間ほどたどつた高原から、路はひた下りに谷の方へと下つて行つた。かうまでも下つて好いのかと思はれるほどの下りである。それを下り切つた時には、時計はもう四時をすぎてゐた。密林がぢき近くまで靡いて來てゐるけれども、それでも、それには入らずに、熊笹の一面に茂つたところを路は通つて行つてゐた。何處か遠くで谷の鳴る音がした。

時計が五時半を示してゐた時、かれはある崖の下のやうな處に到着してゐた。丁度そこから半丁ほど手前に水のあるのを見て來てゐるかれは、兎に角そこで最初の露營をしようと決心した。何も急ぐことはない。かう思つてかれはその崖の下に背負つて來た荷物を下して、水を汲んで來て、まだ殘つてゐる結飯を食つた。夜は西の空がやゝ晴れて、眉のやうな三日月が向うの高い山の肩のところに懸つた。

寒いので、かれは矢張火を焚いた。それに、明日は朝早く立たうと思つたので、半丁手前の水のあるところに行つて、米を磨いで、飯盒に一日分の飯を炊いて置いた。

七

O岳の頂上に達したのは、その翌日の午前十時過であつたが、そこに達した時には、かれは思はず喜悅の聲を擧げた。それは尠くとも計畫中の第一步の成功であつた。それに、丁度運好く雲が晴れかゝつて、連嶺の一部がそれと指さゝれた。勿論、手に取るやうにとまでは行かなかつたが、地圖と磁針とを

筒のつめかへの出來ない中は、それを飮み盡さうとはしなかつた。米は半ば炊いたものと半ば炊かないものを用意して來た。

午飯はある林の途切れたところで食つた。それは丁度深い谷に臨んだやうなところで、地圖に據ると、その谷の縁をぐるりと廻らなければ、O嶽の南の側面へ出て行くことが出來なくなつてゐた。この谷は水の走向に由つて、N嶽を北に流れ出してゐる、K谷とは丸で別な谷をなしてゐるといふことは判つてゐるのであるが、しかもこれが地圖のS谷であるかそれともM谷であるか、一寸判斷に苦んだ。かれは草の上に地圖を三枚出して展げて、磁計を其上に置いて、長い間その方角を研究した。

兎に角南東に向つて進路を取らなければならないので、その縁を縫つて下つて行く路を取つて、高原のやうなところを一時間程辿つた。山に來ては、足に對する測定よりも時計の方が正確であつた。從つてかれは歩いて來た里程を時計の時間に依つて測定してそしてそれを地圖に合せた。

それに、路を失はないやうにすることが第一の急務であつた。尠くとも路は人の跡であつた。しかれは北アルプスの中で、路をたどつたために、出られない山を辛うじて出たことを繰返した。しかしその路も、その路にたよるといふことも、今日或は明日限りであるかも知れない。O岳などは登攀する路はあるが、それから先は地圖にも路は記載してない。それにS大嶽とNT岳と赤石山との間は、此方から行つて何うなつてゐるかわからなかつた。

天職を附與せられたやうにも思はれ、又その自然に對して人間の意志の力を何の點まで發揮することが出來るか、それをこの自分が試驗するのであるといふやうにも考へられた。さう思ふと、艱難は艱難でなく、苦痛は苦痛でなく、このまゝ千古不到の靈境にこの身は滅びても遺憾がないといふやうな氣がして來た。

幸ひに其日は半晴半曇で、山から山へと白い雲の渦まき上るのが見えた。半里ほどで山にかゝつたが、暫しが間は、眺望の好い開けた路で、重り合つてゐる山々の位置もそれと明かに指點された。肩のところの半見えてゐるのがN岳、長く裾を布いてゐるのがO岳、昨日越えて來た密林の上には鵬翼をひろげたやうな雲がふうわりとかゝつてゐた。

路は密林の中に入つたり、峠の鞍部のやうなところへかゝつて行つたりした。一二里の間は、それでも草を刈りに來た村の人に逢つたりしたが、段々奧深く入つて行くにつれて、さういふ人達にも逢はなくなつて了つた。嶮しい坂は坂につゞき、深い密林は密林に續いた。

しかし其日は餘り多くの困難に邂逅しなかつた。登つたり、下りたり、それが何遍となく繰返されたが、天氣が何うやら晴れてゐたのと、T村からK岳へ登る路がその半を占めてゐたのとで、割合に樂に、O岳の南の側面の谷深く入つて行くことが出來た。露營には水のないのが一番困ると豫ねて知つてゐるのでつとめて水筒には水を滿して置くことをかれは絕えず心がけた。渴しても水を發見しない中は――水

かれは其處で米二升を買つた。一日三合のあてで、十日の豫定で三升買はうと思つたが、荷が重くなるし、それに外套は防寒用に是非持つて行かなければならないので、一升減らして二升にした。一週間と思へば、大抵は間違はない。それに都合で、一日二日は延びたところで、鰹節があるから、それを噛つてゐても大丈夫だ。かう思つて、すつかり荷物を拵へて安心して寢た。

宿料三十錢、山はこれだから好いなどと思ひながらかれは宿を出た。養蠶期で、人々が忙しくなかつたら、この大冒險に就いて、多少注意を拂つたものもあつたであらうし、またその無謀を戒めたものもあつたであらうが、今は村ではそんなことを考へてゐる餘裕のあるものは一人もなかつた。旅舍の人達もこの洋服姿の孤獨な冒險者を唯の旅客を送るやうにして送り出した。

N岳にも思ひが殘つてゐたが、要するに、それは緒餘である。K岳の北方は、大計畫の上から言つて見てわざ〳〵日を費して見るほどのこともない。人も既に登つてゐるし、單獨にそれに上らうと思へばわけなく登られる。で、かれは其方の方は思ひ切つた。直下に奥千丈の方へと向ふことにした。

かれは一歩々々健實な脚を踏み占めつゝ村を離れた。

艱難と戰ふ前の戰慄をかれは總身に感じた。渾身すべてこれ膽と言ふことがあるが、この自分の今の心持を誰かに見せてやりたいと思つた。千古不到の靈境、其處には人間の知ることの出來ないある不思議な神祕なものが隱されてゐるやうにも思はれ、又その不可思議な神祕な大自然の扉をこの自分が開くべく

『兎に角T村には下らなけりやなんめい？』

かう背の低い一人が言つた。その夜はかれは穩かに夢を結んだ。

六

ある日の午後には、かれはI郡のT村の小さな旅舍に着いてゐた。この路はかれに取つては大して難儀には思はれなかつた。上りも少しはあるが、大抵は下りで、その三分の二は、川に添つての森林を樂に下つて行くやうな處であつた。

T村は深い山と山との間にあつた。軒先から白い雲が湧き、高い山は凄じく家々を壓した。かれの荷物を下した家は、半ば農家半ば旅舍と言ふやうな家で、上簇期の養蠶で皆な忙しがつてゐた。かれのゐた室の前には、小さな庭があつて、高山植物の赤い黄い色彩が美しく點綴されてゐた。庭のすぐ下は溪流で、瀨の音は屋を撼すやうにきこえた。

何うも天氣は思はしくなかつた。時々山の驟雨がやつて來た。時には碧空が見えもし、日影がぱつと射したりもするが、何うも雲の進行が穩やかでない。しかしかれはその大計畫の一歩をも後へ引かうとは思はなかつた。かれの性質には一種事業に向つて突進するところがあると共に、山に對しては、不思議にも或は神祕と言つても好い位に、强い愛と執着とを持つてゐた。

『おらも知らねえ。』背の低い男はかう云つてすぐ言葉をついで、『とても登れねえ、何しろ、そこまで行つて見りやすぐわからァ、お客さ、何しろかう、』形をして見せて、『かう切立つた山だでな、登るにも登りやッがねえだ。』

『さうかな。』

かうかれも斷念したやうな顏をして言つた。

山の人達は結飯を出して、口をもが〳〵させて食つた。火は赤く鬚の生えた顏を照した。かれ等はIの地方のもので、山葵を搜しに、もう二三日前からこの近所の深山の中を彷徨してをるといふことであつた。かれは段々打解けて種々な話をした。自分の名刺などを出してやつたりした。背の高い方はそれでも純然たる山人ではなく、多少は教育もある男らしかつた。かれが山脈横斷の大計畫の話をすると、『そんなことが出來ることかな、餘程、あるずら？　S縣の方へ出て行くまでは……何でも、赤石つていふえらい山があるつて言ふぢやねえか。』

かれはそれについて、二三年前に探檢した探檢隊の話などをして聞かせ、何うもそれでは滿足ではないから、奥千丈からずつとNT山、赤石と傳つて、大井川の上流か遠江かへ出ようとする話などをした。それを聞いた脊の高い男は、

『東京の衆は豪いな……皆な學問で、さういふ山登りをするだで。』などと感心したやうにして言つた。

『お客さん、いつ來たね？』

『一時間ほど前。』

『一人かね。』

かれは點頭いて見せた。

『Fから來たけえ。雨に逢つて困つたずら？　でもな、よく早く來られたな……』かう言つてかれの洋服姿を見て『旦那さ、山林のお役人さんかね。』

『なァに……』

かう言つて、東京から來た登山者の一人だと言ふことを話すと、『さうけえ、それはえらいこつた。奥千丈へ行くかね？　はゝァ、何うも、な、あの奥千丈つて山はな、誰も行つたつて言ふことをきかねえ山だで。』

かれは急に思ひついて訊いた。此處からN岳に登る路はあるまいか。あらば、もう一夜此處に下りて來て泊つても好いからと言つた。と、『N岳へは此處からは登れめい、一體あの山は險しいだで、それに崖の石が柔いで、すぐ崩れる。登ればまァ、甲州の方から登るだが、それも頂上までは行つたものはあんめい。』

地圖を見せると、『地圖にや、さう書いてあるかも知んねえが、何うも此處から登つたつて言ふ話はつひぞきいたことねえな？』かう背の低い方に向つて言ふと、

少し體を暖めたが、水筒の水が乏しくなつてゐたのに氣が附いて、いづれこの近所に水があるだらう、日の暮れない中にと思つて、外へ出て、彼方此方と搜した。かれはそれを搜すについては多くの時間を費さなかつた。とある崖の下のやうなところから矢張此處に泊る人が常に用ゐるらしい清い水がちよろちよろ湧いてゐるのを發見した。かれは水筒に一杯入れて持つて來て、包の中に外套と地圖と一緒に背負つて來た軍隊用の飯盒を出して、それに移して、焚火の上にかけた。

熱い湯を呑み、結飯を食ふと、これで體の疲勞は除れて、生返つたやうになつた。かれは濡れた洋服を火に干した。

一時間ほど經つた。すつかりもう夜である。と、不意に人聲がした。耳を欹てゝゐると、熊笹をガサガサわけて此方にやつて來るやうな氣勢がした。やがて戸が明いた。

山人らしい鬚面が二つ其處に現はれた。

『ヤア、お客さんがゐら？』

かう言つて背の高い方が平氣な顏で入つて來た。あとから背の低い方が續いた。

『これは旨い、暖い火も出來てらあ。』かれ等は少しも人見知りもせずに、十年も前からの知合でもあるかのやうに其處に寄つて來て話した。『えらい雨で、すつかりぬれちやつた。』一人はこんなことを言つて衣服を焚火に當てた。かれ等の持つたびくには、山蕈が八分目ほど入つてゐた。

ろであつた。それは丁度路から林の中にちよつと入つたやうなところにあつた。一番先に竹の皮や焚火の跡や人の休んだらしい跡が眼に着いた。はてなと思つた。Ｙの小屋はこの近所ではないかと思つた。ふと眼を上げてかれは周圍を見廻した。

林の中の小屋がふと眼に入つた。

急いで熊笹をわけて其方に入つて行つて見た。確かにＹの小屋だ。小さい低い小屋ではあるが、周圍を板で張つて、中は板敷になつてゐる。火を燃して人の泊つたあとがある。羽目にはこゝを越したものの姓名などが書いてある。

『上等だ、上等な小屋だ。』

かれはかう喜んで叫んで、取敢へずその中に入つた。何とも言はれない勇しさと生々しさとを感じた。疲れてはゐるけれども、そんなことは苦にもならなかつた。今夜一夜、此處で、この深山の中でひとり寢られる。かう思ふと、何ともかとも言はれない氣がした。世の中に歡樂は多い。自分等の知らない歡樂は多い。しかしこんなに愉快な面白い樂しいことがあるだらうかと思つた。

しかし、いかにしても寒いので、これは先づ火を焚かうと思つた。幸ひに、小屋の中には濡れない枝だの木だのがあつた。マッチを摩ると、すぐ火がそれに燃え移つた。日の暮れかけた山の周圍に、明るい火がぱつと照つた。

比ぶればまだ何でもない。

ふと氣が附くと、自分の着茣蓙が濡れてゐる。雨は大降りになつたらしかつた。で、かれは腰にさした蝙蝠傘を取つてそれを開いた。あるところで見ると、N岳と思はれるあたりに、黑い凄じい雲が怪物のやうに簇り立つて、確かに驟雨が到來してゐるらしい氣勢がした。それも瞬く間で、やがて凄じい大粒の雨が降つて來た。

五

でも、何うやらかうやら、Yの小屋と地圖に符號のつけられてあるところまでかれは到着した。もう日は薄暮に迫りつゝあつた。自分の持つた測高器は千八百米のところを示してゐた。

馬鹿に寒い。これも雨に濡れた故だと思つた。驟雨に逢つたところからは、ずつと雨に降られ通しである。勿論その間に一時小降になつた時はある。密林が暫しの間途絶えて、N岳の裾と思はれるあたりがそれと微かに見えた時はある。その時見たN岳の位置は、今まで正面に面して來たとは違つて、餘程側面になつてゐるやうに思はれた。その位置と地圖とを合せて、かれはYの小屋のもう近くなつてゐると言ふことを判じた。時計はもう五時半だ。

Yの小屋がこんなところにあるとは思はなかつた。もう少し注意しないと、そのまゝ行つて了ふとこ

度の近眼鏡をかけてゐたが、その眼にはぐぢや〳〵した土と、青苔と、處々に出てゐる大きな木の根と、によきによき立つてゐる栂の大木の幹とが映つた。

もう人には誰も逢はなかつた。しかもその間に障壁のやうに立てられた坂が二三ケ所あつて、それを上つては又下つた。下つたところには、ちよろ〳〵水の流れ出すところがあつて、其處で誰か休んで辨當を使つたと見えて、竹の皮などが白くあたりに散らばつてゐた。

ふと氣が附くと、熊笹の尖が光つて濡れてゐる。

『雨になつたな。』かう思つて、かれはあたりを見渡した。木立の間は白く茫としてゐる。何も見えない。さうかと言つて、まだ深い霧がかゝつたやうな樣子も見えない。耳を澄して見たが、何の音もきこえて來ない。確かに左に流れてゐる筈のK川の瀨の音もきこえて來ない。N岳の姿もそれと指點することが出來ない。爲方がないので、かれは唯路を傳つて、先へ先へと歩いた。

少し明るくなつたと思つた。これで、一時密林が途絕えるかも知れないと思つた。しかし、それは空賴みで、矢張行つても行つても林は盡きなかつた。

密林の海！　さういふ言葉がある。成ほど海に似てゐる。沈默した林は凪ぎた海によく似てゐる。こんなことを思ふと、北アルプスの深い林の中の一日が思ひ出された。事業、自己の事業、この密林を突破するのが自己の事業である。かう思つて忍耐して歩いたことをかれは繰返した。こんな林はあれに

の符號で知つた。

もう一度村の方に眼をやつたかれは、そのまゝ立つて歩き出した。

急に路が細くなつて行つてゐるのをかれは見た。此處までは石灰を停車場へ運び出す運送車が來るので、路も廣くつくられてあつたが、其處からは急に狹い山路となつた。熊笹がそろそろ兩側に現はれ出した。

かれの歩いてゐる路は、猶ほ一方深谷に臨み、一方林に添つたやうなところであつた。N岳が雲の巴渦の中にまたすつかりその姿を沒して了つた。小さい鞍部のやうなところを越えると、忽ち路は深い密林の中に入つた。

四

始めの中は左の谷がそれと指點される位置にゐたが、少し行くと、すつかり深い栂と落葉松の密林になつて了つて、もう何も彼も見えなくなつた。N岳もK川も、乃至は後に聳えてゐたY岳も、何も彼も……。熊笹は次第に深くなつて、半里も來たと思ふ頃には、殆ど人肩を沒するばかりになつた。しかしかれは密林に就いては別に大した恐怖も不安も抱いてゐなかつた。深い熊笹を半日分け歩いて行つたこともめづらしくはなかつた。唯、不愉快は不愉快だ。あたりに何も見えないのが佗しかつた。かれは強

の帶をしめたイヤに艶かしい女などが二人も三人もゐた。どてらを着て胡坐をかいて酒を飲んでゐる男もゐた。

お休所とか休憩所とか御料理店とか拙い字で障子に大きく書いてあるのがかれの眼に映つた。ある家の前では、子供が泥濘の中にころんで泣いてゐるのを母親が小言を言ひながら起してゐた。鷄が一羽二羽餌をあさつてゐたりした。

何處かで休まうかと思つたが、無駄だと思ひ返して、そのゴタ〳〵したHといふ村をかれはいつか通り拔けて行つた。氣が附くと、その赤い爐と黃く白ちやけた烟の出る烟突とは、もうその眼下になつて見えてゐた。それに、坂は嶮しくなりつゝあつた。かれは又立留つて村の方を眺めた。

これがこの方面での最後の村であるといふことをかれは思つた。何となくさびしい氣がした。

かれは向う側のI郡の村までの路を調べやうと思つて、路傍の草の上に蹲踞んで、包の中から五萬分の地圖を三枚ほど取出した。この路はこれまでにかれは既に幾遍となく硏究した路であつた。N嶽に登る路があれば二夜、なくつて眞直に行くにしても、一夜は何うしても山の中に露營しなければならなかつた。地圖にはその地點にYの小屋といふ字が入つてゐる。村の人の話でも、そこには小屋らしいものがあるらしい。鉛筆を地圖に當てゝ、その里程を量つて見た。五里は十分にある。ことに由ると、六里はあるかも知れない。かう思つたかれは、またその附近が深い深い密林の中であるといふことをその地圖

る自分を見た。その自分と此處にゐる自分と、これが同じ人間であらうか。

『それにしても何といふ大きな自然だ。千萬億年を閲して、尙寂としてその形を保つてゐる自然！』

かう思ふと、氣が伸々して、人間の短い一生などは何うでも好いやうな氣がした。かれは雀躍して、眺望の好い高い路を一步一步登つて行つた。

ふと崖に凭つて赤い大きな土製の爐のやうなものが見えた。赤い烟突から黃く白つぽい烟の颺つてゐるのが見えた。段々步いて行くと、それと同じ爐、同じ烟突、同じ烟が其處にも此處にも見え出して來た。切り取つたやうな赤ちやけた崖が見え出して來た。續いて低い汚い茅葺瓦葺の不整な人家が崖の下の猫の額のやうな狹い處にゴタ〳〵と固つてゐるのが見えた。午近い日影が明るく繪のやうにそれを照した。

運送車が二臺も三臺も其處から出て來た。馬に鞭を加へてゐるものもあれば、坂をかけ出す馬の手綱をグイ〳〵引張つてゐるものもある。掘立小屋のやうな小さな工場の幾つと數限りなく續いてゐる處からは女や子供がぞろ〳〵と大勢出て來た。

かれは地圖を展げた。

そこはHの石灰を燒くところであるといふことがすぐわかつた。かれは下りて行つた。人はじろ〳〵とかれの方を見た。かれはある工場から顏も手も眞黑にして出て來る男と、それと話をしかけてゐる髮を無造作に束ねた女とを見た。思ひもかけず料理店などがあつた。其處には白粉を白く塗つてメリンス

うにして聳えてゐる。瀨の鳴る音が四邊に反響して聞えた。
かれはまだをり〳〵運送の車の上から下りて來るのに逢つた。そしてその度に、かれは路を避けてそれを通した。運送の車は何れもこれも皆な一杯に石灰を積んでゐた。車の轍の跡は深く長く路に喰込んで續いてゐた。

かれは時々立留つて世間に流れ落ちて行く川を眺めた。喧しい雜言の中から、不愉快な煤烟の中から、虛僞と不正と瞞着との人間の中から、表面は華やかで裏面は暗黑な文明の中から、一步一步、町を過ぎ、野を過ぎ、村を過ぎて、漸くこゝまでやつて來たことを考へた。續いてまたかれはこれからかれの前に橫はつてゐる濶く深く寂寥としてゐる大きな自然を頭に描いた。自然の結果として自分の立つてゐる位置と言ふことがひとり手に考へられて來た。

愉快で、自由で、心には堪らなく生の喜悅が溢れた。あらゆる小さいもの卑しいもの汚れたものから離れて、始めて自分の持つてゐる本當のものに觸れたやうな氣がした。かういふ瞬間があるので自分は生きてゐられるのだと思つた。それに比べて、都會の中にゐる自分は何んなに小さな卑屈なものであるだらう。かれは役所の大勢の同僚の中に小さくなつてゐる自分を見た。上官の前に鞠躬如として進退してゐる自分を見た。雨のそぼふる中を腰辨の群に雜つて慘めに步いて行つてゐる自分を見た。叔母の二階の一室につまらなく欠伸をしてゐる自分を見た。自分を欺いて權勢に靡いて行つた女の姿を呪つてゐる

『Ｙの小屋からＮ岳に登れさうだが、そこに路はあるかしら？』地圖を見てから、かれは訊いたが、誰もそれを知つてゐるものはなかつた。

麓の村の人々の話などは、いざと言へば、間違だらけで、却つて迷誤を生ずるもとだといふ自信を持つてゐるので、かれは深くその附近の地理に就いて訊かうとも思はなかつた。村で何人と言はれる獵師達でも、何うかすると、全く案内の役に立たないことがこれまでにも度々あつた。其處に行つては地圖で、いつも地圖がかれ以上にかれに正しい地形を教へた。これさへあれば……磁針とこの地圖とさへあれば……。

鰹節がこれで五本、精分をつける時の玉子、それに主婦のつくつて吳れた大きな結飯を長い黑繻子の背負袋の中に入れて、それを斜に背負つて、健脚を試すやうに二三度脚を踏み試みた。かれは金を拂つて出掛けた。

三

間もなくかれはＫ川の谷の畔へと出た。もう路は高く高くなつて、谷の中には、大きい石の轉つた廣く深くゑぐられた一條二條白い瀨の湧き立つて流れてゐる大きな川のあるのを見た。向うは削り立てたやうな千仭の絕壁である。鋸の齒のやうな峰頭の不規則なＮ岳は、前に當つて、その大きな谷を塞ぐや

『それはえらいことだな……』亭主はかう言つたきりで、默つてかれの顔を見てゐた。暫くしてから、
『でも、釜無から入つて行くには行くずら？』
『それはさうだがね。』
『鰹節も鰹節だが、それぢや結飯などもいるずらが、持つてるかね。』
かれはちよつと考へたが、『これから先に、まだ村があるだらう？』
『Hッて言ふ處があるけれど、……そこぢや、結飯なんか拵へて呉れる處なんかあらずと思ふがな。』
『ぢや、二食分ほど拵へて貰ふかな。』かう言つたかれはまた腰を下した。かれはポケットから地圖を出して、熱心にそれに見入つた。
急に首を上げてかれは訊いた。
『IのT村へ行つたことはあるかね？』
亭主は鰹節を箱から出してゐた手をとゞめて、『Tかな、己ァねえがな。何でもそこまで行くにも、山ん中で、一晩泊んねけりやなんねいずら。』運送の車力の方を顧みて、『おめいら行つたか？』
其中の一人は言つた。『俺ァ、四五年前に行つたことがあるが、えれい處だな。途中で路を間違へて林の中へ入つちやつて……それやえらい眼に逢つた。あそこいらは、すつかり木立だで、迷ひ込んだら大變だ。』

『此處らで、鰹節と玉子を賣つてゐる家はないかね。』

茶を飮んだり飯を食つたりしたあとで、かれは訊いた。

『あるにはある……もう少し行けば、向うにもある。けども、家にもあるから、わけてやつても好いだ。』

『それぢや鰹節を三本ばかりと玉子を十ばかり貰ふかな。』

しかし亭主も上さんも不思議さうにしてかれの方を見た。

『鰹節なんか、何うするだな？』

やがてかう亭主が訊いた。

『山へ持つて行くんだ。』

初めて分つたといふ表情を亭主はして、『おめいさ、山さ行くんかね。』

『さうだ。』

『釜無さへか？』

『いや、もつと奥だ。』

『K嶽へ行くのかね。』

『や、もつと奥だ。奥千丈からS縣の方へ出て行く積だが……』

は段々その村の人家の方へと入つて行つた。

子供達が遊んでゐた。氣が附くと、今日は日曜日であつた。この次ぎの日曜日までには、遲くもこの大山脈を突破して、向う側に出なければならないと思ふと、かれはわく〳〵した。體がきうとあるものに緊められるやうな氣がした。

N嶽が漸くその半面を村の人家の上に見せて來た。

小さな八幡宮らしい祠があつたり、半鐘臺が立つてゐたりした。今は養蠶の盛りで、何處の家でも忙しいと見えて、通りに出て彷徨してゐるやうな人は何處にも見かけなかつた。やがて大きな栃の樹があるところへ來た。

其處に飮食店らしい家をかれは發見した。兎に角かれは此處である食料品を買はなければならなかつた。それに、此處等できいて見ても碌なことはわかりはしないけれど、兎に角山のことを聞いて見ようと思つた。かれは入つて行つた。

運送の車力が二三人かれより先に其處で休んでゐた。

眞中に草鞋で踏込めるやうな圍爐裏が出來てゐて、黑く光つた大きな鐵瓶が自在鍵で天井から吊つてあつた。自在鍵の中心には、此處等で流行る火除の大きな鯛の刻んだのがついてゐて、それで自由に鍵を上げたり下げたりするやうになつてゐた。亭主らし五十男がそこに坐つてゐた。

扺車の後に腰をかけて、のんきさうに唄を唄つてゐた。
草の茂つた國道、小さな音を立てゝ流れてゐる溪流、上に連つた山畠の中からは、桑を摘む女の靜かな聲で田舍唄を唄つてゐるのが聞えた。ある路の角では、襤褸を着た鼻の尖のイヤに赤い百姓が肥料桶をかついで來るのに逢つた。
『S村へは？』
『そこを行つて、五六丁行つたら、右へ入るだ。』
かう其百姓は教へた。
K嶽は見えたり隱れたりした。右に連つてゐる山はくつきりと碧く晴れてゐるのに、N嶽は未だに渦まき上る雲に包まれて、容易にその全面をかれの前に現はさなかつた。五六丁行くと、果して百姓の言つた通り、右へ入る路がある。細い路である。草なども生えてゐる。かれはそれを傳つて、長い丘を此方から向うへと越えて行つた。形の面白い松林などが遠く見えた。
やがてかれは山裾に凭るやうにして、茅葺板葺の人家が參差として連つてゐるのを見た。白堊の土藏が二三、日に照されてゐるのも見えた。遠い畑に行く百姓が二三人揃つて此方を見い〳〵行つた。あるところでは上さん達が二三人手を留めて休んで何か話をしてゐた。
S村の入口には、綺麗な小さな谷川が流れて、草原の中に深い紫色をした山桔梗が咲いてゐた。かれ

『大丈夫だ、大丈夫だ。それぢや、山を出たら受取るやうに、S郵便局に宛てゝ小包にして出して置いて下さい。』

かう言つてかれは勇んで出て來た。

甲州の盆地を汽車の通る頃は、雨が降つてゐた。雲も深かつた。『なアに、雲や雨を心配してゐては山登りは出來ん。此處で降るのも、山の中で降られるのも同じことだ。』かう言ひながらもかれは天氣になれば好いと思つてゐた。密林の中の雨、雲、その恐ろしいのもかれは知つてゐた。

それが、F驛に下りると、雨が止んだばかりでなく、碧空が處々に見え出して來て、N嶽とK嶽の前峰とがはつきり雲の湧き上る中から指さゝれた。かれは胸の痛くなるやうな快感を覺えた。かれは急いでS村の方へと向つた。

N嶽とK嶽との間には、大きな川の流れ出してゐる深い谷があつた。そこからかれは今度の登山の第一歩を始める豫定であつた。かれは路傍に立留つて、ポケットから五萬分の地圖を出して、それを展げて道筋を調べた。林を透して來る午前の爽やかな日影が、洋服に着吳產姿のかれをくつきりと照した。

二

二條の深い轍のあとのついた濶い路を運送の車は何臺も何臺もかれを掠めて通つて行つた。車力は大

前にはK氏とT氏が大規模の探検隊を組織して、甲州から四泊乃至五泊の豫定で、米やら味噌やらを澤山に用意して出懸けて行つた。その探檢の報告は、彼は殊に注意して讀んだ。先づ一鞭を著けられたやうな氣がした。かれは地圖を展いた。その時、かれの胸にある計畫が歴々と描かれた。『さうだ。これを一つやつて見よう。先生方のやつたのは、此方から向うに横斷して行つたゞけである。それでは面白くない。自分はその山脈の背を傳つて、信州から甲州、遠州の方へ出て行つて見よう。なアに、案内者なんかいらん。食料だつて、さう大袈裟に用意して行かなくつても好い。地圖――五萬分の地圖、それに、鰹節、その他少量の食物があれば足りる。紳士的に、金を使つて、大勢人足をつれて行けば誰にだつて出來る。』かう思つたかれは、二夜を北アルプスの山の中に送つた一昨年の大冒險を頭に描いてゐた。艱難に艱難を重ねて辛うじてS谷の方へ出て來た時の愉快であつた時のことなどを想像した。

登山に就いて十分自信を持つてゐるかれは、今度いよ〳〵それを實行するに就いても、別に準備と言ふほどの準備もしなかつた。人にも多く話さなかつた。

『休みになつたから、また一つ山登りをやつて來るよ。』

かう手輕に叔母に話した。水筒、着茣蓙、杖、カンジキ、飯盒、地圖は五萬分を包みになるほど背負つた。

『注意しなけりやいけないよ。』

かういふ叔母の言葉に對して、

しかしその二階の一間に入つたものは、誰でもすぐかれの持つた唯一の趣味を知ることが出來た。室には登山についての著書、雜誌、地圖、晴雨計などが一杯に置かれてあつて、一方の壁に水筒のかゝつてゐると共に、一方の壁にはかれに取つて記念の多いカンジキや杖などがかかつてゐた。長押には日本アルプスの大景を寫した大きな寫眞が黑い額緣に入れられて美しく懸つてゐた。

かれはその一室の中で常にさうした種類の探檢記に讀み耽つた。五萬分の地圖がをり〳〵室一杯に展げられたりした。ある山脈からある山脈へ。千古人跡の至らない山脈へ。大きい深い不可思議な自然の懷へ。かう思ふと、かれは堪らなく血の湧き返るやうなのを覺えた。そこには削り立つたやうな千仭の絕壁がある。その絕壁は日本の中心の脊髓を成してゐる一角である。一番高い屋梁を二里も三里も乃至は五里も下に、深い深い一步過てば落ちて粉碎して了ふやうな深い谷を眺めながらたどつて行く。そこには低い蔓延松が遠くから見ると苔のやうにつゞいて生えてゐる。雲はもう自分よりぐつと下に靡いてゐる。その下に谷があり、谷川の瀨がある。世間に出るには何うしてもそこから三日も四日も險しい山路を登つたり下りたりしなければならぬ……。それを思ふとかれは堪らなくなつた。

北アルプスは既に跋涉した。恐らくK氏といへども、其方面の知識についてはかれに及ばぬであらう。T嶽からS嶽へ踰えて行く深谷、そこを突破したのは恐らくかればかりであらう。これからは南アルプスである。其處にも既に大勢の登山者は登つて行つた。N嶽を窮めたM氏、K嶽を突破したP氏、二三年

山の悲劇

一

F驛に下りた時には、雲の間から碧い空が處々見えた。好い鹽梅だと思つた。これではすつかり天氣がきまるかも知れないと思つた。停車場前のさびしい町を拔けて、眞直に山の翠微に面したかれは、言ふに言はれない爽やかな氣分を感じた。

かれはOと言つて、ある役所の屬官であつた。年齡三十三歲、無妻、無子、無家庭、俸給三十五圓。父母もなく、同胞もなく、身賴とては唯一人父方の叔母があるばかりであるが、かれは其處の二階の六疊にその孤獨の身を寄せて居た。かれが二十七八の時に起つた最初の戀、それに傷いてからは、かれはもう女の方を振向いても見なかつた。女や歡樂の世界はかれには全く別の世界のやうに見えた。かれは其時以來夥しく無口になり、用事のある時の外には、滅多に口も利かず、同僚とも餘り交らず、日曜にも外へも出て見ず、大抵はその一間の中で暮すのを常としてゐた。

さんの姿は再びその踏切のところに現はれた。汽車の通つただけで、あたりは矢張さつき來た時と同じやうに靜かであつた。爺さんと婿とは、提燈を振かざして彼方此方を見た。何も見當らなかつた。

しかし七八間レールを傳つて行つた婿は、急に顚倒したやうにして聲をあげた。

『父さん、大變だ、大變だ。こゝに足が、足が……、手が、手が……。』

『何うしたずら？』

『村には、何處にもゐねえか。』

『あつちこつちきいて見た風だが、心當りのところには何處にもゐねえ。……それに、貞公がよそから歸つて來る時、踏切の方へ驅けて行くのを見たつて言ふだ……』

『さつきか、それは？　それとも今か？』

『さつきずら？』

『踏切にや、何にもねえ。人の影もねえ。』

『はてね。』

二つの提燈は其處に立留つたまゝ、暫らくは動かなかつた。と、急に、凄じい音がして、野を掠め、林を掠め、山を掠めて、十一時四十八分の上りの汽車の通つて行く氣勢がした。

『今上りだ……。』

『さうだな。』

かう言つたが、爺さんは急に心配になり出したといふ風に、『ぢや、もう一度行つて見るか？』

『さうすべい。』

二つの提燈はまた坂を登つて茶盆子屋の傍を通つて、林の中の路へと入つて行つた。暫くすると、爺

る長い二條のレール、草藪の中に見えてゐる女郎花や松蟲草、あたりはしんとして、唯さびしげに蟲が鳴いてゐた。

提燈をふり翳して、爺さんは彼方此方を見たが、別に何もないので、そのまゝ引返して、元の路の方へと來た。てつきりあの婆め村の何處かにかくれてゐるに相違ないと思つた。馬鹿な奴だ？　人騷がせな！』

林の角に來ると、向うから提燈が一つ急いでやつて來るのが見えた。てつきり、婿に相違ない。谷川で死んでゐたんぢやないだらうか。それとも、在所がわかつたので、自分を迎へに來たのではないか。かう思つて歩いて行くと、やがて坂の下り際で、その提燈と行逢つた。

『矢張お前か。』

『ゐたかね。』

『いや！　お前の方にもゐねえか。』

『ゐねえ。川には行つたやうな風はねえ。何でも、踏切の方へ行つたつて言ふだがね。』

『はてね？』

『ゐねえか。』

『ゐねえ。』

踏切まではかれ是五六丁あつた。その間には、丘があつたり、山畠があつり、水田があつたりした。丘の中ほどまで行つたところからはF停車場の灯が遠く明るく闇の夜を彩つて見えた。空はすつかり晴れて、星がきらきらと金屬か何かのやうにかゞやいてゐた。高い山の連亙が闇をかぎつて聳えてゐるのが夜目にもそれと指さゝれて見えた。

谷の底で水の鳴る音がした。

『行くべきとけへ行くなんて、あの婆さんに、何うしてそんなことの出來るもんか。屹度村の何處かにかくれてゐやがるに違えねえ？　この夜更に人をこんな眼に逢はせやがつて……』一面では心配しつつ、一面ではこんなことをも爺さんは思つた。

爺さんは林の角を曲つたりだら〳〵坂を上つたりした。そこに一軒、茶盆子屋があるが、それももう客がないと見えて、すつかり戸を閉めて、暗くなつてゐた。そこから踏切は近かつた。その坂を登り切つて、林の中を少し下りると、大きな山脈の上を此方から彼方へ越えて行くやうな汽車のレールが長く長く横はつてゐた。

爺さんは其處に行くと、急に無氣味になつたが、さうかと言つて、そのまゝ引返すわけにも行かなかつた。爺さんは靜かに下りて行つた。

しかし、別に變つたやうな樣子もなかつだ。此方と彼方とにある柵木、その間に冷めたく横はつてゐる

お政はかう言つて提燈を持つた。

『よし、よし、踏切の方にや、おらァ行つて見る。それにしても、もう十一時の上りは來たかな。』

『さつき、來たやうな氣がするだが、貨物だつたかもしらず？』

『兎に角、行つて見る、そつちへは俺ァが。……人騒がせな婆さまだ。この夜更けに……』

かう言つて、爺さんは、尻端折をして、草履をぺたぺた音させて、そして出かけた。爺さんは流石に氣にならない譯には行かなかつた。ついした勢で、あゝいふことをしたが、何もあんなにしなくつても好かつた。かう思ふと、續いて種々のことが旋風のやうに凄じく襲つて來た。もじものことがあつたら……。その時は……、その時は……。かう思ふと、爺さんの體はぶるぶる顫へた。

途中で、村の若者に逢つた。

『何うしやした？』

『婆さん、家出してな……おめいら、そこらで見かけなかつたかな。』

『知らねえ。』立留つて、『何うしたゞ、一體？』

『わけもねえこんだがな。』

かう言つたが、『もしか、途中で逢つたら、知らせて呉れやな。』

『いゝともな。』

『父さん、寢てたんか。』

お政はかう訊ねた。

『寢てると入つて來てな、お話にもなんにもならねえだよ。目が覺めた時分には、もう腹立てて飛出して行つたで……』

『まァ、何を置いても捜さにや――』

かう言つて、人達は落附かない風で、取出した提燈に、二つも三つも火をつけてゐた。

おかまは恐ろしい婆さんの劍幕を思ひ出しながら、蒼い顏をして、手を顫はせてマッチをすつた。明放した表戸からは、夜風が入つて來て、摩つても摩つてもマッチは消えた。

『戸を閉めろや――』

『あゝ。』

などと言つて、それでも猶ほおかまはマッチを摩つた。

『ぢや、俺ァ、谷の方へ行つて見るでな、父さん。』

かう言つて、婿は漸く火のついた提燈を持つて出かけた。

『おらァ、村の中に、まだ、何處かにまごまごしてるかも知れねえだで、そこら、聞いて歩くだで……父さん、踏切の方へ行つて見て呉れやな。』

行つたずら？』

『まだ行かねえずら？』

爺さんは頭を振つたが、『屹度、お政のとけへ行つてゐるずらと思ふが、おぬし、行つて聞いて來うな。』

『さう、するかな……』

かう言つて、提燈をつけて、おかまは出かけて行つた。總領娘のお政の嫁いてゐる家は、そこから二丁と隔つてはゐなかつた。

暫くして、家の前にがやがやと人の來た氣勢がしたと思ふと、おかまはお政と婿と三人してやつて來た。

『ゐたか？』

『行かねえとよ。』

『定公んとけへは？』

『そこにも寄つて來たが、そこにもゐねえとよ。』

『父さん、何うしたんだ、まア……』かう言つてお政は入つて來た。

爺さんは流石に氣になり出したといふ風に、『困つた婆さまだ。何處へ行つたか…… しかしな、放つて置くわけにも行かねぇだでな。そこらさがして見るだな。手分してさがさにやなんめいな。』

その足でおかまが二階に知らせに行くと、
『かまんで置けや……』
『だつて、父さん……』
『なァに、大事ないだ。』
『でも、ひどい劍幕ぢやつたぜ、それに、行くべきとけへ行くつて言つて飛び出したゞで、そんなこともあんめいとは思ふけんど……もしか、ひよつとしたことでもあると、それこそ大變だで……』
『大丈夫だや……』
『そんなこと言はねえで、父さん、起きて呉れろよ。』
爺さんは漸く下りて下に來たが、嫁が話す婆さんの劍幕やら、言葉やらをきくと、段々不安な念がその胸へと萠して來たらしかつた。暫くした後には、もう『構んでおけや。』とは言はなかつた。
二人は顏を見合せた。
『俺ァ、一度捉へたには捉へたんだけんど、正公が目を覺して泣いたもんだで……。つい持つてゐた袖を放して了つたゞ。』
『なァに近所へ行つてるだよ。』かう言つたが、ちよつと考へて、『もう、何時ずら？　十一時の上りや

つた時から、まだ二十分と經つてゐなかつた。油が盡きてヂ、ヂと言つてゐたランプは、まだ薄暗く廣い臺所を照してゐた。

こほろぎも矢張鳴いてゐた。

『お母ァ。』

かう言つて、おかまも矢張跣足であとを追つかけて、外に出ようとするところを辛うじて捉へた。

『離せや。』

『おつかァまァ落附いて……』

『落附くも何にもねえぞや。皆なわれのためだァ。とめるなよ。』

頻りに振放さうとするのを猶遮つて、

『とつさァと何を言ひ合つたか知んねえけども……まァ、氣を落附けて、な、お母ァ。』

『離せや。』

婆さんは身もだえした。

此時、ふと奥で子供が目を覺して泣く聲がした。おかまはそつちに氣を取られるともなく、持つた着物の袖の手をゆるめると、婆さんは、その隙を覗つて、ぐつと離して、戸をあけるより早く、表へ出て、眞暗な闇の中にその姿を沒して了つた。

りた。
おかまは何か二階で話聲がするので、それが耳に入つて、ふと眼がさめたが、忽ち梯子を下りる凄じい音を聞いて、そのまゝ寢所の上に起き返つた。と其處にもう婆さんは來てゐた。
『おかま、おかま。』
返事をせずにゐると、
『おかま、うぬは、俺アがこんなに呼んでゐるのがきこえねえか。』
『何だな。』
おかまは半裸體のまゝで、蚊帳から外へと身を現した。
『おかま、うぬはよく俺をかういふ眼に逢はせたな。この恨みは忘れねえぞよ。俺アな、うぬのために、とつさアに足蹴にされた。この恨みは死んでも忘れねえぞな。俺アな、行くべきとけへ行くだアでな。われやおとつさあと何ぼでも樂めやな。』
恐ろしい劍幕で婆さんは言つた。
『何うしたゞ、お母ア。』
『何うしたも、かうしたもねえだ。おらア行くべきとけへ行くだ。』
かう言つたが、そのまゝ土間を跣足で驅けて戸外へ出ようとした。さつき、二階に婆さんが上つて行

『おかま、呼んで來てやるべいか。』

『馬鹿を言へ、この婆ァ、碌でもねえことをこきァがらァ。下へ下りて、隅で、小さくなつておとなしく寢てろ。』

かう言つて、爺さんは激昂して、足で婆さんを蹴つた。

『足蹴にしたな。』

思詰めたやうに婆さんはぐつと睨めた。

『したがわりいか。』

『覺えてゐなせい。』かう言つた婆さんの眼からは涙が流れた。

暫く沈默が續いた。

『早く行つて寢ろ?』

『覺えてゐなせい! 俺ァ、行くべきとけえ行くだでな。』

『勝手に行くがえゝや。人の寢てゐるところを起しやがつて……』

婆さんは何も言はずに、そのまゝ立つて、ぐつと爺さんを恨めしさうに睨めたが、急に赫としたといふ風で、『足蹴になんかされて生きてゐられねえ。』

かう言つたと思ふと、蚊帳の外にぬいであつた着物を引かけて、そのまゝ、ばたばたと二階を下へと下

『うるせいな。』
『うるせいたつてしやうがねえよ。』かう言つて婆さんはしつこく爺さんにからみ着いた。何うしても、もう爺さんを寢かさないといふ風を見せた。
『ねむいから……』
『俺だから眠いんずら？』
餘りしつこいので、
『うるせいよ、本當に！』
かう爺さんは聲を立てた。爺さんはもうすつかり目を覺してゐた。
婆さんは暫し考へて默つてゐたが、
『そんなに、うるせいけえ、俺が？
『うるせい、うるせい。』
『そんなら好いだ。』
『好いもわるいもあるもんけ。俺ァがよく寢てゐるところを起しやがつて……一體何しに來ただ……』
『たんと言はつせ！』
かう言つたが、婆さんの體は燃えるやうな血の逆流を感じた。

て、好い心持さうにして寢てゐるのを婆さんは見た。

婆さんは暫くぢつとして、爺さんの寢てゐるのを見てゐたが、やがて、傍に寄つて行つて、

『おとつさ、おとつさ。』

と呼起した。

しかし爺さんはよく寢入つて、容易に目を覺さうともしなかつた。『おとつさ。』かう言つて婆さんは爺さんの體を搖ぶつた。

『ウーん。』

とか、何とか初めは言つてゐたが、煩さいかして、無意識に向うを向いて了つた。

婆さんは暫し考へてゐたが、またゆすぶり起した。

『おとつさよ。』

爺さんは此方を向いて、ふつと眼を明いたが、すぐそれとさとつて、

『うん、うるせいな。』

『うるせいツて？　それは何うせ、さうずら？　おかまのやうに若くねえだで。それでもな、おとつさ、昔のことを覺えてゐるべいやな。』笑ひながら婆さんは言つて、

『それねえに、むごくするもんぢやねえぞな。』

…浅間しい心……離れ難ない愛慾……

婆さんは煙草も吸はずに、唯ぢつとして俛首れて考へてゐた。

『息子さへ生きてゐて呉れゝば……』またかう思つたが、ふと思ひ返したといふやうに、こんなことをいつまで思詰めたところで仕方がないといふやうに、そのまゝ立つて自分の寢所に行かうとした。が、急に二階の爺さんのことが思ひ出されて來た。言ひ合なんかをしてから、爺さんは時々婆さんの機嫌などを取つてゐたが、それももう久しい前のことだと婆さんは思つた。

婆さんは嫁の寢所の方をちよつと覗いて見たが、いびきをかいて嫁が熟睡してゐるので、そのまゝ土間に下りて、厩の前を通つて、二階へ上る戸をそつと明けて、狹い梯子の上を見た、灯がついてゐなければ、婆さんはランプを持つて上つて行かうとしたのであつた。

幸ひに灯が薄暗く覗かれた。

で、もう一度戻つて、臺所のランプを消さうとしたが、油がなくなつてゐるから、何うせひとり手に消えるだらうと思返して、そのまゝ靜かに狹い梯子を二階の一間へと上つて行つた。

一番先に、室の隅の方に心を引込めて薄暗く三分のランプの吊つてあるのが眼に入つた。つゞいて、古い綿蚊帳の中に、爺さんが向うむきになつて、足をかゞめて寢てゐるのが見えた。酒を飲んでゐたので、爺さんは二階にあがると、すぐぐつたり寢込んで了つたらしかつた。スウスウと輕いいびきを立て

好い。』かう言つて爺さんは反對した。

七月の頃には、親類の人達も、もう手を引くことになつてゐた。

喧嘩は時々起つた。しかし、餘所目で見てはちよつとも判斷がつかないといふやうに、爺さんと婆さんと嫁と三人睦しさうにして暮してゐるのを人々は見ることなどもあつた。『あの婆さん、やきもちやきだで、何が何だかわかんねえ。』などとも言つた。

ある人情に明るい老人は、『何うも、このことばかりは、へい、はたで思つてゐるやうなもんぢやねえからな。男一人に女二人、そんなことは世の中にはよくあらアな。あゝ見えてゐて、あの爺奴、中々腕者だで、お方も嫁どんも仲よくさせて、一緒に置くことが出來るかも知れねえよ。』と言つたが、實際さういふところもあると見えて、ある時は三人して暑い日中の山畠の桑の葉を摘んでゐるのを誰もかれも見かけた。

おかまが寢て了つてからも、婆さんは默つて、圍爐裏の前で坐つてゐた。油が殘り少くなつたと見えて、ランプの灯がヂ、ヂと音を立てゝ、いとゞ暗いのが一層薄暗くなつて行つた。

こほろぎが頻りに鳴いた。

またしても、念佛講できいた坊さんの話が思ひ出された。罪……人間……無常迅速……男と女の仲…

聽して歩くものもあつた。村では——無智な人間の多い村では、さういふことはめづらしくなかつた。『何うしても、なァ、亭主のねえ嫁は、さういふことになるずら？　女は男の方を可愛がるし、男は女を可愛がるしするだで。』などと笑つて話した。

總領の娘は、ある時その亭主に言つた。

『本當ずらか？』

『何うもな、そんなことはあんめいと思ふがな。』

『まさかと思ふがな。』

『でもなァ、一緒に見てゐることでねえだで、何とも言へねえや。』かう言つて考へて、『おかまさ、何う言ふだ？』

『そんなことはねえ言ふだ。』

『でもな、丸つきり火のねえとこには、煙は立たねえでな。本當だとすりや、困つたこんだ。』

娘、婿ばかりではなかつた。親類の人達もひそかに種々と相談したりした。今になつて、嫁を不意に里に歸すのもをかしいし——かうは言つたものの、さうも言つてゐられないといふやうなところがあるので、ある時はその話が親類の相談の內容となつた。しかしその時、爺さんは強くそれに反對した。『そんな馬鹿なことが出來るもんか。嫁に、そんな惡名つけて出してやることが出來るか何うか考へて見るが

『默つて聞いてゐりや、碌なことを言ひァがらねえ。手證を見た、見たッて言ふが、何を見たんだ。言つて見い、人ぎきがわるい……』

『人聞きがわりいも何もねえ、本當のこんだでしやうがねえ。何處に、嫁さまの手を握つたり何かする舅があるもんか。』かう婆さんはたけり立つた。

爺さん婆さんの口爭ひは容易にやまなかつた。隣近所でも、やがて物を投げつける音をきゝつけて、何事が始まつたかと思つて、急いで彼方此方からとめにやつて來た。近所に嫁いてゐる總領の娘は、今年四十一二になつてゐるが、これもそれと聞いて急いで飛んで來た。

『お袋さ、まァ、見つともねえぢやねえか、その年して……』

かう言つて、娘は仲に入つて、辛うじて取組合ひの喧嘩の仲をわけて、母親を自分の家の方へと伴れて來た。

嫁のおかまは、逸早く近所の知合の家か何かに逃げて行つてゐた。

婆さんは婿の家に行つてからも、惡口雜言をやめなかつた。婆さんは今まで默つて見てゐたことを洗ひざらひ婿や娘の前に並べ立てた。『馬鹿な、そんな話があるもんかえ。お母さも何うかしてるぞな。馬鹿な。』こんなことを言つて娘は打消した。

しかし村の人達は、『困つたことが出來た。』などと言つた。また中にはそれを面白がつて、彼方此方と吹

それ以上婆さんは聞かなかつたが、それからは、婆さんは、夜中にはいつも少しの物音にも眼をさました。嫁がその傍に寢てゐれば安心して寢られたが、その姿が見えないと、すぐ立つて家の周圍を見廻はした。嫁が近所で遲くまで話してゐたとは知らずに、爺さんの寢てゐる二階の梯子を音を立てずにこつそり上つて行つて、一時間近くも、かくれて立聞きしてゐたこともあつた。

爺さん婆さんは、もう餘程前から、滅多に一つところに寢るといふことはなかつた。息子と嫁との間に、孫が出來た時分には、もうさうしたことは別に興味を惹かないやうな風であつた。しかしそれでも猶二月三月の中にはお互に昔の戀をあたゝめることがないでもなかつた。それが、去年二階に離れて寢るやうになつてからは、すつかり二人の間が遠のいて了つてゐた。段々わかつて來るに從つて、『それでだな。』かう婆さんは思つて嚇とした。

ある時、爺さんと婆さんとは大喧嘩をした。

『お前さも、村會議員も仕たこともある人ぢやねえか。』

『それが何うした？』

『何うしたにも、かうしたにも、へい、お話にならねえ。何うもをかしい、をかしいと思つてゐたが、俺ァ、手證を見ねえのだで、今日まで何も言はねえで默つてゐた。あまもあきれたあまだが、お前さもよくそれで人に顏むけが出來ると思ふな。』

時にも、自分一人置き去りにされたやうな淋しさを婆さんは感じた。爺さんと並んで歩きながら、嫁は好い聲で唄を歌つたりした。それは、息子のゐる時分にも、よく一緒に山から歸りながら歌つた唄であつた。

それから裏庭の大釜で、朝、馬に飲ませる湯を嫁が沸かしてゐると、爺さんは、起きたばかりの姿で、其處に行つて、何か面白さうに睦しさうに嫁に話してゐるのを婆さんは見た。嫁は爺さんに顏を洗ふ湯を手水盥に取つてやつたりした。

ある夜であつた。ふと、婆さんは夜中に眼覺めた。氣が附くと、いつも寢てゐる筈の嫁が其處にゐない。婆さんは電氣をかけられた護謨人形のやうにすぐ起きかへつた。と同時に、二階の方へ行く戶の閉る音がした。

出て見ると、嫁は土間の厩の前のところにゐた。

『何處へ行つたや？』

『ちよつと、はゞかりに……』

『はゞかりに？　うそずら？　はゞかりなら、二階の戶が明くわけがねえ。』

『今、はゞかりから來て見ただ。すると、二階の戶があいてたゞで、不用心だと思つて、しめただ。』

『…………？』

當り散らした。

それを爺に話すと、爺は爺で、以前のやうに、ちつともそれを取上げて吳れずに、『そんなむづかしいことを言つたッて仕方がねえ。』とか、『おかまだッて、いそがしいやな。さう手が十本もあるんぢやねえやな。』とか、『だッて、おかまだッて可哀相だ。かうして後家を立てゝゐて吳れるんだから。』とか言つた。然し、まア、それは好いとして、最も不思議にをかしいと思つたのは、嫁と舅との間に一種言ふに言はれない空氣が出來てゐる事であつた。嫁は爺さんの言ふ事なんか少しも眞劍にきかないといふ態度を見せてゐる癖に、よく爺さんの物などを洗つてゐるのを婆さんは見た。

忘れもしない、この春だ。刈敷を刈りに、皆なして山へ出かけた。家のは後れてゐたので、精出して刈らなければならないと思つて、婆さんは、晝休みもせずに、せつせと草を刈つて、それを束ねてゐた。ふと、爺さんと嫁とがついその向うの日當りで、並んで休んで睦じさうに煙草を吸つてゐるのが見えた。嫁はかぶつた笠を傍に置いて、爺さんの方を向いて、何か笑つて話してゐた。それを見た婆さんは嚇とした。別に何でもないけれど婆さんは唯嚇とした。婆さんは草を刈る手を留めてぢつと其方を見詰めた。

子規と鶯とが好い聲をしてその傍を掠めるやうにして鳴いて通つた。

嫁のゐるところから少し離れて、馬は、暖かい春の日影を身に沿びながら、頻りに草を喰つてゐた。

それからは爺さんと嫁との行動が一々婆さんの眼に着き出して來た。山から一緒に並んで歸つて來る

戸の一間にこそこそ入つて行く氣勢がした。

それから後、長い間、婆さんに其處に坐つてゐた。

念佛講中の人達の言つた言葉や、眼色や、笑ひ顏や、さういふものがはつきりと一つ一つ婆さんの頭に生きて蘇つて來た。ある爺は、家の爺に、『何うしても若いのが好いやな。』などと笑ひながら言つてゐた。ある婆さんは、『おめんとこの嫁は若いな。まだ、後家で通すつもりかな。』などと言つた。唯、何の意味もなしに言つた言葉も、皆な痛く婆さんの體に跳ね返つて聞えた。

家の爺も息子の生きてゐる中はあんなではなかつた。しつかりした爺樣だつた。村でも立てられてゐた。忙しい時には、自分や息子や嫁と一緒になつて、折敷の草を山に刈りにも行けば、三眠起きから忙しい養蠶の手傳ひなどもした。ある時には、村から選ばれて村會議員にもなつた。その爺さんが……あのおやぢが……

去年から二階に一人で寢るやうになつた。それを、何ういふ譯だか、ちつとも知らずに長い間ゐた。矢張本當に大勢のいびきや子供の泣聲が煩いんだらうと思つてゐた。しかし、嫁の態度の變つたのも何うも變だ、變だと思つてゐた。もとのやうな從順なところは少しもなくなつて、何ぞと言つてはよく白い齒を見せた。少し小言らしいことを言ふと、ぢき反抗した。でなければ罪のない幼ない孫の男の兒に

『おらに構はねえで、寢ろや。』

嫁は默つて、今度は臺所の隅の柱のところへ行つて、腰をかけて、そしてそれに凭りかゝつた。矢張寢に行かうともしなかつた。髷に結つた後の髱のところが微かに薄暗い光線の中に見えた。

山はもう秋で、つい此間まで蟬がないてゐたと思ふのに、今ではもうこほろぎが靜かに物哀しくあちらこちらに鳴いてゐた。夜の空氣はしつとりとして淋しくあたりに漲つた。

息子が生きてゐたら……かう思ふと、婆さんは堪らないやうな氣がした。憎い憎い嫁、憎い憎い爺、『何うしてこんなことが人間に出來るだか。』かう思つたが、すぐ思返して、又、煙草をスパスパと吸つた。

暫くして、

『おかま、寢ろよ、もう……』

『…………』

『寢ろッて言ふにな……』

『…………』

『おらが寢て了はねえぢや、おぬしはねられねえ譯でもあんか。』

『…………』

おかまは矢張默つてゐたが、暫くすると、『お先に御免なさい。』とも何とも言はずに、そのまま奥の納

婆さんは煙草をスパスパ吸ひながら、默つて圍爐裏の前に坐つてゐた。廣い臺所の眞中に高く吊されたランプは三分で、薄暗い光線はぼんやりと釜だの鍋だの竈だの、その傍に置いてある粗朶だのを照した。五十七になつた婆さんの髮は、もう半分以上白くなつてゐた。

婆さんの頭の中には種々のことが巴渦のやうに往來した。ある光景からある光景へと眼と心とが一緒になつて動いて行つた。それに、今夜は他郷からやつて來た豪い坊さんの說教が染々と身に染みたので、念佛につれて叩く鉦の音が今でも耳のほとりにきこえてゐるやうな氣がした。無常迅速……罪……人間……淺間しい心……

ふと嫁のおかまが、其處に、半ば闇の中の土間の處に蹲踞るやうにして後向きになつてゐるのを見て、

『おかま！』

もう居眠りが出たかと思つたが、もう一度、『おかま！ おかま。』

『へ……。』

と嫁は立つた。

『そんなにねむけりや、寢ろや。』

『あゝ。』

大きなあくびをして、『おつかア、まだ寢ねえか。』

もあゝだでな。私等ァ、何處から歸つて來ても、火一つあつたためしがねえ。』
『まァ、好いがな。早く寢ろよ。』
面倒臭いと思つたと見えて、爺さんはそのまゝ立つて、嫁のあくびをしながら立つてゐる土間に下りて、その傍を掠めるやうにして、奥の方へ行つた。厩のある傍を通る時、馬がまだ起きてゐて身動きをしてゐる氣勢がした。爺さん夫婦の寢るところは、そこから、細い暗い階子を上つて行つたところにあつた。天井の低い六疊の間には、古い綿蚊帳が吊つてあつた。
その隣に接して、もう一つ六疊の室があつた。そこは今は物置になつて、ごたごた種々なものが入れられてあるが、三年前までは、其處は息子と嫁の寢る所で、結婚した最初の夜も二人は其處に寢た。婆さん夫婦達の結婚した時も矢張其處に寢た。或は婆さん達のその以前の歷代の夫婦も、矢張新婚の夜を其處に過したかも知れなかつた。其處からは、下で馬の身動きする氣勢や羽目板を蹴る音などが終夜きこえた。
息子の生きてゐる中は、婆さん夫婦は二階に寢たが、三年前に死んでからは、嫁と孫と皆な一緒に下の一間に寢ることとなつた。
それがつい去年から、『何うも、婆さんのいびきが耳に障つて寢られねえで。』こんなことを言つて、爺さん一人で離れて二階の上り口の一間に寢に行つた。

ある轢死

念佛講から爺さんと婆さんとが歸つて來たのは、もう十時過ぎであつた。嫁のお鎌は、奥で、今年五つになる男の兒と一緒にいぎたなく寢込んでゐたが、『おかま、おかま。』と呼ばれて、眠むさうな眼をして起きて來た。

『おぬしは寢てたか。』かう婆さんは苦々しさうに言つたが、圍爐裏の傍に行つて、そのまゝ下をかき廻して見た。しかし火種らしいものは一つもなかつた。仕方がなしに、婆さんはマッチを摩つて煙草に火をつけた。

爺さんもちよつと其處に腰を下して見たが、『婆さま、もう寢ろよ。おかまだつて、もうねむいずら。』

『ねむい、ねむいッて、散々ぱら寢たずら？』

『もう、遲いでな。』

『何が遲い？　まだ十時が鳴つたべいだ。』すぱすぱ吸ひながら、『正公を寢かすッて言つちや、いつで

ゐるといふ事實を發見した。』「さうかえ。それでだよ。この間中から變だ、變だと思つてゐたが、その故だよ。それであんなに悲しさうなことばかりを言つてよこしたんだよ。もう四月になるのだとさ。それぢや、今度は是非一度は行かなけりや可哀相だね。』こんなことを母親は言つた。そして母親は夜遲くまでかゝつて長い長い手紙を娘に書いた。

天氣豫報の竿には、矢張同じやうに赤い白い旗がかゝげられた。夫は矢張同じやうにして、毎日事務室の方へ出かけて行つた。

十月の末には、雪がもうその丘の上を白くした。

れから寒くさびしくなるんだと思ふと、つく〴〵心細くなりますよ。』などと言つた。晝中はネルで過すことが出來ても、朝夕は袷に羽織を重ねなければならなかつた。冷たい雨は幾日かつゞいて降つた。一時は絢爛目を奪ふばかりに咲誇つた高原の秋草も、いつかすつかり雨に萎れて、全く泥土に委して了つた。曇つた日には、雪が深く佗しく山々を封じた。

ある雨の日には、笠をかぶつて着茣蓙を着て、爺さんは裏の林の中から初茸などを澤山に採つて來た。

測候所の若い細君は此頃は來た時のやうな花やかさと娘らしさを持つてゐなくなつた。顏には一種の深い憂愁の色が漂ひ、表情にも次第に生々しさを失つて行つてゐた。細君は唯默つて長火鉢の前に坐つて裁縫の針を動かしてゐた。別に生活に變つたこともなく、夫のやさしい愛情は以前に異つたところもなかつたけれど、二人は默つてゐるやうなことが多かつた。國から來る手紙にも、もう以前のやうに心を躍らさなくなつて了つた。

じめじめと鬱陶しく雨の續いて降つた後には、寒い寒い風が西から吹き、黃葉した山々の木の葉は一夜の中にすつかり吹き散らされて了つた。ある朝、見ると、しまひ忘れた籠のカナリアは、枝の下に落ちてさびしく死んでゐるのを細君は見た。

『あゝ、カナリアもたうとう死んぢやつた……』かう言つて細君は靑白い頰に涙を流した。

その頃、遠い湖水に面した細君の里の家では、信州の山の中の娘から來た手紙の中に、娘の姙娠して

思ふね、兎に角、北海道の氣候だからね。』

籠の中のカナリアを見ては、

『さうか、これは細君の慰みか。何うも君にしちやこんな面倒臭いことは出來ない筈だと思つた。』

かう言つて博士は大きく笑つたりした。『まア、仕方がない。二三年辛抱するんだね。かういふ山に一生終るものもあるにはあるんだからね。』などとも言つた。そして大抵は博士は所長と一緒に觀測室に入つて熱心に種々な研究に耽つた。

夏は割合に賑やかであつた。都會の人達も少しは入つて來たし、わざ〳〵汽車を下りて山を見に來る學生の群などもあつた。停車場前の町に田舍の役者の芝居がかゝつたことなどもあつた。しかし、測候所の細君は、矢張家に引籠つてのみ暮した。夏の終りに、父親が東京見物旁々やつて來るといふ便もあつたが、急に妹が重い病氣にかゝつたので、その望みも空しくなつて了つた。前の山から卷き上る白い入道雲を眺めつゝ細君は矢張さびしさうにして暮した。

山では夏は早く過ぎた。桔梗の紫ももう草原の中には見えず、郭公も鶯も聲を潛め、雨の日に唯遠くで山鳩のさびしい鳴き聲をきくばかりであつた。別莊に來てゐた避暑客の歸つたのを見送つて此處に尋ねて來た分署長は、『これからは山はさびしくなるばかりですよ、奥さん。山では、秋はつまらない。こ

それからは居間の軒下で、いつもこの小鳥が好い聲を立てゝ囀つた。

夏は次第に暑くなつて行つた。氣候の關係で、このあたりは、夏繭から養蠶をする土地の習慣であつた。從つて此頃では、測候所の周圍の山畠には、遠い村落から、百姓達が大勢やつて來て桑の葉を摘んで、それを馬に乘せて持つて行つた。

林を隔て山畠を隔てた別莊には、東市から避暑の客などがやつて來たりした。所長も此頃では大分村の人達に懇意になつて、そこから十二三町あるといふ部落に隙を見て碁を打ちに行つたりなどした。巡査もをり〳〵やつて來た。中でも、背の高い一番年下の巡査は、細君のゐる住宅の方までやつて來て、緣側に腰をかけて、茶などを飮んで、村にあつた出來事などを話して聞かせた。

『出雲の松江、隨分遠いところから來ていらつしやるんですね。こんな山ん中にゐては、お國の方が戀しくおなんなさるでせうね。』などと言つた。

ある時には、別莊をぢきその近くに持つてゐる土地の代議士が、村長だの村の有志だのと一緒に測候所の參觀に出かけて來たりした。M博士がわざ〳〵訪ねて來た時には、若い細君は、夫が世話になつてゐる豪い人と思ふだけに、何となくそは〳〵して食事拵へをしたり歡待をしたりするにも、落度がなければ好いと思つた。併し溫厚な落附いた博士は、却つてかういふ山の中に淋しく生活してゐる細君に同情した。

『君は好いけれども……細君が大變だ。よくさびしがらないね。それに、此處は冬は堪らないだらうと

て此まゝ行けたらばなどと若い細君は思つた。夕暮などは殊にその感が深かつた。

ある日、夫は籠を持つて來た。中には黄ろい毛色の美しい可愛いカナリアが一羽入れられてあつた。

『かういふものを貰つて來た。』

『まア。』

細君はうれしさうにして、『よくありましたね。何處で。停車場で？　さうですか、鳥屋ではないんですか。望んで讓つて貰つたんですか。』堪らないといふやうに細君は籠の中を覗いて、『私のすきなカナリア、すきなカナリア、まア何んて可愛いんでせう。』

『お前が淋しさうにしてゐるからね。無理に貰つて來てやつたんだよ。』

『さうですか、まア。』

細君は嬉々して、急いでそれを受取つて、座敷の縁側の日當の好いところに置いた。黄ろい小さな鳥は枝から枝へと飛移つて、好い聲を立てゝ鳴いた。

『夏は好いが、冬は寒いので、餘程注意しないと殺して了ふさうだ。………しかし、これを持つてゐた人が、今年で三年もかつてゐたと言ふんだから、注意さへすれば大丈夫だがね。』

『さうですね。』

細君は早速水を小さな器に入れてやつたりした。

た戀人同士のやうな樂みが必ず二人の間にあつたに相違なかつた。

二人きりの夜の生活はさびしかつた。しかし停車場の灯が遠く見えるばかりで、周圍にも附近にも人目と言ふもののないのがいかに二人の仲を濃かにしたであらうか。草の葉のそよぎ、松の風の音、風の屋上を掠めて行く響、雨の軒に滴る音、さういふものも二人のために戀の歡樂の歌を歌ふやうに聞かれなかつたであらうか。

晴れた朝などには、若い細君は井戸端に蹲踞んで、赤い襷をくつきりと山の空氣の中に見せて、汚れた夫の寢衣だの蒲團の敷布などを洗つた。

六月の雨が晴れると、晴れやかな美しい夏が來た。山は碧く、空は澄み、子規がすぐその前を掠めるやうにして鳴いた。山のところ〴〵にある田、そこには苗が綺麗に植ゑられて、測候所の周圍の山畠には、桑が一面に綠葉を靡かした。卯の花は白く、しどめの花は赤く、山いちごの實を學校歸りの子供達が群を成してさがして探つて歩いたりした。山奥に通ふ運送の車力は、『今日ばかりは、測候所の天氣豫報は中つたな。先生旨くやつたな。初めに赤を出して、後に白を出した。今日はよく中つた。』などと言つて丘の上の轍の深く入り込んだ斜坂の道を陸續として車を並べて通つて行つた。

若い細君は此頃でも、をり〳〵門の前に立つて、汽車の通るレールを見て、湖に面した故鄕を思つた。汽笛の鳴るにつれて白く颺る煙、つゞいてコトン〳〵と音して山の斜坂を下つて行く汽車、あれに乘つ

『兎に角、田舍だ。此頃のやうに、雨が降つちや外にも出られやしない。』

時々訪ねて來る人も、其處等近所に見かける人達も、皆ひなどい百姓ばかりで、都會らしい口の利き方をするものは一人としてなかつた。皆な別種類か別種族の人間のやうな氣がした。茶を持つて出る度に、不束な野蠻な田舍言葉を細君はいつもしたたか客から浴びせかけられた。

林の蕨も長け、山獨活も長け、たらの芽などもなくなつて、濃い綠の中に、雨が二日も三日も續いて降つたりした。晴れた日には、百姓達は折しきの草を刈るために、馬を曳いて、揃つて遠い山の方へと出かけて行つた。何うかすると、散步の途中、二人はさういふ群に逢つたりした。丘の下の池の近所の田には、一杯草が投り込んであつた。早い田には、苗が綺麗に植ゑつけられてあつた。

長火鉢の置いてある室は、丁度裏の高い山脈の翠微と相對してゐた。そこからは、左に連つた松原の一端が少し見えて、その向うに深く谷の入り込んでゐる高い山が聳えてゐるのが見えた。

そこからは渦まき上るやうに常に雲の湧き出して來るのを細君は見た。『雲ばかり見て暮しをり候』などと細君は國にやる手紙の中に書いた。

しかし國の父母の心配したり憐れんだりするほどその室は陰氣でもさびしくもなかつた。かういふ生活に置かるゝにつけても、夫は妻を思ひ、妻は夫に縋つた。或はこの室とこの奧に續く六疊の寢室とは世界のあらゆる歡樂の庭よりも更に更に樂しかつたかも知れなかつた。ゆくりなく絕海の孤島に置かれ

手紙を書いた。

『何だ、又書いてるのかえ？　昨日出したばつかりぢやないか。』などと夫は笑つた。

所長は妻の母親から來た手紙を手にしたが、其處には矢張いつもと變らない思慕の情が溢れるばかりに漲つてゐるのを見た。細君のさびしがつてゐるのを憐んだり、體を大切にしなければいけないと言ふことが細々と愚痴ぽく書いてあつたり、姉妹や親戚の消息が詳しく書いてあつたりした。

手紙を妻の方へ戻しながら、

『また、するめを送つて來るつて書いてあるねえ。』

『え……』

『國のするめは旨いからな。』

かう言つたが、『何うも、貰つてばかりゐて、此方から送つてやるものがなくつて困る。』

『でも、食物がないと思つて、送つて呉れるんだから構ひやしない。』

『でもな……何かめづらしいものがあれば好いんだがな。山獨活なんか駄目だし、蕎麥だつて駄目だし、秋にでもなれば、茸類が澤山出るさうだから、それでも送れば送るんだが、それも遠いから、旨く腐らずに屆くか何うかわからない。』

『本當ねえ。』

階梯を上つて、風位をはかる機械の下に行つて、風力の觀測をしたりなどした。

その時分には、住宅の室の中も、段々家庭らしい色彩をつけて來てゐた。停車場から送つて來た大きな薦包の荷物の中には、新しい簞笥だの鏡臺だの葛籠だの行李だのがあつた。若い細君は、簞笥の置き場所を夫に相談したり、結婚の祝ひに貰つた果物を書いた油繪の額を長押にかけたりした。細君は可愛らしい束髮に髮を結つて、銘仙に縮緬と繻子とを合せた帶などをしめて、夫の事務室に行つてゐる間を、終日長火鉢の前に坐つて裁縫の針を動かしてゐた。

其處に、所長は仕事の隙を見て、よくちよいちよいやつて來た。

『少し出て見たら、何うだ?』

『だつて、まだ馴れないから、變ですもの? それに、此處等の人は、じろ〳〵と人の顏ばかり見るんですもの。』

『田舍だからね。』夫はかう言つたが、『さむしからうと思つてさ。』

『だつて、仕方がありませんもの。』

『さつきの手紙お見せ。』

細君は茶簞笥の上に置いた國から來た手紙を夫に渡した。此頃では、もうさう度々はよこさなくなつたけれど、來た當座は、母親から、姉妹から每日のやうに手紙がやつて來た。細君もまた每日のやうに

かう言つて、若い細君は汽車の通つて行つたあとの空しい線路をなつかしさうに眺めた。

測候所の所長が若い細君を伴れて來たといふ噂は一時村に喧しく評判された。『さうだつてな。若い綺麗なおかゝだッてな。まだ祝儀をすませたばかりだとよ。』などと人々は語り合つた。しかしその美しい若い細君の姿を見たものは滅多になかつた。朝夕の町への用事は、大抵雇はれた爺が出かけて行つた。

若い細君の美しいと言ふことは、爺の口やら、測候所の事務開始の祝宴の時に聘ばれて行つた村の人達の口やらから傳つた。その祝宴に聘ばれて行つたのは、村長と分署長と郵便局長と病院長とその他二三の人達であつたが、誰の眼にもさびしさうにつゝましやかにしてゐる若い美しい細君が映つた。

天氣豫報の竿に赤い白い旗が毎日きまつて揭げられるやうになつた時分には、所長の執らなければならない事務もかなりに忙しくなつてゐた。各測候所から來た電報、此方から各測候所に打つてやる電報、その事務は大抵助手がしたけれども、晴雨計の細かい變化、寒暖計の朝夕の上昇降下、それを一々罫のある紙に細かく書いて、監督官署に報告しなければならなかつた。それに、林中に仕かけた機械の方や、地下に設備した氣象計の方も一々時間每に行つて調べて見なければならなかつた。助手夫妻はそれでも一月ほど一緒に暮してゐたが、やがて近いところに恰好の家が見附かつたと言ふので、やがて引越して行つたので、夜の觀測は何うしても所長は自から當らなければならなくなつてゐた。所長は夜遲く細い

『高いともね……大山は六千尺位しかない。』
『大きいんですね、それぢや……』
ふと谷やら村やらを越して一ところ人家がごたごたと簇つて煤煙が黑く颺つてゐるのを指して、
『あれは何處ですの？』
『停車場だよ。昨夜下りて來た……』
『さう、あそこが停車場なの？　昨夜、あそこから來たのですの？　さうですか。』かう言つて細君は、もう一度其方の方を見た。朝日は山から離れて、晴れがましい光を一面にあたりに漲らした。
汽車の音がすると思ふと、朝の七時の下りが、停車場を出て、病院の建物のある後を通つて、此方へやつて來るのが明かに見えた。レールは長く山際に寄つてつゞいてゐた。汽車は朝の山氣の中に白い烟を立てゝ通つて行つた。
『あつちに行くと何處に行くんですの？』
『木曾から名古屋の方に行くんだ。』
『ぢや、此方からも國の方へ行けるんですね。』
『東京は通らないけれど、此方を行けば、近いんだよ。』
『さうなの？』

飛立つばかりに故郷の海山が慕はれた。其夜は奥の六疊に夫と一緒に休んだが、若い細君の心には始めて夫のやさしい情が深く染み入るやうに感じられた。

あくる朝は、若い細君は、自分を世離れたさびしい高原の離れ家の中に發見した。何といふさびしい荒涼としたところだらう。大きな凄じい山の連亙。ひろく長く連つた裾野、あんなところにも人が住んでゐるかと思はれるやうな谷合の村、細々と立上る朝の烟、何處を見渡しても、今まで住んでゐた故郷のやうな面影は見られなかつた。あのひろい美しい湖水、旨い大きい蜆のとれる湖水、月の美しく照りかゞやく湖水、城址の公園の並木、さういふ風な景色に比べて、何といふさびしい眺望だらう。『さびしいところですね。』若い細君はあたりを見廻しながら思はずそこに立つてゐる夫に言つた。

『來て御覽、富士が見えるから。』

夫はかう言つて、若い細君を門の前につれて行つたりした。

『大きい山ですね。あの山は何つて言ふんですの？』

前に聳えてゐる裾の長い大きな山を指して細君は訊いた。

『八ヶ嶽つて言ふんだ。此處等は日本でも山の大きいところなんだから。向うに見える山でも何でも一萬尺近くある山なんだから……』

『大山などよりも高いんですか？』

ますよ。停車場まで爺やが使に行つて吳れますけれど、野菜だつて何だつて、お百姓が食ふやうなもんしかないんですから……生魚なんかそれァありやしませんよ。』

『左樣ですか。』

『まあ、當分はお困りですよ。それに、今までゐらしつたお國が、お肴の多いところですつてね。さうですつてね。新しいのが召上れるんですつてね。』

『でもお野菜の方も好きですから。』若い細君がかう言ふと、

『その野菜がまた碌なものがないんですから困りますよ……それは不便なところですよ。』助手の細君は容易に口を閉ぢやうともしなかつた。

茶、茶菓子、それから所長は和服に着替へ、若い細君も爺の持つて來て吳れた信玄袋の中から着更を出したりした。そこには土産物の甘納豆の罐なども入つてゐた。

解いた帶を助手の細君が疊まうとするのを、『いゝえ、何う致しまして、私が疊みますから。』と言つて、若い細君はそれを自分の方に引寄せたりした。

さびしいのにつれて、若い細君の心は俄に夫の方に縋つていくやうになつたり、別れて來た故鄕の方を胸に描いて、母親戀ひしさの情に燃えたりした。停車場で眼を赤くしてゐた母親の姿、訓戒の言葉のかげに深い情を包んだ父親の姿、末の妹の十一になるのがさぞさびしがつてゐるであらうと思ふと、今にも

かう助手の細君は言つた。

所長は、『不束ものですけれども。』と言つて新しい細君を改めて二人に紹介したりした。續いて急に結婚しなければならなかつた話などを所長はした。『何うも、此方のことも氣にかゝるし、さうかと言つて、後から伴れて行くのも大變だから、一緒に行けと言はれるので、忙しいにも何にも……それは本當に眼の廻るやうでした。』

『東京には幾日お出ででした？』

『三日ゐました。』

『M博士にもお逢ひでしたか？』

『えゝ逢つて來ました。』かう言つたが、『それに役所にも顔を出さなくつちやならず、東京にゐる親類や友達にも引合せて來なくつちやならず、隨分忙しかつた……』

『さうでしたらうね。』

『奥さんもお疲れでしたらうね。』助手の細君はつとめて若い細君に口を利くやうにして、『まァ、ゆつくりお休みなさるんですね。もう此處はお宅だから、いくらでもゆつくりしてゐられますから。』ちよつと話題をかへて、『でも、ね、奥さん、それはひどいところですよ。明日御覽になればわかりますけれど、それや山中ですから……。周圍は家なんか一軒もないんですから。それに、召上るものがなくつて困り

の階段、二つ三つカアテンの白く見える硝子窓、卓の上に置かれた小さな機械、やがて住宅の方へ行つた助手は『おい、おかね、お歸りだよ。』

明るい灯の中からは、慌てゝ人の出て來る氣勢がした。やがて束髪に結つた女の姿がそこに黒くあらはれた。

『まァ、お歸りでしたか……』かう言つたが、『奥さんは?』

『御一緒だよ。』

先に行つた助手は低い聲で言つた。所長のあとについて、小さくなつて若い細君は續いた。

『まァ、夜になつて大變でしたらう。今日は屹度お歸りになると思つたんですけれども……まァ、奥さん。あとで緩り御挨拶はいたしますけれど……まァ、すぐずつと。大變でしたらうね、路がわるくつて……』かう言つて、助手の細君は立つたり居たりした。若い可愛い美しいほつそりした所長の新しい細君を助手の細君は見た。

『何うも、留守中は大變でしたらう。色々なことがあつたもんですから、つい遲くなつちやつて……』かう所長は言つて奥へ入つて行つた。若い細君の眼には、疊も長火鉢も何も彼も新しい明るい八疊の一間が眼に入つた。助手の細君は座蒲團などを出して勸めた。

『えらいところですよ、奥さん。』

『さうですね。隨分御座いますのね。それに、登りですから。』

『もうすぐだよ。』

兼ねてそれと夫から聞いてゐたけれども、これほどとは思つてゐなかつた。町の灯からはいつか遠く離れて來てゐた。周圍には人家らしいものも見えなかつた。唯、眞暗な闇と蛙の聲とばかりだ。

『周圍は皆んな畠なんですか？』

『あゝさうだ。大抵、桑畑か、藪だ。』

遂に測候所の門のあるところへと達した。門は半ば闇に開いて、測候所の方にも、住宅の方にも、電燈が明るくついてゐた。

『電氣が來ましたな。』

かう所長が言ふと、

『漸く四五日前に、住宅の方にも來るやうになりました。』

所長と助手とは、所長の留守中に出來た設備のことなどを話しながら門內へと入つて行つた。若い細君はあとから續いた。細君の眼には、ガランとした闇の中にぽつゝり家が建てられてあるのを見た。屋根のある大きな井戶などが眼についた。

お役所風の測候所の建物、中には人の影はなくつて灯が徒らに明るくついてゐるのが見えた。低い石

『乘り後れちやつたもんですから……』

『そんなことだと思ひました。今、爺さんにお逢ひでしたらう？』傍にゐる若い細君の方を見て、『や、奧さんですか。始めてお目にかゝります。今日はもうきつとお歸りだと思つて、朝からお待ちしてゐたにはゐたんですけれども――』

『何うも、いろ〳〵お世話になりまして。』若い細君は丁寧にきまりがわるさうに低頭勝に挨拶した。

『提灯なしで、お出ででしたか、大變でしたらう？　暗くつて……』こんなことを言ひながら助手は先に立つた。若い細君の眼には、色の黑い背の低い肥つた莞爾した助手の顏が映つた。

一ところ人家の連つてゐるところを通り越すと、それから暗い石ころ澤山の爪先上りの山路が續いた。草には露が置いて、提灯の微かな光りに照された路の片側は、小松原で、片側には眞菰の生えた池が夜目にもそれと微に見えて、蛙の鳴く聲が闇から湧くやうにきこえた。さびしい處だと思ふと共に、若い細君の胸には、遠く離れて來た故鄕を思ふの情が油然として湧き上つて來た。

『路がわるう御座んすよ。』かう言ひながら、助手は何遍となく立留まつて、提灯を翳して細君の足許を明るくするやうにした。石ころ路は行つても行つても容易に盡きなかつた。若い細君はをり〳〵立留つて苦しさうに呼吸をついた。

『もうぢきだよ。遠いだらう？』

見た。親達にわかるゝ涙、姉妹達に別を惜む涙、花やかな結婚の席の灯の影、あくる朝の嬉しく面羞い思ひ、湖水近い停車場のわかれ、長い〳〵汽車、東京といふ大きな都會の灯、其處に過ごした二三日の宴會、夫の同僚友人などへの挨拶――さういふ光景が一つ〳〵忙しく廻る繪のやうになつて見えた。しかもそれが忽ち過ぎ去つて、今はまた三四百里を隔てたかうした寂しい山の中に來たと思ふと、若い細君は何だか夢でも見てゐるのではないかと思つた。細君は青い赤い測候所の灯を靜かに見やつた。

『まだ、餘程ありますの？』

『何ァに、もうぢきだ。』

『隨分お勞れになつたでせう。』

『隨分忙しかつたからね。……お前もくたびれたらう？』

『いゝえ、私はそんなでもないですけれども……』

『まァ、家に行つて休むんだ。』

闇夜で、はつきりとはわからないけれど、其處には田や畠があるらしく、をり〳〵路に沿つて灯の明るくついてゐる家などがあつた。蛙の聲が靜かに聞えた。

ふと向うから提灯が近寄つて來た。それは助手であつた。

『や、お歸りでしたか。』

さうずらと思つて、迎へに來たとこだで。』
『丁度よかつた。それぢや、停車場前に荷物を賴んで置いたから、持つて來て吳れないか。』
『ようがす……助手さんも、何でもすぐ後から來る筈だで……さつきもな、三時に迎へに行つたんだけれどもな。』
『さうだつてね。一汽車乘りおくれて了つたものだから。』
『そんなこんだらうと思つたゞ。』爺はかう言つたが、『ぢや持つて來やすで。』かう言つてすたく町の方へ行つた。
其處からは丘の上の新しい測候所の赤い青い灯が高く美しく仰がれて見えた。山の夜氣は冷やかに若い細君の肌に染みるやうに感じられた。
『あすこだよ。』
かう所長は指して見せた。
『さうですか。』かう若い細君は言つたが、『遠い、』とも『大變にある。』とも言はなかつた。親達を離れて遠く夫に從つて來た身の上を考へながら若い細君は步いた。大きな湖水に面した城下町に生ひ立つた娘は、かねて噂には聞いてゐたが、逢つたのは僅かに二三度で、急に此方に貰はれて來ることになつたのであつた。若い細君は眼も廻るやうな色彩と混雜と怱忙との間に、忽ち自分の境遇の變つて行くのを

うなんて言つてました。』

『汽車に乘りおくれたもんですから。』

皆なじろ〳〵と新しい妻らしい女の方を見たが、しかしそれに就いては誰も何も言はなかつた。所長は大きな手荷物はあとにして、信玄袋一つだけを持つて、そのまゝ停車場を出たが、それさへ持つてゐつて吳れるものがないので、仕方なしに、そのすぐ前の雜貨店に寄つて、誰かに持つて來て貰ふやうに賴んだ。雜貨店の人達も外に立つてゐる女の方をじろ〳〵見た。

町の灯を外れて了ふまで、二人は何も言はずに步いた。遠い故鄕で結婚して、そのまゝ急いで出發して來た二人は、夫婦とは言ひながらまだ何處かに打解けられずに殘つてゐる感情のやうなものが殘つてゐた。長い汽車の中でも大抵は並んで坐つたまゝ用事のある口しかきかなかつた。

『さびしい處だらう?』

『えゝ。』

また默つて步いた。

『それに、寒いね、矢張……』

『さうですね。』

分署の前を越さうとする時、すれ違つたのは、かねて傭つてある爺であつた。『おゝお歸りか。屹度

日が暮れてからまださう時間は經つてゐなかつた。山際の餘照はもうすつかりなくなつて了つたけれど、何處となく薄明がして、花の匂ひがそことなく靜かな夜の空氣に雜つてゐた。停車場前の町は灯にかがやいて、晝間見たとは違つて、いかにも賑やかな町のやうに思はれた。何處かの料理屋で、さぼしの彈く三味線の音が靜かにした。山の霧がしつとりとした空氣を重くした。

八時十分の下りの汽車を停車場では待ち構へてゐた。旅客が五六人切符を切つて貰つて、レールを渡つて向う側に行くのが薄暗い灯に微かに見えた。驛長、助役、つゞいて後れて入つて來た巡査は劍を押へて急いで向うに行つた。東京を十二時に出た汽車は、幾多の山や野を越えて、今しもこの山の停車場に入つて來ようとしてゐるのであつた。忽ち汽車の響が遠くにきこえたと思ふと、信號の赤がぱたんと下りて、つゞいて汽車は次第に此方へと近寄つて來た。

汽車が留まると同時に、二等室から若い背の高い中折を冠つた洋服姿の男と、コオトを着た髪を島田に結つたほつそりした色の白い綺麗な二十になつたかならないか位の女とが下りた。女はきまりがわるさうにつゝましやかに男のあとにつゞいて歩いた。驛長も助役も測候所の所長の顏をすぐ見て取つた。

『今、お歸りですか。』

『遲くなつて了つて。』

『さつき助手さん達がお迎ひに來てましたつけが……何か都合がお出來になつたんだらう、明日だら

明けるわけにも行かないので、久しくしない墓參もしたいし、兄の許にゐる父母にも逢つて來たいと言ふので、公に暇を貰つて、そしてかれは出かけて行つたのであつた。

ある日、助手はその細君に言つた。

『矢張、さうだよ。』

『さうでせう？　屹度さうだと思つた。』かう言つたが、『手紙が來たんですか。』

『あゝ。』

『それでは伴れていらつしやるんですね。』

『さうらしいな。はつきりは書いてないけれど……』

『ぢや、何處か、急に一軒、私達のゐるところをさがさなくつちやなりませんね。』

『さうだね。』

『好いとこがあれば好う御座んすけども……』

『なァに、なけりや當分一緒にゐても好いやね。』

『でもねえ……』細君は考へて、『矢張、所長にならなくつちや駄目ね。』

助手は默つてイヤな顏をして、ついと向うに行つて了つた。

助手の方は酒も飮んだが、所長はビール一二杯ですぐ顏が眞赤になつた。『吉田さんは酒の方は駄目ですね。』助手がこんなことを言つて笑ふと、『本當に私には酒は駄目だ。どうしてこんなものが旨いんだらうと思ひますからね。第一、あとが苦しくつていかん。』かう言つて、好きな蕎麥の方にすぐ箸をつけた。

内部が漸く整頓した頃には、村長だの、村の銀行の頭取だの、郵便局長だの、病院長だのが交々やつて來て、据ゑつけた晴雨計だの風位をはかる機械だのをめづらしさうに見せて貰つた。をり〳〵は所長も出て行つて說明した。『はゝア、それでは、此處の測候所は天氣の方ぢやないんですな。雨量ですな。成ほど、雨量の大小、山林の濫伐につれての川の暴漲、さういふ事務の方ですか。成ほどな……』かう感心したやうにしてさういふ人達は聞いた。

春は山は鳥の聲が多かつた。鶯が頻りに好い聲を立てゝ鳴いた。山鳩、雉子、四十雀、何うかすると遠くで、閑古鳥などが鳴いた。助手の細君は、暖かい日當の好い井戸端で洗濯物などをしながら、をりをりあまりに好い鶯の聲に思はず手をとめてそれに聞き惚れたりなどした。

かと思ふと、再び冬になつたかと思はれるやうな日もあつた。朝、霜は白く屋根に置いた。さういふ日には、山は低く低く見えて、襞といふ襞が一つ一つそれと指さゝれた。『寒いわけだ、二十八度だ。』などと助手は細君に言つた。

所長は四月の中頃から、故郷の方へと出かけて行つてゐた。事務を始めてからでは、さう長い間を

山獨活は出來たかな、俺も行つて見ず。』かう言ふ聲は其處にも此處にも起つた。山の草の刈しきにかゝる前に、春の山の獲物を村の人は出かけて捜した。

『好い氣候になりやしたな。』

『天氣が好いでな。』

かういふ風に樂しさうに人々は挨拶を交した。

その時分には、測候所の設備も段々整頓して來てゐた。戸外の寒暖計の設置も出來れば、屋上風位をはかる機械の取附も出來た。停車場から七八町の間、ところ〴〵に電柱を立てゝ、工夫が毎日丘の上までの電信線の延長工事を急いでゐたが、それももう眞菰の茂つた池の畔まで達して來てゐた。天氣豫報をかゝげる爲めの白いペンキ塗の木柱なども高く立てられた。森林測候所といふ大きな表札が何時かけられたともなく門にかけられてあるのを村の人々は見た。

所長も其後度々來たが、助手が細君と先づ一緒にやつて來て、兎に角其處で新世帶を始めた。始めは代議士の別莊にゐる爺さんが、頼まれて使ひなどに行つたが、何うしても一人小使がゐなくつてはゐられないといふので、爺さんの知つてゐるもので、水吞百姓の六十ほどの爺がそこに雇はれることになつた。

助手は近くの林の中から山櫻を一枝折つて來て、それを酒の空罎にさして、室内の卓の上に置いたりした。

の人々は、無爲と泥醉と歡樂とから覺めて、徐々畠や野や山に眼と心を向けなければならなかつた。いつとはなしに野の道は乾いた。靑い草が一日增にその緣を增して行つた。農夫達は久しい間閉ぢ籠つた窖の中から急に出て來たといふやうな顏をして、野や丘を步いた。

山の雪はまだきら〳〵と日に輝いて、重なり合つた奧の山々には嚴冬がまだわびしく藏されてあつたけれども、流石に町や村落や停車場附近には、のどかな柔らかな春の氣分が漲り渡つて、人々の顏にも樂しさうな色が漂つて見られた。小さなしかし水の多い谷川の岸で物を洗つてゐる女、路傍の二階屋から靜かに洩れてきこえる機の音、カアテンの中から白い顏を出してゐる病院の看護婦、ある日當の好い廣場には、子供の赤い襁褓だの足袋だの着物だのが干してあつた。

東京の花が葉櫻になる頃には、山の藪や林の中にもチラ〳〵山櫻が雜つて咲いた。梅も桃も櫻も一緒に咲くといふ山の春の到着は花やかであつた。草は忽ちにして綠を深くした。丘の下の池にも、眞菰や蘭がツン〳〵と芽を出して、春の日にめづらしいやうな碧い空をそこに映してゐることなどもあつた。冬の雪道、つゞいて雪解の泥濘の深い道、それに比べて、駒下駄で步けるやうになつた路は、何んなに山村の人達に快い自由を與へたことであらう。『路が好くなつたので、これから一捗ぎだ。』山奧の製板所の方へ行く運送車の車力は、こんなことを言つて、のんきさうに坂になつた山路を登つて行つた。

山に一日遊びに出かけて行つた人達は、歸りに山獨活や蕨を一背負負つて歸つて來た。『もうこんなに

『なアに、分署長位なもんずら？』

『判任官かな。』

『さうずら？』

停車場の郵便局の一室では、わざ〳〵その俸給を調べるために、職員錄などが取出された。助手に細君のあることはわかつてゐるが、所長に細君があるかないかといふことも話の材料になつた。測候所の丘の下にある飮食店などでもそんな話が二三の人に取換された。『まだ無いんだッて言ふぢやねえけ？』

『俺も見たけども……まだ若い書生さん見たやうな人だぞよ。』

『さうだつてな……。』

『好いなア、あゝいふ家をお上で拵へて呉れるんだで……』

『本當だ……』

『それから思ふと、小學校の先生さんなんか詰んねえな。わづかな月給で一日働いて、それでお喰も碌々養へねえッて言ふだで。』

『でも、あそこに測候所が出來たんで、賑やかにはなつて好いやな。』

深雪に閉ざされた山が次第に春になつて行くさまは、何とも言はれず晴れやかに且つ樂しかつた。村

は置かれなかつた。監督官署では、遲くも五月からは事務が執れるやうにならなければ困ると言つてゐた。

『今年の初めから、着手する筈なのが、寒いのや、普請が出來上らないのやらで、延々になつてゐたんですからね。』などと一緒に來た役人は說明した。

所長や役人の話では、所長の他に助手が一人來るらしかつた。助手ももう決つてゐた。その人は所長よりは年上で、今年二十五になる細君がゐた。『あの人に來てゐて貰つて、當分世話して貰ふんですな。』

『まア、奧さんが來るまではね——』

にやにや笑ひながら、役人の方が言つた。

『何に、自炊でも、構はんけども……』

『すぐ、來ますよ。』

役人は押しかぶせるやうにして笑ひながら言つた。

若い所長は一夜停車場前の旅舍で泊つて、急いで歸つて行つた。村ではそれからそれへと新たに赴任して來る測候所長のことが語られた。

『さうだつてね。まだ若い人だつてね？』

『あゝいふ所の所長なんか、いくら位月給は取るもんかな。』

南向の緣側には、日が一面にさしわたつて、こんな高い山の上とは思はれないほど暖かであつた。『これはのんきだ。暖かくつて好い。』かう言つて、若い所長はそこに寢轉んで見たりした。賴まれて來た別莊の爺さんが茶を沸して持つて來た。

『風はありますけども……さう寒いッて言ふほどでもありません。』かう村長は冬の生活の話をして、『まア、雪は仕方がありませんが、その代り夏は極樂ですから。』

『いや、寒いのは、そんなに閉口しない方ですから。』

元氣よくかう若い所長は言つて、『日用品は停車場附近で大抵間に合ひますな。』

『まア、大抵はあそこで間に合せて居りますがな。好い物や旨いものはありません。それにはK町か東京でなければ――』

『それは仕方がないよ、君。』

傍から役人は言つた。

若い所長に取つては、これから機械の運搬や、晴雨計の据附や、林中に、乃至は土中に設けなければならない氣象機械や、風位を計る機械や、さういふものの設備を第一にしなければならなかつた。卓が幾つ、時計が幾つ、椅子が幾つ、さういふことまで心配して書き出さなければならなかつた。それに、さういふすべての物は、皆な東京で買つて運んで來なければならなかつた。電信の工事も一刻も延して

などと人々は噂した。その若い背の高い人は、靴のよごれるのを氣にしながら、『何うも路がわるいでなア。』かう言つて、路の隅の方の殘雪の上を拾ひつゝ歩いた。

丘の上の測候所の見え出した時には、『はゝァ、あれがさうですか……』かう言つて、嬉しさうにしてそれを見上げた。丘の上には午前の日が明るく照つて、大きな川の深く入込んだ谷の山々の襞が手に取るやうに見えた。『あれがN嶽ですね。はゝァ。あのちよつと山の上に頭を見せてゐるのがK嶽ですか。』こんなことを村長や役人に言つた。

丘を登り切つて、新しい測候所の門の前に立つた時には、流石に周圍の眺望のすぐれてゐるのに心を奪はれたといふやうにして、『好い處だ、好い處だ。』と言つて立盡した。

所長になる人は、年はまだ二十八九にならなかつたかならない位であつた。學生時分から、山に入つて、深山の觀測に深い造詣を持つてゐた。一昨年の冬は、十一月末まで、日光の男體山の頂上にゐて、高山の冬の肝要な觀測をした。寒いのも寒かつたが、水のないのと、風呂を沸すことの出來ないのが一番困つた。一週に一度づつは、仕方がないので、あの急勾配を下の湖水のほとりまで下りて來た。またその時分は獨身であつたことなどを頭に描きながら、樂しい心持で、測候所の内部から自分達の住む家の方まで見て廻つた。

『これで少し木を寄附させますから。』村長は家の前のガランとした庭のところに立つて言つた。

『まだ、所長さんはきまりませんか。』

『もう大抵きまつちやゐるだらうとは思ふけれど……』

『御存じありませんか？』

『まだ知りません。』

かうその役人は言つた。その時は代議士の別莊は不便だと言ふので、停車場の旅舍の二階で、村長や土地の有志が集つて御馳走をした。役人は一晩泊つて『寒いところだな。冬はとても我々には住んでをられんな。すつかり風邪を引いちやつた。』などと言つて急いで暖かな都會の方へ急いだ。

所長になる人の始めてやつて來たのは、三月の末近い頃であつた。矢張その時も前の役人の一人と一緒にやつて來た。東京ももう花が咲くといふ頃であるだけに、山でも流石に寒氣が弛んで、谷川が音を立てゝ流れ、日當の好い處には、青い草などが美しく目新しく萠え出してゐた。簾のやうに軒に下つた大きな氷柱も今は絕えざる雨滴に變つて、停車場から丘の方へ行く路は泥濘になつてゐた。町の人達は背の高い黑い外套を着た、まだ割合に若い人と、前に度々見た髯の濃い役人と村長と三人づれで、日影の明るい泥濘の路を拾ひ拾ひ步いて行くのを見た。

『あれが、側候所の所長さんずら？』

『さうかも知んねえ。』

ず、汽車のみは時間通りに其處に來て、喘ぐやうにして凄じく黒い煤烟をあたりに漲らした。停車場の驛員達は厚い外套に身を包んで。『F、F、』と呼んで歩いた。

常に此處等を通る旅客は、汽車が停車場を出て、少し行つた所で、代議士の別莊のある丘の方を見て、『あゝあれが今度出來る測候所かや？　はァ、好い所に出來たな。もう餘程出來たな。此處も段々ひらけて行くな。』などと言つて、一面に白い雪の上に鮮かに新しく見えてゐる半ば出來かけた家屋を眺めた。

請負の手から監督の手に渡されてからも大工はまだ二三人入つて、不自由なところを直したり、家屋の周圍の柵を拵へたりしてゐた。しかし二月は寒いさかりで、山の雪は眼を痛めるばかりに眩く明るくあたりに照つた。そこに通ずる丘の上の路の往來も自由でなかつた。で、人々は春の來るのを待つやうにして唯手をつかねてゐた。側候所に必要な器械や設備や電話や、さういふもの丶取附けも出來ずに、そのまゝ一日一日と經つて行つた。

それでも監督官署の役人は、下調に一度雪の中を訪ねて來た。役人の眼には、豫想以上に建物のよく出來上つたのが映つた。所長の住宅の方も、小綺麗に便利よく出來てゐるのを見た。役人は大きな屋根のついた井戸を覗いて見て、『深いな。これぢや掘るのが大變だ。金がかゝるわけだ。』などと言つて、繩をたぐつて水を汲んで見たりなどした。

若い男なども居た。測候所を請負つてゐる男は、毎日のやうにそこに入浸りになつてゐた。村長が路などで逢つて、その話をすると『なァに、二月にや出來るだ。寒くつて、……それに雪が深いでな……。正月からは眞劍にやるだよ。』かうその請負の男は言つた。

丘の上の建築小屋には、平造といふ大工が留守番に泊つて、其處で寢起をしてゐたが、ある時、『何うもあやしいぞ。あそこから女が出て行つたッて言ふ話だぞ。』などといふ噂が立つた。何でもそこから出て丘の下を停車場の方へ女が歸つて行つたといふことであつた。『そんなことあんめい。平造は固いでな。』かう打消すものもあつた。『お嗅ぢやねえか。それを見違へたんぢやねえか。』などとも言つた。

しかし正月が過ぎて、再び丘の上に鉋や釿の音のきこえる頃には、平造の姿はもう其處に見えなかつた。女は向うの村の亭主持か何かで、それが知れると、男と一緒にすぐ駈落をして了つた。

建築が出來上つて了ふまでには、其他にも種々なことがあつた。若い大工は腸チブスを病んで死んだ。ある村の青年は、さぼしに夢中になつて、伊那の方へ行つて歸つて來ないので、村で大騒ぎをした。山裾の村の大盡の息子は、町の藝者に深くなつて、何うしても一緒になると言つて、遂にはそれを請出して、停車場の前に圍つて置いた。

かうした事件と物語との間にも、汽車はいつも同じやうにして、大きな山脈を向うから此方へと凄じい響を立てゝ登つて來た。停車場も停車場前の町もすつかり深雪に埋れてひつそりしてゐるのに拘ら

村の青年達は、停車場へ行く途中をわざわざこの丘の上までやつて來た。もう建前の濟んだ家を見て、『いつ出來るら？　今年一杯に出來るらか？　ちよつとむづかしさうだな。』などと言つた。青年達が同じ小學校に學んだ若い大工などもその中に雜つてゐた。

やがて十一月の末には雪が來た。凄じい雪、深い雪、北國でなければ容易に想像することも出來ないやうな雪だ。山も高原も丘も松原もすつかり一面眞白になつて、路も林も何も彼もわからなくなつた。丘の下にある小さな池には、厚い氷の張つた上に雪が積つて、小學校の生徒が旗を立てゝ揃つてスケートなどをやつてゐた。

『何うせ、來年だ。春になんねけりや、家が出來たッて、人が來やしねえだ。』こんなことを言つて、請負や大工は怠けた。山村の人達に取つては、雪に降り込められた冬三月が一番樂しい面白い時であつた。かれ等にはもう用事といふ用事はなかつた。家々に出來てゐる火燵、その上に置いてある板、何ぞと言ふとすぐ酒が其處に持ち出された。一升五十錢よりは高くない地酒、寒天を三杯にした肴、醉ふとかれ等は卑近な田舍唄などを唄つて騷いだ。

ところどころにある茶盆子屋にも、白粉を塗つた色のいやに白い女などが澤山にやつて來て、農夫達の一年中働いた金を目當てにした。其處にも此處にも小さな事件と小さな物語とが起つた。流れ流れて此處に來て、義太夫の師匠をしてゐる中年の女の許には、狹い家が一杯になるほど男が押よせて行つた。

かう他の一人が合せた。

その敷地になる山畠は、半は桑が栽ゑてあり、半は低い松林になつてゐた。その桑畑には、遠い山裾の村から女や男が來てせつせと働いてゐた。村長はぐるりと廻つて見て、『まア、この位のところまであれば澤山ですな。』などと言つた。

で、それが濟むと、村長は役人達を代議士の別莊に伴れて行つて、二階も下も明け離して、停車場附近の料理屋から取寄せた肴でビールなどを勸めた。明るく四面を取卷いた硝子戸を透して、女郎花や藤袴が美しく咲いてゐるのが見えた。山と山との峽からは雲が綿のやうに渦まき上つた。『日本アルプスの槍が見えるな。好いところだ。』二階から下りて來た役人の一人は言つた。

工業中は丘の上は賑やかであつた。松林の前に出來た小さな建築小屋、そこには大工が毎日五人も六人も入つて、長い削り臺の上に板を並べてせつせと鉋を使つた。もう立ち始めた風に鉋屑は彼方此方へと散つた。ある霜の寒い朝には、大工達は小屋の前に大きな火を燃して、仕事にかゝる前、長い間そこで體を煖めたり雑談をしたりした。村で起つた種々な出來事が絶えず其處で語られた。時には棟梁と請負の男とが殘つて、職人に酒を買つて來させて、暗い三分のランプの下で、夜遲く酒を飲んだりした。トンカントンカンといふ響が潤い高原を越して停車場のあたりまで聞えた。

山又山の中に入つてゐて、獵師や探檢者でなくては容易にその奧へは行くことは出來なかつた。
測候所が出來るといふ話は、處々に散點してゐるさびしい山村の人達の耳を欹たゝしめた。村長は先に立つて監督官署から視察に來た髯の生えた役人達を彼方此方へと案内した。或は村落、或は丘の上、土地の代議士の別莊のあるあたりからずつと向うの方までも伴れて行つて見せた。何處も彼處も、測候所を置くには適當なところではあるけれども、中でも濶々とした眺望の好いところを搜す必要があつた。
『冬は風はひどいだらうな。しかしさういふ處の方が必要なんだから。』こんなことを言ひながら役人達の一人は笑つた。最後の丘の上に伴はれて來た時には『あゝこゝが好い。こゝが一番だ。こゝなら富士も見える。後の山の具合も好い。此處にきめやうぢやないか。千坪、それだけありや澤山だ。こゝからずつと路をひらきさへすれば、停車場へだツてさう遠くはない。』かう言ひながら、役人達は前に打渡した裾の大きい高い峰を仰ぐやうにして見た。
『好い處だなァ。』
『本當だ。此處に來る所長は仕合せだ。それは冬は寒いだらうが、それはまァ仕方がない。測候所なんて何うせ寒いところにするもんなんだから……。まァ、それよりも停車場が近いから好いやな。運がわりいと、三里も四里も山の中に入らなけりやならないところもあるんだからな。』
『さうとも……此處に出來れば、測候所としてはまァ便利な方だ。』

丘の上

普請が出來上つて監督の手に渡したのは二月の中旬であつた。測候所になる建物が一棟、所長の住む小さな家が一軒、周圍に取廻した柵、大きな門、門から眞直に下に向つて下りて行く道路、これだけで總て二千七百圓で村の大工が受負つた。契約では、去年の秋の紅葉の頃から、その年一杯にすつかり落成させて引渡す筈であつたが、何や彼やと礙ることがあつて、年も暮れて、山には雪が深く白く朝日に輝き渡つた。

議會で可決して、日本全國の各所に亘つて、大きな河の水源地に、主として雨量を測る爲めに測候所が五つ六つ置かれることとなつた。これも矢張その一つで、そこの向うの丘を越し、松林を越し、村落を越して、大きな凄じい山と山とが聳えて、その間から日本での三急流の一つの大きな川が深い谷をつくつて流れ出して來てゐた。平生は石川で水といふほどの水もないけれど、一度雨が降ると、忽ちにして張溢して、下流の平野は常にその濁流の奔跳する處となつた。上流はまた上流で、谷深く二里も三里も

それには見覺えがあつた。女はたしかにその船に乘つてゐた。船は次第に近く近くなつて來た。やがて大勢の旅客の中におせんの白い顏が此方を見てゐるのがはつきりとかれの目に映つて來た。女にも長い髯を手で扱いてゐるかれの姿は見えたらしかつた。女は此方を見て笑ふやうな形をした。船は次第に岸の方へ近寄つて來た。

荷物はあとから運んで貰ふことにして、船を捨てると、そのまゝ女は直ぐにかれの傍に歩み寄つた。女は明石か何かの派手な着物に黑繻子の帶をしめた。『手紙が屆くまでは何んなに心配したか知れませんでしたよ。』かう言ひながら女はかれに寄添ふやうにして歩いた。

かう誰も彼も言つた。

宿に歸つて一時間ほど經つと、さつき賴んでやつた手紙の返事を深切にも部長が持つて來て呉れた。おせんの方にも別に變つたことはなかつた。唯、かれの行方について心配したといふことが細かに書いてあつた。かれを思つた七言絶句が手紙のあとの方に附け加へてあつた。

『何うです、船は？』

『もう通すには通しますが、何しろ、まだあの急流で、それに此方にも、向うの方にも旅客が一杯溜つて、川明きを待つてゐますから、奥さまはもう少しあとになさつた方が好いでせう。今日は、日暮まで精々船が二杯位しか出ませんから、明日になさる方が好いでせう。さうすれば、水も餘程ひきますから。』

『では、明日の午前にしませう。』

で、かれはまた手紙を書いてその旨を對岸の女の許に知らせた。其夜かれは始めて穩かな夢を結んだ。

あくる日の午前、その船の着く頃を見計らつて、かれは再びその堤防の渡場へと行つた。日は美しく河水を照した。山は晴れて碧に、曩日越えて行つた高良山脈の障壁を立てたやうな連亙には、白い雲が渦まき上つた。矢張船頭四五人で力を盡して漕いでゐるらしい渡船は、次第に此方へと迅い瀨を横ぎつて近づいて來てゐた。

派手な蝙蝠傘が一つ日に光つて見えた。

それを船頭にわたした。
急いでかれは出かけた。堤防には大勢人が集つて、ワイワイ騒ぎながら、最初の川明きの試驗の船の出るのを見てゐた。
屈强な骨節の逞しい銅色の肌をした船頭が五六人、白い洋服を着てサアベルをガチャガチャさせた巡査が二人、船は大きな夫丈さうな傳馬で、艫が五挺まで船の前後につけられてあつた。
夏の日影は暑くキラキラ川水に反射してゐた。
一番先に船頭が乘る。つゞいて巡査が乘る。最後におくれてやつて來た部長が其處に立つて見てゐるかれに眼をつけて、丁寧に挨拶して、其まゝひらりと飛び乘ると、船はするすると纜を解いて岸を離れた。
凄しい迅い流である。五人の船頭が銘々全力を擧げて櫓に力を入れてゐるにも拘はらず、船は見る見る下流へ下流へと流されて行つた。
白い服を着た巡査の一人は立ち、一人は腰かけて何か話してゐるのが此方から手に取るやうに見えた。櫓をあやつる船頭の腰は深く大きく曲つて、揃つて櫓を漕ぐさまがあやつり人形か何かのやうに思はれた。船は濁流に押流されながら、巧に迅い瀨を横ぎつて、次第に對岸の方へと小さくなつて行つた。
『大丈夫だ、あれなら大丈夫だ。』

『さやう……きかせませう。』

しかしまだ容易に川は明きさうにもなかつた。川の開く時には、一番先に、屈強な船頭を七八人集めて、巡査が一人二人それに乘つて、危險か危險でないかを十分に探檢して、その上でなくては、一般の人達は渡さないといふことであつた。ある時、早まつて船を出して中央で顚覆して五六人溺死したことがあつたが、その以來、ことにそれがやかましくなつたと旅舍の主人は話した。

好い天氣が續いた。碧の濃やかな山の連亙には、美しい夏の日が輝いて、白い雲がふわふわと靡きわたつた。庭樹には蟬などが鳴いた。

品の好い老人姿のかれが、長い白い髯を手で扱きながら、ぶらぶらと町や堤防の上を歩いてゐるのを町の人々はをりをり見懸けた。河の水はまだ赤く濁つて迅く凄じく流れて行つてゐたけれども、堤防の水量の照尺は既に七合目に降つて行つてゐるのをかれは見た。

『川が明きますさうですから。』

三日目の午後に、かう言つて若い女中が知らせて來た。

最初の探檢の船であるから、普通の人は乘せないが、用事があるなら、手紙でも何でも屆けてやるといふことであつた。で、かれはおせんにあてゝ走り書に手紙を一通書いて、それを女中に賴んだ。女中は

ら慰めた。女が一人さびしく二階の欄干に凭つて、この濁流を見渡しながらかれの行方を心配してゐるさまがありありと想像された。

夜は濁流の上に大きな盆のやうな月が浮んで、波が瀲灔として美しく碎けた。奧の山の黒い影ははつきりと明るい夜の空を劃つて見えた。

かれが名高い學者であるといふことは、郵便局警察署あたりから段々町の人々にも知られて行つた。それに、前から此處を通つて日田から耶馬溪へとその人が入つて來るといふ噂を耳にしてゐる人達も少くはなかつた。ぽつ〳〵訪問者がやつて來た。宿の主人は、『先生とはちつとも存じませんでしたから、飛んだ失禮を致しました。』かう言つて改めて丁寧に挨拶に來た。

矢張淡窓門下で、町で醫師をしてゐるものがあつたが、その人がそれときいて一番先に詩や文を持つて來て是正を請うた。『さうですか、奧さまが川向うにゐらつしやるんですか。それは御心配ですな。しかし長いことはありますまい。少しは水が引いたやうな話ですから、水は引き始めさへすれば、どんどん引いてまゐるものですから。』などと言つて慰めた。

棊を打つたり山水の話をしたりして一日二日をかれは其の一間に暮した。をりをりかれは立つて行つて訊いた。

『まだ、川は明きませんかな。』

『何うも、あとがこわいで、まだ何うして中々油斷がなりませんな。』

かうある人は言つてゐた。『明日が瀨戸でさ。これで、澤々の水が多いと、天氣になつても、何んなことがあるかわかりません。』

『では、川の開くまではまだ日數がかゝりますかな。』

『さうですな。』考へて、『まだ、ちよつこらではありませんな。順當に行つても、二三日はかゝりますな。』

『よくあるのかね、かういふことが――』

『一年に二三度は心配させられますよ。一昨年、大水でしたが、その時はひどかつた。』かう言つて、其男はその時のことを話してきかせた。

かれの姿は長い堤防の上に見えた。いかにもあたりの光景は慘としてゐた。幅三四間の間は一面の濁流で、處々は渦を卷いて、中央は迅く迅く瀨の音を立てゝ流れた。見てゐると、種々なものが流れて行つた。木片、家具、簞笥の抽斗、犬の死骸、藁屋根のぐし……。

沿岸のある村は全くその濁流に浸つてゐるやうに見えたり、河沿の林が半ば梢をその上に出してゐたりした。夕日が血のやうに佗しく赤く水を照した。

『でも、向うの村は、地盤が高いから、水をかぶるやうなことはない。』かうひとりで言つてかれは自

法はなかつた。』『さうですな。川が通れないんですから、川向うに知らせてやることは出來ませんな。……さやうですか、日向神岩の方へお出かけで、奥さまが川向うに御滯留ですか。どうも生憎な雨で、……』かう言つて旅舍の主人は揉手をした。

かれは町の郵便局に行つたり警察に行つたりして種々と訊いて見たが、矢張、何うすることも出來なかつた。山の中で打つた電報は無論おせんの許にはとゞかなかつた。

その旅舍では、かれは小さな庭に面した下階の奥の一間を借りた。街道の町の旅舍だけに、室のつくりも瀟洒に、木口も立派に、天井なども高かつた。床の間の欅の一枚板は鏡のやうにツルツル光つてゐた。淡窓の詩の軸がそこにかけてあつたりした。

幸に、夕方から雨は晴れて、ところどころに靑い空が見え出して來た。

『これは好い鹽梅だ。』

『晴れるかも知れない。』

かう人々は言つた。

夕方から散歩がてら出懸けて行つたかれは、街道の渡場などの既に全く水に浸されて、濁流が凄じく渦を巻いて、此方の堤防の岸まで押寄せて來てゐるのを見た。水は既に照尺の九合目近くまで達してゐた。

堤防の上には大勢人が集つてガヤガヤ言つてゐた。

雨は降つたり止んだりした。

四時すぎにかれ等は漸く豆田街道のB町へと着くことが出來た。いくらか阪になつてゐる町は、風雨で洗つたやうになつて石が出てゐた。ひつそりしてゐた。しかしそのひつそりは事のないひつそりではなくて、陰に大事をつゝんだひつそりであるといふことがかれにはすぐ直覺で知れた。筑後川の水聲は暗い空を破つて凄じく聞えた。

町で一番大きな旅舍に草鞋の紐を解いたかれは、洪水の憂が頻々として町を騷がしてゐるといふことを知つた。町から十五六町隔てた村は既に半ば水に浸つて、住民は今朝から午後にかけて續々として避難して來てゐるといふことであつた。

『川留めは、昨日の午後の一時でした。』

かう旅舍の主人は言つた。

『ぢや、無論、打つた電報はとゞかないな。』

『電報?』主人は考へて、『貴方樣がお打ちになつた電報、さやうですな、電報は何うで御座いますか。矢張、川留めになつちや駄目で御座いますかな。』

『まァ、仕方がない。』

かう言つて、かれと案内の百姓とは兎に角其處に泊ることになつた。何うしやうにもそれより他に方

『あれが筑紫二郎かな。』

『さうぢやな。』

『ふむ。』

かう言つて凝とそれに見入つた。山脈の根元に凭つたやうになつてゐるB町の白壁の家が、此方に小さく固まつて見えた。

『來た村は何處に當るな。』

『そら、向うにこんもりと、小高い林があるぢやらうな。その此方に川が流れてゐて……。あの林の手前にぽち〳〵と人家が見える。あれがさうぢやな。』

『あれが一昨日出て來た村か。』

『さうぢやな。』

かれはぢつと其方の方を見た。そこに女とかれの旅の行李とが留つてゐるのである。とても女は川をわたつて、町に來てゐさうもない。昨夜の電報で、今朝川を渡るやうに言つてはやつたが、果して完全に渡られたか何うかわからなかつた。

しかしそんなことを心配してゐたつて仕方がなかつた。兎に角B町まで行つて見れば、川の出水の模様もわかる。で、かれは下り路を急いだ。

見ると、萬山の重なり合つた間に雲が凄じく浮動して、或は暗く或は灰色になつて見えてゐた。前の小屋の庇の下では、牡鷄が點滴に打たれて小さくなつて蹲踞んでゐた。

『何うもかう降りでは、川を旨く渡れゝば好いが、險呑だな。』其方の方に行く旅客は、店先で草鞋や脚半を着けながらこんなことを言つてゐた。

仕方がないので、かれはまた案内の百姓を伴れて出懸けた。百姓は矢張默々としてかれの前に歩いて行つた。山にかゝると、雨はまた一しきり強く降り出して、着莫蓙を透して着物がぬれた。わびしさ一通りではない。山の峽に其處に一つ此處に一つといふやうに村は見えてゐるが、ひつそりとして人氣もない、鷄犬の聲すら聞えない。

一里二里の間、かれ等は一人の旅客にすら逢はなかつた。

それでも午後の二時すぎには、かれ等は山脈の中を出て、朝倉平野を遠く一目に見渡すやうなところへと出てゐた。

『えらい水だ。』

百姓は思はず聲を立てた。

かれも其方の方を見た。一道の濁流の凄じく流れてゐるのがはつきりと帶を引いたやうになつて見えてゐた。一昨日渡る時、石原ばかりで碌々水もなかつた川とはかれには何うしても思はれなかつた。

『遅くなつて氣の毒ぢやが、それでは今から其處に使ひを出して與れまいか。』『案内の百姓を使つてやつても好いのだけれど、一日の行程に疲れたのをかれは思ひやつたのであつた。

『では使の者をさがして參りますから。』と言つて、主人は引込んで行つた。かれは懐中した財布の中からいつも離したことのない電報頼信紙を取出して、それに、

『カハヲワタツテBマチニユケ』と書いて主人の來るのを待つた。

主人は容易にやつて來なかつた。この雨の夜を衝いて一里の路をD村に行かうといふ使のものがちよつと見つからなかつたのであつた。しかし一時間ほどして、漸くその使のものが來た。かれは電報を頼んでいくらか安心した。

今夜は駄目にしても、明日早くならば、まだ川が越せぬやうなことはあるまい。兎に角渡つてさへ置けば、筑後川が水が出ようが、大洪水にならうが、痛痒を感じない。B町からすぐ豆田街道を日田の方へ行くことが出來る。かれはかう思つたのである。それに女は金も持つてゐる。氣轉もきいてゐる。僅かばかりの荷物を持つて川を渡る位のことは何でもないことである。あそこで頼まれた揮毫物はあとから郵送してやれば好い。かう思つてかれは樂々と足を伸して寢た。

夜、目覺めた時には、矢張、雨が盛に降つて居た。

翌日も空は晴れるやうな模樣はない。これでもう三日つゞけて降るのである。二階の窓を明けて外を

『しかし、仕方がない。』

で、二人は山道を通つてHからRへと出て行くことにした。その路を行けば筑後川の此方の岸に出るやうになる。此方の岸には、Rといふ町があつて、そこからは川を渡らずに、すぐ日田の方へ行けるやうになつてゐる。

で、その夜はC村へ泊つた。一泊で十分だと思つた行程が、またこれで一日延びることになつたのであつた。暗い行燈、わびしい室、酒は地酒のわる臭い匂ひがした。旅客達の語るところによると、果して、筑後川は水が出て、明日は川留めになるだらうと言ふことであつた。

おせんが一人で氣遣つてゐるさまが歷々と見えて、微かな心配がかれの胸に萠した。かれは旅館の主人を呼んだ。

『筑後川は大丈夫かえ？』

『まだ今日は大丈夫だッたが、明日は何うなるかわかりません。』

急にかれは問ったた。

『此處でも電報は打てるかな。』

『この村では打てませんが、これから一里ほど行くと、D村と言ふのがありまして、そこに郵便局がありますす。そこからなら打てます。』

『お前さ、何方へ行くだね？』
『Kから峠へ出て行くだが、橋が落ちちやKへ行けねえな。』
『Kにや、ひよつとすると、行けねえぞ。』
『ぢや、遠廻りするかな。』
『それが好いだ、その方が安心だ。』
すれ違つて二三歩歩きながら、
『旦那さ、仕方がねえ。遠廻りして行くだな。元、來た路は、何うも行けさうにもねえ。』
『今朝、渡つた橋ぢやな。』
『あれが落ちなけりや好い〳〵と思つてゐたんだが、何うも行くまでは持たねえらしい。遠廻りして行くより外しやうがねえ。』
『餘程遠いかな。』
『三里ほど廻りだ。その代り、山を行くだで、川がねえだで、山ァ越えて了ふまでは大丈夫だ。でも、この䨇梅ぢや、筑後川も水が出たんかも知んねえな。』
『それは困るな。』
『筑後川ッて川ァな。少し降ると、すぐ水が出て、往きかひが出來なくなる川だで、それも心配だ。』

かれは長い間額づいた顏を上げることが出來なかつた。

『一天萬乘の君の血統で、かういふところに一生を送られたのだ。そしてさびしく墓となられたのだ。』

かれはかう獨語せずには居られなかつた。父祖傳來の勤王の血が漲るやうにかれの脈に滿ちわたつた。かれは暫くして立つて、生きてゐる人にでも對するやうにその石碑を撫でさすつた。

かれの長い髯からは雨滴がボタボタと落ちた。かれは容易にその墓を去らうとしなかつた。

歸途に就きながら、かれは百姓の案内者に話した。言つて聞かせたとてわからないとは、知りながら、それを話さずにはゐられないやうな氣分が心に滿たされてゐた。

百姓は唯點頭いて聞いた。

案内の百姓は逢ふ人每に聞いた。

『橋は落ちやしねえかな。』

初めに訊いた時には、『まだ落ちたつて言ふ話やきかねえ。』と言つたが、二度目に訊いた時には、『己ア、つい、さつき通つて來ただが、もう落ちるばかりだつて言つてた。もう落ちたかも知れねえ。』

『それは困つたな。』

と、其男は、

この神岩から奥には、溪谷に添つて、W、M、Nなどといふ村落が散點した。これ等の村落は皆最後まで征西將軍宮に盡した人々の子孫の住んでゐるところであつた。これから奥を究むれば水源近くまで猶五六里あるが、親王の住んでをられたところはN部落で、そこに現に親王の墓が殘つてゐた。N部落から山を越して肥後の菊池の方へと出て行く路があつた。

風雨がまた一しきり盛になつた。

『晴れさうにもないな。』

『俺ア、また、水が出なけりや好いがと思つてゐる。ぐづぐづしてゐて、歸れなくなつちやそれこそ大變だから。』

こんなことを案内の百姓は言つた。しかし親王の墓のあるところまでは是非行かなければならないとかれは思つた。

深く折れ曲つた谷について、かれの姿は猶ほ見られた。一歩々々溪は次第に狹く、水の鳴る音は風雨の音に雜つて凄じく四面に反響した。川に凭るやうにしてそのN部落はあつた。

親王の墓の前に額づいた時には、かれの體は感激に餘つてぶるぶると戰いた。一堆の墓、それは周圍に竹藪をめぐらして、一方遠く谷に臨んだやうな位置にあつたが、詣づる人もないと見えて、花立もなければ花もなかつた。石には良成の二字と年號とが誌されてあるばかりであつた。

てたやうなものもある。編笠をかぶつた人間の形をしたやうなものもあれば、鬼の怒つて凝立したやうなものもある。一峰盡きて一峰來るといふ風で、かれはそぞろに旅の興を感ぜずには居られなかつた。雲の湧いて渦を卷く形などは、殊にかれをして顧望多時ならしめた。

しかし惜しいのは、風雨のために、溪流がすつかり濁つて、茶褐色をなして凄く渦を卷いて流れてゐることであつた。雄壯はあり、佳麗は何處にも認めることが出來なかつた。

突然、大きな奇岩が雲霧の中から現はれ出した。

『あれだァな、神岩は。』

かう案内の百姓は言つた。

流石に聞えただけあつて、めづらしい岩石だとかれは思つた。紀州の古座川の谷に何處かいくらか似てゐるところがあるが、感じは寧ろそれよりも深かつた。かれは風雨の中に笠を傾けて立ち盡した。

この神岩より奧には少貳大友の軍勢は何うしても入つて行くことが出來なかつた。良成親王の巢窟を覆すべく何遍となく計畫されて入つて來た軍勢も、皆此處から引返すべく餘儀なくされた。谷は狹く狹くなつて行つてゐた。一夫これを守れば萬卒も越ゆべからずといふ趣があつた。

『はゝあ、成るほど、歷史も、本で讀んでゐたばかりでは駄目だ。實際來て自身に踏んで見なければわからない。』かう思つてかれは往時を追想した。感慨が湧くやうに胸に簇つて來た。

雲のさまを何うかして七絶の轉結にしようと思つたりした。

時には後に置いて來た女のことが思ひ出された。ひとりさびしくあの旅舍の二階にゐる女のさまがはつきりと眼の前に見えるやうな氣がした。晝寢でもしてゐるだらう。でなければ、詩でも考へてゐるだらう。風雨に逢つて困つてゐる此方のことを想像してゐるだらう。行かなくつて好かつたなどとも思つてゐるだらう。『本當につれて來なくつて好かつた。この山の中で、この吹降りに逢つちや、それこそ熊野の二の舞だ。』かうひとりで心で言つて、ボッボッとかれは歩いた。そのをりをりにつけての女のやさしい情味や痴態などがつゞいて繰返して思ひ出された。ひとり微笑んで見たりした。

と思ふと、長い間、旅にばかりゐて、久しく逢はなかつた妻の暗い顏が見えてそしてまたすぐ消えた。

K村ではまだ早かつたけれど、これから先には碌に泊るところもないのと、暴風雨の路に疲れ果てたのとで、かれは兎に角其處に泊ることにした。天井の低い暗い二階の一間、その長押には字の間違つた漢詩の扁額がかけてあつたり、旅稼ぎの繪師の拙い山水畫の軸がかけてあつたりした。夜もすがら夢も結ばれぬばかりに風雨は暴れた。

曉近く風は落ちたが、雨は依然として止まなかつた。かれがK村の旅舍を出て、一里二里川に添つて歩いて、漸く日向神岩のある谷間へと近づいて行つたのは、其日の午前十時過ぎであつた。雨にぬれた岩石はわびしい灰色をして、次第に兩岸に欹つて現はれて來た。筍のやうなものもあれば、槍の穗を立

上さんはかう案内者に向つて言つた。

かれは雨の小止みを待ちながら、其處で持つて來た辨當を食つた。暗い顏をした亭主と汚い着物を着た子供とは圍爐裏の傍に默々として坐つて、めづらしさうにかれの長い白い髯を見詰めてゐた。

『今日は行けんかな。』

『さうぢやな、この吹降りぢやな。Ｋ泊りが、精々だなア。』

『何里あるな？　Ｋまで？』

『まだ三里ある。』

かう上さんは言つた。

少し小降になつたらと思つても、風雨は容易にその勢を減じなかつた。これでは蝙蝠傘では駄目だ。で、『笠を一つ讓つて貰ふかな。』かれは其處で賣物でないと言ふのを無理に無心して饅頭笠を一つ買つた。

『いつまで休んでゐても止みさうもないな。行かう。』

かれは先に立つて、降しきる雨を衝いて出かけた。着茣蓙を着てゐても、着物は絞るばかりにぬれて、長い白い髯からは、雨滴がボタボタ落ちた。百姓は矢張默々として先に立つた。

風雨に閉ざされた村落、赤く濁つて凄じく流れ落ちる溪流に沿つた赤褐色をした長い長い絕壁、深い深い泥濘の路、さういふ間でもかれは詩だの文章だのゝことを考へながら歩いた。山の峽から簇り上る

『左樣で御座います。』

『大したことはないかな。』

『左樣ですな。』

朴訥な百姓は何につけてもはつきりしたことは言はなかつた。百姓は默々として唯かれの先に立つて歩いた。

六十近くなつてゐても、しかしかれは昔の元氣を失はなかつた。六十餘州を經めぐつたかれ、若い時に東海道を九日で疾行したかれ、かれは風雨や山坂に辟易するやうな老人ではなかつた。

障壁のやうな高良山脈、それを峠まで行つた時には、天候は益々險惡になつて、風が凄じく樹を鳴らした。雨は車軸を流すやうに降つた。峠の茶屋に辛うじて驅け込んで行つたかれは、

『えらい荒れになつたな。』

『本當ぢやな。』

かう言つて其處にゐる上さんは出て迎へた。位置がひらけてゐるので、風の當り方が烈しく、一雲毎に小さな家屋はそのまゝ持つて行かれるかと疑はれた。上さんは二人を內に入れて置いて、すぐ前の雨戶を閉めた。雨は濺ぐやうに雨戶に降りかゝつた。

『日向神岩へかな。大變ぢやな。』

『何あに、行つて來る。雨にまけてゐては、旅は出來ない。それに、一日も早く耶馬溪に入りたいからな。』

『それもさうですね。』

で、かれは山行きの支度にと取かゝつた。草鞋、着茣蓙、桐油、それに大きな蝙蝠傘をかれは持つた。主人の言葉に從つてかれは案內者を伴れて行くことにした。やがて五十位の朴訥らしい百姓が饅頭笠をかぶつて旅舍の前にやつて來た。

『ぢや、行つて來るからな。』

『行つていらつしやいまし。』

おせんは二階の欄干のところに立つて、二人の姿の雨を衝いて丘の道を下りて行くのを見送つてゐた。雨はさう大して强くはないけれども、山には鼠色の雲がもくもくと浮動して、かれの行手の障壁のやうな山脈が且つ見え且つ隱れた。筑後川には苫を十分に葺いた舟が一隻二隻さびしさうにして通つて行つてゐた。二人の姿はやがて人家の陰にかくれた。

二人が川を渡つたり村を通つたりして、愈々山路にかゝつて行く頃には、雨が激しく降り出して來た。湧くやうな黑い雲が忽ちあたりを蔽ひ盡した。

『わるい天氣になつて來たな。』

な。奥さまも御一緒ですか。……は、左樣ですか、お留守番ですか。ちよつと女方には面倒な山路ですからな。』

『何うも、女をつれては、不自由でな。しかしまた不自由でないこともありますがな。』

こんなことを言つてかれは笑つた。やがて旅の行李の中から硯と墨と筆とが取出された。筆は太いのや細いのが簀にぐるぐると卷かれてあつた。おせんは硯に水を入れて、靜かに墨を磨つた。唐墨の好い匂ひが微かにした。

『少し致しませうか。』

かう郡書記が言ふと、

『いゝえ、これが私の役目ですから。』かう言つておせんは美しい微笑を頰にたゝへて、靜かに白い手を動かした。ランプの下にはやがて毛布がひろげられて、雪のやうに白いヌメがその上に置かれた。

『雨ですね。』

あくる朝起きるとおせんは言つた。

『仕方がないな。』

『もう一日お延ばしになつたら?』

おせんの姿は美しく見えた。

おせんは三味線も琴も彈いた。琴は殊に達者であつた。何うかすると、おせんはかれの晩酌に侍して宿の三味線を借りて三下りなどを彈いた。その夕も、好い心持になつて、相對して睦しさうに晩酌をやつてゐると、そこに土地の小學校長と郡役所の書記とがたづねて來た。郡役所の書記は、日田の淡窓の門人で、これから一里ほどある町からかれの名聲を慕つてわざわざやつて來たのであつた。

『さうですか。それは遠いところをわざわざ大變でした。』

かう言つてかれを迎へた。

詩の話、宜園の話などがすぐ出た。『さうですか、青村が東京に出たので、村上がやつてをりますか。あの男は、詩が中々上手だ。』

『青村先生は御存じですか。』

『よく存じてをりますとも。……役所にも一年ほど一緒にをりました。』おせんの方を顧みて、『お前も知つてゐるな。』

『青村さん？　よく存じてをりますとも……宅にもよく入らつしやいました。』

『奧さまでいらつしやいますか。』その人達はかう改めて丁寧に挨拶した。

來た人達は、ヌメだの唐紙だのを持つて來てゐた。『あ、さうですか、明日日向神岩へ。それは結構です

『本當ですね。』

『五絶か何か出來さうなもんだがな。』

『さうですね。』おせんはかう言つたが、別に考へるやうな樣子もなかつた。

旅中で、別に取繕つてもゐないけれど、髮やら扮裝やらに常に心を碎くおせんは、粧具を傍から離すやうなことはなかつた。丸髷などもいつも亂れずに、ちやんとして置いた。それに全體が小づくりで、色が白いので、年よりは若く、何うしても三十一二にしか見えなかつた。

『奧さんはお若いですね。』

かう到る處で言はれた。それに引かへて、かれの髯は長く白く垂れてゐた。をりをり手でそれを扱くやうにするのが、おせんの若い美しい姿と、好い對照をなして見られた。

そこは位置がやゝ高く、丘に凭るやうになつてゐるので、その下を流れる筑後川の流域がそれと一目に見わたされた。豐後の山の中から流れて來る筑紫二郎は、水も多く、流も迅く、苫を葺いた舟が揃つて通つて行くのであつた。白帆がチラチラと見えた。

『日田は向うになりますかね。』

浴後欄干に凭りながら、向うに重なり合つた連山の翠色を指しつゝおせんは言つた。日影を帶びた翠微は、半ば明るく半ば翳つて雲も迅く迅く動いてゐた。白地の浴衣に着替へて、襟にざつと薄化粧した

『六里……とても。七里、八里は御座いませう。それに、山路ですから、一晩泊りではちよつと難かしいかも知れません。』考へて、『それに、案内者もなくては――』

『案内がなくても行けさうなもんぢやがな。』

『中々嶮しう御座いますから。何しろ、少弐大友が何うしても攻め入ることが出來ませなんだ位で御座いますから。』

旅舍の主人の話では、良成親王の墓は、日向神岩の溪流からはまだ一二里も奧であるといふことであつた。『今日はもう遲う御座います。明日になさる方が宜しう御座います。』

『では、さうしよう。』

それは田舍の村によく見るやうな旅舍で、二階を下りたところが厨で、その向うには、水車が廻つてゐて、綺麗な水が淙々と響を立てゝゐる。前に畠がある。さゝげ、唐茄子、茄子、葱、馬鈴薯、赤い花がチラチラと綠葉の中に見えてゐた。

風呂は夕顏の棚の下に立てられてあつた。赤い襷をかけた若い婢が、頻りに火を燃やしてゐるのが二階の欄干のところから見えた。薄い紫色をした烟が靜かに靡き上つた。

『詩だな。』

欄干に凭つて見てゐたかれは、おせんを顧りみつゝ言つた。

せんについては深い嫉妬をも起さなくなつてゐた。老いた妻は、

『面白い女もあるもんだな。先生の妾に好んでなつて、あゝして、日本中をついて廻つて歩くとは！』

などと言つてゐた。

『何うする？』

『さうですね。行つて見たいにも行つて見たう御座んすけれど……』おせんは山の方を見て、『天氣が變りやしないかしら？』

『變るかも知れないな。』

『よしませうか。』

『ぢや、待つてゐるか……』

『何うせ、此處に戻つてお出なさるんでせう？』

『それは歸つて來る。』

『ぢや、こゝで待つことにしませう。それで何時お出でになります？　今日、お出でになりますか。』

『まア、その前に、樣子をきいて見なけれやならんが……』

で、かれは旅舍の主人を呼んで、良成親王の墓のあるところなどを訊いた。

『と、六里ぢやきかんな。』

おせんはかう言つて笑つた。

『熊野のやうなことはあるまいと思ふけれども……』

『あの時はひどう御座んしたね。馬もないんですもの。それに、土砂降りに雨に降られて、髪でも何でもすつかりぬれて了つたんですもの。』

『あの時はひどかつた……。お前の恰好ッたらなかつたな。』かれはその時を思ひ出すやうにして笑つた。

かれはをりをりおせんと自分との長い間の關係を思つた。この女と離れることが出來なくなつたのは、今から十年前、女がまだ二十五六の時であつた。ある旗本の娘で、始めは自分の許に文や詩を習ひに來てゐた。一度持つた亭主が道樂者で、此方から離縁して貰つてからは、一生學問で世を送ると言つてゐた。才華煥發といふほどではないが、文も旨ければ詩も巧みであつた。かれは尠からずかの女を愛してゐた。

この女との關係につゞいて、をりをりかれはまた妻と子供のことを考へた。無學な妻、蒙昧な妻、子供を育てるより他に何の能力もない妻、年老いて容色の衰へて行つた妻、不肖な子、學問の嫌ひな子、我儘な子、到底家學のあとをつぐことの出來ないやうな子　。しかし、今では、その妻のことを思つても、もうあまりに強い反響はやつて來なかつた。妻も子も不自由のない生活に甘んじて別に自分やお

ある旅舍で、かれは常に一緒に伴れて歩いてゐるおせんといふ三十四五になる妾に言つた。
『何うだ、お前も行くか。』
『さうですねえ……』おせんは考へて、『何里あるでせう？』
『六里はある。ことによると、もつとあるかも知れない。』旅舍の二階の窓の前に長く連つて雲のかゝつた山脈を指して、『兎に角あの向うだ。あの山を越して行くのだ。あの低い雲のかゝつてゐるところを行くのかも知れない。南朝の征西將軍の宮の末路はあの山の中にあるのだ。あの山の中に押しこめられて了つたのだ。』
『懷良親王さまですか。』
『懷良親王の墓は八代にある。親王の生きてゐる中は、まだ南朝の勢力がいくらかはあつた。菊池も阿蘇もまだかなりに振つてゐた。しかし親王がお亡くなりになられてからは、段々勢力が縮まつて、八代にもゐることが出來ず、その若宮の良成親王は、たうとうあの山の中に入つたまゝ、おかくれになるまで出ることが出來なかつた。その山の中に、今墓がある。肥後の菊池は、山越しに絶えずそれをお助け申して、御最期まで見とゞけた……。それに、そこいらには、日向神岩といふ好い山水がある。是非、行つて見ようと思ふが……』
『またひどい眼に逢ふのでせうね。』

かれが天下の周遊を思ひ立つたのは、五十四五の時で、初めは東北、次ぎは北陸、それから山陰山陽へと及んだ。當時にあつては、交通不便で、汽車はまだ出來ず、汽船の航路もごく一部で、大抵は徒歩するか、乘合馬車に乘るか、でなければ人力車に賴るかしなければならなかつた。旅行の困難は想像以外であつた。それにも拘らず、かれはそれからそれへと旅を續けた。到る處の古蹟名所は勿論、山水の勝で苟くも名のあるところは、何んな邊僻でも入つて行くことを辭さなかつた。かれは到る處に學者を歷訪して詩文の應酬をした。

かれの家學は歷史で、父も兄も皆それについてすぐれた著書を持つてゐた。かれはこの家學の歷史の上に更に地理を築き上げることを心がけた。かれの天下周遊の動機は實にそこに發したのであつた。

東北では三厩の奧から十三潟へと行つた。上北半島も踏破した。金華山へも行つた。北陸では能登の珠洲岬を極め、親不知から新潟へ來て、村上の先きの海府浦を舟で渡つた。近畿では、吉野の奧に賀名生の皇居の址を訪ひ、高野山に出で、和歌の浦から紀州の奧に入つて、瀞八町から那智山へと行つた。山陰では怒濤を小舟に凌いで隱岐に渡り、後醍醐天皇の古址に思を寄せて、長い七言古詩を賦した。

三年四年の月日は忽ちにして旅の中に過ぎた。かれの五十七歲の七月三日には、九州の博多から太宰府に行つて、それから景行天皇の址を探つて、段々豆田日田の方へと入つて行かうとしてゐた。

出水

かれは聖堂の儒官をしたこともあれば、勤王の志士として天下に奔走したこともあつた。長兄のK、仲兄のM、ことに父のSは藩でもすぐれた學者で、著書も多く、門人も多く、ことにその藩が勤王攘夷の巣窟とも言ふべきところであつたので、彼等の名は日本の到るところに聞えて、S父子と言へば、學者は知らないものはないほどであつた。

維新の事業はいつの間にか完成した。明治は五年となり十年となつた。西南の役も終つた。此間に、父のSも死に、仲兄のMも死んで、長兄のKだけ修史事業のある役所に勤めてゐたが、かれは官途に蹁躚してゐるのを潔しとしないで、中年で職を退いて、麴町あたりに私塾を開いて、そこで子弟を教育した。

かれは文章學術をその生命とした。詩も巧なれば、書も巧みで、かれの書いた金石の文も澤山にある。田舍の人達は、多くの謝儀を奉書に包んで、碑に刻する文章をよくかれの許に頼みに來た。

『電報です。』

男はかう言つて、それを私にわたした儘、急いで向うの草原の路の中に入つて行つた。私は封を切つた。女はまた明日やつて來るといふのであつた。

私は頭を振つた。

ばならない。かういふ心が一方にあつて、そしてその分裂をわざと益々混亂させて見るといふやうなところがあります。」

「さうがすかね。」

S君は考へるやうな顏をした。

山莊に訪ねて來る人は、しかし稀であつた。私は全く世を離れてさびしく暮した。夕暮の散歩に出かけて行く路に、來た時には卯の花が白く咲いたり、杜若が紫に咲いてゐたりしたが、今はもうさういふ花も見えなかつた。夕暮の靜かな空氣が唯燃える私の胸に染みた。

松の疎らな林の間に、私の別莊の尖つた屋根を見る時には、私はいつも何とも言はれない寂寥と孤獨とを感じた。私があそこにひとりゐる。かうした人生の重荷に惱み、かうした人生の別れ途に立つてゐる私が一人ゐる。さうして、一人物を煮て食つたり、考へたり、惱んだり、思ひ出したりしてゐる。かう思ふと、私は全く空間に唯一人さびしく漂つてゐる生物のやうな氣がして、さびしさに堪へかねて、私はいつも急いで別莊の方へと歸つて行つた。

ある夕暮、私はいつものやうに散歩から戻つて來た。それは霧の多い雨もよひの空の山氣のしつとりと肌に染みるやうな夕であつた。私は松の林の角に來て立留つた。別莊の前に一人の男が立つてゐた。

私は急いで其方へと行つた。

面白半分ですよ。そんなものに碌なものはありはしませんからね。』などと笑ひながら言つた。その癖、S君も矢張中年の戀などといふことをそろそろ感じてゐて、夜になつてから一里に遠い山路を女の許に通つて行つたりした。

『本當ですな、愛慾の世の中ですな。』

かう言つて笑つて私の話に同感した。

宗教の話の出た時には、私は言つた。『僕なんか、まださういふ話をする資格がないと思ひますね。何故なら、まだ、さういふことを痛感してをりませんから。それは、所謂宗教はわかる。世間の人の言ふ宗教はわかる。しかし私の宗教はまだ完成どころか、その半ばにも達しませんから。私なんか、矛盾が多くつて、分裂が多くつて、それに苦んでゐるのですから……。自分で自分のことが何うにもならないんですから。』

『しかし、宗教つて言ふやうな氣分は感ずることはあるんでせう？』

『それはある。大いにある。實際、時には何も彼も捨てゝ、捨てゝ、佛の前に手を合せたいやうな心持がすることが幾度もあります。現に、この山莊に來てゐても、さうした思ひに燃えることはよくあります。しかし、矢張統一することは出來ない。また、一方ではなまじいそれを小さく統一して了ふのは意氣地がない。もつと深く深く觸れなければならない。もつといろいろなことに當つて碎けて見なけれ

しかし、その暴風雨も、翌日の午後になつて晴れた。隣の測候所の天氣豫報の旗竿には、半ば赤く半ば白い旗がかゝげられてあるのを見た。

『少くとも、私はもつと深く考へて見なければならない。』

かう思つて私は人氣もない松原の中の小徑を歩いた。

九

『破壞か、實行か。』

その二つの念は日毎に私を惱ませた。私は矢張躊躇と愛着とを脱することが出來なかつた。

ある時は女に寄せる手紙を五枚も六枚も書いて、それを封筒に入れて、出すばかりにして置いて、そのまゝまた一日二日を經つて行つた。

其間には、妻から手紙が來たり、女から物を送つてよこしたりした。女はあの時見た妻からの送物と同じやうな體裁にして、生薑だの茗荷だのくさやの乾物だのを銘々に細々と紙に包んで、それを大きな箱に入れてよこした。甘納豆の罐などもあつた。

ある時は、村の青年達がやつて來た。中で、S君は年も多いだけに、愛慾のことに就いてもやゝ深い開けた理解を持つてゐた。S君は山の裾野の村々にゐる多くのさぼしの話などをした。『なァに、へい、

矢張、何うにもならないのが私達の狀態である。女と別れることを計畫した時分、『總てを破壞しよう。總ての自分の生活を破壞しよう。そして新規蒔直しをやらう。』かう斷乎として思つたことがあつたが、それが今また私の胸に浮んで來た。私は黯然とした。

一日一日とまた淋しく暮した。ある日は凄しい暴風雨がやつて來た。山上の孤屋の周圍には、風が凄しく吹き、雨が車軸を流すやうに降り、霧と雲とは蓬々として迅く迅く掠めて通つた。私は終日家の中に引籠つたまゝ一歩も戶外に出ることが出來なかつた。水がなくなつて止むを得ず裏の井戶端に出かけて行つた私は、ぬれ鼠のやうになつて辛うじて戾つて來た。

屋根に當つて凄しく鳴る風、硝子戶に礫のやうに打つける雨、何處かでぽたぽたと洩る音、さういふ中に、私はひとりぽつねんとして机に向つて坐つてゐた。

硝子戶を透して見た草や木は、皆なぬれて、動いて、ざわついて、俛首れてゐた。

夜は殊にそれが凄しかつた。家はぐらぐらと根太から動いた。大きな山脈から大きな山脈へと渡つて行く風は、蓬々として、さながら自然の恐ろしさを私の前に展けて見せるかと思はれた。私は終夜眠られなかつた。私は蚊張を外して、ランプを細く暗くつけて、机の前に坐つて起きてゐた。

一昨年、越後の赤倉に女と一緒に行つた時にも、矢張、凄しい暴風雨であつたことなどをも私は思出してゐた。

お前は卑怯だ。臆病だ。かう私の心の底の聲は叫んだ。しかし、一方ではまた別な聲が叫んだ。『そんなことが出來るか。そんな理由のないことが出來るか。自分はあの女のためには飽まで犧牲になるつもりではなかつたか。あの女の幸福のために謀る筈ではなかつたか。それが自分の通つて行く正しい路ではなかつたか。女の幸福は、私がそれを實行すると否とに由つて增減するであらうか。妻と離れて女と一緒になることが果して正しいことであらうか。年齡も違つてゐるではないか。お前はもうそんな惑溺を敢てする年齡ではないではないか。』

『しかし、それは惑溺と言ふことは出來ない、ある機會とある動機とさへ來れば、私と女とはいつ一緒に地獄の業火の中をかけるやうになるかもわからない。』かう思つて私は悚然とした。

不眞面目であり、浮薄であり、輕佻であつた今までのことがひしひしと私の胸に思ひ當つて來た。十年近い間、私のやつて來たことは、果して眞面目で正しいことであつたらうか。單に歡樂として、乃至は玩弄物として女に對してゐるだけではなかつたか。今でも――現に、つい此間までも、さうした行動を敢てして女に腹を立たせたではないか。女の不眞面目と浮氣と不節操とを咎める資格がこの自分にあるだらうか。

『もつと、眞面目に、不幸な女の身の上を考へてやらなければならない。』

私は私と妻と女との間に橫つてゐる狀態をもつと本當に視なければならないやうな氣がした。しかし

『なァに、雪の降つた時や、わらじでなけや駄目だけども、へい、ぢき解けて了ふで、下駄でも結構歩るけらァ。』

『さうかねえ。』

突然、『お客さま、歸つたけえ？』

『歸つた……。』

『ぢや、一人けえ？』

『あゝ。』

『また、來るけえ？』

『來るかも知れねえ。』

日は既に暮れつゝあつた。冷かな山の空氣は肌に寒く染み入つて來た。で、私はわかれて歸つて來た。夜は寢るより他に仕方がなかつた。私は蒲團を出して敷いて、蚊帳を吊つて、ひとりさびしく肱を抱いて寢た。女が帶をするすると解いて、巻いてN君の枕の代用にしたことなどを私は思ひ出した。

をりをり一歩を進めた考へが私の頭を往來した。實行の出來ないのは、それは單に傍觀者たるためではない。藝術を生命としてゐるためでもない。それはお前の臆病と卑怯とを體裁よく飾る言葉である。お前が實行しないで、お前が進んで行かないで、何うして女が出て來よう。何うして女が出て來られよう？

『堅い旦那だでな。それァ、もう滅相堅い旦那だで。』爺さんは叩き潰した烟管の雁首をすぱ〳〵やりながらうそぶくやうにして言つた。

『一旦働いても、一文にもならない？　そんなことはないだらう？』

かう私が言ふと、

『それでも、旦那、來れば、いくらか呉れべいよ。』

この爺さんは、寒い寒い嚴冬の中でも、その山の別莊の勝手の一間にちゞこまつて住んでゐるのであつた。息子はかなりに大きいのが一人ゐるが、噂にはもう餘程前に死にわかれて、今では全く獨りで暮してゐた。『あれでもあの爺さん、中々やるんですとも……後家狩を時々やるんですよ。』かう村の人達は言つたが、さう言へば、成ほど、夜も朝も何處かに行つてゐないやうな時がをりをりあつた。

『冬は寒いだらうね。』

『冬は、へえ、お話にならねえ……』

かう大工は言つた。

爺さんは、『でもな、火燵にもぐつてゐりや、そんなでもねえぞよ。雪はそんなに澤山にや降らねえだで。』

『路はひどいだらうね？』

さういふものがなつかしくないことはなかつた。今に限らず、世離れた私の別莊の中に、蒲團に埋れて女の船底枕があつたり、櫛があつたり、女持の石鹼箱があつたりするのが微かに私の情味を誘つた。歸る日に、女は私のよごれた枕のおほひだの、襦袢だの、單衣だのを洗つて行つて呉れたが、それも私には嬉しかつた。私は白い綺麗なおほひのついた枕に私の疲れた頭を當てた。

夕方、酒を一本ほど飮んで、好い心持になつて、私はいつも向うの二階の別莊の方まで行つた。自然は平凡だ、無關心だ、人間の苦痛とは何の交涉もない。それには相違ないけれども、靜かに相對すると、私は言ふに言はれない慰藉を感じた。

ある夕暮には、別莊の留守番の爺さんが、まだ仕事を了らずに、半ば出來かゝつた小さな亭のところでせつせと屋根を葺いてゐた。

『精が出るねえ。』

『もうしまふだ。一日働いても、一文にもならねえからな。』

こんなことを言ひながら、爺さんは亭にかけた梯子から下りて來て、大工と一緒にそこに蹲踞んだ。

『監督が氣がきかねえでな。』かう大工は言つたが、すぐあとをついで『わづかの金で年中の留守番をしてゐるんだから、そこは氣をきかして、日當が六十錢のものなら、せめてその半分でも呉れると好いだがな。』

ある朝は一間先きも見えないほど深く深く霧が四面を埋めた。すぐ前にある松の林がぼんやりと海中に浮んでゐるやうに見えた。私は陶器の小さな釜の飯の熟するを待ちながら、長火鉢の前に坐つて、卷烟草を靜かに吸つた。

紫の色をした烟はすうと長く靡き上つた。

何處かで子親が啼いて行つた。

やがて釜がプウプウ吹き始めたので、私は勝手元の方へと立つて行つた。勝手元にはいろいろのものが散ばつてゐる。馬鈴薯の屑、隱元の莢、萎び果てた生薑、まだ洗はない昨夜の茶碗や鍋は、そのまゝ洗桶に浸したまゝになつてゐた。

釜を下して、今度は鍋をかけた。味噌汁である。何か汁の實になるものがないかしらと思つて、私は野菜の入れてある桶の中をかき廻して見た。しかし生憎、何もないので、仕方がないので、立つて簞笥をあけて見た。簞笥の中には、皿だの小皿だの乾物などが入つてゐた。私は取敢へず麩の三つ四つを出してそれを汁の中に入れた。

簞笥を明けた時、ふと香水の匂ひがした。それは過ぎ去つた颱風のあとの匂ひである。それに、女は柔かい紙だの、櫛や三本足の入つたたとうだの、黑味がかつた單衣だのを殘して行つた。女はもう一度是非やつて來ると言つてゐた。

てしつゝ絶えず人生の大波の中に流れて行く。
現に、私もその一人だ。

八

若い二人の兄弟の學生の歸つて行つた後には、私の周圍は再び元の寂寥と孤獨とに歸つた。私の書く鉛筆の音がコッコッと机の上に靜かに聞えると同時に、傍にある小さな時計は、微かにしかし正確にあやまつことなく時の經過を刻んで行つてゐた。

カッコウ、カッコウといふ閑古鳥の聲が遠くきこえた。此頃はもう滅多に鳴かなくなつたので、めづらしいので、私は筆を措いて、耳を傾けるやうにして其方の方を見た。山の峽には雲が深く封じて、あるところは湧くやうに渦まき立つて見えた。

私はぢつと眺め盡した。

何處かで人の聲がする。笑ふ聲もした。周圍の山畠に、百姓達が桑の葉を摘みに來たのであつた。向うの別莊では、小さな亭を拵へるための大工や人足が二三人集つて、頻りに釿や鉋をつかつてゐる氣勢がした。

靜かな靜かな午後であつた。

銘々その持役を演じて行つて了つたあとには、いつも矢張私と女とが殘つた。

そればかりではなかつた。その細い巷路の中の人々の變遷もかなりに著しかつた。奥の待合の養女の梅子といふ藝者は、ある男に夢中になつて、その養母と共に、すつかり零落して、淺草の方へ引越して行つたし、隣の助六といふ藝者は、一時此方からのぼせ上つた役者と切れて、今度は新しい男をその長火鉢の前に坐らせたし、前の家には、幾人となく住む者が變つて、今は淺草あたりに出る女優が入つてゐるし、ある女は懐姙して男の兒を産んだし、ある女は肺病が重くなつて死んだし、長い月日と事實と人生とは、其處にも凄しい烈しい巴渦を巻いてゐるのであつた。

『あの角の家も面白いのね。』

かう言ふのをよく訊いて見ると、そこには細君と妾らしい女と一緒に同棲してゐて、細君には子供が二人あるのであるが、その子供は寧ろ妾の方になついてゐて、『をばさん、をばさん』と言つて後を慕つた。誰が見ても、妾の方が細君より上で、その妾の内職の刺繍からもかなりの生活費があがるらしかつた。男といふのは、四十先で、何でも代書屋さんらしく、毎日朝早く出かけて行くが、四時すぎにはいつもきちんと歸つて來た。『その時には、細君が子供を二人つれて外へ出て行くんですとさ。』こんなことを笑ひながら女は私に話した。何處も彼處も、愛慾の世の中だ。色と戀との世の中だ。世の中といふことは男女の中といふことだ……。そしてその間に、逡巡と躊躇と羈絆と愛著との中に、人間は生命の浪費を敢

を見た。何故なら、其處に男がゐるから……。男のゐた址があちこちに殘つてゐるから……。

藝者でも買はうと言ふものが、そんなことで何うする。そんな了簡で何うする。通人の心理などと言ふことを少しは考へて見るが好い。かう言はれても仕方がない。それからまた、『お前は一體いくつだ。』かう問はれても仕方がない。矢張私は私なんだから。通人ではないんだから……。

或は靜かに、或は激して、或は遊蕩兒のやうに、或は通人のやうに、時にはまた一廉の立派な旦那のやうにして、私は其處に長い年月の經つのを見た。私の知つてゐるだけでも、其處に雇はれて來た下女は五六人は變つて行つてゐた。栃木の在のお照といふ二十一二の女、いやらしい口の利き方をして六十近くなつても猶ほ白粉を手元から離さないやうな老婆、藝者屋の内部の秘密を手に取るやうに知つてゐる中年の女、さういふ人達は、皆な私と女との細かい空氣、女と私との間に觸れずに殘つてゐる事實、さういふものを詳しく知つてゐた。女に關して私の知らないこともかれ等は皆知つてゐた。

その中で私はお照といふ婢を一番懇意にした。お照は二年ほどゐた。容色もさうわるくはなし、氣立もやさしく、立働きも甲斐々々しく、女にも家の人達にも氣に入つてゐたが、二年目の秋に、嫁に行くといふので、田舍に歸つて行つた。私はお照の田舍の番地などを私の手帳に書きつけた。私はいざといふ場合には、田舍に行つてお照の口から詳しく女の秘密を聞かうと思つてゐた。

しかし、さういふことも一つ一つ過ぎ去つて行つた。ワキとして私達の舞臺に上場して來る人達が、

ら。」

しかしこの問題に就いては、私は多く言葉を費さなかつた。細かに説明して聞かせたところで、女には到底それがわからう筈はなかつた。

熱烈なる實行者、それを唯女は求めた。熱烈なる實行者で、且つ冷淡なる傍觀者であるといふことは女にはわからなかつた。其處まで行くと、私は暗い壁に突當るやうな氣がした。

女の家の六疊に面した小さな庭、それを私は何年つゞけて見たであらうか。父親の好きな盆栽の並んでゐる棚、土を運んで來て四角に拵へた草花の園、厠に接した竹の袖垣の前には、顔を洗ふ臺があつて、その中の竹の簀子の上に、柘榴の花の咲いた鉢だの、唾蓮の大きな鉢だのが置かれてあつた。厠の手水鉢に接した方には、四角の木製の箱に綺麗な水が一杯に湛へられてあつて、小さな岩石や藻や澤瀉などの中を金魚が澤山に游いでゐた。

『龜の子はまだゐますね。』

こんなことを言つて、私はよくそこをのぞいて見た。

床の間には幸四郎の辨慶の博多人形が飾られてあつて、竹を描いた草雲の軸がかゝつてゐた。その床の間を何遍私は張り詰めた心と眼とを持つて見たであらうか。また猜疑と嫉妬の悲を燃しつゝそれを見たであらうか。私は入つて行くや否、表面は落附いた顔をしつゝ、猫の眼のやうに鋭く注意してあたり

女は憎んでも憎んでも足りない。しかしその憎むといふ裏面は卽ち愛するといふことであるから、猶は堪らない。かうやつて別れて置いて、『え、好う御座んすとも……』などといふ立派な口をきいて置いて、すぐあとから女は詑の手紙をよこす。使をよこす。それでも目的を達しない時には、女は自分自身私の家にまでやつて來た。

憤激とか、激昂とか言ふことは、しかし何にもならないことである。いくら怒つて見たところで、それは却つて自己の愛と自己の愚とを表白するやうなものであつた。別れるなら、私は默つて何事もないやうにして靜かに別れて行かなければならなかつた。

『何うせ、私のことなんか、少しも思つてゐては吳れやしないんだから。』かう言つては、女はよく私の作品を持出した。

『だつて、さうぢやありませんか。貴方なんか、商賣で、かうして私とゐるやうなものぢやありませんか。でなけりや、何故あんなことを書いたんです？　何故、あんなことを書いて、人を怒らせたり何かするんです？』

『だつて、それは仕方がない。書くことは、僕の生命だから、お前に捨てられても、僕は書くことをやめることは出來ない。』

『それ御覽なさい。だから、私なんか何うでも好いんですよ。材料にさへされてゐれや好いんですか

七

『もう、今日つきり來ないから。』

『え、好う御座んすとも……』

女も張詰めたやうな顏をして言つた。私達は默つて考へた。

傍には母親が坐つてゐた。

『ぢや、左樣なら……』

かう言つた私は立上つた。

『まア、まア、落附いて……』

母親の逹つて留るのを振切つて、私は戸外へ出た。

かういふ喜劇を私達は何遍繰返したであらうか。私はあの暗い露地を憎む。またあのじめじめした空氣を憎む。また私を陷れたあの溝賓を憎む。私はそのをりをりの事實と憤激と嫉妬と、それをヒユウマンドキウメントとしてこゝに說明したいと思ふけれど、今ではとても落附いて書いて人に示すことが出來ない。自分で自分を罵つても足りない。自分で自分の肉を食つても足りない。考へて來ると、顏を蔽つて、穴の中にでも入つて了ひたいやうな氣が今でもする。

馬鹿馬鹿しいのも知つてゐる。それに、自分はもう分別の盛りをすぎた歳である。子供が五人も六人もある。普通の世間を見渡すと、私位の年齢の人々は、大抵は家庭に引込んで、落附いた顏をして、妻子眷屬のためのにみ心をそゝいでゐる、愛慾などもうめづらしくもないといふ顏をしてゐる。生殖といふ大きな義務をすましたといふやうな靜かな態度を取つてゐる。それに比べると、自分も、時には耻かしいやうな氣がしないでもない。しかし、自分は自分の生命の一部でそして色彩の多いこの愛慾を何うして捨て去ることが出來るであらうか。

ある人は言つた。『何うも矢張働くに限りますよ。一日勞働して、晩酌でもやつて、ぐつと寢て了ふのが好い。それが一番無難だ。』それは確かにさうである。しかし、この勞働が愛慾と相連繫して、愛慾あるがための勞働、勞働あるがための愛慾といふ風になつたら何うか。

私に取つても、女が勞働乃至努力の慰藉になつたことは尠くなかつた。女あるがための藝術、女あるがための努力、かういふ風に心の張り詰めて行つたことも一度や二度ではなかつた。その意味から言ふと、妻などは、私の藝術、私の努力などに對しては全く沒交渉である。しかし、その對象である女の心が、單に私の熱した心を無限に吸ひ込む海綿であり、また充分に確實に所有することの出來ない沙上の家であるといふことは、私に取つて單に笑ふべき喜劇であるであらうか。

『矢張、思ひ當ることがあるからだらう。』聞いてゐた人はかう言つて私の方を見て冷かに笑つた。

しかしその二つの事實は、長い間私の心に絡みついてゐた。否、今でもその事實は私の胸にをりく蘇つて來て、それが私の苦痛と一緒になつて流れた。ある時、私はその話を女にした。女には矢張それがはつきりとは響いて來ないらしかつた。『まァいやねえ。』かう言つて、三人心中の方には興味を持つたけれども、この二つの事實の對照については別に深く考へるといふ風でもなかつた。

『しかし、お前だつて、餘り男をさういふ眼に逢はせると、危險だよ。』

女は唯笑つてゐた。

『ぢや、矢張、面白いのかねえ、さういふ風に、心を二つにも三つにもわけるといふことは!』

『何うですかね。』

『何うですかねぢやないよ。考へて見なくつちやいけないぢやないか。』

『だつてわからないんですもの。』

『さうかなァ、わからないかなァ。』

かう言つて私は溜息を吐いた。

自分ながら自分でわからないのは、愛慾の離れ難く捨て難いことである。第三者の言ふことなどは何うでも好いけれども、自分自身でもその際限のないのも知つてゐるし、その危險なのも飲み込んでゐるし、

と思つてゐた。ところが間もなく女はその弟と通じた。兄はもうこらえてゐられなくなつた。度々三人で大立廻りをやつた。そしてある夜、酒を飲んで、泥醉して、弟の家に呶鳴り込んで、弟と女とを殺して、家に火を放つて、そして自分も自殺した。これはまァ、よくあることだ。新聞の三面記事としてはめづらしくはない。しかし、これと同じ頁に、「三人心中」といふ題で、一人の男と二人の女と一緒に心中した記事が出てゐた。』

『女は何ういふ女だね？』

『一人は內緣の妻、これは二十七八、それからもう一人は酌婦で、十七八、前の夜は三人で仲よく酒を酌み交して、床を並べて睦しく寢たが、朝起きて見ると、藥を仰いで、三人同じ枕に死んで居た。』

『へえ……』

聞いてゐた人も、不思議に堪へないやうな顏をして言つた。

『この二つの記事を同時に、同じ頁に見た時には、僕はモウパッサンの『愛』といふ短篇の書き出しのやうに、新聞を持つたまゝ、深く性の問題を考へずには居られなかつた。一方は男が二人、一方は女が二人、それでその結果は正反對に終つてゐる。僕は何とも言はれない氣がした。世の中は愛慾だなァと思つた。そしてこの愛慾を離れなければ、自分の生命も危いやうな氣がした。山寺へでも行つて、佛の前に手でも合せなければゐられないやうな氣がした。』

の中に、矢張過ぎ去つて行く私がゐた。

そしてこの一條の大路の中に、鮮かな色彩を際立たせて、その乾燥無味な一生を美しく見せてゐる愛慾――それが深く私の心に絡み着いてゐた。

私は狹い六疊の書齋の籐椅子の上に、ぶるぶる戰へながら、恐ろしい嫉妬と瞋恚とに燃えてゐる自分を見ることが出來た。また、戀の歡樂に心も魂も蕩けて、生命も何もその美しいものの前に投げ出してゐる自分をも描き出すことが出來た。ある時は私はその苦痛に堪へかねて、山の寺に行つて、開かれぬ扉の前に立つて一心に祈念した。

『戀したものゝ手をねぢるのは、赤兒の手をねぢるやうなものだからね。』

ある時は私はこんなことを言つた。大きな體に不似合な女々しい涙をこぼしたりした。

毎朝見る新聞記事の中でも、私に取つては歐洲の大戰亂とか、支那の革命とか、政治家の一言一動とか、さういふものよりも、三面に書いてある心中とか、戀の遺恨とか、恨みの刄に流された血汐とかいふものゝ方が更に一層深い感動と印象とを與へた。ある時は私は言つた。『實に不思議だ、實に不思議だ。性の道ばかりは、深く入つて行けば行くほど益々わからなくなる。今日見た新聞の中に二つとも出てゐたことだけれどもね、一つは女が多情で、ある男と切つても切れない仲でゐながら、常に他の男と關係して、いろいろ噂を立てられるので、男も考へた結果、自分の弟の家に女を伴れて來て、これなら大丈夫

生である。また今更ながら心の變化、姿の變化の多い半生である。城の沼のある畔の藁家で大きくなつた私、沼の錆びた水の色を朝な夕なに見て暮した私、幼くして父を喪ひ、母と祖父との手にさびしく育てられた私、蒼い顔をして人の前では碌々口もきけなかつたやうな私、女の前ではすぐ顔を赧くしたやうな私、現に、私の總領の男の兒は丁度其時分の年恰好で、矢張、人見知りで、默つて、きまりのわるさうな風をしてゐる。矢張、私の總領の男の兒も、私のやうな一生を送るのであらうか。矢張、私のやうなスツルムとドラングとを經て一生を終るのであらうか。

過去は實際不思議である。自分で今まで不思議にもせずに、平氣で過ぎて來たのに驚かれる。先づ大きな一條の路があるとする。そこにいろいろな人が巴渦を卷いたやうにして行く。私もその中を歩いてゐる。そしてその一條の大きな路は、闇から出て闇へと入つて行つてゐる。生から死と言ふよりも、死から死へと入つてゐる。その中でゆくりなく邂逅した人が、或は友となり、或は敵となり、或は妻となり、或は情婦となり、或は先輩となり、或は後輩となり、そして時には離れたりまた即いたりする。無意味に一生私のあとをついて來たりする。ちよつと近づいてそしてすぐ向うに行つて了つたりする。實に不思議である。

私は私の過去を材料にして將來を推し量らうとはしないが——さういふ斷定は避けるが、しかし私の過去の中から、私の將來をはつきりと見出すことが出來ることは爭はれなかつた。過ぎ去つて行くもの

ゐるよりも離れてゐる方が、お前のことでも何でも本當に考へられて好い。喧嘩なんかしないですむからね。』

『あゝいふ皮肉を言ふんだからね、貴方は――』

女は笑ひもせずに言つた。

阪を下りたところにある池では、麥稈帽子をかぶつた人が二三人釣竿を垂れて頻りに魚を釣つてゐた。斜阪になつた山畠で働いてゐる百姓達は、私達の並んで歩いて行くのを、『あれや別莊に來てる客だんべい、』と言ふやうな顏をして見送つてゐた。

『でも、歸つたら知らせて下さい。』

『あゝ。』

停車場まで行く間、私達は餘り多く口を利かなかつた。それに、其處に行つてからも、長い間待つてゐる間もなかつた。女は私の手から信玄袋を取つて、切符を買ふのもそこそこにして、向う側のプラットホームに行つた。汽車はやがて來た。

六

私の經過した半生がをりをり繪卷物のやうになつて私の頭に來た。今更ながら追恨と悔悟との多い半

やうな姿、殊に、その顏には傷いたものの悲しさとさびしさとが歷々と刻みつけられたやうに現はれてゐた。息子は滅多に口もきかなかつた。私は其處に私の苦痛と私の悲哀とを發見した。

歸りに、私は私の伴れの一人に言つた。『矢張、女に苦んでゐる人の顏は、一目見てわかるね。深く神經が刻まれて、ぴりぴりと絕えず動いてゐるね。僕はあの顏を見るに忍びなかつた。』

『さうですかね。』

かうその伴れの人は冷淡に言つた。矢張その人も、『それであゝいふことを言つたんだ！』かう言つて、今は私の心と境遇とを理解してゐるだらう。そして笑つてゐるだらう。

女が歸つたのは、Ｎ君やＫ君が上諏訪に行つた翌日であつた。女は二夜を私の山莊にすごした。一夜は私達は思ふやうに話すことが出來た。

停車場まで私は送つて行つた、信玄袋を私が持つて。

『それにしてもいつまでゐるの？　もうこんなところにゐるのは、およしなさいよ。』歩きながら女はかう言つて私の顏を見て、『何時、歸るつもりなの？』

『何時だかわからない。』

『早く歸つていらつしやいよ。』

『ひとりでゐる方が好い。本當のことが考へられて……』かう言つて私はちよつと途絕えて、『一緒に

私は初めて來た時、七輪、鍋、釜、水の汲んである桶、汁の半殘つた椀、女の捨てた丸髷の形、色の褪せたかせ掛などを見た。この二人の戀に私は誰より先に同情した。村の人達の誰れよりも、一番多く且深く私は男の傷いた心を思つた。

その戀の『廢墟』のあとに私達が來たといふことは不思議であつた。私達は矢張その室に寢たのである。その人達の置いて行つた簞笥の中に私達の着物を入れ、その長火鉢に私達は相對して坐つたのである。そしてその二人の七輪で私達は矢張同じやうにして物を煮て食つたのである。村の人達は言ふであらう。

『それでよめた、あいつらに同情したのはそれでだ!』

私はある時、その若い二十七八の息子に逢つた。息子は村の信用組合に勤めてゐた。息子と女の關係は私の二度目に來た時には、村の大勢の人々から仲をさかれて、女は手切金といふものを無理に押つけられて、そして倦きも倦かれもせずに別れて行つたが、この戀はこのまゝに終つて了ふであらうか。第三者の邪魔のために完全な『廢墟』になつて了ふであらうか。私はそれを疑ふ。そのことに携つた村のある有力者は、『あのことばかりは、へい、先生の眼鏡が違ひました。』かう言つてゐたけれども、實際、さうであらうか。そのまゝ消えて了ふであらうか。再び恐しく爆裂作用を逞うすることはないであらうか。

私のその息子に逢つたのは、信用組合の中の一室であつた。息子は背の高い、色の白い、田舍の青年には多く見ないやうな『男のやさしさ』を持つてゐた。蒼白くやつれた顏、絕えず物思ひに沈んでゐる

長い土手の朝に立つてゐる私の姿が歴々と私に見えた。川には野菜を載せた舟だの、赤煉瓦を積んだ舟だの、朝飯の煙を立ててゐる舟だのが通つて行つた。對岸の家はまだ眠りから覺めず、朝日の光線を混ぜた金色の靄が茫と繪のやうに棚引いてかゝつてゐた。私は何遍其處に立つて、深く私達のことを考へたであらうか。

其處にも此處にも女の姿があつた。狹い四疊半の室、生花の見事に生けてある六疊の室、二階の欄干に添つた長い廊下、草花の見事に咲いた庭に面した細長い室……。ある夜は凄しい雨が二人の夢を埋めるやうにして降り頻つた。

遠くに行つてゐる男に最初に逢つた時のさまは、今だにはつきりと私の頭腦に印象されてゐた。それは丁度女が私の家に來て、妻と女と相對した形に甚だよく似てゐた。唯、男性二人と女性二人との相違があるばかりであつた。

嫉妬などと言ふものは、際限のないものである。『嫉妬する位ならやめる。』かう始めは私は思つてゐたが、しかしそんな風に解釋して了ふことが出來るものでないといふことを私は段々味はせられて行つた。

私の今ゐる山莊に、私の來る前に、地方の豪家の息子とある女とが一月ほど一緒に同棲してゐた。息子は二十七八、女も矢張同じ年恰好であつた。女は土地で酌婦などをしてゐたので、二人はあることを解決するため、――その解決のすんで了ふまで、村の人々のためにそこに置かれてあつたのであつた。

ふ話が出た時、K君は、『相撲は何うだらう』と何氣なく言つた。私はすぐ、『相撲は形が面白いさうだよ』と言つて笑つた。それがまた女の氣に觸つた。

始めは一緒に行くと言つてゐた上諏訪にも行かず、癇癪が起きて起きて仕方がないと言ふやうにしてゐた女のさまが、一人になつてから一層はつきりと繰返して思ひ出されて來た。女の言ふ通り、私は實際女を本當に愛してゐるのだらうか。

突詰めてゐては、到底完全に愛することは出來ないものではないか。完全に愛するといふことは主觀的では出來ないことではないか。客觀的にならなければ出來ないことではないか。

主觀的では、愛の裏面は必ず憎である。所有の裏面は必ず破壞である。犧牲的になつて來なければ、完全な愛は到底成立しないものではないか。

犧牲といふ二字、それが急にはつきりと私の頭に描かれて來た。男性に取つて唯一の尊いもの、唯一の進んだものにされてゐる犧牲、その犧牲は主觀的から考へて、いかに辛くさびしく悲しいものであらうか。私はあまりに多く『犧牲』に生きて來た。

翻つて考へた。『犧牲』は一面臆病者の口にする言葉ではないか。卑怯なるが故に、引込思案なるが故に、『犧牲』の二字を高調するのではないか。

溜息がひとり手に出た。

かう傍で見てゐた女は言つた。

『うん、さうらしい……。何か旨いものがあるかも知れない。』かう言つて、逸早くそれを解きにかゝると、『矢張、奥さんから來ると、嬉しいのね？』

『それは嬉しいさ。』

私はそれを解いて、『あ、茗荷、あ、唐辛子、あ、菓子、生薑も入つてゐる。こいつは旨いな。』こんなことを言ひながら、其處等に散らばらして出して、『矢張、嗅だけあるねえ。』かう何の氣なしに私が言ふと、

『それはさうですとも……奥さんですもの。』女はかう言つたが、暫くして、『私だつて、こんなものなら、毎日でも送つて上げるわ。』

『呉れやしないぢやないか。』

『上げますとも……』

N君もK君も見てゐて笑つた。それから何かの時に、夕立の話が出た。歌だの俳句だのを扇子やら檜木笠やらに書いたが、近所の山の中を歩きたいといふ話から、夕立に逢ふと困るといふ話になつた。その時、『お前なんか行かれるもんか、それこそ、「天ぷらの丸髷の上に夕立す」といふ句でも出來るよ。』などと私は言つた。それが女の氣に觸つた。次に、藝者が情人を持つには、三味線引が一寸面白いさうだとい

した。

『大丈夫でせう、蚊帳なんか釣らなくつても。蚊はゐないぢやありませんか。』

N君もK君もかう言ふので、そのまゝ私達は寢ることにした。

K君、N君、私、それから女、かういふ順序であつた。『あゝ、寢るのが一番好い。』などとK君は言つたが、『ランプを消しませうか。』

『いゝえ、ようう御座んすよ。』まだ寢ずに其處に立つてゐた女は言つた。女の伊達卷を解く音が微かに聞えた。

蚊が矢張二三疋ゐた。『ゐるねえ、矢張。』かう言つて、私達は再び起きて、蚊帳を釣つて寢た。

五

倏忽としてやつて來た颱風は、また倏忽として去つて行つて了つた。私は矢張ひとり山莊にゐる。

雜魚寢をした翌日は、午後五時に、村の靑年が上諏訪に伴ふためにやつて來るまで、N君とK君とは矢張私の山莊にゐた。私はいろいろなことを思ひ出さずには居られなかつた。丁度その日の朝の十時頃であつた。汽車の小荷物の配達夫は、私の妻から送つてよこした一箇の澁紙の包を配達して來た。

『家から？』

ゐる女の白い昂奮したやうな顔とを照した。『貴方に上げませう、』などと言つてN君は盃を女にさした。一時間、二時間、何んな話をしたか、私ははつきりと覺えてゐない。また、女が何んな風にしてゐたか、それも覺えてゐない。しかし、一種の不思議な空氣は依然としてこの一室に漲つてゐた。青年達は頻りに明日何處かに遊びに行く計畫についての話などをした。

三味線なしでは、K君の唄も出なかつた。女は二三杯の酒に醉つて、いくらか氣兼から忘れて來たと言ふやうに、『何うしても三味線がなくつちや駄目ね。今度は一つ是非旅持の三つ折れを一つ拵へませうね。此間、かうきでいくらで出來るつてきいたら、七十五圓だなんて言つてゐましたがね。そんなんでなくつても好いから、拵へませうね、是非。』などと言つた。N君やK君に向つては、

『この頃ちつとも入らつしやいませんね。ちつとは入らしやいよ、私達の村にも？』

『えゝ。』

などゝN君は笑つた。

十時すぎになつて、村の青年達は、路が遠いからと言つて歸つて行つた。で、私達は寢る支度にとかかつた。『何うせ雜魚寢ですよ。』かう女ははしやいで言つて、ありたけの蒲團を其處に並べて敷いた。旅行用の夏の毛布までも其處に出した。『枕が足りない？　さう、待つてゐらつしやい、今好いことをして上げますから。』かう言つて、女は解いた帶をぐる〳〵と卷いて、その上を風呂敷で包んで、それをN君に渡

S君とR君とは、私達のさまを見て、氣をきかせて、N君とK君とのために、向うの二階の別莊を明けさせやうと盡力したが、生憎留守番の爺が留守なので、村まで行かなければ庫の鍵は何うすることも出來なかつた。私は言つた。『好いぢやないか君、向うを借りる必要はないよ。二人位泊められる蒲團はあるんだから。』

『でも……』

かう言つて、S君とR君は、別の方の廣い雨戸を明けたり掃除をしたりした。

『此方の方が廣くつて好いでせう。それに、此方なら、蚊帳がなくつても寢られますよ。硝子戸さへあけなければ、蚊なんかゐやしませんよ。』S君はこんなことを言つた。

私達に對して加へられた氣兼と遠慮と邪魔をしてはいけないといふ思ひやりとが、却つて私の心を暗くした。そんなにして貰はなくつても好いと私は思つた。『まァ好いさ、僕のところに來た客だから、今夜一晩はゆつくりして泊つて行つて貰ふさ。』これから上諏訪にでも二人を伴れて行かうとするやうな話がS君とR君との間に出た時、私はいくらか語調を强めて言つた。

その時分には、机と餉臺とを並べて、その上に、酒だの肴だのが出てゐた。冷豆腐、胡瓜もみ、女の持つて來た佃煮、そんなものが其處に並べられて、薄暗いランプの灯が、やゝ醉つたK君の顏と、いかなる時にも頭を綺麗にすることを忘れないきちんとしたN君の姿と、その隣にゐて客の斡旋につとめて

『ぢや、頂戴しやうか。』

『さうしやう。』

かう言つて、二人は風呂場の方へと行つた。

不思議な氣分が一室に漲り渡つた。それは丁度私達の間にある秘密がそのまゝ世間に露骨に現はされたといふ形であつた。N君とK君と村の青年とを透して、私達は世間に相對して立つてゐた。しかし、私も女も何も言はなかつた。

N君達もそれに對して成たけ觸れないやうに、やうにとしてゐた。『不思議なところでお目にかゝりましたね』とも『かういふところでお目にかゝらうとは思ひもかけませんでした』とも言はなかつた。私達に對する、殊に私に對する批評と感想とを澤山にN君やK君は持つてゐるのに相違なかつたが、しかし二人はよくそれをおくびにも出さうともしなかつた。

『昨夜、電報で知らせて來て、今朝突然やつて來たもんだからね。』私は私で、これ以上に、女について深く入つて說明しやうともしなかつた。

風呂から出て、いくらかくつろいで、今回の旅行の話、富士八湖の話、それから、この別莊の眺望の好い話などをした。『涼しいね。富士あたりの氣候とは丸で違ふね。』などとN君は言つた。

村の青年のS、Rの兩君がやがてドヤドヤとやつて來た。一室は更に一層賑かさと混雜とを加へた。

らうに……』

『いや――』

『君、N君、すぐ湯に入り給へ。君等のために沸かして置いたんだから。』かう私は室の方から言つた。

『難有う。』かう言つてN君は此方に入つて來たが、取敢へず挨拶として、停車場で買つて來たといふ葡萄酒の一罎と水蜜桃の一籠とを其處に出して、『もう少しでこの汽車に間に合はなかつたものだから、大騷ぎをしてね、狼狽てゝ飛込んだものだから、碌なものも買ふ隙もなくつてね……。』

『いや、こんな心配をしないでも好いのに……。それでも大變だッたでせう。女阪を越えて甲府まで何里あるんです……。一體?』

『六里位……なアに、それも半分は馬車があつたから、そんなに困難でもないんですけども、餘り馬鹿にして途中で晝寢なんかしたもんだから、』其處に入つて來たK君に向つて、『二時間寢たね、あれでも。』

『その位寢たね。目が覺めて、時間がなくなつて、狼狽てて、甲府まで驅足サ。それで、やつと間に合つた。』

『まア、お風呂にお入んなさいましな。』かう女は勝手元の方から言つた。

『さうし給へ。入るとさつぱりするから。』

N君とK君は顏を合せて、

私の言ふことがN君にもK君にもすぐは飮込めなかつたらしかつた。しかし尠くとも私の顏には一種の表情があつたに相違なかつた。やがてそれとわかつた時には、N君も不思議な表情をした。はつと思つたらしかつた。K君は硝子戶から中を覗くやうにした。

そこに女は急いで出て來た。『まァ、よく入らつしやいました。おくたびれでしたらうね。さア何うか――』

N君もK君も始めて女の顏と相對した。『や、これはめづらしい。』かうN君は碎けた口のきゝ方をした。

『あゝ足がよごれてるんだね。今、水を取るよ。』かうまごまごしながら私が勝手元の方へ行かうとすると、N君とK君とは、『井戶があるんでせう。裏に……』かう言つて裏の方へ廻つて行つた。村の靑年は何う挨拶して好いかわからないやうな顏をして立つてゐた。

『君は迎へに行つたの？』

『いゝえ、停車場へ用があつて行つたら、丁度、その汽車でお出になつたで、それで一緒に來ました。』

『さうかえ。』

『さァ、お上がんなさいまし。』かう女は如才なく靑年に言つた。

井戶で足を洗つたN君はやがて裏口から勝手元を橫ぎつて、此方へと上つて來た。其處に行つた女は、

『まァ、一番先にお風呂にお入んなさいまし。大變お步きになつたんですッてね。おくたびれでした

『さう、よく寢たわねえ。ぢや、もうぢき來るわねえ。』

で、風呂に入つて、女がおつくりして着物などを着替へたのは、もう五時に近かつた。女は派手な模様の出た帶を緊めた。

硝子戶を透して見える山の色は、次第に濃やかな深い影をつけて來て、襞と襞との間に夕日が一線深くさし込んでゐるのが鮮かに見えた。女が勝手元に坐つて、種々御馳走の準備をしてゐる間、私は餉臺に向つて新聞を讀んでゐた。と、戶外に人の足音がしたと同時に、村の青年の大きな麥稈帽子がちらと見えた。

私は立つて行つた。

『來たかえ？』

かう青年に言ひながら、向うを見ると、N君とK君とが茣蓙を着て檜木笠を被つて金剛杖をついて莞爾しながら此方へと近寄つて來た。漸く目的地に着いたといふやうな風をして、疲れ切つたやうに呼吸をきらしてゐた。

『ヤ……』

『ヤ……』かう私も合せたが、すぐつゞけて、『丁度女が來てゝね。君等とぶつつかつちやつた。今朝來てね。』

ぱつちりと急に驚いたやうにして目を明いた女は、

『何か言つて？』

『いや！』

『ぢや、夢かしら？』

『いや、今、酒屋が來た。』

『さう。』

急に起きかへつて、『もう遅いの？』

『隨分寢たね。』

『もう、さつき歸つて來たの？』

『あゝ、歸つてから、一時間以上になつたらう。』

『そんなになるの？　ちつとも知らなかつた。あゝよく寢た。貴方の歸つたのなどはちつとも知らなかつたんですもの。今、何か貴方が口を利いてゐるのを夢のやうにして聞いてゐたんですの。』

『よく寢てたよ。』から私は言つて、『湯がわいたよ。入つたら何うだ。』

『さう？　もう沸いたの？　一體何時？』

『四時だらう。』

た。妻、女、遠くにゐる男、やがて訪ねて來る客、さういふものが唯雜然として私の胸を滿した。
畠で爺さんが草を拗つてゐた。
『暑いね。』
『さうだね。今日あたりは東京は暑いずら？』
『まだ、別莊の人は來ないかね？』
『まだずら？』
私はやがて引返して來た。女はまだ眠つてゐた。
『おい、おい、もう起きないか。』
女はちよつと眼をあいたが、またすぐ寢反を打つて向うむきになつて寢て了つた。
硝子戸の外に、誰か來た氣勢がしたと思ふと、それは酒屋の亭主が、自轉車でさつき頼んだ酒やら醤油やらをとゞけて來たのであつた。
『よく、自轉車でこんな山阪が通れるね。』
『向うから廻つて來ましたから。』
かう言つて亭主は、莞爾しながら、鑵やら紙包やらを其處に並べた。『難有う御座います、』と言つてそしてまた自轉車に乘つて引返して行つた。

家に歸つて見ると、女は風通しの涼しいところで、白い顏を此方に見せて、心持好さゝうに晝寢をしてゐた。昨夜寢なかつた疲勞が一時に出たものと見える。私は硝子戸を明けて入つて行つたが、女はそれを知らなかつた。蒔繪の櫛が疊の上に落ちてゐた。

信玄袋、化粧道具、女の匂ひのついた衣裳、さういふものが私のさびしい何もない山莊の書齋にあるといふことが不思議な印象を私に與へた。私は靜かに坐つてゐた。

しかし女は容易に起きさうにもしなかつた。で私は立つて風呂の方へと行つて見た。さつき炭を入れたので、それがカンカン起つてゐて、手を入れて見ると、もう少しで入れる位に溫かい湯になつてゐた。

私は家の橫を通つて、それから向うの別莊へと通ずる松原の中の路へと行つた。こゝは夕暮などに私の獨りで散歩するところで、私は其處を眞直にある村からある村へと通ずる路のあるあたりまで行つて、そしていつもそこから引かへして來た。桔梗、女郎花、山百合などが草藪の中に咲いてゐた。

私はこの路を歩きながら、何遍愛慾の斷ち難く、煩悶の去り難きを思つたか知れなかつた。私は此處で靜かに分裂した思想と生命との統一を計らうとした。妻子のことも考へれば、女のことも考へた。ある時は、薄暮の孤獨に堪へかねて、感傷の涙の兩頰を傳つて落ちるのも知らなかつた。ある夕には、思ひを深紫の桔梗に託して、それを折つて來て机の上の罎に生けた。

しかし今日は心が騷いで、踊つて、いつものやうな靜かな氣分には何うしてもなることが出來なかつ

つた。

坂を上るところに、豆腐屋が一軒あつた。其處に寄つて、豆腐を一つ買つた。赤い襷をかけてメリンスの帶をしめた娘は、『新しいのをお上げよ』といふ母親の吩咐通りに、大きな桶の清水の中から、豆腐をざるに入れて莞爾しながら私に渡した。

阪路の半ばで、私は立留つて休んだ。前には濶い濶い高原が展げられて、八ヶ岳の裾野のスロオプには白い烟がところどころに颺つてゐた。松林の中に散在してゐる村落、人家、その上に連互した半ば雲に蔽はれた山、私は昨日から今日にかけての名狀し難い心の狀態をこの大きな自然に對照させうとした。私は包を草原の上に置いて、蹲踞んで、そして手を額に當てた。

颱風が此處まで襲つて來るとは知らなかつた。否、更に大きな颱風が私の前に待つてゐやうとは知らなかつた。否、更に更に大きな颱風が來て、自分の生活をすつかり打碎いて行つて了ふかもわからなかつた。歡樂や懊惱や懊悶や歡喜や啼泣や——さういふものは大きな自然の中ををりをり通つて行く雲や霧のやうなものではないか。またをりをり掠めて通つて行く雨風のやうなものではないか。しかしいくら何物が掠めて通つて行つても、自然はじつとして動かない。何の痛痒をも感じない。人の心の動搖の中にも、この大きな自然が横つてゐるのではないか。

私は苦しくなると、いつも自然に面して立つた。

いやうな氣がした。

暫くしてから、私は笑つて、『だから、ちよつとは浮氣位して、母さんを困らしてやつたッて好いさ。』

『また、始めた。』

『だつて、さうぢやないか。』

『好う御座んすよ。』

急に愛慾の念が私達を捉へた。廣い山の中の別莊は、何處に行つても人一人の影も見えず聲も聞えなかつた。

『本當に、人氣離れた奥山住ひね。』女はこんなことを言つて笑つた。暫くして行つて見ると、風呂の火は半ば燃えた薪を落したまゝすつかり消えて了つてゐた。

四

三時の汽車にはまだ來はしないだらうと思つたけれど、御馳走の準備も少しはして置かなければならないので、風呂の火をよく見て、新たに炭を加へなどしてから、私は停車場の方へと出かけた。

酒屋、料理屋、蕎麥屋、さういふところに一軒々々寄つて頼んで、持つて來て呉れ手のないものは自分で風呂敷につゝんで持つて、そして山の方へと歸つて來た。三時の汽車には果して客は乘つてゐなか

『貴方は行つて?』

『いや、僕もまだ行きたいと思ひながら行つて見ない。』

『さう? そんなところなの? よく行つたわねえ。』繪葉書を引くりかへして見て、『この奥深いでせうか。』

『五六町奥まで入れるんだらう?』

『さう? 二人は仲が好いから、兄さん、雪ちやんで、一緒に歩いてるのね。のんきな夫婦ね。』

『羨しいだらう?』

『さうね。』かう言つて笑つて、『でも、仲が好いのをきくと、嬉しくないことはありませんね。それ、赤阪にゐた時分、始めて貴方に逢つた時分から、さう言つてゐたんですからね。』

『さうだね、もう遠い昔だね。』

『十年近くなりますよ、もう。』

『さうだな、あの時分から、妹は是非さうしなけりやッて言つてたね。まア、結構だアね。お前の思ふ通りに行つたんだから……。犠牲になつたお前といふことが、すつかり酬いられたんだから……』

『だか〻、本當にさう思ひますよ。もう、私なんか何うなつたッて好いわ……』急に感情が胸に溢れて來たといふやうに、眼からはらはらと落ちる涙を袖に拭いた。私も女の半生に同情せずにはゐられな

『矢張、Nさんなんか知つてる人なんですか？』

『矢張、雜誌の方で知つてるんだよ。屹度、停車場あたりまで迎へに行くかも知れない。』

『さう？』

Y君がロシア人を伴れて來て、向うの別莊に泊つて行つたことを話した時には、『さう、Yさんも來たの？』かう言つて女は目を睜るやうにした。女はYさんが私の結婚した時の媒酌で、私に對して、友達以上のある勢力を持つてゐることをも知つてゐた。一度逢つたこともあつた。

續いて、女はこの春遠くに嫁に行つた妹の話などをした。日曜毎に夫婦してのんきに別府や耶馬溪や太宰府やその他の名所を歩き廻つてゐる話から、つい來る時來たといふ端書を出して來て、『こゝに此間行つたんださうですがね。博多の人でも百人に一人も行かないやうなところなんですッて？　何ッて讀むの？　これは？』

私ははがきを手に取つて見た。深い海の洞窟に小舟が靜かに滑り入つてゐるやうな繪葉書であつた。

『お、芥屋の大門、えらいところに行つたもんだね。』

『何ッて言ふところですッて？』

『けやのおほとと言ふんだ。えらいところだ。本當に滅多に人の行かないところだよ。。矢張若い新しい夫婦だね。』

『さうだね、女には無理だね。』

こんな話をしながら、茶を淹れて、女は菓子や煎餅などを出した。

『でも、Nさん達、本當に來るかしら？』

『來るよ、屹度來るよ。』

『來て、私がゐるのでびつくりするでせうね。』

『また、やつてるなと思ふだらうよ。』『その代り先生が歸れば、すぐ社に知れる。家にも知れるよ。』かう言はうとしたが、私はそれを押へた。

『Mさんは來ないの？』

『忙しいからね。』

『今、何處？　新聞？』

『先生がゐなくつちや、一日の新聞も出來ないといふやうな位置にゐるんだからね。忙しいッてこぼしてよこしたよ。』

『Mさん、去年、此處に來てたんでせう？』

『先生のゐたのは、この家ぢやないけどもね。こゝから一里ばかりあるところの村の寺にゐたんだがね。』かう言つて、『夕方になると、その村から若い人達がきつとやつて來るよ。』

『え、もう、私の方も片附いたから。』かう言ひ乍ら女は小さな鏡を立てゝ髮の亂れたのを直してゐた。

やがて女は此方に來た。

『何うでせう、こんな恰好をして！　誰もゐないから好いやうなものの、東京では、ちよつとでも、こんな扮裝はしてゐられやしませんね。着替へやうかしら？』

『なアに、それで好いよ。』

『さう？』

嬉しさうな顏をして、『かうしてゐると、何うしても、別れるなんて言ふ氣はしないわねえ。』

私もいくらか暢々した氣分になつて、腹這ひに兩足を長く延して、女の大きな丸髷などを見てゐた。

外は靜かであつた。家の周圍に來る百姓達も、養蠶の時期に入つたので、久しくあたりにその姿を見せなかつた。

『夜は一人で淋しくなくつて、』

『別に……』

『さう？　雨戶も閉めないの？』

『だツて、誰も來るやうなことはありやしないもの。』

『でも、何だか無氣味ねえ。女はとてもゐられないわねえ。』

『停車場前まで行けばあるだらうけれども……まア、好いや、これで、汲んで置かう。此方の繩はまだ大丈夫だから。』かう私は言つて、『あと、まだ餘程汲まなけりやならないかね。』

『さうね、まだ餘程汲まなけりやならないでせう。半分位でせう、まだ……』

私と女とは勝手元に行つて、風呂の中を覗いて見た。それでも、もう水は五分の上に出てゐた。

『なァに、もう少しだ。汲めるよ、片方だけで……』

『大變ねえ。でも、風呂のあるとないのとでは、來た人には非常な違ひですからねえ。それに山阪を歩いて來るんだから猶更よ。風呂を立てゝおくのが、何よりも御馳走になりますからね。』

『それはさうだ。』

で、私は片方の釣瓶でまたせつせと水を汲んだ。鐵の車井戸はカラカラと絕えず音を立てた。井戸の周圍にある澤山の黃い月見草は、日中の暑い光線にすつかり萎れ果てゝゐた。

今度切れたら、それこそ大事だ。かう思ひ思ひ、注意しながら私は猶も細引を手繰つた。時々心配になつて、細引の結び目などを引張つて見たりした。しかし、幸ひに、切れもせずに、最後の一桶をも汲むことが出來た。

焚きつけが澤山あるので、火は容易に薪に燃え附いた。

『まあ、お茶でも飮まないか。』

けじの小さなやうな虫の其處に跂つてゐるのを指した。

水を半分ほど汲んだ時、井戸繩の代用にした細引はふつつりと切れて、一方のバケツが井の底深く沈んで行つて了つた。

『ヤ、切れた……』

思はずかう聲を立てると、それをきゝつけて、女は勝手元から半分體を見せて、

『何うしたの？』

『切れちやつた！』

『困るわねえ。』

女も出て來て井戸を覗いた。しかし何うすることも出來なかつた。私は殘つた井戸繩を手繰つて、『でも、片方は使へる。好い鹽梅に殘つた細引の方が長い。』かう言つて、私は落ちた方の先に丸太をつけてそして一方で汲むことにした。

『片々で汲んでは大變ねえ。向うの別莊に何かないかしら？』

『この前にも、釣瓶がついてゐたのが落ちて、バケツも細引も別莊から借りて來たんだから、もう言つて行つたッて、さうさうは無いよ。』

『でも賣つてゐるところはあるんでせう？』

話し、美しく打解けて、そして歸りには、女は私の末の女の兒を借りて行つた。女の兒は前に私が二三度伴れて行つて馴染んでゐるので、喜んで女に伴れられて雨の降りしきる中を出て行つた。

さういふ喜劇の幕を私は何故打つたか。或は私は不眞面目として責められるかも知れない。自己の得意を誇つたこととして笑はるゝかも知れない。妻を侮辱し、子を侮辱し、また女そのものをも侮辱した不眞面目な行爲であるとして非難されるかも知れない。しかしさうした喜劇を打つ心理が人間の心の底に何故にかくされて潜んでゐるか。さういふ目新しい光景に向つて進んで行く心理が何故に人間の心の奥深く巣をつくつてゐるのか。

『貴方、お客樣に風呂を立てゝあげるんでせう……』

かう勝手から女の聲がした。

『あゝ。』

『ぢや、水を汲んで下さいな。』

『よし。』

かう言つて私は立つて行つた。女は高く尻端折をして、二三日前に立てゝ滴さずに置いた風呂の水を小桶で汲み出して、せつせと風呂場や風呂などを洗つた。『だッて、汚ないんですもの。いろんなものがくつ附いてゐましたよ。それに、かういふ虫が澤山にゐるんですよ。それそこにも……』と言つて、けじ

場合、さういふ場合、更に一歩を進めて、神秘の境にまでその秘密の糸筋をかけてゐるといふ戀とか生命とか言ふものに對した場合、さうした場合などのことが私の心を往來した。

私はまた別なことを思つた。『何うも、仕方がない。お前が夫を持つ場合には、僕は引下つて了ふばかりだよ。それは、今までのかうした細かい氣分を一時に打碎いて了ふのだから、辛いには辛い。しかしさうかと言つて、妻や子供までを捨てゝ、お前について行くわけには行かない。妻はまあ好いとしても、大勢の子供、中でも幼ない子供を肉身の母親の手から離すことは出來ない。それは忍びない。かう言ふと、お前は薄情だと言ふかも知れないが、それは言はれたつて仕方がない。また、それを單に、薄情だと言ふやうなお前でもあるまい。』こんなことを私は女に言つたことがあつた。その時、女の眼から涙が流れた。私の聲も曇つた。

女が初めて私の家に來たのは、あれは去年の秋の末であつた。女は前から私の妻に逢ひたいと言つてゐた。妻もまた逢つて見たいやうな氣がしてゐた。で、ある日、女はその妹を伴れてやつて來た。秋雨の靜かに降る日で、玄關の前の木犀があたりの濕つた空氣に強く薫つた。

私ははつきりとその時のさまを眼の前に浮べることが出來た。妻と女との初めての會話はブリヽアントなものであつた。私は妻の神經と女の神經との相觸れてかゞやくやうなのを感じた。勿論、それは平凡な話題でもあり、會話でもあつたが、しかしその底に流るゝある暗潮は急でそして迅かつた。美しく

取つてそれに頭を當てゝ、仰向に天井を見た。天井には繩が五六疋黑くくつついてゐた。

私はいつか私の生活に深く思ひ入つてゐる自分を發見した。妻の顏、大勢な子供の顏、樹木の茂つた庭、さういふものが一方にあるとともに、働かなければならない社會、奮勵努力しなければならない事業が、暗い大きな壓力を持つて私を壓した。四十近くなつて人間の陷つて行く穽、それに向つて眞逆樣に落ちて行くさまも繪卷物のやうになつて私の眼の前に歷々と描かれた。現にさういふ例はいくらもあつた。某君、某君、私の知つてゐる同年輩の人にも片手の指を屈するほどあつた。

私は妻に就いて、何うしたといふ考も持つてゐない。別に倦きたといふ譯でもない。每日、顏を突き合せてゐるので、今では十日や二十日旅行などに出て逢はずにゐても、戀しいとかなつかしいとか言ふ考は少しも起らなくなつたが、しかし、妻に愛情がないと言ふ譯ではない。忠實な愚直な女だけに殊にさうである。

しかし、この問題を解釋しやうとするには、もつと深く根本に入つて行つて見なければならない。生、生殖、さういふ境まで入つて行かなければならない。母親と子供との關係、夫妻と子供との關係、さういふ境までも細かく入つて行かなければならない。同作者が心も體も子供に奪はれて、乃至は生殖の完成に滿足して、結婚した當座のやうな生々した愛慾を發揮することが出來なくなつた場合、またその一方の同作者が性の相違の下に自然に賦與されたある要求を他の同作者が滿足させることが出來なかつた

らうかとか、さういふことを顧慮してゐるからだよ。』

『だッて、さういふことを考へずに居られない性分なんですもの。とても梅子さんのやうに、あんなにまでしても、男について行かうなどとは思ひませんし、それに、そんなことはとても私には出來ませんもの。矢張、ちやんと自分の腹の中で、出來ることと出來ないこととが、一番先にわかるんですもの。』

『さうだね、さういふところがあるね。何と言ふのかな、矢張、打算に明るいといふやうなところがあるね。』

『打算ッて？』

『勘定に明るいといッたやうなところだよ。だから、眞劍になつて、戀が出來ないッていふやうなところがあるよ。』

『さうね。』

『そこが面白んだがね、僕には――』

こんなことを言つて私は笑つた。かうした會話は實はもう何遍繰返したかわからなかつた。私はそのをりをりについての心の狀態やら細かい氣分やらを思ひ出しながら、後姿を見せてせつせと物を洗つてゐる女の方を見た。

私は卷烟草に火をつけてそれをすぱすぱと吸つた。私は種々な思ひに滿されながら、傍にあつた枕を

『つまり、藝者といふ稼業、情を賣るといふことが不自然なのだ。それも、純然たる稼業といふ考へで、心の底にしつかりした自己を持つてゐて、單に、稼業として、商賣關係でやつてゐれば、まだ好いのだ。ところが、男の方にしても、女の方にしても、商賣關係ばかりではゐられないやうなところがある。そこが面白いのではあるが、又そこに不自然なところがある。だから、まことの愛情を得やうと思へば、何うしても、さういふ社會から體を自由にするか、心から一人を愛するかしなければならない。しかしこの社會にゐては、心からある一人を愛するといふことは、女に取つて危險た　何故と言へば、男に甜められてるといふ形になるからね。』

『それはさうね。』

『だから、矢張、その日その日の風次第といふ風に生活して行くのが其社會の女達の本當の生活かも知れない。然し、さういふと、そんな浮ついた薄情な氣分ではをられないつて言ふから、それで困るんだ。』

『本當ね。だから、商賣は止して了つた方が好いと思ふの？』

『だから、遠くにゐる人に、すべてを擧げて縋り附くといふ風にした方が好いんだよ。さうする方がお前の本當の生活の爲めには好いんだよ。』

『だつて、駄目ですもの。』

『いろんなことを顧慮してゐるからさ。將來が何うだらうとか、すつかり裸にされて了ひやしないだ

くがれ、家庭にあくがれ、男一人といふことにあくがれ、賴るべき柱にあくがれた。さうして普通の世の中の夫妻親子の團欒のさまを天國のやうに思ひ、自分等の生活をさながら溝竇の中にでも墜ちたもののやうに考へて悲觀した。最初にこそ――年の若い美しい驕つた孔雀のやうな時代にこそ、榮華を夢み、玉の輿を夢み、ダイヤモンドを夢み、大きな邸宅を夢み、自働車を夢みもしたが、一日毎にその幻影は破れて行つて、普通世間の女達の得てゐることさへ得られない身であることをかれ等は次第に意識して來ると、堪らない焦燥と煩悶とを內部に感ぜずには居られなかつた。『矢張、人の細君にならなけりやいけないんだね。』『私はよくこんなことをかの女に言つた。

『奥さんにならないでも、本當に賴りになる人があれば好いんだけども……』

『しかし、それは無理だよ。』

『何うして？』

『だつて、藝者といふ稼業をしてゐる中は無理だよ。いくら愛してゐるつたつて、自分の他に、男がいくらでもあり得るといふ境遇では、男は何うしても十の愛情を五つしか注ぐ氣にならないからね。現に、遠くにゐる人だつて、だから、眞劍になれないつて言ふやうなところがあるんだよ。男を幾人も持ち得るといふことが不自然なんだよ。』

『だつて、仕方がない。お座敷に出ないわけには行かないから。』

それを十文字にかけて、女の持つた天性を發揮したと言ふやうにすぐ勝手元の掃除にかゝつた。

『男世帶に蛆がわくッて言ふけれど、本當ね。』

かう言つて、水を汲んで來て、ザァザァ流元を洗つたり、茶碗やお椀を幾度も幾度も洗ひかへたりした。『あゝいやだ。蟲が……』頓狂な聲をあげて、手長蜘蛛の羽目板を匐つて行くのを見詰めたりした。

しかし、新しい手拭を形の好い丸髷の上に載せて、白い二の腕を思ひ切つて見せて、せつせと働いてゐるさまは、このさびしい山の中の世離れた別莊に一種の面白い對照(コントラスト)を見せた。家にゐては、水仕事などには手も出したことがなく、三味線より他は持つたことのないやうな女が、かうして水を汲んだり物を洗つたりしてゐるのもあはれに思はれた。女の是非持たなければならない子供も臺所も家庭も何も持つてゐないゝ女の憐れさが、かうして働いてゐるのを見る中にも絶えず私の胸に往來した。

何うせ藝者になつたからには、進んで好い老妓になることを心がけたら好いぢやないか。男なんかはぐんぐん騙(だま)して、その上へその上へと出て行くやうに心がけたら好いぢやないか。金も澤山に取つて、自分で自分の地盤をつくり上げるやうにする方が好いぢやないか。母親が、『お前は金が道づれさ！』と言つたのを薄情だなどと言つて怒らずに、自分で自分を築き上げて行つたら好いぢやないか。かう言ふことを私は度々言つたけれども、そんな風に考へることは人間として出來ないことであるやうに、女はいつもそれを否定した。否、かの女ばかりには限らなかつた。かういふ社會にゐる女達は皆な子供にあ

『…………』

「その前にまだ解決しなければならないことがあるぢやないか。」とか、「それも好からう、誰かに引かして貰ふやうにするさ、」とかいろ〳〵な言葉が私の口に出かゝつてゐたけれども、そんなことはもう度度言ひ古して、言ひ出すほどの意味もなくなつてゐたので、私は唯默つてゐた。

『そら、また、默つて了ふ。人が眞劍に話をすると、すぐ貴方は默つて了ふんだから……。ちつとも人のことなんか考へてゐては呉れやしないんだから。よして了へば、私なんか明日から何うなつたつて構はないといふ腹なんだから……。本當に情がないんだから。だから、私が浮氣をしたッて、それはさういふ風にさせた貴方がわるいんです。』

『だッて、仕方がないぢやないか。そんな金なんかありやしないもの。』

『金、金ッて、貴方はすぐあゝだ。』

『だッて、さうぢやないか。』

此處まで行つて私達は又默つて了つた。押つめれば押つめるほど際限がなかつた。『まア、來る匆々、そんな話をしないでも好いぢやないか。』

『でも今度は眞劍に聞いて貰はなくつちや――』

女は暫く茶を飲んだり菓子を食つたりしてゐたが、急に、着物を着替へて、紐を結び合せて襷にして、

ころに、貴方はひとりゐたんですか。』

女は室に入ると、帯を解いて、伊達卷一つになつて、まアこれで安心したといふやうにして餉臺の前に坐つた。机の上には罎にさしてある紫の色の濃い桔梗の花や、ひろげたまゝになつてゐる原稿紙や、雜誌や新聞などが一杯に散らばつてゐた。『その代り、かういふ靜かなところにゐれば、書けるにはいくらも書けるでせうね。』

『それよりも涼しいから好いさ。』

『さうね。』

信玄袋の中からは、甘納豆、佃煮、海苔を卷いた煎餠、旅行用の化粧道具などが出た。その化粧道具は、私がかの女とかうした關係になつた翌年の夏に買つたもので、十年近くも經過した今日までには、單にそれだけにでも隨分種々な思ひ出があつた。しかしその表の皮のところどころが古くなつてすれきれてゐるやうに、私達の歡樂ももう最初のやうな歡樂ではなくなつてゐた。

『もうつくづくとお座敷がイヤになつて了つた。それに、此頃のやうにひまでは、生中出てゐて、着物や税に金をかけるよりも、いつそ引いて了つた方が好いと思ふんですがね。』

『…………』

『もう、何んなに小さな家でも好いから、さうしたいと思ふんですけどもね。』

女房もあり子もある身だ。年も取つてゐる。唯、關係だけはそのまゝにして置きたい。』かう突詰めて思つたことなどをもくり返した。

山にのぼらうとするところに來ると『ひどい路ね。これぢや、下駄が臺なしね。』

『仕方がないよ。』

『蛇がゐやしないかしら？』

『大丈夫だよ。』

『ゐたら、何うしやう？　私、蛇が大嫌ひなんだから……』蛇がすぐ其處からでも出て來たやうに戰慄して女は其處に立留つた。

『大丈夫だと言ふのに……』

『でも……ひどいとこね。こんな路しかないのかしら？』

實際、丘に登つて行く路は、男にしてもひどい路で、草や萓が兩方から深く深く蔽ひかぶさつてゐた。下駄なんか仕方がないと言ふやうにして、思切つて、女は歩いてゐたが、今度は胸を突くやうな急な嶮しい阪に面して喘いだ。『それ、子規が鳴く、』と言つてきかせても、女はそれを耳に入れるどころではなかつた。

何うやら彼うやら別莊まで來た時には、女はほつと呼吸を吐いた。『まア、さむしいとこね。こんなと

『あゝ、さうだ。こんな田舍にしては不相應なほど大きな病院だよ。』
『それぢや、病氣になつても大丈夫ね。好い醫者がゐて？』
『かなりの醫者がゐるよ。』
警察の分署の前を向うに出た時には、『さう、あそこが別荘、まだ登るのねえ。大變ねえ。』かう言つて女は前に連つてゐる測候所や別荘や松原のある長い高い丘を見渡すやうにした。
『向うから便りがあるかえ？』
わざと碎けたやうにして、笑ひながらかう私が訊くと、女は大眞面目で、
『群山からあつたきりよ。』
『何ッて言つて來たえ？』
『雨にふられて困つてゐるらしかつたわ。また、裸になつちまつたんでせう。』
さう言ふことを女は常によく言つたが、私にはもうさうした言葉は澤山であつた。私に默つて考へながら歩いた。かうして不自然に續いた關係が、燃えもせず消えもせず燻ぶつてゐるやうな狀態で、また續いて行かなければならないことを私は考へずには居られなかつた。かうした山の中までも、その重荷を負つて來なければならないとは思ひもかけなかつた。しかし、私に取つては、女が來たことは嬉しかつた。單なる興味などといふ考は私にはもうなかつた。『何んな狀態の下に置かれても好い。何うせ私には

『構はないには構はないけれど……』

『好いわ。逢つたッて……』

半ば笑ひながら、『私がお構ひして上げますよ。』

二三歩歩いてから、『本當に、此頃は、氣がくさくさしてしやうがないんですもの。それに、體がわるくつて、お座敷なんか滅多に行きやしないんですの。母さんはね、よした方が好いだらうッて言ふんですけれども、何うしても來るッて言つて、無理にやッて來たんですの……。でも、電報を打つてッから、御迷惑かも知れないから、止さうかしらとも思つたんですけれどもね……』

『ちよつと待つて。何か買つて行かなくつちや、食ふ物も何もありやしないんだから。』かう言つて私は立留つた。其處には野菜などを並べた店があつた。

で、其處で茄子だの唐茄子だのを買ふ間に、女はその向うにある菓子屋で甘いものなどを買つた。

私達は暫く默つて並んで歩いた。

石を澤山載せた屋根だの、炭俵や薪を一杯に積んだ店だの、主婦が客の顏を剃つてやつてゐる理髮肆の店だのが續いた。此方から向うに流れ落ちる谷川は、雨の後の凄じい音を立てゝ流れてゐた。ある大きな家屋の窓には、看護婦の白い顏などが見えた。

『病院？』

やうな蒼白い神經性の顏をして、默つて、私に信玄袋を渡した。

並んで步きながら、

『汽車が込んで、込んで、二等でも、橫になることも何にも出來ないんですもの。』

『夜行は何うしても込むよ。』

『電報は何時頃來て？』

『夜中に起されたよ。』

『びつくりして？』

『まさか來るとは思はなかつたからね。』

『迷惑？』といふ顏をしたが、すぐ、『さびしいとこね。』

『ゐるところは、もつとひどいんだよ。周圍に家なんかありやしないから。』かう言つたが、『それに、困つたことがあるんだ。今日、東京から客が來るんだ。』

『客？　誰？』

『社の人だがね……。N君とK君とが富士の裾野めぐりをして、今夜は精進といふところに泊つて、それから五六里步いて、甲府から此方に來るツていふ手紙が來てるんだがね。』

『NさんにKさん。そんなら好いぢやないの。逢つて知つてるんだから……』

三

其時、停車場の構外で、私は一刻毎に近づいて來る下りの汽車を待つてゐた。

乘客は既に大抵レールを越えて、向う側のプラットホームへと集つて行つてゐた。來て間もなく懇意になつた巡査は、その時後れて急いで停車場に入つて來たが、私の其處に立つてゐるのを見て、

『お乘りになるんぢやないんですか。』

『いや、今日は客が來るもんですから。』

『さうですか。』

かう言つて、劍をじやらつかせて、そのまゝプラットホームの方へ出て行つた。汽車が汽罐車を前と後とにつけて、勾配の急な阪路を喘ぎ喘ぎ登つて來るのが、近寄つて來るその音で知れた。やがて折れ曲つた山と山との間から白い烟が颺つて、續いて長蛇のやうな汽車は、朝日の光線の漲り渡つた山の停車場へと入つて來た。

動いて行く客車の窓を一つ一つ見てゐた私は、ふと乘降の客の混雜の中をわけて、小さな、信玄袋を抱へて此方へ下りて來る女を見た。

女も私の其處に立つてゐるのをすぐ見附けたらしく、其儘急いで改札口の方へと來た。女は昂奮した

『ぢや、先生。』

『そこまで送つて行かう。』

『いえ、もう。』

かう辭退したが、私は下駄を穿いて、戸外へ出た。桔梗だの女郎花だのが美しく草藪の中に咲いてゐた。

『ぢや、其處を行くと、近いからね。すぐ大きな道に出るからね。』

『ぢや、左樣なら。』

『左樣なら。』

折れ曲つて下に下りて行く路の見える中は、二人は何遍となく振返つて私の立つてゐる方を見た。私も純な若々しい心と情とをなつかしく嬉しく思はない譯に行かなかつた。私もその姿の見えなくなるまで見送つて居た。

一時間ほどすると、下りの汽車の通る音がした。私は立つて硝子戸のところへ行つた。山畠を隔て、谷を隔て、池を隔て、國道を隔てゝずつと向うに、汽車のレールの長くつゞいてゐるのが一ところ打渡されて見えたが、丁度其の時貨車と客車とを繫いだ長い列車は、白い烟を嵐氣の中に漲らして通つて行くのが見えた。

『本場たから、質は好いんだけども、通俗相手に甘く拵へてあるから駄目だね。』

『父も矢張、葡萄酒なんか甘くつて駄目だッて言ひますよ。』

また種々と話が出た、何か聞きたいことが澤山にあるけれども、何から聞いて好いかわからないといふ風であつた。茶を飲んだり菓子を食つたりした。一昨日精進の方から來た客が持つて來た水蜜桃が籠の中にまだ三つ四つ殘つてゐたのを二人に勸めたりした。

時々燃えさしの薪の落ちる音をきゝつけては、二人は代る〳〵立つて行つて風呂の火を見た。

靜かな午後で、白い湧くやうな雲が八ヶ岳の上に靡き渡つてゐた。蟬が何處か遠くで鳴いてゐるのがきこえた。草原にはギスの鳴く聲がした。

『靜かですね。』

『本當に靜かだ……』

兄は半ば私に半ば弟に向つて『かうした一日があつたといふことは、僕等の日記に特筆大書して置かなければならないことだね。一生、忘れませんよ。先生。』

『僕もお蔭で、一日さびしくなく暮した。』

で、風呂が沸いて、それに入つて午寢などをして、二人が暇を告げて行つたのは、山の襞がもう濃い影を帶びる頃であつた。五時半の汽車で、二人はまた旅をつゞける筈であつた。

『本當に、彼方に行つてゐて下さい。すつかり沸して、入るばかりにして、先生を入れて上げますから。』

何うしても言ふことをきかないので、仕方がなく私は室の內へと上つて來た。あとでは、二人が一生懸命になつて、薪をさがしたり、火吹竹で火を吹いたりしてゐた。烟が一時室內に渦卷き上つた。

『かうして、先生と一緒に、蕎麥を食つたり、湯に入れて貰つたりしようなどとは、昨日まで想像もしてゐなかつたね。先生に、お目にかゝれるか何うか、それすら期待してなかつたんだから……唯、先生がゐる筈だから、一晩、山を見ながら、泊つて行かうツて言つて下りたんだからな。』二人はこんなことを言つてゐた。

火が燃え附いたので、二人はやがて此方へと上つて來た。

『實に愉快だ。』

『本當だ……』

二人はかう言つて、莞爾しながら、餉臺の處に來た。

『先生、何うでした。葡萄酒は?』

『少し甘いね。』

『さうですかね。』

『昨日、東京から二三人の客があつてね。沸したんだけれど……』
『ぢや、沸せば、まだはひれますね。』
『しかし、もう汚れてるかも知れない。』
兄の青年は、風呂の蓋を取つて見たらしかつたが、『なァに、まだ綺麗ですよ。二人や三人入つたッて汚なくなりやしませんよ。少し水を汲み足せばよう御座んすよ。先生、次手に、湯を沸して入れて頂いて行つて好いですか。』
『好いともね。』
『ぢや、おい、一緒に、水を汲まう。』かう言つて、弟を促し立てゝ、二人は井戸の方へ行つた。
車井戸の鳴る音が頻りにした。
私が行つて見ると、二人は一生懸命に風呂に水を汲み入れてゐた。で、私も手傳つてやる氣になつて、炭俵を解したのを焚つけにして、火を釜の下に燃しつけてやつた。
『先生、好う御座んすよ。私達が二人でやりますから。』
『でも……』
『好う御座んすよ。學校にゐる時分、かういふことは、もう始終仕つけてゐたんですから……』
『でも、唯ゐても仕方がない。』

室の内を見廻した。脂粉の氣に滿ちた風呂場、この山莊にふさはしからぬ女の匂、柔かい紙、香水の小さな罎、突然訪ねて來た東京からの客、酒の半ば殘つた罎、『跡』はそこにも此處にもあつた。

それは二日前の夜半であつた。突然、『電報』といふ聲に驚かされて出て行つた私は、『アスアサ八ジツクマサ』といふ文字のそこに書いてあるのを見た。私の體は震へた。私は擢つたマッチの私の手から消えて行くのを知らなかつた。私は暫し闇の中に立盡した。

丁度私は其翌日東京から來る二人の客を期待してゐた。二人の客は昨夜東京を立つて、富士の八湖をめぐつて、今夜は精進に泊つて、明日は此方へ來る筈であつた。暫く考へた私は、『なアに、構はん。一緒になつたつて構はん。滿更知らない同士ではないんだから。』かう決心して、私はそのまゝ蚊帳の中に入つた。しかし其夜は何うしても眠られなかつた。

二

蕎麥を食つて了ふと、勝手の方に立つて行つた兄の方の青年は、

『風呂があるんですね、先生。』

『あゝ。』

『いつでも沸かすんですか。』

と好いんだがなアなんて言つてをりますが……』

『君なんかも、これから大いにやらなくちやならないんだね。』

『おやぢが不過でしたから、俺の分も貴樣達がしなくちやいけないッてよく言はれるんです。』

『大いにやるさ。』

かう言つた私は、私の通つて來た長い長いライフを思起さずには居られなかつた。過ぎるとなく私は長い年月を經て來た。さうだ、本當にいつ過ぎるともなく過ぎて來た。そしてそれは長い長い斜坂ばかりで、その間には絕壁もなければ急な坂路もなかつた。曲線ではなく直線であつた。

蕎麥の好きな話を私がすると、

『ぢや、先生、私達が賴んで來ますから、一緖に此處で午飯を戴かして下さいませんか。』

『それはいゝけれど、君達に買はせては氣の毒だ。僕が御馳走するから使だけ君達が行つて呉れ給へ。』

『でも……』

『好いから、さうして呉れ給へ。』

『さうですか。』

暫くしてから、二人は出かけて行つた。そのあとで私は昨日から一昨日にかけてのことを考へた。まるで違つた生活。丸でこの山中に思ひもかけないやうな生活。混亂と煩悶と苦痛と愛慾との生活。私は

笑つた。

弟の方は殊に紅顔の美少年で、大抵は默つてゐたが、それでも莞爾と常に笑を頰のあたりに湛へてゐた。父親は埼玉のある中學の國語漢文の教師をしてゐて、年は五十一二ださうだが、矢張私のやうに酒を飮むことや、不遇で不平であつたが今ではおとなしくなつたことや、漢詩を作つたり漢文を書いたりすることや、もう一人縣の師範に二十になる女の同胞があるといふことや、母親がやさしいためにのみ長い間の父親の不平が慰められて來たことや、いろいろなことを聞く中に、私の心は益々二人の生活と境遇とに深く入つて行くやうなのを覺えた。私は死んだ兄などのことを思つた。不遇な心が其處にも此處にもあることなどを思つた。續いて私の二人の男の兒のことなども思ひ出されて來た。私は弟の書いたスケッチ帖などを展げて見た。

『旨いですね。』

『いゝえ。』

弟の青年は顏を赧くしてゐた。草花や、山や、汽車や、それから父親の横顏の寫生などもあつた。『はア、かういふお父さんだね、好いお父さんだ。』

『でも、今はよくなりました。……自分で漢詩の評釋の大册なのを拵へて、長年持つてゐますが、時時酒なんか飮んだ時に、それを出して來て、ひねくり廻して、何處かの本屋で引受けて本にして吳れる

ければ汚されもしなかつた。體には力が充ち、胸には若い心が溢れ、希望は花のやうに前途にかゞやき渡つた。口に自由を言はず、獨立を唱へないでも、體も心も小鳥のやうに自由で、いかなる艱難も艱難とは思はなかつた。從つて私は今『先生……』などと言はれて、かうして訪ねて來られるのが、一方には嬉しく一方にはまた辛く悲しかつた。

『お邪魔ぢやないんですか。先生、本當に……』

『いや……今日はもう好いんだ。君達が折角來て呉れたのが嬉しいから、一日仕事を休んでも好いんだ。よく來て呉れた――』

こんなことを言ふ中に、私達の心は今此處で初めて逢つて、初めて口を利いたとは思へないやうな一種の親しさと融合とを感じた。『先生、これは、昨日、甲府で買つて二人で飲んだんですが、飲み切れないんです、二人では。先生、何うです？』兄の方はかう言つて、持つて來た葡萄酒の罎を餉臺の上に載せた。三分の一ほどまだ酒は殘つてゐた。

『先生、本當に一人なんですか。食ふ物は？　皆な先生がなさるんですか？　自炊してるんですか？』

かう言つて驚いたやうな顏をして、二人は室の内を見廻した。勝手まで續いて明放された室の内には、釜だの鍋だのバケツだのが一杯にごだ〳〵と散ばつてゐた。德利や茶碗なども昨夜のまゝになつてゐた。床の間に積み重ねられてある夜着や蒲團を見ては、『蒲團が床の間にあるのは面白いですな。』などと

弟で、埼玉のものだが、辰野にゐる伯父の許に行く途中、此處に私のゐるのを知つてゐて、昨夜わざわざ其處で下りて、停車場の前の旅館に泊つて、そして今朝此處にやつて來たので『今、そこに、爺さんがゐましたから、先生が忙しがつてゐるか何うか聞きましたら、昨夜、酒を召上つたやうだから、今朝はまだ勉强にかゝらないでせうと言つてましたから、それで上つたのですが……』かう言つて、莞爾しながら私の顏を見た。

『まア、お上り……』

かう言つて私は二人を縁臺の傍へと導いた。私は不思議にもさびしい私の心が溫かい二人の若い心の方に偏つて行つてゐるのを感じた。

『さうですか、甲府で下りたのですか。それから、昨夜、そこで下りて、停車場前で泊つたんですか。それぢやすぐ來れば好かつた。』

『でも、先生に、かうして、すぐ此處でお目に懸れるとは思ひませんでしたから。』

かうして私に逢へたのが、二人にはいかにも嬉しさうであつた。そしてまたその嬉しさうなのが私の心を動かした。私は二十年も三十年も前に歸つたやうな氣がした。暑中休暇の旅行、山上に渦まき上る白い雲、谷合の凉しい水の音、私もよくかうして旅をして歩いた。其時分は山を見ても水を見ても唯嬉しかつた。愉快であつた。世間に觸れない心は純で、死だの戀だの暗い心理だのにはまだ少しも觸れもしな

山莊にひとりゐて

一

山に面した明るい硝子戸の中で、私が獨りで筆を執つてゐると、靜かに外に人の來る氣勢がした。午前十時頃で、山は晴れて、長い斜阪の處々に草を燒く烟が白く眞直に昇つてゐた。

私の山莊の周圍は、用もない人がいつも覗いて通つて行つたりするので、私はちよつと其方に眼をやつただけで、別に注意をも拂はずにそのまゝ筆を走らせた。しかしそれは矢張私をたづねて來たのであつた。

私は立つて行つた。私は二人の青年を見た。一人は二十一二歳、一人は十八九歳、共に白地の絣の單衣を着て、袴を着けて、新しい麥稈帽子をかぶつてゐた。

『何か用ですか？』

かうは聞いたものの、私は直ちにその用事を知つた。二人は唯私に逢ひに來たのであつた。二人は兄

愈々明日は出發と言ふので、其夜は其處でも此處でも酒宴が始まつた。若い男と若い娘とは彼方此方と戯れて歩いた。テントは山裾の林を賑やかにした。

滞在なしの三日路の樂しい旅はやがてその翌日から始まつた。最初の日は雨、次の日はからりと晴れたが、思ひもかけないほどの寒さで、山の雪は既に近くかれ等の路に迫つて來てゐた。しかしかれ等の樂しい心を曇らせるものは何もなかつた。子供達まで、明日は國に歸れると言ふので勇み勇んで嶮しい高い山路を登つた。

三日目の午後には、かれ等の部落の見えるある峠の上へと一行は近づきつゝあつた。足の達者なものは、我先にと山路を走つて、一散にその峠の上へと登つて行つた。三人四人五人、手を擧げて叫んでゐるのが下から仰いで見られた。誰ももうじつとしては居られなかつた。女達子供達も老人達も一散につづいて驅け上つた。歡呼の聲は一時峠の空氣を震はせた。かれ等の眼下には、白いテントが林から林へと一面に張られてあるのが見えた。

續いて三人も四人も叫んだ。『來た！　來た！　木曾の衆が來た！』

その叫聲はそれからそれへと瞬く間に傳はつて行つた。『來た！　來た！』總ての人達は唄か何ぞを唄ふやうにして、調子を取つて踊り上つた。

山の襞に添うた羊腸とした路、それを桐油を着た十五六人の同勢が並んで此方へ下りて來るのが夕日を帶びて明かに見えた。林にかくれ、岩角にあらはれ、再び隱れ再び現はれて、次第に此方へ此方へと近づいて下りて來た。山裾の林の葉は既に落ちて、熊笹の葉がガサガサと鳴つた。

若者を先に立てゝ、老人達は林の角まで迎へに行つた。

『お無事ぢやつたか？』

『お無事か？』

かういふ言葉は、頭領と頭領との間に取換された。

『いつ來さしやつた？　もつと早く來べい思つたが、病人があつたでな。』

『さうか、道理で遲いと思つた。誰だ？　病人は？』

『國の野郎だ。』

『それはいかんぢやつたな。もう好いか。』

『もう大事ない。』

『ほんにな。』
人達は遠い山の中にゐて、何遍この海の見える宿泊地を夢に見たか知れなかつた。南部に行つて一年歸つて來なかつた老婦は、息子のことを思ひ出したと見えて堪らないといふやうにして涙を流してゐた。

その宿泊地から山に入つて行かうとするところには、地藏尊が一つさびしさうにして立つてゐた。それはかれ等山に行くものの常に道路の平安を祈るところで、そこは大きい小さい石が常に澤山に供へられてあつた。老婦の息子も、矢張一昨年此處で石を供へて行つた。

『何うしてもあきらめられねえ。』

『さうだんべなあ。』平公の若い嬶はさも同情に堪へないやうにして言つた。

『俺ア、あの時、一緒に死んで了へば好かつた。』

『でもな、國へ行けば、娘衆もあるしな、親類もあんべいし……死んだものをいくら考へたッて仕方がねえだでな。』

『俺ア何うすべいな。』老婦は猶も泣いた。

それは三日目の午後五時すぎであつた。山はすつかり晴れて、後の山に白い雲が一片かゝつてゐるばかり、襞といふ襞、谷といふ谷はすべて一目に見渡された。ふと、ある男が叫び出した。

『來た！ 來た！』

一行は皆な其方を見た。ひろい野には、長蛇のやうな汽車が徐かに動いて行くのであつた。『汽車！　汽車。』かう言つて、皆な其方の方を眺めた。

そこから一里ほど行つた宿泊地に着いて、その夜は一行は慌たゞしくテントを吊つて寢たが、夜の明けた時には、山を越し野を越して、遙かに碧い渺茫とした海の繪のやうに展開されてあるのを見た。島の連つた彼方には白帆が靜かにあやつり人形のやうに動いた。

これはもう故鄕の近い徵であつた。故鄕を出て三日路、其處でかれ等はいつもこの遠い海の光を見て、それから深い深い際限のない山の中に入つて行くのであつた。『海が見える……海が見える……。』かう言つた人達の胸には、やがて來る一年一度の歸國の宴が樂しく歷々と描かれてゐた。

もう人達は落附いて仕事をしてゐられなくなつた。若者も娘達も夫婦連も、皆な一齊に、一刻も早く歸國を望んだ。

しかし一行はまだ其處で後れたある一つの群を待たなければならなかつた。それは木曾の方の山に入つて行つた人達で、其處まで行つたならば、その人達はもう先に其處に行つてゐて此方の來るのを遲いと言つてゐるだらうと思つて來たのであつた。『何してゐるんだんべ。』かう誰も彼も言つた。

『まだ遲いでねえから、ゆつくら、此處等で遊んで行くが好い。此處まで來ればもう國に歸つたも同じだでな。』

やゐねえ。こんなに大きいのはめづらしいや。それと言ふのも、山が開けたからぢや。今ぢやもう此處等には、好い木さへなくなつた。それから思ふと、昔は好かつた。何をしようが、今のやうにやかましく咎められるやうなことはねえし、鳥でも獸でも澤山にゐたし、里に下りて行つたッてサアベルなんかにおどかされるやうなこともねえ……。近い山ぢやもう旨いことはねえだ。』老人達はかう言つて、昔の山の話をした。

そこの谷合から高原へ出て、それからまた山を越した一行は、漸く故鄕を去ること餘り遠くないあたりまで來てゐた。あるところでは、三日ほど雨に降りつゞけられて、佗しくテントの中に蹲踞つて暮した。其處では、かれ等は雨を犯して此方へやつて來た群と落合ふことが出來た。

ある時は、途中で日が暮れて、大きな峠を越えて行かなければならなかつた。それは山から山を越して、遠くに、町、村、野、更に遠くに海を見るといふやうなところであつた。割合に、かれ等は町や里近くへと出て來てゐた。わるい路を辛うじて峠へ登りついた一行は、下に遠く町家の灯のついてゐるのを見た。山と山との峡から見える町は、中でもことに灯が美しかつた。突然遠くの暗い闇の野を、灯の長くつゞいたものゝ動くのを見た。

『汽車!』

『それ、汽車が行く……』。

見てゐる中に、一羽二羽飛んで來てはかゝつた。

ある谷合では、鹿が二疋も三疋もゐるのを發見した。群の中に生憎鳥銃を持つたものがなかつたので山刀を振翳したり、木の根を持つたりして人々はそれを追ひ廻した。子供連もあとから飛んでついて行つた。女達も皆なテントの中から出て來た。ワァイといふ聲が一しきり谷のこだまにひゞいてきこえた。

『取れたかや？』向うから走つて來る男を取巻いて女達が訊いた。

『取れた、取れた、大きいだよ。』

五六人の若者達は、やがて木の根に結へた大きな鹿をワイワイ言ひながらかついでやつて來た。

『成程大きいな。これは大きい。』などと傍に寄つて來た老人の一人は言つた。やがて刀はある若者に依つてとられた。そこに横へられた鹿は、やがて腹から割かれた、女や子供は大勢その周圍を取巻いて見てゐた。

肉は彼方此方のテントへ洩れなく分配された。頭領のゐるテントでは、やがてそれを肴に樂しい面白い酒宴が始められた。石油を彼方此方から集めて來て、小さな三分のランプを點して、大きな鍋で、その肉は煮られた。茶碗に一杯に波々と注いだ酒、地酒ではあるが、それでもかれ等を醉はせるには十分だ。やがて昔から傳へられた山の唄などが唄はれた。

『俺ァの若い時分には、こゝらでも、かういふ鹿や猪は澤山にゐたもんだがな。今ぢや、もう滅多に

故郷近くなつても、一行は急ぐやうな樣子を見せなかつた。其處に一日、彼處に一日といふ風にして、テントを張つては、ゆつくりと泊つて行つた。

金を貯めて來たものは、山で一日遊んでゐるけれど、大抵な人達は、材料のあるところでは、竹や木を切つて來て仕事をした。そして一里二里位あるところを里へと出かけた。

大勢になつてからは、かうした山の中に、こんな賑かな光景があるかと思はれるやうな狀態が每夜續いた。誰の心も、歸國を前にして、樂しい思ひに滿ちあふれてゐた。常公に限らず、若い人達は、やがて來るべき結婚の期節を皆な頭に繰返してゐた。樹の枝から枝へと並べて張つたテントは、丁度庇を並べた町家のやうに見えた。バケツを下げて水を汲みに行く娘、そこらを面白さうにかけずり廻つてゐる子供達、里から歸つて來る人達は、大抵大きな德利に酒を滿して持つて來た。

渡鳥がもう群を成して山から山へとやつて來た。それを獲るために、老人連はかねて準備して置いた網を山の峯の上へと持つて行つて張つた。そこに若者はをりをり訪ねて行つたりした。

『おんさん獲れるかね。』

老人は默つて其處に置いてある網のついた籠を[illegible]た。つぐみが澤山に澤山にその中に入つてゐた。

『さむしいもんか、この俺がついてゐる。』

ぐいと抱き緊めるやうに男がすると、

『厭、厭……』

『いやなことがあるもんか。……昨夜だツて來たぢやねえか。』

『でも、厭……』

常公はそれにも拘らず、手籠にでもするやうにしつかり抱きついて、『な、來年はな、うんと稼ぐべいな。一緒に、會津から南部まで行くべい。そしてうんと金貯めて來べいな。可愛い奴ぢやな。』

『あほらしい。』

娘はにこりと笑つて見せた。

『行くべいよ、もう……』

『さア行くべ。』

で、二人は立上つた。見ると、一行は林をぬけて、山坂へかゝつたらしく、羊腸とした路を彼方此方とたどつて行くさまが手に取るやうに見えた。山が午後の晴れた空に鮮かに美しく聳えてゐた。

かう言つては二人は路傍の木の根に腰をかけた。
『姉さん、泣いたゞ、……姉さんにわるいでな。』
『よく言ふでな、俺が……』
『でも姉さん一人ぼつちになつて了つてな。それが、何よりわりい……』
『何か言つたか。』
『何にも言はねえ。』
『でも、知つちやゐるな。』
『知つてるともな……』
『でも仕方がねえや、かうなつたんだで……。唯、おんさんが怖いな。』
『…………』
暫くしてから、『皆なにはぐれるとわるいで、もう行くべいや。』
『大丈夫だ。』
『でもな……』
『俺ァ、路、知つてゐるだで、大丈夫だよ。あとから行くべい。』
『でも、さむしいや。』

『紋十郎の組は何うしたんべ。何處でも、ちつとも、奴の組の衆には出會はさなかつたがな、……お前は何うぢやつた。』

『俺も知らねえ。』

『何處か遠くへでも行つたかな。』

『さうかも知んねえ。』

一時間ほどして、一行は出發の準備に取りかゝつた。相圖につれて、一行は皆な其處此處から集つて來た。誰も彼も荷物を負つた。七八歳になる子供まで皆な小さな包を負はせられた。

一行はもう三十人近くなつてゐた。先に行くものもあれば、後からつゞくのもある。勞れた足を引摺るやうにしてゐるものもあれば、さつさと元氣よく先に立つて行くものもある。路は高原から林の中に入り杜の中からまた高原へと出て行つた。

此處等はもう里からは遠く離れてゐた。里の樵夫も、此處までは入つて來たやうな路はなかつた。谷川の音が何處か遠くで咽ぶやうにきこえた。

一行の最後を、常公とその妹娘とが並んで歩いて行つた。山坂にかゝると、常公は娘を後から押すやうにした。二人は一行の姿の見えるか見えない位のところを歩いてゐた。

『ちよつくら休むべい。』

投出して寢轉んでゐるものもあれば、渇を醫すべく口を川の水に押當てゝゐるものもあつた。娘達は皆な赤い脚半を穿いてゐた。

午後の日影は鮮かにかうした一群の上を照した。日に燒けた顏、土に塗れた着物、荒れた脣、蓬ろなす髮、長く生えた鬚、さういふものが到るところにあつた。若い娘と若い男達は、後の林の木立の中深く入つて行つた。

繰返して語られるのは、長い間の旅の艱難と、辛勞と、その折々についてのめづらしい物語とであつた。逢うての喜悅、別れての悲哀は、矢張かういふ放浪者の群にもあつた。それに、後から合した群は、大きな山脈を越えて、海近くまで行つたので、めづらしい物語を澤山に澤山に持つてゐた。

二人の老人はかうした群から少し離れて斜坂になつた草藪のところに腰をかけて話してゐた。主として彼方此方で別れた連中の話が問題になつてゐた。

『もう、此處等近くに來てると思ふがな。』

『來てるに違ひねえ。』

『まア、仕方がねえ。向うに行つて、一日二日待つて見るだ。成だけ、一緒になつて歸つて行く方が好いで……』

『ほんまぢや……』

『うんと、貯めて來たかな。』

『何うしやんして。』

こんな會話が其處にも此處にも起つた。

常公や平公の仲の好い友達などもその群の中にゐた。貞公と言ふ男は、『えらい目に逢つたぞや。熊にも逢へばサァベルにも逢つてな。ある處ぢや、もう、既でのことで、牢の中へ打込まれる處だつたぞ。』などと言つて話した。『おつかァ、腹ァ減つた、腹ァ減つた！』かう子供達は母親をせがんだ。それにも拘らず、母親達は平氣で路の角の木の根に腰をかけて話した。

『おつかァ、おつかァ、腹が減つた！』

『煩せい餓鬼だな。』

かう言つたが、母親の一人は、甘藷の茹でたのを一本出して子供にやつた。と彼方からも此方からも小さい手が五本も六本も出て、煩さくまつはり附いて來た。中には自分の貰つた甘藷を取られてべそをかいてゐるのもあつた。ある者は泣き立てた。

『それ！』

母親は五六本其處に投げてやつた。

其處にも此處にも人達は腰を下して休んだ。或は木の根元、或は藪の中、或は小川の畔、中には足を

たがや。』

また見廻して、

『息子はな？』

『死んだがや。』

老婦の眼からは見る〳〵涙が流れた。

彼方の老人の頭領と老婦とは、長い間立つて話した。頭領の點頭いたり、眼をしばたゝいたりするのが此方から見えた。『さうかや、氣の毒なことをしたなァ。若い好い息子ぢやつたに……それから、他の衆は何うしたな？』

『上州でわかれたが、もう其處等に來てゐるべいよ。』

『さうかな。』

二人は猶立つて話した。

この群は二組三組其處此處で落合つたゞけに、息子達も娘達も夫婦連も子供達も非常に多かつた。誰れも皆鍋と道具とバケツとを負つて、木の杖をついてゐた。

『まァ、無事で好かつたな。』

『おあいさん達も。』

霜を帶びた下草は皆枯れて見えた。奥山は、早くも、雪が白くかゝつた。
ある日は凄じい風が山をも撼かすばかりに吹いた。木の葉も皆散り〴〵に、草は薙倒され、谷川の音は吠えるやうに聞えた。聳え立ち、重なり合つた山々には雲もかゝらず、黄色い冬近い日影が廣い高原を淋しく照らした。姉娘のあぐりは、ひとりさびしくこの吹きあるゝ風の中を、祖父の造つた木地を負つて、里へ通ふ岨道を下りて行つた。

五

ある處からある處へと行く途中で、一行はまた向うの山脈の中から出て來た一群の人達と落ち合つた。群の頭領の老人は、此方の老人と路の角で立つて話した。
『ヤ、無事かや。』
『おぬしも無事かや。』
此方の老人は、ぞろ〳〵とあとについて來る群を見渡して、『かなりに大勢だな。』
『おう、こんな大勢になつたぢや。作の組と、政の組とに、向うで出逢つたでな……。おぬしは何處から來た？』かう言つたが、南部に行つて去年歸らなかつた老婦達の群の中に雜つてゐるのを見て、『おう、おぬしも歸つて來たぢやな。去年は歸らねえし、たよりはなし、何うかしたかと思つて案じてゐ

『昨夜何處へ行つたかや？』

妹は吃驚したやうな顏の表情をしたが、『何故や？』

『だつて、行つたんべや？』

『何處へも行きやしねえ。俺ァ。ちやんと、姉つ子の傍に寢てたがな。』

『さうかや。』

『何でそんなこと訊くだべや？』

『さうかや、それぢや、夢だつたかな。』かう言つて、姉は默つた。姉はその後は何も言はなかつた。

『おつさん。早う國へ歸りたいな。』かう言つて姉は涙を流した。

『この孫は、まァ、何うしたんだんべ。國に歸りていなんて……。イヤでも、この冬には歸るだァ。そして今年こそ、好い婿どん、取つてやんべいな。せつせと稼げよな、好い兒ぢやで。』

『………』

『もうぢきだァな。此處に十日ゐて、それから、あそこに三日、あそこに七日、そしてあの大きな山を越しさへすりや、國はもう見えるだで。』

などと言つて老人は慰めた。

山の氣象は日に〳〵寒くなりつゝあつた。落葉はガサ〳〵と風に吹かれて飛んだ。落葉松は黄葉して、

町へ出た娘達の話などを姉妹は胸に思ひ浮べずには居られなかつた。中には、一度出て行つた山に謝罪して再び戻つて來るものなどもあつた。町には好いこともあれば、怖ろしいことも澤山にあつた。昔、朋輩であつた娘の一人が其處から彼處へと賣られて、辛い〳〵世を送つてゐるのにひよつくりある處で出會つたことなどを娘達は思ひ起してゐた。『矢張り、山が好い。』姉も妹もこんなことを思ひながら歩いた。

雨に濡れたり坂路を歩いたりするのは辛いけれど、時にはまた樂しい面白いことも山にはあつた。蕨、山牛蒡、山獨活、春は一面に霞が棚引いて、鶯やカッコ鳥が好い聲をして啼いた。谷には綺麗な水が流れ、山には美しい花が咲いた。生れたばかりの子供を負つて、やさしい力強い亭主と二人で、誰もゐない山の中を其處から此處へと放浪して歩く興味を娘達はをり〳〵頭に繰返した。

老人のテントへは若い人達がよく遊びに出かけた。老人がせつせと木地をつくつてゐる傍で若い人達は娘と種々な話などをした。ある夜、姉が眼を覺してゐると、テントの外には、誰か人が來たやうな氣勢がした。ガサ〳〵と草をわける音がして、つゞいてある相圖の音がした。姉はじつとしてゐた。と、急に、妹の小菊は、そつと立つて、靜かにテントの外へと出て行くのが見えた。星が美しく空にかゞやいてゐた。

あくる日、姉のあぐりは訊いた。

などと姉娘は笑つた。

『そんなこと言ふけど、好いのがあるんだんべ、ちやんと約束して置いたんべ、歸つて來るのを待つてるんだんべ。』

『さうかも知れねえよ。』

『當てゝ見べいか？』

『見さつしやい。』

こんなことを言ひながら三人は縺れながら歩いた。娘達は一緒に行つた朋輩の一人二人が町で誘惑されて行方不明になつた話などをした。『何處へ行つたか、いくらさがしてもわかんねえだ。男でも拵らへて突走つたんだんべいがて言ふこんだ。』

『お女郎にでも賣られたんべ。』

『お女郎に、俺ァもなるかや。綺麗だな、お女郎は――』妹を顧みて『いゝ着物を着て、見ただけでも俺は吃驚したゞよ。金はくれるし、男は好き次第だつて言ふしな、山稼ぎなぞより何ぼ好いか？』

『ほんまにな。』

『雨にぬれなくつても好いし、働かなくつて好いしな。』

常公は言つた。『でもな、山を出ると、好いことはねえや。』

『好いのを選る方が好いがな。あんまり選ると、終ひには、相手がなくなるぜや。俺の鼻のやうなものでも、お方にして見りや好いもんだぞな。』

『まァ、行つてからだ。國にや好いのが來よるぞ。』

などと常公は言つた。かれはもうこの冬こそは必ずすぐれた氣に入つた相手を得なければならぬと思つてゐた。

里に下りて行く路などで、何うかすると、常公はその孫娘達と一緒になつた。姉も妹も襤褸を着て、さゝらやたわしを背負つて尻を高くはしより上げて、後になり先になりして岨道を歩いた。

『をんさん（おぢいさん）おつかねえかよ。』

姉も妹も笑ひながら頭を振つた。

『おつかなくねえけりや、俺らんとこへ來うな。』

『…………』

『來ねえ？』

わざと調戯ふやうにして、『來れや、荆棘でも何でも負うぞな。三年一生懸命になつて働くぞな。南部へ伴れて行くぞ。』

『俺ア、なるべいか。』

りしてやつて來た。種族の中でも聞えた老人が一人ゐて、その孫娘やら息子やら仲間やらが一緒になつて來た。老人は宿泊地の所在、水の所在、路程の遠近などをそらで知つてゐた。かれは幼い頃から一生を山で暮した。南部の奥へも行けば、九州の果てまでも行つた。よく若者をその周圍に集めて、彼方此方の山の話や、處々で遭難した冒險談などをしてきかせた。

孫娘は二人あつた。姉をあぐりと言ひ、妹を小菊と言つた。あぐりは二十歳、小菊は十八歳、何方もこの冬には相應な夫を持たせて、一人前の山挊ぎをさせる筈になつてゐた。娘達の元氣に笑ふ聲は、山裾の遠いテントから常に洩れてきこえた。

平公は常公に言つた。『何うだな。あのあまつ子は？』

『うむ……』

常公はにやにや笑つてゐた。

傍にゐた平公の鼻は、『妹の方が好がんべ。容色も好いし、氣立も好いや。それに肥つてるアな。』

『あはゝ。』

平公も常公も笑つた。

『でもな、もつと好いのがあるかも知んねえでな。』

『ほんまに……』

の美しい晴れた日が毎日續いた。重なり合つた山は、くつきりと線を碧空に劃して、破濤のやうに連りわたつた山嶺は、遠く廣く展開されて見えた。木の葉は紅葉して、朝日夕日は美しくこれを照し、月は銀のやうな光をあたりに漂はせた。谷川の囁くやうな響は微かに下に下に聞えた。

鹿の鳴音が笛のやうに聞えた。

それは廣い高原のやうなところであつた。草藪と林と落葉松とが廣くつゞいて、熊笹が一面に生え茂つた。ある日、夕日が西の山陰に沈んだ頃、平公はふとその廣い野原を越して、誰か五六人一緒に此方にやつて來るのを見た。後に負つた荷物と、杖と、桐油とは、矢張その同じ種族のものであるといふことを思はせた。

『おーい。』

『おーい。』

呼び且つ答ふる聲がこだまに響いてきこえた。

四

一行は賑やかになつた。其處にも此處にもテントが張られて、若い娘や子供がバケツを下げて、水汲みにと谷川の方へ下りて行つた。後から來た群は、西の方の大きな山脈に添つて、崖を渉つたり谷を越えた

かれ等は一番多くかういふ人達を恐れた。そしてかういふ人達は、きまつて、かれ等に籍の所在地を聞いた。しかしかれ等はさういふものを何處にも持つてゐなかつた。强ひて詰問されると、から等はかれ等の頭領から持たせられた木地屋の古い證書の寫しのやうなものを出して見せた。それは七八百年も前の政廳から公に許可されたやうなもので、麗々しく昔の役人達の名と書判とがそこに見られた。全國の山林の木は伐つても差支ないといふやうな文句がそこに書かれてあつた。

白い服を着た人達も、要領を得ないかれ等種族を何うすることも出來なかつた。徳川幕府の潰れたのも、明治の維新になつたのも、京都から東京へ都が遷つたのも、日清戰役があつたのも、日露戰爭があつたのも、軍艦が出來たのも、飛行機が出來たのも、何も彼も知らないやうなかれ等の種族には、何を言つて聞かせても效がなかつた。後には、警官達も持餘して、唯一刻も早く、自分の受持つ管內からかれ等を立去らしめることをのみ心がけた。

『一刻も早く立去れ。』

『…………』

『わかつたか。』

『…………』

翌日は、其處を去つて、かれ等は別なところへと移つた。一しきり雨の時節が通り過ぎると、今度は秋

仲間に伴はれて、草を枕に、露を衾に平氣で過して來た習慣は、全くかれ等をして原始の自然に馴れ親しませた。それにかれ等の血には放浪の血が長い間の歷史を持つて流れてゐた。

『此處まで來れや、もう、國へ歸つたも同じだな。』

などと若い夫婦も言つた。夫婦はかなりに多く金を貯蓄して來た。かれ等も矢張、冬の會合のことを樂みにしてゐた。親にも逢へれば同胞にも逢へると思つてゐた。馴れてゐる故もあらうが、南部の山の險しいのに比べては、此方は平地のやうだなどと言つてゐた。

其處にかれ等は一週間ほどゐた。平公夫婦の每日里の方へ下りて行くのに引替へて、遠くから來た方の人達は、多くは山で遊んで暮した。

平公夫婦の里に行つてゐる間に、ある日、里の人達らしい男が二人此方へとやつて來た。その時は別に何も言はずに歸つて行つたが、そのあくる日に、白い服を着て、劍を下げた人達が草鞋ばきで、二人三人までやつて來た。

『貴樣達は何處から來た。』

『…………』

『山の向うや此方でわるいことをしたのは、貴樣達だらう？』

『…………』

かれ等は何んな遠い山の中で死んでも、決してその屍を異鄕に葬ることはしなかつた。かれ等はさういふ不幸に出會すと、山の上で、木を集めて、それを火葬にして、いつも骨を遠くその故鄕へ持つて來て埋めた。そこにはかれ等の祖先がゐた。古い系統と古い歷史とを持つたかれ等の寺があつた。

『まだ、若いだんべ。』

『二十七だよ。』

『まだ、上さんも持たずか？』

『今度歸つたら、嫁でも持たせべい思つてゐたゞよ。』

『可哀相なことをしたよな。』

老婦は涙を流した。利益の多い遠征ではあつたが、またそれだけ艱難の多い旅であつた。老婦は木の多い山、產物の豐富な山、淳良な氣風の里の話をすると共に、危い崖、恐ろしい猛獸、凄しい山海嘯の話などをした。其地方では恐ろしいのは警官ではなくして自然そのものであつた。日光の山奧などには、いくら伐つても伐り盡せないほどの木材があつた。そこにある山奧の溫泉は、川一面が湯で、上州でわかれた群の一人がその前の絕壁から落ちて怪我をした創傷を一日か二日で治したといふことがあつた。熊や猪などにも度々出會つた。

かれ等はしかしかうした長い遠征をも決して辛いとは思つてゐなかつた。幼い頃から親に連れられ、

若い平公の嗅は、かう言つて始めは本當にしなかつたが、漸くそれは同じ種族の群であるといふことがわかつた。で、此方からも行けば向うからも來た。その群は始め十五人で、一昨年、遠い會津の山奥から南部の方へと入つて行つたが、昨年はたうとう國に歸ることが出來ず、日光の奥で年を迎へて、それから、上州から信州の方へと段々出て來たといふことであつた。艱難も多かつたらしく、その中のある群とは、會津でわかれ、南部でわかれ、最後に上州でわかれた。『今年は何うしてもな、一度、國に歸るべい思つてな。』かうその老婦は話した。

老婦は一つの位牌を肌身離さずに持つてゐた。それは一昨年同じく國を出て、途中で死に別れた一人息子の位牌であつた。老婦は涙ながらにその話をした。『會津から南部に行く途中だつたけな。急に、病氣になつてな、吐くやら反すやら、里のお醫者にもかゝる間もなくて、つい、死んで行つて了つたがな。平生丈夫ぢやつたで、こんなことがあらうとは夢にも思はなかつたで、俺ア、一時氣拔けのやうになつて了つたゞ。それでも、皆なは氣の毒だと言うて、えらく力になつて呉れしやつた。』かう言つた老婦の眼には、ある山から下りて行つた森に圍まれた寺や、本堂や、珠數を繰つた人の好ささうな老僧や、山の上の火葬の夜のさまなどが、今も歴々と映つて見えた。

『これに骨が入つてゐるのだよ。』

かう言つて老婦はその持つてゐる小さな瓶を平公と常公に見せた。

えな。嚊のない時分には、一年一度國に歸るのが、何より樂しみだつたものだがなア。』
『でも、皆なに逢へるから、樂みでねえこともあんめい。』
『それはさうだがな。』
一年一度の同種族の會合、そこに集つて來る大勢の人々、彼方此方から持つて來るめづらしい御馳走、あの時の宴會の歡樂は、言葉にも言ひ盡すことが出來なかつた。大勢の若い娘達、それを其の日其の夜は何處に伴れて行つても差支なかつた。樹間に幾つとなくかけられた桐油小屋、バケツの中に一杯滿された酒、年寄も若者も一緒になつて賑はしく歌を唄つて躍つた。
彼處に五日、此處に三日といふやうにして、かれ等は次第に國の方へと近づきつゝ放浪して行つた。峯から峯、谷から谷、林から林と移つて行くかれ等は、ある宿泊地で、最初に、三人づれの同種族と一緒になつた。
老いた婦に若夫婦、その若夫婦は今年二つになる子供をつれてゐた。その群を最初常公が發見した。
『何うも、あそこに桐油があるかしら？』
『何處に……』
『そら、あの山の陰の林の中に。』
『あれやさうかしら？』

た時に貯めた金をまだいくらか持つてゐたので、金を出して、平公から米を分けて貰つた。

矢張、里に近いところでなければ、仕事をして、それを買つて貰ふことが出來なかつた。で、かれ等は前の山とは正反對の山の裾の處に來て、桐油を張つて五六日其處で暮した。秋はもういつかやつて來てゐた。山で取れるものには、初茸、松茸、しめじ、まひ茸などがあつた。しかしそれも時の間になくなつて、日が照つたり雨が降つたりしてゐる間に、朝晩は持つてゐた着物でも寒い位になつた。平公夫婦は、常公を山に置いては、さゝらだの木地だのを持つて里の方へ出かけて行つた。

ある日は大祭日か何かで、里では、國旗が學校や役場やその他の民家の軒にかゝげられて、酒に醉つて赤い顏をした人達が彼方此方を歩いてゐた。ある木地屋では、平公夫婦は酒や蕎麥を御馳走になつた。お金の澤山に取れた時には、かれ等は白鳥に一杯地酒を買つて、それを山に持つて來たりした。

常公はいつも獨りで別に桐油を樹間にかけた。かれは木地をつくるよりも、蜂を取つたり、岩魚を取つたりする方が得意で、岩魚は燒き串にさして、そして里へ持つて行つた。

『もう、冬が近づいた。國に歸るのももうぢきだ。』

かう言つて、平公は常公の桐油を訪ねた。この冬は是非嚊を持つやうに平公は勸めた。『一人で稼ぎに出るのと、二人で出るのとでは、大變な違ひだぞな。何しても二人だと樂みで好いだ。この冬に、うんと好いのをさがして、早く祝儀をする方が好い。』かう言ふかと思ふと、『でも、この冬は俺は樂しみがね

で、平公は急いで出發の準備に取懸つた。山から山へと放浪して行くかれ等の生活は、いざと言へば極めて單純なものであつた。鍋、バケツ、鉈、鉞、鋸、さういふものも、箱に入れると、小さい包になつて了つた。樹に結びつけたテントを外して、夫れを小さくたゝんで、平公と若い鼻とはそれを適度にわけて負つた。

『氣の毒だつたな。』

かう何遍となく常公は言つた。

『何ァに、何うせ、もう、明日か明後日は向うに行かうと思つてゐたんだ。』

雨はまた少し降つて來た。しかしかれ等は別にそれを苦にするといふでもなかつた。かれ等の立つた跡には、鉋屑と、竈と、燒火の跡とが殘つた。切り倒した木も縱橫に散ばつてゐた。

かれ等が高原の草原から羊腸とした坂路にかゝる時には、それでも雨は晴れて、白い或は灰色の雲が渦まくやうに峯から峯へと湧き上つてゐた。雲の間からは、大きな深い紫色をした山が見えたりかくれたりしてゐた。名も知らない鳥が向うの山裾の深林の中で鳴いてゐた。

三

其處に三日ほどゐて、それから三人は又別の方へと移つて行つた。それでも常公は工夫になつて働い

平公はいくらか不安になつたといふ風で、『あまつ子にかゝるのはわりいぞよ。おめつちも、だから、もう上さん持てッて言ふんだ。』考へて、『大丈夫かな、來やしねえかえ、此處はまだ里に近いでな。』
『大丈夫だんべ。』
『でも、安心なんねえな。この向うの山越せや、大丈夫だがな。』
俄かに平公は不安心になつて來た。飛んでもねえ奴に入つて來られたとも思つた。平公は明るくなつて來た空とまだ餘り遲くない日射とを見た。幸ひに此處には仕事はもう澤山に溜つてゐなかつた。四日ほど前に嗅と二人で里に下りて、仕事したものを米と金とに代へて來た。
『天氣も上りさうだで、向うまで行かうかや？』
『これから？』
若い嗅は眼を瞬つて、
『でも、此處にゐちや、危ねえからな。』
『ぢや、おらつち一人行くべいか。』かう言つて常は立上つた。
『おめい、獨り行つたッて、おまはりが此處に來ちや駄目だァな。何ァに好い。行くべい、行くべい。此處にや、もう用はねえだでな。』決心したやうに、『何ァに、二里とちよつとだ。今、行けや、日のある中に向うへ行き着けるだ。』

ゐただでな。つい出來心でな。』

『工夫をしてたか？』

『いや、それからはいろんなことをしただ。工夫を一月して、それからまた乞食をして、町の中を荒して歩いて、四五日前に、この下の村さ來たゞ。里はもうよく／＼厭だ。今日山へ來ようか明日山へ突走らうかと思つてゐたゞ。停車場があらァな。あそこから山へ出て來ると、畠にひとりあまつ子が出て働いてゐる。綺麗なあまつ子だ。ふと、ひよんな氣になつた。……おめいさ、それも無理はあんめい、女ッ子の肌なんて、今年は一度だッて出會さねえんだからな。』かう言ひかけて常は笑つた。

『で、かゝつたんか？』

『さうよ。旨くやつたんよ。ところがそれが知れてな。昨日、一日、あの雨の中を逐ひ廻されて、それからやつとの思ひで此方へと入つて來た。』

『おまはりも出て來たかや？』

『出て來たにも何にも……』

『それやいかんな。此處まで來やしねえか。』

『この雨だから、此處までは來めいがな。』

『なんともわかんねえぞよ。』

『なんの。』

若い嗅が火を燃したり何かする傍で、常は濡れた衣を乾かした。そして、途切れ途切れに、自分のやつて來たことを相手に話した。常は五六人の仲間と、木曾の山の中を通つて、針の木の方まで行つた。何うも旨いことがない。里に近いやうなところは、警察がやかましかつたり、木材がなかつたりして、仕事が出來ない。さうかと言つて、あまり山の中では、折角、好い木があつても、それを里へ持つて行くのに不便だ。仕方がないので、烟硝を買つて來て、穴蜂の巢を取つたり、川へ下りて、岩魚や鰍を取つたりしたが、何うも思はしくない。で、針の木で皆とわかれて、一人になつて里へ出た。或町では乞食をした。ある村では畠のものを盗んで一里も追ひかけられた。それからある處では石灰の取れる山に工夫になつて行つて、そこで一月ほど働いた。

『何うしてぼやされた？』

かう訊かれても、常はぐづぐづしてゐるので、

『あまつ子にかゝつたんべ？』

『………。』

『あまつ子にかゝつちや、里ぢや、ぼやされるァ。』

『なァにな、俺もわりんさ。』常はかう言つて、『何うせ里にやゐられねえ。山へつッ走らうと思つて

て外へ出た。

『ヤァ、常公か、めづらしいな。』

『今、其處で逢つたでな……俺ァ、びつくりしたよ。』若い男は、かう言ひながらバケツをテントの入口に下した。

『何うした、常？』

『何うしたにも、何にも、えらい眼に逢つた。』

『矢張、此處等にゐたか？』

『里へ行つたでな。』

『さうか、里へ行つてたか。……まァ入れャ……』

で、常公は負つて來た荷物を下して、そのまゝテントの中へ入つて行つた。

『寒かつたんべ。』

『寒いより何より、えらく降られてな。』かう言つたが、『おめいさ、此處にゐるとは知らなんだ……いつ來ただ？』

『もう、十日になるァ。』

『いゝ仕事があるかな。』

顏見合せて二人は一緒に聲をあげた。やがて、『常やんぢやねえか。誰かと思つた。俺ァ熊かと思つた。』

『ヤァ、まんさんか。』

かう言つて常と呼ばれた男は近寄つて來て、『好いところで逢つた。平さん、一緒かな。』

『ゐたつけ。』

『好い處で逢つた。……里で食つちやつてな。俺ァ大急ぎで、遁げて來ただが、えらい眼に逢つた。』

『さうけえ。』

常公は矢張バケツと鍋とを負うてゐた。テント代りにする桐油を上から着てゐるが、帽子がないので、頭髮はびつしより濡れて額にくつゝいてゐた。

水の滿ちたバケツをかついで、常公と並んで歩きながら、

『何うしただえ？』

『えらい眼に逢つたぞな、里で、……まァ、これでやつと安心した。』

『何かしたんべ？』

『うん……。』

あとは言はずに、二人はテントの張つてある方へと來た。仕事をしてゐた平公は、話聲が聞えるので、不思議にして、手をとゞめて其方を見たが、喞と一緒に桐油を着た男が歩いて來るので、其まゝ立上つ

若い嚊はぐづ〳〵してゐたが、やがてバケツを二つ天秤棒代りの木の杖にかけて、手拭で頬かむりをして、そのまゝ霧を衝いて出て行つた。雨はまだチラ〳〵落ちてゐた。

二三町行つた谷合に、綺麗な水が流れてゐるのを若い嚊はよく知つてゐた。かの女は平公と夫婦にならない以前にも、親に伴れられたり、仲間の女に伴れられたりして、二度も三度も此處に來て泊つた。ある夏の初めに來た時には、其處から草花の見事に咲いた高原を通つて、さゝらを持つて、大勢して里の方へ出て行つた。

露の深い草の中を通つて、崖のやうになつた處を少し下りると、ちよろちよろと水の流れる音がして、下流の岩に碎けるのが白く見え出して來た。やがて川の岸に下り立つた若い嚊は、バケツを石と瀬の間に入れて、水の一杯になるのを待つた。

一つを持上げて、又一つを入れた。

ふとガサガサと草を分けて來るものの氣勢がして、山猪か、でなければ鹿か、熊はまだ出るわけはないと思つたが、そのまゝぢつと音のする方を見た。かの女は鋭利な鎌を腰にさしてゐた。突然草の中から人の姿が現はれた。

『オ。』

『これは――』

處かで山鳩が啼く聲がした。

若い嚊は鍋の蓋を取つて、箸をさして見て、それを平公の方へと持つて行つた。鹽を袋の中から一つまみ出して來た。

『食はねえかえ?』

『うん……。』

『これは旨かんべいよ。』

『さうだな。』

平公はそれを一つつまんで、鹽をつけてむしや〳〵食つた。

『里のは、旨いや。』

『さうだな。』

若い嚊も二つ三つ食つたが、深い霧の處々切れて晴れて行くのを見て、『好い鹽梅だ。晴れつかも知んねえ。』

『さうだな。』

かう言つたが、『今の中、水汲んで來やれな。又、降ると困るぞ。』

『さうだな。』

『また、ぢき、冬になるな。』
『ほんまに……』
『いつまでぐづ〳〵してもをられねえぜ。』
『それにしても、早う天氣さなれば好いと思ふだ。』
鍋一つ、バケツ二つ、水を汲むにも、飯を炊くにも、物を洗ふにも、すべて皆これで間に合はせた。
土を掘つた竈には、藤蔓で鍋がかけてあつた。濡れた木は容易に燃えなかつた。
烟は湧くやうに低く地を這つた。
『けぶいな。』
『でも、濡れてるだで、燃えねえ。』
顔を竈に押附けるやうにして若い喚は吹いた。火はやがてぱッと燃え上つた。
『何だな、煮てるんは？』
『芋だがな。』
さうかと言ふ顔をして、平公はまた仕事に取かゝつた。それは二三日前、一里ほど里に下りて行つたところにあつた山畑からそッと取つて來た里芋であつた。一しきり盛んに降つた雨は、やがて小降りになつたが、今度は霧が一間先も見えない位に深く立罩めて、あたりは唯白く茫と打渡されて見えた。何

二

平公と嗅とはある谷間で十日ほど過した。それは丁度夏も終りになつて、蟲の聲などの靜かに聞える頃であつた。毎日續いて雨が降つて薄い小さいテントからは雨滴が佗しく落ちた。二月三月精出して働いて、里に木地やさゝらを賣つて來たので、金も米も不自由しないほどかれ等は貯へて持つてゐた。平公は狹いテントの隅に形ばかりの仕事場を拵へて、終日長く木を切つたり削つたりしてゐた。木の葉や木の枝を澤山に取つて來てテントの上に置いても、それでも雨はぽたぽたと洩れた。平公の頭の髮は半ば濡れてゐた。

『しけて、しやうがねえな。』

『ほんまに……もう止まずかと思ふが。』かう言つた若い嗅の髮の毛も矢張り雨滴で濡れて光つてゐた。平公は去年までは獨身であつた。毎年獨りか、でなければ、仲間の一人二人と山から山へと仕事をしながら放浪の生活を送つた。平公は去年の冬の初めの歸國を思ひ起した。一年に一度、國では結婚をするために同種族のものが全國から集まつて來るのが例になつてゐた。

彼方此方に散つたその種族の人達――さういふ人達は年頃になつた人達の結婚を祝ふために、遠いところから一度は必らず遙々その故鄕へ歸つて行くのであつた、去年の冬、平公は其處で今の嗅を貰つた。

『ゐねえし、もう。』
『露にぬれてもお方は山で待つてゐる！かな。』
『あほらしい。』
女はかう言つて笑つた。汚ない扮裝をしてゐるけれど、中には色の白い髪の濃い女などもあつた。時には不思議にして、かれ等の生活や故鄕などを根掘り葉掘り聞くものなどもあつた。『さうかな。先祖から代々さういふ事してゐるのかな。餘程ゐるのかな。仲間は千人も二千人も？　ふん、そんなにゐるのかな。そして日本中を山から山へと股にかけて歩いてゐるんだな。面白いな。ふん、會津の方まで行くのか。そして故鄕は何處だな。』
　しかし、男にしても女にしても、かれ等の群は、滅多にその生活や故鄕や祖先を語らなかつた。かれ等は訊かれると、唯薄氣味わるく笑つてばかりゐた。それにかれ等に關しての傳説は、一層普通の民とかれ等との間を隔てた。里の人達は言つた。『あいつ等はそつとして置くに限るぞよ。生中、あいつ等のことを聞かうとしたり、あいつ等の中に入つて行かうとすると、えらい目に逢ふぞよ。あいつ等の仲間は昔から堅い約束があつて、少しでも仲間のことを世間に洩らした奴は、成敗されて了ふといふことだし、里の人でも、あいつ等のことを餘りよく知つてゐると、何んな目に逢ふかわからんぞ。そつとしておけよ。それに限るぞ。』

かれ等の行く處には、小さな轆轤を店の傍に備へて、終日椀や盆の製造に忙殺されてゐる家などもあれば、下駄屋の看板をかゝげて、亭主がせつせと仕事場で鉋を使つてゐる家などもあつた。

『これや高けいや。』

『高いもんかな。山坂越えて骨折つて持つて來るだで。さうして呉れや、この前も、さうだつたでな。』

『お前ち等のは、元がいらねえだで、いくら安くつても間に合ふべい？』

こんなことを笑ひながら言ふと、

『何うしてな、この頃ぢやな、お上が喧しいだで、とても駄目だな、皆な、元を出して買はねえぢや木の片一つありやしねえ。えらい時世だ。』

『うそ、こけ。』

『まア、それぢや、かうして置くべい。それなら好かんべ。また、來年、買つて貰ふだでな。好かんべ、それで……。』

『丁度にして置け。』

『丁度？　それはひどいや。そんな眞似すれや、小言言はれるァ。』

『誰に？　お方にか？』

かう言つて笑つて『お方ァ、山さゐるんか。』

で里に出て、さゝらや椀の木地や蜂の巣などを賣つた。『さゝら入りまへんか。』かう言つて、かれ等は農家の軒から軒へと歩いた。それは大抵山に添つたり谷に臨んだりしてゐるやうな村里で、それから一二里と隔てた町や都會へは、かれ等は滅多に出て行かなかつた。老人が留守を守つてゐる農家、鷄犬の聲の穩かにきこえる村落、賣るものがなくなるとかれ等は平氣で乞食になつた。時に馬鈴薯の一桶や甘藷の一包を盜むこと位はかれ等は何とも思つてゐなかつた。

『また、山窩奴が來やがつたんべ。』

村の人達は、常に馴れて知つてゐるので、別に怪しみもしなかつた。

鋸、鉈、鉋、小刀、小鋏、さういふものをかれ等は皆な一人々々持つてゐた。それも普通里で大工が使ふやうな大きなものではなく、屈折自由な、それでゐて切味の非常に鋭利なものであつた。かれ等は賣るものがなくなると、官林であらうが、民有林であらうが、さういふことには頓着なく、自分に都合の好い木材を切り倒して、必要な部分だけを切り取つて、そしてさつさと山から山へと移つて行つた。

かれ等は材料のあるところをよく知つてゐた。見事な竹で蔽はれてゐる谷、美しい樹木の青々と繁つてゐる谷、さういふところでかれ等は三日四日を費した。ある里に近い山では、男は宿泊地に殘つて、木地を拵へたりさゝらを造つたりしてゐる間に、女は二人三人揃つて、それを持つて、近いあたりの里を賣つて歩いた。

歸國

一

一行は樹立の深く生茂つた處から、岩の多い、勾配の高い折れ曲つた羊齒の路を喘ぎ喘ぎ登つて行つた。ちびと綽名をつけられた背の低い男が一番先に立つて、それから常公、政公、眇目の平公、子供を負つた女もあれば、木の根に縋り付いて呼吸をきらして登つて行く女もある。年寄もあれば、若い者もある。一行總て十五六人、誰も皆な重さうに荷物を負つて手には折つた木の枝を杖にしてゐた。

十月の初めは、山にはもう霜が置いた。風も寒かつた。咋日の朝などは、溫度が俄かに下つて、山の奧には白く雪が見え、谷から汲んで來たバケツの水は薄く氷つた。つく呼吸は朝の空氣を透して其處此處に白く見えた。かれ等は山から山へと長い間を越えて來たことを思つた。

彼等は其處此處で一緒になつた。かれ等は初めから多人數ではなかつたのである。今から一月前には、眇目の平公とその嗅と常公とが一緒に歩いてゐた。かれ等は晝間は普通の人間と少しも變らぬやうにし

「田舍は何うもこれだから仕方がありませんよ。」
朝飯をすました時分、やがてR君はやつて來た。暇を告げて其處を出た。『東京ではめづらしいから。』かう言つて私は臺で、私はまた二人に送られて、
所にあつた山獨活を七八本貰受けた。
山と山との間の長い谷のやうなところを通つて、私達はF驛の方へと急いだ。私達は到るところで山に草刈に行く人達の群に逢つた。『お早う。』『好い天氣で。』などとS君は聲をかけた。
谷を通り過ぎると、別莊のある丘を越して、大きな山々の連互が美しく朝日に彩られて見渡された。
F驛に來て、私はまたOさんと一緒になつた。

夕飯は山獨活に汁、漬物、それが終つて、跡片附がすむと、家の人達は早くも納戸に寢に行くらしかつた。私達は猶一二時間話した。『もう、寢ませう、皆な疲れてゐるんでせうから。』かう言つて、私は床を敷いて貰つた。

夜中に私は厠に起きた。村はひつそりとして、星ばかりきらきらと夜空に輝いてゐた。遠くで水の音がした。

あくる朝は早く起きて、私は寺から小學校の方を通つて、村の通の方へと出て行つて見た。柿澁の樹が朝靄に青く包まれて、家々の軒からは、靜かに朝の煙があがつてゐた。銀行があつたり、購買組合があつたりした。ある建札には、『大澤山――七日から、野澤山――九日から。』と大きく書いてあつたりした。それは山の草の刈込の日取を村役場で知らせてゐるのであつた。ある建札には、『今年は苗不良につき、當方より申出るまで、一切手をつけるべからず。』などと書いてあつた。

一廻りして歸つて來た頃には、S君の家では、既に一家山行きの準備に忙しさうにしてゐた。馬は既に厩から引出され、S君の父親は、草鞋を穿いて、入口のところでせつせと鎌を磨いでゐた。厠の方へ行く奥の中庭では、S君の細君や母親が身輕な扮裝になつて、大釜の下に火を焚き附けて、頻りに何か煮てゐるのが見えた。湯氣が白く颺つた。朝日は既に裏庭の庫の白壁の處に及んでゐた。

『忙しさうだね。』かう私がS君に言ふと、

しかしかうした忙しい山村にも、一方には義太夫の女の師匠がゐたり、さ、ぼ、し、さんがゐたり、料理屋の一間があつたりするのであつた。私は、S君やR君から、冬の間の田舍の享樂の話などを澤山に聞いて知つてゐた。火燵に對しての歡樂や、冬の夜長の酒の旨いことなどをS君は話した。

『冬はひまですから。』

『さうですかな。その時分が一番村の色彩が濃い譯ですな。』

かう言つて私は笑つた。別莊にゐた男と女との話がまた私達の間に出た。『もう、あそこに歸つて來てゐだらうね。』などとS君は言つた。

夕飯が始らない中に、大きい方の男の兒は、S君の膝に凭りかゝつて、いつかぐつすり寢て了つた。

『こら、夕飯を食べないで寢ちやいかん。』かう言つてS君が起しても駄目であつた。S君は男の兒の手を上下に動かして見て、『こりや、すつかり寢ちやつた。矢張、大人並に、山に出ると、くたびれると見える。子供は元氣ですからな。』

『矢張、伴れて行くんですね、山に？』

『馬に乘つけて行くんですよ。私なども幼い時分には、よく伴れて行かれたもんでさ。』

『僕にも、あの時分の印象ははつきりと殘つてゐる。』

かう傍からR君も言つた。

りなんですから。一日働いて來るもんですから……』

『さうですとも……』

私はかういふ山村にゐて、都會にあくがれる人達のことを考へた。村の人達、――平和な村の人達に取つては、かうした私のやうな都會の客の訪問は、恐ろしい誘惑者の訪問に相違なかつた。確かに私は闖入者だ。

新しい雜誌や、烈しい思潮を書いた本や、破壞的の考へを述べた小說などが、かういふ靜かな平和の山村の舊家の棚の一隅にあるといふことも不自然のやうにも考へられた。妻や家庭の愛情に繫がれて、捨て難い志を埋めてゐると言つたS君の言葉なども深く考へられた。

S君とR君と私とは、其處に坐つて、同じやうな話を續けた。母親が大鍋を圍爐裏の自在鍵にかけて、火を燃してゐる傍では、S君の細君が後姿を此方に見せて、大きな庖丁で山獨活をサクサク切つてゐた。通りには、山から歸つて來る百姓達の氣勢が賑やかにした。

『忙しい時には、もつと遲く山から歸つて來るんです。そして、夕飯を食ふ間が、まア樂しい時間で、それが濟むと、すぐ納戸に行つて寢て了ふんです。また、明日の朝が早いんですからね。』

『君なんかも、かうして遊んではゐられないんでせう。』實際忙しい山村の人達の勞働を見ては、私のためにかうして一日二日を徒に費したS君、R君にも氣の毒であつた。私は濟まないやうな氣がした。

かつたらうなどとも想像した。M君の細君の苦情も同情されるやうな氣がした。
私達が引返して來る時、僧はちよつと振返つて此方を見た。東京の客が寺を借りに來たと思つたらしかつた。で、私達は寺を出て來た。
S君の家に來た時には、S君の母親らしい人や、祖母らしい老人が其處にゐて、ぢつと私の方を見てゐた。私は私の好奇心から、平和の一家の夕飯の團欒をさまたげたやうな氣がせずにはゐられなかつた。
上つてから、私はそれをS君に言ふと、
『何アに、そんなことはありやしませんよ。唯、何にも構ふことが出來ないので、それがお氣の毒ですけれど……』
廣い板の間、中央には大きな爐が切つてあつて、竈には黑い釜がかゝつてゐた。臺所の一ところは深く凹んで、其處には馬がさもさも一日の勞働に飢ゑ勞れたといふ風にして草を音させて食つてゐた。小さな兒を負つた祖母は、草履をべたべたさせて、夕日の薄れた裏口の方へと出て行つた。
『こんな汚いところで、別莊のやうなわけにはとても行きませんよ。』
こんなことを言ひながら、S君は私に座布團を勸めた。
『飛んだ御迷惑をかけましたね。』
『いゝえ……田舍ぢや、皆なかうなんで。お構ひもなにも出來ない。今、皆な山から歸つて來たばか

のを覺えた。
寺は薄暗くそして荒れてゐた。庫裡の障子だけは、それでも白く薄暮の中に見えてゐたが、本堂の扉はぴつしやりと閉つて、庭は散ばつたまゝになつてゐた。私は去年の一夏を此處に過したM君のことなどを考へながら、R君のあとについて、本堂から裏の方へと廻つて行つた。M君からきいた酒を飮んではよく夫婦喧嘩をする僧のことなどが、私の記憶に蘇つて來た。本堂の傍の杉の立木の間からは夕日に彩られた山々が明るくはつきりとすかして見られた。
ふとR君は立留つて、あごで向うをしやくつて見せて、
『あれが和尙ですよ。』
私は杉の立木の向うに、山に向つて、ぼんやり立つてゐる大きな五分刈の男の姿を見た。私は不思議な氣がした。
私達は本堂について裏に廻つた。そこに厠と、二間つゞきの室と、長い白ちやけた緣側とがあつた。
R君は言つた。『此處にゐたんですよ。M先生は――』
『此處ですか、此處では、陰氣で、暑いのも無理はない。』
『でも、中はちよつと綺麗な室なんですがね。』
私はM君の話を種々と思ひ出した。家族を伴れてかういふ處に一夏を過したM君はさぞ不便でさびし

つた。柿澁の樹に暮色が唯迫つてゐた。

『さびしいですね。』

『まだ、山から、皆な戻つて來ないでせうからな。』

かうS君は言つた。ある家の前では、齒を涅めた上さんが挨拶した。郵便局と旅籠屋とが右側にあつたが、それを通り越すと、S君は立留つて、

『此處です、僕の家は――』

いくらか顏を赧くするやうにして言つた。

私が入らうとすると、

『ちよいと、掃除をしますから。家ではまだ先生が來ることを知らないんですから。R君と一緒に寺の方でも歩いて來て下さい。』

『好いぢやありませんか。』

『でも……』

で、私とR君とは、其處から少し行つて曲つて、寺の方へ行つた。路の角には、山から流れ出して來る水が、用水桶に溜つて、溢れて、心地よく流れ出してゐた。私はそれに口をつけて飮んだ。山から一日の勞働を終つて歸つて來る人達に私は到る處で逢つた。山村の平和な氣分が私の心に染み入るやうな

さしいセンチメンタルな名を持つてゐた。『すみれとは何うも似つかないね。』などと私は言つた。一人は老松と言つて、東京の日本橋にゐたことがあるなどと話した。ダイアの指環などをはめてゐた。この姐さん達にも入つて貰つて、私達は其處で、疎らな暑い庭樹の下で撮影した。

『面白い寫眞が出來た。』

などとS君は喜んだ。

娘は心配したほど悄氣てもゐなかつた。サイダなどを飲んで、『あれが好いのね、あれをきかして下さいな。』などと妓に言つた。妓達も後には馴れて、娘に向つて種々な話をしかけたりなどした。

停車場には、娘の他に、もう一人未見の青年が送つて來てゐた。やがて汽車は來た。私達は時の間に、再び涼しい山の中へと入つて行つてゐた。

今度はA驛で下りた。S君の村へ行くには、F驛で下りるよりも却つて此方の方が近かつた。停車場から、私達は細長い谷のやうなところを通つて歩いた。田にはもう到る處に山の草が刈り込まれてあつた。山から草を滿載して下りて來る馬の群などもあつた。S君は汽車の中で一緒になつた村のある細君と話しながら歩いた。S君はその細君の荷物を代つて持つてやつた。

さびしい山村がやがて私達の前に展けた。高い雪國風の庇、ぴつしやりと閉め切られた扉、通りも寂しく、子供一人遊んでゐなかつた。物を賣るやうな店もなければ、腰をかけて休むやうなところもなか

やがて雜誌店のHといふ娘は靜かに階梯を上つて來た。『髮を結ひに行つたもんだから、遲くなつて了つて……』かう娘は言譯をした。二十一二の、小づくりな、容色はさう好くはないけれど、人見知りをしない活潑な娘で、『二十一？　ぢや、五黄ですね。却々きついね。』などと私が言ふと、『まァ、怖い。』などと言つて笑つた。

やがて下から鮨を運んで來た。

暫く話をしてから、S君が其話を持出すと、『さう？　これからさういふところへ行くの？　だつて、私？……それは、何つて言はれたッて、私は構はないけれども……。まァ此處で緩くりして入らつしやいよ。』

『まァ、行つて御覽よ。行つたつて別に差支はないぢやないか。父さんや母さんには、僕等が保證して上げるよ。』

かうS君R君も言つた。

暫くしてから、私達は其處から出て、揃つて狹斜街の方に行つた。

五時には、私達はもう山の方へ歸る汽車を夕日の暑くさし渡る停車場で待つてゐた。私達は娘をつれて、一緒に三味線の音のする一間に三時間ほどゐた。妓は一人は信州のもので、顏や姿に似合はないや

がてその小さな汽船は着いて、そこからぞろ〳〵と乘客が棧橋に上つた。

『のんきで好いね。』

涼しい風に吹かれて自由に寢反べりながら私は何遍となくかう繰返した。

浴槽に行く廊下は、トタンで葺いてあるので暑かつた。浴槽の入り口には、ちよろちよろと綺麗な水が落ちて、杜若などが一つ二つ咲いてゐた。浴槽には、綺麗な湯が溢れ漲つてゐた。

『H、何うしたらう？』

S君はR君に言つた。

『此處ぢや殺風景だから、何處かに行かうと思ふんだけども、Hが早く來れば好いな。もう十一時だ。』

『電話をかけて見よう。』R君は立つて行つたが、やがて歸つて來て、『今出かけたと………』

『Hも行かんかな。』

『行くかも知れないよ。あゝいふ女だから。』

『でも、矢張、あとでやかましいかしら。』

『さァ。』

『來たら、聞いて見るさ。構ふもんか。』

S君とR君はこんな話をした。

私は默つて種々なことを考へながら步いた。私のやつてゐることなどは、大きな眼から見たら、そんなに價値のあることであらうか。寧ろかうして山村に勞働して一生を送る方が人間として幸福でもあり自然でもありはしないか。

しかし私は何も言はなかつた。

やがて私達は、汽車の踏切を越えて、暑い路を湖の畔の方へと出て行つた。路傍には、柳の綠が美しく日を受けて靡いてゐた。滑かに美しく湖水は展けて、學生達がオールを並べて白いペンキ塗の端艇を漕いで行くさまは繪のやうであつた。

ある家に入つて行つたS君は、『空いてゐる、空いてゐる。』と喜ばしさうに言つた。

私達はその廣い二階の一間に二三時間ほどもゐた。大きな餉臺、メリンスの座布團、硝子戸を明けると、煙草盆の灰が飛んで仕方がないほど涼しい風が湖上から來た。魚柳といふ葉の青い花の不思議な形をした樹が一本その前にあつて、其下には、湖水に面してベンチなどが置いてあつて、ハイカラに髮を結つた女が、凉傘をかざしながら其處に腰をかけて休んでゐた。

湖は廣く滑かに私達の前に展けた。對岸のO町から來る汽船は、始めは鷗のやうに小さく見えてゐたが、それが段々近くなつて、學生達の漕いでゐる端艇を掠めて、いつか此方へ此方へと近寄つて來てゐた。見ると、其處には棧橋があつて、學生や子供達が裸になつて、水泳などしてゐるのが見えてゐたが、や

S町の通は、初夏の日影に照りかゞやいて、蝙蝠傘なしには暑い位であつた。そこでは、私はS君とR君とに伴れられて、町の大通をずつと遠くまで歩いて行つた。それは雜誌店の娘で、私が來たら是非知らせて呉れと不斷言つてゐた女が、生憎支店の方にゐなかつたので、本店の方まで行かなければならないためであつた。本店には、店に娘の父親らしい人が出てゐた。娘は小づくりな二十一二の女で、通で立つて待つてゐる私の方をS君と話しながら、絕えず見てゐた。

S町の裏町を通る時には、若い妓が窓から顏を出してゐたり、お座敷に行く妓が派手な扮裝をして私達の前を歩いて行つたりした。あるところでは、馬が暴れて言ふことをきかないのを馬子は一生懸命になつて制してゐた。

湖畔に臨んだホテルは、私は一度冬のさかりに來て泊つた。その時は八歲になる男の兒を伴れて來た。ある小さな旅館の前では、S君は昔矢張文章や小說を投書したことのある靑年の話をした。その人はA君と言つた。

A君は其時S町の新聞の記者になつて來て其旅館に下宿してゐた。

S君は話した。「A君は今でも矢張志は捨てずにゐるんですけども……。細君を持つて子供があつて見ると、矢張東京に出て行かれないんですね。妻を見ると、愛情が出て、獨立の自信もないのに、東京に出て難儀させるのも可哀相だといふ氣になるんですね。矢張、誰も同じですね。私だつて矢張さうです。」

『いや、ようこそ。』

Oさんは莞爾しながら言つた。

私達はやがて別れて、その汽車へと乘り込んだ。停車場を出ると、丘の上に測候所が見え、別莊が見え、Oさんの別莊の笠のやうな屋根が見えた。高原の朝の空氣は晴やかに私の周圍に展げられた。

少し行つた時、

『あれが私の村です。』

かうS君は指した。

細長い川に添つたやうなところで、昔の國道に添つて、人家は並んでつくられてあるのを私は見た。白壁、雪國風の屋根、畠、寺の森、『そら、あそこに高い屋根があるでせう。あの隣の二階屋、あれがS君の家です。』かうR君は言つた。

川は流れ、山は開けて行つた。A驛からは、S町の裁縫の會に行くといふ村の娘達が大勢乘つて來た。それはS君やR君を皆な知つてゐるやうな娘達であつた。ある娘は、『まァ、先生、久しくお目にかゝりませんでした。』などと言つて、裁縫の先生らしい矢張若い女に挨拶してゐた。三等室は急に込んで來た。肥つた頰や髮や袴が私達の前にあつた。

んか立てないもんかね。』

『私等の手や足は、動物に近くなつてゐますから、平氣です。』

S君は笑ひながら言つた。

ある料理屋の前では、『こゝですよ、あの女のゐたのは――』

『さうですか。』

私の眼には汚れた暖簾と汚い厨とが映つて見えた。酌婦らしい女が一人出て此方を見てゐた。

郵便局では、私は繪葉書を二三枚書いて東京に出した。その隣りには大きな荒物屋、もつぺいを穿いた娘、馬を曳いた人足、停車場には明るく朝日がさし込んでゐた。Oさんを迎へに來た村の人達が三人も四人も來てゐて、S君は其方に行つて一々挨拶した。

改札が始つて乘客がプラットホームに出る頃になつて、R君はいきせき急いでやつて來た。『N君は何うだかわからないが、行けたら晝時分から來るつて言つてゐた。』かうR君は私達に言つた。

山の嵐氣を衝いてやがて汽車は來た。Oさんが獨りぽつねんと二等室に乘つてゐるのを見た村の人達は、急いで其方へと走つて行つた。S君もR君も行つた。やがて汽車から下りたOさんは、新しい麥稈帽子をかぶつて、袴を穿いて、出迎ひに出た村の人達に挨拶した。私も紹介された。

『昨夜は貴方の別莊で泊めて戴きました。』

『ぢや、さういふことにして、兎に角S町に行きませう。』かうS君は言つて、『N君は來るかしら？』

『さア。』

R君も頭を傾けた。『しかし、兎に角、僕が行つて話して來よう。』

昨日の朝、私が乘つて來た汽車の來る時間に近く、私はS君と二人して別莊を停車場の方へと出かけた。朝日は朗らかに高原を照した。

『Oさんは、新聞記者をつれて來るかしら？』などとS君は言つた。

途中では、『もう、刈込をやつて、こんなに田に入れたところもあるんですから。』

『これから忙しいね。』

『え、ちよつと忙しくなります。』

『しかし、養蠶の時の方が忙しいでせう？』

『それは何うしても……。先生、一度秋の收穫のすんだ頃に來て下さると好い。さうすれば、ちつとはおかまひが出來るんですけども……』

『祭禮が面白いさうですね。』

『え、ちよつと特色があります。』

田の中に枝やら木やら一杯に投り込んであるのを見た私は、『この中に、百姓は跣足で入つて、棘な

瓶繩を手繰つて、水を汲んで顏を洗つた。私も洗つた。山の水は手が切れるほど冷めたかつた。

八ヶ嶽の上から出る朝日は、一番先に、丘の上の測候所の洋館とそれにつづいた松原とを照した。草藪の露は皆な輝いて、眞珠か何かのやうに閃々した。

朝の汁の實は矢張山獨活であつた。豆腐にしらす干、山芹の漬物、さういふもので、私達は樂しく朝飯をすました。爺さんが入つて來て、『Oさんが今朝の汽車で來るさうです。』

『さうかねえ。』

『新聞記者も來るのかね。』

『何うだか。』

で、私達は今日一日を何うして面白く暮さうかといふ話になつた。『兎に角S町に行きませう。そして湯にでも入つてゆつくり遊んで來ませう。』

かうS君の言ふ言葉について、『それから今夜は、君の家へ泊めて呉れ給へな。S町に泊つたつて仕方がない。』かう言つた私は、山村の生活をもう少し深く見たいと思つた。

『それば、へい、ようご座んすけども……家は汚いですよ。とても、この別莊のやうなわけには行きませんよ。』

『そんなことは構はない。』

『何うしても歸るかえ?』

『お袋が淋しがつてゐるから……。その代り、明日は來られたら、早く來ます。』

『さうかえ。』

私達は立つて縁側へ出た。外は眞暗であつた。N君は一度下りて見て、『おや、下駄は此方ぢやなかつたかな。』かう言つて、もう一度別の方をさがして、『あつた、あつた。ぢや、先生。』

『暗いね、提燈がなくつては駄目だらう。』

かう私が言ふと、

『なァに……歩きつけてゐますから……』かう言つてN君はそのまゝ大きな體を山の夜の闇の中に沒した。

『N君は元氣ですね。』

かう私は言つた。私達はやがて床を三つ並べて敷いて寢た。子規が頻りに家の周圍で鳴いた。

翌朝は四時前に目覺めた。何といふ爽やかな靜かな高原の朝であつたらう。私は山の冷氣に衣の薄さを感じながら、庭に立つて、獨り四邊の山々を眺めた。

S君がやがて起きて來た。『今朝は寒い。』こんなことを言つてゐたが、其まゝ井戸端に行つて、長い釣

『まァ、さうでせうな。』

S君は笑つた。S君も餘り深く酒をやらぬらしかつた。R君は立つてまた酒を持つて來た。

『どうも、私なんか、戀とか、歡樂とか言ふことは一つも知らずに、二人の子の親になつたんですから、それが殘念で仕方がありません。二十一の時に、結婚したんですから。』かう言つたS君の言葉の中には、まだ知らない世間に對する憬憧が名殘なくあらはれてゐた。

『しかし、同じことですよ。何處まで行つたつて、人間は同じだ。』かう言つた私は、もうかなりに醉つてゐた。

N君は何うしても歸ると言つた。

『好いぢやないか、泊つて行き給へな。先生と一緒に寢ることなんか滅多にありやしない。』

『でも…………』

『大變でせう、暗いのに……。途中で、谷にでも落ちると大變だ。』

かう私も傍から言つた。

『なァに、大丈夫です。』

N君は歸る支度をした。

て、唯、男を騙して金にするつもりばかりでついて來てゐるのか何うだか、それはわからない。當事者二人の間でなければ、すべて本當のことはわからない。だから、その事件の解決については、當事者が頼んで來るまでは、第三者は放つて知らん顔をしてゐる方が好い。自然にまかせて置く方が好い。當事者でなくて、何うしてその事が本當に解決が出來るものか……。第三者がその當事者に根本を開いて見せてやるやうにするのは好いが、第三者達で解決をしようなどと思つたつて、それは出來ない。手切金をやつて、一時、女を離しても、男はすぐまたそのあとについて行く。それにきまつてゐる」

『さうでせうね。』

私の平生發表する意見に就いて、私達はやがて種々と話し合つた。自他融合の話なども出れば、根本に對する眞の意義についての議論なども出た。あたりはいつか夜になりつゝあつた。山は暗く暗くなつた。

釣ランプの薄暗い光線も、私達の心を靜かにした。R君は、『暗いなア』と言つて、釣手を少し下にさげたりなどした。一番先にN君が醉つた。

『苦しさうだね。』

『私は一體飲まないんですもの。』

『R君が一番つよいですかね。』

獨語した。

私達は硝子戸に取卷かれた十疊の座敷に餉臺を持ち出して、やがて一杯やるべく支度をした。R君が立つて燗徳利を持つて來て、『何うせ地酒ですから駄目ですけども、これでも此處等では一番好いんです。』などと言つて、盃を私に渡した。Oさんの親類の老刀自が山獨活の煮たのを持つて來て吳れたりした。冷豆腐に汁に山獨活、他には何もなかつたけれども、山村の人達の眞情は、近頃にないほどのまことの興を私に覺えさせた。山村の人達の生活に比べて、私達は何んなに不自然な不健全な世間に捉へられた生活を送つてゐるであらうか。佳肴あり、美酒あり、管絃あり、しかし爾の生活はすべて皆な世間と他人とに捉へられた生活ではないか。社會の繩に十重にも二十重にも縛られた生活ではないか。氣兼と妥協と安逸とに疲れ果てた生活ではないか。一片の生氣、一片の眞情をも持つてゐないやうな生活ではないか。私は都會の生活と山村の生活とを引較べて考へた。眞の獨立、眞の自由などといふことがやがて私達の口に上つた。

私はこんなことを言つた。『眞の自由、眞の獨立を得やうとするには、根本に入つて行かなければ駄目です。さつきの男と女の話などでも、第三者の噂では、とてもその眞相に入つて行くことは出來ない。親類や村の人達がいくら男を言賺してなだめて、無理に一時は承知させても、男が女に惚れてゐては到底駄目です。また、村の人達の考へでは、無下に、男が女に騙されてゐると思ふかも知れないが、女だつ

て立盡した。

今まではつきりと見えてゐた富士の裾には、白い雲が湧くやうに起つて、見る見る山の半面は蔽はれて行つた。何處の山であらう、左の金峰山の向うに、暗碧の色をした山が遠く微かに打渡して眺められた。子規は私達を掠めるやうにして鳴いて通つて行つた。

『一軒、小さい別莊が欲しいね。』

こんなことを言つた私は、こゝらあたりの地面が一坪二十五錢で賣買されるといふ話を思ひ出してゐた。『でも、家にかゝるからな、五六百圓は何うしたツてかゝるからな。それに冬の間は駄目なんだし、明けて置くと、村の人達の媾曳宿になつたりするからな。こゝの別莊位に萬事整頓するには大變だから。』

『だから、人のを自分のにして置けば好いのです。』

かう言つてS君は笑つた。

日の暮れる時分には、袷に袷羽織を重ねても、猶山の冷氣を肌に感じた。やがてN君は大きな麥稈帽をかぶつて、急いで向うからやつて來た。呼吸をきらしてゐた。『遲くなつて濟みませなんだ。先生が來たのに、生憎用があつて、殘念で仕方がないんです。』かう言つて、まるめろの罐詰だの山獨活だのを持つて來た。

『あゝ、何とも言へないね。』『K川の谷の方の山の暮色を見てゐた私は、堪らないといふ風にしてかう

んでゐた。

『先生、先生。』

眼を覺すと、いつか其處にS君はやつて來てゐた。

『早かつたですね。』

『もう五時ですよ。』

『さうかね、大變寢た。』

夕暮近く、高原の氣象の變つて行くさまがまた深く私の心を樂ませた。空氣は澄んで、晴れて、そして冷かであつた。今まで明るく碧であつた山の色は次第に暗い影を帶びて、はつきり見えてゐた襞も漸く判ち難くなつて行つた。高原の草藪の處々にある山村からは、夕炊の煙が細く高く颺つた。

『好いね。』

かう言ひながら、私はS君とR君と四邊の景色を眺めながら庭の中を逍遙した。『僕等の寄附した紅葉は勢がないね。』かうS君がR君に言つたので、其處等にある樹や石は、別莊が出來た時に、青年達や、村役場や、信用組合や小學校から寄附したものであることが知れた。庭の前にある敷石は、皆な青年達が深く入り込んだK川の谷から遠く運んで來たものであつた。私はかうした故郷を持つたOさんを羨まずには居られなかつた。また村の人達とOさんとの美しい關係を思はずにはゐられなかつた。私は默つ

『何でも、この下に、伯母さんか何かあつて、そつちへ行つたんでせう。』

『男は何つて言つてゐましたね。』

『ぢや、仕方がねえ、行かう。おい、早く支度をしろよなんて言つてゐましたつけ。知つてる友達なもんですからな。』

『本當に氣の毒なことをしたねえ。』

『いゝえ。』

などとR君は笑つた。

水を汲んだり湯を沸したりするのが、此方の別莊では面倒だと言ふので、私はやがてOさんの別莊の方へと伴れられて行つた。盛暑が近く、Oさんの家族が避暑に來る時期にも間がないので、疊屋は裏の庭にさし臺を並べて、二人でせつせと疊を新しくしてゐた。十疊二間の座敷は、周圍に硝子戸がはめてあるので、坐つてゐても、駒ヶ嶽や茅ヶ嶽や富士山が一目に見わたされた。

午飯は蕎麥ですませた。山芹の漬けたのや山獨活の煮たのは私にはめづらしかつた。私はやがて昨夜の汽車中の眠りの不足を醫すべく、二階の風の涼じいところで寢た。

Oさんの親類の肥つたしつかりした四十二三の刀自が來て、庫をあけて、夜の物を出して庭に干したり、種々煮焼をしたりするのをも知らずに、私は好い心持をして、夕日の深く一間にさし込むまで寢込

『S君は？』かうN君が訊いた。

『三時か四時頃に來るッて。』

『ぢや、僕も、その頃行くから。』

で、私はR君と元の道を通つて別莊の方へ來た。

別莊に來て、再びその七輪や、炭や、皿などを見た私は、『ほ、それぢや、今朝飯も碌々食はずに行つたんですね。ほら、見給へ、まだ、お汁が半分殘つてゐる。漬物も殘つてゐる。氣の毒なことをしたね。』

R君は笑つて、

『今朝、來た時には、起きたばかりでしたつけ。女はだらしない風をして出て來たが、去年、一度、停車場前の料理屋で一緒に騷いで冗談などを言つたことがあるもんだから、變な顏をしてゐましたつけ。きまりがわるかつたんでせう。』

『好い女ですか。』

『何の。』

R君は首を振つて見せた。

『そして二人は何處へ行つんです？』

あいふもんですからな。男が騙されてゐるにきまつてゐるんでさ。前にも、役者の馬の脚なんかにくッついて、子供なんか產んだことのある女ですで、へい、しやうがないですよ。でも、先生が來て、追拂つてやつてよかつた。あそこに、仕方がないから私が入れたんだが、あとで、飛んでもねえことをしたと思つてゐたんだで。』などと言つて、『まァ何うにか、無理にでも凫をつけねけりや、しやうがねえな。』なども言つた。

N君は歌を詠んだり小說を作つたりするやうな靑年であると共に、山村にもめづらしい勞働者であるのは、其の腕やら體やら話やらで知れた。男女の世界などは、N君にはまだ全く沒交涉であつた。N君は自分一人で尠なからぬ田や畑を耕してゐることなどを私に話した。

『舊い家でせう。もうこれで百年から經つてゐるさうです。』N君は煤けた黑い天井を見上げて昔の話をした。此の家を建てたのは、N君の曾祖父で、そのまた三代目の祖父は、元は向うの山際の村に住んでゐたのであつたが、國道を通る旅客のためにこゝに一軒茶屋が出來て、原の茶屋と呼ばれて繁昌して、それから段々人が集つて村が出來たといふ話などをN君はしてきかせた。

十一時近くなつて、R君が急いでやつて來た。『先生、お腹が空いたでせう。』

『何ァに、まだ大丈夫です。』

『別莊に行きませう。向うに、蕎麥を打つて持つて來て置くやうに賴んで置いたんですから。』

『上さんがあるんでせう?』

『え……』かう言つたがすぐあとをついで、『從兄妹同士で、結婚をする時から男は餘り望んでゐなかつたんです。それをまァ長い間、辛抱して來た不平があつたんでせうよ、屹度。』

『子供はないんですね。』

『え。』N君はちよつと途切れて、

『此間中から、細君に、お前は離緣するからつて言つてゐたつていふことです。』

『無論、それぢや、君なんかも友達ですね。』

『え。』

『それは、氣の毒なことをしたね。』かう言つて私は笑つて見たが、笑つてばかりはゐられなくなつた。女に捉へられた男、男に離れまいとする女、それを普通では、金を目的にしてゐるといふ風に解釋して了ふが、現に、N君にしろ、S君にしろ、乃至はこの村の人にしろ、皆なさういふ風に世間並に解釋して、面白半分に笑つたり噂をしたりしてゐるけれども、私にはその問題をさう簡單に見て了ふことが出來なかつた。新しい鰹節箱、風呂敷に包んだ皿、バケツ、七輪にかゝつた紫色の安藥罐、そんなものが歷々と眼に浮んで見えた。あゝいふ世離れた松林の中にゐる二人の生活が種々に想像された。

役場に勤めてゐて、その事件に正面に當つてゐるといふ四十男は、やがて此處に來たが、『しかし、あ

私も驚かずにはゐられなかつた。

『一體、何うしたんです？』

『なァに、埒もないこッたけれど……停車場のそのさぼしと出來たのを誰も知らなかつたんですね。何でも、男から金を出して貰つて借金を拂つて、停車場前の料理屋から出て行つたんですけれども……。表向は女が一人で稼いで溜めた金で綺麗に拂つて行つたやうにして出て行つたもんだから、誰も、へい、知らなかつたんですね。』

『そして、何うしたんですか？』

『女は伊那のもんですで、一時は國に歸つてゐたらしいが、つい、また上諏訪に男が伴れ出して來て、何か商ひか何かをさせて置いて、用があると言つちや、男は上諏訪へ出かけて行つて泊つて來るんです……そんなにひどい病氣でもないのに、病院に入るなんて言つて、長いこと、上諏訪に行つてゐたりしたことがあるんで、それで、段々わかつて來たんですよ。』

『何うしてまた、それをあの別莊なんかに伴れて來たんです？』

『何ァに、人が入つて、上諏訪へ行つたんですけども、向うぢや埒が明かないつて言ふんで、漸つと此方まで伴れて來たんです。まだ五六日にかなりませんがね。何うしても、男が女とは離れないつて言ふもんですから。』

『ぢや、成るたけ早く來るやうにしますから。R君には別莊の方へ行かずに、先づ此方に來るやうに言ひませう。』かう言つてS君は急いで歸つて行つた。N君は茶だの菓子だの漬物だのを持つて來て勸めた。

『あの婆さん、何うかしたんですか。』

『えゝ。』

N君は笑つてゐる。

『何うかしたんですか。』

『さつき――そら、ロオマンスだツて言つた、あのこんですよ。』

あの別莊で言つた？』

『え。』

私は一種の好奇心を覺えた。私は猶訊いた。

『今、大騷ぎをしてゐるんですよ。親類達が寄り合つたり何かしてゐるんですけども……』かう言つて、N君は話し出した。話すところに據ると、つい私の來る朝まで、その別莊に住んでゐたものは、一人はそのN君のすぐ前の舊家の息子で、一人は去年の四月頃まで停車場前の料理屋にゐた酌婦であつた。二人はS君とN君とが出かけて行つた時には、まだその別莊の奥の六疊に寢てゐたといふ話であつた。

『へえ？』

半鐘臺なども高く聳えてゐた。國道は眞直に村を貫いて、その外れに、小高い松の林があつた。昔旅客が富士を望んだところは、今、村の公園になつてゐた。

靜かな山村、實際靜かな山村であつた。看板がかけてあつても人氣もないやうなさびしい小さい村役場、庇の長い古い茅葺の家屋、家屋の途切れた間にところ〴〵にある野菜畑、路の左側を流れてゐる綺麗な小川、それに臨んで物を洗つてゐる娘達、馬の鳴聲のする汚い厩、廣い通には、初夏の日影が美しく鮮かに照り渡つてゐた。――川に臨んで、婆さんが立つてゐて、その傍で二十五六の女が物を洗つてゐた。

N君はその婆さんに何か言つた。婆さんの頰には涙が流れてゐた。N君が何か一語二語言つてゐる間、私とS君とは一二間先に行つて立つてゐた。

やがてN君は來て先に立つた。

「此處です、私の家は――」

かう言つてN君は入つて行つた。それは矢張そこらに見るやうな古い大きな家であつた。しかし、旅籠屋らしい面影はもう何處にも殘つてゐなかつた。私は大きな圍爐裏と、其處に坐つてゐるN君の父親らしい老人と、自在鍵と、黒猫のやうな鐵瓶とを見た。古い暗い空氣があたりに滿ちた。

しかし一間に案内された私は、襖に張つけた古い文人畫や額や幅物などに、昔の旅籠屋らしい氣分の殘つて漂つてゐるのを發見せずには居られなかつた。緣つゞきにある廣い廁なども昔のさまを思はせた。

をなつかしく思ひながら、S君とN君と並んで歩いた。

草藪と草藪との間、松林と松林との間を、丘を越えて行く細い赤い折れ曲つた路がをりをり蛇のやうに横ぎつて通つて行つてゐた。測候所も停車場もすぐ眼下に見渡された。午前十時の下りの汽車の白い煙は、高原の草藪の中に隱れたり見えたりして進んで來てゐた。

『かういふ測候所に住んでゐる人はさびしいでせうね。』

かう言つた私は、測候所に接してつくられたその住宅の傍に、赤い襁褓などの干してあるのを見た。

『細君も子供もあるんですね？』

『細君は若い綺麗な人だつて言ふ話ですよ。』

『冬は堪らんでせうね。』

『冬は、へい、もうお話にならない。』

路は林に入りまた丘に出た。K川の水源の遠く入り込んでゐるといふ谷合の山の姿などもはつきりと其處から見渡された。S君とN君とは、山奧を三里ほど行つたところにある山小屋の話などをした。

『あそこに行くと、へい、世の中なんて丸で考へなくなるな。一日行つて見るかな。あそこに行きや、蕨なんかうんとある。』かうN君は言つた。

山の背のやうなところを少し下りると、やがて人家が二三十軒簇々と固つてゐるのが見え出して來た。

『さうだらう。でなくつちや――』かう言つたが、私は深く訊ねやうともしなかつた。

『ロマンスがあるんですよ。』N君はかう言つて笑つた。

『さう言へば、あいつは書けるね。』

S『も笑つた。

しかし私は猶深く訊かうともしなかつた。私はそこでN君の淹れて出して呉れた茶などを飲んで、種種な話をした。愈々此處に來るとしての話などもした。『兎に角、停車場が近いから、間に合ふには間に合ひますよ。豆腐屋に頼んでさへ置けば毎日屆けて呉れるし、郵便も、何なら、頼んで寄つて貰ふことにすれば譯はありません。測候所には、何うせ毎日配達が來るんですから。』などとS君は言つた。

一時間ほどそこにゐて、やがて私達は出かけた。R君のやつて來るまで、獨りそこにゐるのも退屈なので、私は兎に角N君の住んでゐる部落の方へ行つて見ることにした。N君の家は、昔、街道に旅客が往來した時分からの旅籠屋で、今では看板を外して、全く農家になつて了つたけれども、それでも昔からの馴染の旅客は折々來ては泊つて行くといふことであつた。富山の藥賣などは今も其處を定宿にしてゐた。

私は昔の國道のさまなどを想像した。K市からS町へ行く國道は、昔でもさびしい艱難な交通路であつた。長い谷合の路を一日かゝつて登つて來て、この高原に漸く登りついて、ほつと呼吸をつきながら、葦簾張の茶屋か何かに腰を休めて、すぐれた富士の姿を仰ぐ昔の旅客のさまなどを想像した。私は遠い昔

眞中に爐の切つてある室、それから廊下がつゞいて、傍に勝手らしい處があつて、奥に隱れてまた六疊の一間があつた。『此處が好い。此處が好い。此處なら氣が落着いて、何でも書ける。』かう言つて、私は、其處に坐つて、煙草盆の中の火入れだけ其處に轉つてゐたのを持つて來て、袂から八千代を一本出して靜かに吸つた。

S君とR君とは、明け閉てのわるい戸を力を籠めて明けたりなどした。硝子戸からは、前の草藪と碑楢の林とを隔てゝ八ヶ嶽の姿が手に取るやうに見えた。

『これは好い。來るときまつたら、此處でやるんだね。』

ふと氣が附くと、廊下の傍の勝手元のところに、新しいバケツや皿や鰹節箱や土瓶や急須が置いてあつて、七輪には火がおこつて、紫色の安藥罐から湯氣が立つてゐた。N君は、『茶でも入れようぢやないか。』などと言つた。

『君方がさつき來て起して置いたんですか。』

『えゝ。』

などと笑ひながら、S君は煮え切らないやうな返事をした。

『でも炭が買つてあるぢやないか。』

『今まで人がゐたんです。』

其處を通る時、勝手元の半開いた障子の陰から、留守居の爺の嬶らしい女が此方を見てゐた。

『え、さうです、此の別莊は、汽車が出來てから一二年して建てたのです。さうだな、N君、何年だつけな。四十四年だつけかな。』

『なんでもその時分です。』

『別莊が出來たその翌年に、新聞記者が大勢來たことがありました。その時TさんもHさんもNさんもお出でになりました。Oさんは何うしても此處を別莊地にしなくらやいけないッて言つて、率先して、この別莊をお建てになつたんですがね。W氏が盛んな時には、W氏の別莊は、そら向うに見えますが、離宮豫定地の一つにさへされたのですが、あの事件があつてから、Wさんはすつかり駄目になつて了つたもんですから。』

松の林の中からは、やがて朝鮮人の別莊が見え出して來てゐた。これは平家で、Oさんの別莊と比べては、眺望はやゝ劣つてゐたけれども、靜かな松の林の中にあるのが却つて私の氣に入つた。私達は戸の明放された玄關から家の中へと入つて行つた。

松の葉を透して、朗らかな朝日が美しいその光線を室といふ室へ漲した。八疊、六疊、さういふ室が澤山にある。『いゝね、これは、何處でも勉強が出來る。かういふ好い處をかうして唯放つて置くのは惜しいもんだね。』こんなことを言ひながら、私は室から室へと一つ一つ見て廻つて歩いた。

いて、ちよつと家に歸つて來なければならないといふ風であつた。

『本當に、忙しい處を氣の毒でしたね。』

『いゝえ、折角、先生に來て頂いて、本常にすまないんですけども……その代り、用がすめば、すぐ來ます。』

かう話してゐる中に、私達はいつかその高い見晴らしの好いOさんの別莊の處に來てゐた。Oさんはこの村の出身で、代議士として、政治家として評判の好い人であつた。村では殊に尊敬と崇拜の的になつてゐた。青年達はOさんを一村の主人公のやうにして話した。

瀟洒な二階建の別莊は、やがて私達の眼の前にあつた。陶淵明の詩を彫つた石の門、つゞいて斜草地、緣側の周圍には明るく硝子戸が取廻してあつて、石の敷いてある庭の處々に、楓や槐や石楠花や松が、形よく點綴されてあつた。庭石の陰には、躑躅が燃えるやうに咲いてゐた。

子規はすぐ近くを啼いて通つた。

『何とも言はれないね。』

私はあたりの潤い眺望を見廻しながら言つた。

今夜あたり主人公が歸つて來ると言ふので、戸を明けたのであらう、二階の一面も半は明放されてあるのを私は見た。

らうかと思ふ人間なんだから。』かう言つて私は笑つた。

行々私達は山村の生活について話しながら歩いた。忙しい農事は既に人達の前に迫つて來てゐた。かうした青年達も、銀行の一日の勤めを濟して歸つて來てからさへ、手を束ねて遊んでゐることは出來なかつた。山の草刈が始まると、何處の家でも、朝早くから、老人を一人家に殘して、子供は馬に乘せて、一家揃つて、山に行つて、草や榧樹の枝を刈つて來て、それを田の中に入れて肥料にした。

『えゝえゝ、二里位は山の中に入つて行きますとも。近い處には、矢張好い草がありませんから。ですから、銀行から歸ると、一働きせずには居られません。若い者が遊んでゐちや、風がわるいで。』

『もう、始まつてゐるんですか。』

『草刈ですか。もう始めてゐる家もありますが、本當に忙しくなるのは、この十日先です。』

F村と言つても、それは一ところに固つてゐるやうな處ではなかつた。彼處の山のかひに一部落、此方の谷の底に一部落、昔の街道に添つたところに一部落と言ふ風に、處々に散點してゐて、其處から此處へ行くには、丘を越えたり林を穿つたりして、二十町も一里も行かなければならなかつた。S君とR君との住んでゐるところは、F村の中では、一番人家の多い金持の多いところで、眺望の好い高原から、ずつと下に下りて行つたやうなところになつてゐた。N君は昔の街道の古い驛路に住んでゐた。『生憎、昨日お母さんが死産をしたものだから、何や彼や忙しくつて……。』N君も矢張私を別荘に送り屆けて置

『さうですか。好いところですね。』かう私は思はず言つた。

何とも言はれないほど美しい晴れた山の朝であつた。駒ヶ嶽の襞には、まだ殘雪が白く光つて、新綠の漲り渡つた林や草藪には、鶯や子規が好い聲を立てゝ鳴いた。深く刻まれた谷、高く連つた絕壁、遠く流れて行く谷川などが私の眼を樂しませた。折れ曲つて登つて行く路の兩側には、稚樹の疎らに茂つた草藪が連つて、蕨の長けて葉になつたのや、山蕗の大きくなつたのや、新芽を出した楢などの中に、赤い山躑躅がしどめの花か何かのやうにところどころに鮮やかに咲いてゐた。高原を渡る風が俄かに冷たく私の衣を吹いて來た。

『好いですね。三千五百尺の高原らしい氣がしますね。』かう言つた私は、何遍か立留つて、漸く現はれて來た八ヶ嶽の濶い濶い高原を眺めた。

『唯、何うも、折角來て頂いても、食ふものがありませんで、それが心配ですけども……』

『何アに……豆腐と蕎麥がありやそれで澤山ですよ。』こんなことを私は言つて笑つて、『それに、山で採れる野生物があるでせう。蕨、山牛蒡……』

『山牛蒡は知りませんが、山獨活があります。蕨は此處らでは、もう遲いですけども、三里ほど山の中に入ると、まだ柔いのがあります。』

『山に來ちや、さういふものが何より好い。私なんか、野生物を研究して、山に入つて仙人にでもな

今度は私の方を向いてS君が言つた。『今日は、銀行の方に、手が明けられない用があるもんですから……失禮ですけども、R君は一先づ歸つて、午頃また來ることにするさうです。……それから、私も別莊まで行つてちよつと一度村まで歸つて來なけりやならないんですが……』

『え、よう御座んすとも……でも、君達の家までは遠いんでせう。一里位あるつて言ふんぢやありませんか。』

『何ァに、歩きつけてゐますから。』かう言つて、R君は挨拶して急いで驅けて向うの方へと行つた。

明日の日曜に來る筈であつたのを、一日早くやつて來て氣の毒なことをしたと私は思つた。

N君は煙草を五箇ほど新聞紙に包んで持つて、私達の跡に續いた。もとは草藪や荒蕪地であつたのが、停車場の出來たために、俄かに發展したらしい新開町は、段々私達を山の方へと伴れて行つた。水田なども見え出して來た。ペンキの色の褪めた洋館は病院で、その向うに、丘の上にまだ建てゝいくらも經たないらしい洋館が美しく高く朝日に照されて見えた。草藪の朝露は珠のやうに美しく光つた。

『あれが、測候所です。』

S君がかう言つたが、更にその左に連る草藪と松原との中に、屋根の大きい、笠のやうになつて見える家屋を指して、『あれが、Oさんの別莊で、その此方に、低い松の中に屋根が見えるでせう。あれが、先生にゐて頂きたいつていふ朝鮮人の別莊です。』

『え、さうです。私がRです。』もう一人の青年をつゞいて私に引合すやうにして、『これがN君です。』

『あゝ、さうですか。』

初めて逢ふ人達ではあるけれども、十年も交際した昔の知己か何かのやうな氣がしながら私は歩いた。プラットホームには、明るい朝日が一面にさして、あたりの山々には爽やかな空氣が漲り渡つた。私達はやがて小さな停車場を出て、荒物屋や運送店や郵便局などのある通りを並んで歩いたが、その間にもいろいろな話が私達の間に出た。『今、ちよつと、別莊に寄つて、戸を明けて來ました。Oさんも、今夜あたりお出なさるッて言ふ話です。何でも、新聞記者も二三人來るといふ話です。……』

かうS君が言つた時には、私達は丁度旅籠屋の前を歩いてゐた。と、S君とR君とは、急に思ひついたやうに、『まだ、朝の御飯前ではありませんか？』

『いや、朝飯は食つて來ました。K市で辨當を買ひました。』

『さうですか。』

かう言つて歩き出したが、十間ほど行つて、今度は私が立留つた『煙草がないでせうか、此處等に？……山に行つては、近所に煙草など賣つてゐる處はないんでせう？』かう言ふと、N君は快活に、『あ、買つて來ませう』かう言つて停車場の方へ驅けて戻つて行つた。

R君とS君とは何か話してゐたが、『ぢや、さうし給へな。』

山村

F驛に着いた。私は急いで長い間乘つて來た汽車を下りた。あたりを見廻す間もなく、私は三人の若い人達の此方へ走つて來るのを見た。

『先生、先生。』

かう言つてその人達は皆な私の傍に寄つて來た。

嬉しさとめづらしさと田舍の人達の深切さとに胸を躍らし乍ら、『昨夜打つた電報はつきましたか？』

『え、つきました。丁度十一時でした？』一番年の多い子供の二人もあるS君は莞爾しながらかう言つて並んで歩いて、『銀行に寄合があつて、九時頃歸つて、寢たと思ふと、あの電報でした。いよいよ明日は先生にお目にかゝれると思ふと、イヤに昂奮しちやつて、昨夜はたうとう眠れずにしまひました。』

『君がR君？』

かう私が背の高い麥稈帽子をかぶつた青年に言ふと、

人々は合掌して土塊を其上に落した。再び湧きかへつて來る悲哀に堪へないやうにお蔦は白い手巾を眼に當てゝゐた。

ないであらう。死んだ兒に縁の薄かつたのと同じやうに、矢張その男にも縁が薄かつた。かう思ふと長い間苦勞した心配や、苦痛や、さういふものはすつかり水の泡か何かのやうに溶けて消えてなくなつて了つてゐるのをお蔦は見た『今度生れて來る時には、こんなところでなく好いところに生れてお出で。』遺骸を棺を中に入れながら、かう母親の言つた時には、お蔦はまた涙を流した。

通夜の一夜は靜かに過ぎた。赤兒に添乳をしながら毎晩聞いた蛙の聲は、矢張同じやうに縁の野から聞えて來た。茫と白く展げられた夜の野には、麥の穗が一面に見渡されて、螢が一つ二つ魂か何かのやうにふわ〳〵と明滅して飛んで行つた。

お蔦はをりをり立つて棺の前の線香を新しくした。

義兄と母親との間には、お蔦の將來の話なども出てゐた。『でも、ね、今、嫁に行かれても困るよ。それはね、いくらも貰ひ手はあるだらうけれども……。も少し一生懸命になつて稼いで貰はなくちや……借金だつて、ちつとやそつとぢやないんだからね。此間、上總屋が來て、よし町の方か何かに好い家があるつて言つてゐたけれど。』などと母親は話した。

翌朝は早く棺を寺の方へ持つて行つた。母親、義兄、お蔦、それに母屋から婆やと主婦とがついて行つた。杉の深く茂つたしんとした寺、花うつ木の赤く唉いた垣、小さな穴は野に添つたひろびろとしたところに掘られてあつた。朝の草の露、黑い名の知れない小さな花、讀經がすんで棺を下におろすと、

母親は母屋に行つて、いろ／＼世話になつた禮を言つたり、夜中に人騷がせをした詫びを述べたりした。しかし母屋では、養蠶に忙殺されて、さうした小さい悲劇などは、すぐ念頭から去つて了つてゐるやうに見えた。嫁も婆やも總領の息子も、朝の桑を摘みに畠の方へ揃つて出懸けるところであつた。主人は母親に型のやうな悔みの言葉を述べ終るとすぐ、『お寺の桑を買ふやうに言つて來いや、高くつたつて仕方がねえ。食はせずには置けねえから。な、早く行つて來う。』其處にゐた中年の男にかう吩咐けて立上つた。

次ぎの汽車で義兄もやつて來た。で、いろ／＼相談の結果、東京に持つて行つても仕方がないから、手輕く田舍の寺で葬式をすますことにした。それでも母親は、可哀相だと言つて、一晩とめて通夜をしてやることにして、おゆづりを縫つたり、白い團子を買つて來て上げたりした。線香の烟の下で、寺からよこした若い僧は、一時間ほど讀經をして行つた。

お蔦はセルの着物を着て、腹合せの帶をしめて、髮をぐるぐる卷にしてゐたが、それでも一度稼業をしたあかぬけした姿は、何となゝ艶にあたりに見えた。お蔦は段々落附いて來てゐた。小さな遺骸を棺の中に入れる時には、あれも入れてやらう、これも入れてやらうと言つて、小さな枕や、赤い襦袢や、ミルクの罐などを取出した。薄い緣だと言ふことが染々と胸にくりかへされた。いろいろに想像した希望、東京に歸つたら、是非一度逢つて其話をしようと思つた男、その男にももう一生逢ふやうなことも

『難有う御座りやす。』

婆やはやつと安心したやうに頭を下げた。

醫師が歸つて行つてから、母屋の主人だの上さんだの總領の息子だのがやつて來て、型のやうな悔みの言葉を繰返してお蔦に言つた。お蔦は、をりをり胸が迫つて來るやうにして袖を顏に押當てた。

陰では、人達は、『でもまァ、何うせ不運に生れた子なんだから、いつそかうなつた方が好かつたかも知れない。』などと言つた。『矢張、藝者なんかしてた女は、しまりがないから、こんなことを仕出かすだ。』自業自得だと言ふやうな言ひ方を中年の男はした。

電報で吃驚して飛んで來た母親の姿を見た時には、お蔦の涙は更に新しく白い頰を傳つて流れた。『母さんや兄さんや姉さんに種々心配をかけた揚句に、こんなになつたと思ふと……母さん、申譯がない。』かうお蔦は泣崩折れた。

『まァ、まァ、ね、あんな丈夫だつた兒が、こんなになつちやつたかねえ。……まァ、可哀相に……。』母親は死んだ兒の顏にかけた布をまくつて見て、『どんなに苦勞したつて、よしんば人にやつたつて、生きてゐさへすれば、お前の子だつたのにねえ。殘念なことをしたねえ。』かう言つた母親の眼からも涙が流れた。

『母さん、もう……もう……。』

お蔦はあとの言葉を言ふことが出來なかつた。

た時には、もう夜がほのかに明けかけて、綠葉の梢に白い霧がしつとりと重くかゝつてゐた。

其間お蔦は唯打伏して泣いてゐた。お蔦の眼ば赤く腫れ上つて、寢衣の袖は涙にぬれそぼちてゐた。亂れた髮や扮裝をお蔦は直さうともしなかつた。一時に興奮した悲哀は今は去つて、喪心したやうな狀態がそのあとを領した。

醫師は二言三語聞いてから、

『フム、何うも仕方がありませんな。もう三時間、もつと以上も經つてゐるでせうから、手當てなして見ても駄目です。何うも過失ですから仕方がありません。』

かう言ひながら、お蔦が取亂したさまで其處に坐つてゐるのをじろ〳〵と見て、

『この方ですな。』

『え、若いもんだから……。』

かう傍から婆やが言つた。

『どうも、仕方がありません。若い中には、よくかう言ふ過失があるものですから、――此間も町で二つほどありました……。『卷煙草に火をつけて、『本當だと、やかましいんですけど……。なァに、別に何んといふことはないんだから、あとで、戶籍を書いて持たせておよこしなさい。診斷書は書いて上げますから。』

『私が……私が……私が……。』お蔦は泣き止まない。

隠居所の雨戸は一枚明けてあつて、其處から薄暗くランプのついてゐるのが見えた。婆やを一番先に續いて、嫁が入つて行つたが、欷歔けてゐるお蔦は、そのまゝ雨戸に顔を伏せて、中に入らうとはしなかつた。

婆やと嫁とは、中で、何か頻りに言つてゐたが、つゞいて『これは、もう駄目だ。冷めたくなつてるア。』かういふ婆やの聲がきこえた。雨戸に顔を伏せたお蔦は、又一しきり聲を立てゝ泣き出した。

『乳伏せたんべ、』

『さうかねえ、まア、可哀相に……。』

『若い者はな。だから困るだ……。』かう言つたが、婆やはお蔦の泣いてゐる傍に行つて、

『背から抱寢したかんね。』

『…………』

堪らないと言ふやうに、身も體も置きどころがないといふやうに、お蔦は唯泣いて欷歔けた。

お蔦は宵の中は離して寢かして置いたが、夜中に一度起きて乳を呑ませて、此可愛い子にもやがて離れなければならないなどと思ひながら、しつかり胸に押當てゝ抱いて寢た。

『兎に角、お醫者を呼んで來なくつちやなんねえ。』かう言ひながら婆やは母屋の方へ驅けて行つた。

しかし醫師は容易にやつて來なかつた。中年の男は二度も三度も町まで迎ひに行つた。漸くやつて來

不寢番だと言つても、連日連夜の勞働に勞れてゐるので、一時から先は、皆なして代り合つて寢ることにした。『三時になつたら、起して吳れや。』中年の男は、かう言つてすぐ傍の蚊帳の中に入つて行つた。『婆や、かはるがいゝや。』『まア、若お上さん、おやすみや。俺ら眠くねえから。』かう互に讓つてゐたが、昨夜も遲くまで起きてゐたので、『ぢやちよつくら寢るかな。』かう言つて、婆やは自分の寢床に行つた。とろとろしたと思ふと、女の泣聲が耳に入つて、婆やは驚いて飛び起きた。すぐ、蚊帳を出て行つて、

『何うしたや？』

『大變だよ、婆や。赤坊が死んだと。』

かう嫁が言ふので、氣がついて見ると、其處に蒼白い興奮した顏をしたお蔦が跣足で泣きながら立つてゐた。

『何うしてな？』

『今、目が覺めて見ると、冷めたくなつて……冷たく……。』

泣聲に支へられて、お蔦の言葉は十分に聞き取れなかつた。

『お前さん、抱寢したんかや？』

『……………。』

『困つたこと出來たな。』かう言つたが、婆やと嫁とは急いでお蔦について、隱居所の所へと行つた。

くなつて來てゐた。『乳が出ねえと見えるね。ミルク罐でも買つて來てやらねえぢや、これぢや赤坊が可哀相だぜ。』婆やは、お蔦の乳を自分で絞つて見て、『これぢやとても足りつこはねえ。何うして、こんなに出なくなつたかなァ。元はあんなにむせつ返るほど出たつけがな……。何か心配ごとでもしたけえ。產婦にや心配ごとが大毒だ。すぐ乳へ來るからな。』

婆やは若い母親の慣れないのを氣の毒がつて、忙しい間をぬすんで、一里ほどある町へミルクの罐とミルクの罐とを買ひに行つてやつた。そして、歸つて來てから、ミルクの溶き方などを丁寧にお蔦に敎へた。

五

一夜、母屋では、總領の嫁の二十五になる女と婆やと近所から手傳ひに來てゐる中年の男とが丁度不寢番で、ランプをところどころにつけて、頻りに蠶室の桑の加減を見てゐた。『婆や其方の方は好いかえ？もうやらなくてはならない頃だらう。』かう嫁は婆やに言つた。

明日の朝までの桑は、暗くならない中に摘んで來て、廣い臺所に一杯に積まれてあつた。座敷中は隙間なく並べた籠の中の蠶兒は、もう大きくなつて、その桑を食ふ音は靜かな夜の空氣の中に音を立てゝ聞えてゐた。

つになつた喜悦も、ほんに僅の間であつた。お蔦は乳を含ませながら、『お前さんなんか、生れて來なけりや好かつたのに……何故生れて來たんだえ？』ひとりかう言つて涙を流した。

種々に想像したことなどは、とても遂げ難い希望であつた。お蔦は生兒の父親のことに就いては、母親にも誰にも口に出しては言はなかつたけれど、折角確かりと攫んだ物をそのまゝ手離して了つて、再びもとの生活に入つて行くことの賴りなさを染々辛く感ぜずにはゐられなかつた。親と言はれ子と言はれて樂しく暮して行く人達のことを思ふと、お蔦は體中が震へるやうな悲哀を覺えた。

しかし靜かな田舍は何事もなくて一日一日と經つて行つた。養蠶は今は忙がしい最中で、家の人達は夜も眠らずに桑の葉を切つたり蠶兒の生長を見たりした。母屋の蠶室には、深更まで明るくランプの光が輝いて見えた。

時には水霜の下りるやうな寒い朝などもあつた。さういふ時には、人達は寒暖計を室內に置いて、火を盛に起して、室內の溫度の平均を取るやうにした。其處でも、此處でも、養蠶の話で持ち切つてゐた。さつきの赤い花が庭石の間に燃えるやうに咲いてゐた。

お蔦は丸で離れ島にでもゐるやうにして、忙しい世間とは全く離れて、寢たり起きたりして暮した。其頃では婆やの手を煩はさずに、お蔦は赤兒のおしめを井戸端に持つて行つて洗つた。赤兒の啼聲も段段物々しくなつて、乳を吸ふ力も強くなつたが、物思をした故か、その頃からお蔦の乳は分量が段々少

いわけには行かなかつた。義兄は抱主から迫られて、殆ど執達吏を向けられるばかりになつて、方々無理算段をして漸く金を借り集めた。姉はあるかないかの着物までも質に置いた。兄はある人から質のわるい金を工面した。『あまり心配させてはと思つて、詳しく話さなかつたけれど。』かう前置して、母親は抱主の無慈悲であつたことを詳しく話した。

『少し肥立つたら、一日も早く稼ぐやうにして貰はなくつては！』

母親はかう言つて、今度出るところをあれかこれかとお蔦に相談した。母親の眼中には生れた兒のことなどは少しもなく、百日も經つたら、何處か好い貰手をさがしてそのまゝ親知らずでやつて了はうと思つてゐた。『その方にだッてお前、一文もつけずに貰つて吳れるものなぞありやしないからね。そのお金だッて拵へなけりやならないんだからね。』などと母親はお蔦に言つた。

半金持つて行つた時、抱主の方から平生着とちよッとした着替だけは持つて來たが、新たに稼業をしやうとするには、あとをすつかり綺麗にして、お座敷着を持つて來なければ何うすることも出來なかつた。『さうかと言つて、執達吏まで向けて來るやうな抱主に此方から折れて行つたつてしやうがないからね。それは先では、肥立つたら、また來て貰へば好い位に思つてゐるんだけどもね。それぢや餘り蟲が好すぎるし、此方だッて詰らないからね。』

漸く二七夜を濟ました頃から、辛い行先の生活のことが、またお蔦の胸に暗い影を投げて行つた。身二

業はやめて了ふ氣にもなれなかつた。お蔦は唯すや〳〵と寢てゐる赤兒の顏に見入つた。

あたりは依然として靜かであつた。枕元には、義兄の許からとゞけてよこした赤い白い飴だのカルルス煎餅だのが置いてあつた。お蔦は起上つて、蒲團の上に坐つて、鑵から煎餅の方を出して、一二枚白い前齒に當てゝ食つたが、さつき婆やが持つて來て呉れた冷えに茶を一杯茶碗について飮んで、今度は傍にある鏡を取つて、自分の顏を映して見た。

やつれた蒼白い顏と、しだらのない寢衣姿と、眼の緣のわるく黑くなつたのをお蔦は見た。無造作に束ねた髮、肉のこけた瘦せた頰――しかし身二つになつた今のお蔦には、以前のやうな暗い辛い苦勞や煩悶はいくらか輕くなつてゐた。お蔦は櫛で後れ毛を梳き上げた。

やがて赤兒が眼を覺まして泣き出したので、お蔦は立つて抱いて來て、それを半ひろげた白い肌へと押當てゝ乳をふくませた。かうしてゐる中にも、男の顏は次第に歷々とその子の顏の中に現はれて來るのであつた。

四

母親はそれでも度々遣つて來て呉れた。種々な苦勞で娘の姿の著しく衰へて行つたことが母親にもよくわかつてゐるけれども、さりとて今度のことで娘の身の上に重なつて行つた負擔の一伍一什を話さな

見るともなく赤兒の方を見たお蔦は、默つて考へるやうな顏をした。此頃段々男の顏が赤兒の顏の中にはつきりと現はれて來るやうなのを感じてゐたお蔦は、その瞬間に、夥しく似てゐる眼と鼻とを認めた。

『さうに違ひない。』

かう思つてお蔦は猶ぢつとその小さい寢顏に見入つた。

それからそれへと種々なことが思ひ出されて來た。それにしても、男は何處にゐるのであらうか。何處に住んでゐるのであらうか。それはきけばわかる。あの友達と言ふのが、よく來る人だから、あの人から段々聞き正して見ればわかる。あの姐さんに訊いて見てもわかる。しかし、家はそれほど有福であるとは何うしても思はれない。月給なんかでも澤山に取つてゐる人ではないに相違ない。でも構はない。東京に歸れる身になつたら、何うしても一度逢つて其話をしなければならない、この兒を一生親無し子にして置くことなどは出來ない。と、つゞいて、電話をかけた會社の男のことが思ひ出された。矢張、それと聞いたら、向うから遁げかくれて了ふかも知れなかつた。無心を言はれると思つて、此方の言ふことなどは本當にしないかもわからなかつた。そして、さういふ向うの處置だつて、單に薄情だとは言ひ切つて了ふことの出來ないやうな處があつた。急に、お蔦は藝者稼業といふことを考へた。『誰がわるいんでもない。皆な私がわるいんだ。』かう思つたが、別に悲しいと言ふ氣も起らなければ、さういふ稼

おとなしくして坐つてはゐるけれど、ひよつとかして、目に指でも入れやしないか、顔に傷でもつけやしないかとお蔦にに心配された。お蔦は起きて、抱いて、そして乳などを飮ませた。

『あ、乳を飮んでる！』

女の兒は莞爾しながら、その傍に寄つて、めづらしさうにして見てゐた。

三

ある日、赤兒は此方に顔を見せて、靜かに眠つてゐた。小さい呼吸をしてゐるのが刻むやうにはつきりと靜かな一間の中にきこえてゐた。

お蔦も其方を向いて寢てゐた。

外では、遠くで學校から歸つて來る子供達の聲が聞えた。近頃にめづらしいほど風のない穩かな日で、綠葉が窓を明るくするやうに青く鮮かに光つて輝いた。さつき緣側に出た時には、裏の桑畑に赤い襷を十文字に綾取つた若い娘や白い手拭を頭の上に載せた上さんや、男や子供がごたごたと一緒になつて、せつせと桑の葉を摘んでゐたが、その賑やかな忙しさうなさまをちよつと見て、それから室に戻つて、お蔦は一眠りした。

ふとお蔦は目覺めた。

なるやうにしきやならないんだから。』お蔦は行詰ると、いつもかう思つて赤兒の方に背を向けて寢た。
母屋の方からは、男の兒が産れたと聞いて、主人だの上さんだの子供だのが代る代る見に來た。
『まァ、可愛い子!』
『東京の人の子は、まつさか違ふはなァ。髮の濃いこと、色の白いこと!』
『まァあんなにして、若い母さんにくつついて乳を飮んでるがや。』
などと人々は言つた。七歳位になる末の女の兒は、あとに子供がないので、めづらしがつて度々やつて來て、好ましさうに、小さい床を覗いては見て行つた。
『大きくなつたら、負せてね、ね。』
などと言つた。お蔦が睡眠から覺めると、その女の兒がいつか其處に來て、小さい床の傍に坐つてゐた。吃驚して、
『いぢつちや、いけないのよ。』
『あ。』
『まだ、小さいんだからね。眼もまだ見えないんだからね。大きくなつたらね。負ぶせて上げるからね。』
『あ、大きくなつたらね。』

男の兒と言ふことも、頼りになつて嬉しいとは思ふが、母親や姉や兄などの期待と違つてゐることをすぐお蔦は思つた。『なァに、女の兒なら貰手だッてあるし、人にやらずに育てたッて好いから。』かういふ言葉の中にも、もし女の兒であつたら、矢張自分と同じやうな運命を持たなければならないといふことを意味してゐた、男だから、その心配はない。しかし、將來、自分は何うしてこの兒を育てゝ行くだらう。自分の力では、育てゝ行くことが出來るだらうか。かう思つたお蔦は子供を持つてゐる姐さん達のことをあれやこれやと繰返して見た。ある姐さんは大きな男の兒を中學校へ通はせて置いた。ある姐さんは、その兒をある家庭にやつたがために、今では親子の名乘も出來ないと言つて、『決して餘所になぞやるもんぢやない。何んなに苦勞しても好いから、自分で育てるのに限りますよ。』などと言つてゐた。それは、それに越したことはないのにきまつてゐる。しかし、そんなことが出來るだらうか、私の身で――身二つになりさへすれば、その子はやるなり吳れるなりして、再びもとの生活に戻つて、褄を取つたり三味線を彈いたりしなければならない身で、そんなことが出來るだらうか。かう思つてお蔦は溜息をついた。

しかし時には、その學校の先生とその男の子とを一緖にして考へて、『私が――私が捗ぎさへすれば、さういふことだつて出來ないことはない。これから二三年辛抱する氣なら。』こんなことをお蔦は思つた。しかしすぐその男に細君があり子供があるといふことが胸につかへて來た。『もう思ふまい、思ふまい、

やうに思はれることなどもあつた。『しかし、子供さへ生れて見れば、さういふことは皆なわかつて行くんだから……。』こんこともお蔦は考へた。鬚のある、やさしい眼をした、笑ふ時にちよつと癖のある表情をする顔、その顔をお蔦は幾晩も續けて夢に見た。

母親が來て、抱主の方の話が難かしくつて、事に依ると執達吏を向けられるかも知れないと知らせて行つてから、間もなくお蔦の子は生れた。もう其時分は、田舍では養蠶が始まつたので、母屋の人達も元ほどちやほや構つて吳れる暇はなかつた。が、それでも氣がついて呼びにやると、年を取つた田舍の產婆がやつて來て、『氣を落附けなくつてはいけない。』などと言つて深切に世話をして吳れた。苦しいいきみの疼痛、次第に募つて來る苦悶、總身にあふれ出して來る汗、それが夜の十時頃から翌日の黎明まで續いた。

『男の兒、男の兒ですよ。』

かう產婆は聲を張上げて言つた。

夥しい疲勞の中でも、お蔦はその生れた兒の顏を仔細に見ることを忘れなかつた。眉、額、輪廓、似てると思へば似てるが、似てゐないと思へば似てゐない。鼻などは確かにさうらしいとは思はれたが、それが果してさうであるか否かは、もう今一度其男を眼のあたりに見て、そしてよく比べて見なければはつきりしたことは言はれないやうな氣がした。お蔦は味氣ない辛い一種の悲哀を覺えた。

水馬が靜かに日の照る水の上を泳いでゐた。野には田を起す大きな鋤の齒が日に光つて、其處此處にせつせと働いてゐる百姓は、丸で操り人形か何かのやうに見えた。

夜は蛙の聲が湧くやうにきこえた。

田舍の人達は、お蔦の眼には不思議にめづらしく映つて見えた。自分の通つた來た都會の生活、明るい灯、表面は賑やかで明るくつても、裏面は暗い辛い生活、さういふ生活をお蔦はをりをりこの田舍の暢氣な生活に比べて見た。白い手拭を被つて、大きなざゝるをかゝへて、桑の葉をせつせと摘んでゐる女達の姿は、お蔦のゐる室の緣側から常に見えた。お蔦は懷姙する前後に逢つた男をあれかこれかと考へたりして日を暮した。

電話をかけた會社の男、それにもさういふことが想像されたが、それよりも、もつと深く觸れて思ひ出されるのは、奥の待合で逢つた三十二三のおとなしい色の白い何處かの學校の先生であつた。その男にはお蔦は三度しか逢つてゐなかつた。お蔦はそれからそれへと想像した。一番後で逢つた夜は、その友達だといふ色の淺黑い長唄などの出來る客と一緒であつた。その夜は賑やかに騷いで、自分も三味線を彈いてうかれた。『さうだ。さうかも知れない。……しかしあの人には、奥さんも子供さんもあつた筈だ。』かう思ふと、お蔦は辛いさびしい心持を體中に覺えた。

子供が產れる時分には、その男の影は一層濃く深くなつて行つてゐた。何うしても、それに違ひない

ぬことはなかつた。『でも、先での言ひやうにも人情がねえな。たとへ、向うでつけた旦那でないにしても、一昨年から、ずつとかせがせて、不見轉をさんざさせて、それで今日使へないから金を返せはちとひどすぎる、身二つになるまで待つのが人情だ。』などとある人は店に來て言つた。で義兄と兄とは其事で抱主の方へ懸け合ひに行つたりした。ある日は、懸けのたまつてゐる吳服屋の番頭がやつて來て、店であぶなく見附からうとしてお蔦は慌てゝ奥に隱れた。

二

花の咲く時分、この田舍に來てお蔦は始めてほつと呼吸がつけたやうな氣がした。仕方がなければお蔦は床屋の奥の四疊半で身二つになるつもりで覺悟してゐたが、急に汽車で此處に來ることになつた。母親のかねて知つてゐる懇意な家で、田舍ではかなりに暮してゐる百姓だが、これからは養蠶で忙しいが、何も構はなくつて好ければといふ話であつた。で、去年まで亡くなつた爺さんの隱居所になつてゐたといふ離れの六疊の一間にお蔦は朝夕起臥した。

お蔦は滅多に外へは出なかつたけれど、それでも何うかすると、家から畠道を眞直に向うの方へ行つて見ることもないではなかつた。野は青々として、畠からは雲雀が好い聲をして絕えず空に囀つてのぼつてゐた。畔道に繁つた朝の草の露、その向うには、靑い眞菰や水草の生えた小川があつて、メダカや

抱へられた姐さんの家に行つて初めて其話をしたのは、秋風のそろ〳〵寒くなつて來る頃であつたが、姐さんも姐さんの父母も、初めはそれを信用せずに、旨いことを言つて借金を踏むつもりか何かのやうに思つて、『兎に角、私の方ぢやそれぢや困るんだから、お賽さへ積んで貰へば、それで好いんだから。稼業なんだから……。それも、此方でつけた旦那か何かなら、それは話は別だけれど。』などと母親は言つた。姐さんは姐さんで『まア、お前さん、誰だかわからないのかえ？　だから、姐さんが不斷から言つてるぢやないか。何でもお馴染が出來るやうにしなけりやいけないッて？　あれほど言つてゐたんだもの。』かう言つて凝とお蔦の顏を見た。

何處に行つても立瀨がないやうな恥しい辛い月日をお蔦は送つた。父母は神田あたりで、しがない貧しい暮しをしてゐたが、そこに行けば父親が頭から呶鳴りつけるし、寄席の方へ出てゐる兄の方へ行けば、『困つたもんだな。百二十兩、そんな金はとても出來るもんか。』と言つて、ぶんぷんしてゐるし、義兄は義兄で、思ひやりの深いだけに口喧しく言はないけれど、屈託さうに腕組みなどをして深く考へ込んでゐた。田舍から出て來て、一昨年お蔦が其處に抱へられる時、義兄と兄と、この二人が保證人になつて、公正にまでしてあるので、向うの出方に由つては、明日にも執達吏が來て、ありもしない床屋の家財を封印して行つて了ふかもわからなかつた。

お蔦が蒼白い顏をして寢たり起たりしてゐる間、それに就いての話は一日として人々の間に繰返され

と、今度は姉の嫁いだ先の床屋の義兄の心配さうな顏、姉の焦々と落附かない顏、床屋の職人のいやにじろ〳〵と此方を見る顏、酒に醉つた父親の尖つた聲、さういふものが思ふまいとしても矢張離れずにお蔦の頭に絡み着いて來た。

ある狹斜の方へ行く大通に面した床屋の店、大きな鏡、それに映るいろ〳〵な客の顏、その奧に六疊四疊半の二間があつて、長火鉢はその六疊に置いてあつたが、その奧の薄暗い四疊半でお蔦は日陰者のやうにして四月五月を過した。お蔦にはお座敷に出る時分の美しさはもう見たくも見られなかつた。一日おきに結つた髮も滅多に結はず、顏の色もわるく、肌の皮膚も荒み果てゝゐた。『藝者をしてゝ、そんな馬鹿な話があるもんかね。誰の子だかわからないなんて……。本當にあれのお人好しにも困るぢやないか。たとへその人の子だか何だかわからないからと言つて、旨くそれに押附けて了ふのが藝者の手ぢやないか。』こんな風に言ふ姉の言葉がわるくお蔦の神經を刺戟した。

『ぢやその人に、電話をかけて御覽な。』ある時には、姉からかう齒がゆいやうに言はれるので近所の電話を借りて、それと思ふ人のゐる會社に電話をかけて見た。一度其人が出て來て、

『いづれ、近い中に言つて見るよ。』などと言つてゐたが、それと知れてからは、もう何遍電話をかけても其人はそこへ出て來なかつた。しかし此方からそれ以上厚かましく出て行く材料もお蔦にはなかつた。お蔦は其人には五六度しか逢つてゐなかつた。

かう言つて、傍に敷いてある小さい床をのぞいて見て、『お、起きてる、起きてる、大きな目を明いてゐるがな。可愛いもんだな。』

『さう？　起きてゐて！』

お蔦は身を起して傍に寄つて來たが、その小さい瞳がまじ〳〵と何處を見るでもなくあたりを見廻してゐるのを見ると、今までに經驗したことのない愛情が漲るやうに胸に押寄せて來た。

『見えるのかしら？　もう？』

『まだ、見えやしねえよ。お宮參りにでもならなけりやな……。けどもな、今時の子は、智慧が早いでな。昔の子は十日位は碌々目も明かなかつたもんだがな。』かう言つたが、猶ほ深く赤兒に見入つて、『髮の濃い子ぢやな、お前さんに似たと見えて。』

『さうね。』

赤兒を抱いて、その小さな顏を胸に押當てゝ乳房を含ませると、お蔦はこの廣い世の中に始めてしつかりとある物を攫んだやうな氣がした。と、忽ちお蔦の心の周圍には、種々なことが颷風のやうに簇つて集つて來た。お蔦は大勢の男を相手にして心にもない暢氣なことを言つてゐる自分を見た。明るい灯の下で綺麗な着物を着て面白さうにはしやいで騷いでゐる自分を見た。酒、餉臺、狹い室、色彩の濃い色紙形の繪を張つた枕屛風、廊下から厠へ行くところにある手水鉢……さういふものが見えるかと思ふ

黄い小さい花

一

產蓐にゐるお蔦は、傍に小さな呼吸をしてすや〳〵と寢てゐる赤兒の方ををり〳〵見た。夏の近づいて來たのを思はせるやうな蒸々した日で、田舍の畠の麥の穗の上を渡つて來る風が、軒に下つてゐる風鈴を靜かに鳴した。

赤兒の最初の泣聲を耳にした時、『まァこれでやつと身二つになつた！』かう思つてお蔦はホッと呼吸を吐いて安心したが、がつかりしたと見えて、それからははたであやしむほど每日寢てばかり過した。母屋から粥などを拵へて運んで來て吳れる婆さんは、いつも髮を無造作に束ねたまゝ向うむきになつて寢てゐるお蔦の姿を見た。

『よく寢られやすな。……でも、休める方が好いだよ。唯な、赤兒は抱いて寢ないやうにする方が好いだな。乳で押すとわりいでな。』

黄い小さい花

外二十六編

花袋全集第七卷目次

代々木の住宅

信州志賀村（神津猛氏庭園）にて

（明治三十九年十二月）

（向つて左は島崎藤村氏）

田山花袋著

花袋全集

第七卷

黄い小さい花・外二十六編

花袋全集刊行會